
誰が為のイクスルプ

夜方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰が為のイクスルプ

【Nコード】

N8663K

【作者名】

夜方

【あらすじ】

さして代わり映えもない、でも穏やかな日常。

ほんの少しだけ事情の異なる普通の高校生、氷ヶ守 リンダ 燐人。

いつも彼の傍らに存在するのは、中学からの悪友と、高校入学を期に文科系少女を目指すと言言するスポーツ万能少女、そして、他校へと入学した幼馴染の少女。怖い先輩に目を付けられつつも、いじらしいほどに普通の高校生活を送ろうとする彼が、記憶をなくした少女と、ハルモニア 神具と呼ばれる不思議な剣と出会った時、物語は回り始める。

それは、果たして世界の始まりなのか、それとも終わりを告げる物語なのか。

プロローグ（前書き）

ファンタジー物長編小説です。長いので途中で飽きてしまったり
かもしれませんが、読んでいただけるとありがたいです。

プロローグ

ドアを押し開くと眩いばかりの春の陽光がふりそそぐ。

一瞬、その眩しさに目を細めた後で、氷ヶ守^{ひがもり} 燐人^{りんど}は大きく伸びをした。

真っ黒な学生服の上下を少しでも愛らしく見せようとしてもしているような、ピンクの刺繍糸でステッチの施されたジャケットの右のポケットから取り出したフリスクを口の中に放り込むと、見慣れた世界へと足を踏み出す。

暖かで穏やかな風を受けながら、学び舎を目指す燐人の高校生活は二週間目を向かえたばかりだったが、嘘の様に周囲の環境に振り回されっぱなしのこの数日の間に、希望に満ちていた高校生活というものはどこかに奪い去られてしまったらしい。

どこか憂鬱^{ゆううつ}気な表情を漂わせつつ、燐人は歩き始めた。

「よ！今日も元気そうだなにより」

「おっはよー」

後ろから同時に聞こえて来た二つの声に、止まりかけた歩みはそのままにして、足早に燐人の隣へとやってきた中二の頃からの悪友へと冷ややかな視線を向ける。

180cm近い身長 of 燐人が顔を傾けると、彼の短めながらワックスで立たせたたくせの強い前髪がゆれた。

燐人の見下ろした先で、プラスチックフレームの眼鏡越しに覗く少しだけツリ上がった瞳が、嘘くさいまでにニッコリと微笑みかけている。

「元気そーでなにより、じゃねーよ。ユアン」

ぶつくさと文句を言う燐人を見上げる様にして、柚子原ゆずはら 庵いおはキヨトンとして見せた。

それ程身長の高くない彼は、ベージュ色のカーディガンを羽織っている。多くの新一年生が黒の学生服を着ている中で、高校生活二週目にして早くも彼は学校指定云々を守る気はないらしい。

「かぎる、なんかリンド怒ってんだけど……？」

未だにキヨトンとしたままの表状で、柚子原庵が遅れてやってきた少女に声を掛ける。

燐人を挟む様にして右側に柚子原、左側を歩く少女は燐人の影から顔を出す様にして笑った。

「またユアンのせいで、はからずも番長への階段上がちゃったんでしょ」

栗毛色をした不揃いで伸ばしかけのショートボブヘアの、風早かさはやかぎる が声を出して笑った。

大きな瞳に小さな作りの唇が猫を思わせる様な顔立ちをした彼女も、スカートこそ学校指定の黒い生地じみにピンクのステッチの入ったものであったが、上に羽織ったライムイエロー色のジャージを見る限り、柚子原と同じく学校指定云々を守る気はないらしい。

機嫌を直せ、とあれこれ言葉を並べる柚子原を無視する様に燐人は再びフリスクを口に放り込む。

柚子原の一人喋りが続いている中、颯爽とペダルを踏む音が聞こえ、それに気付いたかぎるが大きく手を振った。

「おっはよー、ゆかり」

「かぎるちゃん、おはよー」と言ったままブレーキをかけると自転車は止まり、見ている側がハラハラする様な不慣れな動きで少女は地に降り立った。

少女は、自転車の籠かごに入れられたカバンから、淡いブルーの布で包まれた荷物を取り出すとリンドへと手渡す。

「はい、リンド、お弁当」

隣人が少女から受け取った弁当は、別に少女手作りの弁当という訳ではない。良い年をして、愛息子のために朝も早くから仲良く氷ヶ守家の父と母が一緒になって作る弁当を彼はいつも忘れて家を出る。

親への反抗などというような大袈裟なものではない、ただ単に照れくさくて仕方がないのだ。

決まり事のように忘れる弁当を、決まり事のように隣人に届けるのが隣近所で幼馴染みの美咲みまこゆかりの日課である。

「ゆかりちゃん、今日も清南の制服似合ってるねー」

端正な顔立ちに似つかわしくない様な柚子原のオヤジ的発言に、自転車を押しながら「えへへー」とゆかりが照れ笑いを浮かべるのと同時に「この制服フェチ」と、かぎるが悪態をついた。

ちらりと呆れた顔をするかぎるを見た後で、柚子原が口を開くのを皮切りに毎朝恒例の口喧嘩が始まる。

「それに比べてゲッコーの制服、それで、ゲッコーの女ときたらねえ……」

「ちょっとユアン！ ゲッコー、ゲッコーって工業科のあんたと普通科のあたしとリンドを一緒にしないでよ」

「同じゲッコーには変わらないだろうよ。何にしても元々改善の余地ありの制服だったのに、中学から代わり映えのない、かぎるのその崩しってありえなくね？」

「中学の時と一緒にしないでくれる？ このジャージだってモデルのクロエちゃんが雑誌で着てたブランド物よ。がんばって買ったの、中学の時の古着とは訳が違うの。それが分かんないなんて、ユアンこそ見る目ないね。そんなんじゃ近頃の女子の話題についていけないよ」

「へえ〜？ 近頃の女子つてのが、カラオケで歌う歌が『川本真琴で1/2』つてのはどんなもんだろね？ ってーか今時知らねーよ、そんなの……」

セミロングのストレートヘアをふわりとなびかせながら、くりく

りとした大きな瞳でユアンとかぎるのやりとりを楽しそうに見つめる彼女の横顔が、燐人に眩しく映る。

そして、それと同じくらい彼女の着た清南高校の緑色のブレザーが燐人には眩しく映った。

中学時代、燐人の第一志望はゆかりと同じく清南高校だった。

清南は県下の高校では中の上といった学力の高校であり、もう少しだけ勉強すれば燐人とて手の届かない事はなかった。しかし、そんな燐人に自分と同じ如月高校（不良界でいうところの通称ゲッコ）に入ろうと言つて来たのは、当時のユアンこと柚子原庵であつた。

中三の夏に彼からの言葉を受け、さんざん迷つた末に友情を選んだリンドの心は入学から二週間目にして早くも折れかけている。

元来ゲッコという呼び名は不良の巣窟たる如月高校工業科の生徒を指して言うものであり、普通科は学力で言えば中の中、至つて普通なわけである以上、同じ如月でも普通科は何ら支障のない学生生活を送れるはずだった。

しかし、中学時代の悪名、つまりは元、伏姫中狂悪コンビの片われ 狂王（ウツヒメ） ユアンの相棒 悪来（あくらい） リンドとして本人の知らぬ間に、彼はゲッコ新世代のルーキーの一人に数えられていた。

中学時代の、その通り名とて全部が全部、柚子原が起こす揉め事に半ば強制的に巻き込まれた事故のようなもので、燐人に見れば不名誉極まりない事に他ならない。だが、その長身も手伝つてか彼はよく目立ち、工業科、普通科の垣根を越えて入学してから今日まで、彼への挑戦者は後を経たない。

先日、退けた何とかというヤツのセンパイにあたる二年生を昨日ふつとばすに至り、同じ普通科の生徒の中で今や燐人に話かけてくるのは、かぎるくらいのものでなくなってしまった。

本来ならばそのルーキー戦線の矢面に立つはずだったであろう真性ヤンキー体質たる柚子原が大した揉め事にも巻き込まれずにいる

というのは、全くもって皮肉な話としか言いようがない。

中学時代の冗談のような下品なまでの金髪はナリを潜め、高校入学に際しておしゃれに目覚めたという光の加減でうっすら茶色に染めているのが分かる程度のストレートの黒髪の下、別に目が悪いわけでもないくせに掛けたプラスチックフレームの伊達眼鏡から覗く笑顔を見る限り、目立ちすぎるスーパールーキー燐人のおかげもあって、柚子原は高校生活を満喫しているらしい。

「ちよつと聞いた?! リンド! ユアンが飛天御剣流を馬鹿にした!」

ぼんやりと幼馴染の横顔に釘付けになっていた燐人が我に帰ったのは、突然に上げたかぎるの声が共同戦線を申し出てきたからだっ

た。
かぎるとユアンのやりとりがまだ続いていたのかと思い出した反面、燐人は開きかけた口を閉じる。

(…ユアンが馬鹿にしてるのは、飛天御剣流でも比古師匠のことでもないよ…。)

ゆかりやかぎると一緒になって、幼き日の燐人も飛天御剣流(夕方の再放送にて)の奥義の数々の会得に勤しんだ頃もあったが、それはそれ、大人ぶって忘れた振りをする。

味方になってくれそうもない事を察すると同時に、かぎるは攻撃の照準を燐人へと移した。

「……だけどお、ユアン? せつかく高校入って新生活スタートさせたっていうのに、なんにも代わり映えがないっていうならリンドの方がひどいよね」

少しだけ意地悪そうな瞳で、燐人の顔をかぎるが覗き込む。

「俺はいいんだよ。これからバイト始めるから」

ぶっきらぼうに話す燐人の台詞には、もう学校生活には期待してないという諦め感が漂う。

隣人のそんな思いなど察する事もなしに、柚子原がかぎるに便乗してみせた。

「そうだよ、リンド。中学ん時は故障で離れたとはいえ、もう治ってんだろ？ 膝。今からでも遅くないからまたバスケット始めるよ。…

『先生、バスケットがしたいです』って言いに行つてこいよ」

「顧問の安藤こもんは小太りでもなけりや、ホワイトヘアードデビルと呼ばれた過去もねーよ」

再びぶっきらぼうに答えた隣人であったが、そもそも中学ん時バスケットに戻れなくなったのはお前のせいだろうが、とは続けなかった。柚子原へのいたわりというよりも、柚子原の屁理屈ともつかない言い訳で、話が長くなるのを単に面倒くさがっただけの事である。「あつ、マズい。遅刻しちゃう」

腕時計をのぞいた後で、今まで微笑を浮かべながら輪の中にいたゆかりは自転車に跨った。

軽く手を振った後で、ぎこちないながらも颯爽とペダルをこぎ始めると一区画離れた学び舎を目指して走り始める。

近づきつつある如月高校の校内を視界に留めながら、小さくなっていくゆかりの背中を見送る隣人の視線に、ゆかりとすれ違う様にして二人の影が姿を現した。

それを見て、隣人は喉に物でも詰まらせた様な顔をしたまま立ち止まった。

柚子原も歩みを止め、二人でペコリとお辞儀をする。

「サリーくん、ちわす」

連れのゴシッククロリータ調で原型をひとつも留めていない程に崩されている如月の制服を着たモデル並みのプロポーションの女生徒とは対比的に、全身黒のニットキャップにパーカー、それにシルバークのアクセサリーをジャラジャラと飾り付けた小柄な男子生徒が近づいて来た。

「二年の始村やったってな、リンド。…それで次は一気に三年の

ヒリユーさんのとこまで行くのか？…それとも俺とやりあうか？」
見下ろす程に小柄な男の射る様な瞳から、逸らす様にして地面を
見つめるリンドが呟く。

「めっそもないス。サリーさんとやりあう気なんてないですよ」

「ふん」と鼻を鳴らし燐人の顔を一瞥すると、サリーと呼ばれた
小柄な男は連れれの女生徒と校内へと消えて行った。

「…やっぱりサリーくんって、先輩の中でも別格って感じな。おっ
かねー」

気の抜けた調子で話す柚子原へと燐人が呟く。

「俺がサリーさんとケンカするような事になったら、ユアンのせい
だからな」

何で俺のせいなんだよ、と不満を口にしかけたユアンは真後ろか
ら発せられた「うわ」と言う声に、開きかけた口を閉じて振り返っ
た。

長身の燐人の影に隠れる様にして、かぎるが身を縮めている。

かぎるの視線の先を追う様にして燐人と柚子原が校内へと視線を
送ると、上下濃紺色のジャージを着たショートヘアの女生徒が仁王
立ちしているのが見えた。それを確認した後で柚子原が、かぎるに
小声で話しかける。

「何、蒼姉あおねえ、まだ諦めてねーの？」

子猫の様に身を縮めるかぎるが、小声で答えた

「うん。高校入ったら、あたし文科系少女目指すって宣言したのに、
顔を見る度に陸上部入れって」

腕を組んでわざとらしい程に一人唸うなって見せた後で、燐人とかぎ
るの顔を見比べる様にしてユアンが一人頷きながら口を開いた。

「まあ、なんだ。ようは二人共、覚悟を決めろってことだな」

まさに他人事、一瞬あっけに取られた後で燐人とかぎるはそろっ
て声を上げる。

「ユアン！！」

空気を察した様にユアンが駆け出す。

追いかける様に隣人とかぎるが、地面を蹴った。

また今日も一日が始まる。

第一部 聖痕のメタフィジカ 第一章 氷ヶ守 燐人 (リンド)

十 誰が為のイクスルプ 十

第一部 聖痕のメタフィジカ

> i 8 4 5 6 — 1 2 9 9 <

第一章 氷ヶ守 燐人 (リンド)

1

少女が瞳を開くと、初めに映ったのは見知らぬ天井だった。

ベットの上でゆっくりと上半身を起こし、喧しく鳴り響く目覚まし時計を止める。

時刻はA M 8 : 0 0

混乱する頭を余計かき乱す目覚ましのベルを止め、静寂を取り戻した室内で涼とした空気の中、研ぎ澄まされていく思考回路はやがて、少女を混乱から不安へと導いていった。

(…これは一体どういう事なんだろう…?)

簡素ながらもきちんと整頓されている見慣れない家具を一通り見渡した後で、ベットから立ち上がるとすき間から差し込む陽光に震える手で、遮光カーテンを広げていく。

陽光に目が眩んだ後、細めた目を見開き眼下に見下ろす景色も、やはり少女の見知らぬものであった。

(…ここは 一体何処なんだろう…?)

一連の観察から少女の得た情報は、今いる場所が1DK程度のアパートの二階部であるという事だけだった。

募るばかりの不安に急がされて、踵を返し玄関へと駆け出そうとした少女の足は部屋の真ん中で急に止まる。

壁にもたれかかるようにして姿見の鏡台が設置されていた。

パジャマを脱ぎ下着一枚の姿で鏡台の前に立つ。

そこには小柄で華奢な身体に、美しく長い黒髪の少女が映っている。

言葉としてそれを告げた時、今まで募らせてきた不安は一瞬のうちに恐怖となり少女を襲った。

「…私は一体 誰なんだろう …?」

2

「なんつー夢だ」

ぼんやりとした景色の中で氷ヶ守 燐人は呟いた。

これから目覚めて登校するという前に、眠りの中で登校する夢を見る事ほど気だるい事はない。

枕元の目覚まし時計を覗いた後で、再びの眠りにまどろもうとした燐人は部屋の窓の外から微かに聞こえる喧騒に違和感を覚えた。

少しだけ上半身を起こした時、壁に備えられた掛け時計に目が留まった。

針は確実に8時14分を指し示している。

慌てて枕元の目覚まし時計を手にとると5時47分を示す短針と長針の間で、秒針が35秒から36秒に辿り着けずに小刻みに揺れていた。

「止まってやがる……ヤベっ 遅刻だ！」

慌ててベッドから跳ね起きた拍子にもんどりうって床へと転がる。一瞬、何でこんなに慌てる必要があるのか、という疑念が過ぎたが、彼はいじらしいまでに普通の高校生活というものに未だ未練を持っていた。

悪名ばかりが先行している隣人としては些細な事でもこれ以上、教師に目をつけられる事態は避けたい。

呻く様な声を上げながら、スウェットを脱ぎ捨てると如月高校制服のズボンを穿き、Tシャツの上にジャケットを羽織る。

片足でピョンピョンと跳ねながら靴下を履きつつ、自室の部屋のドアを抜け一階へと続く階段を駆け下りた。

3

鏡台から目を背けた後で二度深呼吸したが、少女の心拍は落ち着きを取り戻す気配もなかった。しかし、その鏡台から目を逸らす一連の動作において、少女はひとつ発見をした。

混乱する思考の中ではただの物としてしか認識しなかったもの、ハンガーで壁に吊るされたそれは、学校の制服と思われるセーラー服だった。

黒を基調とした長袖と白を基調とした半袖の二種類のものうち、半袖の制服の胸ポケットを探ると、中から一冊の生徒手帳を見つめる。

エンジ色のその手帳の表紙部には先程鏡に映った顔写真が貼られている。

その脇には私立鳳華学園 1年E組 水鏡 遠野と記されていた。

「水鏡 遠野 (みかがみ とおの) …」

そう何度か呟いてはみたが、少女の中ではそれが自分の名前であるという実感が湧く事は全く無い。

ぼんやりとした意識の中、遠野は白地で半袖のセーラー服へと袖を通す。

制服へと着替え終えた後、パラパラと手帳をめくると真新しいそれには大した書き込みはされていなかったが、唯一、メモの欄に電話番号が記されている事に気付いた。

そこには、実家と記されてある。

ここに掛ければ自分が何者か分かるはずだ。顔も分からぬ父と母の事を思っては備え付けの電話へと駆け寄った。しかし、電話口は何度ボタンを押しても無言のまま、それ以前に呼び出し音すら聞こえる気配もない。

(電話線が繋がっていない …?)

微かに見出せた希望を断ち切られ落胆する様に力なく歩くと、遠野はベッドへと腰掛けた。

再び室内を見渡すが、つい最近越して来たばかりの様な生活感もさほど感じられない質素なまでに簡素な部屋からはそれ以上何も、自らの素性を伺い知る手掛かりとなりそうなものは見当たらなかった。

……となれば、自分の取れる行動は二つだけ。

病院を探るか、この身につけた白いセーラー服の高校に行ってみるか、である。

幸いにも生徒手帳には学校までの簡単な地図も記載されてあった。

一通り思案しあんを巡らせた後で、遠野は意を決した様にベッドから立

ち上がった。

4

二階の自分の部屋から階段を駆け下りて見慣れたりビングへ至った時、燐人は足を止めた。

焦る気持ちで忘れていたが、朝目覚めた時から感じていた違和感の正体に気付いたからである。

「親父とお袋、もう出たのか…？」

共稼ぎの両親が朝から仕事に出かけるのはいつもの事だ。しかし、燐人が寝坊でもしようもなら、いつもは鬱陶しいくらいに愛情あふれるモーニングコールで起してくれるはずだった。

ふと、テーブルの上を見ると目玉焼きとカリカリに焼けたベーコン、そしてサラダの乗った皿の隣にいつもと変わらぬ愛情満載の手作り弁当が、いつものブルーのランチヨンマットに包まれている。

「早めに出勤するなんて言っていなかったけどな…」

昨夜、夕食を供にした時、父親も母親もそんな話はしていなかったはずだ。

（急な用事でも出来たのか…？）

少しだけ気かけながらも、目に映った8時18分を示す時計に我に帰ると洗面台へと慌てて駆けていく。

手早く歯磨きと洗面を済ませると、クセの強いショートカットをヘアワックスで無造作に立たせる。

手際の良さに一人納得する様に「よしっ」と呟くと玄関へと足を早めたが、いざ靴を履こうとした矢先、忘れ物を思い出せば二階へと舞い戻る。

「ああーっ！ くそ！」

結局、時間をロスする事になった苛立ちを口にしては、肩にかけるカバンを驚わづかみにして階段を下りた。

その時、テーブルの上に置いてある弁当に再び目が留まると、燐人にしては珍しく、と、いうより高校入学後初めてその弁当をカバンの中にしまう。

手に取った時、その弁当はまだ温かった。

靴を履き、ジャケットの右ポケットから取り出したフリスクを口の中に放り込む。

ドアノブを回し、ドアを押し開いた後で降り注ぐ陽光に目が眩んだ。

細めた目をゆっくりと燐人が開いた時、セカイの終わりが始まっていた。

5

決心するように立ち上がった遠野だったが、玄関へと数歩、歩み始めた所で足を止めた。

生徒手帳が胸ポケットにしまわれていたから自然な流れで半袖の制服を着た訳だが、考えて見れば自分は今日が何月何日なのかも知らないのだ。

明らかに一人暮らし用であろう小さな作りのテレビの電源を入れる。しかし、リモコンのボタンで局を変える度に映される映像は、どれもが壊れてしまったかの様な砂嵐だけだった。

小さな溜息をついて電源を切る。

部屋の中を見渡した時もそうだったし、玄関近くに置いてあった学校指定のものと思われるポストンバッグの中をのぞいて見ても、どうやら自分は年頃の女子としてはありえない事に携帯電話という物を持っていないようだ。

ボストンバッグのジッパーを閉めた後で、その脇に立てかけられた長細い布製の袋を覗くと中には竹刀が入っていた。

(…私のかな…？ 私って剣道部なのかな…？)

それを元の位置に立てかけ、ふと顔を上げるとドアの郵便入れに何かが入っているのに気が付く。

それは新聞紙だった。

日付は20XX年 4月17日。

再び生徒手帳を胸ポケットから取り出し、記載されている自分の誕生日から逆算すると、どうやら自分は十五歳という事らしい。

今まで得た情報を一通り整理しようと、空で考えてみると余計に訳が分からなくなって遠野は思わず笑ってしまった。

(…自分は年頃の女の子らしいが、携帯も持たず、変わっていると言ったら何だけど竹刀を持っていて、その上新聞を取っている) 混乱には違いないが笑える、という感覚が遠野には救いだった。

(…さつきより冷静でいられてるな)

フローリングに座りこんで、先刻までの震えなど過去の事のように落ちついた指先で新聞をめくつていくと、膨大な量の情報はほとんどが遠野の心の琴線きんせんに触れる事なく埋もれていった。しかし、ただの二つだけ、それが何なのか理由も意味も分からないはずの記事に遠野の心は激しく揺さぶられた。

フォウシャル・メイスン博士にノーベル化学賞が決定

クロイツコーポレーションが米のベルガンブカンパニーを

吸収傘下に…。

「……フォウシャル…クロイツ……」

上言の様に呟いた時、遠野の頭の奥を激しい痛みが襲った。

呼吸を止め、痛みが潮のように引いていくのを待った後で、新聞

を閉じると壁に手を付いてゆっくり立ち上がる。

(……ただ、ここにじっとしていたって仕方がない)

大きく深呼吸をして呼吸を整えると、ボストンバッグを肩にかけ竹刀の入った布袋を手に取った。

革靴に足を通すと、ドアノブに手をかけ、再び一度だけ大きく息を吸って吐いた。

意を決した様にドアを押し開き、彼女はセカイへと足を踏み出した。

6

目の当たりにした光景を燐人は理解する事が出来なかった。
いや、むしろ理解しろというのが、どだい無理な話であろう。

ドアを開くまで街の喧騒程度に思っていたものは人々の悲鳴であり、朝の始まりを思わせる普通の穏やかな街並みに広がるのは、阿あ鼻叫喚びきょうかんの地獄絵図であった。

燐人の視界の中では見た事もない生き物が蠢めいいていた。

薄いピンク色をした肉の塊かたまり。

お世辞程度の手と足を生やし、遠く離れた位置にくつついた、つぶらな瞳と大きな口がスマイリーマークを連想させる。

壁の角から顔を出し、辺りをキョロキョロと伺うモノや、通りをウロウロと歩くモノ、疲れ果てた幼子のように短い手足を投げ出して地に座っているモノに、立ちつくし微動だにしないままに空を仰ぐモノ。パツと見ただけで四体の肉の塊が目映った。

例えば名を付けるなら「ウスノロ」とでもいう様なその肉の塊の傍ら、悲鳴を上げながら混乱する人々が右住左住うぢさじしている。

「ウスノロ」から逃げる様に駆ける先には、また「ウスノロ」がいるのだから、それは徒勞とらうであり、滑稽こっけいでもあった。

ブラウン管越しにでも見る様に、ただその風景をリンドが呆然ほうぜんと眺めていた時、燐人の目前を人影が過ぎる。

(四軒隣りの酒屋のオヤジだ……)

燐人が見知った顔に気づいたその一瞬だった。リンドの目前を一陣の風が通り抜けていく。

先程まで気が抜けた様に空を仰いでいた肉の塊が、短い手足の四足歩行で駆けていった。

お世辞にも流麗いれいとは呼べないそのフォームは「ウスノロ」といった外見とは腹腹に、恐ろしく獯猛ういもつていに恐ろしく素早く酒屋のオヤジに詰め寄ると、巨大な口をパツクリと開けて襲い掛かる。

流れる様な一連の映像に燐人は呼吸するのも忘れる程に恐怖を覚えた。しかし、真の意味での恐怖が訪れたのは、将まさに次の瞬間の事である。

玄関先にへたり込みながら、燐人の口の端からフリスクがこぼれ落ち、そして転がった……。

オヤジのなくなってしまうた首から、血は一滴も吹き出していなかった。

噛み千切られたはずの首の断面は、オヤジの肌の色と同色のボンドで固めてしまったかのように傷口は見られない。

一瞬のうちに切断面が何ヶ月もかけて、傷口を塞いだかのような首の上に乗っていた頭はもはや無くなってしまったというのに、オヤジはそれでも肉の塊から逃げようと駆け出した矢先、その上半身は「ウスノロ」が開いた口の中にすっぽりと覆おおわれた。

少しの間を置いて、ばたつかせる足も綺麗に飲み込むと、ウスノロが一度だけゲップをした後で何事もなかったかのように、肉の胴

に埋もれた首をもたげた時、薄いピンク色の塊に申し訳程度にはりつuitつぶらな瞳と、怯える燐人の瞳がその視線を合わせた。

7

セカイは、水鏡遠野を恐ろしいまでの静寂せいじゃくを持って迎え入れた。

アパートの鍵を閉めた後で、遠野は駅を探して彷徨う。

生徒手帳に記された耳慣れない学校の住所と手掛かりと呼ぶには頼りない簡単な地図。それだけでは、病院に行くべきか、学校に行つて見るべきか決めかねていたが、バッグの中に財布と一緒に電車の定期券を見つけた時、彼女は病院よりもまず先に学校に行つてみようかと決心した。

激しい混乱の後に彼女に訪れた恐ろしい程の冷静ゆえさ故の行動ではあるが「自分はどうかやら記憶喪失らしい」と頭で理解できる事が、今の状況を尚更なおよさ現実味無く感じさせていた事もある。

(……ひよつとしたら、記憶なんてちよつとした拍子に戻るのかもしれない)

自らを奮い立たせるように、努めて樂觀たたく的な佇まいでセカイへと足を踏み入れた彼女に、セカイは眩いばかりの陽光で応えてくれた。はつきりとした二重まぶたを細めて、太陽を感じた後、遠野は通りへと向かう。深緑に囲まれたまだ新しい感のある風景が、街並みとしてそこに存在していた。

「穏やかで静かな朝」

遠野は一人呟いたが、やがてその静けさがただの静けさでない事に気付いた。

通りには人一人として姿はない。それどころか人の息使いも、気配も、ましてや犬や猫の鳴き声から鳥のさえすりすら聞こえる事はなかった。

静寂と言うより、街並み自体が死んでしまったかと思われる様な音の無いセカイ。そのセカイを彷徨う遠野の目的が、駅を探すという事から、他人を探すとひと言う事ことに変わるまでにはそれ程時間は掛からなかった。

8

ドアの覗き穴からガラス越しに見たウスノロが明後日の方向に首をもたげてどこかに行ってしまったのを確認すると、バクバクと鳴る自身の心臓の音に燐人は束の間ひとの生を実感する。

確かに視線を合わせた後でウスノロは、ぼんやりと燐人を見つめた。

死の覚悟すらしていた燐人は、一瞬間を置いてから転がるようにして自宅へと逃げ込む事になってしまったが、ウスノロはどうやら標的を変えて何処かへと行ってくれたらしい。

恐怖でガクガクと膝が笑い、腰が抜けそうになるのをすんでの所で留まらせる。

(危険は何ひとつ去ってなどいない)

自身に言い聞かせる様にして、沼地を歩く様に重い右足を踏み出す。

家中の部屋という部屋を、息を殺して見て回るとウスノロの姿は見えなかったが、やはり父と母の姿も見えなかった。

父と母の持つ携帯電話へ安否の確認の電話を入れようにも受話器は、うんともすんとも言わない。

(……回線自体がイカれちゃってるのか?)

郊外の自宅にひとり取り残されて、外部との連絡手段もない現状

に隣人の焦りは募っていく。

(……まさか、親父もお袋もあのバケモノどもに……)

瞬間、おもいきり隣人は自らの右頬みぎほほを張った。

(絶望的な状況を自ら悪化させてどうする!!!)

カタカタと震える膝を黙らせるように、静かに呟く。

「……親父の会社もお袋の会社も都心部にあるんだから、大丈夫なはずだ」

東北地方とは言え人口百万人都市等と謳うたっている都市の中心部なればこそ、ここよりも安全であると信じたい。いや、信じなければならぬ、自身の心が折れない為にも。

思考回路を落ち着かせようと隣人は小さく、深く呼吸を繰り返す始める。しかし、それを初めて三度目、彼の思考が平静を取り戻す事はなかった。

「……ゆかりは、大丈夫か……?」

呟つぶやきは消える事なく頭の中でぐにやぐにやと回り続ける。

再び速く、荒くなっていく心音に急がされるようにして隣人は駆け出していた。

9

覗き窓から見る限り、先刻まで辺りをうろついていたウスノロの姿はない。それを確認した後で隣家りんかへと隣人は駆けた。

アルファベットでMIMASAKAと書かれたガラス地の表札の掛けられた扉を抜けると、美作家の白い扉は半開きのままで少しだけ揺れている様に見えた。

「ゆかり!!!」

何度も声を上げながら屋内へと駆け込むと、次々と一階の部屋の

ドアというドアを開け放つていく。

その度に不安と安堵あんどを織り交ぜながら、混乱し真っ白になりそうになる頭を落ち着かせるように燐人は深呼吸を繰り返した。

一階に人の気配の無いのを確認した後で、意を決したように燐人は階段へと歩みを進める。

慎重に階段を昇り始めて七段目、頭半分だけ見えた光景に燐人は危うく階段から足を踏み外しそうになった。

そこにはウスノロがいた。巨大な口からは、すね毛の覆われた二本の足が突き出している。

(……おじさん …?)

悲鳴を上げそうになる口を燐人が両手で塞ぐのと同時に、ピクピクと痙攣けいれんしている美作家の家主の両足をウスノロは一息で飲み込む。ゴクンという嚥下えんげの音がしたその後すぐに、ウスノロが大きなゲップをした。

それを吸い込まないように息を止めた燐人は、喉元へと押し寄せる不快感を必死で耐えながら音を立てないように階段を降りていく。

最後の一段から足を離すのと同時に、完全に切れた緊張感に無我夢中で廊下を駆け抜けた。

白いドアに体当たりでもするようにして外へと出た燐人に冷静さは一欠けらも残ってはいなかった。それでも、ほんの少しだけ顔を傾けて玄関脇の少し奥を覗いたのは、彼の本能以外の何者でもない。

(……自転車が、ない。 …ゆかりは、もう家を出た後だ)

言い聞かせる様に、そして呼吸もメチャクチャに、ただ燐人は路地を駆け出していた。

第二章 水鏡 遠野 (トーン)

第二章 水鏡 遠野 (トーン)

1

「くそっ！ …くそっ！ …くそっ！」

連呼するように呟きながら彼は走っていた。

ベージュ色のカーディガンにサラサラの髪の毛をなびかせて走る姿には爽やかすら感じられたが、十四歳の頃からの悪癖たる喫煙のせいで、息はずいぶん前から上がっている。

登校しようといつものように玄関を出た彼が、挨拶でもと向き直ると隣の部屋から出て来たのは巨大なピンク色をした肉の塊だった。「助けて」と悲鳴を上げながら、その塊の脇を這い出て来た隣の部屋に住む新婚ホヤホヤの若奥様は頭部をむんずと掴まれて、あつと言つ間に巨大な口の中に放り入れられた。

事もなげに一連の動作を済ませたその肉の塊のつぶらな瞳の奥を覗いた瞬間、彼は踵を返して逃げ出した。

警察や、昨日から「かっこいいパパを見つけて来てあげるからね」などと言つて友人達と旅行に出かけた母親に連絡をつけようとしたが、彼の携帯電話は何ひとつ機能を果たさなかった。

理解出来ない異常事態にとりあえず交番に駆け込もうと彼は走る。しかし、通りに出た時、彼の眼前に飛び込んできたのは、より凄惨な光景であった。

何匹もの先程の化け物が跋扈し、人を漁るそれを目の当たりにした時、彼は一瞬たかが外れて笑い出しそうになったが、ギリギリで踏み止まると、人間漁りに夢中な化け物達が手薄なポイントを見つけては、一目散に駆け出した。

「くそっ！ …くそっ！ …くそっ！」

連呼するように呟きながら、危険区域を抜けた後も走り続けると、路地の角から突然姿を現した緑色のブレザーを着た男子生徒と交錯し、彼は派手に転んだ。

ブレザー姿の生徒より素早く体制を立て直した彼が、目を丸くしながら、しかし、引きつったままの表状で「ひょっとして、トトラか？」と呟くと、トトラと呼ばれた一見して大人しそうな丸顔の男子生徒もゆっくりと声を上げた。

「……ユアン？」

2

「ウスノロ」の習性など理解するべくもないが、ヤツらの姿は道が開けた所には数多く見られたので、燐人は逸る気持ちとは裏腹になるべく狭い路地を迂回する羽目になった。

駆け出しては立ち止まり、路地の角から様子を窺う。

そんな行動は焦りからか、ゆかりの通う清南高校がどんどん遠くになっていく様な気がしてくる。

清南高校は如月高校から少し離れてはいるが、ゆかりは自転車なら三十分で行けると言っていた。しかし、それも道路沿いを真っすぐに進めば、という事を前提にすればという話である。

徒歩で通う燐人として、如月高校までは三十分という道程だがこの分ではいつ着くとも分かったものではない。

燐人の募るばかりの焦燥感が、悲壮感へと変わったのは七ヶ所目の路地を左折した時だった。

ようやく路地を抜けられる、そう思って曲がった先では、通りを

塞ぐ様にして無人のバスがひしゃげた前面を路地の角にぶつきたままで動かなくなっている。エンジンはとうに切れていた様子で、さすがに爆発などしないだろうが、これ乗り越えて先に進む事は無理であった。

何よりひしゃげて頑かたくなに閉ざされた乗降口はピクリとも動く気配はないというのに、乗客が一人も外に逃げた痕跡こんせきがないのが不気味だった。

くるりと踵を返した後で、おかしな想像を巡らせないよう何度も呟く。

「運転席から皆、非難したんだ…それだけだ」

悲壮感の中で来た道を途中まで引き返そうと隣人は再び歩き出した。しかし、戻り始めてすぐの角を曲がった瞬間、リンドは立ち止まり、そのまま身動き一つ出来なくなった。

正にへビに睨まれたカエル。

ピンクの塊、ウスノロが平和そうな笑顔でそこに立っていた。

悲壮感は今、絶望へと変わった。

3

ユアンこと柚子原 庵が通りに見えた化け物を視界に留め、通りの脇から続く長い階段を駆け下りた時、後ろを付いてくるトトラはまだ階段の中程であった。

階段を降りてしばらく行った先には弁天堂なる神社があったが、ユアンにすればのん気に神頼みなどしている暇はない。

「トトラ、少し急がないとヤバイぞ」

ようやくにして階段を降りかけたトトラにユアンが声を掛けると、トトラが青ざめた顔色に愛嬌のある苦笑いを浮かべた。

「いや、実はさ、さっき転んだ時にさ、膝を痛めたみたいでさ」
見るとトトラの制服の膝から血が染み出している。

「なんで早く言わないんだよ」とユアンが尋ねると、苦笑いを浮かべたままのトトラが「俺も今になって気付いたんだ」と答えた。

ユアンとは中学時代の同級生であるトトラこと丙戸^{ヒノト} 虎男^{トラオ}は、ゲッコー最強と言われる三年の丙戸^{ヒノト} 竜男^{タツオ}通称ヒリユー先輩の弟であり、本来ならヒリユーの弟のヒドラなどと呼ばれ恐れられそうなのだが、その優しくのんびりとした性格ゆえに、トトラはヒドラではなくやはりトトラなのであった。

強くて男気のある兄を弟は尊敬し、頭が良くて優しい弟を兄は誇りに思っている。中二の頃に転校して来たユアンとは違い、小学校からその兄弟と付き合いのあるリンドは「实际いい兄弟だよ、あの二人は」と少し羨まし^{あやむい}そうに話していた。

トトラの膝から視線を逸らすと、ユアンはトトラの愛嬌^{あいぎょう}のある顔を眺めた後で「少し待ってる」と声を掛けると、一人先にあるコンビニを目指して歩き出した。

十年程前はそれ程人も住んでいなかったという山間は、今や住宅地となっている。ちらりと見上げた先で、山頂からのぞく巨大な白い観音像の向かいには大きなショッピングモールがあったが、そこまで行く余裕はない。

この近隣ではユアンの目指すコンビニくらいしか傷薬らしき物は置いてないだろうが、歩みを止め住宅の影から遠目にコンビニを覗^{のぞ}き込んだ後でユアンは溜め息を吐いた。雑誌にも、食品類にも気を留めず辺りを伺うあの化け物の姿があったからだ。

来た道を力なく戻り、トトラの不安そうな顔を見た後でユアンは別の手段を取る事を決意した。

中学時代はヤンチャだったユアンだが、さすがにそれはした事がなかった。しかし「状況が状況だ、仕方がない」と自らを言い聞かせる時、手頃な石を拾いトトラが玄関先に座るその家屋へと向かう。窓ガラスを叩き割って侵入しようと考えていたユアンだったが、

玄関の鍵は外れており、気が抜ける程に容易くドアを開けた。しかし、そろりと開けたドアをそろりと閉め直すとトトラの肩を抱き、ユアンはその場を逃げる様にして後にする。

家の中は、將に住人が化け物のブランチにされる瞬間だった。

4

終わったな……。

身動き一つ出来ないまま、燐人は頭の中でそれだけ呟いた。

享年十五歳。やりたい事もまだこれからという人生においては、辞世の句など思いつくはずもない。

のんびりと歩きながら、人を馬鹿にしたような笑顔のウスノロが近づいてくるにつれ、燐人もまたのんびりと「死」を受け入れ始めた。

その刹那。

ウスノロの後ろから現れた人影が、ウスノロの顔側面を棒状の物で叩き付けるのと同時に良く通る声が響く。

「走って!!」

叩かれた事など蚊に刺された程にも感じなかったろうが、顔だけゆっくりとそちらに向けたウスノロの、その逆側を駆け抜けた人影が燐人の右手を掴む。

(さっきのヤツって竹刀か……)

死を受け入れ、かんまん緩慢になっただ脳内でそんな事をぼんやり考えながら引きずられる様にして走る燐人の顔面を何かが覆う様にして叩いた。

それは、燐人の右手をしつかりと握る小柄な女性の頭部から伸びた黒く美しい髪の毛だった。

「私は…水鏡 遠野、あなたは？」

白地のセーラー服を着た女生徒が、駆けながら尋ねる。その声には凜とした響きが伴っていた。

「…俺は、リンド。…氷ヶ守 燐人だ」

名前を伝えた時、燐人の脳内が目を覚ました。

それは、正に「生」の実感であった。

今度は燐人が力強く遠野の手を握りしめる。そして、力強く地を蹴った。

5

トトラの肩を抱いたまま、コンビニから森林公園へと至る道路をひた走るユアンの限界は近づきつつあった。細身のユアンが、太り過ぎとは言えないまでもずんぐりとしたトトラを抱えているのだから当然と言えば当然の話である。

伊達メガネなどかけて冷静キャラを装っているユアンではあるが、この非難ルートには何の考えも持ち合わせていない。

トトラを引きずる様にして走る途中で、自身がゲッコウからどんどん離れている事を思い出し、口には出さずとも激しく後悔した。

それを紛らわす様に「今って一家に一匹、化け物の時代なのか」などと嘯いてみたが、当然今の二人に笑っている余裕などなかった。それでも、この鬱蒼とした森林公園の脇を抜ければ、大きくないにしろ酒屋と併設してスーパがある。さすがに絆創膏くらいは置いてあるだろう。

「そこで、トトラの傷の処置をして、出直しだな」

自らを奮い立たせようとするユアンの呟きに、トトラが小さく頷いて見せた。

ようやくにしてスーパー前の通りに出られる、そう思い最後の力をユアンが振り絞ろうとした時、トトラが慌てる様に声を発した。

「ユアン、ちょっと待って、ストップ！ ストップ！」

ユアンは急ブレーキを掛けると、大した手入れもされていないせいで、公園を覆う木製の柵から伸び放題になっている木々の枝葉の隙間から、トトラの勘付いた先を覗いた。

スーパー前の通りには、中央の白線を越える程に巨大な一台のトレイラートラックが止まっている。

そして、その周りを迷彩柄の上下姿の連中が銃を手に、辺りの様子を窺っていた。

すっぽりと被ったフードの下には、全員が全員ガスマスクを装着しており、マスク独特の吸気音だけが聞こえるもの誰一人として言葉を発する者はいない。

「毒ガスでも撒かれたのかな？ ……そもそもあの人達って自衛隊の人達なのかなあ？」

確かに2m以上はあると思われる巨体に無言のまま「シュー、ハー」という音だけ立てるガスマスク姿の連中に声を掛ける事も出来ず、木々の間から様子を探るユアンに、青ざめたトトラが耳打ちをした時、トラックの影から一人の男が姿を現した。

6

「ちょっと…止まって…くれ」

十分以上、ひたすら走り続けた後で、息を切らせながらようやく隣人は口を開いた。

二度声を掛けて少女は走るのを止める。

隣人よりずっと小柄な少女だから、隣人に合わせて走るのも大変だったろうに、少女は余力を残している様にも見えた。しかし、足を止めた後で息を切らせる少女が、思い出したように広がる四肢の震えを隠すことも出来ずにいるのを見て、必死で助けてくれたんだ

な……。と、燐人は、しみじみと感謝する。

「さつきはありがとう……水鏡……さん」

燐人の言葉を受けても返事が出来ない程に息を切らす遠野は、忘れていた恐怖に全身を小さく震わせながら頷いた。

必死で逃げていた為、気づけば目的地の清南高校も、ましてや如月高校からもういぶん遠く離れてしまったが、今は命を危険に晒してまで自分を救ってくれた少女に報いるべきだ。

燐人は遠野の右手を握ると、走って来た通りから路地へと入る。

路地へ入ってすぐの所に児童館が建っていた。

児童館は森林公園に至る目前にあり、階段を降りていくと、池をとり囲む様に散策路が続いているが、ろくに手入れもされず鬱蒼と生い茂る木々のせいで、常に仄暗い。

その公園の雰囲気^{くふいき}に侵食^{しんじく}されたように、まだ新しい児童館もひっそりと佇んでいた。

児童館の入り口脇に備え付けられている水道で水を飲むと、遠野の息もようやく整った。

簡単な自己紹介を済ませ、燐人が「水鏡さんは何でこんな事になったと思う？」と尋ねると、遠野は現状どころか、実は自分の記憶すら分らないのだ、と答えた。

自分の住んでいた近所には怪物の気配も無かったが、同時に人の気配も感じられなかった。

学校を目指して外に出たものの尋ねるべき人も見えず、誰とも知れぬ誰かを探し歩いているうちに初めて出合ったのが燐人だったという。

当初は半信半疑で聞いていた燐人だったが、努めて冷静に話そうとしている彼女の表状を見ているうち、それが嘘でない事を理解した。

何かの拍子に彼女が泣き出してしまいかもしれないという危うさを感じながらも、燐人は口を開く。

「その制服って鳳華おうかだよ。鳳華はここからだと言車でんしゃで二駅先だから、厳しいと思う。こんな状況じゃ電車がまともによつてくるとも思えないし……」

一瞬表情を曇らせた彼女が、泣き出してしまふのではないかと、と燐人は覚悟した。

水鏡 遠野が挫折くせつを感じたのは確かだったが、ほんの少しだけ地面を見つめた後で、顔を上げると遠野は燐人の瞳を真つすぐに見る。「あの…氷ヶ守くんはこれからどうするの？」

燐人が「幼馴染が心配だから、少し離れた先にある清南高校を指すつもりだ」と告げると遠野は大きな瞳を震わせ、躊躇ためらいがちに、しかし、はつきりと自分の意思を伝えた。

「私も…その、一緒に行つても良いですか？」

燐人は「もちろん」と即答した。

「…じゃあ、一つだけ…お願いが、あるんだけど…」

燐人の胸元までしかない小柄な身体を更に小さくするようにして、照れた様に伏し目がちな遠野が続けようとした時だった。

児童館の裏手から聞こえてきた声に、二人は振り返った。

7

真っ白なマントをすっぽりと被かぶったその男は、ユアンとそう年端としはも変わらぬ様に見える。美しい顔立ちをしていたが、その表状は能面の様に全く変わる事はなかった。

彼の後ろから、二人のガスマスク姿が付き従う様に現れた。両手にはワイヤー状のロープが携えられており、二人がかりで引きずるその先には、巨大なワイヤーで編み込まれた網に絡まれて、平和な笑みを浮かべたままのあのピンク色の巨大な肉の塊の化け物があった。ゆつくりと開いたトレーラーの荷台へと化け物を回収する姿から、連中の真意を読み取るうとユアンは頭をフル回転させる。

？ 連中は、バケモノを狩ってくれている正義の味方。
？ ヤツらこそがバケモノを作った連中。(…だったら、悪いヤツら)

？であれば声を掛けるべきである。だが、保護を求めに出て行った結果が？であればシャレでは済まない。

知性派を気取ってはいても、所詮は単純な思考の持ち主のユアンと、頭真っ白で青冷めたまま沈黙を守るトトラでは正解など導き出せる訳もなかったが、二人は必死に考えを巡らす。しかし、その二人が目点をさせる次の瞬間、そこには化け物とは異質の恐怖が在った。

美しい顔立ちの男がトレイラートラックの助手席へと顔を上げた時、男の白いマントの隙間すきまから覗かせた身体、キラキラと陽光を反射するその身体にユアンもトトラも目が釘付けになる。

金色の素材のパーツを繋ぎ合わせて作ったマネキンの様な身体と、各部のパーツを動かしているであろう幾つもの歯車。

科学雑誌の付録の如きそれは、さながらゼンマイ仕掛けの人形だった。

ピンク色の化け物の存在理由も不明なら、ゼンマイ仕掛けの人形の動作理由も不明。化け物とは別の不気味さにユアンの背筋を寒気が走る。

「ドウシマスカ？ 公園モ、ミマスカ？」

男が感情の感じられぬ声を助手席の窓に向かって投げかけると、窓から別の男が顔を乗り出した。

「人気のない所にバクは現れませんからねえ、公園は結構。引きあげますよお」

その男が、視界に見えるものの中で、確実に唯一生身の人間であるのは遠目のユアンにも理解出来た。

青色のプラスチックフレームのメガネに、細身の白と黒のストライプのスーツ。顔は人形に近い色素の薄い顔色だったが、声にはリ

ズムと人間らしい温度がある。

「公園」というフレーズを聞いて反射的に木々の影に身を縮めたユアンとトトラの事などお構いなしに、メガネの男の鶴の一声で、間もなく凄まじき排気音を響かせながらトレーラートラックは発進した。

一瞬の安堵あんどの中にいたユアンだったが、トレーラートラックが走り去った後もしばらく身動きが出来なかった。

それは、トラックの去り際、窓から顔だけ出した男が、ユアン達が隠れる影に視線を送ったからである。

時間にしてはほんの僅わずか。しかし、男は確実に、ユアンに向けて微笑んでいた。

8

「良かった…やっと会えた……」

児童館の壁に寄り掛かるようにして立っていた男はそう言った後で、崩れる様に地面に膝を付いた。

二十代後半といった風体のその男は、事故にでも遭ったかの様に着ている服はあちこちが破れ、そしてそこから染み出した血が黒く変色している。

燐人と遠野が駆け寄ると男は右手を差し出した。

その手には長い筒状の物が握られている。幾重いくえにも布が巻きつけられて封のされたそれは、その存在を隠さなければならぬ物の様に、重々しい空気が纏まとわりついていた。

「これを、仲間に。我らがフォウシャル・クロイツの元に……」
男が筒を差し出した先には遠野がいた。しかし、男の言葉を聞いてすぐ、遠野は耐え難い痛みに襲われる様に頭を押さえたまま、その場にうずくまる。

「…そうか…まだ、戻ってないのか、記憶が……」

男はそう呟いた後、気を失った。

隣人が「大丈夫か」と心配そうに見つめる中、遠野はゆっくりと立ち上がる。

「ん…大…丈夫。…ただ、さっきの言葉、『あれ』が頭の中で反響して……」

それを新聞の中に見出した時も今と同じ状態になった、と遠野は告げた。

「それ」や「あれ」としか表現せず、「フォウシャル・クロイツ」と言葉に出来ないのは、得体の知れない恐怖を感じているに他ならない。

まだ顔色の悪い遠野に隣人が声を掛ける。

「でも、記憶がどうの、って言ってた所を見れば、この人が水鏡さんの記憶を取り戻す手掛かりになるかもしれない」

遠野はうつ伏せた顔も知らない男を少しだけ見つめた後、男が差し出した筒を手取る。

「…うん。…それと、これも」

物言わぬもう一つの手がかり、それを手に取って見たものの、それが醸し出す禍々（まがまが）しさと神々（こうこう）しさを感じては、その封を外す事が躊躇（ためら）われた。

怯える瞳で遠野が見つめると、隣人が小さく頷く。

「とりあえず、場所を変えた方が良さな。もう少し行った先にスパーがあるから、そこに移動しよう」

気を失う男の肩を抱き上げると、隣人は引きずる様にして歩き始める。

微力ながら小柄な遠野も、もう片側の肩を抱えた。

「…そう言えば、水鏡さん。さっきお願いがあるって言ってなかったっけ？」

隣人が不意に声を掛けると、遠野は少しだけ顔を赤らめて、照れる様に消え入りそうな声で呟いた。

「…あの、記憶を取り戻すきっかけになるかもしれないから水鏡さ

んじやなくて …… 遠野って呼んでもらいたいなって …… あの、 …… その、
嫌なら、 …… 別に ……」

一人、拳動不審きょどうふしんになる遠野を見て、燐人は瞳を緩ませる。

「わかったよ、トーノ。そのかわり、俺もリンド。ただのリンドで
いーよ」

それを聞いて、遠野も微笑んだ。

9

男を引きずる様にして、リンドとトーノは公園向かいの小さなス
ーパーへと辿り着いた。

正面の自動ドアは電力が切られているのか、うんともすんとも言
わなかったが、リンドがカー一杯に引くと何とかこじ開ける事が出来
た。

「ふう」と溜め息をつくりリンドの脇を、白くほっそりとした両腕で
気を失う男を引きずったまま店内へと遠野が入って行く。

一息整えてリンドがその手伝いをしようとした矢先、表状を強ば
らせるとリンドは遠野の身を庇かばう様にして覆い被さった。

男を店内へと連れて入る事に精一杯でトーノは気づかなかったが、
店内の入り口を抜けてすぐの足元にはロープがピンと張られていた。
トーノがそれに足をかけるのに気付いた瞬間、リンドは迷いなく
行動を起こした。

小柄なトーノを全身で包むようにしてリンドが抱き寄せた一瞬間
の後、宙を巨大なバケツが舞う。

敢あえて入り口間近に設置されたと思われる棚に、バケツが激突し
たと思つた瞬間、棚に陳列されていた多量の袋入りのスナック菓子
や、箱入りのチョコ菓子が辺りに飛び散った。

背中越しにそれらがバラバラと落ちてくるのを感じながら、リン
ドは少し離れた所から発せられた声を聞いた。

「どうだ！？ やったか！？」

「…ダ、ダメだよお、柵は倒れなかったよお…」

逸る男と、オロオロとした所作が声にまで表れている男。そのどちらかがリンドには聞き覚えがあった。

ほつとする反面、リンドは急いでその場に立ち上がる。

二人の男の内、逸る男の性質をリンドは熟知していた。

あいつは、この状況下とどめを刺しにきかねない。

「…っ、ユアン！ トトラ！ 俺達を殺す気か！！」

10

立ち上がったリンドの目前で、パイプイスを放り上げたユアンが目を瞬かせていた。

「ユアン！ リンドだ！ リンドが助けに来てくれたよお！！」

丸い顔に明るい表状のトトラがその脇を、左足を引きずりながら駆け寄ってくる。

リンドに抱き付かんばかりのトトラを見た後で、パイプイスを床に置くとユアンはその上にどっかりと腰掛けた。

「リンドお、遅えーんだよ。まったく」

今しがた殺されかけた相手に悪態をつかれて、ほんの少しの殺意が芽生えたリンドだったが、はつとした様に後ろを振り返る。

布の巻かれた筒を持つトローノがゆっくりと立ち上がるのを見て「ケガはないか」と口を開きかけたリンドを遮る様にユアンが声を上げた。

「リ、リンド！ 誰だ、この可愛いこちゃんは！？」

（かわいいこちゃん、ってお前…。）

呆れた様にリンドがユアンへと視線を移すより早く、再びユアンが声を上げる。

「鳳華の制服じゃん！！ あこがれのっ、鳳華の制服じゃん！！」

（お前のあこがれなんて知るか。ダメレ、制服フェチ……。）
非常に残念な友人紹介となってしまうた事を感じつつ、リンドが視線を向けると特に怪我を負った様子も見られなかったがトーノは明らかに当惑した表状を浮かべていた。

次にユアンが何事かを口にすることを遮る様にリンドが声を掛ける。
「ユアン、トトラ、手伝ってくれ」

このゴタゴタの際中も気を失い続ける男を、ユアンとトトラが秘密基地の如く、カスタムメイドした事務室へと運ぶ。

事ここに至るまで、あれほどの苦労をしたというのに、やはり男三人掛かりだと大した手間もかからなかった。

事務室に備え付けられてあった簡易なベットに男を横にした後で、消毒でも、と破れた服の下を確認すると男の身体に傷痕らしきものは、微塵も見られない。

リンドとトーノは顔を見合わせたが、男は、ただすやすやと寝息をたてているだけだった。

幸福感すら感じられる男の寝顔をまじまじと眺めた後で、踵を返すと思いついた様に「さて、と」リンドが仕切り直した。

「トーノ、こっちがトトラで、そっちの変態がユアンだ」

丸顔の丙戸 寅男が挨拶する。

「誰が、変態だ」と念頭に置いた後で柚子原 庵も挨拶した。

ユアンは今更ながら黒縁の伊達メガネのつるを直して、知的キャラを演出して見せる。

「で、トトラ、ユアン。トーノだ」

水鏡 遠野が小さくお辞儀をした。

11

並べたパイプイスに腰掛け、ペットボトルのお茶で喉を潤す。

束の間の安堵感の中で、四人は互いの情報を持ち寄ったが、事の

経緯を知るには程遠い。

「じゃあ、お前らもあのウスノ口の正体は知らないのか」
リンドが話をふった時、トトラが「バク…」と呟いた。

あの奇妙な軍隊の中で唯一生氣の感じられる青色フレームのメガネの男は、リンドがウスノ口と名づけたピンク色の肉槐を確かにそう呼んでいたとトトラは続ける。

「バク…か」

トトラから話を聞いて、一瞬思案する様に呟いた後でリンドが尋ねる。

「それで、お前らそいつらに助けを求めなかったのかよ？」

ユアンが質問に答える変わりに噛み付いた。

「リンド、お前は連中を見てないからそんな事言えんだぜ？ありや、そのバクつてのを退治してるっていうより、回収してるって感じだよ。それに、あの動力源も不明な機械仕掛けのゼンマイ人形。あれはきつと殺戮兵器に違いないって！そんな連中の前にホイホイ出て行ったら、今頃ここには居ないぜ？俺達」

機械仕掛けなのに、ゼンマイ人形というユアンの矛盾的発言を受けて、いまいちイメージを持たずにいるリンドの傍らで、ちらりと同意を求める様にユアンはトトラの顔を覗いたが、トトラは苦笑いを浮かべるだけだった。

トトラがそれ以上、うんともすんとも言わないのを見るとユアンは突然に話題を切りかえる。

全く違う話題を持ち出してくるのも、主語が無いのもB型らしいユアンにすればいつもの事だが、A型のリンドとしてはそんなユアンと何のかなので、付き合いの長い事に改めて人生の不思議さなどを感じたりもしていた。

「…で、トーノも鳳華に登校する途中で、この訳の分からない事態に巻き込まれたの？」

興味津々（きょうみしんしん）と遠野の顔を覗き込むユアンを（いきなり呼び捨てとは恐ろしい程のフランクさだなコイツは）と内

心で感心しながら、リンドは遠目に眺めていた。

少しだけ俯いた遠野が控えめに口を開く。

……。

「記憶喪失!？」

ユアンが声を上げ、トトラが驚きの表状を浮かべるのを見て、それ以上は酷だと言わんばかりにリンドが話を引き継ぐ。

「トーノの記憶のヒントを、どうやら彼は知ってる様な素振りだった」

リンドが顔を後ろに傾けると、ユアンとトトラも幸せそうな寝顔の男を見つめた。

しばらく男の寝顔を見た後で、何の気もないようにすつくと立ち上がったユアンが有無を言わず男の頬を張った。

目を点にしたまま固まる三人を尻目に、起きる気配もない男を眺めたままでユアンが口を開く。

「ダメだね、こりゃ。どうする? 病院にでも連れてくか?」

近隣にあるのは、せいぜい診療所。そして、そこにあのバクが居ないという保障はない。その危険な賭けに、誰もが同意できずにいた時「…もしかしたら」とか細い声が洩れた。

その出元を、リンド、ユアン、トーノが固唾を飲んで見守ると、声の主のトトラはモジモジしながらも話を続ける。

「もしかしたら、こういう緊急時には大きな施設が避難場所になるかもしれないよ。病院を目指すよりは、そっちに向かった方が良いかも」

(…ここから一番近くて、大きい公共施設と言えば……)

リンドが溜め息を吐く。

「如月高校、か」

リンド達にしても、ユアン達にしてもバクに追い立てられる様にして、学区側からはどんどん離されていた。つまりはそちらへ向かうというのは、一見自殺行為の様にも思われる。しかし、ふいに思案^{あんげ}気な表状のまま、ユアンが呟いた。

「いや…良い方法なら、あるかもしれない……」

第三章 柚子原 庵 (ユアン)

第三章 柚子原 庵 (ユアン)

1

「……で、このルートで本当に大丈夫なのか？」

リンドが少し腐りかけた木造の階段を見下ろしながら訪ねた。

階段の先の方は鬱蒼とした自然公園へと通じている。

小さなスーパーにしては珍しく、常備してあった車イスを押しながらユアンが答えた。車イスの上では、幸せそうな寝顔で名も知らぬ男が眠っていた。

「ん？ どうだろな。……さっきまでこの辺うろついていた殺戮部隊の連中は『人気のないこの公園にバクは居ない』って言ってたぜ」
別段確証などなくせに、のんきに話す腐れ縁の友の頭ひとつ小さい横顔を、疑わしいもんだ、と言わんばかりに一瞬だけ見つめたリンドだったが、他に良い案がある訳でもない。確かに公園を通過するだけの距離を稼げるのなら、如月高校までは大分近くなるだろう。ユアンの顔を見て小さく頷くと、後ろ向きにした車イスをリンドとユアン二人がかりで、一段一段慎重に階段を下り始めた。

左足をケガしたトトラと細く小柄なトーノも先を行く二人の少しでも力になれば、とフットレストの上部を押さえる。

階段は思いの他長く、下り終えるのに随分と時間を要したが、それでも何とか無事に四人は車イスを公園の入り口まで辿り着かせる事が出来た。

公園は乱立する木々のせいで薄暗く、一際ひっそりとして見える。スーパーを出る時に見た掛け時計は午前十時を過ぎたばかりだったというのに、ここは既に陽が暮れ始めたかの様だった。

陽の当たらないどんよりとした池に波紋の広がる音がすると、一匹の黒いコイがその姿を水面に映していた。池というよりは沼と呼んだ方が良いのではないかと思える程の、その周りをろくに手入れもされていない散策路が続いている。

枯れ葉と湿った土の上を少し進んだ先の朽ちかけたベンチまで行った所で、四人は小休憩を挟んだ。

持って来たペットボトル入りのお茶の残りで喉を潤しながら周りをリンドが見渡すと、人の気配もないが、やはりバクの姿も見られない事を実感する。

公園はただ静寂に包まれていた。それでも時折聞こえる虫や鳥の声、それに木々の葉を揺らす風の音が四人に束の間の日常を思い出させる。

「あのさ……」

トトラが不意に声を発した。他の三人も、今、この場の風景を見て、トトラが言いたい事を理解していた。

今までの事って夢だったんじゃないのかな。

しかし、トトラの発した言葉が続く事はなかった。少し離れた所で、枯れ葉を踏み砕く音が聞こえた。

2

その男は突然公園に現れた。

ゆっくりとリンド達四人へと歩みを進める姿は、薄汚れたフード付きのモスグリーンのパーカーのせいで、鬱蒼とした木々に同化して見える。

リンド達の目前、数m前まで近づいた所で、フードを取ると伸ばし放題の長髪をガリガリと掻きながら、屈託の無い笑顔を覗かせた。

「おおー、生存者あり、かあ」

大きな口で一人歓声を上げる二十代前半といった風貌のその男に、怪訝な表状を浮かべるユアンの代わりにリンドが質問を口にする。

「あの、スイマセン。あなたは公園の向こうからここへ来たんですか？」

公園の先は住宅地を抜けて如月高校、そして更にその先には清南高校がある。

「んん、そう、ゲッコーの方」

目前に立つリンドとユアンの制服を見留めた後で男は答える。

リンドは動揺の色も隠さずにまくし立てるように尋ねた。

「向こうはどうなってますか？ 如月高 ……あと清南の方面は！」

男は感心もない様にさりりと言う。

「んー、まあ、大分バクの数も減ったと思うよ。あの近隣の連中はこぞって学校内に立てこもったみたいだから」

興奮を抑え切れないリンドとは対照的に「バク」という単語にユアンの表状はますます曇った。リンドを制すると、言葉を選ぶ様にユアンが尋ねる。

「……あなた、今回の事について何か知ってるんですか？」

「んーっ」

ゆっくりと首を回しながら、男は考える素振りを見せた。一瞬だけ回す首を止めた時、男の瞳が輝く。男の視線の先には車イスに腰掛けたまま眠り続ける男が居た。その後で再び屈託の無い笑顔を繕う。

「まあ、俺も大した事は知らないよ。……つと、俺まだ仕事の途中なもんで、これで失礼するよ。ゲッコー目指すんなら、気をつけてなあ」

男は飄々（ひょうひょう）として場を後にする。しかし、リンド達の前を離れトーンとトトラの脇を通り過ぎようとした時、ゆっくりと振り返った。

「あーっ、ところでさ、君たち。光沢のある白い布で何重にも封をされた長細い筒を見なかったかい？今はこれ位の長さだと思っただ

けど」

男が肩幅程に手を広げて長さを説明する。

トーノの頬を冷や汗が伝った。眠り続ける男から託されたあの筒は今、トーノが背負う竹刀入れに入れられていたが、男から受け取った時から徐々にその筒は縮小しつつあった。それゆえ、竹刀入れにもスツポリと収納できた訳だが、それを最後に確認した時、筒は確かに男が言ったのと同程度の長さだった。

トーノの表状を確認するとリンドは平静を装ったまま口を開く。

「いや、見た事ないですね」

頭をガリガリとかきながら「そっかー、残念」と続けた男だったが、その表状に残念らしさは微塵も感じられない。

「でもさー、それはやっぱりここにあんだよね。コイツがそう言ってるもの」

フードの中から銀色の小さな生き物がモゾモゾと出てくると、男の肩に止まった。

3

「間違いねーな、ギオン。ハルモニアはあの女が持つてるぜ」

水銀の様な滑らかな色とフォルムのその小さな生き物は甲高い声を発した。

モゾモゾと十三本の足どりで動くさまは虫の様であったが、良く見るとそれは四本の足と九本の尾の様にも見える。狐に似た長細い顔と瞳は人を馬鹿にしている様にも見えた。

「んー、じゃあまあ、さつさとよこしな」

長髪の男が一転して悪意に満ちた声を上げ、懐に忍ばせてあったサバイバルナイフを引き抜く。

男がトーノへ一歩詰めた瞬間だった。今まで嘘の様に深い眠りの中にいた男がトーノの前に飛び出す。

「早く逃げる！！」

男の手にはどこから取り出したのか光をまとった剣が握られていた。

「邪魔をすんな！ フォウシャル！！」

サバイバルナイフと光の剣が幾重に切り結ばれる中、長髪の男が怒号を上げる。

その中をリンドとユアンは駆けた。立ち尽くしたまま動けずにいるトーノとトトラの腕を掴むと、後ろを振り返る事無く今しがた降りてきたばかりの階段を目指す。

背中に、光の剣を携えて眠りから目を覚ました男の断末魔の叫び声が聞こえた。それでも誰一人として後ろを振り返る者はいない。ただ、青冷めた顔のまま呼吸すら忘れて、ひたすらに駆ける。しかし、階段を目前まで来て、四人は誰一人として一段たりとも階段を駆け上がる事は出来なかった。

離れた空に声が響く。

「奪い去れ、強欲 マモン」

瞬間、階段を鬱蒼とした木々の枝々が覆い尽くした。

階段の脇に生えている木々は、無理やりに枝を伸ばしたが為に生命力を吸い取られた様に、一瞬にして干乾びている。

枯れた枝とはいえ縦横無尽に張り巡らされては、進路は完全に断たれていた。

「……あんた、一体何者だよ……？」

振り返り声を絞り出したユアンに、長髪の男は不敵な笑みを覗かせる。

「名前なんてどーでも良いさ。天使でも、テロリストでも何と呼んでくれても構わねーよ。……んー、でも俺が一番気に入ってるのは

『抗う者共』かなあ」

笑う男の背中から四本の角が突き出していた。

四本の角は硬そうな形状とは裏腹に触手の様にグネグネと動いていた。水銀色の角の中で唯一、焦げ茶色をした角を指差すと男は口を開く。

「人間諦めが肝心だからよ、説明させてもらうわ。俺のこの『手』で奪ったモンは形も力も俺の支配下に置かれる。それが俺の能力だ。『手』の一本でこの周囲一帯の植物を支配してる。全ての出口は完全に封鎖させてもらったからよ。何処に逃げててもこの公園から出る事は出来ねーよ」

男の姿と話に恐怖はあった。しかし、今さら非現実的なものを見せられてもそれ程の驚きではなかったのが、せめてもの救いだった。努めて冷静な声色を繕いつつ、ユアンが尋ねる。

「あんたの欲しがってる物を渡せば命は助けてもらえるのか？」

ゆっくりとユアン、リンド、トーノ、トトラの顔を見渡した後で、男が答えた。

「本意じゃねーんだけどよ……全員は無理だな」

それを聞いた後で、ユアンはちらりと隣を見た。リンドの拳が固く握られているのを確認する。

(……そうだな。こう言う時、真っ先に行動する真っすぐなヤツなんだよね、リンドってヤツは。それで何度か俺も助けられてるしね)

ユアンは一人声を上げて笑った。

「カカカツ、ヒメチューの『魔王』(キョウオウ)と『悪来』(アクライ)そろつての久々のケンカだな」

隣を任せる相棒の顔を見て、リンドが呆れた様に小さく溜め息を吐く。

「リンドお、俺はまだ死にたくないからな」

ユアンがセリフとは裏腹に弾んだ声色でそう発した瞬間、二人は駆け出した。

道端に落ちていた一見して固さも感じられない枯れた木片をリンドが拾う。それを振り上げた瞬間、リンドの後方からユアンが石礫を投げつけた。

男の焦げ茶色の『手』がそれを弾いた瞬間、リンドは木片を振り下ろす。男の持つサバイバルナイフが木片をあっけない程に粉々にした瞬間、間発入れずに突き出された男の右足がリンドの下腹にめり込む。

リンドが地面にうづくまると同時に、男の死角に回り込んだユアンが渾身の左ハイキックを顔面目掛けて放った。しかし、男の顔面まで数cmと迫った所でユアンは後方に吹き飛ばされる。

焦げ茶色の『手』がユアンの身体を横なぎに弾いていた。くの字に折れ曲がったまま吹き飛ばされる一瞬、ユアンは男の肩に止まる銀色狐の瞳の奥に闇を覗いた気がした。

連続しての攻撃に終止符が打たれたと思われたその刹那、うづくまるリンドの前にあの細い筒がしまわれた竹刀入れ用の細長いバツクが転がる。

リンドが視線を上げた時、トーノが竹刀を打ち下ろした。

しかし、男は難なく左手でそれを掴むと、右手に携えたサバイバルナイフをトーノの腹部めがけて突き伸ばした。

5

声も上げる事も出来ずに瞳を見開いたリンドの眼前で、スローモーションがかかって世界は揺れて、そして完全に静止した。

男の突き立てたナイフがトーノの下腹部まで数cmと入った所で止まっているのを確認するとリンドは小さく深く呼吸をする。そして、今現在自らが確認している事態が、いわゆる「走馬灯」の類ではない事を理解した。

「……なんだ、これは？ ……なにが起こってるんだ！？」
見開いた瞳を二度しばいた時、世界は白と黒で表現されただけの物へと変化していた。
生ある物、全てが死滅してしまったかの様な静寂と、自然ですらその存在を忘れてしまったかの様な無機質なモノクロの写真風景。
完全に静止する世界の中で、現状を理解していたのはただの『二人』だけだった。

今しがたリンドの前に転がった竹刀入れのバックに、トーノが隠していたあの筒がふわりと浮かぶと、幾重にも巻かれた白い布が一瞬にして砕け、ダイヤモンドダストの様にキラキラと辺りを破片が舞う。その中心で反射する様にして、青白い光を纏いながら殊更に輝いて見せたもの、それは一振りの剣だった。

小刀程度のサイズに不相応な程に装飾の施された両刃の剣。

宙に浮かんだままの剣の光輝く刀心に目を奪われたまま、微動だに出来ないリンドの頭の中で突然声が響いた。

「力を欲するか、リンド」

何となく理解はしていたが、それでもリンドは辺りを見回す。

その瞬間に再び声が響く。

「無駄な事をしていない暇はないぞ。今は我が力で時を凍らせているが、それもあと幾許も持つまい」

リンドは真摯な表状で剣を見つめた。そして、剣へと話し掛ける。「この状況を何とかしてくれるってのか、あんたが？」

小さな形状にも荘厳なる雄姿を醸し出すその剣はリンドへと告げた。その声色はリンドの芯を揺らす様に低く、そして重く響く。

「状況を打破出来るかどうかはお申しだいた。だが、それでもお主が戦うと言うのなら我はそれを手伝おう」

一瞬の迷いも無くリンドは覚悟を決めた。

真つすぐな瞳のまま小さく頷く。

「力になってくれ……ところで、あんた名前は？」

剣は剣のままだった。しかし、リンドはそれが小さく笑った様な気がした。

「我は剣帝 ネイル・フリー・トゥーン。今よりお主と共に戦うものだ」

6

剣を掴もうとリンドが右手を真つすぐ伸ばすと、自らネイル・フリー・トゥーンと名乗ったそれは逃げる様にするりと宙を移動した。

「お主の覚悟はしかと理解した。しかし、だからと言って戦えるという訳ではない。我を手にした時、契約は終了し、我が力はお主に委譲される。だが、その瞬間に我が凍らせた時も解除される。それでは何の意味もあるまい？」

リンドは慌てて手を引つ込めた。ここで力と得られたからといってトーノが男に殺されてしまつては、リンドの覚悟など何の意味もなくなつてしまう。

「じゃあ、どうすれば……」

リンドの質問より早くネイル・フリー・トゥーンは話を続けた。

「肝心なのはお主がどこまで想像出来るかだ。お主は空を飛べるか？ それは無理であろう。…なぜか？ 羽根がないから？ 重力のせい？……まず、飛べるという事をお主自身がイメージできぬからに他ならぬ」

突然に精神論の如し持論を語り出した剣にリンドは混乱しかけたが、そんな事はお構いなしに話は続く。

「我が眷属は『水』そして、それから派生するもの。時の概念を液

体に置換し、凍らせるという想像力をお主が持ちえぬ限り、凍らせた時の解除は抗えぬ。まずお主の中の『水』のイメージを敵と戦えるものへと固めるのだ。」

まだ頭の中では多少の混乱はあった。だが、リンドの頭の中で直接響く声は映像の様な鮮明さを伴って脳内の回路を巡った。

そして、何となくリンドはネイル・フリー・トゥーンの言いたい事を理解した。

想像力の殻を打ち破れ。

つまりはそういう事だろう。

想像を現実に変える力が、ネイル・フリー・トゥーンのものであり、その一つの究極形が「時を凍らせる」という事なのだ。

飲み込みの早い弟子でも見るが如く、ネイル・フリー・トゥーンは、低く落ちついた声を掛ける。

「人を殺す為に剣が作られたのであれば、生物とは違い剣の生涯は死 始 から始まり、老 口ウ 青 セイ 少 ショウ を得て、創 想 ソウ へと至る。それこそが剣の極意。そこに至れるかどうかはお次第だぞ」

ネイル・フリー・トゥーンは、そこまで話すと小刻みに震え出す。

「さて、時間が来たようだ。我を使いこなして見せよ。期待しているぞ、リンド」

回転を始めると、ネイル・フリー・トゥーンは放物線を描きながら宙を舞った。

リンドは大声を上げながら駆け出す。

その大声に答える様にリンドの頭の中で二度声が響く。

「……我は時を凍らせているだけ、時が我に干渉出来ぬ代わりに我が時に守られし者に干渉するのも物理的に無理だな」

「……ふむ、それは出来ぬ話ではないが、時の解除と共に敵を一瞬

で滅するだけの脅力じゆうりきを持ちえていなければ、ナイフの慣性力を止められる訳でないから、結局あの女は死ぬ事であるうな。リンド、今のお主にそれを試す余裕があるか？」

二度目のネイル・フリー・トゥーンの声に対してリンドが答える。

「ないよ」

トーノの下腹部へナイフを突き立てようとする男の頭の上を通り過ぎる様にゆつくりと落下を始めたネイル・フリー・トゥーンの柄を握るとリンドはそのまま真下に振り下ろした。

7

突き立てたはずのナイフが大きく下に弾かれると、啞然あぜんとした表情を浮かべる男の下腹部にリンドはその長い右足を突き伸ばす。

凍りつくトーノに怪我のない事を確認した後で、その顔に向けてリンドは小さく頷いてみせた。

「ネイル・フリー・トゥーンの封印が解けやがった。ギオン、ハルニレだ。さつさとハルニレするぞ」

地面を擦る様にして数m飛ばされた後で、態勢を立て直した男の左の肩の上で銀色狐がかなきり声で喚へんいていた。

それを聞きながら辟易へんえきするようにネイル・フリー・トゥーンが呟く。「マモンめ相変わらず騒がしいヤツよ」

男は頭をガリガリと掻きながら、右手に持つサバイバルナイフを握り直す。リンドへと不敵な笑みを向けると、物怖じせずリンドもまた男の顔の顔を真つすぐに見つめた。

「ハルニレは無しだぜ、マモン。俺は奪う側に回ったんだ。たとえお前にだろうと俺は奪われるつもりはねーよ」

銀色狐を見るでもなく男が呟くと、やれやれとばかりに銀色狐は首をつな垂れる。対峙した者達の中で唯一そっぽを向くその姿は、リンドの、というより、ネイル・フリー・トゥーンの視界から逃れる

ようでもあった。

「さあ、行こうぞ、リンド。お主の想像力を見せてみよ」

唸る様なネイル・フリー・トゥーンの声が頭に響いた瞬間、リンドは駆け出していた。その背中にトーノのはからずも荒くなりつつある呼吸と心配する視線をリンドは感じ取っていた。感じ取っていればこそ後ろを振り返らず、一步、一步力強く地を蹴った。

(……俺が皆を守る……！)

揺るぎない信念が次第に力となって満ちていくのをリンドは感じていた。

心配そうにリンドを見守るトーノも、その少し後ろでガタガタと震えながら立ち尽くすトトラも、吹き飛ばされたユアンも守るのは自分しかない。

「うおおおおおー！！」

声を上げながら男の元へと一気に駆け寄る。笑みを繕ったままの男が振るうナイフと、リンドの持つネイル・フリー・トゥーンが激しく三度交錯すると金属同士がぶつかる特有の衝撃音が辺りに響いた。男は依然笑みを繕ったままだったが、リンドが四度目の刃を振った瞬間、顔から笑みが消え、男は初めて後退した。

刹那。

男の足元から一瞬にして伸びた針葉樹が男の影を覆う。

しかし、それを物ともせずリンドの一閃がそれを断ち切った。

ネイル・フリー・トゥーンより発する青白い光が通り過ぎると針葉樹の葉が舞い、僅かの間もなく男の胸元より血が吹き出す。

ネイル・フリー・トゥーンは「一步目」を踏み出した戦友へと静かに、だが暖かさが伴う声色で告げた。

「『始』水を得たか。儂くも鋭き氷の刃。それがお主の水のイメージなのだ。この始まりの刻に我がその名を授けよう。『始水、ウ

スラヒ』と」

小刀程の肩身は青白く薄い光を纏っていた。

8

胸元から血を滴らせながら男はヨロヨロと後退したが、踏み止まるとゆっくり頭を上げた。

「ハルニレだ！ ハルニレだ！」と喚き散らす銀色狐を無視したままで、リンドに向けられた男の顔は面白いとでも言う様な不敵な面構えのまま、瞳はギラギラと輝いている。

撒き散らした血飛沫ちしぶきの割には男の傷は大して深くないという事をリンドは理解した。ぼんやりと刃を覆う青白い光はリンドのイメージしたとおりの鋭さを発揮してはくれたが、それが相手へと届かねば何の意味も無かった。

無論、リンドとて人を傷付けるのは本意ではない。しかし、相手が戦意を失わない以上、戦いをやめる訳にはいかなかった。

仲間を守る為なら戦うと決意したのだから……。

だが、剣術なぞというものには、とんと縁の無いリンドである。せめて手にした物がちゃんとした剣なれば、まだ少しは有利だったかもしれない。しかし、それは小刀程度の物でしかないのだ。

ネイル・フリー・トウーンはリンドの思考を読み取ると呆れた様に呟いた。

「今は、我自身の力で顕現けんげんを成しているのだ。時を凍らすという我の想 ソウ も使った以上、サイズが縮小するのも仕方あるまい？ だから、先から言っておるのだ。イメージせよ、と。剣の長さも大きさもお主のイメージ次第ぞ」

それを聞いて、リンドは必死で頭の中で思い描いたが、小刀は依然小刀のままだった。

氷柱が水分を吸収して伸びるイメージだ、とネイル・フリー・トゥーンがアドバイスするとリンドは思い付いたように上着のポケットに無造作にしまわれていたペットボトルを取り出す。飲みかけのペットボトルのキャップを外すとおもむろにお茶をネイル・フリー・トゥーンへと浴びせた。

「神具たる我に何という事を」と不満気なネイル・フリー・トゥーンに「玉露入りだぞ？ ガマンしてくれよ」そう言ってリンドは瞳を閉じる。

瞳を開き、剣がまさに剣と呼べる長さになっているのを確認した後で、今度はリンドが男の顔に向けて不敵な笑みを送った。

9

本来の剣たる長さを得た剣帝ネイル・フリー・トゥーンの姿を見て銀色狐は尚更喚き始めたが、男は迷う事なくリンド目掛けて駆け出した。

ネイル・フリー・トゥーンを握り直すと応じるようにリンドも駆け出す。

地面から突然に湧き出では襲い来る、栄養もいきわたらず枯れかけた針葉樹を三本切り伏せた時、男はリンドの眼前へと迫っていた。リンドへと振るわれたサバイバルナイフの刃を、上方へと切り上げた「ウスラヒ」の青き光が真つ二つに断ち切る。

相手の武器を破壊したという事に、ほんの一瞬、リンドの緊張が解けるのを男は見逃さなかった。

「畏だ！！」

ネイル・フリー・トゥーンが叫んだ時には既に手遅れだった。

男の背中から生えた「手」が「ウスラヒ」の青白い光を掴む。

「俺の能力を忘れちゃったか？ ……そして、甘い！」

掴まれた手を振りほどくようにしてリンドが後方へと飛んだ瞬間、

入れ替わるようにして奇襲気味に竹刀を突き立てたトーノだったが、男が叫んだ瞬間に湧き出した細長い無数の針葉樹が蔦つたの様に肢体に絡み付くとその場に磔はりつけにされた。

「奪われた……か」

ネイル・フリー・トゥーンの噛み潰す様な声を聞きながら、立ち上がったリンドが見上げると先程の白い「手」は青白い光を発する氷柱が何本も突き出た様な形状へと姿を変えていた。

「氷の力を奪われてしまった以上、ウスラヒでは奴を傷付ける事は不可能だ」

刀から発する青白い光は失われてはいなかったが、淡々（たんたん）と告げるネイル・フリー・トゥーンの声聞いてリンドは呆然と立ち尽くす。

まさに今、唯一の武器を失ったのだ。

しかし、そんなリンドを見ても、男は満足する様子もないように瞳をギラギラと輝かせていた。

「『氷』の理ことわりは頂いたがよお、『水』も『剣』の理も頂いてくぜえ」
言うのが早いか、男は思考の止まったリンドへと襲い掛かる。

男と異形の腕が迫りつつある中であって、リンドは声を上げる事も出来ずに、ただ立ち尽くす事しか出来ない。しかし、水銀色の三本目の腕が伸びてきたその瞬間、予想外の出来事が起こった。それは、襲い来る男はもちろん、そして、リンドにすら全くの予想外の出来事だった。

リンドを助けようとしたのか、ただ逃げ出そうとしたのか、それは分からない。だが、そこにトトラがいた。

トトラは言葉にならない喚き声を上げながら水銀色の「手」へと突っ込んで行く。

リンドの悲鳴にも似た絶叫が響きわたった。

「トトラ！ トトラ！ トトラ！！」

なりふり構わず立ち向かったリンドの身体は、焦げ茶色の「手」に簡単に振り払われた。

ネイル・フリー・トゥーンの「剣の理」を奪おうとした「手」はトトラと同化しベージュ色の大きな肉の塊へと変わっていた。

地面にうつ伏せたままでリンドが顔だけ見上げた時、肉の塊に貼り付いた小さな唇が微かに震えるのが映る。そして、その声を確かにリンドは聞いた。

「……たす……け……リン……ド……」

リンドは青冷めた顔のまま、口を開いたが、言葉は何も発せられなかった。ただ、止め処なく涙が両の瞼から溢れ出ていく。

「くそつ！ 何だつてんだ。この腕だけ切り離すぞ、マモン！！」

男が怒鳴り声を上げたが、銀色狐は興味もないという様にぼんやりと空を眺めている。

「そいつは無理だな、ギオン。そのガキはアンノウンじゃない、れつきとしたアイ・デイだ。切り離すには能力の全解除が必要だよ」意味不明な会話を続ける男と銀色狐を斜めに捉えてゆっくりとリンドが立ち上がる。

「殺してやる」と何度も呟くリンドの頭の中に静かに声が響いた。「リンド……彼は助からぬ。こういう時こそ落ちつかねば……」

ネイル・フリー・トゥーンの声はほとんど理解出来なかった。ただ、トトラが「助からぬ」と言う声だけが何度もリンドの頭の中で反響した。

「こんなヤツがアイ・デイだと？ こんなヤツが、こんなヤツの為に」

「こうなっちまった以上、ハルニレするしかないぞ」

男と銀色狐の問答は全く咬み合わず、それゆえ答えに辿り付く事

もなかった。

そんな一人と一匹がようやくにして我に帰ったのは、リンドの怒号を聞いたからであった。

1
1

鬼のような形相で駆けて来るリンドを迎え討つ為に向きを変えようとした男は、自身から生え出た肉の塊に足をとられた。

完全に足を封じられて尚、そんな状態のままリンドを迎え討とうとするのは男の意地に他ならない。

銀色狐はそれを鼻で笑ったが、男は気にするでもなく、最後に残った水銀色の「手」ぐすねを引いて駆けて来るリンドを待ち構えた。

剣を大きく振り被ったまま駆けて来るリンド目掛けて最後の手を伸ばそうとした瞬間、男は背中に走った激痛に一瞬動きを止める。

先刻、林の茂みへと吹き飛ばしたメガネの男が、真つ二つに切断されたサバイバルナイフの先端を背中に突き刺していた。

その束の間、気を取られた事で、水銀色の「手」も青白い氷柱状の手も、鳶を何本も絡めた様なこげ茶色の手も初動が遅れた。

それらがリンドを襲う刹那、男の身体は左上段から斜めに切り付けられる。それでも男が動じなかったのは計算に裏打ちされた余裕があればこそであった。

「……氷の力は効かねーよ」。

踏み止まり、三本の手を再び突き伸ばす。だが、「手」はピクリとも動かなかった。

「な、に?!」

その瞬間、男の体から夥おびただしい程の血が吹き出した。口の中に広がる血の味を感じながら、男はそれを視界に認めた。

リンドが手にする ネイル・フー・トゥーンに青い光は灯っていなかった。

ただの「剣」で切り付けられたのだ、という事を理解した後で男

は笑った。そこには今まで浮かべていた嫌な笑みにはない満足感が表れている。

リンドには計算など何もなかった。「怒り」でネイル・フリー・トウーンに教わった剣の理、つまり「水」や「氷」の力を使うなどという事など頭になかっただけである。

男はそこまで理解していた。だからこそ、最後に笑った。

「感情さえ持つてればよ……んー、魂なんて どーでもいーって思わねえ？」

それが男の最後の言葉だった。

吹き出る血は、男の全身へと広がると赤い小さな羽虫の様に空へと舞って消えていく。その中で、銀色狐が小さく「くそう」と呟いた。

男の名残を覆うように広がる赤色と共に銀色狐も、かつてトトラと呼ばれた肉の塊も空へと消えていった。

第四章 風早 かぎる（かぎる）

第四章 風早 かぎる（かぎる）

1

真つ赤な羽虫が消えていった空をぼんやりとリンドとユアンは見つめていた。

全てが悪い夢だったかのように、消失した男に半ば巻き込まれて消えていったトトラの事を思うと「救えなかった」と言う憤りいきどおしかなかったが、そのトトラの遺品らしき物すらが何一つも残っていない事に気付くと、二人は胸が張り裂けそうになった。

無言のままリンドがトーノ身に絡み付くつた鳶をネイル・フリー・トゥーンの刃で裂くと、主の消失に伴いその生命力を使い果たしたかの様に、簡単に鳶は地面に崩れ落ちる。

解放されたトーノもまた無言だったが、リンドの顔を見つめる瞳には慈愛が満ちていた。

「リンドのせいじゃないよ」

その瞳は確かにそう言っていたが、リンドはその瞳から逃げる様に顔を俯うつむける。

リンドはただ自らを責めていた。

あの時、ああしておけば……。

あそこで、ああしていれば……。

一人後悔に思いを巡らせ、その後で、それが今更何にもならない事に気づくと、思いを巡らせた愚かな自らを呪いたくなる。

その思考を断ち切ったのは頭の中でネイル・フリー・トゥーンの声

が響いたからだった。

「リンド……これは戦争なのだ。救える命もあれば救えぬ命もある。救えなかった命を心に刻み、自らを責めるのは悪い事ではない。しかし、なればこそ強くなれ、リンド。誰かを救いたいと願うならば……強くなれ」

トーノから顔を背け、ユアンの視線を背中に感じながら、俯くリンドは泣いていた。声にもならない呻き声を上げ、両の頬を涙で濡らしながら、しかし、力強くリンドは頷く。

リンドは心に固く誓った。

この悲劇を忘れないように。

そして、こんな悲劇を二度と起さないように、と。

2

リンドが落ちつくのを待っていたかのように、ネイル・フリー・トゥーンは厳格だが温かみのある言葉で告げた。

「さて、我は帰ることにしよう。世界に姿を留め置くのは無駄が多いゆえな。だが、お主がイメージすれば我はいつでもお主の元へと現れよう。いいか、リンド。それは無から有を生み出すという事に近い。我を呼びたいと願うならば、水が湧き出るイメージ。それを忘れるな……」

微かに青白い光が揺らめいたと思った瞬間、リンドの右手に携えられたネイル・フリー・トゥーンが霧のように消えていく。

いつの間にか、その存在を視界に認めてはいても何も聞けずいたユアンとトーノは、その荘厳な作りの青い剣が消えて行くのを見て、そろって「あっ」と声を上げる。

「姿は見えずとも、いつも心は繋がっているぞ」

霧のように消えた後で、頭に響いていたネイル・フリー・トゥーン

の声に応えるように小さく頷いた後で、ユアンとトーノの方へとリンドは向き直った。

「大丈夫。いつでも助けに来てくれるってさ」

そう言った後で、力ないながらも微笑を灯したリンドの顔を見て、安堵の表情を浮かべたユアンとトーノも頷く。

三人は、三人だけとなつてしまった公園を歩き始める。

襲い掛かって来た男が現れた時、ようやくにして目覚めた男の姿も今はなく、それに併せてトーノが記憶を取り戻すヒントも無くなつてしまった。

それでも今は生きるという事が何よりの先決だ。三人は一路、如月高校を目指す。

如月高校への近道たる公園の出口を覆っていた針葉樹の群れはそのほとんどが枯れ落ち、今やバリケードとしての意味を成していなかった。

木造の長い階段を昇り終えた時、傍らで木々が擦れる音がする。見ると枯れかけの針葉樹が絡みつき、身動き出来ずにいる少女がそこにいた。

もはやネイル・フリー・トゥーンの刃に頼る事無く、簡単に抜け落ちた枯れ木の中から出て来た少女は「お母さんとはくれた」と言つて、思い出したように泣き始める。

安心させるように泣き止むまで待ち、トーノが手を握って歩き出した少女の胸元の名札を見る限り近隣の小学校の2年生らしい。

「この命は必ず守ってやらないとな」

歩きながらリンドの顔を見るでもなく呟いたユアンの横顔を覗いた後で、リンドが「ああ」と応えた。

公園を抜けて如月高校へと向かう道中、正体の知れぬ連中がバクと呼ぶ、ピンク色の肉の塊の姿は見えない。

住宅街のしんとした情景は一時の安堵感と共に、ここいらの人間は皆食われてしまったのではないか、という一抹の恐怖を連想させた。

間もなく如月高校の正門が見えてくるといふ十字路まで来たところで、リンドは立ち止まった。

予想はしていたが、という少し曇りがちな表状でユアンが尋ねる。「……なあ、リンド。とりあえずゲッコーに寄ってからでも良いだろ？ ……ひよつとしたら、ゆかりちゃんもゲッコーに避難してつかもしれないしさ」

ユアンの気遣^{きづか}うような申し出に、しかし、リンドは小さく首を振った。

「いや、ここまで来たら、俺は清南に行くよ。ゆかりならまず、自分の学校に避難すると思うしさ」

リンドの顔を真つすぐに見つめたトーノが、自分も一緒に行くと決心を伝えるように小さく頷く。

もちろんユアンも一緒に行くつもりではあった。だが、トーノの影で小さく震える少女をまず安全な所に連れて行く事、それが自分の仕事であると理解している以上、一緒に行けないのは明白だった。ユアンはそれ以上何も言わず、リンドの顔を見た。

リンドが気付いているかどうかは別として、ユアンは今、リンドをトトラの兄であるヒリユー先輩に会わせたくはなかった。

(ゲッコーでヒリユー先輩と鉢合わせでもしようものなら、一人責任を背負っているリンドの事だ。何を言い出すか分かったものじゃない……それに関しては少し時間を置いた方が得策かもしれないな)

ユアンは、そこまで考えた上で、何も言わずこの十字路で黙って見送る事にした。

「じゃあ、ここでお別れだな」

それだけ告げるとユアンはトーノの影に隠れる少女の右手をしっかりと握る。

「ああ、またな」

リンドは友人への別れを告げると、決して後ろを振り返る事もなく十字路の左の道へと足を踏み出す。小さく微笑みながら少女に手を振った後、トーノもその後を追って歩き始めた。

尚更に強く少女の手を握ると、ユアンもまたリンド達を見送る事もなく如月高校へと向けて歩き始めた。

道中、ユアンはリンドとの思い出に、思いを巡らせる。

下品すぎる程の金髪に染めた頭を性格以上に尖らせていたユアンのヤンキー時代全盛の中学二年。転校先の伏姫中^{ヒメチユウ}で、ユアンが人生初の敗北を喫した相手。別に不良でも何でもないので、背が高く目立ったという理由だけで絡んだ相手がリンドだった。

それから何かにつけてリンドを巻き込んだ喧嘩の日々の、コンビを組んでは連戦連勝のその毎日で、ユアンが贈ったとおきのプレゼント。「悪来」と言う異名にも、心の底から迷惑してたっけな。

束の間のふわりとした空気と共にユアンが空笑を浮かべる。

まさにその瞬間、リンドがユアンの右脇を駆け抜けていった。

「……は？」

ユアンが間の抜けた声を発する間もなく、ユアンが手を繋ぐ少女は駆けて来たトーノに連れ去られていった。

間の抜けた様なユアンにリンドが大声を張り上げた。

「ユアン!!! 逃げる!!!」

ユアンがちらりと後ろを覗くと、今まで何処どこに身を潜めていたのか、ピンク色の肉の塊の集団が迫って来ていた。

4

「リンド！ お前、なんつー面倒事を連れてくんだよ！！」

一目散に駆け出したユアンが大声を上げる。

「それは、お互い様だろ！」

背中越しに聞こえたリンドの返事を聞いて、先程まで想いを巡らせた数々のエピソードの中に思い当たる節を幾つも見つけては、ユアンは黙りこくった。

でたらめな四足フォームにも関わらず、バクの集団の足は速い。

そのうちの一匹がユアンのすぐ背中まで来た時、不意に声が響いた。

「もつと急いで！！」

凜りんと響いた声の主は探すでもなく、如月高校の正門の上に姿を現す。同時に正門が開いていくのが見えた。

ユアンが必死でスピードを上げた瞬間、正門の上に立つショートヘアの女学生の手元が光った。

ユアンのすぐ後ろでパツクリと口を広げたバクの脳天に矢が突き刺さると、その衝撃にバクは後方に二回転する。しかし、すぐに立ち上がると突き刺さった矢をあっさり抜いては口の中に放り入れた。美味いとも不味いとも感情らしさも無いような表状で再び駆け出したそれを、追い抜くようにして二匹目、三匹目のバクが駆けて来るのを背後に感じながら、トーノと少女にリンド。そしてユアンが正門の中へと飛び込む。

四人が無事に入った事を確認する余裕もないように、一際大きな体躯をした男子学生と涼しげな顔立ちにストレートヘアの男子学生が門を閉める。

固い門扉もんびにバクが身体をぶつける音がこだました。

身体をぶつけては転がるバクを嘲笑うかの様に中指を立てた後で、大きな体躯の持ち主が振り向いた。逆立てた緩めのリーゼントを少しだけ揺らしながら、彼は豪放に笑った。

「お前らも無事だったか」

精悍せいかんな顔には心からの笑みが浮かんでいる。

ユアンが油断していたのは命からがら逃げおおせたという事もあったが、満面の笑みを浮かべた彼の言葉に被せる様にして、先程から一言も声を発しなかった少女が突然声を上げたからだった。

「ママー!!!」

見ると校庭を駆けて来るまだ若い女性がそこにいた。

その女性と少女が固く抱き合う様を微笑ましく眺めていたユアンの耳に、人の殴られる鈍い音が聞こえる。

(……しまった!!)

ユアンの振り返った先で、先程まで心からの笑みを浮かべていたはずの学生の表情は、一転して憤怒ふんぬに包まれていた。

「ああっ! 今なんつった、リンドお!!!」

殴られて地面に倒れたリンドが、上半身を起こす。切れた口の端から血の滴したたる唇を動かし、声を発そうとした瞬間、ユアンがその前に立った。

同時に涼しげな顔立ちをした学生は冷静な表情を崩さぬままで、激昂する学生を羽交い絞めにする。

「違うんです、ヒリユーさん。リンドのせいじゃないんです! トトラが殺されたのは、リンドのせいじゃないんです!」

ユアンの悲痛な叫び声が響く中で、半ばバリケードと化した校内に重ねられた机から飛び降りたショートヘアの女学生が呟く。

「……トトラが……死んだ……」

彼女が大きく見開いた瞳を見た時、ヒリユーは改めて愛する弟の

死を現実として思い知らされたように顔を青ざめさせた。

羽交い絞めにされた腕を振り解く力も失せ、少しだけ声のトーンは低くなりながらも激情に任せて言葉を吐き出す。

「あの、バケモノ共に……やられちまったってのかよ!!」

ユアンがヒリユーの視線を受け止める。

「……いえ、姿は人間でした。でも化け物には違いなかったです。トトラは、そいつから生えてた……肉の一部に、されて、しまいました」

正直な話「あれ」をどう伝えれば良いのかユアンには分からなかった。

ユアンは自分の目で見た事をありのままに伝えるしか出来なかったが、今はもう、現実や常識というものが壊れてしまっている。弟の死体すら取り返せないという現実を叩きつけられた以上、ヒリユーもそれ以上は詳しく尋ねなかった。

「そんで、そいつは、寅とらを殺したヤローは何処にいる？」

ユアンが答えるより先にリンドが力なく呟く。

「俺が……殺しました……」

暗く沈み込むリンドの顔を見て、ヒリユーはそれ以上何も言わなかった。ただ、怒りのやり場を見出せないように校内を覆うコンクリートを激しく殴り付ける。

ヒリユーの固く大きな拳から血が滲んだ。

6

生気を失ったかのように足どりに力もなくヒリユーが去っていった後で、涼しげな顔立ちにサラサラのストレートヘアの学生がリンドに声を掛けた。

「リンド……あんまり自分を責めるなよ。事態が事態なんだ。お前

達が助かった事が、素直に俺は嬉しいよ」

涼しげな顔立ちに微笑が灯るのをリンドは見上げていた。

「ハッチの言う通りだぜ、リンド。俺らが生きてるって事自体、まるで奇跡だよ」

ユアンが溜め息交じりに言つのを見て、ハッチこと蜂谷（ハチ） 白鐘（しろうかね）は頷いて見せた。

リンドやユアンと同級のハッチは、リンドと同じ如月高校一年普通科の学級委員長である。

と言つても、ハッチが学級委員長に始めてなつたのは中学一年の事で、それから四年続けて、中学から高校へまたいでも学級委員長に任命されるのは彼の人柄、つまりは品行方正、文部両道を備えた彼の人格たればこそであろう。

ユアンがそんな彼に一目置くことになつたのは、中二の冬のある事件を通してであつた。

その日、ユアン達の通う伏姫中（ヒメチユウ）の長年のライバルたる岸波中（キシチユウ）からの決闘の申し出を謹（つつし）んで受けた後で、一人盛り上がるユアンに思いの外、リンドは冷たかつた。

「バツカ、そんなの畏（おそ）に決まってるんだろ。何人待つてるかも分かんねーのに、のこのこ連中の待つてる所に行くわきゃないだろ」

岸波中の連中に呼び出された河川敷周辺の、ユアン直筆による手書きの地図を広げての作戦会議に加わる素振りも見せないリンドに対してユアンが「人でなし」だの「薄情者」だのと声を荒げている時、ひよっこりとその輪に加わったのが、別段、特に仲が良いという訳でもないハッチだつた。

「ふーん ……なるほど、ここに十人いるとしたら……まず、ここに……」

……。

ユアン手書きの下手くそな地図の上で、シミュレーションを始めたハッチの一声一声を聞き終えた後で、瞳を輝かせると既に勝った気のユアンは教室を飛び出して行ってしまった。

結局、予想よりも待ち構える連中は多く十二人もいたが、何のかんで駆けつけて来たリンドと二人で蹴散らしてやった。

もちろんそれとて、ハッチ直伝のヒット&アウエーと地の理を活かした作戦があればこそその勝利である。

それ以降、ユアンはハッチの事を「軍師」と密かに呼んでいる。

困った時に相談すると以外に乗り気で策を授けてくれる（その度にリンドは余計な事を教えるなよ、と嘆いていたが……）軍師と、何のかんで助けに来てくれる戦士のおかげで、伏姫中の狂れた王様ことユアンは、伏姫中の暗黒史に栄光あるその名を刻んだ。

そして同時に、その全てがリンドにとっては人生の汚点として刻まれてしまったのだった。

7

ユアンとハッチがここにいる

何の事はないその光景に、リンドは今まで当たり前のようだった「生きる」という事をぼんやりと考えていた。そして、ぼんやりとはしながらも、トトラの為にも必死で生きようと思った。

だから、俺が今度は誰かを守れるよう、間違いない道を進めるよう見守ってくれ。

少しだけ、あの屈託の無い丸顔を思い浮かべる。

リンドが心の整理をつけるのを待っていたかのように、先程、校内の上から響いた凜とした声の持ち主がハッチの励ましに続けるように声を発した。

「そうだよ。だからリンドはしっかりしなきゃダメだよ。ユアンは

リンドの足を引つ張る事しか出来ないんだから」

あまりに悪意のないその言葉にユアンが声を荒げる。

「かーぎーるう!!! 誰が足引つ張ってるだど!?!」

きよとんとして猫の様な大きな瞳をしばたかせた後で風早かぎるは両手を腰に当てると、得意気な表状を繕つくろったままで、自分より少しだけ背の高いユアンの顔を見上げた。

「あれえ、さつきあたしに助けられたのは誰でしたっけ? あたしが助けてなかったら、ユアン今頃、化け物の腹の中よ。ペロリってさ」

誇らしげに話すかぎるに、待つてましたとばかりに口を尖らせ舌戦せんを開始する。

ユアンがかぎるに素直に「ありがとう」と言えないのは、いつもの事だが、今回もあくまで屁理屈で押し通す気らしい。

いつもの何気ないやりとりにも、少しだけ張り詰めていたリンドの力が抜けた。

「ところで、かぎる……」

リンドが声を掛けると、目を吊り上げていたかぎるの表状が一転して曇る。リンドの質問を即座に理解した様子だった。

「ゆかり…でしょ。あたしが見て回った限り、ゆかりは如月こしげには居ないみたい」

リンドは「そうか」とだけ答える。

元々リンドもそんな気はしていたから気落ちはしたが、どん底と云う程ではない。

「今度はあたしの質問」

リンドの気持ちも少しでも晴らすうとしているのか、かぎるは努めて明るい声で話す。そして、再び大きな瞳で興味深そうに傍らの少女を見つめた。

「ああ、そうだ、紹介がまだだったな」

張り切って声を上げたのはなぜかユアンだった。

「聞いて驚け! 道すがら手に手を取り上っては、互いに励まし合

いながら逃げてきたこの人は水鏡 遠野さん。制服を見てもらえば分かる通り、鳳華おづかの学生さんだ!」

「黙れ、制服フェチ」ユアンを一瞥した後で、かぎるは満面の笑顔で右手を差し出す。

「あたし早風 かぎる。かぎるって呼んで、ヨロシクね、トーノちゃん」

トーノも微笑み、握手を交わした。

8

初めて会った時から分かっていた事ではあるが、風早かぎるには人見知りと言う概念は存在しない。ついでに言うなら遠慮もない。

トーノと二人、ガールズトークにでも突入しそうな勢いのかぎるにユアンが声をかけた。

「でえ、かぎる。ここは今どうなってんだ? それに、まあ、一応聞いといてやるけど、あんなに自慢してたあのジャージ、化け物の騒ぎのどさくさでどっかやっちゃまったのか?」

かぎるは彼女のトレードマークとも言うべき、いつも羽織っていたライムオレンジ色のジャージもなく、かぎるにしては珍しく、如月高校指定のピンク色のラインの入った黒のワンピースタイプの指定制服を着ていた。

「避難してきた人達は体育館に集まってるよ。最初慌ただしくなり始めたのは7時半より前だったと思う。それから生徒も近所の人も如月に駆け込んで来たんだ。あたしは訳も分かんなくてウロウロしてただけなんだけど、ハッチがテキパキと指示して守りを固めたり、逃げてくる人を助けたりしたの。ハッチ、凄すごかったんだよ」

かぎるにはハッチの顔に視線を送ったが、「全員は助けられなかった」と呟くハッチの顔には疲労と後悔の色が浮かぶだけだった。

「あたしのジャージは、消えちゃった……」と付け加えるように話したかぎるだったが、その後で困惑した表状を浮かべる。長い付

き合いから、続きがあるのだ、と理解したリンドとユアンは静かにかぎるの言葉を待つ。

「……蒼姉あおねえも一緒に消えちゃった」
かぎるの両の瞳に涙がにじむ。

佐々木ササキ 蒼アオは伏姫中時代からのリンド達の一つ先輩で、日に焼けたスラリとした身体にショートヘアが良く似合う美人だった。

特に中学時代は同じ陸上部に属していたかぎるにとっては本当の姉妹のような間柄である。姉御肌の彼女に、美作ゆかりも良くなっていた。

ユアンが「最初から話してくれ」と声をかけると、両のまぶたを擦った後でかぎるは小さく頷いた。

9

その日、風早かぎるは佐々木 蒼に呼び出されたのだという。

如月高校入学と共に高らかに文化系少女デビューを宣言したかぎるだったが、蒼は陸上部期待のホープとしてかぎるを執拗なまでに勧誘し続けていた。

内心では、天真爛漫てんしんらんまんさと足が速い事しか、かぎるには取り得が無いんだから陸上部に入れば良いのと思っていたが、リンドはそれを口にしなかった。

口にするのはユアンだけ、である。

かれこれ、そんな状態がしばらく続いていた折「昨日の夜、蒼姉から電話があつたんだ」とかぎるは続けた。

明朝、如月の校庭での100m一本勝負。

勝った人間の言う事を聞く事、との申し出をきっぱりと受け、巖

流島の決戦よろしく乗り込んでいったというかぎるを見て（やはり根っからの体育会系じゃないかお前は）と内心で思いつつ、リンドとユアンは、その日かぎるにしては珍しく早朝から登校した理由に納得した。

如月高校では学級委員長が生徒会の役員も兼ねる。この度、生徒会の会計に任命されたハッチが朝から仕事に追われるのはいつもの事として、普段のかぎるならリンド達とのんびり登校している筈だった。

「……それで、校庭に行つて、先に来て待つてた蒼姉に挨拶した所で、学校の外から悲鳴やら叫び声が聞こえ始めて、それからあつという間に駆けてきた人達でグラウンドが埋め尽くされたの。五分と経たないうちにハッチが来て指示を出してくれたのと、丁度そこにヒリユー先輩が駆けつけて怯えてた男連中をすっかりさせてくれたのは本当にラッキーだったと思う」

ヒリユー先輩がすっかりさせてくれた。……その荒療治の風景をユアンはまさにしっかりとイメージできた。

……しかし、早朝から駆け付けて来たのがまさかヒリユー先輩とは。

そんな疑問をかぎるはあっさりへんげいと払拭する。

「ヒリユー先輩、昨日は徹夜でバイトだったんだって。それで、バイト先から登校して学校で寝ようと思つてたみたい」

なる程と思う反面、そんなバイト先絶対年齢をごまかしてるな、とリンドもユアンも当たりをつける。

「ようやく騒ぎも落ち着く頃にはもう蒼姉の姿は見えなくなつてたの。学校中探したんだけど、何処にもいないの……」

蒼姉との対決を目前にして格好良く抜き捨てた（その後ですぐたみ直したらしいが）モデルのクロエちゃんが雑誌で着ていた（らしい）お気に入りのライムオレンジのジャージと共に、佐々木蒼は風早かぎるの前から消えてしまった。

言葉にしてしまうと、尚更にかぎるの表状には不安の色が灯つて

いく。

「でもな……」

そうユアンが口を開いたのは、周囲を沈黙が覆う間際の事だった。「……でもな、かぎる。こうして見るとゲツコーの制服もなかなか似合ってるぞ」

その場に居たリンド、トーノ、そしてハッチは唐突なユアンの一言に唾然あぜんとした表状になる。

その場違いな台詞は、聞く側によれば、全くもって無神経な台詞である。しかし、涙が零こぼれ落ちる直前にユアンから発せられた台詞に、かぎるは「ユアンの制服バカ」と言っつて無邪気に笑った。

間章 1 如月高校（まなびや）にて

間章 1 如月高校（まなびや）にて

1

リンドは自分の教室の自分の席に腰掛けた。

気を取り直したかぎりはまるで文化祭気分です、校内を案内してあげると言ってトーノを連れ出していった。

ハッチとは教室の前で別れ、ユアンはいつの間にか姿を消している。

リンドはぼんやりと何も書かれていない黒板を見つめた。いつもの何も変わらぬ日常が始まる筈だった教室には、リンドの他には誰も居ない。

静とした教室にふいにリンドのお腹の音が響いた。

（そう言えば朝から何も食べてなかったな……）

時刻は昼過ぎ、束の間の休息に脳内の一部はまだ緊張感を保っていたが、身体は実に正直だ。

何の事は無い反応に、リンドの口元が少しだけ緩む。

思い出した様に机の脇に掛けたショルダーバックのジッパーを開けていると、丁度そこにユアンがやってきた。

おもむろに服を脱ぎ始めたユアンは、汗だくになったシャツを着がえるのだという。

ベージュ色のカーディガンの後、脱いだシャツには所々に葉の柄が描かれている。

リンドがそれを「大麻だろ」と指摘すると、ユアンは「ユーカリだ」と言っただけで譲らなかった。

ユアンが購買から失敬してきたらしい白い開襟シャツに着がえ終

わる頃、校内を一回りしたかぎるとトーノがやってきた。

目ざといユアンが夏服の白い半袖のセーラー服姿のトーノに声をかける。

「そう言えばトーノちゃん。寒くない？ 俺のカーディガン貸したげよっか？」

「そんな汗臭くてセンスの悪いの、トーノちゃんは着ないって」
冬使用の黒いワンピースタイプの制服を着たかぎりの即答に、いつもの口ゲンカを始めた二人を見てリンドは溜め息をついたがその顔は穏やかだった。

リンドへと近づいてきたトーノが、リンドがシヨルダーバックから取り出した箱状の物を見て声をかける。

「お弁当？」

リンドは小さく頷き、箱を包む布の結びを解く。

アルミ製のフタを開いた弁当の中身は、激しい揺れに抗えなかったようにグチャグチャだった。

「何か食べる？」とリンドが尋ねると「校庭の炊き出しで豚汁を食べてきたから」とトーノが小さく首を振る。

口喧嘩の際中だというのに「俺も」「あたしも」とユアンとかぎるもトーノに倣った。

リンドは唐揚げを口に運ぶ。

グチャグチャになってはいてもそれはやはり母の味だった。込み上げてきた感情に寸での所でリンドは踏み止まる。こうやって一瞬の安寧の中にいれば、やはり父と母の安否がリンドとて気にはなかった。しかし、記憶の無いトーノは安否以前に父と母の顔すら分からないのだ。

リンドがゆっくりと顔を見上げるとトーノはユアンとかぎるのやりとりを頬を緩ませて見つめている。

「トーノ……やっぱり何か食べてみない？」

自然とリンドは言葉を発していた。

リンドの自然な言葉にトーノも自然と振り向く。

「やっぱり、分かった？」

照れた様な表状を浮かべる。

「実は卵焼き、おいしそうだなって見てたの」

リンドが差し出した弁当箱からトーノは卵焼きを取ると口に入れた。

「んーっ、おいしいーっ！ リンドのお母さんって料理上手なんだね」

実は卵焼きはオヤジが作ったんだよね、とはリンドも続けなかった。

ただ、そう言ってキラキラと眩しい笑顔を浮かべるトーノを戸惑いつつも見つめていた。

2

校庭には見張りを交代で行う生徒の他に、幼子をあやす若い母親の姿が見える。張り詰めた空気には誤魔化しようが無いが、そんな現実など知る由もないその小さな男の子は赤い頬を緩ませながら母親の腕の中で笑う。

空は悲しい程に青かった。

校庭脇の水道でリンドがペットボトルに水を注ぐ。傍らにはトーノとユアン、そしてかぎるが立っていた。

「危ないからかぎるはここに残れ」

どこからか持って来たモップを片手にユアンがそう諭したが、かぎるはあっさりと断った。

「なーに、言ってるの。そんなモップ持ってるユアンより、あたしのが役に立って」

かぎるの手には弓道部から拝借してきた弓が握られている。肩に

掛けた矢筒には矢が七本見て取れた。

それはもちろん先刻、ユアンの命を救ったものである。

かぎるが弓道部に所属していた経緯はない。それでも先刻の腕前を見る限り、それなりに物にしているらしい。

頼りなげなモップを手にするユアンも命を救ってもらったという手前、それ以上は何も反論出来なかったので、今回は恒例の痴話喧嘩ちわけは見ずに済んだ。

ユアンはただ、小声で「……文化系少女の夢は当分先になりそだね」と呟いただけである。

こうして新たな仲間を加える事となった一同だったが、どうやらそれは一人ではなかった。

「リンド、俺も行くぞ」

不意にかけられた声の方へリンドが振り返るとそこにはヒリユーが立っていた。

「さつきは悪かった……美作みまさかを助けに行くんだろ？ 人伝ひとついでに聞いた

話だが、清南高もこと同じ様にバリケードを築いてるらしい。と

は言え、安心は出来ないもんな」

少し照れくさそうに謝罪するヒリユーに戸惑いつつも、リンドは承諾出来なかった。

「俺達のこと心配してくれるのはありがたいですけど、ヒリユーさんが居なくなったらここは……」

ヒリユーがすかさず反論する。

「ゲッコーは蜂谷はちやが居れば大丈夫だ。それにな、リンド俺と一緒に行くって言うてるのは、何もお前らが心配ってだけじゃないんだ……」

ヒリユーはリンドの瞳を真つすぐ見据えた。

「虎を殺したヤロウはリンドが敵を討ってくれた。だけどな、そもそも虎が殺される様な世界にしたヤロウが残ってる。俺は何としてもそのヤロウをぶっ殺さなきゃなんねー。その為にはいつまでもゲ

ツコーに籠こもってる訳にはいかねーだろ？」

ヒリユートの瞳が厳しくなるのを見て、一瞬たじろいだリンドが「それでも残るべきだ」と口を開きかけた矢先、ユアンが肘でつつく。「こんなに頼もしい味方はないって、リンド」

そう耳元でそばだてた次の瞬間には、ユアンは両手を広げて、ヒリユートのパーティーへの加入を歓迎していた。

ユアンの手際の良さに呆れつつもリンドが知る限り、一番心強い味方を得たという事実には違いない。

少し複雑な表状を浮かべつつも「ヒリユートさん、宜しくお願ひします」そう言っつてリンドは右手を差し出す。

その手をヒリユートは固く握った。

3

校庭の門扉もんびが固く閉ざされていく。

門が閉じ切る瞬間のほんの小さな隙間の向こうで、ハッチが無事を祈る様に小さく頷くのが見えた。

恐る恐る如月高校の外に出た一同の見渡す限り、バクと呼ばれたピンク色の塊の姿は見えない。

如月高校を後にして数歩、先頭に行くヒリユートは不意に立ち止ると振り返る。そして、後に続く四人へと激を発した。

「いいか、こつから先は殺るか殺られるかの戦争だ。あの化け物だけじゃなく理性を失った連中が襲ってくるかも知れねえ。躊躇してたらこつちが殺られちまう。油断も情けも禁物だぞ！」

鬼軍曹ばりの厳しい言葉に身を凍強張らせつつも、その言葉には頼もしさが感じられる。

それは先陣に立つ男の勇敢ゆうかんさと優しさを知っていればこそであるう。

その風貌から常に粗野で無骨もののイメージが定着してはいても、

いつの時もリンドやかぎる、そしてここには居ない美作ゆかりにとつて、ヒリユーは子供の頃から良き兄貴分であった。

ヒリユーの激も終わり、後は誰かが出発の音頭おんていを取るばかりとなったが、しかし結局、それは誰も口に出来ずに終わった。

誰かが発そうとした瞬間、ヒリユーの上半身が消えてなくなったからだ。

「バカな!？」

その場に居る誰もがそう思った。

煙の様に現れたバクの口の中にヒリユーの上半身はすっぱりと飲み込まれている。

バクがいつ、何処からか現れたのか認識できた者は誰一人としていない。

その疑問が頭を駆け巡る前にリンドだけがただ一人行動を起す。それはバクの二度目の嚙下えんげでヒリユーの身体が踝くるぶしから上まで一瞬で見えなくなるのと同時だった。

「来い! ネイル・フリー・トゥーン!!」

リンドの上着の右ポケットから顔を出すペットボトルの蓋が勢い良く弾かれると、中の水道水が噴水のように飛び出す。

空中で剣の形へと実体化したそれを掴むと、リンドはそれをバクの腹部目掛けて斜めに振り下ろした。

手にした瞬間、始水しすいウスラヒへと形状を変えたその青き刃はバクの腹部を真つ二つに割いた。しかし、真つ二つに割かれた腹部から血を流す事も、蚊に刺された程の表状を浮かべる事もなく、バクは三度目の嚙下でその食事を済ませる。

たちどころにしてバクの腹の傷が修復していく中、ネイル・フリー・トゥーンの冷静で、無慈悲な言葉だけがリンドの頭の中で響く。

「あれは決して殺せぬ。リンドこれ以上は無意味だ。あの男はたった今消滅した」

トトラを失った時と同様の感情にリンドが飲み込まれていくその瞬間、ギョロリと視線を移したバクの双眼を二本のナイフが打ち抜いた。

「さっさと逃げんぞ!!」

不意に響いた声の主はこっちに来いとジェスチャーをしている。それは通りへと抜ける道だった。

少しの理性が働けば、そうすべきなのは当然の事である。この化け物を引き連れて如月高校に逃げ帰る訳にはいかないのだから……。しかし、ヒリユーを失い完全に瓦解^{がかい}したパーティはその自殺行為に至る直前だった。

一早く我を取り戻したユアンがトーノとかぎるの手を引いて駆け出す。

遅れて走り出したリンドのすぐ後方で両の瞳に刺さるナイフを引き抜いたバクが手探りで動き出そうとした瞬間、男の放った三本目のナイフがその額に深々と突き刺さった。

4

小柄な男に先導されて四人が到着したのは年季の入った古いアパートだった。

二階へと続く錆びれた階段を昇る度、身に着けたアクセサリー類をジャラジャラと鳴らしながら男は呟いた。

「しかし、ヒリユーさんまでやられちゃうとはな」

セリフとは裏腹に男の声に響きはない。それは感情が無いというよりも、何が起ころうとも不思議ではない現状を誰より理解し^{じゅんごう}順応^{じゅんごう}できているかのようだった。

つい今しがた起こった惨劇から立ち直る術^{すべ}も見つからず、無言の四人の中で、唯一ユアンだけが男に尋ねる。

「でも、サリーくん。こんなボロアパートに逃げてどうするつもりなんスか？」

階段を昇り終わると呆れたようにサリーと呼ばれた小柄な男は、ユアンのいる後ろへと振り返った。目深まぶかに被ったニットキャップの奥で冷たい視線が覗く。

「お前こそ、モップなんか持ってどうするつもりなんだ？ 丁度、俺のナイフも底をついちまった事だし、お前の分も見繕みつくろってやるよ」
そう言い残してサリーは、古いアパートの二階奥の部屋まで進むと、玄関ドアの前へと立つ。

「カギタ、じやまするぞ」

言うが早いか簡素な作りの木製のドアを蹴り破った。

四人が呆然ぼうぜんとするのも構わず、部屋の中へと入っていったサリーがのんびりとした声を上げる。

「なんだ、いねーのか？ ひよっとしてやられちまったかあ？」

恐る恐る部屋の中へと入る四人の事など気にもとめず、家捜やさがしを始めたサリーが押し入れを開いた時、ユアンはその中身に釘付けになった。

「……サリーくんなんスか、これ？」

押し入れの中には小さなナイフから大振りの青龍刀まで、剣刀類がずらりと並んでいた。

5

市内にその名をとどろかす悪の華ゲッコー。

称して「キサラギ」と呼ばれる如月高校普通科の生徒とは、正反対のキラキラとした不良生徒の巣窟そうくつたる如月高校機械科の生徒達。

そんな彼らは授業のポイコットなど日常茶飯事のくせに、そのほとんどがなぜだか無遅刻、無欠席である。おそらく学校が大好きなのである。彼ら「ゲッコー」の生徒と「キサラギ」の生徒はなんの**か**ので上手い事共存していた。

ご多分たぶんに漏れず、ゲッコー二年の中でも特に異彩いさいを放つ 紗梨さなし

一夜通称「サリー」もそんな連中の一人である。

彼と、彼の恋人である着崩されすぎて原形を留めていないゴシツクロリータ調の制服を着たモデルばりのスタイル抜群の美女、如月高校普通科二年の杏子・ベアトリス・天城山（ユアンは「なに人だよっつー話だよな」といつも影で言っているが、それなりに裕福な家庭で育ち、幼少の頃から音楽の英才教育を受けてきた彼女は軽音部から大人気であり、ついでに言えば後輩（特に同姓）からの支持率も高い）は、いつもと変わらぬ通学の途中で今回の事態に巻き込まれたらしい。

「突然現れたピンクの化物を、ベアトリーチェと二人で穴だらけにしてただけどな……」

サリーとその恋人が何本ものナイフを隠し持っているのは、ゲッコー生徒の間で知らない者はいなかった、が（なんつー恐ろしい事をさらりと言うんだこの人は……）とリンドとユアンの頬は引き攣った。

「……そこにバスが突っ込んできて、狭い路地に逃げ込んだベアトリーチェと分断されちまった。声を聞いた限り、無事のようにだったが、俺が迂回して路地に行った時にはベアトリーチェの姿はなかった。……おそらく化物から逃げ延びたとは思うんだがな……」

サリーは話し終わると取り出したタバコに火を点けゆっくりと煙を吐き出す。その後で思い出したようにユアンにタバコを勧めた。

「ベアトリーチェさん。ゲッコーにはいなかったっすよ」

タバコに火を点けたユアンがそう告げるとサリーは「なら、ゲッコーに行く手間は省けたな」とだけ答える。

サリーの顔を見つめながら、ニコチンを取り込むユアンの傍らでは、サリー行きつけの秘密の武器屋で彼に見繕ってもらった金属バットにナイフが一本、それにメリケンサックがユアンには手持ちぶさたのように並べてある。

かぎるとトーノは自分達にはそれぞれ弓と竹刀があるから、と気

持ちだけ貰っていた。

(そもそもが、ここの商品は元々サリーの物ではないのだが……)

リンドにだけは特に何も勧めなかったサリーだが、タバコを吸い終えるとペットボトルに水を詰めなおすリンドの顔をゆっくりと見上げた。

「リンド、ペットボトルの水を剣に変えてたあれは神様からのギフトってヤツか？ ……そんなもんが出来るようになったって事は、いよいよもってゲッコー最強はお前なのか？ ……せっかくの機会だし、俺とやりあつとくか？ お互い生きてるうちによ」

リンドの顔を見つけては独特のプレッシャーと共に発せられるいつもの嫌み。しかし、目深に被ったニットキャップの奥で少しだけサリーが苦笑いを浮かべる。

リンドもユアンも、サリーが笑う姿を見るのは初めての事だった。

第五章 クリムタ

第五章 クリムタ

1

自分はこれから再びベアトリーチエを探しに行くがお前らは？
とサリーが尋ねると、リンドが「知り合いを探しに清南高校に行く
所です」と答える。

「お互いの探しものが見つかるの良いな」

最後にそう言い残したサリーとはアパートの前で別れた。

再び四人になった一同は清南高校を目指して歩き出す。

四人になった心細さに四人の周りを静けさが包むと、それを嫌が
る様にかぎるが無意味に擬音ぎおんを口にしていたが、ユアンはただ冷静
に呆れ、トーノはその無駄なテンションに乗っかるタイミングを逃
しオドオドしている。

そんな中で唯一、一人リンドだけが無言のまま、歩を進める。前
だけを見つめたその表状は暗い。

それに気付いた様にユアンが大げさに溜め息ためいきをつく。

「暗ーいっ！ お前はもう少し、場の空気を考えろつての。かぎる
なんかどーでも良いけど、お前がそんなだったらトーノちゃんも緊
張すんだろが、確かにヒリユーさんの事はシヨックだけだな、あの
人はあの人の意志でゲッコーを出たんだよ。それをお前はまた一人
自分の責任に感じてんのか？ バカか、お前は。ヒリユーさんが言
ってたろ、こっから先は戦争だつてよ。そんなおつかねートコに行
くのが嫌なら隠れて震えてりゃ良いんだ。それをこうしてお前と一
緒に歩いてんのは自分の意志なんだよ、俺達はみんな自分の意志で
歩いてんだよ。俺が死ぬ事になつても、そりゃ俺に運がなかったっ
てだけの事だ。いいか？ お前の責任なんかじゃないんだよ、バカ」

普段ならいつもは自分が説教する側のリンドは、ユアンに早口でまくしたてられ少し怯む。 「あ……ああ」と言うのが精一杯だった。一息で長ゼリフを言い終えて息のあがるユアンの傍らでかきだが、あっけらかんとした表状で口を開く。

「何言ってるんの、それがリンドの良いところじゃない。無責任でやさぐれてるユアンと違ってリンドはね、ちゃんと持ってるの、1/3の純情な感情ってヤツを」

「無責任でやさぐれてるって、お前なあ！」

ユアンが声を荒げる事などおかまいなしにキョトンとするトーノの顔をかきろが見つめる。

「あれ？ トーノちゃん知らないの、飛天御剣流？」

トーノとかきろの顔が見つめ合う、その間わずか一瞬。

「ちょっと、リンド。トーノちゃん知らないって、飛天……」

気配も温度も確かに残っていた。しかし、かきろが振り返った時、そこにリンドとユアンの姿はなかった。

2

分厚い雲に覆われてしまったかのような薄暗さが辺りを包んでいた。それが夜でない事くらい、ほんの数秒前まで晴天の下にいたリンドとユアンも解ってはいる。しかし、理性とは裏腹に現状の状況を理解しろというのは無理のある話だった。

「……リンド、これってつまりどういう事だろ？」

ユアンの問い掛けに「俺に聞いたって分かるかよ」とだけ答えたリンドだったが、知ってはいなくてもその感覚は覚えていた。それは、初めてネイル・フリー・トゥーンと対峙した時の感覚に似ていた。つまりは、今起こっている不思議な現象に人外の力が働いている事は確かである。

朧げな闇の中で、リンドとユアンの見つめる視線の先には二人が

良く知る建物が映っていた。

それは、つい数時間前に後にしたばかりの如月高校の校舎。

確認する様にじっくり見ると細部のディテールが微妙に違う事に気付く。

確かがうる覚えで描いた様な曖昧さを感じつつも、見知った建物のリアルさが尚更に不気味だった。

「俺たち二人だけ……ついでに言うなら、閉じ込められたっばいな」校舎を見つめるリンドがユアンの声に振り向く。

ユアンはかぎるとトーノが先程までいたはずの後ろを見つめていたが、そこに彼女たちの姿はなかった。

あるのは一際濃い漆黒の靄、それは黒塗りの壁にも、果てなく続く底なしの闇にも見える。うる覚えの如月高校の校舎を中心に、その闇がぐるりと周囲を取り囲んでいた。

その先に何かがあるのか、ユアンが拾った石を放り投げようとした時、何者かが近づいてくる息づかいが聞こえた。

それが一人や二人ではない事に気付いたリンドとユアンが校舎側へと顔を向けると、死んだ魚の様な目をした若い男が併せて五人、ブツブツと上言の様に繰り返しながら近づいて来るのが見える。

その五人は五人共、下着だけという姿に首だけ真鍮製と思わしき首輪が巻かれていた。

生ける屍の様なその姿に後ずさりながらも、リンドはボトルのキヤップを外し、声を上げた。

「来い！ ネイル・フリー・トゥーン！！」

3

「どうだった？」

息を弾ませながら、かぎるは聞いたが、答えはなんとなく分かつ

てはいた。

トーノはかぶりを振り「かぎるちゃんの方は？」と尋ねたが、トーノも答えは分かっている。

リンドとユアンが姿を消してすぐ、かぎるとトーノは搜索を開始した。

最初は何かのイタズラかと勘ぐったかぎるだったが、ユアンがサリーに見繕ってもらった武器だけが転がる地面に、ただ事ではない事を察するとバクの襲撃にも配慮し（はいりよ）して「慎重に」とトーノに念を押すと、二手に分かれてリンドとユアンの行方を捜す。「慎重に」などと言ってはみたもののそんな理性など焦る気持ちには適わず、結局息せききって路地を駆け回った。

変に真つすぐなところのあるリンドと、いつも詰めが甘くて頼りないユアン。そんな二人の事を案じて自分がいつもついていてやらなければ、とかぎるは思っていたし、口にもしていた。

そんな時、リンドもユアンも決まって軽口を叩いて笑った。

リンドとユアンが消えた時もまず頭を過ぎったのは「あの二人はあたしがいないと、てんでダメなんだから」という純粋な心配である。しかし、そんな気持ちは時間と共に二人がいない心細さへと変わっていた。

「どうしよう」「どうしよう」という焦りが頭の中を埋め尽くしていくかぎるに、トーノの言葉はほとんど聞こえていない。「かぎるちゃん、私、向こうを探してくるね」そうトーノが言った時も上の空で「うん」と答えただけだった。

我に帰った時、細い路地にトーノの後ろ姿が消えていくのが映る。一人になった時、かぎるは自身の無力さをまざまざと痛感した。

（……………自分はどうする事も出来ない。……………誰か、助けて。誰か、誰か、誰か……………）

洪水こうすいの様に押し寄せてくる感情の中でかぎるは押し殺す事も出来ず
に声を上げた。

「リンドー!!! …ユアーン!!!」

慎重に、などという理性はそこに残ってはいない。

彼らを助けて、とも彼らに助けて、とも分からぬそれをただ求める事しか術のないかぎるは、感情のままに声を発する。

普段の自分なら驚く程の大声を再び発しようとした瞬間、目の前の空を木漏れ陽こもれひのように優しい光が包んだ。

4

リンドの求めに応じる事無く、左手に握られたペットボトルの中で水は小さく揺れるだけだった。

ネイル・フリー・トゥーンを召喚する事が出来ず一瞬だけ狼狽ろうたいしたリンドの首にほぼ全裸の男の両手が触れようとした刹那、ユアンの声が響く。

「嫌なこつた」

声と同時に放たれたユアンの右フックは男の左頬ひだりほほをジャストミートし、男は地面に転がった。

はっとしたリンドを尻目に、二人目の男の鳩尾みぞおちにユアンは蹴けりを入れていた。苦も無くユアンが退けている彼らの中に、知った顔が幾つかあるのにリンドも気付いた。

(……こいつら如月の生徒だ)

念仏の様に「みどりこ様の為、みどりこ様の為」と呟く死んだ魚の様な目をした彼らが念仏の合間に「リンド、ユアン頼むから捕まってくれよ」と哀願あいがんを挟む度「嫌なこつた」とユアンが拳を振る。孤軍奮闘こくんふんとうしていたユアンに、リンドが加勢するとあつという間にほぼ裸に近い格好の男達は五人が五人地面を這はっていた。

息を切らすユアンに小休止の間もなく新たに十人の男達が姿を現

すのを見て、リンドもユアンも走り出す。罨に違いないと分かっ
てはいても、ここでイタズラに体力を消耗するよりはマシ、というた
だその一点だけを信じて校舎内へと駆け込む。

校内には男子生徒の他に首輪をした下着姿の女生徒の姿もあつた。
だが、TVゲームのゾンビの様に迫り来る彼女らにありがたみを感じ
る事無くその間を走り抜けると二回へと上がる。

追ってくる彼らや彼女らを首だけ振り返って確認した後でリンド
が呟く。

「全員じゃない」

「は？」と息も絶え絶えにユアンが尋ねると、リンドが答えた。

「ここにいるのは生徒全員じゃない」

だからそれが何なんだ、と口にする元気もないユアンにリンドが
説明を続ける。

「この校舎は偽物だけど、生徒は本物だ。殴られれば痛いし、疲れ
もする。おそらく何らかの方法でここに何十人かが閉じ込められて
るんだ」

リンドの説明にユアンは何一つも救いを見出せない。

数に限りがあるとはいえ、閉じ込められた校舎内で鬼ごっこを続
けた所で救いの道はない。

「じゃあ、どうする？ たてこもるか？」

相手が生身の人間で撃退できるなら、それしか道は無いだろう。

「教室……は無理だな。窓を破られて数で来られちゃどうしようも
ない。だったら……体育館だ！」

ユアン会心の答えにリンドは怪訝な顔げんをした。

「体育館の用具室だよ、リンド。あそこなら窓から入ってこれない
し、入り口も一つ、それなら撃退も楽だし使えそうな物も何かしら
あるだろ？」

せっかくサリーに見繕ってもらった武器の類は、誰の一つもユア
ンの手元には残っていなかった。相手が生身の人間とはいえ、ゲン

コツだけであれだけの人数を相手にはできない。それは、ネイル・フー・トウーンを失ったリンドとて同じ事だった。小さく頷くと完全に振り切った相手の事を振り返る事無く二人は階段を駆け下りる。

渡り廊下を抜けるとあつという間に辿り着いた体育館のドアを押し開いた。

一縷の望みを懸けて辿り着いた体育館だったが中に入って数歩、リンドとユアンは駆けるのを止めた。

体育館のステージの前には数人の下着姿の男女が跪く様に身を縮めているのが見える。

それに気付く間もなくステージ中央にスポットライトが降り注いだ。ライトの光の中からゴールドのシャンパンドレスを煌めかせて、一人の女性が姿を現す。

彼女は細いフレームの銀縁メガネの奥でゆっくりと微笑んだ。

5

もはや半ベソに近いかぎるの眼前に白い光が煌々（こうこう）と降り注いだ。

「かぎるちゃん!!!」

離れた空にその事像を認めたトーノが竹刀を片手に駆けつける。

しかし、呆然と見つめるかぎると今にも飛び掛ろうとするトーノの前で、眩しい程の白い光の中から顔を覗かせたのは微笑を灯した美しい女性だった。

白い光を反射してエメラルドグリーン色の長い髪の毛がキラキラと輝いて見える。

「……貴女が私を呼んでくれたのね」

静かに優しいな声音でその女性は話した。

ダークグリーンドレスを身に纏う姿は童話のお姫様、それもた

だ王子様を待つのではなく自ら試練へと立ち向かう勇氣と美しさを兼ね備えたお姫様を連想させたが、その美しく魅力的な顔立ちにはほんの少しの疲労の色が浮かんでいた。

「私はクリムタ。あなたは達は？」

自らをそう名乗った女性に問い掛けられると、反射的にかぎるとトーノは自分達の名前を告げる。「二人共良い名前ね」そう言つて微笑むクリムタに少しだけ見とれた後で、思い出した様にかぎるが尋ねた。

「あのクリムタ、さんは何処から来たんですか？」

優しい微笑みはそのままにしてクリムタは少しだけ困った様な表状を浮かべる。

「……ずっと遠い所……っていうのかな」

少しだけ言葉を詰まらせながらもクリムタは続けた。

「……まだ神と呼ばれる存在が世界を支配していた時代。私は自分の神を封じようとしたのだけれど失敗して逆に自分がこの次元の狭間に閉じ込められてしまったの。その闇は永遠とも一瞬とも思える世界。そこから出られたのは、かぎるさん、貴女が私を呼んでくれたから……」

キョトンとした表状を繕う事しか出来ずにいるかぎるの前で、小さくクリムタはかぶりを振る。

「……違うわね、貴女が呼んだのは私じゃなくて……彼女」

クリムタの胸の前、一際神々しい光を発する物体が、光を収縮するようにして出現するとふわりと浮かぶ。

白い柄と装飾が施され、クリムタの髪色と同じエメラルドグリーン
の宝石が埋め込まれたそれは、一振りの剣だった。

6

「翠子先輩！？」

ユアンは驚きの声を上げたが、シャンパンドレスに身を包んだそ

の女性はただ自信に満ち溢れた微笑を浮かべているだけだった。彼女のそんな表状をユアンは今までに一度も見た事がない。

千歳 翠子

リンドやユアンと同じく伏姫中の一年先輩の彼女は、日本人らしい美しく長い黒髪がトレードマークの女性である。

「あんたは頭も良いんだし、美人なんだから、もっと自信を持つべきだよ」

友人の蒼姉こと佐々木蒼は彼女にいつもそう言っていた。

引っ込み思案で大人しく、どこかオドオドして見える彼女は小学生の頃は良くいじめられていたらしい。

そんな彼女を見るに見かねて救って以来（男子生徒三人をボコボコにした話は未だに語り草である）生涯の友を公言する蒼姉の影に隠れて、未だに引っ込み思案で大人しい彼女だったので、全くもって正反対の二人ではあったが、その仲は良かった。

「自信を持つべき」と言う蒼姉のおかげで（せいぞろい？）今や彼女は如月高校生徒会の副会長の職を務めている。しかし、そんな彼女であっても、蒼姉の思い通りに自信をつけるというには程遠いようで、いつもどこかオドオドして見えた。

その彼女が自信に満ちた微笑を灯している姿がユアンにはとても不思議に映る。

「翠子先輩、これって何かの悪い冗談ですか？」

いたって平静を装うユアンの問いに翠子はほんの少しだけ表状を暗くした。

「世界は、悪い冗談に満ち溢れているわね」

翠子の意味不明な答えに不気味さを感じつつもユアンの中では安堵感が広がっていく。

（……この表状、そしてこの話し方。間違はなく本物の翠子先輩だ）
「俺達、さっきまでかぎるとトーノちゃんって鳳華のコと一緒にだっ

たんすけど、何か逸れちまったみたいで。こっから出る方法って知らないスか？」

小さく溜め息を吐いた後で、再び翠子は微笑をつくる。

「それは無理よ。どんなモノであるうとも私が許可しないモノはこへ入る事も出る事も出来ない。それが私の世界、色欲アスモテラスの力。……リンドくんユアンくん、貴方達は一生ここから出られないし、貴方達を助けに来る者もないわ」

微笑を浮かべる翠子は、やがて声を上げて笑った。

7

「じよ だんじゃないわ。呼ばれたから来てみれば、何？ オシメも外れていないような青くさい小娘じゃないの。そんなのに呼ばれたなんて私のプライドが許さないわよ、まったく」

いきなり頭の中で喚わめかれて、かぎるは戸惑った。

ヒステリックに喚く声の主が、その声のイメージとは懸け離れた様相ようそうの白く優雅な装飾の剣から発せられていると気付くと尚更に戸惑う。だが、どうやら剣が言うところの青くさい小娘の事が自分の事らしいと気が付くと、かぎるは一応反論してみせた。

「あ、あたしは、オシメも外れてないような小娘じゃないよ！」

かぎるの反論など意に介さず、剣は人をバカにするように話す。

「あらあらあら、自分の無力さにべそをかいていたのは誰でしょうねえ」

かぎるはぐうの字も出ずに口をつぐんだ。

「……まあ、あんた以上に役に立たないヤツもいたから仕方ないんだけどね……いるんでしょ？ 出てきないさいよ、ネイル・フー・トウン！」

宙にぼんやりと青白い光が発するとリンドが手にしていたあの剣が浮かぶ。しかし、その姿はリンドが手にしていた時とは違い手のひらサイズの小ささであり、その後も続く白い剣の誹謗中傷ひぼうちゆうじやうの数々

に小さく縮みこまっている様に見えた。

「かぎるちゃん、何が起きてるか分かる？」

トーンに尋ねられ、かぎるは上の空で答える。

「あたしも白い方が言ってる事しか聞こえないけど……って、あれ？」

トーンには聞こえていない。その時、初めてかぎるは白い剣の聲が自分にしか聞こえていない事を理解した。

クリムタがゆっくりと語りかける。

「このコの名は神剣アテナイ。かつてはその検帝ネイル・フリー・トゥーンと共に七つの神具ハルモニアのひとつとされし存在。今から、かぎるちゃん、貴女がこのコの主となるのよ」

「はい?!」

かぎるは理解できずに間の抜けた声を上げたが、クリムタは構わずに話を続けた。

「あまり時間がないの。あなたの友人達は今……」

「プラテネリが一つ、色欲アスモデウスの能力で別の次元に幽閉ゆうへいされてるわ」

ネイル・フリー・トゥーンへの罵倒ばとうに飽きたのか、アテナイが会話に加わる。

クリムタが小さく頷いた。

「今から、私がそこへの入り口を作ります。剣の理ことわりについてはこのコに教えてもらって下さい」

アテナイの柄つかを右手で握ると、深呼吸した後でクリムタは大きく構える。

「少し、離れていてください」

かぎるとトーンが離れるのを確認した後で、クリムタは剣を振り下ろした。

「神奏次元断シンソウジゲンダン!!!」

刃を振り下ろした先で、空間にぽっかりと深い闇の穴が開いていく。

「さあ、いつてらっしやい……後は頼みましたよ、アテナイ」
クリムタからアテナイを託されたかぎるがその柄をしつかりと握りしめた時、アテナイは今までとは打って変わって重々しい響きで「さようなら、クリムタ」と小さく呟いた。
クリムタとアテナイの間に何かしらの感情を読み取りつつも、少しずつ収縮していく闇に急かされる様にして、かぎるとトーノはその穴の中へと飛び込む。

彼女達の姿が見えなくなったのを確認した後で、クリムタは自身を覆う白い光の外へとゆつくりと足を踏み出す。

「これでようやく、私は咎とがから開放される。ありがとう、かぎるちゃん」

白い光の外へと出たクリムタの身体は、一瞬にして灰になったかのように空気と混じり合い消えていった。

8

千歳 翠子から発せられるプレッシャーに、ユアンは固唾かたずを飲んで身動き一つ取れずにいた。

そんな相棒を察するようにリンドが口を開く。
「翠子さん、あんたに何があったかなんて俺達は知らない。だけど俺達だっつていつまでもここにいる訳にはいかないんです。俺達で力になれる事なら、何だっつて協力します。だから取り合えず、ここを出ましよう」

リンドの願いには少なからず、翠子を救いたい、いつもの翠子に戻ってほしいと言う想いが込められていた。しかし、翠子はそれを一笑ふに附す。

「別に貴方達に助けて欲しいなんて思ってないわ。大体にして貴方達に私の何が分かるって言うの？ ……私はいつだっつて変わりたいっつて思っただわ、自分の為に、そして何より大好きな蒼の為に……」。

でも、世界が初めから何もかも決まっている事で、自分の存在も運命も最初から最後まで決定づけられているっていう事に気付いた時、貴方達ならどうする？ …… 私には、もう世界を憎む事しか出来ない」

引き攣る様に笑いながら話す翠子の顔には、彼女の話す憎しみ以上に諦めにも近い暗さが濺みとなって染み付いていた。それはいつも佐々木蒼の隣で、色白の美しい顔に遠慮がちに微笑を灯していた千歳 翠子には似つかわしくないもののように思われ、リンドとユアンをただ、たじろがせる。

「交渉は決裂よ。私はただ貴方達にここに居て欲しいだけ。生きていようと…死んでいようとね」

わなわなと震えながらユアンが声を張り上げる。

「ふざけんなよ！！ 何でだよ、あんたそんなんじゃないやなかつたろ！ 何でだよ！ 何でなんだよ！！」

ユアンの叫びと射る様な視線から逃げるように黒い瞳を伏せた翠子だったが、無視する様に淡々（たんたん）と話を続けた。

「私は予め掘っておいた落とし穴に落ちてきた人間を自分の世界に閉じ込める事しか出来ない無力な女。戦う術を持っていないの。…だからさっさと化け物にならせてもらおうわ」

力ない瞳を開き、小さく呟く。

「ハルニレ」

千歳 翠子の周りの床からせり上がるようにして石で出来た裸の男性像が四体現れると、翠子を守る様にして取り囲んだ。その瞬間、翠子の立つステージ下で傳っていた半裸の生徒達は悲鳴を上げながら体育館の外目指して逃げ出す。

石像の立つ台座から何かが生えているのにユアンが気づいた。左右一本ずつのそれがサソリの尾のような物だと気づいたまさにその瞬間、尾の先が光る。

「え？」遅れる様にして視線を下げた時、ユアンの右胸上部には直径5cm程の穴が開いていた。吹き出す血を抑えるようにして左

手を傷口に押し付けたまま、ユアンが膝をつく。

「ユアン!!!」

リンドがユアンの元へと近づくのを制する様に、二本の尾はピタリと照準をリンドに合わせる。

「次は貴方の番よ、リンドくん」

石像越しにして籠こもるような翠子の声が響いた。

リンドが覚悟を決めたように真つすぐに翠子へと視線を向けた時、リンドから少し離れた宙にポツカリと穴が開き、中から白く暖かな光が注いだ。

9

穴の中から放り出されるようにして転がり落ちて来たトーノとかぎるだったが、トーノより一足早く立ち上がったかぎるが石像に尾の生えた怪物目掛けて人指し指を自信満々につき伸ばす。

「おろち!!!」

その場に居る誰一人としてその登場の仕方と決めポーズを理解出来るものはなく、ほんの少し気まずい空気が流れたが、「……なあ、あれって『ぐわし』とか『死刑』みたいなヤツか？　そもそもあれ自体俺らの世代か？」呆れる様に呟くユアンにリンドは少しの安堵感も感じていた。

「さあ、トーノちゃん。悪者をやっつけに行くよ」

「そ、そうね」と答えるトーノではあったが、いまいちかぎるのノリにはついていけない。

その微妙なやりとりを見ていたユアンがかぎるの握る白い剣に気が付いた。

「かぎるっ、いよいよ比古師匠から奥義を譲り受けたか？」

ちよっとだけ悩んだ素振りを見せたかぎるが白い剣をまじまじと見つめながら、口を開く。

「どつちかって言ったら幻海師範って感じね」

「そこは比古師匠でいいだろうがよ」

それだけ言った後で、力なくユアンは床に倒れた。

?!

「ちょ、ちょ、ちょ、ユアンどうしたの?!」

開襟シャツを血で真っ赤に染めたユアンの元へとかぎるは駆けつけ、竹刀を構えたトーノはリンドの隣へ立つ。

「リンドの剣も呼べるはずだよ」

トーノが告げると、リンドはその名を呼んだ。

「来い！ ネイル・フリー・トゥーン！」

リンドのポケットにしまわれたペットボトルから迸ほとほとつた水流は宙で剣へと姿を変える。

リンドとトーノ、二人が見据えた先で石像がみしみしと音をたてた。

「くそう、くそう、くそう、くそう……」

翠子のくぐもった声と共に四体の石像は圧縮するようにして、凝縮していく。

石像の隙間からほんの少しだけ覗いていた翠子の身体は、磨り潰すりつぶされるように完全に消えてなくなると、石像同士が不器用に接着するようになってしまう。不快なオブジェがごろりと転がった。

オブジェを支えるようにして生えた無数の脚と背部で蠢うごめく二本に枝分かれした尾を持つその姿は正にサソリそのものだった。

顔馴染み（かおなじみ）である千歳 翠子が完全に人ではなくなってしまった事に戸惑うリンドではあったが、自分でも驚く程に冷静さを取り戻す。それは自分がこれから戦わねばならない相手が翠子ではなく、巨大なサソリの化け物であるという外見ゆえに他ならない。

「あれ」が翠子である事など、かぎるには絶対に知られる訳には

いかなかった。

……「あれ」は自分が殺さなければならぬのだ。

残酷さを噛み締める程に冷静な思考のもと、ネイル・フリー・トゥーンを力強くリンドは握った。

10

一人自問を続けた後で、ようやく回答を導き出したかぎるにアテナイがあっさりと×をつけた。

「……そうだ、あの化け物をやっつければここから出れるのよね？
だったら、さっきのクリムタさんの必殺技でさっさとやっつけて
ユアンを病院に連れて行けば良いんだ！」

「……あのね、あれはクリムタが辿り着いた剣の一つの究極の奥義
たる想　ソウ　よ。始風シフウも得てないあんたが出来る訳ないでしょ」
無慈悲な程に早口で喋りたてるアテナイに早くもかぎるの心は折
れかける。

再びの半ベソ状態に陥りかけたかぎるを心配して、というより面
倒くさがるようにアテナイが続けた。

「あー、もうっ、結局あんたはどうしたいのよ！..」
ぐずるようにしてかぎるが呟く。

「……ユアンを助きたいよ」
今までとは打って変わって優しく、諭すさとようにアテナイが話した。
「なら、そう願いなさい。願い、想像する事。それが剣の道、これ
からあなたが選び、進むべき道を切り開く理ことわり」

かぎるが小さく頷いた瞬間、その周りを温かで穏やかな風が包む。
ユアンの肌蹴はだけた胸元にポツカリと開いた穴がみるみるうちに塞ふさが
っていった。

「……言っとくけど、傷口を塞いだけだから、万全な状態じゃな

いからね。傷口が小さいのが幸いしたようだけど血は相当抜けてるようだから、無理はさせないように。……」

再び早口で喋りたてるアテナイが続けた。

「……面倒だけど、始風の名は私から贈らないといけないのよね。

……まあ、『トネリコ』でいいでしょ」

11

ユアンの口から漏れる小さな息づかいに歓喜の声を上げるかぎるを見て、恨めしそうにサソリはわなわなと震えた。

その後ですぐサソリの尾の先端が二つ同時に光る。しかし、それは光が屈折するように曲がると体育館の天井と床にそれぞれ小さな穴を開けただけだった。

リンドの目を薄い膜が覆っていた。

自分だけでなく離れたかぎるやユアンにまで届くようにして広がったそれは堅牢な氷の壁のようでもあり、不変にユラユラと波打つさまは蜃気楼のようにも見える。

「ロウを得たか、リンド。小うるさいとはいえ、風属性の神剣アテナイが近くにいた事が幸いしたようだな」

そう告げた後で、ネイル・フリー・トゥーンは言葉を詰まらせたので、どうやらまたアテナイに罵声はなせいをあびせられたらしい。

「……何にせよ、その盾に名前を付けねばならぬ。これからはお主が名を告げるのだ、リンド」

急に言われても、と少しだけ戸惑った後でリンドは小さくただ「氷壁ヒヨウヘキ」と告げた。

リンドのネーミングセンスの悪さに明らかに不快感を示しつつもネイル・フリー・トゥーンは一応納得してみせる。

「さあ、リンド、色欲アスモテウスを倒すぞ。氷壁はまだはつきりとした形となっていない。イメージするのだ固き氷を、そして砕くのだ」

ネイル・フリー・トゥーンの言葉をリンドは即座に理解した。

「碎ける！！ 氷壁！！」

叫びながら、左の拳を膜へと撃ち付ける。

一瞬にして碎けたそれは無数の氷の粒となって石造りの巨大なサソリへと降り注いだ。

バラバラとサソリの身体へとぶつかっては更に粉々になっていく氷片を痛くも痒くもないとばかりにたじろぐ事もせずにより過ぐすと、キラキラと輝く周囲が落ち着きを取り戻す事もないうちにサソリの尾の先端に光が灯る。しかし、その時には既にサソリの身体を、青白い光を纏う^{まと}リンドのウスラヒの刃が真二つに割っていた。

割かれた身体から吹き出す血は地面に舞い散る事もなく真っ赤な羽虫のように宙へと消えていく。

崩れゆく石像を侵食するようにして広がる赤は全身を包み、やがてサソリは完全に消滅した。

第六章 金十字騎士団 (フオウシャル・クロイツ)

第六章 金十字騎士団 (フオウシャル・クロイツ)

1

燦々(さんさん)と降り注ぐ陽光に、薄暗い世界から開放された瞬間、眩しさに目が眩んだ。

見れば、そこは何の変哲へんてつもない路地で、サリーくんの秘密の武器屋からさして離れてもいないそこは、やはり、トーノとかぎると離れ離れになったあの路地だった。急いでリンドが振り返るとそこには確かにトーノとかぎる、そして顔色の悪いユアンがいる。

(……戻ってこれたんだ)

安堵感あんどの広がるリンドは胸の中で、それは千歳 翠子の死を意味している事を理解する。

それに一人気付いたユアンが目でサインを送り、リンドが小さく頷く。

二人だけの秘密。

(……それだけは最後の瞬間まで、二人だけで持って行こう)

リンドとユアンは胸の奥にそつと絶望に暮れる千歳 翠子の横顔を仕舞い込んだ。

降り注ぐ陽光にも少しの赤みが射している事に気付くと、閉ざされた世界にあっても時間は過ぎていたのだという事を理解する。

(安全を確保もせず夜を迎える訳にはいかない……)

少しだけ焦るように、そして気を取り直すように清南高校へ向けて歩き出そうとした時、不足の事態と言うヤツが起きている事にリンドは気付いた。

リンド達から離れた角から湧いてくるように、ほとんど裸に近い下着姿の男女が現れたからである。

アスモテラス
色欲の世界に閉じ込められていた生徒は計三十人にも及んだ。

「こんな格好で、こんな所に置いて行かれる訳にはいかない」そう主張する生徒達の言い分ももつともで、結局、清南高校への道中、半裸の生徒三十名を引き連れて歩く事になってしまった。その光景は正に異様であり、一団を先導するトーノとかぎるはずっと頬を赤らめている。

かぎるにしてみれば、その生徒達のほとんどは如月高校の生徒であり、見知った顔もいる訳だから当然と言えば当然の話だった。

ユアンはユアンで服を奪われるかもという不安のもと、青白い顔を更に青くして歩いていたが、貧血気味でフラフラと歩くその姿はまるで夢遊病患者の様である。

気まずさの中を行く無言の一団が目的地である清南高校へと辿り着くのはそれから間もなくの事であったが、重苦しい空気の中では、その道程は必要以上に長く感じられた。

2

ようやくにして辿り付いた清南高校の目前で、リンドはただ呆然と立ちつくした。

(…ああ、これは見た事がある。…ナウシカで、確か王蟲に破壊しつくされたパジテの城壁のシーンだ…)

不謹慎な回想でリンドに現実からの逃避を囁かせたそれは、そのままリンドの衝撃の大きさを表している。

市内でも二番目に古いといわれる伝統と格式のある高校には、今やその面影はない。

校内をぐるりと囲む高いフェンスは根元からひしゃげて倒れ、堂

々と建っていた校舎はかろうじてその形を保っていたものの、倒れた窓ガラスの破片とあちこちに穴のあけられた壁の名残りが散乱する姿は、ガレキの山へと至る行程を見せ付けられているようだった。死体こそ転がっていないものの、何年も生者が近づいた素振りも感じられない遺跡にも似た廃屋。

散々たる光景に、項垂れる者、泣き出す者、それぞれがそれぞれの感情を表す中で、ただ一人、着地点もなく深く、深く落下していくそれはリンドの中で絶望へと変わっていく。

(…間にあわなかったんだ…俺は…俺は…ゆかりを救えなかった……)

心が闇に食い尽くされる寸前で、リンドの肩を抱いたのはユアンだった。

「まだだ、リンド。まだだ」
ユアンがリンドの耳元に囁く。

この状況にあってユアンだけが冷静だった。

それは適度に血がぬけたせいでも、彼が苦境に強いという事でもなく、ただ彼の持つ危機察知能力がそう告げさせたからに他ならない。

刻一刻と夜は近づき始めていた。こんな場所で夜を迎えるのはどう考えても自殺行為である。そして何より、今まで皆の精神的支柱として存在しているリンドが、地面に膝を付ける所など見せる訳にはいかない。それが集団の心理に与える余波は想像以上に大きいだろう。

そう思えばこそ、ユアンはリンドの肩を抱いた。諦め、投げ出し、項垂れる事を許さなかった。

ユアンとてリンドの気持ちは痛い程に分かる。しかし、リンド以上に何も出来る事がないユアンは、そんな無力な自分を噛み殺すと凜として言い放った。

「俺とかぎるは、とりあえず皆を体育館へ非難させる。リンドとト

「ノちゃんは校舎内は無理だろうから裏の方を探って見てくれ。ひよっとしたら誰か残っているかもしれない」

ユアンがトーノの顔に視線を合わせる。

本当はユアンがリンドについて行きたかった。だが貧血気味でふらつく自分では最悪の事態が起きた時、リンドを止める事は出来ないだろう。だからと言ってかぎるでは、右住左住して泣き出すのが関の山だ。

だからこそトーノに託した。無言で「頼む」と伝えた。

トーノはユアンの想いも責任の重さも十分に理解した上で、小さく頷く。

ユアンとかぎるが先導する一団が体育館へと向かうと同時に、リンドとトーノも歩き出した。

今にも崩れ出しそうな校舎をぼんやりと眺めながら裏手へと回る。様々な残骸さんがいの転がるそこは、廃屋の如き校舎を正面から見た時以上に酷ひどい有り様だった。

「やっぱり…誰も……」

リンドがそう呟いた時、トーノの声が辺りに響く。

「リンドー!!」

人の息遣いなど微塵も感じられなかった。だが、リンドが我に返ったとき、辺りを四人の男達に取り囲んでいた。

3

四人の男達は着ている服も年齢層もバラバラで、およそ共通点らしきものは感じられなかったが、それぞれが金色の十字架を模したアクセサリーをどこかしらに身につけていた。

まとわりつく視線の中で息を飲む間もなく、リンドはジャケットの右ポケットを探る。頼りの剣を召喚しようと口を開きかけた所で、

先程の戦いの後、ペットボトルに水をまだ補充していない事を思い出した。

空のペットボトルを握りしめながら、苦虫を噛み潰す様な表状のリンドに向かつて、四人の中で一番若い男が声をかける。

「呼び水なしで…イメージだけで呼び出せないようでは、これから先はどんどん厳しくなるぞ、リンドくん」

皺しわ一つないスーツが良く似合うその男にそう言われて、リンドは面喰らった。しかし、相手に気取られないよう、無言で男の顔をじっと見つめる。

男は緊張を解ほぐすかのようかすに微笑ほくに笑った。

「…三笠が君にネイル・フリー・トゥーンを託したのは知ってるよ。」

…とは言っても連中に比べれば後手、後手に回ってしまったけどね」男はまだ微笑んでいたが、的をえない男の発言はただ悪戯いたずらにリンドに緊張感を与えるだけだった。

「…すまない、自己紹介が遅れてしまった。私は御影みかげ 慎我しん々はフオウシャル・クロイツのメンバーだ」

男がそう告げた瞬間、頭痛に苦しむようにトーノがうずくまる。

「フオウシャル・クロイツ」それが何を意味するのかリンドには全く分からなかったが、それがトーノを苦しめている事だけは十分に分かる。すぐリンドは力づくにでも黙らせようと御影へと身構えたが、驚く程に優しい御影の瞳を見た時、リンドは戸惑い動く事が出来なかった。

トーノに向けて送られる御影の瞳、それは、幼い妹、もしくは我が子を見守る様な温かなもの。

「大丈夫」と繰り返しながら力なく立ち上がるトーノを見守りながら、御影は「まだ、記憶は戻っていないんだな」と小さく呟いた。

(この男はトーノの記憶について何か知っている!)

リンドはすぐに御影に向けて雨の如く質問を降らせようとしたが、そんなリンドの逸よほる気持きもちちを見透みとおかす様に、御影はただ右手を広げて「待て」を掛けただけだった。

「荒療治あめらじうじが良いという事ではないんだ。彼女は必ず記憶を取り戻す。それもそう遠くない未来に。急ぐのはかえって良くないんだよ」

御影はたんたと告げる。

ここまで来て何も教えてくれないなどリンドには納得の出来る事ではなかったが、隣を見るとトーノはまだ青い顔をしたままで小さく頷いた。

御影の言葉を精一杯受け止めようとしているトーノの姿を見た時、リンドの中で得体の知れない何かが生まれた。ほんの少しだけ胸の奥が締め付けられる様な気がした。

少しの間を置いた後、リンドの瞳を御影が見つめる。

必要以上にドキリとしたリンドの素振りに気付いた風でもなく御影は話し始めた。

「正直な所、我々の存在を君達に知らせるタイミングというのを計りかねていたんだ。しかし、『今』を逃すとまた事態が変わってしまうという結論に至ってね…」

リンドもトーノも御影の話の静かに聞いていた。そこに、敵意は既になかった。

「…世界が壊れ始めているの充分すぎる程、理解出来ているよね？」
あたり前だ！ ピンク色の肉の塊かたまりが跋扈はつこし、訳の分からない力を持った人間にも襲われた。おまけにその一人は昨日まで同じ学まなび舎やで笑いあっていた良く知る先輩だった。これが正常な世界の訳がない。

「我々の仕事はその世界を壊そうとする者を倒す事にある。だが、同時期に世界を支配しようとする者が現れた。後者の出現は我々にとっては全くの想定外だった。そのせいで、我々の活動は後手に回されているんだ……」

(…世界を壊そうとする者、と世界を支配しようとする者…)

頭の中を整理しようとする小さく呟くリンドを見ながら、御影が小さく頷く。

「……世界を壊そうとする者、その男の名は……」

4

「ジャツジマン、ねえジャツジマンてば！」

安楽イスに深くもたれ掛ける男はその声に揺り起こされるようにして、厚く被ったフードの奥で^{まぶた}瞼をゆっくりと開いた。

目前で子供特有の^{華奢}な身体つきをした少年が腰に両手をあててむくれていたが、口元を少しだけ緩ませるその表状にはどこか状況を楽しんでる節が^{ふし}見られる。

「ねえ、ジャツジマン。荒紫名^{あらしな} 祇園^{ぎおん}に続いて千歳 翠子も倒されちゃったよ。これでプラテネリも^{マモン}強欲と色欲が抜けて、残り五個になっちゃったね」

クリーム色のパーカーに、黒の半ズボンとソックス。悪戯^{いたずら}っぽく笑うその顔は少女のようでありながら、大人の女性の様ななめまかしさも^{じじ}滲ませていた。

「そろそろ僕の出番じゃない？ 僕だったらあんな連中すぐに殺せるよ」

そう言っつて無邪気に笑う子供を^{さか}諭す様に、ジャツジマンと呼ばれたフードの男が話す。

「…キリ。君の悪いところは物事を簡単に片付けようとするところだよ。彼らを殺して終わり、そう簡単じゃない」

ジャツジマンは穏やかな口調で話したが、キリと呼ばれた少年は納得出来ないというように再びむくれてそっぽを向く。

「祇園も翠子もハルモニアの回収には失敗した。しかし、キリ、いいかい？ 長きに渡り失われていた神剣アテナイがこの世界に君臨した。これは我々にとってとても幸運な事なんだよ」

優しく話しかけるその言葉にもそっぽを向いたままのキリに向け

て、ジャツジマンは幼子おとなしに振り回される親の様に軽く笑った。

「ネイル・フリー・トゥーンもアテナイも大事だけど、どうやらハーデスの方に動きがあったようだよ」

笑いながら話すジャツジマンの言葉に少しだけ興味を持ったように、キリが尋ねる。

「ハーデス、って。魔剣ハーデスの事？」

ジャツジマンが小さく頷く。

「おおよその場所は分かったけど、探すのは結構骨が折れるだろうね。…朱音あかねは、いるかい？」

ジャツジマンの座る安楽イスの前方に広がる影の中から、すらりと背の高い男が姿を現す。

髪の毛をツンツンと立たせたその男に「調子はどうだい？」とジャツジマンが尋ねると、朱音と呼ばれたその男は端正な顔立ちには似つかわしくない嫌な笑みを浮かべた。

「絶好調ですねえ。こいつはやっぱり俺向きですよ。まあ、所有者になるはずだった彼女には悪いですけどね」

台詞せりふとは裏腹あはれに嘲るような視線を向けた先、少し離れた影の中に力なく立つ、ショートヘアの少女が黒目がちの瞳をそつと伏せる。哀れむように少女の顔を見つめた後で、ジャツジマンは視線を紅音に戻した。

「紅音、君の嫉妬リヴァイヤサンでハーデスを見つけないさい。…それと今回はキリも連れて行きなさい」

不愉快なひと時から一転して表状を明るくしたキリとは対照的に、紅音は口を尖とがらせる。

「良かったね！ 紅音。今回は僕も一緒だから安心だね！」

口を尖らせた紅音が何か言うよりも早く笑顔で話したキリに、「はい、はい」と適当に相槌あいずちを打ちながら紅音は影の中へと消えていった。

ふと空を見上げた後で御影は話を続けた。

「…その男ジャツジマンを我々フォウシャル・クロイツが倒しさえすれば世界は再び秩序を取り戻す筈はずだった。その為に我々が行動を開始した矢先、想定外の出来事が起こってしまった…」

リンドとトーノが見つめる先で言葉を切った御影は低く、しかし確かに「裏切りだ」と告げた。

「クロイツ・コーポレーションという会社を知っているかな？ 様々な業種の会社との合併や吸収を繰り返して、今やモンスター企業となったそれは、砂漠の緑化を進めるプロジェクトから、兵器としての転用も可能な、限りなく人に近い機械人形の開発まで多岐たきに渡る事業を展開している。…特に後者は今回のような有事の際には大きな力となる筈だったのだが…」

次第に力なくなり呟ささやきにも似た言葉へと変わっていくその声音は、最後の最後に無念さを垣間かいま見せる。

その時、ようやくにして御影という男の素の表状をトーノは見た気がした。

リンドもそれを見ていたが、別の事に気を取られる彼にすれば、それは瑣末さまつな事に他ならなかった。

(…殺戮兵器、機械仕掛けの人形)

そのフレーズは他ならぬユアンが以前見た、という話そのものであった。

御影はほんの少しだけ躊躇ためらった後で再び口を開く。

「クロイツ・コーポレーションの若き社長にかつてのフォウシャル・クロイツメンバー、三ヶ峰みかみね 楼馬ろうま。彼は聖帝ネロを名乗り、機械人形とその一団を率いて我々に宣戦布告を果たした。聖帝ネロが名告げた真聖なる黒十字クロノ・クロイツという新たな脅威きょういの出現は我々にとって予想外の出来事だったし、何よりジャツジマンと彼の信徒ともいうべきプラテネリ使いと称する異能者達とクロノ・クロイツ。戦うべき敵が二つという現状において、我々の不利は否めないんだ」

そう締めくくった御影ではあるが、表状には嘆く素振りの一つも見られない。

「…だが、予想外の出来事の全てが悪い事ではなかった。当初、戦局を左右するであろうハルモニアと呼ばれる神具の回収がこの戦いの鍵を握ると我々は踏んでいた。ジャツジマンと我々の神具争奪戦、^{ハルモニア}激しい争いになるだろうとね…」

御影がちらりとリンドの顔を覗き込む。

「しかし、理由は分からないが神具のうち二つ、剣帝ネイル・フー・トウーンと神剣アテナイは君達を選んだ。本来ならば回収を有先すべき事なのだが、^{ハルモニア}神具の継承者の出現という希望を我々は運命として見守る事に決めた。我々が今、リンドくん、君の前に現れた一つはそれを伝える為」

小さく息を整えるようにして言葉を切ると、御影はリンドの瞳を真っすぐに捉えたまま「もう一つは君の希望を失わせない為」と続けた。

「バクと呼ばれる存在は、ある種のプログラムを実直に実行しているだけに過ぎない。あれを世界に解き放ったのはジャツジマンに他ならないが、コントロール出来ている訳ではない。あれは絶対に死ぬ事はないが、思考能力もない。あれが一度行動を開始したなら、いかに守りを固めても学校内に侵入する事など容易いだろう。…だが、ここへ侵入したのはバクではない」

御影はそう言った。

しかし、リンドにはそれが何か特別な事だとは思えない。バクだろうが、ジャツジマンだろうが、クロノ・クロイツだろうが、どうでも良かった。結局はそいつらのうちのどれかが清南高校を地獄にした、という結果に変わりはないのだから…。

「…クロノ・クロイツの兵隊、彼らがナルコレプシーと呼んでいる連中を作る方法など我々にも分からない。しかし、どういう方法であれ彼らがその兵隊を作るには『人』の力を媒介にする必要があるらしい」

リンドの気持ちを知ってか知らずか、御影はただ話を続けた。
「ここを襲ったのはクロノ・クロイツ。そしてここに避難していた人達は皆、彼らに連れていかれた」
リンドは瞳を大きく見開いたまま、微動だに出来なかった。

(…ゆかりは、まだ……生きている…?)

6

一応形だけは残っていた体育館。しかし、窓もドアも打ち破られたその有様に改めて溜め息を一つ吐くと、ユアンはドアの間近にあらをかいて座った。

とりあえず、ほぼ裸に近い一団を館内に避難させた後で、ユアンの傍らへとやって来たかぎるがぼんやりとした表状のユアンの顔を眺める。話しかける言葉もみつからず、顔を上げたかぎるの視線の先で尚更にぼんやりとした表状のリンドとトーノが歩いてくる姿が映った。

ただ事ではないその空気にユアンが声をかけると、リンドは「…ゆかり達は、まだ生きてるらしい…」と答えた。

目を丸くしているユアンとかぎるに、トーノが突然現れて自分達の存在と現状を一方的に話していった御影とその同胞達の説明をした。

説明を終えても半信半疑のユアンとかぎるに向けて、トーノは右手を持ち上げる。その右手には一振りの細身の剣が携えられていた。フォウシャル・クロイツとの邂逅かいこうとしての証拠として、と言う訳ではないだろうが、彼らは三点のアイテムをリンドとトーノに残した。

そのひとつが…。

「戦具アルマ。リンドのネイル・フリー・トゥーン、かぎるちゃんの

アテナイには及ばないだろうけど、これからの戦いに向けての備えに、って渡されたの」

全長が60cm程で、フランベルジュの形状をしたアテナイと長さは同じ位ではあったが、薄い刀身の幅はレイピアのそれであった。軽く振り、容易く風を切る音を発した後で、慎重に鞘にしまう。

その光景をぼんやりと眺めていたユアンは内心ドキリとした。自身が何の装備も持たない事、つまりは手ぶらである事を思い出したからである。

(…サリーくんの所で仕入れた武器ってどうしたっけ…?)

千歳 翠子の世界に閉じ込められる際に剥ぎ取られたあの重装備は、思い返せば清南高校を目指すあの路地に散乱していた筈だ。そろそろと現れた裸に近い同級生達のせいで混乱していたとはいえ何という失態だろうか…。

とは言え、内心穏やかでないにも関わらず、それをおくびにも出さなかったのは、かぎるにまた何を言われるか分かったものではない、というユアンのちっぴけなプライドの成せる業である。

そんなユアンの内心になど気付く事もなく話を続けるトーノを見ながら(後でかぎるの目を盗んでトーノの竹刀を譲り受けよう)と、ユアンは心の中で一人誓った。

7

トーノがフォウシャル・クロイツの御影から譲り受けたのは戦具アルマの他に二つあった。

「プラテネリヤクロノ・クロイツの動向までは分からないけど…」
そう言って渡されたのは薄汚れたハンカチサイズ一枚の布きれ。

それは地図だった。

半径1km以内の地図の所々に浮き出る染みのような赤い点。その赤い点はバクの動きを表しているとの事である。

「信用出来るのかな…」

そうは言ってみたかぎるはではあったが、ハンカチ状のナビゲーション・システムなど見た事はなかったから、その信憑性(しんぴやうせい)をどうこう言える訳でもない。

機械に弱いかぎるは、テクノロジー「凄(すご)いもの」という認識(にんし)しかないので、その概要(がいよう)についてはひどく薄(うす)っぺらい。以前(いぜん)ユアンが、NASAが新しく作ったコンピュータ・ウイルスに人間が感染(かんせん)すると精神(せいしん)ごとをもっていかれるらしいという話をしたら、かぎるは酷(ひど)く驚(おどろ)いていた。

それが面白(おもしろ)くてユアンはそれが嘘(うそ)だと言(い)えずにいたが「…ひよっとしてまだコイツ信(しん)じてねーよな」と、内心(うちしん)で一人(ひとり)心を傷(や)める振(ふ)りをしながら、かぎるとトーノの話を黙(もく)って聞(き)いている。

トーノが最後(さいご)に取り出したのは小さな丸(まる)い石(いし)が四(よ)個(こ)、それは一見(いちけん)してただのビー玉(たまご)だった。

「結界石(けいがいし)っていうらしいの。これを四方(しやうほう)に設置(ていし)した中にはバクは入(い)って来(こ)れないって、御影(ごかげ)さんは言(い)ってた」

そのビー玉(たまご)の頼(たの)りなさにユアンは頭(あたま)をかいた。

剣(けん)と薄汚(うすご)れた地図(ちず)とビー玉(たまご)。

こんな物を残(のこ)してさっさといなくな(な)った連中(れんちゆう)の事を信用(しんよう)しろと言(い)われても、土台(どだい)無理(無理)な話(わ)だろう。しかし、頭(あたま)ごなしに否定(ひてい)するとい(い)う事は、美作(みさく) ゆかりの生存(せいぞん)というリンドの希望(きぼう)も否定(ひてい)する事(こと)になる。

思い留(とど)まる様(よう)にして溜(ため)め息(いき)を吐(つ)いた後(あと)で、ユアンは口(くち)を開(ひら)いた。

「そいつ(いつ)が当(あた)てになるとして、ここ(ここ)で一晩(いちばん)明(あ)かすつてのもなあ」

陽(ひ)は完全(かんぜん)に傾(か)き、あと一時間(いちじかん)もすれば完全(かんぜん)に夜(よ)に覆(おほ)われるだろう。

(電気(でんき)もないこの穴(あな)だらけの体育館(たいいくかん)で夜(よ)を越(こ)すのは出来(こ)れば避(よ)け
たかったが…)

ユアンが再び(ふたたび)の溜(ため)め息(いき)を吐(つ)きかけた時(とき)、不意(ふい)に声(こゑ)を掛(か)けたのは少し離(はな)れた所に立(た)っていた半裸(はんぬだ)の女性(じょせい)徒(た)だった。

「あの…」と声(こゑ)を掛(か)けられた側(かた)へと視線(しせん)を移(うつ)し、おかつぱに近い頭髪(かみ)の女性(じょせい)の肢体(あし)を瞳(ひとみ)に映(うつ)した後(あと)で、ユアンは気(き)まずそう(そう)に視線(しせん)を

逃がしながら「なに？」と尋ねる。

「あの、私のおばあちゃんが暮らしてる施設がここから十分位の所にあるんですけど、そこなら食べ物とか布団とかあると思うんです」
そう少女は話した。

ユアン達はさして考える事もなく少女の提案に即答する。

(…体育館こくより酷い所もそうないだろう)

早々と身支度を整えた一団は、廃墟はいきよと化した清南高校を後にした。

8

その高齢者向けの施設はグループホームというらしい。

1ユニット九名という高齢者向けの施設にしては小さな造りの建物の中には、個室が一階と二階併せて十八室。その個室にベッドが一台ずつ設置されていた。

リンド達がそこを訪れた時、その建物の中に利用者たる高齢者も施設職員の姿も見当たらなかった。

その光景はおよそ予測の範疇であったが、それでもやはりおかつぱの少女には耐え難かったようで「おばあちゃん…」と呟くと、立ちつくしたままで泣き出す。

慰めようと思ったのだろう、咄嗟とつに駆け寄ったかぎるが、やがて同じように声を上げてわんわんと泣き出すのを呆れるような、少し微笑ましいような表状でユアンはしばらく眺めていた。そこへ施設の整備を一通り見て回っていたリンドが通りかかる。

「お前さ……ところで」

ユアンが言葉を選ぶようにしているのに気づくと、リンドはびしやりと告げた。

「俺はゆかりを助け出す。……それだけ、だよ」

ちらりと盗む見するようなユアンの視線の先で、リンドの瞳にはかつての光が灯っているのを確認する。

それに安堵したように、尋ねるユアンの声にも張りが戻った。
「で、これからどうすんだ？」

リンドはユアンの質問を聞きながら、御影の言葉を思い出していた。

施設内の整備を一通り見て回ると、電気も水道も異常ない事を確認したが、それは実は分かっていた事だった。

クロノ・クロイツがナルコプレシーと呼ぶ私兵を造ったり、機械人形の維持には電気や水道は必要であり、その類の施設はクロノ・クロイツが守りを固めている。

なればこそ、戦闘以外の兵隊が必要である為、大々的な人間狩りが行われているのだという。

幸か不幸かゆかり達はその為にさらわれ、電気・水道・ガス局の守りを固めた連中のおかげで、こんな異常事態にも関わらずライフラインは保たれている。

「…そういう訳だから、ちゃんとした建物の中ならそれ程困る事はないよ」

そう語った御影がリンドに最後に告げた言葉は…

「動きがあれば神具が知らせてくれる。今は次の戦いに向けて身体を休める事だ」

…である。

リンドはユアンの顔を見つめると「今はゆっくり休む事にするさ」
そう言って薄く笑った。

9

総勢十八名に及ぶ男子生徒と、十六名の女生徒は各階に備え付けられた浴室で束の間、身体を癒す。

入浴前二人一組のペアを男同士、女同士で決めておいた。

小さな造りの浴室ではあるが、二人で入る分にはそれ程支障もない。

一階を男子生徒、二回を女子生徒が使用するという事で、二人一組のペアはそのまま各個室のルームメイトとなる。

各室には小さなベッドが備え付けられてはいるが、どれも一人用の小さな物だった。それを二人で使うのは不便だが、寝られないよりはマシというものだろう。

集団の最後に入浴したリンドとユアンも、ようやくにして今日一日の緊張感から開放される。

リンドは事前に施設環境の点検をした際に、あの境界石なるビー玉を施設内の四方に設置しておいた。

フォウシャル・クロイツ。……連中が信用できるかどうか、一体何を考えているのか正直リンドにも分かってはいなかった。しかし、御影に渡された物の類の力は本物だとリンドは思っている。

それは、連中が敵だとするなら、こんな回りくどい事はしないだろうという思い込みでしかなかったが、それでもビー玉のおかげで安心感を得られたリンドは浴室でユアンと馬鹿な話に花を咲かせられた。

リンドとユアンが浴室を出ると妙な格好をした生徒達が食堂で賑やいでいた。

丈があつていなかったり、必要以上に地味だったり、派手だったりするそれは、おそらくここに入居していた高齢者の物だったからだろう。

生徒達はホットプレートを囲んで焼きそばを作っているところだった。麺が少し焦げる音と辺りに広がるソースの匂いに、忘れていた空腹が顔を覗かせる。

こんな異常な事態の中においても、ライフラインが行き届いている今の光景を見る限り、世界は日常を取り戻したのではないかと思え

るようだ。

冷蔵庫の中には山のように食材が残っていた。そのおかげもあり、豚肉や野菜の沢山入った焼きそばが皆にふるまわれた。

ゆっくりと味わうリンドとは対照的に、かっこむユアンの元に丁度浴室からあがったばかりといういでたちのトーノとかぎるがやってきた。

「風呂、どうだった？」とリンドが尋ねると、浴後の上気する体温に心地良い表状のかぎるが「感動した」と呟く。

非日常の中で味わう日常に感動したのはリンドも同じだった。

だからこそ、かぎるの次の言葉を黙して待ったが、かぎるが感動したのは全く見当違いのものであった。

「トーノちゃんってね、すごく節操せつそうのある胸をしてるの」

麵を吹き出しそうになるリンドの傍らで、泡を食った表状のトーノと、焼きそばを喉に詰まらせたユアンが二人揃って顔を真っ赤にしていた。

10

隣に寝るユアンがすやすやと寝息を立てるより先に、リンドは深い眠りの中に引きずり込まれる。

小さいながらも、ベッドの上で休む事など出来ないと思っていた一同である。ここにいる誰もが今日は夢も見ずに熟睡じゅくすいする事になるだろう。

リンドもまた闇の中にいた。

しかし、青白い光が闇の中にぼんやりと浮かぶと、それはやがて一振りの剣へと形を変えた。

剣帝ネイル・フリー・トゥーン。

今日何度も目にしてきたそれではあったが細かな装飾がキラキラと輝き、全長1・5mにも及ぶその姿は、今までに見てきたどのネ

イル・フリー・トゥーンよりも堂々たる姿だった。

「……これは、夢、か？」

リンドが呟くとネイル・フリー・トゥーンはやれやれというように、ぞんざいに言葉を発する。

「そうだな。ある種の無意識というものだ。…本来なら、こんな形をとらなくても対話は出来るのだぞ、リンド。お前がそれを想像出来るならばな。」

溜め息でもつきそうな程の言葉の後で、ネイル・フリー・トゥーンは「まだ、あのかぎるとかいう娘の方が筋が良い」と嘆いた。

一瞬、ムツとしたリンドだったが、神剣アテナイと呼ばれた白い剣にネイル・フリー・トゥーンがさんざんボロクソに言われていた事をかぎるに聞いていたので、こいつはかぎるに託けて八つ当たりの為に姿を現したのではないかと内心で思う。

「そ、そんな事はないぞ、リンド」

ふいにネイル・フリー・トゥーンが声を上げたので、その慌てぶりと同様に、リンドは驚く。

「……聞こえてんのか？」

一転して、落ち着きを取り戻したネイル・フリー・トゥーンがいつもの厳格な声で話し始めた。

「当たり前だ、我はいつでもお前のすぐ側にいるといった筈だぞ。我はお前の発する声も、内なる声も聞こえている。その逆も然り、本来ならお前も常に我の声が聞こえていなければおかしいのだ。つまりはそれが『対話する』という事だからだ。具現化しなければ話せないなどとは誰も言っていない。そもそもリンド、お前はその具現化にしたりって水を媒介にしなければ我を形状する事もままならないではないか」

ネイル・フリー・トゥーンの長々とした小言に付き合わされて、リンドはぐうの音をあげそうになったが努めて冷静に「で、結局何が言いたい訳？」と尋ねた。

「……ん、むう。…つまりはだな、お前は頭が固いと言いたいのだ。

自らの常識を打ち破り、想像力の限界を突破せぬ事には、これから先戦つていく事は出来ぬぞ」

ネイル・フリー・トゥーンがようやく本題に入るのを見て、リンドはわざとらしく佇まいを直して見せる。

「いいか、リンド。これから話す事は剣の理、つまりは我という剣の『道』の歩み方についてだ。剣は死（始）から始まり老（牢）、青、少を経て剣に至ると伝えておいた筈だ。そして、我は水の力を支配しているのはお前とて分かっているな。その左右には風と土が存在し、対極に火が存在する。左右と呼ばれるそれらは、我と相性は悪くはない。つまりそのどちらでも構わないが：今回は風：」

そこまで一息に話した後で、ネイル・フリー・トゥーンはあからさまに舌打ちをした。

内心で「お前、風と相性悪いじゃないか」とリンドが呟くと聞こえたのであろう、ネイル・フリー・トゥーンは咳払いを一つした後で話を仕切り直す。

「今回はアテナイが近くにあつたせいもあつてか、お前自身の中で水と風の融合というイメージが自然と湧いたのだらう。それをもつて死（始）のち老（牢）へと至つた訳だ。：次は水と土のイメージをもつて青へと向かえばいいのだ。水と土のイメージの融合など、そう難しい事では無い筈だから、本来ならそこへ至る事とて容易い筈なのだがな……。つまりそれが出来ないのは、お前の頭が固すぎるという事に他ならん」

確かにそれは雑作のない事のように思えた。

水と土。例えば、大地を流れる川のイメージ。しかし、だからといつて何だ。それが戦闘とどう繋がる？

リンドが頭を悩ませるのをうんざりする様に、ネイル・フリー・トゥーンは割り込むと話を続けた。

「リンド、お前は火に水をかけたらどうなると思う？」

そんなの簡単だ、消えるに決まつてる。リンドが口にするより早く、頭に浮かんだその答えにネイル・フリー・トゥーンは同意する。

「その通り。なぜなら我と火は対極の存在だからだ。……だがな、リンド。もしお前が燃えさかる炎の様な水を想像出来たのなら、我とお前は一つの究極、最強へとなるであろう。常識を打ち破るほどの想像力こそが、お前自身の想を叶える為の力となる。つまりは、それが創に至るといふ事だ」

沈黙。

おそらくリンドはその頭の固さゆえ、再び悩みもがくだろう。ネイル・フリー・トゥーンはそう踏んでいた。

しかし、それは間違이었다。

「最強」その一言にリンドは惹かれていた。自分が最強になればもう誰も傷つかずに済む。その想いだけで、リンドは事もなげに呟いた。

「そつか。分かったよ、ネイル」

「……ネイル…？ 馬鹿もの！ 我にはネイル・フリー・トゥーンという由緒正しき名前が…」

自身の呼び名に憤るネイル・フリー・トゥーンに、今度はリンドが割り込む。

「いや、だってネイル・フリー・トゥーンって、いちいち長いだろ」

リンドは声を上げて笑った。

第七章 紗梨 一夜（サリー）

第七章 紗梨 一夜（サリー）

1

穏やかな朝を迎えた。

通勤ラッシュにはまだ早い時間帯の、春の陽射しと静かな街並がいつもと変わらぬ日常を連想させる。

少しずつ一階の食堂へと集まり始めた生徒たちの中にトーノとかぎるの姿を認めると、リンドとユアンは挨拶を交わす。

血だらけだったユアンは昨日入浴を済ませた後で、リンドとの相部屋たる居室の住人の物と思われる少し裾の足りないブラウス風のシャツに袖を通していた。それは原色を沢山使用した派手目のヤツで、高校入学に際してオシャレに目覚めたらしいユアンの中学の頃のでたち、つまりはテキヤスタイルをリンドに思い起こさせた。

「おっ、なかなかいい感じ」と一人満足気なユアンを見て、リンドはオシャレつてのは分からないもんだ、と一人納得できずにいる。ユアンはそのシャツの上に、これまた住人の物の赤茶色のカーディガンを羽織っていた。これぞおばあちゃん風というそのカーディガンは、温かみのある見た目と共に、防虫剤の匂いがした。

ユアンお気に入りのベージュ色のカーディガンは残念な事に左の胸にぽっかりとした穴が開いてしまっている。泣く泣くユアンがそれを処分しようとしたところ、思いがけずトーノが欲しいと言い出したので彼女に手渡された。

カーディガンはユアンの血がべったりと付いていたが、トーノは染み抜きするから良いのだという。

「さすが、分かる人には分かるんだよなあ、良い物つてのはさ……」
感慨深げに話すユアンを見て、「あんまりちょーしに乗せちゃダメ

だよ」とかぎるがトーノに耳打ちしていた。

今朝のトーノの姿を見ると、さすがに左胸の部分の前後に開いた穴はそのままだったが、どうやったのか昨日の血の跡はおるか、染み一つ無いベージュ色のカーディガンをセーラー服の上に羽織っていた。

食堂では昨日、焼きそばを作っていた三名の生徒が、手際よくホットプレートで目玉焼きを焼いていた。

卵の焼ける音を横目にユアンが、かぎるに声を掛ける。

「かぎる、お前どしたの？その顔」

かぎるの顔は、ぐっすりと休んで疲労の色が取れたとは到底思えない表情をしている。

生徒の一人が運んできた目玉焼きとご飯を受け取りながら、かぎるは深い溜息をついた。

「アテナイよ。あいつついたら夢の中にまで出てきて、ギャーギャーと喚き散らすもんだから堪ったもんじゃないわよ」

トーノが苦笑いを浮べた。

「それでかぎるちゃん、夜うなされてたんだ」

げんなりとした表情のかぎるの隣で、自分から話を振ったくせにユアンは会話にまざる事もなく夢中になって朝食を食べている。目玉焼きとご飯と味噌汁、こんな状況ではご馳走といえなくもない。とはいえ、いきなり無関心を決め込んだユアンに面白くないのか口をへの字に結んだかぎるを見て、場を取り成すようにトーノが話しかける。

「……じゃ、じゃあ、大変だったね、かぎるちゃん。かえって疲れちゃったんじゃない？」

トーノの顔へと向き直ったかぎるは、のんびりとした声色で答えた。

「まあね。でもその甲斐あって必殺技の一つくらい覚えただけさ。でも、そしたらそしたってヤツで。……ホントは『かぎる的必殺り

うついせん』って名前にしようとしたんだけど、アテナイが絶対ダメだって……」

(…必殺技を覚えた…?)

リンドは内心でギョツとした。

(……こいつはひょっとして、ネイルが言うように、かぎるは筋が良いのだろうか?)

(……だったら、自分は……)

「……リンド。リンドってば、ねえ聞ってるの?」

かぎるに、そう話しかけられてリンドは再びギョツとした。

「な、なんだ?かぎる」

「だーからあ、リンドも夢の中に現れたの?ほら、あの……なんてったつけ?」

自身のレベルにサククリと追いついた、かぎるの大きな瞳にたじろぎながらもリンドは勤めて平然に振舞う。

「ああ、ネイルか。出てきたよ、夢の中に。……って事はかぎるも見たのか?あの映像」

青い光を灯すツーハンドソードの名前を思い出した後で、かぎるが小さく頷いた。

2

昨夜、散々語った後で、消える間際にネイルは「ここが分かるか?」とリンドに尋ねた。

その瞬間に暗闇の中に映像が浮かぶ。

「まあ、お前の脳内の記録から引き出してきた映像だから、分からないということもあるまい」

その映像は別に珍しいものではなかった。実をいえば、つい数ヶ月前にユアンとかぎる、そしてゆかりと一緒に高校の合格祈願と称して行ってきた場所である。

「……八幡神社」

ここいらでは一番大きなその神社は、今リンド達が居るグループホームからも、さして遠くもなく位置している。

よく聞いておくように。そう念を押した上でネイルは言葉を発した。

「どうやらこの場所の何処かに、我やアテナイと同じ神具が一つ、『魔剣ハーデス』が姿を隠しているようだ」

リンドはきよとんしたままで、質問を口にしようとしたが、内なる言葉を聞いたネイルは早々とその質問に答える。

「我々はある程度近づくと、互いにおおよその位置を感じることが出来るのだ。共振作用というものだな。だが、自ら姿を隠しているハーデスの正確な位置は我にも分からない。後はリンド、お前達に探して欲しい。御影という男が語っていた通り、神具は敵も探している。おそらくプラテネリ使い達もハーデスの存在に気づき始めている事だろう、^{ハルモニア}奴等の手には決して渡すな」

動きがあれば神具が教えてくれる。どうやら御影の言っていた事は正しかったようだ。

リンドは応じるように、かぎるに頷き返した。

朝食を終えると、旅立ちの準備を早々と済ませて一同は施設の外へと出た。

妙な格好をした生徒たちの一人にバクの位置を把握できる地図とあのビー玉をリンドが手渡す。

リンド達の進む道がより危険である以上、彼らとは今後、共に行動する事は出来ない。

清南高校の惨状を忘れる事は出来なかったが、如月高校にはしっかりとした防衛体制が整えられていると皆に伝えた。ヒリユー先輩

を失ったとはいえ、あそこにはまだハツチこと蜂谷白銀いるはずだ。
(……ならば、大丈夫)
頼れる友のいる少し離れた空を、リンドは想った。

一団が歩き始めるのを見て、リンド達もまたその逆方向へと歩き始める。感慨深いような表情を浮べるかぎるは、ふとユアンの姿に違和感を覚えた。

「ちよつと、ユアン。なんであんたがトーノちゃんの竹刀持ってんのよ」

質問に答えることもなく足早に歩くユアンは、かぎるの視線から逃げるようだった。

3

リンド達が歩き始めると十分も経たずにして、八幡神社には着く事ができた。

本来なら正面を望む、長い石造りの階段を上っていくのが参拝の礼というものであるが、今はそんな悠長な事も言つてはいられない。リンド達は丁度神社の裏側に位置する駐車場から境内の様子を伺う。駐車場から進み、舗装された山道を通つ切れば何のことはなく境内までは一直線である。しかし、そう簡単にはいかないのが世の常というヤツであろう。

山道には例の、ピンク色の肉塊「バク」が目に残るだけでも四匹うるついていた。

「バケモノにも信仰心つてのはあんのかな？」

ユアンが辟易へきえきとした調子で皮肉を吐く。

駐車場の隅、茂った笹林の影から様子を伺う四人がさてどうしたものか、と思案していた將にその時だった。林の間から転がるよう

にして二匹のバクが這い出てきた。

「うそ」

愕然とした声をかき上げるが上げると、二匹のバクが威嚇の「ガアアア」という声を上げるのはほぼ同時だった。

両腕を上げて、わざとらしいほどの威嚇に対して反射的にユアンがトーノにもらった竹刀を振るう。それはある種の破れかぶれにも似た行動だった。

反射的に振るった行動とは裏腹に、冷静な頭の中では「どうせこいつらにはこんな攻撃なんか通用しない」と理解していた。だが、以外にもバクはその一撃を受けて昏倒してしまった。

予想外の出来事に「うそ」と今度はユアンが呟く。

一同が唾然としていいる中で、もう一匹のバクが拳を振り回した。その素人然とした攻撃に脅威は全く感じられなかったが、避けた拍子にかきぎるが尻餅を付く。

リンドがペットボトルのフタを外し、トーノが戦具アルマを鞘から抜いた。しかし、その場に居る誰もが反撃の態勢を整えるより早く、一本のナイフがそのちよつとしたドタバタ劇に決着を着ける。

拳を振り回していたバクは、右のつぶらな瞳に風を切つて飛んできたナイフが突き刺さるのを確認すると、思い出したように大の字に倒れた。

四人が拍子抜けたように転がるバクを見つめる中で、場にひよっこりと現れた全身黒づくめの小柄な男は、何事もなかったかのようバクの右目からナイフを引っこ抜くと「よう」と口を開いた。目深に被ったニットキャップからいつもの無表情を覗かせる。

「……サリーくん」

ユアンが呟くとサリーは「まだ、生きててなにより」と返したが、その声色には特に感情は感じられない。

「今まで、どうしてたんですか？」

リンドが尋ねると、サリーはおもむろにタバコを啜えて火を点け

た。

「……あれからずっとベアトリーチェを探してんだが、全く持って手掛かりは無し。この辺りを当たってたら、化け物がウロチョロしててな、狩ってたとこだ。……ところでリンド、理由はわかんねーけど、この辺の化け物はまるで相手になんねーぞ」

あれから一昼夜、モデル並みのスタイルを持つゴスロリ彼女を探していたサリーの言うとおり、何故だかバクの耐久力は、竹刀の一撃で沈むほどの人並程度になっているようだ。

(……何かがあったのか……?)

リンドが一人思索するのを制するようにサリーが声を掛ける。

「で、お前からこそ何してんだ？」

リンドが今までの経緯^{けい}を話すと、それをサリーは黙って聞いていた。そして、聞き終えた後、意外な提案をしてきた。

「そんなら、正面側で俺があいつら引き付けておいてやるから、お前らは騒ぎが起こったら、このまま裏手から忍び込めばいいさ」

事もなげに自分が囷^{おとひ}になると言い出したサリーにリンドは目を丸くする。まさか、サリーがそんなことを言うなど、リンドには思いもしない事だったからである。

「……でも……サリーくん……」

リンドが言葉を詰まらせるのを聞きながら、サリーが口を開く。

「お前、なんか勘違いしてねーか？ さつきも言ったるが、俺はただあいつらを狩ってる最中なんだよ。別にお前らの為って訳じゃねーんだよ」

腕組みしながらサリーの話聞いていたユアンが、深々と溜息をついた。

「んーじゃあ、俺も囷やるよ。サリーくん一人にはっか、無理させらんねーしさ。」

リンドが口を開くより早く、ユアンが話を続ける。

「ま、バクどもがあの程度だつてんなら、時間稼ぐくらいは楽勝でいけるだろうしき。その先にいんのが、プラ何とか使いつていう奴等なら、俺じゃそいつらとは結局戦えねーだろうし」

そう言った後、ユアンがねだるとサリーは渋々タバコを一本手渡した。タバコは切らしているのに「ライターは自分のがある」と言つて、ユアンは手際よく火をつけると「まあ、任せとけ」と呟く。

紫煙を燻くぶらせながら、二人の男はのんびりと戦場へと向かつて歩き出した。

4

ユアンとサリーが姿を消して十分と経たないうちに、神社の正面を望む大階段の方が騒がしくなった。リンド達が潜む神社の裏側をうろついていたバク達もおぼつかない足取りでそちらを目指して走り出す。それを確認した後で、リンドとトーノ、かぎるの三人は息を殺して境内に足を踏み入れた。

(サリー先輩がついてれば、大丈夫だとは思つが……)

リンドが言い聞かせるように、ユアンの安否を気にした時、リンドとかぎるが持つ剣帝ネイル・フー・トゥーンと神剣アテナイの刃が鈍く光る。

共鳴作用により姿を隠していても魔剣ハーデスに近づけば近づくほど、互いの共鳴で刃の輝きは増す、と昨夜ネイルが教えてくれた。その輝きを辿るようにして歩くリンド達はやがて本殿の前へと辿り着いた。

「ここにあるのか……?」

呟いた後、両隣を見渡す。

トーノとかぎるが揃つて小さく頷くのを見た後、リンドは頑丈な

造りの木戸を押し開いた。

ぼんやりとした薄暗い本殿内に目を凝らした時、奥の薄い闇の中から男のくぐもった声が響いた。

「どうやら此処こゝで正解らしいが、結局、先に見つけんのは無理だったなあ」

その瞬間、三人は一斉に互いの剣を構える。そんな三人の事など構わないように、さめざめと話した長身の声の主に、傍らに立つ少年が見上げるようにして話した。

「ま、いいじゃない。これはこれで楽しみが増えたんだしい」

少女のような顔をおもいきり破顔させる少年のきらきらと輝く瞳に、面倒くさそうに逆立てた赤い髪色の頭を？かきむしると長身の男はリンド達を見据えた。

「嫉妬『リヴァイアサン』の櫛灘くしなだ 紅音あかねだ。取りあえず、お前ら、もう逃げらんねえから、大人しく降参しな」

紅音と名乗った男はわざとらしく腕を宙へと伸ばすと、指をパチンと鳴らした。すると本殿内の闇に紛れていた影が動き出す。

そこには無数のバクがいた。

(！……！畏か！！)

リンドは踵かかとを返したが、予め本殿の裏に隠れていたらしいバク達に出口を塞がれる。

「面倒くせえから、先に説明させてもらうけどよ。俺の嫉妬『リヴァイアサン』は対象物のデータを読み取ってコピーするってだけの能力でな。はつきり言って戦闘向きってヤツじゃあ無いんだけどよ。魂を持たないアンノウンのデータはそっくりそのまま頂けちゃうってわけ。そこでそれに俺様の自我データを書き込んで、それを自我のデータを持たないバクにダウンロードをしてやりや、はい！即効で俺様専属の下僕の出来上がりってわけさ。まあ、俺様の自我データを上書きしてるあたり、下僕っつーよりは俺様の分身っつー方が近いんだけどよ。……っつっても何の話かさっぱり分かんねーか？

まあ簡単に言やあ、元々は大した事のねー能力なんだけども、この『世界』じゃ、まるで最強ってわけよ。そんな訳だからよ、面倒くせえから抵抗すんなよ？」

リンドには男の言っている事や、意味不明の単語を理解する事は出来なかつたが、男がこの広い本殿内を埋め尽くすほどのバクを操っている事、つまりは絶望的な状況を理解する事は出来た。ここだけでもおそらく四十〜五十のバクがいるだろう。ユアンとサリーが引き付けてくれているバクも合わせると一体どれだけになるのか？最早そんな事考えたくもなかつた。

檳灘紅音は悦えつに入るような視線でリンドを見据えていた。するとそれを気に食わないとでもいうように、隣に立つ少年が咳払いをする。

紅音は少年を煩わしい物でも見るように一瞥すると、面倒くさそうに顎で合図を送る。

それを見届けた後、少年は満を持して名乗りを上げようとした。しかし、その間際、かぎるが震えるように呟いた。

「うそ……どうして、クロエちゃんがこんな事……」

5

少年の明るい笑顔は一瞬で消え去ると、苛立つような表情へと変わり、舌打ちだけが響いた。

「ぎーんねんだけどお、僕は黒恵くろえケイじゃないよ。ケイの弟のキリ。暴食『ベルゼブブ』の黒恵 キリさあ」

少年は話しながら笑顔を取り戻したが、それはさつきまでとは違い、人を蔑むあはれような毒々しい嘲笑うらやみへと変わっていた。

160cmに満たない小柄な身長に、綺麗な顔立ちは中性的であり、その姿は確かに以前かぎるに見せてもらった雑誌に載っていた

モデルのクロエそのものだった。それは即ちリンドがかぎるに雑誌を見せてもらった半年前の姿、そのままという意味で、だ。

しかし、その雑誌の女性がこれ程までに醜悪な表情を作れるなどとは、リンドには到底思えない。だから、それが瓜二つの弟だからだと言われれば納得のしようもあるのかもしれないが、かぎるにとってはそれが本人だろうが弟だろうが許せない事には変わりが無かった。

クロエは、かぎるにとって、運命の人だった。

中学生生活も終わりに差し掛かる三年生の半ば、かぎるは悩んでいた。

それは自分はこのままでいいのか、という思春期特有の実に他愛の無い悩みではあったが、かぎるにとっては正に大問題であった。

「自分には何も無い」という焦りが、ただただ、かぎるを追い込んだ。

確かに頭が良いと人に威張れるほどのものではないにしろ、下位に属している訳でもなく、スポーツ万能で短距離走では中学の代表に選ばれるほどの足の速さは、何よりのアドバンテージではないかとリンドもゆかりも、ユアンでさえもがそう言ってはばからなかったが、当の本人には至って不満だったらしい。

そんな彼女が二ヶ月にも及ぶそのモヤモヤから抜け出せたのは、正にそのクロエのおかげであった。

「ねえねえ、見てよ！リンド！」

そう興奮して、かぎるが持って来た彼女愛読のファッション雑誌の特集は、モデル達の休日なるもので、その中の一人がかぎるご贖のクロエだった。

彼女はその特集の中で自身の趣味、アニメフィギュアの収集とプラモデル作りを公言していた。

「ね！」というかぎるに「は！？」と答えただけのリンドであったが、当のかぎるは「あたしは、あたしそのままがいいんだ」と、別

にリンドの受け答えなど期待していなかったかのように、一人悦に入っている。

その日をして運命の日と位置づけたかぎりは、それからというものの、ゆかりをも巻き込んだ自身のルーツと言い切った90年代のアニメの探求に勤しんでいる。そのまま高校進学を果たしたかぎりの言い分によれば、蒼姉あおねえに付き合って自身の身体能力を伸ばしている場合ではないとの事らしい。

その人にとって価値のある人物の墮悪たあくは、限りのない衝撃に満ちている。

リンドやユアンにとっての千歳 翠子がそうであったように。かぎるにとっては、それがモデルのクロエ自身ではなく、弟だから許されるといふ類のものではなかった。

(そんな悪い事に付き合って、お姉ちゃん知ったら悲しむよ) かぎるの瞳に浮かぶ、やや傍迷惑はためいわくなその冷めた怒りを黒恵キリは十分に理解しているのだろう。だからこそ、尚更にわざと醜悪な表情を作って見せているのだ。リンドはそれを十分に察した。だが、リンドが行動を起こすより早く黒恵キリが吼ほえた。

「うるっせえーんだよ!!! E・D持ちがグダグダと、くつだらねえー 事ばつか言いやがって! おまえらの為に生かされてる者の! 自分には何も無い者の痛みも苦しみも知らねえーくせしやがって!!!」

怒号の中で、リンドはぼんやりと思い出す。

(……………アンノウン……………アイディー……………なんだ……………何処かで……………! ……: そうだ、ネイルを手に入れたときの、あの公園でフードの男が言っていた言葉……………)

しかし、リンドの思考を断ち切るように黒恵キリが吐き捨てる。「……………もついいよ、お前ら、殺すからさあ…喰くい尽くせ、暴食『ベルゼブブ』!!!」

黒恵キリの正面に黒い小さな点が現れたと思った刹那、それは一人覆うような球体へと膨らんだ。

6

音も無く走る黒い球体は、あっという間にかぎるの眼前へと迫った。

「キリ、やめろ！！そいつらは生かして連れて来いってジャツジマンが……」

櫛灘紅音が言葉を言い終えるより先に黒い球体は静止する。かぎるの見つめるその視線の間近で、歴史を感じさせる木の匂いと、本殿内のふわりと舞った埃が掃除機にでも吸われた様に黒い球体へと吸い込まれた。

「わーかつてますつて、じょーだん、ほんのじょーだんですつて」
紅音に向かつて少し意地悪そうに舌を出してみせるキリだったが、その瞳の色は薄暗い。

紅音はそれを見て安堵あんどの表情を見せつつも、小さな溜息をついた。それは傍目にも「子供」に引つ掻き回されて面白くない紅音の苛立ちを理解させるのに十分な所作だった。

「ともかく、だ」と紅音は早口に仕切り直す。それは、キリに一時持つていかれた手綱たなづなを握りなおすという事。

（つまりは、この男は自分たちに与えられた仕事を手早く済ませたいのだ）

一人、逆転の為の思考をフル回転させていたリンドだったが、すでに締めに取り掛かった紅音の言葉に完全にその息の根を止められる事になった。

「俺らの仕事はハーデスの確保と、お前らをジャツジマンの元に連れてく事なわけで。そこから先は、ジャツジマンとお前らで勝手にやってくれりゃあいいさ。まあ、なんだ。この圧倒的戦力差でもっ

て、諦めてくれつとありがてえんだが？……こつちにや人質もいるわけだし」

本殿の裏戸から入ってきた二体のバクが床に放り投げた先で、ユアンとサリーが転がった。微かに身体を動かすのを見て、二人の息があるらしいという事と、打つ手は完全に無くなったという事をリンドは理解した。

深く息を吐いた後で、未だ剣を構えるトーノとかぎるに終わりを報せるように、紅音とキリに降伏の意思を示すように、リンドは携えた剣帝ネイル・フリー・トゥーンを下ろした。

しかし、愛刀を床に置こうとした時に、それは起こった。

本殿の木戸が音を立てて破裂すると同時に、けたたましい銃声が鳴り響く。木戸近くにいたバク達がバタバタと倒れていくのを見て、リンドはトーノとかぎるの身体を庇うように床に伏せた。

バクの死体が転がり、埃くさい臭いが覆う中を掻き分けるようにして、サブマシンガンを装備した迷彩服にガスマスク姿という集団が本殿内に入ってくる。その後で、のんびりとあくび交じりに入ってきて来た一見して畑違いのストライプ柄のカッチリしたスーツに、青色のプラスチックフレームの眼鏡、ぱつつりと切り揃えられた黒髪が印象的な若い男は辺りを見回すと満足そうに笑った。

「や、どうも。どうやら、閉幕前へいまくには間に合いましたかねえ？」

男を取り囲むガスマスクの集団に、先程の銃撃で腹部から血を流しつつも辛うじて息のあるバクが掴つかみかかった。

バクが掴み、剥はぎ取ったガスマスクの下から出てきたのも、またピンク色をしたバクの顔であったが、そちらのバクは細身で顔中にツギハギを縫い合わせたような傷があった。ガスマスクを剥ぎ取られた迷彩服のバクは何事もなかったかのように、銃口を向けると引きがねを引く。

ガスマスクを握ったままで、バクの顔にはその原型を留めぬほど

に穴が開いた。

その場にいた五十近い数のバクがたじろぐ。

同じバクとはいえ、紅音の種明かしによれば、紅音専属の僕ともいべき彼らは、所詮は紅音の自我データを分け与えられた分身に過ぎない。つまりは人間の心理の域を超えてはいないのだ。だからこそ、殴りつければ気絶もするし、銃で撃たれば死んでしまう。どんなにも凄い力を持っていても、銃の殺傷能力を理解し恐れているのは、人としての櫛灘紅音自身に他ならないのだ。

リンドは倒れこんだ姿勢のまま、紅音を見上げる。その紅音は苦々しい表情を浮かべると言葉を搾り出した。

「クロノ・クロイツ（神聖なる黒十字）！！なんで、お前らがしゃり出てきてんだ！！」

7

「だって、魔剣ハーデス。そりゃ、欲しいでしょ」

事も無げに話す青色フレームの眼鏡の男は、そのまま続けた。

「すり潰せ、ユリウス」

唸るような排気音が聞こえた。

迷彩服のバク達が道を開けると、全身を覆う金色の装飾が目にも美しい生気の無い顔をした美しい少年が歩み出る。あまりの滑らかな動きで、一瞬では気づかなかつたが、それは骨組みだけのマネキン人形に金色の外装をはめ込んだだけの危ういまでの脆さを垣間見せていた。

金色の外装の隙間から中の骨格や巨大な歯車を覗かせる。

（ユアンの言ってた……ゼンマイ仕掛けの人形！？）

見た目の無機質さとはあまりにかけ離れた、人間のものとしか思

えない程の滑らかな動きに恐怖を感じつつも、リンドはそれから目を離すことが出来なかった。

ゆったりと歩くそれから目を離せなかったのは紅音も同じだったが、一瞬の後、我に返った彼は唸るように吼えた。

「……………くっそ！我が痛みを知れ、嫉妬『リヴァイアサン』！！」

その名を告げると同時に紅音の傍らに現れた影は、白いドレスを纏ったやせ細った女性の形をしている。長い黒髪から覗く顔には黒い包帯が巻かれ、表情は分からないまでも苦しみ悶もたえているように見えた。女の胸元には、一見すると幼児が食事をする時に使用するティブル状のものが見て取れる。その白いドレスの胸元と融合するようにして生えているその上で、女はピアノでも引くように指を動かす。

(パソコンのキーボードみたいだ……………)

目を凝らすリンドは何となく思ったが、しかし、それは紛れも無く白いノート型のパソコンの形状をしていた。

女はノートパソコンのキーを叩く。その指の運びは、解除コードを示していた。

ブルブルと震えだしたバク達から、唯一感情的だった瞳の色が失われる。

自我データを失ったバク達は血気盛んで、食欲旺盛じよくおうせいな元の姿を取り戻した。そして、悠然ゆうぜんと歩み寄ってくるゼンマイ仕掛けの人形をその視界に捉とらえた。

ユリウスと呼ばれた人形に、鼻息荒く一匹が飛び掛ると、後を追うように数匹のバクも動いた。

マネキンの表情は曇くもることなく、ユリウスは右手を持ち上げる。

瞬間、右手が外れると手首から筒状のものが顔を出した。

「ハルス・ブリューナク（静眠の槍）……ソウシャ」

抑制された声が響いた次の瞬間、筒から眩いばかりの金色の光が帯おびとなつて放出された。

それは次々とバクを貫き、貫かれたバクは次々とウイルスにでも冒されるようにそこから広がる金色の光に吞まれては消えていく。

バクは本来の力を取り戻していたが、それでもなおユリウスとの力の差は歴然だった。

バクが消えるたびに「くそっ！」「くそっ！」と苦々しい声を上げていた紅音だったが、覚悟を決めるといふより、打つ手を失った者の狼狽する声で、自身では不本意極まりないその言葉を告げた。

「……ハ……ル……ニ……レ……」

女の白いドレスに吞まれるようにして同化すると、裏返るようにして女の胸元に張り付いたノートパソコンの液晶画面に紅音の顔が映る。女の額は音もなく裂けると、爛々（らんらん）と輝く巨大な赤い目玉が出現し、女の腕は目玉の無い数十匹もの蛇へと形を変えていた。

舌をチロチロと出し、うねるように動くおぞましい数の蛇は、鋭い牙を立てるように一斉にユリウス目掛けて襲い掛かった。

いまや蛇の化け物と化した紅音と、その紅音の蛇をブリューナクの光で打ち落とし続けるユリウスの姿に、リンドもトーノもかぎるも目が釘付けになっている。

その時、彼らの視界から外れた本殿内の端で、一つの影が身を起こす事に気づいた者はいなかった。

きたのは中学二年の夏だった。

前の中学ですでにヤンチャの極みだった彼は、新しいクラスでの自己紹介の挨拶の時も、逆立てた下品なまでの金髪に、訳の分からない四文字熟語があちらこちらに刺繍ししゅうされた長ランと呼ぶにしても余りに丈の長い学生服を着ていた。

そんな彼に一人だけ爆笑する制服の上にジャージを羽織る女生徒は無視して、彼が真つ先に目を付けたのは、クラスの中でも一際目立つ背の高い男子生徒だった。こういうのはまず始めが肝心なのだ、と今までの経験から学んでいた彼は転校早々にしてその男子生徒に喧嘩を売った。

その背の高い男子生徒、当時のリンドこと氷ヶ守燐人は、普段ならそんな安い挑発にも乗ることも無いのだが、運悪く丁度その頃の彼ほんの少しだけ荒すさんでいた。

膝の怪我で、バスケット部の選抜メンバーから外れた事がその原因だった。

むしゃくしゃとした気持ちを爆発させるというその安直な理由で、二人はその日の放課後、早々にして学校の屋上で激突するという恥ずかしい行為（後にリンド曰く、一生の後悔）に及んでしまった。

結果、ユアンは人生初の敗北を喫し、バスケットの出来ない憂さを晴らしたつもりのリンドはそれがバレて部活自体への半年間の出禁を喰った。

上には上がいるものだな、と目から鱗うろこの落ちたユアンはそれ以来、一緒に近隣の中学を支配して天下を取ろうなどと言って、何かにつけてリンドに付きまとい勧誘しまくった。

リンドの誕生日には、自分の『狂王』キョウオウ使用の物と同じ『悪来』アクライと刺繍された白い特攻服を贈ったり、またある時は「バスケットのできな鬱憤うつぶんを、俺と一緒に拳で晴らそう」などと自覚の無い殺し文句で誘ったりもした。

結局、転校してから卒業するまで、ユアンがクラスから浮いていたのは変わらなかったが、怖いもの知らずの風早かぎるや、他の生

徒との溝を少しでも埋めようと（必要以上に最後まで）躍起やじきの美作ゆかり、そして、何のかんの言いつつも放っておけない性格の根っからのお人よし、リンドのおかげで、それなりに楽しいスクールライフを送れたものである。

（しかし…）とユアンは思った。

しかし、ここまでボロクソにやられたのはいつ以来だろうか？

ああ、あの時以来だ。ハッチから授けられた秘策で五人までは倒したものの、その後で囲まれてボコボコに殴られた岸中との決戦以来だ。

（……あの時も、結局最後には助けに来てくれたっけな、リンド…）

その時、ユアンの体がビクリと震ふるえた。

（ヤベ、これって走馬灯？走馬灯じゃね？！）

這いつくばったままで、何とか首をもたげてみるが身体はそれ以上動かない。

それでも現状を把握すべく、今見た情報を整理しようとしたが、それはそれで余計に混乱するだけだった。

視界いじの先では、以前に見たゼンマイ仕掛けの人形と蛇の怪物が対峙たいじしている。

いつの間に、怪獣大決戦の様相を呈ていしていたのだろうか？と自問するユアンは、すぐ隣で起きた出来事に更に目を丸くした。

自分と同じくボコボコにされたはずのサリーがすつくと立ち上がると、膝についた砂を払っていた。

「……サリーくん、なんで立てるの？」

呻うめくように喋しゃべるユアンをサリーは見下ろした。

「あんまり殴られねーうちに、やられたフリしたからな。俺は初めてから、なるべく無傷でここに来たかったんだよ」

(なんだよ、それ。先に言っといてよ……)

ユアンは止めを刺されたように、再びうつぶせると動かなくな
た。

そんなユアンのことなど無視して、サリーは本殿内の中ほどにあ
る柱に向かって声を発した。

「ほらよ、来てやったぞ」

サリーがそう告げると同時に、柱の中から黒い装飾の施された小
太刀と呼べるほどの小振りな剣が出現すると、サリーの差し伸べた
左手に滑り落ちた。

9

出現すると同時に剣は辺りに黒い閃光を放った。それでようやく
リンド達は、サリーが立ち上がったことに気づいた。

三人は駆け寄ると、サリーの掌てのひらに乗るそれを見る。

「……これが魔剣ハーデス？……ってことは、サリー先輩がその所
有者って事ですか？」

リンドが尋ねると、サリーは「ふうん」と鼻を鳴らした。

「そういう名前なのか、コイツは。俺はコイツが早く来いってうる
さいから来ただけだ」

リンドは声も出なかった。つまり、この人は最初から囿になるつ
もりはなかったって事だ。

(……と、いう事は、ユアンは体よく囿の囿にされたという事にな
る)

そこで、リンドは思い出した。

「ところで、サリー先輩。ユアンのヤツは？」

「多分、まだ生きてんじゃないかね？」とサリーが呟くと同時に、うつ

伏せのユアンを見つけたかぎるが「ぎゃあー」と叫んだ。

「まったく、どうしてあんたは、いつつもいつつも死に掛けてんのよー!」

口ではそう言いつつも、ユアンの怪我をくトネリコへの風で癒すかぎるの顔に安堵の色が浮かんでいた。

「人の悪いサリーくんのせいだったの」とブツブツと文句を言いながら、胡坐がかけるほどに回復したユアンだったが、その後ろにいつの間にか忍び寄った影が声をかけた時「ひゃっ」と言っ、今更ながらに死んだフリをする。

「いやはや、先越されちゃいましたかあ」

一同の視線を集めるようにして、青いフレームの眼鏡を掛けた男が立っていた。

「私らの目的は所有者込みでは無くて、純粹に剣の収集なもんですから、ここであなた方を皆殺しにすれば話が早いですよがねえ……。どうやら、時間がないようです。私らはこれでお暇しましよ。向こうも終わったようですしね……」

彼が視線を預けた先をちらと覗き込むと、ユリウスの最後の一撃で蛇の怪物が崩れ落ちるところだった。その一瞬間の後、紅音は赤い砂と化して消えていく。

早々と踵を返そうとする男を、リンドが呼び止めた。

(こいつらがクロノ・クロイツなら確かめなければ)

しかし、リンドが質問を紡ぐより早く、男は話し始めた。

「そう焦るものではないよ、氷ヶ守燐人くん」

今しがた会ったばかりの男にフルネームで呼ばれて、リンドはギョツとする。

男はそれを見て、含み笑いを浮かべながら話を続けた。

「所有者の事くらい調べておきますよ、そりゃあねえ。聞きたいのは清南の生徒のことでしょう?…美作ゆかりちゃんでしたっけ、幼

馴染らしいですねえ」

掴みかからんばかりの表情のリンドを制するように、男は右手を広げて見せる。そして、左手でズボンのポケットから名刺入れを取り出すと仰々しく一枚抜き取った。

「クロノ・クロイツの『カリグラ』です。以後、お見知りおきを」
差し出した名刺には クロイツ・コーポレーション 営業課 係長 沼田新太郎 が×印をされて、クロノ・クロイツ 作戦参謀長 カリグラ と記されてある。

「まだ、清南の生徒には手を出してませんから、とりあえずは安心を。ゆかりちゃんも含めて清南の生徒は、その名刺に記載されている本社ビルにいるので、助けたかったら訪ねて来て下さい。手土産代わりに、集めた剣はくれぐれも忘れずにねえ」

にやけたままでカリグラは倒れ伏しているユアン以外を順に見回したが、サリーのところまで視線を止めた。

「ああ、そういえば清南以外の生徒も何人が混ざってましたねえ。その中の一人に変わった格好の女生徒がいました。なんて言うんですか、あれ。そうそうゴシッククロリータ風とでもいうのかな。格好はどうあれ、綺麗な子でしたねえ」

サリーの瞳が鋭くなる。カリグラという男の発言は、全て分かった上でのものであると誰もが理解した。

「まあ。彼女らがああなる前に助けに来ることですねえ。…行くぞ、ナルコレプシー」

カリグラは、ゆかりやベアトリスが最終的に行き着く先になるだろうと匂わせたガスマスクたちを引き連れて本殿から姿を消した。

10

それから五分と経たずして、リンドはカリグラが引き上げた理由を理解した。

彼らの宿敵ともいうべき御影慎の率いるフォウシャル・クロイツが姿を現したからである。

総勢二十名のフォウシャル・クロイツの一隊が本殿内を制圧した時には、カリグラとガスマスクたちも、そして、黒恵キリの姿も既になかった。

「遅れて、すまない」と謝罪した後、リンドから今しがた本殿内であつた事態の説明を受けて、御影は話を続けた。

「やつらの本社ビルは最初の段階で調べてあつたんだが、ほとぼりが冷めた後で、またやつらの基地になつていたとは……盲点だつたよ」

御影の言葉には苦々しさが満ちていた。そんな御影に「このあと、どうする気ですか？」とリンドが尋ねると、御影は佇まいを直してたたず答えた。

「無論、総攻撃を掛けるさ」

御影の目を、リンドは真っ直ぐに見据える。

「俺達も行きます」

リンドはそう告げた。御影とてリンドがそう言い出すのは承知の上だった。本来なら裏切り者を倒すべきはフォウシャル・クロイツ自体の問題である。だが、自分達の大切な人を助け出す為にどの道彼らはそこを指すだろう。少し悩んで見せた後で、御影はリンドの申し出を快諾した。

「ありがとう。助かるよ……でも、無理だけはしないでくれよな」

リンドは頷き、右手を差し出す。それに御影も応じ、固く握手を交わした後で、二人は離れた。

リンドがふと見ると、そこにはユアンを意地悪そうに小突くかぎるの姿と、少し離れた場所で本殿内の窓から空を見上げるトーノの姿が映つたが、サリーの姿はすでない。あまり集団でいることを好ましく思わないサリーの事だ。おそらく外で一服でもしているのだろう。リンドは助け舟を出す為ユアンの元へと向かったが、そ

れを見て御影はトーノの元へと向かった。

「どう？記憶は戻ったかい？」

御影の問いに「少しだけ」とトーノは答える。

それは本当のことだった。御影たちフオウシャル・クロイツの面々と顔を合わせてから、自分が何者なのか臙おんげながらもトーノは少しずつ思い出し始めていた。しかし、それがなかなか捗はかどらないのは彼女自身に問題があったからである。トーノは記憶を思い出す事を喜ばしく思う反面、思い出してしまったら全てが変わってしまうかもしれないという恐怖を感じていた。その為、記憶が少しずつ戻り始めているということは、リンドにも話せずにいる。

（私は記憶なんていらぬのかもしれない。私はただ、このままで在り続けたい。このまま、リンド達と一緒に旅を続けられるなら、それだけでいいのかもしれない）

それが今のトーノの正直な気持ちだった。御影はそれを承知しているかのように、トーノに向かって微笑んだ。

「その時が来るまで、君は君の思うとおりに精一杯生きて良いんだよ」

御影の言葉が、頭の中を通り過ぎた時だった。

トーノは全ての記憶を取り戻した。

自分が何者で、何を成すべきなのか。それを理解するという事は、残酷なまでの自分の運命をも理解するという事だった。

全てを理解した彼女の瞳からは、止め処なく涙が溢あふれ出る。それをリンドには決して見られることのないよう窓の外へと俯うつむいたまま、声を殺してトーノは泣いた。

第八章 真聖皇帝（サンクト・セレブランド）

第八章 真聖皇帝（サンクト・セレブランド）

1

フォウシャル・クロイツのメンバー達が乗ってきた車に便乗したおかげで、カリグラの指定したクロイツコーポレーションの本社ビルまでは分けなく辿り付く事ができた。

軽からRV車まで、趣の異なる五台の車はクロイツコーポレーションのビルから1ブロック離れた角に次々と停まる。

平日も休日も絶えずごった返す街並は静まり返り、人影もピンクの肉塊もその姿はなく、病原体でも広がり全ての人間が死に絶えてしまったかのように気味が悪かった。

リンドの父親や母親の働く職場はさしてここから遠くない所であり、動揺するなという方が無理な話ではあったが、（ゆかりを助け出すのが先決だ）と言い聞かせると、リンドは気を引き締めるように左右の頬を張った。

車から降りると、御影を中心に置いて、リンド、ユアン、トーノ、かぎる、そしてサリーとフォウシャル・クロイツのメンバー総勢二十名が円を描く。

「これから、隊を三つに分け突入後、それぞれの隊は各階を探索。リンド君たちは連れ去られた生徒の確保優先に。そして、我々フォウシャル・クロイツは真聖皇帝ネロを名乗る三ヶ峰^{みかみね} 楼馬率^{ろうま}いるクロノ・クロイツ殲滅^{せんめつ}を目指す」

御影の号令の元、リンドとトーノは御影隊。ユアンとかぎるは三上という男の隊。そして、サリーは帝^{みかど}という男の隊に割り振られた。それぞれが突入後、一階、二階、三階を順次探索、続けて二十階

立てのビルを三階ずつ上り探索する事となる。

フォウシャル・クロイツのメンバーと細かい調整を手早く済ませると、改めて御影はリンド達に注意点を伝えた。

「君達はくれぐれも戦闘には参加せず、生徒達の保護に努めて欲しい。だが、もし戦闘に巻き込まれる事になった場合、一番に注意して欲しいのは銃弾だ。兆弾ちやうたんも踏まえて対応して欲しい」

ユアンは呆れ顔で呟く。

「そんなの当たり前だろ？ それよりやばいのは殺戮さつりくロボの殺人ビームだつて。おたく、神社の件の話、聞いてなかったわけ？」

御影は真面目な顔で小さく頷いた。

「勿論もちろん、話は聞いたよ。だが、話通りならそれは、対アンノウン用の兵器だろう。君達に害はないと思われるよ」

聞きなれない用語にユアンが眉まゆを吊り上げた時、リンドが尋ねた。「あいつらもそんな事言つてたけど、『アイディー』とか『アンノウン』とかつて何の事なんですか？」

御影は腕を組み、少しだけ悩んだ素振りを見せた後、口を開いた。

「『I・D』とはこの世界における魂を持った人間の事。そして、『アンノウン』とは魂を持たない人間の事だよ。君達が出会ったプラテネリ使い達は魂を持たないアンノウンだ。だから、彼らは君達のように魂を持ったI・Dを憎んでいるんだ……」

リンドとユアンは話が見えず顔を見合わせ、傍らにいたかぎるは難しそうな話を何となくのノリで聞いている。

「つまりそれは、彼らが誰かに作られた人間って事ですか？」

リンドの質問に御影は即答する。

「そういう事になるね。……あと一つ付け加えるなら、君達は恐れられているかもしれないけど、バクというのは元々そのアンノウンを退治するウィルスバスター的な存在なんだ」

三人はその衝撃的な言葉に、返す言葉も失った。

……という事は、あのピンク色の肉塊は正義の味方ではないにし

る、リンド達普通の人間には害はないという事になる。

「……でも……」

リンドがまだ納得できないというように質問を続けようとすると、今はこれ以上答える気がないという意味表示のように御影が号令を發した。

「これから、突入を開始する。各自、くれぐれも生きて帰るように！」

2

突入後、ユアン達三上隊と、サリーのいる帝隊が非常階段を昇っていくのを確認した後で一階の探索を御影隊は手早く済ませる。案の定、一階にはこれといった収穫のないことを確認すると御影隊は四階へと進んだ。

四階に突入してすぐ、待ち構えていた先刻見たゼンマイ仕掛けの人形、ユリウス率いるナルコレプシー部隊と御影隊は戦闘を開始する。

激しい銃弾が飛び交う中で剣主体のフォウシャル・クロイツは苦戦を強いられるかに見えた。しかし、御影と数人のメンバーが広げた右手を差し出すと状況は一変した。

「ギユガルド……！」

叫んだ瞬間、掌てのひらに金色の光が圧縮された光球が出現し、彼らの眼前に光弾となつて発射される。

リンドが唾然あせんと見守る中で、それは次々と重装備の迷彩服を着たナルコレプシー部隊を撃破していった。

次第に小さな集団へと変化し、防戦一方となったナルコレプシー達の中にあっても、ユリウスは御影の指摘通り、アカネを滅ぼしたあの閃光を放つことはなかった。右手の付け根に生えた五本のマガジンを抜いては新しいものと交換する度、右手の五本の指からはマシンガンのように銃弾がバラバラと飛び出す。

それにフォウシャル・クロイツのメンバー二人が犠牲になるのを見て、戦闘には参加するなと釘を刺されていたリンドが動いた。

ペットボトルから飛び出した水が形作るネイル・フリー・トゥーンを掴むと『牢』を告げる。

氷壁の盾が出現すると同時に、ユリウスの部隊がばら撒く銃弾の全てを遮った。

空になった弾倉の交換に手間取るナルコレプシー達を確認するようリンドは『牢』を解く。

その瞬間に空中で静止していた弾丸が豪雨のように床に降り注いだ。その豪雨のような音の中で、再び金色の光弾が発射されると、ナルコレプシー達はなすすべもなく弾け飛んでいった。

爆風が舞う中、ユリウスは機会ゆえの無機質なまでの冷静さで、御影へと照準を合わせる。モーターの回転を響かせたその右腕を、弾丸が発射される寸前でウスラヒの青い刀身が断ち切った。

青い刀身を灯したネイル・フリー・トゥーンを携えたリンドを、ユリウスは無表情なままで覗き込む。琥珀色の瞳でリンドの顔を認識した瞬間、口から下半分がぱっくりと割れ、中から銃口が突き出る。迷うことなくそこにネイル・フリー・トゥーンを突き刺したリンドはそのまま上へと切り裂いた。

頭を真二つにされると、白煙を昇らせた後で倒れたユリウスは、その衝撃で胸の部分を粉々に砕いた、殺戮兵器とは思えぬ程の脆さを見せつけた後で、ユリウスはその動きを停止した。

ユリウスとナルコレプシー隊を撃破し四階を制圧した御影隊は、隈なく四階を探索したが、やはり収穫らしい収穫はなかった。

「助かった」と話す御影に小さく頷いて見せた後、リンドはオフイスデスクの後ろで身を縮めるトーノへと声を掛ける。この戦闘のせいか、トーノの顔色は悪い。出会ってすぐに見たような青白さを浮べるトーノをリンドは気遣ったが、トーノは「大丈夫」と答えただけだった。

その姿にリンドは、戦闘のせいだけではなく、何かにトーノが怯えているような不安を感じ取ったが、トーノは「大丈夫」と繰り返し返すだけである。

足取りのおぼつかない彼女を心配しつつも、リンドたち御影隊は四階を後にし、七階を目指した。

3

クロイツコーポレーション本社ビルの最上階、近代オフィスの結晶ともいえるその部屋の豪華なデスクに一人、真聖皇帝ネロこと三ヶ峰^{みかみね}楼馬^{むすま}は座していた。

長く鬱蒼^{うつそう}と伸びた髪の間から覗くその表情は何か真剣に考えているようでもあり、苦しみ悶えているようでもあった。

かつては社長室という肩書きだったその部屋のドアが開き、場にそぐわないような朗^{ほが}らかさをもってカリグラが入室する。

「フォウシャル・クロイツの連中と神具^{ハルモニテ}の契約者たる学生君たちがやって来たみたいですよ、社長 ……いや、失礼しました、皇帝陛下^{ハルモニテ}」

わざとらしいほどに謙^{へりくだ}ったその呼び方は、皇帝だの帝国だのというお遊びに付き合っているという、嘲笑が見え隠れしていた。

ネロはそれを叱責^{しっせき}するどころか、気づいた素振りも見せず口を開く。

「そー、それでー、迎撃の準備はできているー、のか？」

極めて真面目な表情ながらその片言めいた言い方に、カリグラは一瞬笑いを堪えた後で答えた。

「勿論でございます、皇帝陛下。我がクロノ・クロイツの誇る精鋭、オート・ロジカル・マシーナリー通称アルマナと、ナルコレプシー部隊が收拾に当たっております。……まあ、ユリウスの隊は既に殲滅させられたようですが」

そう告げられても、ネロは満足さそうに頷くだけだった。

「うむ。カリグラ、おーぬしに任せーたぞ」

カリグラは悪意に満ちた笑顔を浮べたまままで続ける。

「もう間もなく、準備の方も終わります。私にお任せください」
再び、ネロが頷く。

「うむ。カリグラ、おーぬしに任せーたぞ」

「それでは陛下、引き続きこのクソつたれなパーティーをお楽しみください」

「うむ。カリグラ、おーぬしに任せーたぞ」

「私はこれで失礼します。ついでにこのままお暇を頂きます」

「うむ。カリグラ、おーぬしに任せーたぞ」

「うむ。カリグラ、おーぬしに任せーたぞ」

「うむ。カリグラ、おーぬしに任せーたぞ」

ゆっくりと踵を返したカリグラが部屋を出て行った後も、ネロは一人デスクに座り、それを繰り返すだけだった。

敵の奇襲によって、ビルビルの九階へと辿りついた帝隊はほぼ半数の人間が息絶えた。奇襲を掛けてきたくせに、指揮を執る先刻見たゼンマイ人形の姉妹機と見受けられるその女性型ロボットは「我が名リア・ファル八光玉ノ、テイベリウス」とご丁寧丁寧に名乗りを上げる。

ナルコレプシー達がバラバラと銃弾を撃ちまくるのに対応するようみかじに帝たちフォウシャル・クロイツのメンバーは右掌みぎのてから射出される光弾で反撃していた。しかし、テイベリウスの胸元で怪しく光る鈍色の光玉がふわりと宙に舞うと、それはビー玉状の大きさの鈍色いろの散弾となり、次々とフォウシャル・クロイツのメンバーがギユガルドと呼んだ光弾を撃ち落しては、次々とメンバーを血祭りに上げていった。

確実に対ギユガルド用の兵器であろうそれに、帝隊は防戦一方となつていく。そんな中、サリーは巨大な針葉樹の影に身を隠していた。

帝隊が突入したビルの九階は一部屋丸々を用いたプラントだった。バイオテクノロジーの分野でも他社を圧倒するクロイツコーポレーションではあったが、本社ビルの一部屋を使つてのそれはどちらかといえばただの酔狂しよきやうのようにも感じられる。

フォウシャル・クロイツのメンバーが次々と倒れていく中において、サリーは手にした魔剣ハーデスをぼんやりと見つめていた。

何となく感じてはいたことだが、どうやらサリーとハーデスの愛称は良いらしい。

大概の場合、ベアトリーチェ以外との会話を無価値とと思っているサリーにとって、寡黙かまくなハーデスはパートナーとしては上出来といえた。それでも、トリセツ的な部分としての剣の理、つまりは死（始）に始まり、創（想）へと至る剣の道に関しては簡単なレクチャーがあつた。そこでサリーは何となく、そんな面倒くさい事を絶対

にしなければいけないのか、と質問した。

それは『始』の状態に敢えて留まり続ける事によって『始』のみをLV・2、LV・3と上げていく事は可能かどうか、という事だった。ハーデスは基本的には出来ないこともないが、『想』へと至るのは困難な道となりとなるぞ、と教えてくれた。実をいえば、口ではそう言いつつもハーデス自身、他の属性との馴れ合いを好ましくは思っていないかったので、そういう考え方の持ち主はハーデスにとっても都合が良かった。

聞けば、全ての鉱物をその支配下に置くハーデスにとっては大体の鉱物を基盤としている剣や鎧などはバターを切るようなものであるらしい。

リンドの ウスラヒ のようにわざわざ攻撃力の底上げの必要のなさを感じたサリーにとって、やはり、剣の道の概念は不要であった。攻撃性においてアドバンテージを持つ魔剣ハーデスである。後は『始』をどのような形に持っていくか、だが……。

それほどの攻撃力を持つ魔剣ハーデスにとっての唯一の弱みが大抵太刀ほどしかない刀身の長さである。だが、『始』をもって槍のような形状にしたからと言ってサリーが使いこなせなければ意味がない。

と、なれば……。

「……やってみるか」

呟くと今まで静観していたサリーは、一転してティベリウス目指して駆け出す。疾風はやてのように駆け抜ける思わぬ伏兵にナルコレプシは反応できずにいる。その中で、唯一ティベリウスだけが例の鈍色の光玉の照準をサリーへと合わせていた。しかし、それを十分に察してサリーは両腕を動かすと、隠し持っていたダガーナイフを放つ。

一呼吸遅れて発射された光玉は空中で散弾となり、矢のように飛んできた八本のダガーナイフを打ち抜いた。

一度につき、光玉は八個にまでしか分解できない事は針葉樹の影から、ティベリウスとフォウシャル・クロイツとの戦闘を介してサリーが知りえていた情報であった。そして、知りえていたからこそ、サリーは尚も駆けるスピードを上げた。

両手を広げたティベリウスの手首が折れ、中から鋭利な仕込み刃が突き出る。迎撃体勢をとるティベリウスは駆けて来るサリーをのみ視線に捉えた。刃を穿つととティベリウスが動いた時、サリーも懐から武器を取り出す。

しかし、それはハーデスではない。

その時だった。完全に意識のないティベリウスの背後からニヨキと人影が生えた。魔剣ハーデスを右手に持つそれはプランターの土から作られた人形だった。

「始シ土ト」

「砂人形 <ブードウー・チャイルド>」

サリーが告げるのと同時にティベリウスは魔剣ハーデスによって真二つに切り裂かれる。そして、それを合図に金色の光弾が降り注いだ。

帝隊の反撃が始まった。

5

「あなたは弱いんだから、あたしの影に隠れてなさいよ」

非常階段を駆け上がるかぎるが、隣のユアンへと声を掛ける。

「だーいじょぶだつて」

何の根拠もないくせにユアンは続けた。

「もしもん時は俺が守ってやつから、よ」

既に二度、かぎるに命を救われた事など忘れたように、自信満々

に話すユアンを見て、かぎるは呆れたように笑った。

ユアンとかぎるが所属する三上隊は十四階の非常口まで上がると中へと突入する。

ここに至るまで、連れてこられたはずの清南の生徒の手掛かりらしい手掛かりも皆無で内心焦りを募らせるかぎるは、先陣を行く三上たちの静止も聞かず、勢い良く突入した。

(こういう時のかぎるは空回りする)

ユアンの読み通り、勢い良く突入したはずのかぎるは早速後ずさりしていた。

十四階では、右腕に直に真紅のクレイモア状の剣をはめこんだゼンマイ仕掛けの兄弟機が、重装備の鎧と槍を身に着けたナルコレプシーの小隊を率いていた。

「我ハ剣ノ、クラデイウス。キサマヲホフルモノナリ」

ロボは流暢な片言でそう名乗りを上げた。

それを合図として槍を突き出した重装歩兵が進軍を開始する。

三上たちは右手を差し出すと、掌に凝縮されるように出現した光弾を放った。

しかし、そのことごとくは鎧に弾かれてしまう。

「特殊な加工が施されているな」

三上が苦々しく呟くのを尻目に、かぎるは重装歩兵へと駆け出す。

「狼」と告げると同時にかぎるの前に風が集まり始める。回転を続けるその小さな渦の集合体の前に神剣アテナイを構えると、それを弓に見立て、左手を空の宙で弦を引く動作をする。

「走れ、スピカ！」

かぎるが叫ぶと小さな渦の集合体は、五本の風の矢となって飛んでいく。重装歩兵が防御体勢をとるのを見越してかぎるは呟く。

「どうせ弾かれちゃうんでしょ、でも狙いはそっちじゃ……ないっ！」

重装歩兵の眼前で突如軌道を変えた矢は、天井目掛けて跳ね上が

る。矢は天井から吊るされた蛍光管を粉々に砕くと重装歩兵の頭上へとばら撒いた。

かぎるは後方で剣を振り上げ駆けて来る三上たちの氣勢を感じながら、混乱する重装歩兵の隙間を縫って飛んだ。振り下ろし気味の一撃は、クラディウスの剣に弾かれるが、即座に体勢を立て直すと間髪入れずにスピカの矢を打ち込む。

近距離で正に鎌鼬かまいたちの如く放たれた風の矢であったが、クラディウスは腕に取り付けた真紅の剣でそれを難なく引き裂くと一気にかぎるの眼前へと迫り、剣を振るった。かぎるは何かアテナイで防いだ、あの脆弱な体躯くわじやくのどこにそんな力があるのかと思われるほどの衝撃で、そのまま弾き飛ばさせる。

さすがは、機械仕掛け。そんな事が頭を過ぎるほどに常識離れしたその衝撃は、かぎるを10m以上も離れた壁に背中から打ちつけてようやくおさまった。

呼吸を取り戻そうと、無理やりに大きく息を吸い込んでおむせるかぎるにアテナイが動揺する声を発した。

（まずったわね、あれ、剣皇ポーニロアよ。あのロボットは契約者じゃないから、剣の理は使えないだろうけど、神具ハルモニア通しだから、こつちの技も相殺されちゃうわ）

「なんで……そんなの……今……言うのよ……共振作用で……分かるんでしょ？ ……先に教えといてよ……」

涙目で咳き込みながら話すかぎるに、アテナイが言い訳がましく言った。

（そんな事言っただって、私だって今知ったんだから、しょうがないでしょ。共振はなかったのよ。この建物のせいかな、あのロボットのせいかは知らないけどさ）

かぎるは何か立ち上がるようにするが、いまだ力が入らない下半身が無常にも尻餅を付かせる。生まれたての小鹿のように、再度足を震わせ立とうとするかぎるの元へクラディウスが歩き始めた時、

頼りもやる気も無さそうな人影が二人の間に割って入った。

「ちょ、ちょっと、何やってんのよ、ユアン」

かぎるの驚くような声に、ユアンは頭を掻きながら振り返る。

「俺が守ってやるって言っただろうが、よ」

かぎるに向かつてのんびりと話した後で、ユアンはクラディウスを真っ直ぐに見据えた。

6

ビルの最上階たる二十階へ逸早くたどり着いたのは、リンドとトーノの所属する御影隊だった。御影率いるフォウシャル・クロイツ六名と、リンドとトーノは今までの部屋とは大分趣おそむけの違う造りのその部屋へと、細心の注意を払いながら進んだ。

ドアが開いた瞬間、御影隊は猿のように素早い生き物に襲われる。即座に反応したのは戦具アルマを鞘から抜いたトーノだった。その影からもう一匹のそれが姿を現したときも至って動揺することなく撃退した。

二匹のそれは、猿のように小柄なナルコレプシーだった。子供のバクとでもいうような体躯のその二匹は腕の甲に鉄の爪を生やしている。

「ぎいいい」と叫ぶその二匹を眼前において、トーノは戦具アルマの構えを直した。

フォウシャル・クロイツの一人が加勢するのを見て、リンドもトーノに加勢しようとしたが、トーノはそれを短く断った。

「ここは私に任せて、リンドは先に進んで」

リンドは一瞬戸惑ったが、鉄の爪を鮮やかに捌くさばトーノの剣道仕込みの剣術は、リンドのものより確実に様になっていた。その動作にリンドは頷くとトーノにその場を託し、リンドと御影隊五名は先

を急ぐ。

猿の間を抜けてすぐの、豪華なオフィスの一室にその男は佇んでいた。

「……楼馬」

御影が声を発したが、当の真聖皇帝ネロこと、三ヶ峰 楼馬は虚ろな瞳のまま反応する事はなかった。

ぼんやりとした足取りのままリンドと御影隊の前に対峙した楼馬はゆっくりと鞘から剣を引き抜く。彼と御影隊との距離はまだ大分離れていたが、楼馬のその所作を見てフォウシャル・クロイツの一人が反応した。

発射されたギュガルドの閃光が楼馬を直撃する。

元々は同じ技術を持つ同志なればこそか、その一撃は楼馬に大したダメージを与える事は出来なかったが、ぼろぼろに崩れ落ちた衣類の下から良く鍛えられた上半身が現れた。

それを見て御影が忌々しく呟く。

「やはりこういうことか……おのれ、ジャツジマンめ！」

三ヶ峰 楼馬の上半身には鍛えられた胸の中心にガラス張りの瓶のような物が埋め込まれていた。その瓶の中では金色の小さな炎が膨張と収縮を繰り返しながら、揺らめいている。

リンドが御影の顔をちらと覗くと、質問するより早く彼は説明する。

「我々が共有するミカトン・ケイルの魂が封じられている。記憶を破壊し、力だけを残した状態で楼馬は真聖皇帝ネロへと洗脳されたんだ。……ジャツジマンの手によって」

新たな『ミカトン・ケイル』という謎の単語の登場で、リンドには御影の話が見えなかったが、このかつての同朋がジャツジマンの手によって今のような状態にされてしまった事を憤怒の表情で見ている御影の心情を計り知る事は出来た。

御影が剣を構えるのを見て、リンドもまた剣を大きく構える。

（御影はネロが裏切り者ではなく、洗脳されていると分かった上で切るつもりだ……。同志だったからこそ、自らの手で楽にしてやるって事か……）

事情が事情であれ、リンドならユアンやかぎる、そしてトーノを切る事が出来るだろうか？リンドの中で幾許かの葛藤いかぼくが生まれきた。

怒号を上げながら、フォウシャル・クロイツの一人が切り掛かり、御影たちも後に続くその瞬間、リンドの中のネイル・フー・トウーンが叫んだ。

（いかん！！ 奴の目を見るなリンド！！）

長く伸ばした髪から覗く虚ろな楼馬の右の瞳の黒目が、猫のような縦の線になるとそれは鳩時計はとこけいのように真ん中からぱっくりと開いた。一瞬のうちにそこから生え出た黒い球体は巨大な形を形成するように開き始める。それは巨大な黒い向日葵ひまわりのようでもあり、風船のようでもあった。

向日葵の中心に位置する点が広がり、塗りつぶされた黒い円へと変わる前に後方へと向きを変えたリンドの後ろでフォウシャル・クロイツたちの断末魔の悲鳴が聞こえた。

すぐ後ろの世界が地獄へと変わってしまったような恐怖を感じつつ、少しの間を置いてリンドは恐る恐る振り返る。そこには右腕で視界を遮るようにして立つ御影だけを残し、フォウシャル・クロイツの姿は消えていた。

確かめるようにゆっくりと腕を離す御影と同じくして、リンドは花びらが閉じた巨大な黒い風船に身を任せるように少しだけ宙に浮く三ヶ峰楼馬を見た。

その姿は黒い向日葵に生気を吸い取られたように少しだけ干から

びていた。

「ハルモニア神具がひとつ、黒滅瞳石 エキドナ か……!」

呟いた御影が唾を飲み込む音が聞こえるほどに、辺りを深々とした恐怖が包んでいた。

7

かぎるは足に力の入らない自分を奮い立たせるように氣勢を上げたが、気持ちとは裏腹に体は全く言う事を聞いてはくれなかった。「いいから俺に任せとけつての。黙ってかぎるは休んどけ、な」相変わらず頼りなく立つユアンだったが、その声にはかぎるを静止させるような力強さが含まれていた。

この二日で傷だらけになったダテ眼鏡を外すと、床に放り投げる。彼なりの戦闘態勢は整えられつつあった。

こういつ時のユアンに何を言っても無駄な事をかぎるは知っている。

すこしずれた所に信念を見出してはそれを貫こうとする他愛のない頑固さがんこというやつである。なぜに他愛ないかといえば、それはユアン自身の語る所の信念とは相反する「俺は勝てない喧嘩はしない主義」精神ゆえであったが、それでなおユアンの計算違いによるところの勝率の低さもまた、かぎるは知っていた。

ここに来て自ら前線に赴いたおもむユアンはその性格上、何かしらの勝算を持っているのかも知れないが、かぎるにとってそれは恐ろしく不安極まりないものである。

この二日間でユアンは既に一度、かぎるの腕の中で死に掛けていた。自分の近い人間が腕の中で冷たくなっていくあの感覚、かぎるはそんなのは二度とご免だった。

それが尚更彼女を焦らせた。トネリコの癒しの風にも限界がある。アテナイのいう所の（レベルの低い今のあんたじゃ、傷口を塞ぐのがせいぜい関の山）という一言が追い打ちだった。ひよっとしたら次は無いかもしれない。今度こそ、ユアンは……。

だが、そんなかぎるの思いなど気づく気配も見せずにユアンはクラディウスを挑発し始めた。

「最初見た時はあまりの不自然さにビビっちまったけどよ。こうしてみると案外愛嬌あんのな、お前。子供とかに喜ばれそうそうじゃね？クリスマスプレゼントとかにさ」

ゼンマイ仕掛けの人形は機械特有の無表情で話した。

「オマエカラ サキニ シニタイノカ？」

右腕の真紅の剣を軽く振るう。ユアンはそれに動じる事も無く睨みつける。

「で？ 結局何なの、お前。言いなりになんかなっちゃってさ。それでお前は良いわけか？」

その一言に、話しかけられているクラディウスでなくとも、かぎるは啞然とした。

（まさか、ユアン。機械を説得しようとしてるの?!）

ユアンの策が説得であったという結論を目にしたかぎるの顔から冷や汗がどつと流れる。

（やっぱりだ……。最悪の勝算を持ってユアンは事に望んでしまった……）

そうかぎるが結論づけたまさにその時、思いがけない事が起こった。

クラディウスの腕にはめ込まれた真紅の剣を固定するボルトの一本が軋み始めたのだ。

「お前の本当の居場所はそこじゃないだろうが」

ユアンが再び話しかけると、ボルトの一本が弾け飛ぶ。自分の意思に関係なくカタカタと震えだした右腕を押さえつけようとするとクラディウスだったが、震えは更にひどくなっていく。

「お前が必要だっていうなら、俺と一緒に戦ってやる」

剣を固定する残りのボルトの全てが弾け飛んだ。

「お前が必要としてくれるなら、俺がその名を呼んでやる」

剣をはめ込んでいた台座ともいうべき右腕は粉々に砕け、ユアンがその名を告げたとき、真紅の剣はその真の主の下へ向かって飛んだ。

「来いよ！ ポーニロア！！」

ユアンは驚くほどに穏やかな表情で、手にした真紅の装飾と刀身の剣、剣皇ポーニロアを見つめた。

「よし」

確認するように小さく呟くユアンを見つめるクラディウスは、つい今しがたまでそれを備え付けていた右腕をもぎ取ると、そこから新たに小型のキャノン砲を突き出した。

「お前、剣のナントカって言ってなかったっけか？ ……自分の信念をあつさり捨てちゃダメだが、よ」

右腕にポーニロアを携えたままで、ユアンは告げた。

『始』炎^{エン}

ユアンの右肩の上にめらめらと燃える火球が合わせて六つ、円を描くようにして出現する。クラディウスがキャノン砲を射出するより早く、左手を伸ばすと親指を引き上げ、突き出した人差し指と中指でクラディウスへと照準を合わせる。

「リボルバー！！」

声を上げると同時に発射された火球は、一瞬のうちにクラディウスを焼き尽くした。

その後すぐユアンは向きを変えると、重装歩兵に向けて残りの五発を撃ちつくす。炎に吞まれる重装歩兵に向けて、三上隊が反撃の

狼煙を上げる声を聞きながら、ユアンは座り込んだままキョトンとしているかぎるを見つめた。

「な。だから大丈夫だって言っただろ」

ユアンが人懐こい笑顔を浮べた。

8

巨大な黒い向日葵が再びその花弁を押し広げる姿を確認すると、リンドと御影は柱の影へと姿を隠す。そこへ猿を撃破したトーノとフォウシャル・クロイツの一人がやってくるのをいち早く察したリンドは、小柄なトーノを抱きしめると向日葵の視界からトーノを隠した。声もなくして立ち尽くし、リンドに身を預けたままでトーノはピクリとも動けなかったが、そのすぐ近くでフォウシャル・クロイツのメンバーは一瞬のうちに灰に帰していく。

呼吸も出来ないままに立ち尽くすトーノに、リンドはそのまま凶悪な向日葵の生態について説明する。緊急事態に一応は「うん」「うん」と頷いてみせたトーノだったが、その頬はかすかに桜色に染まる。

柱の影に隠れ、気を伺う三人の下へサリーの所属する帝隊三名も到着する。援軍の到着は頼もしくもあつたが、一瞬にして壊滅の恐れもあるこの状況下を打開するにはそれほどの助けになるとも思えない。

しかし、何の策も打ち出せずにいる彼らの中で、サリー一人だけは違った。

「ようは、あれを直視しなきゃいいんだろ？」

そういった後で、そばにあった観賞用のドラセナの鉢の土へと魔剣ハーデス突き刺す。

「目覚める、砂人形」

眩くと同時に頭の上にドラセナを生やしたままでその土は人型を形成した。

「中を空洞にして、引き伸ばしちやいるがこの土の量じゃこれが限界だな」

小柄な力士の体軀ほどはある砂人形を見上げてサリーが眩く。

「つまり、これに隠れて近づけて事？ サリーくん」

リンドが尋ねると、サリーは事もないと言わんばかりにあっさり
と答えた。

「敵の位置は知れてんだし、動く気配もない。誘導はしてやるから、あとはそっちで何とかしろ」

自分の役目はそこまでというように戦闘係を丸投げしたサリーのその案を受けて「自分が行く」と告げた御影に間髪いれずに「俺も行きます」とリンドが声を掛けた。

砂人形の体軀であれば同時に動けるのは二人が限度だろう。リンドの申し出を御影は「頼む」と言って快諾する。砂人形の影に身を隠す二人をトーノは心配そうに見つめた。

「あの……リンド…気をつけてね」

これから死地へと向かう恋人を送るような表情を浮べたままで、トーノは言葉を詰まらせる。その視線をリンドは真っ直ぐ見返すと「ああ」と眩く。

「行くぞー!!」

御影が発すると同時に踵を返したリンドは砂人形の後を追って駆け出す。押さえきれない心情に衝き動かされるようにその後を追って駆け出そうとしたトーノをフォウシャル・クロイツの一人が引き戻した。

走り出した二人に向けて、巨大な向日葵は再びその花弁を広げる。ビリビリとした空気を肌で感じながらもリンドは砂人形の背中から目を逸らす事無く駆けた。それがやんだと思った瞬間、先に飛び出

したのは御影だった。トーノと同じ装飾の施された戦具アルマを楼馬に向けて打ち込んだ時、思いがけずその剣先は楼馬の首筋のすんでのところでピタリと停まる。

「こんな状態でも、『リミッター』が機能するというのは……」

苦々しく呟いた御影を捉えた向日葵の中央の点が広がり始める。しかし、それが完全な形を作り終える前に、リンドの携えたネイル・フリー・トゥーンに灯された「ウスラヒ」の青い刃がそれを断ち切った。ただの一太刀で向日葵は脆くも切り裂かれると、花弁をバラバラと撒き散らしながら枯れていく。

向日葵が壊れるとそれに身を委ねていた楼馬の身体は糸の切れた人形のように床に崩れ落ちた。

向日葵の生えていた右目の奥から、黒く丸い石が転がり落ちる。

萎れて息絶えるかつての同胞を見下ろす御影の下へとフオウシャール・クロイツのメンバーが集まり、リンドの元へとトーノが駆け出す。

不安から溢れた涙が喜びのものへと変わり、彼が生きていることを確認するようにトーノがリンドへと抱きつく。

その時、ビルの窓を揺るがすようにして独特のモーター音が響いた。

9

先の戦闘で二名だけとなってしまうた三上隊と共に、ユアンとかぎるはビルの十七階へと辿り着く。先ほどの教訓からかゆっくりとドアを押し開いた先に、檻に閉じ込められた緑色のブレザー姿の学生達の姿があった。一目見ただけでも五十名以上の生徒がぎゅうぎゅうに詰め込まれた檻の中で、苦しそうに喘ぐ声だけが響いていた。

ユアンとかぎるは手に持つ剣で鎖の錠を次々と断ち切り、生徒達を開放していく。

人の波に吞まれながら「ゆかりー」と何度も呼ぶかぎるの声を離れた場所で聞きながら、ユアンもまた美作ゆかりと杏子・ベアトリス・天城山の姿を探した。その最中、ユアンは見知った顔を見つめる。

「おい、マルコじゃん。お前さあ、ゆかりちゃん知らね？」

ユアンの見つけた清南高校の女生徒は多少雰囲気が変わってはいたが、確かに伏姫中学校時代の同級生、円子まろこ 由美ゆみだった。チャームポイントのそばかすの上で警戒けいかいするような視線のまま、彼女は上手く言葉を紡げないように声を詰まらせる。

それを見て、ユアンは少しだけ苛立つような声を上げた。

「あーっ！ マルコ、お前なんか知ってんな？ 早く言えって、ゆかりちゃんはある、どーこーだーよお！」

その瞬間、ユアンの後ろへと駆け寄ってきたかぎるが、ユアンの後頭部を殴った。

中学時代のヤンチャだったユアンに対して、少なからず警戒心を強める同級の女子は少なくなかった。というより、本人が気づいていないだけで、かぎるとゆかり以外の女子のほとんどがそうだった。そして、なにより高校デビューよろ宜しく当時の下品な金髪もそのなりを潜ひそめたユアンの今の姿を見て、まともに話もしたことのない同級の女子の中で、それが彼だとすぐに気づく者など多くはいないだろう。

「ユアン、あんたね、それはものを尋ねてるって言うより、脅おどしてるっていつのよ！ 大体あんた影では姫中の女子から、近づいたらおかしい病気を移されるだの、子供が出来るだのって言われるくらい変な目で見られてたんだから。少しは自重じゆうじゆうしてよ！」

かぎるにまくし立てられて「……俺って、実は苛められてたのか」と一人シヨックを受けるユアンは放っておいて、かぎるは円子 由美の顔を見つめる。

「怖かったよう、かぎるー。ってあれ、柚子原なの？」

かぎるの顔を見て落ち着きを取り戻した円子 由美は、その後でまじまじとユアンを見た。

「柚子原ってバカな格好してなきゃ、もとの素材は結構良かっただね」

しみじみと呟く同級生の脱線しかける話を、かぎるは軌道修正する。

「そんな事より、マル。ゆかりを見なかった？ ここに連れて来られてるはずなんだけど」

とたんに円子 由美の表情は暗くなった。

「私は何度もやめてって叫んだんだよ。なのに、アイツが……。ついさっきの話だよ、アイツが、青いフレームの眼鏡を掛けたあの男が、やってきて、ゆかりと如月のスゴイ綺麗な女の人を連れて行っちゃったの……」

「ベアトリスさんだ……」かぎるは呟き、円子由美の顔を見つめた。

「それで、そいつはどこにゆかりとベアトリスさんを……」

その時だった。

ビルの窓を揺るがすようにして独特のモーター音が響いた。十七階のユアン達にわざと姿を見せ付けるようにして下降した後で、バタバタと風を巻き上げながら上昇するそれは一台のヘリコプターだった。

操縦席でにやけた顔を浮かべる青いプラスチックフレームの眼鏡の男。カリグラは食い入るように見つめるユアンとかぎるを見た後で、ヘリの後部を見るとジェスチャーする。ヘリの横腹に備え付けられたドアが開くと、猿轡へんくわを噛まされ、両手を縛られた女生徒二人

がナルコレプシーに押さえつけられたまま外へ突き出される。

二人の目にはこのまま突き落とされるといふ恐怖がありありと浮かんでいた。ヘリが巻き起こす風に煽あおられるようにして、清南高校の緑色のブレザーを着た女生徒の少しだけ栗色がかつた肩ほどの髪の毛と、ゴシッククロリータ調に仕立て直された如月高校の制服を着た切れ長の瞳の女生徒の美しく長い黒髪が空になびく。

そのわずか三階上で、リンドとサリーが時同じくして叫ぶのと同じ時に、かぎるとユアンも叫んだ。

「ゆかり！」

「ベアトリスさん！」

ユアンとかぎるが絶望的な表情を浮かべるその光景を十分に愉たのしんだ後で、カリグラが小さく手を振るとナルコレプシーの手によってゆかりとベアトリスはヘリの中へと引き戻される。ドアが閉じ終えないうちに、ヘリは遙か上空へと姿を消した。

「マルコ！ あいつは！ カリグラのクソ野郎は！ どこに行くか言っつてなかったか！！」

ユアンが叫ぶと、びくりと飛び上がった後で、円子 由美はおずおずと答えた。

「ホントかどうか分かんないよ。でも、アイツは、リンドが来るはずだから伝えるって。動物園で待ってるから、早く取り返しに来いって、言っつてた……」

「動物園」という言葉にユアンとかぎるは怪訝けげんな表情を浮かべた。だが、同時にあの男は確実にリンドを、そして自分達を目的とした何かを始めるつもりなのだと理解していた。あの男がその何かをゲーム感覚で始めるつもりなら、常識的ではない「動物園で待つ」という言葉もブラフでは無いだろう。

愉快犯ゆかいはんとも呼ぶべき男の不気味な行動に、ユアンもかぎるもいいような不安を感じていた。

間章 2 PM 15:34、遅めの昼食 (さいごのばんさん)

間章 2 PM 15:34、遅めの昼食 (さいごのばんさん)

1

車は山側に向けて走る。

かつてはこの地を統べた藩主の暮らした城址じょうしのすぐ近く、くねくねとした山道を抜け、あと少しで目指すべき動物園にたどり着くというところで、三台の車はそのスピードを緩めた。

怪訝な顔を浮かべたリンドに対して、御影は「腹が減っては、戦は出来ないだろう」と言った。

西の空にゆっくりと陽が傾きつつある。

リンドはそんな悠長な暇はないと食ってかかったが、御影は穏やかな表情を浮かべながら答えた。

「もう、今しか君達に真実を話す時間はないだろうし、君も色々聞きたいことがあるんだろう？ 答えて上げられるのも今しかない」

車はファミリーストランの前で停車した。

まだ何か言いたげなリンドだったが、御影に促されて車から降りる。先ほどの戦で六名だけとなったフォウシャル・クロイツのメンバーとリンド、ユアン、かぎる、トーノ、サリーはそのままファミリーストランの中へと入っていった。

当然、店内に人影は無く、ひっそりと静まり返ってはいたが、幸いにして電気関係は生きていた。

早速、食べ物にありつけると厨房くしやうへと駆け込んだユアンが「マジかー！」と大声を上げる。

何事かと顔を覗かせたかぎるに、ユアンが納得いかないとばかりに口を尖とがらせた。

「普通、こついつとこつてレンジでチンだろうがよ」

見れば厨房内には食材は沢山あったが、今すぐ食べられそうな物はなかった。

やれやれ、と呟くかぎるは「だったら、作ればいいじゃん」と事も無げに言った。話を聞いていたトーノも「私も手伝うよ、かぎるちゃん」と言っつてやって来る。

「カレーでいいよね」とかぎるが尋ね、ユアンが「何でも」と答えた。

手早く下ごしらえをこなすかぎるとトーノを眺めて、ユアンが感心するように声を上げる。

「トーノちゃんは分かるとして、かぎる、お前も女の子だったんだなあ」

しみじみと話すユアンを、かぎるは軽く睨みつけた。

離れた厨房の賑やかな声を聞きながら、御影とテーブルで向かい合うリンドは少し気まずそうにしている。

何から尋ねれば良いのか、というリンドの心境を特に察して訳でもないだろうが、椅子を引っ張って来て離れて座ったサリーは気にするでもなく尋ねた。

「あんたらの、手から出るあれは何なんだ？」

先の戦いで御影たちが見せた圧縮された光弾、普通に考えれば常識的ではないそれではあったが、世界が今や普通ではなくなり、また自分達も剣と会話をし、常識的ではない力を使用している以上、それ程大きな問題とも思えない。だが、数ある質問に口火を切るものとしては上出来と言えるだろう。

御影が頷く。

「あれは自身の生命力を凝縮し放つ『ギュガルド』……かつて世界が滅びし時に、その命運を託された者。金色の英雄といわれたミカトン・ケイルの御技だ。……真実を話すに当たってはまず、彼の話から始めなければいけないだろうな」

少しだけ窓から見える空を見上げた後で、御影は話し始めた。

2

「世界がテラと呼ばれていた時代、一度世界は滅んでしまったんだ……。その最後の時に、金色の英雄ミカトン・ケイルは滅び行く世界から救えるだけの魂を 神の箱庭 パンドラ と呼ばれる装置に避難させた。人の住めない荒野と化した世界が再生を果たし、人類が誕生するまでの間、その魂を保管することにした。そして、彼は、彼を守りし『赤の剣士』と『青の錬金術師』と共に世界が再生するまでの間、永遠ともいえる長き眠りについたんだ」

御影の神話とも童話ともつかない話を聞いて、事の真意を掴めな
いリンドを十分に察する御影は質問を口にした。

「ところでリンドくんは、アメリカって国を知っているかい？」
突然に小学校低学年向けの話題に切り替わった事に戸惑いつつも、
リンドは「もちろん」と答える。

御影はその答えを聞いてすぐに続けた。

「でも、それは君の目で確かめた事実ではない、そうだろ？ ひよ
つとしたら、自分はアメリカ人だという人間に会ったかもしれない
し、テレビや新聞でそれがさも本当にあるもののような情報を得て
いるかもしれないが、君自身で確かめたものじゃあない。……本当
はそんな国は存在していないんだよ。現在、この星における総人口
は六十八億人。そして、この国の人口は一億二千万人。そう言われ
てはいるが、実際のところは十万人にも満たないだろう。それは即
ち、魂をもった『アイ・デー
アイ・デー
アンノウン
』と
この小さな島国に生きる十万人のアイ・Dと、その彼らを支える為だ
けに存在する『UNKNOWN』それが、この星の、そして、この
国に生きる者の真実だよ」

リンドは御影が何を言っているのか分からず、ただ「バカな」と

言って苦笑いを浮かべたが、サリーの瞳は厳しくなる。

御影は構わず話を続けた。

「ここに魂を持ったリンドくんという存在があり、その君を支える為に君の父親と母親というアンノウンが存在する。そして、君を成長させる為の友人達のようなアンノウンが存在するんだ。君がいつか恋をして、結婚して、子供が生まれる。そうしたら、君のデータともいべき魂はやがて、君自身も知らないうちにその子供に引き継がれ、やがて今の君は父親という存在のアンノウンになる。そうやって、世界が再生を果たすまでの間、君の魂はただ保管されているだけでなく成長を遂げていくはずだった。このミカトン・ケイルの見る夢の世界で……」

そんな事信じられるかというように呆れたような顔をしながらもリンドは質問した。

しかし、事もないように「だったら……」とリンドが口を開いたとき、彼の自制心に反してその声は震えていた。

せつかくのリンドの質問であったが、全てを言い終えないうちに御影はすぐに首を振った。

「君が知りたいのは、誰がI・Dで、誰がアンノウンかというその見極めだろう。だが、それに答える事は出来ないんだ。僕が今話したのはあくまで魂の保管に関する基本的な事に過ぎない。全てを語るにはまだ、我々もまだ完全に記憶を取り戻してはいないんだ」

御影は小さく溜息をつく。

「このミカトン・ケイルの夢の世界にトラブルが発生した場合、この夢の世界を作り直すために再び魂は回収され、I・Dのいない世界において不要となるアンノウンは夢の世界の掃除屋ともいべき『バク』の手によって無に帰される。事態の早期收拾の為にミカトン・ケイルの百の魂を分け与えられた我々は、魂の守護者フォウシヤール・クロイツとしてその記憶を取り戻したというわけだ。百の魂を分けられた我々は、一人失ったたびにその記憶と力を残りのメンバーが引き継ぎ、最後の一人になった時、ミカトン・ケイルとして

の本来の記憶と力を取り戻す。しかし、本来ならその必要も無かつたはずだった。ミカトン・ケイルの顕現けんげんを待たずして百のクロイツであれば、それ程の問題なく事態の收拾も可能なはずだった。なればこそミカトン・ケイル顕現の為に仲間内で殺し合わないよう、リミッターも掛けられているわけだしね。……しかし、今回はそれが仇になってしまった。我々にとつても、ミカトン・ケイルにとつても、その敵の出現は予想外だったからね……」

御影は鋭い視線をリンドとサリーに向けた。

「……ジャツジマンを名乗る敵の正体は、ミカトン・ケイルと共に長き眠りについたはずの同志『青の錬金術師』こと『シャルナアプ・ウーデルカ』だ。……睡眠装置コールド・スリープの中にあつて仮死状態の彼がなぜ目覚めたのか、それは分からない。だが、彼はミカトン・ケイルから神の箱庭 パンドラ を奪い、この世界に干渉を始めた。彼はこの世界を終わらせ、自ら新しい世界を創生するだろう。それは、神になるのと等しい行為。それだけは決してさせるわけにはいかない。……彼が 神の箱庭 パンドラ と同じく、ミカトン・ケイルから奪った 神具の複製 プラテネリ を用いてアンノウンたちを私兵と化したのは実に厄介な事だが、共に持ち出した神具 ハルモニア は幸いにして君達を契約者として受け入れた。困難な闘いではあるが、それだけがシャルナアプの誤算であり、それこそが我々の勝機だと私は信じている」

御影は話を締めくくり、リンドとサリーに向けて小さく頷いた。

リンドにはここに至るまで沢山質問したいことがあつたはずだった。しかし、御影から語られた事実を受け入れるだけで精一杯だった。いや、心の中では、それをまだ真実として受け入れる事は出来てはいない。

昨日からの出来事をリンドは悪い夢だと思っていた。だが、更に輪を掛けて酷い悪夢ひどいはまだ終わらないらしいという事だけが理解で

きた。

3

かぎるとユアン、二人と共に笑い合うトーノだったが、その内心は裁きの時を待つ者のように怯えていた。かぎるやユアンと共に、わざとらしい程にはしゃいで見せてはいても、つとめて冷静な思考のもと少し離れた御影の話に全神経を集中させている。

トーノだけは知っていた。これからの戦いは始まりであると同時に終わりである事を……。

クロイツコーポレーションのビルで救出した清南高校の生徒は、そのままビルに待機させてあった。動物園で待つというカリグラの宣言を受け「自分達はこれからすぐに向かわなければならない」と御影は生徒達に告げた。

動揺の声が広がる中、彼は話を続ける。

「もう間もなく、我々フォウシャル・クロイツの別働隊が到着する予定です。今、このビル内は我々が完全に制圧しています。外に出るよりはここで救助を待つ方が懸命です」

泰然と話す御影のその態度には、自信が満ちていた。それを聞いて一人、また一人と生徒達が同意を促す声がかかるのを聞きながら、御影は確信に満ちた表情で「大丈夫です。問題ありません」と告げた。生徒達に安堵の表情が浮かぶのを見た後、御影は場を後にする。清南高校の生徒達は、御影たちを見送りビルの入り口を堅く封鎖した後で、きつと今も助けを待ち続けているのだろう……。

トーノはぼんやりと思った。

だが、彼女は知っていた。彼らに助けはやって来ないという事を……。

なぜなら、フォウシャル・クロイツのメンバーはここにいる「七名」が、その全てなのだから……。

これから、世界は始まる為に終わり、終わる為に始めるのだ。

だから、せめて今だけは……。

トーノの淡い希望は、彼女自身がその儂^{はかな}さを良く理解している。彼女がそれを願ったび、明るく振舞う彼女の表情の裏側で、その心に広がる小さな傷は、やがて彼女自身をズタズタに切り裂いていった。

「あたしとトーノちゃん特製のスペシャルカレーの出来上がり」
ふいにかぎるが声を上げた。

満面の笑みを浮かべるかぎるに返すように、トーノも精一杯の笑顔を浮かべた。

断章 ジャッジマン (正しき決断を下す者)

断章 ジャッジマン (正しき決断を下す者)

1

二台の乗用車が辿りついた場所、そこに動物園の名残は無かった。
霧かすみのかかる先にその形をうつすらと見せる建物は黒色でゴツゴツ
としており、建物というよりは洞窟どうくつに近い。

プラテネリ使いを要するジャッジマンの勢力、そしてクロノ・ク
ロイツのアジトを探して御影たちフォウシャル・クロイツのメン
バーは市内中を隈なく探索していたが、今朝方近辺を通った際には
こんな建物は存在していなかったという。という事は、この数時間
のうちに盛り土のようにして園中を埋め尽くして出来上がったこの
建物は、畏以外の何者でもないだろう。

「中で動物が放し飼いにされてんのかもよ」そう話すユアンが霧
の先に何かを見つけた。

「……おいおい嘘だろ？ そんな手に引つかかるわけないじゃん。
もちろん一点突破だよな」

苦笑いを浮かべるユアンに見つめられたリンドもそれに気づいた。
洞窟は入り口らしき穴が四ヶ所、等間隔で開いている。敵の思惑
通り、わざわざバラける必要はない。リンドもユアンに同意した。
一転突破で攻め込むというおおよそ作戦らしい作戦でもなかったが、
敵が洞窟の外に出てこない限り戦況の動く気配は無い。ならば、畏
と分かっただけでもこちらから動く他ないだろう。

御影も納得し、後は突撃の合図を待つばかりとなったところで、
かぎるがおすおすと口を開いた。

「あのー、なんだかアテナイさんがおっしやるには シケンツウコ

クのシルシ を刻んだ方が良いのでは、との事です」

リンドも、ユアンも、サリーもその言葉の意味が分からなかったが、それぞれが持つ剣たちはそれぞれがそれぞれ共に共に悶えるような声を上げる。

(……ネイル、なんだそれ?)

リンドが内なる声でネイル・フリー・トゥーンに尋ねると、彼は忌々しそうに呟いた。

(思剣通刻の印とはその名の通り、剣を介して離れた場所から会話が出来るようにするという事。つまりはお前達のいうところの携帯電話と同じようなもんだと思えば良い。だが、四本の剣が揃わねば出来ぬそれを、まさかアテナイが憶えておるとは……)

(便利な機能じゃないか、何をそんなに……)

何の気もなしに話しかけるリンドは、そこで渋るネイル・フリー・トゥーンの真意に気づく。

(……そっか。ネイル、口うるさいアテナイと四六時中繋がってんのが嫌ってわけだ)

(我だけではないわ、ポーニロアもハーデスも気持ちは一緒だ)

リンドは困り果てるネイル・フリー・トゥーンの顔を想像して吹き出した。

かぎるが空へと掌を広げ、その名を告げると集まってきた風がその形を形成するようにして神剣アテナイが顕現する。サリーは腰のベルトに付けられたシルバーのウォレットチェーンに触れ、それを呼び水とする事で魔剣ハーデスを顕現し、ユアンはライターを擦ると「来な、ポーニロア」とやる気なく呟く。燃え上がった炎はやがて真紅の装飾と刀身の剣皇ポーニロアへと姿を変えた。

三人が神具と呼ばれる三本の剣を召喚するのを見届けてリンドもペットボトルのフタを開けた。

「来い、ネイル・フリー・トゥーン」

彼の求めに応じて、青き光を灯す剣がその姿を現す。

リンド、ユアン、かぎる、サリーは向き合うようにして、それぞれの剣を天にかざした。離れた場所で、その儀式を見守るトーノだったが、それに気づいたようにリンドが手招きするのを見て、その輪の中に入る。

「これはただ、その為の儀式じゃない。共に戦ってきた今までも、そしてこれからも、俺たち皆が仲間である事の証を刻み付ける為の儀式だ」

リンドの発言を受けてユアンが「いい事言うね、リンドっぽいぢやあ、ぽいけど」と軽口を叩き、かぎるは笑顔で何度も頷いた。

天にかざした五本の剣を重ねると、刀身が光に包まれた。

2

十一人が洞窟を目指して歩き出した時、洞窟内から人影が出現する。二十人ほどのその連中が迷彩服にガスマスク姿である事を認めると、帝みかどが剣を抜いた。

「ナルコレプシーどもは我々に任せて、君達は先に進め。御影、彼らを頼むぞ」

御影が頷くと「武運を！」そういつて三上たちフォウシャル・クロイツは帝に続いた。

戦闘が激しくなるのを傍らに留めても、御影は躊躇することなく先へと進む。リンド達を急かし、引き連れる彼は向かって左端の洞窟穴へと駆け込んだ。後に続くリンド達もその中へと飛び込む。

入った瞬間に、吐き気を催すような眩暈めまいにリンドは襲われた。

立ちくらむようにヨロヨロと進んだ後で、壁に手を押さえ踏みとどまる。正常な呼吸を取り戻すように深呼吸をした後で、手にした壁が正に洞窟の内部である特有のひやりとした肌触りと、石の堅さである事を確かめた後で、彼は全員の安否を確かめるように振り返

った。

しかし、そこにいたのは御影ただ一人。

啞然とするリンドに、少しだけ狼狽するような表情を浮かべた御影が話しかける。

「……やられた。入り口は関係なかったんだ。特定の人間に対して別の場所に飛ばされるようこの洞窟自体がプログラミングアスモテウスされている。おそらく、色欲の能力を流用しているんだ。一部とはいえ、プラテネリの解析を済ませ、使いこなせるまでになっただけとは思わなかった。……敵の力を見誤っていた、完全に我々のミスだ」

戦意を失いかけている御影の胸倉むなぐらを掴みつかかかろうとするリンドをネイル・フリー・トゥーンが諫める。

（落ちて着けリンド！ こういった時のための思剣通刻だ。まず、仲間の安否を確かめるのが優先であろう）

リンドは思い出したようにネイル・フリー・トゥーンの刀身に向かって話しかけた。

「聞いてたら、返事をくれ！ みんな、みんな無事か！！」
程なくして声が混線するようにして聞こえ始めた。

「おお、なんとか無事だぞ」とユアンの声。

「リンド？ リンド！ リンド！！ どうしよ、あたし一人だけはぐれちゃったみたい！」と混乱するかぎるの声。

「まあな」とほとんど聞き取れないサリーの声。

「みんな一人なのか？」とリンドが尋ねると、皆それぞれに一人でいるという。御影に催促さいそくされ場所を尋ねると、皆が皆どこかは分からないが洞窟の中にいるとの答えだった。

「それでもみんながこの洞窟内にいるって事は、プラテネリの流用は未完成って事だ！ おそらく岩壁を隔てる程度にしか飛ばせないって事か！！ だったら、まだ救いはあるぞ！」

早々に一人立ち直り、声を弾ませる御影の事は放っておいて、リンドはネイルを通して会話を続ける。

「みんな一人だけか？ トーノはいないのか？」

三人からは「自分の傍にはいない」という返事しか返ってこない。落胆するリンドにネイル・フリー・トゥーンが声を掛けた。

（思剣通刻の印はトーノの持つ戦具アルマにも儀式を通して一部譲渡されておるはずだ。彼女が無事で洞窟内程度の近さにいるなら声が届くはずだぞ）

リンドはさすがのようにして刀身に声を掛けた。しかし、彼女からの返事が返ってくることは無かった。

（……まさか、トーノの身に何か……）

悪い不安はたちまちの内にリンドの中で広がっていく。それを払拭するように再び、リンドがトーノの名を呼ぼうとした時、抑制された声でリンドの名を呼んだのはネイル・フリー・トゥーンだった。

（……リンド、これ以上時間を掛けるわけにはいくまい。今のトーノへの呼びかけは私の判断で他の神具には契約者に知らせぬよう伝えておいた。だが、これ以上時間を掛けると他の契約者達もトーノの安否について不審に思うはずだ。なれば、離れた場所に一人いる彼らの心が折れてしまう恐れもあるぞ）

トーノの身に何かがあったとして、それを伝えてしまえば必ず状況は悪化するはずだ。特に半パニック状態にあるかぎるを追い詰めてしまう危険性は十分にある。そして、何よりそれを口にしてしまうという事は、リンド自身がそれを認めてしまうようで怖かった。

結局、リンドは嘘をついた。トーノは無事だが、少し離れた場所にいるため、交信は困難である。他の三人にはそう伝えるしかなかった。

「どの道、前に進むしか道は残されていない」

御影が話すとおり、今通ってきたばかりの穴は綺麗さっぱり消えてなくなっている。

「先に進めば、きつとどこかで落ち合うはずだ」

それは確信の無い希望でしかなかったが、リンドはそう伝え、他の皆もそれを信じて暗い洞窟内を歩き始めた。

歩きにくい岩場を五分ほど進んだ先で、リンドと御影の視界に狭い洞窟内を仕切るように立て付けられた雑な造りの木戸が現れた。

3

）
…）
…）
）
僕のお口に い 入れ）

「……なあ、かぎる、何だそりゃ？」

一人寂しさを紛らわすように、熱唱していたかぎるは剣越しに聞こえたユアンの声に「ひゃあっ！！」と大声を上げた。

「い、い、いつから聞いてたのよ！？ ユアン！！」

「最初から」と話すユアンに「そういうのって良くないと思うよ」と口を尖らせるかぎるだったが、とてもばつが悪そうである。

「で、結局、何なのそれ？」

別に悪びれた素振りもなく話すユアンは、大して気にするでもなく再び同じ質問を繰り返す。

「……まったく、ユアンの無知には驚かされるわ。何って、今は亡き高橋ひろさんの名曲をあたしがカバーした『アンバランスなZuraをして』に決まってるじゃないの！」

もはや、開き直りのようにかぎるは、きつぱりと言い放ってやっ

た。
「……いや、決まってるじゃないの、って言われても、さ……」

逆にばつが悪そうに話すユアンの声を聞いて、かぎるは泣きそうになった。

一人、替え歌の歌詞を考えあぐねている、それが自分なりに綺麗にはまった瞬間に「うわ、あたしって天才かも」などと言っていた

時の自分を思い出しては、自己嫌悪に拍車がかかる。

頭の中が真っ白になるかぎるが、やっとの事で我に返ったのは「なあ、かぎる」とユアンが呼びかけた二度目の声を聞いたときだった。

「な、なによ」と語尾を強めつつも小声で問い返すかぎるに、ユアンが「お前、いま、どっか遠くの方に行つてただろ」とのんびりと話した。

「……なあ、かぎる。俺たち、また前みたいに戻れるかな？ ……
いつもと変わらぬ日常ってヤツに、さ」

ユアンの話す『日常』という言葉が、今はとても懐かしかった。自分達がいま置かれている状況を誰が想像できたろうか？ そしてまた『この先』も想像することは困難だった。普通という概念からかけ離れたところにいる自分達が、たとえ世界を無茶苦茶にしてしまったジャツジマンと呼ばれる男を倒したところで、以前の自分達の生活を取り戻せる保障などどこにも無かった。しかし、そんなことをあれこれと考えるつもりもないかぎるは、再びきっぱりと言いつ放った。

「なに言つてんの、ユアン。前と同じに戻るに決まってるじゃん。…うっん、違うな。前と同じじゃないわね。あたしとユアン、リンドにゆかり、そしてトーノちゃん。…あたし達は前より、今より、素晴らしい世界を手に入れるんだ。誰かがその邪魔をするなら、あたしがそいつをやっつけてやる」

かぎるが話し終えた後、ユアンは少しの沈黙を破り「実にかぎるらしい」そう言って声を上げて笑った。

「かぎるのそういうとこ、俺はカッコいいって思うよ」
笑いながら、ユアンは付け足した。

少しだけドキリとしつつも「カッコいいってどういう事よ」と口を尖らせるかぎるに、話を続けようとしたユアンの言葉が詰まった。

「どうしたの？」とかぎるが尋ねると、ユアンは「お客様みたいだ」と答える。

「ってーか、乗り込んでんのは俺だから、お客様は俺の方が。……ま、こいつの相手が、かぎるじゃなくて俺ってのは都合が良いのかもしれないねえな。……かぎる、後で会おうぜ」

ユアンとの交信が途絶える。

かぎるは寂しさと不安を覚えつつも薄暗い洞窟の中を進んで行く。ユアンが遭遇したのはおそらく戦うべき相手。そして、それはユアンなりにかぎるとは戦わせたくない相手だったのだらうという事が、会話の端から見て取れた。

（ちゃんと会えなかつたら承知しないからね、ユアン）

かぎるは心の中で呟く。瞳は真っ直ぐに前を見据えていた。そのかぎるの瞳の先にぼんやりとした明かりと共に洞窟内が広がっていくのが映った。そして、その先で彼女の前に立ち塞がる事になるのはユアンの気持ちは裏腹に、彼女が会おうべき最悪の存在である事に、かぎるはまだ気づいてはいなかった。

4

「いよお、黒江キリ、だったよな？ たしか、よ」

ユアンの見据えた先で、洞窟内に備えられた数十本もの蠟燭ろうそくの炎に照らされて、少年は美しい顔に微笑を携えて立っている。炎の揺らめきに応じるようにその美しい微笑は時々、禍々（まがまが）しいまでの醜悪みにくさを覗のぞかせていた。

不揃いに伸ばした黒い前髪が瞳に掛かるのを鬱陶うっとうしがるようにかき上げた後で、毛先を指先で摘つまみ、捩よじりながら興味も無いように少年は口を開いた。

「僕の相手って、あんたなんだね。正直、がっかりだなあ。僕さあ、あんたが神社でのびてるとこしか見てないんだけど。あんたってキヤラはE・Dっていつても、きつとそれ以上でも、それ以下でもないでしょ。どうせなら、あのクソアマを殺したかったのにな」

ショートパンツの丈からスラリと伸びた色の白い足を振るい、スニーカーが少し苛立つように地を蹴ると砂利が転がる。

「まあ、E・Dを消せるなら、誰でもいいんだけどね」

砂利が転がり終わらないうちに呟いたキリの顔には再び嘲笑が浮かんでいる。そして、胸にふわりと浮かんだ小さな黒い点は、あつという間に嘲笑を覆いつくすと人一人飲み込む程の球体を形成した。

「喰らいつくせ、暴食」

キリが笑い交じりにその名を告げると、黒い球体はユアン目掛けて襲い掛かる。

ユアンはそれを飛んでかわすと、素早く体勢を整えた。しかし、ユアンのすぐ脇を通り過ぎた後で、球体はUターンするように進路を変える。だが、戻ってきた球体にユアンは驚くでもなく、自身の足元を確認する余裕すら持っていた。

「やっぱり、な」

呟くと、再び球体をすんでのとこでかわす。

球体はキリにじやれるようにキリの周りをぐるぐると回っていた。相変わらず嘲笑を浮かべたままのキリに向かって今度はユアンがニツと笑いかけた。

「キリ、お前は俺がのびてたから相手にはならないって言ってたよな。でも、そりゃあ間違いだぜ。お前とかぎるが揉めてたとき、ボロクソに殴られてバクに引きずられて神社の中に連れてこられた俺のことなんてお前は気にも留めなかつたんだろがよ、そのおかげで俺は、お前がかぎるに何をしたのかを十分に『観察』する事ができたよ」

以前、かぎるが思っていたように、ユアンという人間はあまり当てにならない勝算を持って事にあたる人間であった。その勝算が当てにならないのは、つまりは導き出した答えが間違っていたりするわけだが、実際のところではそこに至るまでの情報の収集と解析という分野においては、ユアンの能力は他の誰よりも高かった。

「俺はよ、キリ。勝てない喧嘩はしない主義だぜ？ ……ところで、俺の足元に照らされてる俺の『影』は、どうしてお前の黒い球体が飛んでくる度に位置が変わるんだろうなあ？」

ユアンが笑いを含ませたまま尋ねた瞬間、キリの表情が変わる。かぎるに対して激昂げっこうしたキリが、その黒い球体を初めて出現させた時、それに唯一気づいたのは少し離れた場所で息も絶え絶えに見ていたユアン唯一人だけだった。

神社の本殿内へと差し込む陽光がリンドとトーノ、かぎるの足元に影を作る中で、黒い球体をキリが出現させた時、かぎるの影だけが逆向きだったのだ。

「ベルゼブブ、殺せ！ 殺せ！ 早くアイツを殺せ！！」
キリが呻くうめように叫ぶのを聞きながら、飛んでくる球体には目もくれずにユアンは剣皇ポーニロアを自身の影に突き刺した。

「ギユイアアアアアアアアアア」

甲高い悲鳴が響いたあと、ユアンのすぐ近くまで迫っていた黒い球体は音もなく消滅する。ユアンはゆっくりとポーニロアを引き抜いた。その刀身には蠅はねのような羽を背中に生やした、目玉の大きな黒い豚が突き刺さっている。それを振り払うと豚は洞窟の壁に叩きつけられて地面に落ちた。荒い呼吸をしたまま動かなくなった豚を見つめた後でユアンは青い顔をしたキリへと視線を移す。

「お前は球体を出現させるだけで、本当のところは対象者の影に隠れたこいつが操ってたってわけだ。……ま、お前の負けだよ」
わなわなと震えるキリに告げた後で、ユアンは歩き始める。

かぎるとは違いユアンは、今更キリに声を掛けるつもりも、更正を促すつもりもなかった。仲間を思う気持ちは他の誰よりも強いユアンにとって、黒江キリは敵の一人にしか過ぎない。

戦闘を終えた後は、すぐ先を目指す。しかし、早々と背を向けた

キリの四肢を侵食していた黒いタールは、やがて彼自身を『無』に帰すために全身を蝕み始めていた。

（暴食の力が暴走を始めたようだ。放っておいても彼は消え行くだろう）

ユアンの中でポーニロアが無慈悲なまでの現実を告げた。

勝負は決した。だが、ユアンは決意を固めるようにキリの前に立つ。それは「怖いよ！ お姉ちゃん、助けて！」と泣き叫ぶキリの姿を見てしまったから……。

六連装填のリボルバーの『始』炎を灯したユアンは赤い光に包まれた。六の火球は一つに重なりと轟々（ごうごう）と燃える紅蓮の火球へと姿を変える。

ユアンの中で、今正に楼を得た事をポーニロアが告げた。

ユアンはキリへとその火球を向けるとただ「カノン」とだけ言葉を発した。

ユアンの見守る中、キリの全身は一瞬にして炎に吞まれた。

5

一人洞窟を歩くかぎるが少し開けた場所へと出た時、そこには一匹のライオンが待ち構えていた。

動物園の檻から抜け出た猛獣がうろついているのかもしれない、そう思つて咄嗟にアテナイを構えたかぎるだったが、ライオンは襲つてくる気配も無くそこに佇んでいるだけだった。

蠟燭のぼんやりとした明かりの中で良く見ると、そのライオンの肌色は見たこともないような赤色だった。

ライオンとかぎるの対峙が一分と経たない内に、洞窟の奥から人影が姿を現す。それは、かぎるの良く知る彼女愛用のライムグリーン色のジャージを肩に掛けた、かぎるの良く知る人間だった。

「……うそ、でしょ。……なんで、蒼姉が、ここにいるの……？」
かぎるの見つめた先で、かぎるの一つ上の先輩、佐々木 蒼が泣き出しそうな微笑を浮かべていた。

ライムグリーン色のジャージを手渡しながら、彼女は「かぎる、ごめん。勝手に借りてた」と声を掛けた。かぎるは返事をする事もできず、上の空でただそれを受け取る。

そして、そんなかぎるを見つめながら、蒼は再び声を掛けた。

「……かぎるがE・Dである以上、私はあなたと戦わなければならぬ」

怯む様な表情のかぎるが言葉を発そうとするのを、蒼は小さく首を振って制した。

「怒り狂え、憤怒」

蒼が告げると、彼女が着ていた如月高校の制服は引き裂かれるようにして散っていく。そして、傍らのライオンはメラメラと燃える炎となって蒼の全身を覆った。

かぎるの眼前に赤い鎧を身に纏い、剣を手にした佐々木 蒼が立つ。かぎるは蒼のその姿をぼんやりと見つめていたが、蒼はそのかぎるに何を告げるでもなく剣を振り上げた。

およそ剣術らしさも無いそれを、ジャージを放り投げながら反射的にかぎるはアテナイで防いだ。

「蒼姉、やめてよ！　なんで、戦わなきゃいけないの！？　やめて！　やめてよ！」

かぎるの問いかけに、蒼は何も答えなかった。ただ、苦悶に満ちた表情が全てを語っているようだった。

力づくで振り払うとかぎるは蒼と距離を置く。そして、右手に携えたアテナイと平行するようにして左手で形のない弦を引いた。

狼、スピカの矢を放つ姿勢を見せたかぎるだが、そこには戦意などない。それはただの威嚇だった。自分がいかに凄い力をもっている

るのか、それを見せればきつと蒼も引くに違いない。その一心だけで放ったスピカの矢は蒼の足元目掛けて飛んでいった。しかし、別にかわすでも、防ぐでもしなくて良いそれ目掛けて、敢えて蒼は剣を振るう。その瞬間にかぎるの放った風の刃は叩き折られ、そして空気の中へと消えた。

（あれが憤怒サタンの能力よ。憤怒は全属性を操る事ができる。っていつでも、初歩程度をね。あんたが良く練った風を作り出せば、まあ、敵じゃないわね。彼女自身、憤怒の正式な契約者ではないようだし、普通に戦えば万が一にもあんたが負ける道理はないわよ）

スピカが通じない事も特に気にする事じゃないと、アテナイはアドバイスする。しかし、かぎるにとってはそんな事はどうでも良い事だった。

「だから何よ！ 蒼姉なんだよ！ あたしに蒼姉を切る事なんて出来るわけないじゃない！」

（それで？）と呆れたようにアテナイは言った。

（つまりはそれがジャツジマン、シャルナアプ・ウーデルカの狙いなんでしょうが。理由は分からない、でも、あんたが戦えないっていうなら、この先で、あんた以外の仲間達がどういう事になるかとあんたは何も言う資格はないわね。あんたに出来るのは、ただ自分を責める事くらいのもんでしょよ）

駄々をこねる子供を叱り付けるようなアテナイの言葉はまさに正論だった。

アテナイの言葉を無理やりに自分を言い聞かせ、そして無理やりに覚悟を決めたかぎるは、その束を両手で握りなおす。

眼光鋭く、蒼に向かって視線を合わせると、かぎるは駆けた。

風を切るような上段からの一太刀を、今度は蒼がしっかりと受け止めた。

鏢迫り合いつばせりから素早く脱しようとして赤い剣を握る両の手に力を込めようとした時、蒼はかぎるの顔を間近に見た。

かぎるは笑っていた。

いつも蒼と一緒にの時には見せた事もない泣き出しそうな笑顔。だが、しかし、そこにはいつものかぎるがいた。

「ごめん、やっぱり無理。あたし蒼姉のこと、大好きだ。戦えないや」

かぎるの力がふつと抜けると、容易く鏝迫り合いから脱した蒼の剣がかぎるの首筋に迫る。だが、その剣先はピタリと宙で止まるとゆっくりと地面に落下し、刀身を揺らした。

「ごめんね、かぎる。ごめん。ごめんなさい」

そこにはかぎるの憧れる凜々(りり)しい先輩の面影はない。泣きじゃくり、ただ謝り続ける蒼は、小さな子供のようだった。

「わ…私、もう何が…なんだか、わからな…くって。み、翠子も助けてあげられなくって… I・Dだとか、自分が…アンノウンだとか、本当はどうでも良かったのに…怖くて、ただ怖くて、仕方がなくって…」

泣き崩れる蒼をかぎるはそつと抱きしめた。

「蒼姉は、蒼姉だよ。あたしの憧れで、あたしの大好きなお姉ちゃんだよ」

震える蒼はかぎるの顔を見上げる。すると、瞬く間のうちに震えが治まっていった。

それを確認した後で、かぎるは蒼へと尋ねる。

「蒼姉、ゆかりはどこにいるの？」

蒼は一つ一つの言葉を確認するようにしながら「この先をずっと進んだ先の洞窟の一番奥。ゆかりも杏子もそこに捕らえられて」と答えた。

それを聞き終えて、蒼をぎゅっと強く抱きしめた後で、かぎるは凜として立ち上がる。

「蒼姉はここで待ってて、あたしが皆やつつけてくるから」
ライムグリーン色のジャージを拾い、蒼の肩に掛ける。
そして、再び、かぎるは微笑んだ。
「ゆかりと杏子先輩助け出してくるから、皆で帰る」

6

リンドと御影が木戸を押し開いた先では、一人の男が岩場に腰掛け、頼りない蠟燭の明かりで文庫本を読んでいた。

「結構、遅かったな」

本を閉じると、如月高校の制服をしつかりと校則に則^{のっと}って、しつかりと詰襟^{つめえり}まで締めたリンドと同じ如月高校一年の蜂谷^{はちや} 白銀^{しろがね}が立ち上がる。

「なにしてんだよ、ハッチ。……お前はこんなトコにいちやダメだろ。……お前は、如月高校を守る最後の砦^{とりで}だろうが!!」

リンドは蜂谷 白銀の姿を見た瞬間に、その早い思考は無常にもその答えを見つけ出していた。だが、それでもリンドは友へと向かって尋ねた。

中学からの同級生たるハッチこと蜂谷白銀は小さく溜息をつく。

中学から知っていればこそ、リンドの思いくらい分けなく察することが出来た。だから白銀は溜息をつき、その後で表情を変えることなく話し始めた。

「少し考えれば分かることだろう、リンド？ お前だって清南高校の荒れ果てた様は見たはずだ。だったら、如月だってそうなるに決まってる。もし、そうならないとすれば、フォウシャル・クロイツの結界のように『人外』の力が働いてたって事になるだろう？

つまりは、意図的に誰かがそうしてたってことに、なあ」

リンドは厳しい視線で白銀を見据^{みす}える。

「それがお前ってわけかよ。だったら、如月の生徒達をお前は何のために守ってたんだよ!」

白銀は再び溜息をついた。

「守っていたってわけじゃあないよ。ただ、俺の能力には彼や彼女らが必要だったってだけのことだよ」

話し終えた白銀の背後から、白い人型が這い出てくるのをリンドも御影もその瞳に捉えた。

四つん這いで歩く、顔の部分には一つたりともパーツのないのっぺらぼうに、前身白色の小さな人型は乳児の人形のようなだった。

「コイツの能力は変わっていてね、リンド。まあ、面倒といえばそれまでんだけど、餌を与えて成長させてやらないと赤子一人殺す程の力も持っていないんだ。そこまで言えば分かるだろ？ コイツの餌は『魂』、そして如月の生徒達がどうなったかかって事くらい」

「蜂谷あー!!」

弾かれるように剣帝ネイル・フリー・トゥーンを構え、走り出そうとしたリンドの機先を制するように白銀はその名を告げる。

「我のみがただ此処にあれ、傲慢」

むくむくと立ち上がった白い乳児は瞬く間に成長していく。あっという間に大の大人程の背丈に成長すると背中から六枚の羽を生やした。その姿は天使の様にも悪魔の様にも見える。リンドは怯むことなく駆けるとネイル・フリー・トゥーンで切りつけた。

わけもなく左手で白い人型が防いだその刹那、御影が叫んだ。

「ギユガルド!!」

御影の右掌から射出された閃光は人型の胸にぼっかりとした穴を開ける。人型の動きが一瞬止まるのを見逃さないように、今度はリンドが叫んだ。

「ウスライ!!」

『始』水の青い刀身は人型の左の腕を切り裂いた。ヨロヨロと後ずさる人型に、リンドは休むことなく止めの一撃とばかりに袈裟切りにネイル・フリー・トゥーンを振り下ろす。左の肩口から御影が空

けた胸の穴まで一気に刃が到達すると、人型は完全倒れた。

付きもしない血糊ちのりを振り払う仕草の後、リンドは終わりだと言わんばかりにネイル・フリー・トゥーンの剣先を白銀目掛けて付き伸ばす。

しかし、白銀は臆おくするでもなく、右手の親指を突き上げ人差し指を伸ばし銃の形を作るとネイルを掲かげるリンドに応かじるようにして右手を伸ばした。そして、ふいにその指先をリンドから御影に変えると「バン」と呟つぶいた。

その瞬間に御影の胸の右側に穴が開く。完全に視界から外れていた倒れた人型ののつぺらぼうの顔に巨大な口が開き、その口端から白い煙がうっすらと昇っていた。それを見留みとめた後で、御影はゆっくりと倒れる。

啞然あぜんとしたままでリンドが、倒れた御影から人型へと視線を移した時、立ち上がる人型の傷は既に塞がり、リンドが切り飛ばしたはずの左腕も再生を終えていた。

「今ので、二人分くらいの命を使っちゃったかな？ ……リンド、コイツの能力を教えてやるよ。傲慢の能力は人の魂を自らの命に代える事が出来る。今ので、二人分の命を失ったとはいえ、コイツが如月で手にした魂の数は軽く百は超えてるよ」

リンドをまでも喰らいつくさんばかりに六枚の羽を広げた人型は、笑っているかのようにその巨大な口を開いた。

7

「ふん」とサリーは鼻を鳴らした。その足元には特殊な素材とは思えぬほどの脆もろさで、サリーの持つ魔剣ハーデスによってバラバラに解体された金属片が転がる。それは正に鉄屑てつくずと呼ぶに相応しい光景だった。

サリーが進んだ先で彼を待ち構えていたのは、クロイツ・コーポレーションで開発された四機のアルマナの最終機、名を大釜ダクザ・ドラムのアウグストウスと名乗った。

最終機にして最強の機体と自らを称した彼は四機の中でも一際大きな体躯たいくと、四本の腕にはそれぞれバルカン砲を装備し、そのいつ尽きるとも知れない弾倉の内装された背部の重量を補い機動性も向上させる為に脚部は馬の様な四足歩行であった。

轟音こうおんを上げ、洞窟内中を蜂の巣にするアウグストウスの脅威きょういに当初は防戦を強いられたサリーではあったが、すべての地属性をその支配下におく魔剣ハーデスにとつては洞窟という巨大な岩の塊ですが、地の利以外の何者でもなかった。

堅い岩地はハーデスに触れるとゼリーのように柔らかな固体とも液体とも付かぬ触感しゅっかんのものに変わっていく。サリーはその中に沈むと、掘り進むというより泳ぐような感覚でアウグストウスの後方へと忍び寄った。

刀身の短いハーデスではあったが、この近距離ではアルマナの最終機も全くの敵ではない。そこからはサリーによる一方的なまでのロボットの解体ショーだった。

ロボットの解体を終えて、サリーがまず思ったのはこのハーデスの能力を使えばわざわざ洞窟内を進む必要もなく、目的地までのシヨートカットですら容易たやすいのではないか、という事である。

思いついてすぐそれを実行に移したサリーだったが、二度挑戦して、二度ともそれは失敗に終わった。地面に沈んだ後、岩肌いわはだの内部を探索したところで、近道らしきものはおるか、リンドや他の仲間なかまのいるルートに辿り着くことは出来なかった。

ハーデスはそれをして（それぞれのルートは故意に次元を捻じ曲げた道に作られているようだ）と教えてくれた。

砂や石はどうか出来てもハーデスの力では次元を断つ事は出来ないらしい。結局、今の道を進むしかないのであれば、泳ぐよりは

歩いた方が早いだろう。

地面から這い出たサリーは「ふん」と鼻を鳴らした。その後で、少しのイラつきをあてつける様に転がる鉄屑を蹴り飛ばす。

愛飲するタバコに火を点けると紫煙を燻らしながら、サリーは再び歩き出した。

8

堅い岩地に背中を預ける白銀が見守る中で、リンドと白い人型の戦いは続いていた。

ここに至るまでに幾度となく修羅場を潜り、実戦経験を積んできたリンドと、つい今しがた成長を終えた人型では勝負にはならない。素人然とした攻撃はまるで脅威ではなかったし、唯一気をつけなければならぬ口から放出される白いレーザー砲のような閃光も、放つ瞬間の予備動作が大きい為、回避するのも苦ではなかった。

このわずかの間に人型の攻撃をかわし、防ぎ、放たれたリンドの攻撃は二十以上の致命傷を与えてはいたが、その度に超速再生を果たす人型が倒れることはなかった。

「はあああああ!!」

氣勢を上げて振るったウスラヒの刀身を灯したネイル・フリー・トウーンの胴切りは人型を真っ二つに切り裂いたが、それでも人型は問題もないように胴をくつつけ直すと、大きな口をぽっかりと広げた。

白い閃光をかわした瞬間、リンドの体勢は崩れる。

技術的には雲泥の差があるとはいえ、人型はダメージを受けず、その上疲れ知らずであった。息を切らすリンドに気づいたかどうかは定かではない。だが、人型は続けざまに大きな口を再び開いた。

飛び去ろうとしたリンドだったが、底なしの沼にでも浸かったようにその足は動かなかった。

閃光が迸るのを視界に留めながら、寸でのところでリンドは左の掌を突き出す。

牢、氷壁のシールドが間一髪閃光を弾いた瞬間、リンドは大きく息を吸い込んだ。ゆっくりと息を整えるように何度も何度も息を吸っては、吐き出す。そして思考をフル回転させる。しかし、この後自分がどうすべきなのかそんなことは分かりきっていた。

（敵が持つ百近いという命を、今までにおそらく二十以上は削ってやった。……という事はあと八十回それを繰り返せばいいだけだ）簡単な話だと自分を言い聞かせる。だが、それを言葉にしてしまつたら、それがいかに困難な事かを理解させるには十分な思考が、リンドの疲労を余計に増させた。

リンドの瞳に薄い闇が広がり始める。それを察したようにネイル・フリー・トウーンは優しく話しかけた。

（ならば、どうするリンド。諦めてしまうのか？ いつの時も全てを打ち倒すのは、強き者だけぞ。最後まで通す信念と、強き心を持つ者だけぞ）

「わかってるさ」

リンドは小さく呟く。

自分が何を成すべきか、そのためにはどうするか自分は誓ったはずだ。

「わかってるさ」再びリンドが呟いた時、彼の全身を青い光が包み始めた。

まさにそのときだった。胸に穴を開けられた後、倒れたまま動かなかった御影が立ち上がるのが見えた。

戦具アルマを握り締め立ち上がる彼の顔には悲壮感が漂う。

「御影……さん？」

リンドの問いに御影は振り返りもせず答えた。

「洞窟の外の三上たちがたつた今倒れた。……俺はそのおかげで立つ事が出来た。彼らの力と記憶を引き継いでね」

御影は人型の前に立ち塞がると、戦具アルマの剣先を突き出す。

「今、ミカトン・ケイルの魂はフォウシャル・クロイツ残る二人に四十九人分ずつ引き継がれた。…ところで、お前、一気に五十も命を削られたことはあるかい？」

金色の光球が戦具アルマの剣先に集まり始めるのを見て人型はその口を広げたが、遅かった。

「ギユガルド・レイ!!!」

剣先に集まった光球は御影の声と共に五十の光球へ一瞬のうちに分裂すると、人型へと降り注ぐ。

轟音と砂煙に巻き込まれて人型の姿は視界から消えた。

戦具アルマの剣先を下ろした御影はリンドへと声を掛けた。

「大丈夫だったか？」

それを見てリンドも大丈夫と応えるように微笑を返す。

刹那。

リンドの顔から笑みが消えた。

砂煙の中から、人型が跳躍する。その姿はボロボロで、もはや巨大な口のある頭部の乗った胴に四肢が付いただけの、巨大なマツチ棒のような姿だった。

リンドが叫ぶより先に人型は、今までとは比べ物にならない大きさの口を広げる。

今までのレーザー砲を束ねたような閃光は御影の身体の右半分を一瞬にして消滅させた。

しかし、御影の表情に驚きはない。そこには全てを受け入れたような穏やかさだけがあつた。

「これで、全ての記憶と力は最後の一人に。……ミカトン・ケイルは降臨する」

それが御影の最後の言葉だった。人としての原型を留めない御影

は崩れ落ちながら金色の靄もやへと形を変え、そして消えた。

リンドは剣を振りかぶるようにして構えると叫んだ。怒声を上げながらネイル・フリー・トゥーンを振り下ろした瞬間、大気中の水分が集まるようにして刀身で渦巻く竜巻は水龍となつて人型を撃ちぬいた。

セイ
アギト
聖、竜顎

水流が通り過ぎた後に残ったのは、空気の抜けた風船のように萎み、骨と皮だけになつてしまつたかのような人型の残骸だけだつた。それでもなお、膝を着かないようフラフラと歩き回るそれを見て、白銀は口を開いた。

「ハルニ……」

だが、言い終えるより先にネイル・フリー・トゥーンの刀身が白銀の首筋に当たつた。

「なんでだ？　なんで俺たち殺しあわなきゃならないんだ、ハッチ」

リンドは白銀の瞳をまともに見る事もできないままで尋ねた。

白銀は薄く笑つとリンドの顔を真つ直ぐに見つめた。

「俺はお前や、ユアンの為のアンノウンなんだつてさ。だつたら、どうすれば良い？　俺が今まで生きてきた人生も、これから先自分で決めたと思つた人生もお前らの為のものだとするなら、俺は何のために生きているんだ？　だから俺はこの道を自分自身で決めたんだ。……友達だと思つたら、最後まで俺のためにリンド、お前が幕を引けよ」

リンドは何も言わなかつた。ただ、静かに白銀の首筋にあてがつた刀身を見つめた。

白銀はいつもの涼しげな表情でリンドを見ていた。

結局、最後までリンドは白銀の顔を見る事が出来なかつた。

少し俯うつむいたまま、ネイル・フリー・トゥーンを持つ右手に力を込める。そつとその刀身を下ろした時、鮮明なまでの赤が滴したたり落ちた。

9

洞窟の中へと飛び込んだはずのトーノの眼前に映ったのは、眩まぶしいほどに原色ばかりをあしらった遊具の数々だった。

誰もいないはずの遊園地では心踊るような音楽が響き、観覧車やメリーゴーランドがいつ止まるとも知れずに回り続ける。

その中を行くトーノがふと気づいた時、彼女はお姫様のような淡いブルーのドレスを身に着けていた。つい今しがたまで携えていた戦具アルマもその手には既になく、戸惑いと不安を覚えつつも歩く彼女の前に、色とりどりの風船を持つ熊の縫いぐるみが姿を現す。その熊が手渡そうとする風船を払いのけると、トーノは睨にらみつけた。

「ここはどこなの！ 皆はどこー！」

トーノに睨み付けられて熊はうなだれるような素振りを見せたが、その瞬間に手に持つ風船が次々に音を立てて割れる。それに反応するようにトーノはコマ数秒瞬きしたが、その間に熊はトーノの遙か前方に立っていた。

移動したというよりも、そのコマ送りのような現象は瞬間移動と呼ぶに相応しい。

距離を置いた熊は自身の胸元へと手を伸ばす。最初見たときは気づかなかつたが、熊の胸元にはジッパーが付いていた。普通、ぬいぐるみを着る為のジッパーは背中が付いているはずだが、胸元から口まで至るそのジッパーを開けて顔をさらすそれは、どちらかといえば寝袋と言ったほうが正しいようだ。フードのように熊の顔を外すと中からは、少し小太りの童顔が現れる。

トーノが見つめる先で彼は上目遣いのままで口を開いた。
「……僕は八都黄、怠惰の棕鳥、八都黄……ここに皆はいないよ……」
トーノは睨みつけたままで、八都黄の前へと歩み寄った。しかし、動く素振りも見せない八都黄はトーノが歩んだ分だけその距離を離す。それを見てトーノは両の足にまとわり付く長いスカートを気にも留めずに駆け出したが、八都黄との距離が埋まる事はなかった。

夢中になって駆けては、いつしかスカートの裾に足を取られてトーノは転んだ。追いかけても、追いかけても近づく事のできない蜃気楼のような八都黄の姿を、這いつくばりながら見上げた先で、八都黄は悲しそうな表情でトーノを見ていた。

「……僕の能力は、魂の保管装置である神の箱庭、パンドラの複製なんだ。とは言っても、眠りの中にいる僕の夢の世界にはただの一人しか入れられないだけだね。君の精神は今、僕の夢の中に存在しているんだ。僕はこの夢の世界の王……。どうあがいても君は僕には勝てないんだよ……」

台詞とは裏腹に八都黄の顔は今にも泣き出しそうだった。無言のまま睨むトーノから少し顔を逸らした時、八都黄の声は震えだす。「……全ては、全ては、ジャツジマンの計画通りに進んでるんだよ。君がどう足掻いたってもう遅いんだ。……現実の事はもうジャツジマンに任せて。……いいじゃないか、もういいじゃないか、夢の世界で。……ここで、ここにしようよ。……世界は、世界は、残酷すぎるよ……」

顔をくしゃくしゃにして話す八都黄から目を逸らさずに、しかし、トーノはしっかりと立ち上がった。

「だから、何？ ……世界が残酷だと思っただけはあなたがアンノウンだから？ ……だったら私だって同じようなものよ。それでも、夢の世界に逃げるより、私は最後まで残酷な現実の世界に在りたい。……そう誓ったの」

残酷なまでの自身の運命を知りえてなお、トーノはきっぱりと八

都黄に語る。怯む八都黄が「でも…でも…」と言葉を詰まらせるのを見て、トーノは厳しい視線を和らげると穏やかな表情で八都黄を見つめた。

「…私だってあなたと一緒に。怖いよ…でも、自分の気持ちからだけは逃げたくないの。お願い、私を元の世界に戻して」

全てを悟った上で凜々しく、そして優しく笑みを浮かべたトーノを八都黄は美しいと思った。

少しの間トーノの笑顔に見とれた後で、八都黄は「君はバカだよ」と呟いた。

力ない笑顔を浮かべた八都黄の声が聞こえたと思ったその時、トーノは薄暗い洞窟の中に一人佇んでいた。右手に持つ戦具アルマと身に着けたセーラー服、その上に羽織るユアンから借りたベージュ色のカーデイガン姿を一人確認した後で、トーノは洞窟の奥目指して駆け出していく。

数歩駆けつけた時、トーノの長い黒髪は次第に風に揺れる稲穂を思わせる金髪へと変わっていった。黒色から金色へと変わり行くに従い、彼女の頭の中に様々な記憶が映像となつて一気に流れ込んでいく。

そして、彼女はミカトン・ケイルとしての全ての記憶と力を取り戻した。

全ての記憶を取り戻した彼女は全てを理解する。その中には、美作ゆかりという人間の「真実」も含まれていた。その瞬間に彼女の足が止まりかける。美作ゆかりという存在は、今トーノの中で、彼女の精神を押しつぶさんばかりにどんどん巨大な存在へと変わりつつあった。それを払拭はらいつくするように小さく首を振ると、トーノはただ、闇の先、洞窟の内部だけを見据えて、そして駆けるスピードを上げた。

残酷な運命だけが待ち受ける先を目指し、走り行く彼女の後方で、壁に背を預けたままの椋鳥八都黄はその後ろ姿をひっそりと見守っていた。

10

最後の扉を開いた時、リンドの中には怒りと憎しみしかなかった。知らなくても良い真実はある。……いや、この世の中のほとんどがそうであろう。

真実など知らなければ、千歳 翠子も蜂谷 白銀も闇に走る事はなかった。

そして、自分もまた、そんな彼らを手にかける事もなかった。いつも通りの日常の中で、彼や彼女らと笑い会えた時間には、もう戻る事など出来ない。

リンドの心は真つ白だった。それでも彼が先へ、先へと進むことが出来たのは、美作ゆかりを助け出すという最初からの信念に他ならない。事ここに至っては、もうそれ以外にはすぎる物のない彼は、ただその為だけに動く心の乾ききった機械のようでもあった。

心が壊れきってしまう前に最後の扉を彼が最初に開いたのは、良くも悪くも彼に息を吹き返させることになる。

扉の先は今までの薄暗い洞窟からは一転して、広い坑内くつないを埋め尽くすほどに設置された機械の数々が最新鋭の研究所を思わせる造りになっていた。

その機械の一つに繋がれた巨大な水槽に、リンドの視線は釘付けとなる。

水槽の中で裸の美作ゆかりが浮いていた。

水の張られたその中で意識のないように瞳を閉じてはいたが、彼女の口端からは小さな気泡がブクブクと浮かんでいる。

目を見開いたリンドが声を上げようと口を開けた矢先、ふいに声が聞こえた。

「彼女はちゃんと生きてるから、安心していいよ。もちろん。もう一人の方も無事だよ」

我に返ったリンドが視線を下ろした先に、フードを目深に被った男が安楽椅子から腰を上げた。彼の後方にはゆかりと同じく、水槽の中で裸の杏子・ベアトリス・天城山が瞳を閉じたままで浮いている。

リンドが睨みつける中、彼はフードを外す。中から出てきた顔はリンドの見知った顔だった。青いプラスチックフレームの眼鏡に、ぱつぱつと切りそろえられた前髪が特徴的な黒髪は遙か昔のエジプト人を思わせる。

「カリグラ……お前が、ジャツジマンか」

苦々しく呟いたリンドの前で、彼は前に見せたのと同じ、少しだけ悪意に満ちた笑みを浮かべた。そして、プラスチックフレームの眼鏡に手を伸ばす。

「ある時は、クロノ・クロイツの作戦参謀、カリグラ。また、ある時は世界を滅ぼそうとする者、ジャツジマン。しかしてその実態は……かつて青の錬金術師と呼ばれし者、シャルナアプ・ウーデルカだ。以後お見知りおきを」

プラスチックフレームの眼鏡を外した彼の瞳は美しい碧眼へきがんだった。そして、黒いカツラを外すと、薄く青みがかった肩まである銀髪こほが零れ落ちた。

リンドがネイル・フー・トゥーンを構えるのを見て、シャルナアプは特に構えるでもなく「君達は良くやってくれた」と話した。

その言葉に機先を制されたように、リンドは切りつける事も出来ずにシャルナアプの話に聞き入ってしまう。

「俺の計画には君達の力がどうしても必要だったんだ。……だから、君達に神具ハルモニアを与え、そして君達が成長できるように君達のレベルに見合った敵、プラテネリ使い達をぶつけてきたし、ピンチの時には助けてもやった。まあ、プラテネリ使い達はその事実には気づいてはいなかったけどね」

（彼らは捨て駒に過ぎなかったっていうのか……なんて奴だ。コイツの下らない『計画』とやらの為に、翠子先輩やハッチは化け物にされちまったってのか）

リンドはシャルナアプを厳しく睨みつけた。だが、彼が計画の為にリンド達にネイル・フリー・トゥーンのような神具ハルモニアを与えたとするなら、それは自身の脅威と成りうるデメリットを自ら作ったという事になる。リンドにしてみれば、それは荒唐無稽うとうむぎな考えとしか思えない。

何より、リンドとネイルの出会いには偶然の産物でしかないというリンド自身は思っていた。リンドは言葉で丸め込もうとしているのだとシャルナアプへと向き直ったが、当のシャルナアプは特に気にするでもなく話を続けた。

「君は、君とネイル・フリー・トゥーンとの出会いが偶然だとも思っているんだろう？ それはないよ。君達と神具ハルモニアとの出会いは、俺が予めセッティングしていたものだ。まあ、アテナイの出現に関してだけは、賭けみたいなものだったけどね。……君達の身体にはそれぞれテラと呼ばれた旧時代において、四本の剣。剣帝、剣皇、神剣、魔剣を作り出したかつては神と呼ばれた者達のI・D、つまりは魂の一部を埋め込ませてもらった。君達がそれぞれの神具ハルモニアと心を通わせる事が出来るのはその為だよ」

啞然とした表情を浮かべながらも、それでもリンドは吼ほえた。「だったら、なんの為に！ 何の為にそんなことをする必要があっ

たつて言うんだ!」

シャルナアプは呆れたように溜息をつく。

「何の為に? その理由は既に、君の瞳に映っているだろう?」

リンドの視界で、ジャツジマンから少し離れたところで眠る美作ゆかりにリンドの視線は釘付けになる。

「確かに、世界をこんな風にしたのは俺だよ。それは間違いない。だが、ミカトン・ケイルが新たに作り直す世界で彼女達はどのようなだろうね、リンド君。彼女達がI・Dと呼ばれる存在なのか、それともアンノウンと呼ばれる存在なのか、君はどっちだと思う?」

リンドは眠れる美作ゆかりを、ただ固唾を呑むようにして見上げる事しか出来なかった。悪意に満ちた笑顔を浮かべたままで、シャルナアプは続ける。

「彼女がI・Dつまりは、魂をもった存在だと思っなら、俺の野望を食い止めミカトンの作る新たな世界で再び楽しい日常を送ればいいさ。……でも違ったら? もし、彼女が魂を持たないアンノウンなら、彼女はその存在をバクの手によって永遠に抹消される事になるだろう。君が俺に協力してくれるなら、それは避けられる。……さあ、どっちだろうね。選ぶのは君だよ」

リンドは剣を持つ手を強く握る。威嚇をするように構えてはみたが、ゆかりがI・Dなのかアンノウンなのか、それを尋ねることすらゆかりに対して残酷なようで、何も言う事が出来なかった。

尋ねることの出来ないリンドに与えられた二つの選択肢、だが、それは与えられたその時に決まっていたのかもしれない。だが、リンドにはそれが正しい事なのかどうか分からなかった。表情こそ鋭いものの、カタカタと剣を震わすその姿はまるで籠の鳥である。

剣を振るうことも、言葉を発することも出来ないでいるリンドを

見かねるようにして、ふいにリンドの後方から低い声が呆れるように聞こえた。

「お前の中ではもう結論が出てんだろ、リンド」

助け舟にすぎるようにリンドは声の方へと振り返る。

そこにはサリーが立っていた。

サリーは捜し求めたベアトリスの姿を確認しながら話した。

「俺達はもう一蓮托生^{いちれんたくしょう}。ここでする決断するのは、俺たち皆の決断って事になる……そうだろ？」

サリーが視線を移した先で、満足そうにシャルナアップが頷く。

「……だったら、その決断を下すのはリンド、お前じゃなくても良^いってわけだよな」

リンドはギョツとしたが、それは当然の事だった。

今この時にここにいて、ベアトリスを見つめるサリーにも当然その権利はあった。

リンドが口を開くより先にサリーは告げた。

「お前の決断が何なのか俺は知らないし、知りたくもない。俺は俺の決断を口にするだけだ。それがお前のものと同じかどうか、そんな事は知る必要もない。だが、俺じゃなく、お前が決断を下すというのなら……俺を止めるしかねーな」

サリーは魔剣ハーデスを逆手に構えるとゆっくりと腰を落とした。

なぜ仲間同士で決闘のような事をしなければならないのか、リンドは馬鹿馬鹿しいとさえ思った。だが、サリーの瞳は真剣そのものだった。

つまりはそれこそが、自身の望みにも等しい決断を下すという事なのだ。

リンドも、それは十分過ぎるほどに理解してはいた。だから、も

う何も告げなかった。
リンドはサリーに対して剣帝ネイル・フリー・トゥーンをゆっくりと構えた。

11

「くそっ！ くそっ！ どうなってんだ一体！！」

駆けるユアンの声は、次第に悲鳴にも近いものへと変わっていた。
「かぎる！ かぎる！ 聞こえてるか！！」

ユアンの叫びに応じるように剣皇ポーニロア越しにかぎるの声が聞こえる。

「聞こえてるよ、ユアン！ どうして、リンドとサリー先輩が戦う事になってんのよ！！」

「そんなの知るか！」

吐き捨てるように呟くユアンにしても、かぎるにしても最後の部屋と至ったリンドとシャルナアプとのやり取りは剣帝ネイル・フリー・トゥーンを通してそれぞれの神具ハルモニアに傍受ぼうじゅしていた。

その一連の訳の分からない展開に、慎重さなど置き去りにして矢のように洞窟内を駆けていた時、突然にして沈黙を破ったサリーの出現はそんなユアンとかぎるを尚更に混乱こんらんに陥おとれる。

「トーノちゃんは、トーノちゃんはどこにはいないの！？」

かぎるの質問に「会話だけで、見えるわけじゃないのはお前だつて分かってんだろ」とユアンが悪態の一つもつこうとした矢先、ユアンの進む洞窟の道は合流部分へと行き着く。
そこで駆けるかぎるとばったり出くわした。

面と向かって先ほどの悪態をつきかけるユアンにかぎるが尋ねる。

「……ねえ、ユアンだったら、どういう決断を下すの？」

ちらと見たかぎるの瞳に怯えの色が浮かんでいる。それを直視する事もできずユアンはただ「……そんなのわかんねえよ」とだけ呟

いた。

ユアンは内心きつと自分では決断を下せまい、そう思った。きつとそれはかぎるも同じだろう。卑怯ひきょうかもしれないが、リンドならばきつと正しい決断を下せると思ったし、リンドが決めた事なら自分はそれで良いとすら思っていた。

(……だが、本当にそれで良いのだろうか?)

結論は出ないままにユアンは最後の扉を押し開く。

ユアンとかぎるが、扉の開いた眩い部屋の中を見つめたとき、二人が声を発するより先にサリーは動いた。

忍ばせたナイフを地面に向かつて突き刺すとそれは見る間に砂人形へと姿を変え、突き刺さったナイフを手にリンドへと襲い掛かる。青い「ウスラヒ」の刀身を灯したネイル・フー・トゥーンでそれを分けなく切り裂いた後、間髪いれずにリンドは砂人形の後ろを駆けてきたサリーに向けて剣を横薙なぎに振った。

魔剣ハーデスを低く構えるサリーの特攻とくこうに、躊躇ちゅうちゆすることなくリンドはサリーの胸を真っ二つに切り裂く。しかし、一瞬にして決した決着の後もリンドはその動きを止める事はなかった。横薙なぎの遠心力を利用して振り回した剣先は三百六十度回りきることなくピタリと止まる。その瞬間に真っ二つに切り裂かれたサリーの身体は砂となって地に降り注いだ。

動き始めたリンドの後方に当たる位置、ネイル・フー・トゥーンの剣先にサリーの首筋が触れていた。ユアンとかぎるは何が起ったのかさっぱり分からなかった。躊躇なくサリーを切り裂いたりリンドも、切り裂かれたと思った瞬間リンドの後方に出現したサリーも、ずっと一部始終を見ていたはずなのに何一つ理解する事は出来なかった。

「この短期間で砂人形を二つ作れるようになってたんですね。なお

かつ本物と見分けも付かないほどの精巧さまで持ち合わせてるなんて、さすがサリー先輩です」

剣先を向けたままでリンドはサリーへと賛辞の言葉を贈る。

「ふん、一つ目の砂人形に目を奪われてる最中に完全に入れ替われたと思っただつてのにな。……なんで気づいた？」

地中に潜り、完全に後方から虚をつけたと思っただつたサリーにすれば、それは腑に落ちない事だつた。

「ネイルは全ての水を支配してます。人体の血液も水分なら、それが血の通つた人間かどうかを見極めることは可能です」

聞き終えてサリーは薄く笑つた。

剣の特性ゆえに負けたとしてもそれは負けに違いない。サリーは地面に胡坐をかくようにして座ると「俺の負けだな」と呟きつつ、タバコを啜える。

それでもまだリンドが煮え切らないように「……でも」と呟くと、珍しくサリーは煙を吐きながら声を上げて笑つた。

「お前がどういふ決断を下すにしろ、俺とベアトリーチエは心から愛し合つてるし、いつだつて繋がつてつから、問題ねーよ」

サリーの笑顔に救われるように、リンドも少しだけ微笑んだ。そして、その後でリンドは顔を上げた。その顔には一層の厳しさが刻まれていた。

1
2

最後の扉を開く手間を惜しむように、トーノは戦具アルマで切り裂く。美しい金色の髪をなびかせる彼女の瞳にリンドの顔が映つた。その表情の厳しさにトーノはリンドの決断を悟つた。

トーノがそこに現れた時、彼女に気づいたのはユアンとかぎるだつた。しかし、トーノはそれには気づかない。

彼女はリンドの顔だけを見ていた。だが、彼女の思いも空しく、リンドが見つめていたのは、シャルナアップであり、彼の後ろでたゆたう美作ゆかりだった。

リンドが静かに口を開く。

その時、制止する為の言葉。つまりは美作ゆかりの真実を告げることが出来なかったのは、神にも等しい力と記憶を手にしたミカトン・ケイルではなく、彼女が水鏡 遠野という一人の女性だったからに他ならない

しかし、時間にすればわずかに数秒。その一瞬の躊躇こそが全てだった。

「……俺の決断は……××××××××××」

リンドは自らの決断を下した。

その声はトーノには聞こえなかった。

いや、トーノ自身、今までずっと聞こえない振りをしていただけなのかもしれない。

サリーはタバコを啜えたままで、静かに瞳を閉じた。

ユアンとかぎるはどうすることも出来ずに、ぽっぜみ呆然と立ち尽くすだけだった。

唯一人、シャルナアップだけが満足そうに笑った。

世界は音もなく白い闇に包まれていく。

世界を白い闇が覆ったのか、それとも元々世界は白い闇だったのか、今となってはどうでも良いことだった。

ただ、その日、その瞬間に、世界は終わった。

第一部 聖痕のメタフィジカ

終

第二部 在りし日のラグナロク 第一章 神話の神話

まだ神と人が共にあった時代。

俺はこの当たり前の世界で、当たり前の仲間達と過ごす毎日がつと続いていくものだと思っていた。

全ては失ってから気づくもの。

時間は過ぎ行くというのに、人の心は変わっていくというのに、俺はそんな毎日がどれほどかけがいの無いものなのか、その時はまだ知らなかった。

そんな毎日に辟易しながらも、心のどこかではそれが永遠に続いていくものだと思じて疑う事もなかった。

時間は過ぎ行き、人の心は変わってしまった。

それは今更どうしようも出来ない事かもしれない。

それでも、今はただ、そんな当たり前だった時代に思いを巡らせ、そして当たり前だったかけがいのない俺の仲間、ミカトン・ケイルとシャルナアプ・ウーデルカの話語り。

十 誰が為のイクスルプ 十

第二部 在りし日のラグナロク

第一章 神話の神話

1

人界^{テラ}暦1837年の季節も秋に差しかかるとうとうその日の夕暮れ、一年に及ぶ長旅を終え、この星^{テラ}の大陸^{アスベル}の西部、俗にいうイースト・アスベルの小さな森へと足を踏み入れると、俺は感慨深く昔なじみのその風景を見渡した。

「一年ぶりだつてのに、ここは何にも変わってねーな。なあ、プウ？」

俺は隣を歩く、もはやボロボロとなったオリーブ色をした麻地のマントを羽織る、シャルナアプ・ウーデルカへと話しかけたが、彼は小さく溜息をついただけだった。

俺の名はアン・ミンツ。

かつて大陸^{アスベル}を統一した赤い毛髪に赤色の瞳を持つその外見から、赤の剣士の一族と呼ばれたミンツ王家直系にして最後の生き残りという輝かしい肩書きの持ち主である。しかし、そんな肩書きを持ちつつも、放浪の旅の果てに辿りついたこのイタヤの森の小さな小屋で居候生活を送っていた俺が、人生の転機を迎えたのは一年と少し前の話。

隣を歩く薄く青みがかった銀髪に切れ長の瞳が印象的な青の錬金術師こと「シャルナアプ・ウーデルカ」と、今や世界を救ったと噂される金色の英雄「ミカトン・ケイル」と共に、邪界^{スヒウス}と呼ばれる世界から、人間界^{テラ}を支配する為に現れた邪神ドヴァーズとその一団を打ち倒すという激闘^{よいん}の余韻も冷めやらぬうちに、俺とプウは自称賢者の怪しいジジイ「クイルド」に旅に出るよう告げられた。

激闘を制し、ようやくにして手にした平穏というご褒美に与る間もなく、宣告された特命に俺はぐずりまくってやったが、プウの奴

があつさり引き受けてしまったために、俺だけ断るわけにもいかず、泣く泣く旅に出る羽目になってしまった。

旅の道中、世界中から賞賛を受けるミカトン・ケイルの噂を聞いては、どうやらその祝賀会にも参加せず、旅に出てしまった俺とプウはミカトンの手下程度の扱いらしい。その度に苦々しい思いをしてきたわけだが、それも今日までの事だ。

クイルドジイに告げられた特命は、それはそれは困難なものであったが、俺とプウは成功を収め、帰ってきた今日という日を持つてようやく平穩というご褒美に浸れるというわけだ。

「なんだよ、プウ。元気ねーな？」

俺のテンションとは対照的に、長いまつげが印象的な瞳を細め、小さく溜息などついてみせるプウに俺は尋ねた。

「アン、俺たちが旅に出てる間に、ミカトンの奴が多少なりとも成長してると思うか？」

まったく、プウ。お前って奴は心配症にも程があるな。

真面目で融通の利かない友を隣に置いて、俺は自分のこの開放感ゆえ、人の事を心配する気など更々ない。

「大丈夫だって。ジイが付いてんだぜ？ ジイの奴、修行させまくるって息巻いてたじゃん」

プウ、何も心配する事なんてないんだぜ。

そう促すように、俺はこの旅の果てに成長した者らしい、大人の余裕溢れる笑顔をプウに向けた。

「だーかーら！ 何をどうしたらそんな事になるんだ！？ ああ、！！」

大人の余裕溢れる笑顔を浮かべていたはずの俺は、それから五分と経たぬ内に激怒していた。食ってかかる度にミカトン・ケイルはごによごによと言いつけがましい事を言っていたが、咀嚼音そしゃくおんのようにくちやくちやと聞こえるそれを聞けば聞くほど、俺の怒りは増していく。

イタヤの森の見慣れた掘立て小屋へと意気揚々と凱旋がいせんを果たした俺とプウがそこで見たものは、丸々と太ったミカトン・ケイルその人だった。

くぐもった声で「おかえり」と彼は言ったが、その後ですぐ「グフウ」とゲップをする。二言、三言、言葉を交わす度に聞かされるその「グフウ」に、俺は当初それを語尾に付けるのが最近では流行っているのかと尋ねそうになった。

「お前はあ！ 俺とプウが大変な目にあってる最中、食っちゃ寝の生活を満喫してたのか！！」

「ごによごによと言いつけを繰り返すミカトン・ケイルの両の頬をつねる俺が怒り狂うのを脇に置いて、プウは申し訳なさそうな顔をしているクイルドと話していた。

「ワシが付いていながら、情けない。……この馬鹿は、何かにつけて修行を怠けては、技の一つも増やすでなく、体重ばかり増やす始末。……プウ、困難な旅を続けさせたお前達には、本当に合わせる顔がないわ」

さめざめと話すクイルドを、責めるでも慰めるでもなくポーカーフェイスのプウは尋ねる。

「剣帝ネイル・フリー・トゥーンと剣皇ポーニロア。二振りの剣は、クイルド殿の話の通りの場所に隠されてありました」

プウが鞘さやから青き刀身をした剣帝ネイル・フリー・トゥーンを引き抜くを見て、俺も剣皇ポーニロアをクイルドの眼前に掲げた。

「……しっかし、ホントにジジイの話通り、神具ハルモニアの二振りを見つけた事が出来るとは思わなかったぜ？ 実をいえば俺は、半信半疑だったんだよね」

クイルドの助言どおり、プウたちウーデルカー族縁の地であるムーナル湖近くの洞窟、その最深部より発見された二振りの剣を認め、クイルドは俺の話に「ああ、それなら……」と続けようとしたが、その時ふいに小屋の奥から現れた人影を見て口をつぐんだ。

「長旅ご苦労様です。お茶をお持ちしました」

黒というには少し薄い髪色をした、背の高い、しかしそれに見合わない痩せた体躯の少年が微笑を浮かべながらお茶をテーブルに置いていくのを、俺とプウは怪訝けげんな顔で見上げた。

察するようにクイルドが説明する。

「彼はアシエロンくんじゃ。アンとシャルナアップが旅に出てすぐ、放浪の旅を続ける彼がこのイタヤの森に流れてきてのお。今はこの小屋に居候しているのじゃよ」

クイルドが話し終えてすぐ、ミカトンが鬼の首でも取ったように誇らしげに続けた。

「俺が太ったのは、アシエロンくんが料理上手だったからだ。決して俺一人のせいじゃないぞ。……ついでに言わせてもらえば、今アシエロンくんはアンの部屋を使ってるから、アンの寝るところはないからな！」

俺が両の頬をつねるより早く、クイルドがミカトンの頭をどつく。俺の代わりに説教を始めたクイルドにミカトンを任せ、お茶をすすりながら俺はアシエロンに「年は幾つ？」と尋ねた。

「長い旅を続けるうちに忘れてしまいました」と苦笑を浮かべるアシエロンを見て、俺は続けざまに質問する。

「放浪の旅を続けてたって聞いたけど、どこから来たんだい？ 身なりからしてサウスの方？」

俺が何の気もなしに尋ねると、説教されていたミカトンがなぜか

口を尖らせた。

「アン、お前はホントダメな奴だな。人には色々と込み入った事情ってヤツがあるんだよ。だから、俺もジジイも詮索してないってのにさあ」

急に良い人ぶって俺を責め出したミカトンに対して、再び怒りの導火線が点り始めた俺ではあったが、場を収めるように微笑を浮かべたアシエロンが「別に良いんです」と言っつのを聞いて向き直った。「ただ、目的も曖昧な旅なのでどこからっつていうのは正しくは言えないです。ここに来る前にいたのは確かに南の大陸でしたけど、その前は北にもいました。邪界メヒカスの方にいたこともあつたし、冥界ネメシスの方にいた事もあるんですよ」

アシエロンの話に、俺とミカトンは「へえ」と頷き、プウは無言で見つめていたが、唯一人、クイルドだけが表情を強張らせていた。

3

「そういえば話の途中じゃったな」とクイルドは切り出した。

お茶を飲んで一息入れた俺達を残し、アシエロンは夕食の準備の為に部屋を後にした。

クイルドに促されるように外に連れ出されると、クイルドはいきなりミカトンを小屋の裏に設置してあつた巨大な回し車の中へと放り込んだ。ネズミの回す車の人間用ともいべきその回し車の中でミカトンは喚わめき散らす。

「ジジイ、何も今日に限ってこんな仕打ちをしなくたっていいだろ！！ 大体にしてジジイ、今日がどれだけ大事な日かって事くらいお前にも分かるだろうが！！」

悲痛な声を上げるミカトンにクイルドが「ダイエット開始じゃ！！」ふびんと言い捨てるのを見て、俺はほんの少しだけ不憫に思った。

(そうだよな、ミカトンだって今日は旅を終えて帰ってきた友と語り合いたいだろうぜ)

俺が助け舟を出そうとクイルドの元へ歩み寄ったその時だった。

「今日は俺の十九歳の誕生日だぁー!!!」

ミカトンが言い放つ。それを見て俺は助け舟を出すのをやめた。

何が誕生日だ!!!

俺が十九歳を迎えたのは旧王朝の遺跡で雨風を凌いでいる時だったし、プウの奴なんてもつと悲惨な事に八グロボ火山の洞窟内で一つ目竜と一昼夜に及ぶ激戦を繰り広げている最中に十九歳を迎えてしまった。

俺が乾いた笑い声を上げながら、そこを後にしてすぐ、回し車のガラガラと回転する音と共にミカトンの叫び声がこだました。

「さて」と呟くと賢者クイルドは仕切りなおした。小屋から少し離れた小さな湖の脇の岩の上に腰掛けた姿は、長く伸ばした白髪の毛と髪の毛に、身に着けた粗い生地ひげの薄汚れたローブ、そして手に持った杖のおかげでさながら仙人とか魔法使いといった風体である。「なぜ、ワシが神具ハルモニアの隠されとる場所を知っていたか、じゃったな……。そんなの簡単な話じゃ。剣帝ネイル・フリー・トゥーンも剣皇ポーニロアも、ワシが隠したんじゃ」

驚きを通り越して言葉も出ない俺の代わりにプウが尋ねた。

「それはつまり、あなたが邪神ドヴァーズの元から剣帝を盗み出したってことですか?」

「さすがは青の錬金術師、ウーデルカー族の皇子。よく分かっこのつ」

言い終えて悦に入るように頷くクイルドだったが、いまいち話の理解が出来ていない俺の顔を見ると「どれ、ひとつ講釈が必要じゃな」と仰々しく呟いた。

遙か昔。

世界に唯一人存在したのは、創生神と呼ばれる存在だった。彼は天上界ハルと呼ばれたとても小さな星において、眩まばゆいばかりに輝く神殿に住んでいたとされる。

唯一、生命だけでなく、魂をも作り出す術を持つ彼は、ある日戯たわむれに自らの力を分け与えた息子を四人生み出したと伝えられていた。即ち、上から順に魔界神アンブロシア、邪神ドヴァーズ、冥界神デプルート、人界神テラマギナの四人である。

彼らはその神として与えられた力により、それぞれが新たな星を創生した。

いつの日か魔界、邪界、冥界、人界と呼ばれる事となるそれらの星は、四人の神の考え方の違いによる環境をそれぞれが構築していたが、数珠しじゆ繋ぎのように繋がりにある星と星との間で争しぎいなどというものは存在しなかった。

しかし、兄弟として、友として互いを認め合っていた神の子らに亀裂が入る事となったのは、またしても創生神の思い付きにも等しい戯れであった。

自らの住む天上界ハルを戴いたくたに値する世界はいずれか、それを汝なんじらの生み出したる生命の優劣によって決める。

至高の存在たる彼はそう告げた。

天上界ハルをその世界に戴いたくたという事。それは永遠にも等しい世界の繁栄を意味している。数億にも及ぶ魂を父から貸与された四人の神の子らは、競い合うように新たな生命の誕生に邁進まいしんしたが、魔界神も、邪神も、冥界神ですが、それぞれの力を分け与えた神の眷属けんぞくともいふべき、魔界人、邪界人、冥界人を作り出す中で、唯一、人

界神テラマガナだけが、土くれに崇高なる魂をもつて生み出した脆弱な「人間」という存在を創り出した。

己が力から生み出した強く逞しい生命体に、創生神から分け与えられた魂をもつて創り出された神の眷属を隣に置いて「人間」は、力も、知恵も、寿命も、生命力も、何一つ勝っているものなどなかったが、人界神テラマガナは「なればこそ、成長。つまりは進化する事が出来る」と語った。

創生神はこの「人間」という愚かなる種族を大層気に入った。故に、天上界を戴くのは人界という事となった。

天上界を人界に戴くという栄誉なるその日の出来事は、今も多くの歴史書に残されている。

歴史書によれば、天上界を世界に戴く為には幾つかの必要な事があつたとされていた。

その中のひとつが天上界をその世界に安定させる為には人柱が必要であるという事だった。それもそれなりの人柱でなければ、天上界という神の居住区をその世界に留まらせておく事など出来ないとされた。

その為に、人界の神たるテラマガナがその役を負うこととなる。

伝承によれば、創生神無き時において、その姿を次元の狭間に隠すとされる程に不安定な天上界であつた為とされているが、現在では多くの歴史家がひとつの世界において二人の神を認めようとしなかつた創生神の企みによるものではないかという説に賛同している。天上界の最下部にあたる祠に人界神テラマガナが入り、天上界と人界とを一本の光り輝く柱が結んだ時、人々はただ感嘆の声を上げた。

しかし、事件は将にその時に起こった。

人間達が目を見開く様を眼下に見下ろし、満足そうに瞳を緩ませる創生神を背後から、魔界神、邪神、冥界神の三神が襲ったのだ。

創生神の閉じられた右の瞳には、不出来な生命を誕生させてしまった際に一瞬でその肉体を消滅させる黒滅瞳石 エキドナ が隠されてある。それを知っていればこそ、三神は創生神が気を緩めるギリギリまで待った。そして、その目論見はまんまと成功した。

一瞬の内に父神を葬り去った三神であつたが、しかしてそのすぐ後、三人が三人共に動けない状況に陥る事となる。

互いに腹に一物を置く三神だつた。三竦みともいうべき、睨みあいに至るのは最初から分かつていた事かもしれない。

創生神が自らの子らに背後から襲われたのは、彼にとって全くの想定外の事だつたらう。しかし、睨みあい続ける三神のとてもこの後すぐにその身に起こつた出来事は全くもって想定外の事であつた。

睨みあいを続ける三神の内、戦闘体形へと姿を変えた魔界神の巨大な身体が突如として真二つに裂かれたのだ。

魔界神の裂けた身体が二つの炎の塊となり轟々（ごうごう）と燃え続けるその中間、邪神ドヴァーズと冥界神デプルトの見つめた先に立っていたのは、人界神テラマギナを守るために生まれし存在、人界の騎士ヒエラルキだつた。

主を真二つにされた事に激昂し剣皇ポーニロアを手に襲い掛かつた魔界の騎士テュポン・ムシカが一撃の下に葬り去られるのを見て、邪神も冥界神も魔界神を真二つに切り裂いた物の正体に気づく。

人界の騎士ヒエラルキが携えていた剣は金色の光を纏っていた。それに気づいた瞬間、邪神も冥界神も言葉を失う。

人界神が創り出さなかつたために、四界の騎士の内唯一剣を持たぬヒエラルキが手にしていた剣は創生神の神具、全ての剣 ユピテ

ルであつた。

何故!?

二神の驚きは彼らにとつて、そのまま隙となる。
轟々と燃える炎の塊はその瞬間に人界の西と東を目掛けて飛んでいく。

その炎の塊に巻き込まれるようにして、天上界から弾き飛ばされた邪神と冥界神が見たとき、全ての剣 ユピテル を手にしたヒエラルキは南の空を目指して消えていった。

そして、それに呼応するようにして天上界はその姿をこの世界から消した。

5

「……それが、この人界に刻まれた神話というヤツじゃな」

語り終えるとクイルドは咳払いなどしてみせた。俺は一応「ふん」と唸つてみた後で、さらりとクイルドに質問する。

「……で、何でそんな大層な神具をあのバカが持つてるわけ?」

全ての属性を支配するといわれる、正に神話の中に登場するであろう神器。全ての剣 ユピテル をしがない大工の息子であるミカトン・ケイルが持つていて良い理由など、どう考えてもあるわけが無かった。

放浪の旅の果てに辿りついたイタヤの小屋で居候生活間もない頃にミカトンの奴が「ウチの家宝の、全ての剣だ」と言つて見せてくれた時も、その見栄えのよさに中々の名刀であろうと思いつつも、俺は正直言つて本物だとは思つていなかった。

しかし、そんなある日、邪神ドヴァーズの侵攻軍の小队に奪われ

るのを目の当たりにするに従い、ようやく本物らしいと信じるに至ったわけである。

そして、その後すぐに全ての剣 ユピテル 奪還だうかんの旅に出た俺達のうち、俺とシャルナアプとは離れ離れになってしまったミカトンが出会ったのが、この賢者クイルドだった。

クイルドから必殺の奥義『ギユガルド』を授けられたミカトンは全ての剣 ユピテル 奪還どころか、邪神ドヴァーズ撃破までやってのけてしまった。

おそらく、そこまでの男と見込んだ上で奥義を授けた賢者クイルドなら、きつと俺の他愛のない質問の答えになど造作もなく行き着いているはずだ。

俺は期待するような眼差しでクイルドを見つめた。しかし、クイルドは「……さあ」と呟くだけである。

期待はずれも良い所のクイルドに、俺は呆れるように尋ねる。

「……さあ、つて。だって全ての剣の保持者たるミカトンならドヴァーズを倒せると思つてギユガルドを授けたんじゃないのかよ!？」

クイルドは言葉を濁すように、躊躇ためらいがちに話した。

「いや、ワシじゃつて、……伝説の神具の保持者として自分はこれから全ての剣を取り返しに行く途中だ、などと聞かされたら、そりゃあそんな事を語るような頭の弱い子を不憫ふびんに思うじやる。じゃから……な、可愛そうな子に付き合つてやつとるつもりだったんじゃないけど。なんか、技の覚えも良かったりして、ついつい調子に乗つてしまつて……」

齒切れ悪く話すクイルドに俺は溜息をつく。しかし、シャルナアプはそんな事などこ吹く風と言わんばかりに話を戻した。

「それで、クイルド殿ハルモニア。話がまだ途中ででしたが、どうやって貴方は邪神ドヴァーズから神具を盗み出したんですか？」

クイルドは促つなされるように、腰の折れた話の概要がいようを思い出す。クイルドにすれば、話を進める助け舟ともいうべき、プウの合いの手であったが、俺はプウの本当の気持ちを知っている。

プウは全ての剣 ユピテル の話をするのが嫌なのだ。

6

五代前のミンツ家をもつて、短命だったミンツ王朝はわずか二代で王の座を奪われた。それ以来、流浪の民となったミンツ一族の、まだガキだった頃の俺とじい様はあても無い旅を続けた。

いつの日かミンツ王家の再興を目指すじい様に呆れて、まだ物心も付かないうちに俺を残して、母親は消えた。そして、そんなじい様の宿願を一手に背負った気の小さな父親は早死にしまった。それ以来、じい様の悲願は俺に押し掛かったわけだが、はつきり言うて俺にはそんな気、更々無かった。それでも年寄りとかガキの流浪の旅には、腕に覚えのひとつも必要だろうと思つた俺は、じい様からかつては赤の剣士と謳うたわれたミンツ王家の剣技の数々を学んだものである。

そのじい様も俺がその奥義の数々を学び終えた頃に、逝つてしまつた。しかし、自らの悲願を託された俺は、じい様のいない人生を謳おづか歌しているわけだから、祖父不幸この上ない事である。

そんな、かくも悲しきミンツ家の歴史なぞ軽く吹き飛ばされそうな程に、その名を刻んだ一族があつた。それが、プウことシャルナアのウーデルカ一族である。

プウが誇らしげに語るウーデルカ一族とは、青の錬金術師と呼ばれる一族であつた。この世界の魔法形態の術式の果てから、法に至るまで作り出せぬものはないと豪語するウーデルカ一族にあつて、以前プウは高らかに「アン、お前の一族が王朝を築きし時も、我らの先人たるウーデルカ一族がお前の王朝の法を作つたのだ」と語つたが、俺は心の中で（だったら、どうしてそんな偉大な一族が法を作つた王朝が、たつたの二代で潰れたんだよ）と呟いたものである。

俺とは毛並みの違うエリートたるウーデルカ一族は、その暮らしぶりから世襲せしゅうの後継までが正ただに規格外きかくがいだった。

一般の人間には知らせられない世の中の秘密も、歴史の道標みちしるべたる彼らは何でも知っていた。しかし、何でも知っているからこそ、逆にそれを扱う人間は限られる必要があった。

ウーデルカ一族にはシャルナアの他に六人の皇子が存在したが、歴史をひっくり返すほどの情報や知識という名の力は、ただ一人ウーデルカの王にのみ引き継がれるべきであるというその教えのつとに則り、王となった一人を除いてウーデルカの皇子達は枷かせをはめられる事となった。

「実力から言えば、俺が一番だった」と話す、シャルナアプ・ウーデルカその人も王位継承権から外れた皇子の一人である。

王位継承権から外れた皇子は、ウーデルカ一族としての力を封印され、力も術も持たない姿へと変えられる。

俺とミカトンが初めて会ったプウの姿は「プウ」「プウ」と鳴く、兎だか狸だか良く分からない小動物だった。

その生き物に「宇宙人プウ」と名づけ、飼うと言い出したミカトンの傍かたわらで、その封印から解かれたプウは元の姿を取り戻した。

プウの説明によると、なんでもそれはウーデルカ一族の十七の封印を解いて始めて元の姿を取り戻す事が出来るらしく、彼は第四の封印を解く為にイタヤの森の湖に訪れていたらしい。

一言に水の封印と言っても硬度がどうか、鮮明さがどうかいふのがあるらしく、彼の第四の封印たる数値の硬度を持つ自然の鉱水はこの湖にしかないという事だ。

彼としてはそれが幸いした事に、本来なら解く頃には既に老人と化しているとされるウーデルカの17の封印を一瞬の内に解くことが出来たわけである。

当初、プウはそんなことの出来るミカトンを高位の魔道師か何か

と本気で思っていたようだった（ミカトンは全ての剣を用いても種火のひとつも作り出せないというのに……）

そんなわけだから共に全ての剣 ユピテル 奪還の旅に出た後、ミカトンのおバカさん加減を見るにつれ、プライドの高い彼がどうしてこんなバカに助けられたのだろうと自己嫌悪に陥るのは時間の問題であった。

後日談として、封印が解けたのはミカトンの力でも何でもなくて単に全ての剣 ユピテル の神力の賜物たまものと知った後ですら、彼の高いプライドが修復する事は無かった。

結果的にウーデルカ一族の第二皇子の復活は、邪神ドヴァアーズの軍との戦において強力な戦力となったわけだし、バカなミカトンの相手をする負担も減って、俺としては大助かりなわけだ。

だからこそ俺は同じ苦労を分かち合う友として、プウの本当の気持ちに気づかない振りをするわけである。

7

「……ワシがどうやって剣帝ネイル・フリー・トゥーンを邪神ドヴァアーズから奪ったのか、話はその途中じゃったな」

プウに振られて腰の折れた話を思い出せば、クイルドは再び続けた。

「ハルモニア神具のうち三本の剣、すなわち剣帝ネイル・フリー・トゥーンは冥界神デプルト、剣皇 ポーニロアは魔界神アンブロシア、そして神剣アテナイは邪神ドヴァアーズが、それぞれ作り出した物じゃという事はお主らも周知しゅうちの事じゃろう。そして、その剣を扱う者が唯一にして神の騎士と呼ばれる存在じゃ。……今からおよそ千と五百年前、ワシはドヴァアーズを守りし、騎士候補の一人じゃった」

そう話した後でクイルドは額ひたいを覆う前髪をかき上げる。額には人間とは種が違うであろう事を証明するかのようように小さな角が生えて

いた。

ポーカーフェイスのプウの顔に戸惑いの色がほんの少し浮かび、同時に俺は啞然としたままで呟いた。

「……じじい、邪界人だったのかよ」

俺やプウのような人間とは違い、邪界人のような異界の者は元々、各界の神の身体の一部より創り出されたと言われている。ならばこそ、千五百歳を超えるというジジイの年齢を聞いて納得しつつも、同時に湧いた疑問に俺は混乱した。しかし、クイルドは俺のそんな気持ちなどお見通しのように話を続けた。

「当時、ドヴァーズの元には三人の騎士候補が存在しとった。まだ若きワシと、雷獣と呼ばれたカクニマ、そして美しき女性、クリムタ……」

その名を告げた時、一瞬だけクイルドの瞳に憧憬を思い描くような優しげな色が浮かぶのを俺は見逃さなかった。

「……元来が、暴れるだけを取り得の単細胞のカクニマは騎士なんてもものには興味も無かった様子じゃったんで、騎士候補といっても実質はワシかクリムタという話になっただんじやがの、ワシは一度としてクリムトには適わなかった。……いや、そもそもが人としての本質も遠く及ばなかったから、クリムタが邪神ドヴァーズの騎士となるのもワシ自身納得はしておった。クリムタが騎士になり神剣アテナイの正当な継承者となって間もなく、あの神話の出来事が起こつての。人界の騎士ヒエラルキによって倒されたテュポン・ムシカと共に剣皇ポーニロアは何処かに消え、残された二本の剣、神剣アテナイを抱く邪神ドヴァーズの元に冥界神デプルートから同盟と休戦条約がもたらされ、友好の証として冥界神側から贈られたのが、剣帝ネイル・フリー・トゥーンだったというわけじゃ」

俺もプウもクイルドの話に耳を傾けていたが、そこまで流れるように話すクイルドが「しかし……」と言葉を詰まらせたのはそのす

く後だった。

「そもそも邪界や冥界という呼び名は、お前達^{テラ}人界の人間が畏怖^{いふ}の念を込めてつけたもの。人間に比べ、力も生命力も遙かに凌駕^{りょうが}するワシら異界の存在もその本質は大して変わらんのじゃ。……神話の後、デプルートからの平和の申し出に我らメビウス人は大いに喜んだ。三神が睨みあう事となったあの神話以降、いつ戦争が始まるかもしれないという緊張にメビウスは包まれとったからのう。……じゃが、ドヴァーズは剣帝ネイル・フリー・トゥーンがこちらにあればこそ、今は正に勝機だと言い放ったんじゃ。カクニマを始めとする一部の戦闘狂を除き、暗く立ち込める空気の中で何も言えなかった者達の中で、唯一ドヴァーズを真つ向から諫め^{たしな}ようとしたのがクリムタじゃった。本来なら主神に対して騎士が意見するなどあつてはならぬ事。今にして思えばクリムタは最初から命を懸けるつもりだったのじゃろう。彼女の剣の奥義たる想^{ソウ}、神奏^{シンソウ} 次元断^{ジゲンダン}」で、次元の狭間にあと少しの所で封じられかけてなお、反撃したドヴァーズの一撃を受け、彼女と神剣アテナイの方が次元の狭間に閉じ込められてしまったのじゃ。ワシはその時のことを今でも鮮明に覚えておる。その悲しみに満ちた日は、同時にワシが成すべき使命を見出したときでもあつた。クリムタの悲願たる平和の為、次元断を回避したとはいえ深刻なダメージの残るドヴァーズの目を盗み、ワシは奉納^{のう}されてあつた剣帝ネイル・フリー・トゥーンを盗み出した。そして、人界^{テラ}へと逃げ延びたワシは剣の共振効果を用いて剣皇ポーニロアを見つげ出すと、決して人目に付かぬ場所に剣帝と剣皇を隠したというわけじゃ」

クイルドはそこまで話し終えると、少しだけ誇らしげな顔をしたが、すぐにその表情を曇らせた。

「……お前達も神具^{ハルモニア}の継承者なれば、離れた地においてもその名を呼べば剣を召喚できる事くらい知っておるじゃろ。だがの真の所有者はそれがこの世の果てだろうと、次元の狭間じゃろうと召喚する事が可能なのじゃ。真の所有者、それはつまり各剣を作り出した神

達じゃの。騎士が剣を持ちえぬ現在において、ワシは各界のバランスを守るために剣帝と剣皇、二振りの剣を神ですが召喚出来ない様に結界の元に封印したのじゃ」

話はこれで終わりだというように、クイルドは小さく頷いた後で、小さく溜息をついた。

クイルドは今、確かに次元の狭間だろうと神剣アテナイの真の所有者たるドヴァーズならば召喚は可能だと言った。しかし、それは現所有者たるクリムタをも現世に呼び出すこととなるだろう。剣を振るうは騎士、そして剣の力を引き出すのも、また剣の抛り所として鞘となるべくも騎士なのだ。

剣身一体。信頼こそが剣を振るう者の基本である以上、いかに神具^{モミア}の回帰が自身にとって有益だろうと、都合よくアテナイだけを召喚する事などドヴァーズにも出来はしない。ならば、アテナイと共に召喚されるクリムタと再びの争いを繰り広げるなど、ドヴァーズも望みはしなかつたろう。

ドヴァーズを殺そうとしたクリムタを、現世に呼び戻す事が出来るのが唯一ドヴァーズだけというのは全く持って皮肉としか言いようの無い話だった。そして、それは同時にドヴァーズがクリムタを現世に召喚することは無いという事も意味していた。

だからこそ、それこそが邪神打倒をクイルドに決意させた決め手だったのかも知れない。

クイルドの話聞き終えて、俺は「ふうん」と頷いた。

「……それで邪神ドヴァーズを倒す為にギユガルドを生み出したってわけだ」

「元より神剣アテナイの継承候補じゃったワシには、剣帝も剣皇も使いこなす事は無理じゃったからの」

「……それで、ジジイ。そのクリムタって女に惚れてたってわけだ」
「そうなん……」

矢継ぎ早に繰り返される質疑応答の中で、うっかり答えかけたジイが、いい年をして顔を赤らめる。

俺はそれを見ては「二ヒ」と笑った。

8

クイルドは自らの照れを隠すようにあからさまに大声で質問したが、顔はまだ赤いままだった。

「……そ、それより、お前達。道中精進は続けとったか？ 良いか、剣帝と剣皇を手にしたとは言え、剣の理無くしては本来の力を引き出す事など出来ぬぞ……」

先達の威厳を取り戻すように瞳を閉じ、しかし未だ早口のままにクイルドは続ける。

「……剣の理とはつまり、剣とは人を切り、殺す為のもの。しかし、それは剣の生涯にすれば『死』すなわち『始』に過ぎぬ。剣の理は人の生涯とは逆に進む。『始』後、『老』口ウ、『そして、青』セイ、『少』シヨウを『経て』創』ソウ、『転じて』想』ソウ、『へと……』」

「そついや、言ってなかったっけか。俺もプウも『想』ソウ、『へと至ったよ』」

クイルドのご高説の途中ではあったが、話が長くなりそうな事もあり、俺は口を挟んだ。

クイルドは口をあぐりと開けたままで、目を白黒させていたが、急に我に返ったように小声で「お前達にすれば上出来じゃ」と呟いた。

邪界の騎士候補として『想』ソウ、『へと至ることはおろか、神具の継承者にも選ばれなかったクイルドを見て、俺は自分の軽はずみな言動に少し気まづくなっていたが、クイルドは思いの他に打たれ強かった。

無理のある作り笑いなど浮かべた後で、クイルドは話題を変えるように自ら口を開いた。

「そ、それで、お前たち。旅の道中、何か変わったことなどなかったか？」

俺とプウは顔を見合わせる。最初に口を開いたのはプウだった。

「北の大陸ノース・アスベルから来たという旅の者と出合った際の事なんですが。北の果てで再び『門』が確認されたとか」

クイルドは驚かなかった。どこかその報せを予期していたかのよううに小さく唸る。

「……前回、邪神ドヴァーズが邪界と人界とを繋ぐ『門』を開放し、その一群を率いて人界に攻め込んできた時も、冥界対策としてそのほとんどの軍を邪界に残してきたという。しかし、邪神亡き今、邪界が滅びの道を突き進んでいるのは明白。連中が生き残る為には、そうなる前に人界を侵略し、永住の地を新たに築く必要があるからのう。邪神なき残党とはいえ、今回は全軍をかけてくるじやろうな……おそらく率いるのもうろくジジイになったカクニマあたりじやろうて」

今より一年前、人界へと攻め込んできた邪神ドヴァーズは精神工ネルギーを集めて放つとされる、ミカトン・ケイルの必殺の奥義『ギユガルド』の前に沈んだ。

邪神の人界進行は、肥沃な邪界メヒウスを捨て自然に恵まれた人界を求めた為とも、また別の目的があつた為ともされていたが、かつてその邪神に近かつた者としてクイルドは「ドヴァーズは悲願たる天上界ハルを手に入れる気だつたのだらう」と答えた。

「その姿を隠した天上界を顕現けんげんさせる事と、そして天上界の神殿の奥にあるとされる伝説の神具ハルモニア、魂を生み出し、管理する事が出来るとされる神の箱庭　パンドラ　を起動させるには全ての剣　ユピテル　が必要らしいと、以前ドヴァーズが言つとつたからの」

一年前の邪神による人界進攻の目的、ミカトンの持つ全ての剣

ユピテル　を邪神が求めた理由をここに来てようやく理解する事ができた俺だったが、「なら、今回もその可能性が？」と尋ねるとクイルドはあっさりと首を振った。

「神の箱庭　パンドラ　を用いても魂を作り出すことが出来るのは創生神だけとされておる。創生神直系たる邪神ドヴァーズですらが僅かの可能性を信じていたくらいのもので、全く動きを見せない冥界神に至っては諦めとるんじやる。たかが一介の邪界人たるカクニマには全くもってその資格はない。今回の侵攻は滅び行く邪界からの最後の脱出の機会、それだけの話じゃよ」

それだけの話と語るクイルドではあったが、その瞳はどこか寂しげであった。思えば、邪界人と人間の本質は同じと語るクイルドである。滅び行く定めにある故郷と同胞達の事を思う気持ちを、俺たちが理解できるはずもなかった。

気持ちを切り替えるようにクイルドが話題を変えた。

「ところで、お前達は『門』についてどの程度知っておる？」

かつて北の大陸の最果て、『門』と呼ばれる巨大な穴が開いた時、そこから邪神とその一団は出現した。直に北の大陸で邪神軍と戦い、『門』をその目で確認した事のある俺にとってそれは国境程度のもとの認識していた。しかし、クイルドは、それは間違いだという。

「あれはの、一種の時空転送装置のような物じゃよ。邪界でも開く事の出来る者は高位の者と限られておる。ワシなんかそれが出来んせいで、邪界から人界に逃げて来るのに三十年も掛かってしまった。だから、数珠繋ぎに存在しているとはいえ、邪界や冥界を国境でも越えるように簡単に行き来する事は出来ないんじやよ」

俺はクイルドの話の意図が見えず、ぼんやりと話を聞いていただけだったが、突然にはつと気づいた。

俺より一足早く気づいたプウが口を開く。

「それはつまり、アシエロンが人間ではないという事ですね」
クイルドが頷いた。

「邪界や冥界を行ったり来たりしてあの年齢って事は人間ではありえないからの。邪界人も冥界人もしれんし、ひよっとしたら魔界人もしれん。まあ、それ以前にここに訪れた目的すら、あるかもしれんし、無いのかもしれないという程度の話でしかないがのう」
クイルドは座していた小さな岩から降りると、ゆっくりと伸びをする。

「さて、もはや話も終わりであればそろそろ帰るとしようかの。そろそろそのアシェロン君自慢の夕食が出来上がっておる事じゃろうて」

クイルドの言葉を聞きながら、俺とプウは再び顔を見合わせた。実を言えば、『門』の確認以上に不可解で気になる物を旅の途中で見たからだった。

俺は少しだけ言葉を選ぶようにして、クイルドに伝えた。

「……実は南の地に見たこともない色の……赤色の砂漠が広がり始めていたんだ。……ここ数年で見える間に広がり始めたその砂漠を、南の町の人間は紅砂コウサって呼んでた」

俺は、その謎の砂漠の正体を求めるように期待を込めてクイルドの顔を見つめた。しかしクイルドは、そんな物は見た事も聞いた事もないという表情で、ただ「紅砂……」と呟くだけだった。

第二章 三界の思惑

第二章 三界の思惑

1

門と呼ばれる巨大な建造物を前にして、現在の人界^{テラ}進攻軍最高の指揮権限を持つ、軍事総長のカクニマは愛する邪界^{メビウス}を振り返った。

かつては雄大なる自然に恵まれたメビウスも主神の死と共に、滅びの道をひた走り続けている。緑は死に絶え、大陸を荒野が埋め尽くした。主神の死と共に、彼の眷属として神に近い生命力を与えられたメビウス人たちも、今では近づきつつある種族としての終わり、つまりは主神の死と共に突如として出現した寿命という名の早急過ぎるほどのタイムリミットに怯える日々である。

彼らが生き残る術はメビウス人という枷を外し、新たな世界に適應^{メビウス}できるように、新たな種となりえる他なかった。邪界^{メビウス}、魔界^{ニユクス}、冥界^{ネクス}、そして人界^{テラ}。この四つの世界において、主神なき世界でも生きていけるのは、神からその一部を分け与えられることなくして誕生した人間だけである。

滅び行くメビウス人は後世まで自分達の名残を残す為の最後の手段として、人間との交雑に賭けた。そして、これはその為に始まる戦争である。

そもそも、そんな真似までして種を残すべきかと懐疑^{かいぎてき}的な意見を持つ反対派が多数を占めていたメビウスにおいて、カクニマもまたその中の一人であった。しかし、主神ドヴァーズが死んだ後、見る間に広がっていった荒野が食糧難をさもなく引き起こすと、そんな悠長^{じゆうちやう}に議論を重ねている暇もないという現実^{じやうじつ}に叩きつけられるに至り、人界^{テラ}進攻の準備もそこそのままにカクニマの率いる軍は門前に集結しつつあった。

その昔、雷獣と呼ばれ恐れられた猛将も今はそのかげりを潜め、ずんぐりとした体型に邪界メビウス人特有の額の小さな角と口ひげを蓄えたメビウスの老軍師は、眼光だけは鋭く母国を見つめると苦々しい表情を浮かべた。

例え人界進攻が回避できぬものであったとはいえ、ここまでに余裕なく進める事もなかったはずだった。だが、広がり始めた荒野が食糧難を引き起こすのと同時に、ドヴァーズの死と同時に、主神の保護がなくなるのを待ち構えていたかのように、どこからか現れ荒野をも埋め尽くし始めた紅き砂に、メビウスの町は幾つも呑み込まれていった。正体不明の紅砂という新たな脅威が、主神を失い錯綜するメビウスを更なる混乱に陥れたのだ。

門前に終結を終えた千の軍のあちこちから、鼓舞するような雄叫びが上がるのを聞きながら、しかし、カクニマは内に秘めた不安を消し去る事が出来なかった。彼は不安を拭うように右の掌に包まれた箱を見つめる。それは、かつて主神ドヴァーズより贈られた小さな作りの鉄製の箱だった。

これは切り札だ。最後の最後まで開けてはならぬぞ。

口ではそう言いつつも笑みを浮かべた主神にすれば、自らが滅ぶなどという事は予想だにしなかった事であろう。だが、偉大なる指導者は死に、種もまた滅びの道を進み始めた。

(……願わくば、使わずに済めば良いが……)

カクニマが内心で呟いた時、門がゆっくりと開き始める音が聞こえる。カクニマが視線を門へと戻した時、そこに映ったのはかつて主神がその命を落とした人界の北の大陸の最端、海へと突き出した断崖であった。

厳しい表情のまま、門が完全に開き終わるのを確認すると、カクニマは号令を発した。

「人界^{テラ}への進軍を開始する！！」

2

同時刻。

少し離れた空では二人の人影が北の空をふと見上げた。

人界^{テラ}に住む人間が気づきもしないうちに開いた門を、その気配だけで感じ取ると、二人の人影のうちの一人は改めて確信づくように呟いた。

「……門が、開いた」

大鎌を背に携え^{たすく}、長い薄紅色の前髪からつぶらな左目だけを覗か^{のぞ}せた小柄な少年の声に反応するように、少年のすぐ後ろから声が続く。

「それなら、先を急がなければならぬわ、プラクル」

少年へと掛けられた声は心地の良いソプラノだった。

少年は振り返るとソプラノの声の主、「ある地方」では聖獣として崇^{あがめ}られる狐と狼を足したような「テンチ」と呼ばれる獣の白い面を被り、不自然なまでにカラフルなショッキングピンク色の長髪を揺らす人影を見上げる。

薄手に生地のない白色の衣装に豊満な胸をピタリと貼り付け、長い手足を覗かせたその完璧な八頭身には所々に暗号めいた刺青^{いれずみ}が刻まれている。

面のせいで表情の読み取れないその女性の、唯一伺える薄紅色の瞳を見つめたまま少年が口を開きかけたその時、ふいに舞った風が薄紅色の長い前髪を散らすと、少年の色の白い顔が露^{あらわ}になった。

タートルネック状の上着は前つなぎで肩口が出た物に、下は半ズボンとブーツという少年の装いは女性同様に生地のないでたちであったが、少年の身体には女性とは対照的に刺青はない。ただ、一瞬だけ風に吹かれて露になった少年の顔、その額にのみ半円形の

刺青が刻まれていた。それはそういう形というよりは、描き掛けの物のように不完全な形であった。

気を削ぐように舞った風のせいで、ほんの少しだけ躊躇しかけた少年は改めて、その小さな唇を動かした。

「ねえ、メア・リサ。……邪界の連中は僕らの申し出を受け入れてくれるだろうか？」

メア・リサと呼ばれた獣面の女性は悩む素振りを見せることもなく即答する。

「プラクル。私達に残された時間はあまりに少なすぎます。彼らはどう思おうと、申し出を受け入れさせる事が出来なければ、私達……いえ、我が同胞に生き残る術はありません」

メア・リサは厳しい運命を架せられた少年を思いやるように優しい色の浮かんだ瞳を除かせつつも、努めて厳しい口調でそう言った。それは最初からプラクルにしてみれば分かりきっていた事だったが、メア・リサの口から聞くことで改めて身が引き締まるのを感じた。

プラクルは過酷な運命に身を晒し、メア・リサは過酷な運命を口にする事で心をその咎に晒す。彼と彼女の不思議な関係は、ここに至るまでに信頼の一言では尽きない程の強い繋がりを形成している。運命共同体ともいえるべき彼女にプラクルは小さく頷くと、再び北の空を見上げた。

「行こう。僕とメア・リサで世界と皆を救う為に」

プラクルは力強く呟くと北を指して歩き始める。そして、メア・リサは彼を疑う事もなく後に続いた。

3

夜半過ぎ、門が開き進軍を開始した邪界の軍は小高い丘にそびえる人界の大陸最北の町、デルズモコへと攻め入った。

邪界と人界との国境ともいえるべき海峡に程近く、邪神ドヴァーズ

の脅威に晒されてきたデルズモコにはそれなりの兵が駐屯しており、以前より門が出現する度に警戒態勢がとられていたが、一年前に大陸最北端の断望峡にて邪界の主神たる邪神ドヴァーズが倒れるにあり、その警戒態勢も見掛け倒し程度の物へと変わっていた。そんな中で、時間がないとはいえ、この数週間のうちに何度も門を出現させたカクニマの策は見事にデルズモコの士気を下げるのに成功したといえるだろう。

邪神ドヴァーズの脅威から身を守るための守備隊の善戦空しく、一年前には邪神軍の占領地と化した過去を持ち、大陸の中でも邪界を最も知り得る町といわれたデルズモコではあったが、邪神の滅亡という最大級の脅威が去った現状においては気も緩み始めていた。そんな折、多い時では一日の内に二度も三度も出現を繰り返す門に、当初邪神ドヴァーズを失った邪界側からの「邪神亡き今も力の誇示を見せる為の手段」程度と捉えていたデルズモコの人間に見せれば、それはやがて「哀れなまでの嫌がらせの一種」として認知され、そして最終的には「下らないいつもの事」程度のものへと至っていた。それゆえ、門が開いたその日の深夜ですら、見張りの少数の兵を残してデルズモコの間人は誰もが眠りの中にいたわけである。

一年前、人界征服の為、邪神が率いたその軍は邪界における兵の一割にも満たない。残存勢力とはいえ、邪界中の兵を投入した今回、その大軍はデルズモコの見張りの兵の戦意を一瞬にして喪失させるには十分なものだった。

そんな状態にありながら、ほうほうの体で逃げ出しながらも見張りの兵が邪界軍襲来のラツパを響かせたのはむしろ上出来といえるだろう。

平和というゆるま湯の中で安眠を貪っていたデルズモコの住民は、一年と少し前に同じく響き渡った不吉なその音を聞くや否や、泡を食って家から飛び出す。そして、取る物も取らず逃げ出すという勇

敢ではないにしろ賢明な行動のおかげで、死傷者が出る事は全くなかった。

それなりに決死の覚悟を持って人界侵攻に踏み切ったカクニマにすれば、若干肩透かしを食った感はあつたが、それでも前哨戦としては大勝利に違いない。

あつさり人界侵攻の足場を手に入れた彼は、兵の士気も下がらないうちにその足場を確固たる者へとする準備に取り掛かった。高い丘に立つ小さな町を戦略基地へと作り変え、それに輪を描くようにして幾重にも敷いた陣は第八師団までを数えるまでの巨大な物になった。そしてその巨大な陣の前面にはメビウスから連れてきた四足歩行の巨獣ディマガンテが群れを成している。ディマガンテに牽かせるように配置したその陣は、さながら巨大な移動基地のようであつた。

デルズモコ占領から丸一日をかけて移動基地を作り上げたカクニマの手腕たるや相当のものであり、デルズモコ占領から大陸蹂躪の為の敷陣まで、全てがカクニマの思い描いたとおりに進んでいた。しかし、いざ蹂躪を開始するという空も白んできた明け方に来てカクニマの予想外の出来事が起こつた。

デルズモコから離れた森を背にして、朝霧に包まれた小さな軍がカクニマの敷いた小高い丘の陣を見上げるようにして集結している。カクニマは一目見てそれがデルズモコから逃げ出した兵を吸収した混成部隊であることに気づいた。しかし、どう考えてもカクニマ率いるメビウス軍とでは戦闘にもなりそうもない戦力差である。

創生より千年以上もの間、確固たる王朝による支配が続く事もない人界において、相対すべき王朝も占領すべき王都もない現在の人界では、大陸中を蹂躪する他はないと考えていたカクニマにすれば、先頭に立つて自らの大陸を守る為、名乗りを上げる存在として思いつくのは己が主神を打ち倒した金色の英雄ミカトン・ケイルくらい

のものであった。しかし、カクニマの見下ろした先にいる兵達は、距離のとり方といい陣の敷き方といい良く統率されている。カクニマはそこに勇者ではなく、軍略家の臭いを嗅ぎつけた。

（正直言つと兵士の『戦争』などというものは考えていなかったがな……）

自分達から動く事もなく、メビウス軍の出方を見守る小部隊をカクニマは目を細めて見つめた。

「誘っているつもりか？ ……一体、何者だ？」

カクニマは小さな陣を隅々まで眺めたが、結局同じ鎧と兜に身を包んだ黒塗りの兵達の中にその指揮者と思しき者を見つける事は出来なかつた。

その小隊の心理を計りかねるカクニマは結局進軍の激を飛ばす事が出来ないままに膠着状態じうちやくを続ける。

時をずらす様にして二組の来客が静観を守るカクニマの元に訪れることとなるのは、その日の夜の事であった。

4

静観を続けるデルズモコのカクニマの元を最初に訪れたのは、性別も風貌ふうぼうもまばらな黒尽くめの三人組だった。現代でいうところのスーツに似た衣装を纏まとう彼らは仰々しいほどにカクニマの前でかすずいて見せた後で、三人組の真ん中のリーダー格と思しき長身にイカツイ体躯の坊主頭が口火を切った。

「カクニマ殿、結果論から言えば森の前に陣取るあの小隊はただの時間稼ぎに過ぎませぬ。連中は彼らの指揮官たる者が大陸アスペルの中央から本隊を率いて到着するまでの間、貴公らを此処こゝに足止めするのが狙いですぞ」

自信満々に話す男から視線を外す事もなく、カクニマは一人考える。小隊を遠めに眺めた時、カクニマの目に隊の指揮官らしき者は

映らなかつた。それを照らし合わせてみるに、男の情報は筋が通っているようにも思える。そして、その情報が正しければ何もこのまま手をこまねいて膠着状態を続ける必要もあるまい。しかし、彼らを信用してよいものかどうか……。

彼ら、冥界^{ネメシス}人たちを……。

カクニマは男の話には何も応えずに、視線の先の三人組を改めて見つめる。坊主頭の左隣にはひよろりとした背格好に猫背気味の男。男は色素の薄い肌色をしており、良く言えば人好きのする、悪く言えばどこか頼りない容貌に、前髪を完全に覆った長い銀髪は、襟足^{えりあし}に行くにつれ細かな三つ編みにしていた。坊主頭の左隣には黒髪のショートヘアの小柄な女性が控える。髪色の黒より褪^あせたような褐色肌に、銀縁の細いフレームの眼鏡の奥から覗く瞳は琥珀色だった。カクニマが言葉もなく一人問答を続けるような素振りを見せると、いち早くそれに気づいた様子で口を開いたのはその女だった。

「カクニマ様、私達は主の命令で『ある物』を探す旅を続けているところですよ。私達はそれを黙認して頂く為に貴方様の元に参りました。我々ネメシスは今回のメビウスと人界^{テラ}の争いには一切関知いたしません。しかし、その代わりと言っては何ですが、心情的には長き同盟を結ぶ盟友たる貴方がたを思えばこそ、こうして私達の掴^{つか}んだ情報を報せに立ち寄ったわけです。どうか私達の思いを信じ、そしてどうか私達の願いをお聞き入れ下さい」

カクニマは女の真剣な表情に納得したわけではないが、それでも一応頷いて見せた。だが、内心では女の話の中に出てきた『ある物』という言葉を訝^{いぶか}しんでいた。

曖昧^{あいまい}な表現をしてはいても『ある物』について、カクニマは十分に理解している。だが、我が主神ドヴァースならいざ知らず、長きに渡り沈黙を守っていた冥界神デプルートがそれに興味を示すという事は、カクニマにとって意外という他は無い。

(ある物……神の箱庭　パンドラ　を使いこなす事は不可能と諦めていたわけではなかったのか、デプルートめ)

内心、舌打ちをしつつもカクニマはそれを表に出す事はなかった。(つまりは、こいつらは冥界神から神の箱庭　パンドラ　奪取の為、天上界ハルの入り口を見つけ出す為に派遣された先遣隊という事か)それを十分に理解した後で、カクニマはわざとらしい程に微笑んで見せた。

「主神無き今とはいえ、我々とネメシスとの同盟は今後も変わらずと信じている。我らがネメシスの民の邪魔をするなど有りえぬ。貴方たちの助けとなつてやる事は適わぬが、冥界神より賜った使命が果たせるよう願っておりますぞ」

カクニマの言葉を聞いて、坊主頭の男は「かたじけない」と何度も頭を下げた。

三人組とカクニマとの会見は波風を立てる事もなく終了した。しかし、部屋を出て行く三人を見送るカクニマが、彼らの背を見つめる瞳は冷ややかなものであった。

5

冥界ネメシスの三人と別れて数時間後、カクニマの元に訪れたのは身なりもみすばらしい二人であった。一人は大鎌を背にした少年、そしてもう一人は白い獣の面を被った女である。

頭に角を生やした屈強な邪界兵メヒウスに連れてこられると、武器らしい武器を全部没収された後にカクニマの待つ戦略本部へと化したデルズモコの会議場へと通される。その一部始終をカクニマは窓からぼんやりと眺めていた。

カクニマの元へと辿りつくと、かすずくのも早々に少年は早口に

喋りたてる。それを興味も無いように聞き終えた後で、カクニマは「まず身元を証明するのが先であろう」と呆れたように呟いた。それを聞いて少年は慌てたように長い髪に覆われた額を晒す。

「ニユクスの騎士、プラクル・ムシカと従者のメア・リサです」

カクニマは少年の半円に刻まれた魔界ニユクスの騎士紋を見ると、別段驚く風でもなく続けた。

「騎士紋が途中までしか描かれていないという事は、正確には『半騎士』といったところだろうか？ ……まあ、剣皇ポーニロアを失い継承の儀も行えないのであれば当然の事だがな、騎士テュポン・ムシカの子、プラクル・ムシカよ」

魔界ニユクスの民が大人として認められる為には、その家系に伝わる紋を刻まなければならぬとされている。半分しか紋のない少年の生まればおそらく従者の女よりもずっとずっと昔の事だろうが、剣皇ポーニロアを失った為の咎とがに囚われ、正式な紋を刻むことも適わず、少年のまま大人になる事を許されずにいるのだ。

つまり、これは呪いだ。

言葉の途中から薄ら笑いを浮かべるカクニマのそれは侮辱ぶじよく以外の何者でもなかったが、プラクルは耐え忍ぶ。それは彼らの住む魔界ニユクスの悲願の為に他ならない。

「それで、お前達は我々と共闘したいと、つまりはそういう事なのだ？ プラクル」

カクニマは会って早々、長々と喋りたてたプラクルの話の要点をかいつまんで尋ねた。

プラクルは大きく頷く。

「我がニユクスは主神アンブロシア亡き後、滅びの道を歩んでいきます。主神の死より千と三百年それでも滅びの中にあつて少数とはいえ我らが生き延びる事ができたのは奇跡と言えるでしょう。しかし、

今やニユクスは滅亡の象徴とでも呼ぶべき『紅き砂』にそのほとんどを覆われてしまいました。我々が生き残るには、貴方たちと同じく祖国を捨てなければなりません。メビウスの民の支配した人界テラにおいて私たち魔界ニユクスの民の残り少ない命を移住する事を許可して頂きたいのです。その為ならば私達は貴方の手となり足となりましょう。私達は必ずや貴方の力となって見せます。ですから、どうぞ我々ニユクスをメビウスの同士として向かい入れて下さい」

懇願こんがんには違いないが、プラクルは実に堂々と伝えた。それはカクニマの信頼を勝ち得る為であり、そして何よりその為の自信もプラクルにはあった。しかし、『紅き砂』という単語に一瞬反応こそしつつも、カクニマはあざ笑った。それは人を馬鹿にしたような悪意に満ちた笑いだった。

「今更、ニユクスの半人前の騎士の力を借りる必要などどこにもないわ。そんなものに頼らなくとも我がメビウスの軍は強固。それでも認めて欲しいなら、力を見せる事だな」

プラクルの顔に一瞬にして怒りの色が浮かぶ。飛び掛らんばかりの彼を諫めたのは、そのすぐ後ろに控えるメア・リサだった。

「プラクル、此処までの旅路を、何より、あなたを待つニユクスの民の気持ちを無駄にする気ですか」

プラクルの耳元で呟くと、メア・リサはカクニマの瞳を面越しに真っ直ぐ捉えた。

「ならば、カクニマ様。私達が認めて頂くには実際にはどれほどの実績が必要でしょうか？」

面から覗くメア・リサの瞳をカクニマもまた見つめていた。ほんの少しだけ悩んだ素振りを見せた後で、カクニマは口を開いた。口にするのも面倒くさそうにしてはいるが、実際のところ、それはカクニマにすればこの会議場へプラクルとメア・リサを招いた時からすでに用意していた言葉である。なぜならば、それは既にプラクルたちの前に訪れた冥界人ネメシスからもたらされた情報の一つであったからだ。

「…………どうしてもというならば仕方がないのう。今、我が陣を前にして敵小隊が対峙してある。しかし、あれはただの時間稼ぎに過ぎん。今しばらく後にやってくる本体にこそ、この戦争における真の敵。つまるところ人界テラにおける総指揮官が存在するという事だ。……お前たちニユクスの民がこの戦争で認められるとすれば、そやつテラの首を挙げることに、唯の一つだけであろうな」

小さく息を吐くとカクニマは厳しい視線でプラクルを見つめた。

「…………その男の名は…………」

6

坊主頭の冥界人ネメシスがカクニマとの面談の際に一時取り上げられた「くの字型」の巨大な剣を腕試しのように振ると、轟音ゴウオンを上げながら巨木は倒れた。

「下劣なメビウス人の手に触れられては、我が愛刀の切れもいまいちだとは思わぬか、クロ・ソナ？」

いかつい容貌には似合わぬ情け無い声を上げる坊主頭に声を掛けられて、クロ・ソナと呼ばれた褐色肌の女は呆れたように口を開く。「だからって、ジンモザミさん。やたらめったら森林伐採しないでくださいよお」

ジンモザミが溜息混じりに切り倒しているのは、デルズモコの南西の森に広がる大陸アスベルではもっとも群生する植物のひとつ、メタセコイアと呼ばれる針葉樹の一種だった。

冥界ネメシスの三人が行くその森は人界テラの小隊が構える小さな森とは繋がってはいしたが、彼らとの距離は相当にある。それでも森側から物音が続けば、小隊に要らぬ疑念が広がるだろう。クロ・ソナの呆れ声には、ジンモザミに対する小さな非難も含まれていた。

「まあ、良かるうが、とりあえず当座の目的は果たしたわけだしな。

この辺の木を切り倒したところで誰が困るわけではなからうよ。…それよりカクニマのやつ、我らの話を信じたかな？」

三人の中では一番の年長者とも思えないほどに、ジンモザミは落ち着かないように尋ねる。

「まあ、私の迫真の演技もありましたしね。ダイジョブとは思いますが……ルーンさんはどう思いますか？」

クロ・ソナは後輩の務めともいうべき社交辞令を持って、猫背に銀髪の男へジンモザミの質問を回した。

「……十中八九、カクニマは信じたろうね。そして、信じればこそカクニマは動かないよ」

ジンモザミは納得しかねるという面持ちでルーンの顔を見た。

「あの程度の小隊など、メビウスの兵にすれば一ひねりだろう。そのままの勢いで進軍すれば敵本体の集結前に叩けるのだぞ？ 自分達の益となる情報を得て、なおかつそれを信じて、カクニマは兵を動かさぬというのか？」

ジンモザミの疑問を聞いてなお、ルーンは事もなげに話を続ける。

「カクニマの性格上、僕らから与えられた情報を信じたとしても、僕らの進言通りに事を進める事はできないのさ。カクニマにすれば、それは僕らの希望通りになる事だと思っているんだらうね。だから、カクニマは動かない。彼はデルズモコを決戦の地にするつもりさ」

クロ・ソナはルーンの話の聞きながら「うふふっ」と笑った。

「それこそが私達の本当の狙いなんて、気づきもしないんでしょうけどね、カクニマは」

冷たい印象を与えかねない銀縁の眼鏡と、その下から覗かせる切れ長の瞳を崩して無邪気に笑うクロ・ソナを、目深まぶかに掛かった銀髪の奥から見つめるルーンは続けた。

「そうだね、クロ・ソナ。メビウスの民も人界テラの民も、皆デルズモコに釘付けになるがいいさ。その間に僕達は仕事を終わらせる事ができる」

未だに納得の行かないジンモザミは、それでもルーンに質問を重

ねた。

「だがなあ、ルーン。カクニマが俺たちの話を信じたのなら、神の箱庭　パンドラの奪取という目的にも気づいたはずだぞ。むざむざ俺たちを野放しにするとも思えぬがなあ」

しかし、ルーンは「それはない」と即答する。

「ジンモさん。カクニマにとっては、それこそが都合の良い話なんですよ。あいつはね、端からドヴァースですら神の箱庭　パンドラを使いこなせるとは思ってはいなかった。だったら、当然我が主神デプルートにも使いこなす事は出来ない和高を括くってる。…

…まあ、それに関しては僕も同意見ですけどね……」

「めったな事を言うな」と一喝するジンモザミの合いの手を聞き流してルーンは締めくくった。

「……どっちにしる現実主義の彼にすれば、そんな夢物語にも等しい行為を進める僕らと揉めて、新たな敵を増やす必要は無いわけです。彼の目的はあくまでメビウス人という種の存続に尽きるわけですから。だから、これでいいですよ。僕らは僕らの仕事やり易くなりさえすれば、それで問題無しです」

「そんなもんかねえ」と呟きつつも、一応ジンモザミは納得した様子で、傍らの二人と共に再び歩き始める。

三人組の冥界人メビウスは一路南を目指し、森の中を進んでいった。

7

カクニマはこのデルズモコを決戦の地とする、そうプラクルとメア・リサに伝えた。

戦争が始まり兵と兵とが衝突つひつすれば、兵が入り乱れる戦場で自分達が敵大将の首級をあげるのはより困難な事となるだろう。ならば、各軍の兵が集結を終え突撃の準備が整うまでが勝負という事だ。しかし、フォローもなくそんな暗殺者のような真似をする事がどれほ

ど危険な事か、考えるまでも無い事だった。だが、カクニマはそれを十分に承知していればこそわざわざプラクル達にそれを伝えたのだ。戦争前に敵大将が倒れれば、邪界軍メヒウスは痛手を負うことも無く、この戦いに勝利する事であろう。万が一にも暗殺のような卑怯ひきょうな真似を、と敵の士気が一時的に上がるうにも、暗殺者は邪界メヒウスの者ではない。ならば、罵声ののしりを浴びせられる所以ゆえんもないし、そこに来て首級をあげたのが魔界ニユクスの人間と分かれれば、実際にはただの二人しかいない魔界ニユクスという同盟者の影に、人界テラの軍は根底から瓦解がかいし、自滅してくれるかもしれない。

メア・リサはカクニマの思惑を理解していた。そして、少しだけ躊躇ちゅうちゆしながらも、デルズモコを後にしたプラクルに伝えた。

夜の闇に紛れてメア・リサの話を聞いていたプラクルは憤いらだる事も無く何度か頷うなづいていたが、ふいに「さつきはゴメン」と呟つぶやいた。

メア・リサは一瞬何の事か分からなかったが、すぐにそれが先ほどのカクニマとの会見の際に我を忘れかけて飛び掛ろうとしたプラクルの所作の事であったと気づいた。

「俺、故郷の人たちの命が掛かっていることも忘れて……今までずっと一緒に旅してくれたメア・リサの思いも忘れて、あんな挑発てんぱつに乗せられそうになるなんて。……騎士失格だよな」

プラクルにとって、カクニマの謀略まうりやくなど些細ちさいな事だった。大人になる事も適かなわぬままに、未だ幼き彼を支えているのは、亡き父、そして父から授かった騎士としての誇りだけである。

ニユクスにいるところからプラクルの従者として彼を支えてきたメア・リサはそれを十分に理解している。彼の従者となった時から従者おとこの掟おきてとして世間から隠さなければならなくなった面の下、プラクルを見つめるその瞳は驚くほどに優しい。

「プラクル、誰が何と言おうと貴方は私にとって最高の騎士ですよ。だから、あまり自分を責めないで下さい」

今にも泣き出しそうな顔のまま、無言で頷うなづいたプラクルをメア・

リサは強く抱きしめた。自分の胸元までしか身長が無いプラクルを抱きしめると、たわわな胸に顔を押し付けられたプラクルが苦しそうな声を上げる。

行き過ぎた愛情表現に我を忘れかけたメア・リサは慌ててプラクルを開放したが、少し離れて挙動不審のメア・リサをプラクルが見ると、面のせいで表情こそ分からないものの面からはみ出た耳が真っ赤であった。

お互いの間に流れる気まずい空気を払拭するように丘陵きゆうりやうの闇の下、咳払いなどして見せた後でメア・リサが厳しい口調で尋ねた。

「プラクル、カクニマの条件を呑むという事で本当にいいんですね？」

元より、騎士としての誇りに支えられているプラクルにすれば、危険だからとか、命の保障がないからという事に対しての恐れはない。だからこそプラクルは幼い容貌に凛々しさを浮かべたままで、はっきりと告げた。

「人界軍テラの総大将、シールウス は俺が討つよ」

第三章 イタヤの森

第三章 イタヤの森

1

邪界軍襲来メヒウスの報がイタヤの森に届けられたのは、俺とプウが一年に及ぶ長旅を終えて丁度一週間後の事だった。

その報が届けられるまでの数日、このイタヤの森の小さな湖畔の脇の小さな小屋ではいくつかの出来事が起こっていた。

ひとつは小屋の名調理人たるアシエロンくんが此処ここを去ったのだ。俺たちがこの小屋に到着して四日後、彼は突然にして再び旅に出る事に決めたらしい。

当然、俺とプウは自分達に気兼ねする事はないと伝えたわけだが、彼は「探し物が見つかっていない以上、旅を続けるのは僕の運命さだめですから」と言っつて聞かなかつた。

彼が元々記憶が無いのか、それとも俺の考えも及ぶべくも無い、長い長い旅の途中で記憶を無くしたのか、結局本当のところは分からずじまいだったが、記憶も無く彼の言う探し物の正体も分からない現状では、それ自体が本当に必要な事なのかどうかも定かではない。しかし、彼にとっつてそれが心の拠り所であるならば、俺たちとやかく言うことでないのは確かだった。

彼の作る美味なフルコースの数々を楽しみにしているミカトン・ケイルは、他の誰よりも彼がここを離れる事に反対した。俺たちが到着したことで俄然がぜん張り切ってしまったクイルドのせいで、ミカトンはこの四日、馬車馬ならぬ回し車のネズミの日々を送っていた。この過酷な修行という名のダイエットが成功したあかつきには、アシエロンくんのおきのおきのフルコースを食べてやるという思いだ

けでミカトンは、この人道的とはおよそ呼べない修行の日々を耐え忍んでいたのだ。そんなミカトンに対して多少なりとも俺は同情していた。なぜなら、俺はこれで中々人情家なのだ。

……とはいえ、だ。

「出て行くなら、アンが出て行けば良い！ アンが代わりに探し物を見つけて来い！！」

必死の形相でそう叫ぶミカトンの声を聞いては、立場のない俺としては軽く現実逃避もしてやりたくなるというものだ。

結局、アシエロンくんはミカトンの悲痛な叫び空しく「羽を休めるつもりが、長く居すぎました」笑顔で最後にそう言い残した後、このイタヤの森を後にした。

出会いというものがあるならば、別れもまた必然のものなのだろう。

しかし、その時の俺はまだ、分かってはいなかった。

別れというものは突然で、そして、それは抗^{あらが}う術^{すべ}などないという事を……。

2

アシエロンくんが旅立つてから二日目の昼、静かな小屋の一室で俺はぼんやりと壁に丁重に飾られる全ての剣 ユピテル を眺めていた。

全ての属性を支配し、持ち主が望むならば炎でも氷でも、どんな物でも生み出す事が出来るといわれる究極の神具^{ハルモニア}はその刀身に鈍い黄金色の光を灯している。

この神具の中の神具の継承者は、どういっわけかミカトン・ケイルという事になっているが、全ての剣 ユピテル を用いてなお、

ミカトンは簡単な火花すら起こせないので、正直言うと俺はミカトンが正当な継承者であるという点においては信用してはいなかった。

ミカトン・ケイルという男は、基本的には行き当たりばったり程度の計画性でもって、最終的には笑ってごまかすという類の人間である。だからこそ、今正に目の前にある全ての剣 ユピテル が本物であると知りえた今日（こゝろ）でも、きちんとした形で継承などしたのではなく、きつとどこかで（さすがに盗んだという事はないだろうが……）拾ってきたかどうかしたのだろうと思っていた。

しかし、ミカトン・ケイルにはそれ以外にも謎が多くあった。例えばそれは彼の出生の秘密だったりする。ガイドとオルセアの老夫婦に育てられたと、ミカトンは以前俺の質問に答えた。

大陸中の建築物が伝統的なエルシャ建築やオルマ建築である中で、今や一般的となった多種多様なピザンチン建築を取り入れてこのイタヤの森の小屋が作られている辺り、確かにガイド・ケイルが先見の明を持った大工であった事は確かだとして、ただの大工が極秘裏に全ての剣 ユピテル を継承していたとは到底思えないし、真偽を確かめようにも、そのケイル夫妻とてミカトンが物心ついた時には亡くなっていた。それも二人とも老衰ゆえの大往生だったというから、さすがにミカトンがその息子という事はないだろう。

それ以降、ミカトンはイタヤの森の自然と野性動物達と共に幼少期を過ごしたらしい（余談だが、そのおかげでミカトンの数少ない特技に動物と話せるという項目が増えたそうだ）しかし、ならば実の両親はと尋ねると、ミカトンは顔も見ることがないのだという。

記憶が無いと語ったアシエロンくんは自分が探すべき物が何なのか定かではなかったが、ミカトン・ケイルもまた自らの出自については定かではないのだ。

俺は一人悩むようにわざとらしく呻うなってみせたが、その声は静かな部屋に吸い込まれるようにして消えた。クイルドとプウはイタヤ

の森の奥深く、人が足も運べないような深淵の聖域セント・クレアの古い遺跡を見に行くと言つて朝からいないのだ。

深淵の聖域セント・クレアの遺跡はただ広く、樹木がそのほとんどを覆い尽くす中はせいぜい三割程度しか人が見て回れる所はない。

学者肌の二人ならいざ知らず、自分にとつてはそんな遺跡など退屈な所でしかない。そう思えばこそ、留守番する事にしたのだ。しかし、どうやらこの選択は失敗だったらしい。

早くも暇を持って余し始めた俺が溜息のひとつもついた時、静かな部屋に外から微かすかに聞こえてきたのは、今にも消え入りそうな荒い呼吸音だった。

俺はそれに導かれるようにして、部屋を出ると呼吸音の主の元へと歩き始めた。

3

小屋の裏手へと訪れた俺が見た先では、巨大な回し車の中でへばるミカトン・ケイルがいた。

ミカトンは俺に気がつく、「いよお、アン」と口を開いた。

クイルドに回し車の中に放り込まれて早六日、ここから出るのはトイレの時のみという囚人のような扱いの果て、上半身を露にした汗だくのミカトン・ケイルは大分絞られている。それはアシエロンくんが去り、食事の担当がクイルドに替わった頃から顕著けんちやに変化が見られるようになった。

おかしな臭いのする薬草をこねくり回した団子や、ただ苦いだけの木の実を降りかけたトカゲの丸焼きといったクイルド特製の栄養管理メニューの数々は、ミカトンだけでなく正直言つと過酷な旅を続けていた頃以上に、俺とプウの体重をも減らしてくれている。

長身の俺より一回りは小さな体躯の、適度に筋肉がつき引き締まった身体と、へばりついた金色の毛髪をかき上げて覗かせた童顔、俺とプウが旅に出る前の姿のミカトン・ケイルが、そこで確かに微

笑んでいた。

俺が感心するように眺めているとミカトンは「なあ、アン。なんか食いもん持ってない？」と聞いてきた。

俺は少し意地悪な笑顔を浮かべながら答える。

「あるよ。じじい特製の団子が多量に余って」

それを聞くやミカトンは「うげえー」と言っ舌を出して見せた。

静かな湖畔のほとりでは俺とミカトンの笑い声だけが響いていた。ミカトンの言う事は大体が下らない事や、人任せの無責任極まりない発言ばかりだったが、慣れっこの俺は適当に相槌をうったり、わざとらしく叱咤しつたなどしてみせる。ミカトン・ケイルという仕様しやうもない人間に未だに慣れていないプウは「ミカトンと話していると自分で仕様もない人間に思えてくるようだ」と厳しい言葉を口にするのが関の山だが、それでも俺は四界の不安定な状況の中にあるこの時代に、時々はこの仕様もない人間の仕様もない発言に救われるような気がしていた。

俺達は互いにこの一年あった事について語り合った。

邪神とその勢力が襲来し、全ての剣 ユピテル を奪われたところから、邪神打倒の顛末てんまつまで、共に分かち合った苦楽くらくに少し昔を懐かしみ、それから別々に過ごしたこの一年間を、だ。

しかし、ミカトンの話といえば、ほぼ食っちゃ寝の生活を過ごしていた為、その話のほとんどが俺とプウが旅に出た後すぐ、このイタヤの森へと訪れたアシエロンくんの手料理の話ばかりだった。すぐに底のついたグルメ話から、話題を変えるようにミカトンは俺に旅の話を書いてきた。

俺とプウの旅はとにかく困難なものだった。訳の分からない暗号を解かなければ進めない迷宮に頭を悩ませたり（主に頭を使っていたのはプウだが……）ドラゴンやミノタウルスというような神話の中でしかお目にかかれなような怪物たちとの激闘。そのほとんどが命がけのものであった。俺の話に、まるで子供が寝る前の童話でも

聞くようにしてミカトンは目を輝かせて聞き入っていたが、そんなミカトンの顔を見ているうちにふと俺は思い出した。

「……そういや、お前。邪神ドヴァーズ倒した後『金色の英雄』なんて呼ばれてもてはやされたんだろ？ ……あの後すぐ旅に出た俺とプウの事には一切触れないで、手柄を独り占めしたろ」

俺が表情も変えずそう告げた瞬間、ミカトンの顔に明らかに動揺が広がった。

へたり込んでいたはずの彼は、急に立ち上がると真面目な顔をして「さて、俺、もう少し走ろっかな」と言い出した。

俺は回し車の脇の草原に腰を落とすと、呆れるように笑った。それを見て、最初から走る気などなかったのだからミカトンも、再び回し車の中で腰を落とすとごまかすようにして微笑んだ。

「ホントしょーもないな、お前は」

呟いた後、俺は声を出して笑う。

応じるようにミカトンも声を上げて笑った。

昔と変わることなくイタヤの森の湖畔の小屋には、絶え間ない笑い声が溢れていた。

それは、これからもずっと続いていくもののように思えた。

しかし、それこそが、俺が見たミカトン・ケイルの最後の姿だった。

4

プウとクイルドが帰ってきたのはその日の夕方遅くのことだった。学者肌の二人は、伝説として残される深遠の聖域セント・クレアにかつて存在したとされる人界テラでも青の錬金術師たるウーデルカ一族以上に至高の存在とされる魔女と呼ばれた一族について、各々独自の見解を時間の経つのも忘れて語り合っていたらしい。

話はまだまだ尽きそうもなかったが、俺とミカトンのことを一応は心配して帰ってきてくれたそうだ。

「今から夕飯の支度をするから待ってとってくれ」とクイルドが言うのを聞いて、俺は「残ってた団子を俺もミカトンも食べたから良いよ」と答える。

最近、俄然がぜんやる気を出したクイルドはミカトンの修行だけでなく、アシエロンくん無き今、料理の方まで凝りだしている。しかし、新作と称され出されるメニューは奇妙きみょう奇天烈きてれつな物ばかりで、どういう訳か作れば作るほどに不味まずくなっていくばかりだ。

クイルドの到着を待つこともなく夕食を済ませたのも、新作と呼ばれる生ごみを食べさせられるくらいなら、オヤツも兼ねてと分量でも間違ったかのように多量に作られ、積み上げられていた薬草団子を食べた方がまだマシだと思っただけに他ならない。それをミカトンに伝えると、ミカトンも渋々それを承知した。

「そういえば、ミカトンのヤツ。言葉を詰まらせるように泣きながら、団子食ってたぜ」

皮肉のつもりで俺は伝えたが、クイルドは「そうか、そうか。そんなに美味しかったか。ミカトンがそこまで喜んでくれるとワシも嬉しいのお」と完全に勘違いしていた。

新作を作り終え、食の進むクイルドの隣でプウはその見るからに毒々しい緑色の発光色をしたぶよぶよの塊を黙々と口に運んでいる。クイルドが料理をするようになった初日からずっとこの調子のプウに、前にこつそりと尋ねたところ、プウは青の錬金術師に伝わるいわゆる「魔法」というヤツで自身の味覚をいじっているとの事だった。それを聞いたときはさすがに、魔道士の一族ではなく剣士の一族として産み落としてくれた父ちゃんと母ちゃんを俺はほんの少しだけ恨んだ。

夕食の済んだ二人はこの数日、俺の事など構いもしないで二人で

ゴソゴソとやっていた仕事を仕上げていた。

「完成じゃ」とクイルドが声を上げるのを聞いて、俺は「何が？」と尋ねる。

見れば、訳の分からないケーブル状の物が幾つも束ねられ、箱型の物にくっ付いていた。

ふふふ、と満足そうな笑みを浮かべるクイルドは高らかにその装置の説明を始める。

「これはのう、北部ノース・アスベルの科学者、エジウ・ソンが発明したとされる電気を作り出す機械なのじゃ」

「ほう、ほう」と良く分からないままに相槌あいずちをうつ俺を見ては、クイルドは説明を続ける。

「アン、あの天井についている物を見よ。あれはの、文献ぶんけんを読み解き、プウが作り上げた『電球』という物じゃ。この機械を用いる事で集めた動力を電力に変える事で、あの電球に明かりが灯るといふ、そういう仕掛けじゃ。これで、夜も蠟燭ろうそく要らず。なにより環境に優しいんじゃ」

偉そうに講釈ぶるクイルドに、早くも興味も尽き始めた俺は「それで、動力はどうすんのさ？」とぞんざいに尋ねる。するとクイルドは事も無いというように窓の外を指差した。

「回し車が回つとるじゃろが」

俺が「は！？」と素っ頓狂すつとんきやうな声を上げるより早く「スイッチオンじゃ！」と高らかに告げたクイルドは、箱型の装置の中心に備えられたつまみを引き上げた。

回し車の回るガラガラという音と、ミカトンの「ぜひぜひ」という声と共に電球にぼんやりとした明かりが灯る。

それを見ながら感極まったように涙を滲にじませたクイルドが、すつと右手を差し出す。応じるようにプウも右手を差し出し、実験の成功を祝うように二人はがっちりと握手を交わした。

啞然あぜんとしたままそれを見つめていた俺は、クソ不味い団子を食べさせられ、電力を作り出す為の動力となっているミカトン・ケイル

をただただ不憫ふびんに思った。

5

電球の明かりを作り出す必要ないほどの真夜中、上半身裸のまま
で回し車の中で横になるミカトンは自身のくしゃみで目を覚ました。
この数日、ずっと回し車の中でその生活のほとんどを過ごす彼は、
車の中心軸に巻いてある上着を外すと、夜の湖畔の冷え込みを紛ら
わすように袖を通す。

当初、トイレの時は外に出してもらえていた彼だったが、一度脱
走を図った事もあり、現在は小用くらいでは外に出してもらえずに
いる。おまけに朝はクイルドの目覚ましと清潔を兼ねての放水から
始まる彼の一日は、もはや完全に囚人のそれであった。

底冷えのする夜を実感するように彼は一人呟いた。

「霧が出てらあ」

どつりで寒いはずだと自分に言い聞かせるようなその後、彼は
湖畔から立ち込めるようにして広がる霧の覆った風景を眺めた。

辺りを完全に白の世界へと変えた濃霧のつむをぼんやりと眺めていると、
彼はふとその白の一点に釘付けとなる。

濃い白をかき分けるようにして、人影が回し車の方へと近づいて
くるのが分かった。

小心者のミカトンは、大声を上げてアンたちを呼ぶべきか、死ん
だ振りでもするべきかと一瞬悩んだ後、前者に決めた。

「（起きろ！ アン！）（プウ！）（クイルド！）」

ミカトンはありつたけの大声を上げたつもりだった。しかし、必
死の形相にも関わらず言葉が口から発せられる事は無かった。

（……………これって、まさか……………魔法？）

一筋の冷や汗が額から流れ落ち、ごくりと唾つばをミカトンが飲み込
んだ将にその時、人影は既に回し車のすぐそばに立っていた。

霧と同化するような真っ白で長いローブを身にまとうその人影は

ミカトンの眼前でゆっくりとそのフードを外す。

ミカトンより少しだけ背の低い人影の、真っ白なローブの下から露あらいになったのは美しく長い黒髪の女性だった。少女のような外見をしてはいたが、どこか寂しげに見えるその表情は長い年月を重ねた大人特有のものにも感じられる。

ミカトンにはその女性が自分より年が上なのか下なのか分からなかったが、その女性が普通の人間でないことは一見して理解できた。彼女の両の耳は先が尖るようにして長いつくりをしている。そして何より、彼女から発せられるオーラとでも呼ぶべき雰囲気は普通の人間には無い、神々しさに満ちていた。

それに似た物を持つ者と、ミカトンは一度だけ会った事があるのを思い出す。

(これは……この感覚は……邪神ドヴァーズと対峙した時だ)

身体の芯まで広がる冷気を感じながら、ミカトンは恐る恐る尋ねた。

「……どちら様ですか？」

問いに、以外にも女は微笑んだ。そして薄く紅の差された唇を動かした。

「私は魔女ツイ・エルンと呼ばれる存在」

まるでスローモーシヨンのように動く滑らかなその唇に、ミカトンの瞳は釘付けとなる。

スローモーシヨンの動きと同調するように、女の発した言葉はミカトンの頭の中で反響するように響いた。女の声はミカトンの頭の中で二回、三回と波紋が広がるようにして繰り返され、エコーのかかる声と共にミカトンの視界はユラユラと揺らめく。そして、やがて目の前には濃霧よりも濃い白だけが広がっていった。

白い世界で女の声だけが聞こえる。

「予想の通りに事は進み、その時が訪れてしまいました。残念ですが……覚悟を決める時が」

女の悲しげな声が止んだ瞬間、ミカトン・ケイルの身体はその場に崩れ落ちた。

6

夢を見た。

そこに出てきたのは、俺とプウが旅を続ける途中の村で出会ったまだ幼き双子の兄弟だった。

兄は弟を、弟は兄を、互いが互いをかけがいの無い者として信じ、支え、そして愛していた。

だからこそ、この世界に神という者が存在するならば、なぜこんなにも残酷な仕打ちをするのだろうか、と俺は唇を噛みしめた。

彼らはその絆以上の脆さで繋がっていた。絆が強まれば強まるほどに片方の生命力は強まり、それに反して吸い取られるように片方の生命力は失われた。愛すれば愛するほどに、絆が強ければ強いほどに相手を傷つけてしまうそれは、まるで一つの魂を共有しているかのようなだった。

あの少年達は今頃どうしているのだろうか？ まだ苦しい日々を過ごしているのだろうか？

ひょっとしたら少年達にとって世界の終焉こそが救いなのかもしれない。だが、そんな世界だとしても、世界が滅ぶというのなら、俺はこの世界を救いたいと願うだろう。彼らに気休め程度の言葉しか掛けられないとしても。……彼らに本当は掛けられる言葉など無いと知っていたとしても……。

鳥のさえざる鳴き声が聞こえた。

朦朧とする意識の中、その鳴き声に先導されるようにして俺は現実の世界へと引き戻される。

朝といつても夜明け前の空はまだ薄暗い。

寝惚け眼の俺がぼんやりと見つめた先には、薄い闇が覗く少し開けた窓のふちにとまるようにして、黄緑色の鳥が首を小さく動かしていた。

ベッドから起き出した俺は、大陸^{アスベル}では伝書用にごく一般的に使われているコクリコと呼ばれるその鳥の足に白い布紙が巻きついていてるのを目に留める。そっと手を伸ばすとコクリコは逃げもせず、俺が布紙を外すのを待った。

小さく首を動かしていたコクリコは俺が布紙を外すと、その役目を終えたように窓の外へと羽ばたいていく。それを見届けた後で俺は布紙を広げた。

沈み行く月明かりの中であって、布紙の文字ははつきりと読み取れた。一文字一句を確認するようにして黙読^{もくどく}し終わると、クイルドとプウを起こす為に俺は部屋を出た。

「むづ……こんなに早く動くとは思わなんだがな」

応接間に集まり布紙を覗き込む三人の中で、クイルドが苦々しい声を上げる。俺は同意するように小さく頷き、いつも冷静なプウは無言のままだった。

邪界軍、人界への侵攻を開始。我らと共に人界の平和の為に、今こそ剣を取り集結せよ。デルズモコを決戦の地とす。

布紙にはそう記されていた。

俺にしてみれば、クイルドの言うとおりこんなにも早く動き出した邪界軍^{メヒウス}も予想外の事ではあったが、それ以上にこの人界^{テラ}にあって共に戦おうなどと旗印^{はたじりし}になる人間が出てくる事も予想外の事だった。表情に出していたのかもしれないそんな俺の心境を察するように、クイルドが呟く。

「大陸^{アスベル}中にある数多^{あまた}の王国と、自らの国土の事しか考えぬ王達。よ

もや、互いに協力して戦おうなど、今までの歴史を垣間見れば初めての事じゃのう」

その通りだ。と、俺は一人思った。

かつて、人界神テラマガナが自ら進化出来る生き物として創り上げた人間は進化を遂げていく中で、より愚かな生き物となっていた。学習する思考は神が望むべくもない事まで得ようと求めた。

進化の発展。それは即ち人が「強欲」となっていく過程でもあった。

大陸にある数多の国々は、自らこそが大陸を支配するに相応しいと主張し、その度に戦争が起こった。戦争が終結し、築かれた王朝として長くもつ事はなく、また大陸は戦火に包まれる。繰り返されるこの大陸の歴史は、本来なら優秀なる存在へと至るはずの人の進化の愚かしさをそのままに物語っていた。

それはかつて、滅びし王朝を築きしミンツ家の子孫として、俺が痛いほどに理解している事である。

自分達の事しか考えぬ数多の国家のうち、邪神ドヴァーズ采襲の際にあつても自らが前線に立ち、戦おうとする国も王も存在しなかった。守るべきは自分達の世界より、国土。そんなちっぽけな物の為に、本来ならば一年前の時点で既に滅亡していてもおかしくないのだ。……ミカトン・ケイルが邪神ドヴァーズを打ち倒せていなければ。

クイルドは長い髭を触りながら、一人思索する俺の回答を導き出すように含み笑いを浮かべた。

「ミカトン・ケイルの勇氣に触発されたかの？ ……それともこやつ、自らの王朝を築く為の布石とする気かのう？」

クイルドが覗き込む布紙の文章の末尾に記された家紋。それは西大陸の小国フジンの王のものだった。

つい半年ほど前に、ふがない先王を追放し新たな王として即位

したフジンの若き王。猛き剣王と称されるその男の名を、シールスという。

ちらと勘ぐるように覗くクイルドの視線を交わすように、俺は顔を背けると「ふん」と鼻を鳴らした。

ミンツ家もウルス家も、大陸の双剣と呼ばれた誉れ高き剣士の一族である。本来なら、ウルス家の最大の好敵手と成り得るであろう、ミンツ家は没落の一途を辿り、今やこの有様だ。俺は興味も無いという表情を作るのが関の山である。

俺の顔を少しだけ愉快そうに眺めた後で、クイルドは「で、どうするんじゃ？」と尋ねた。

機嫌を損ねた振りをする俺の代わりに答えたのはプウだった。

「どうするもこうするも、邪界軍が攻めてきたのなら、戦う他はないでしょう。幸いにして、ここからデルズモコまで私の『聖』なら、二時間ほどで行けますし」

プウの発言を聞いて「決まりじゃな」とクイルドが立ち上がる。

「なら、ミカトンの修行も解いてやらねばの」

呟きながら、小屋の外へと出て行ったクイルドがミカトン連れ戻ってくるのを待つ間、プウが珍しく溜息をついた。

「また、ミカトンと共に戦わねばならないなんて、ね」

その嘆きは、またミカトンに振り回されることになるであろう自身の境遇を思つてのものだろう。

機嫌を損ねているはずの俺は笑いを堪えきれずに噴出す。

そこへ、ミカトンを回し車から開放しにいったはずのクイルドが血相を変えて飛び込んだ。

「……ミカトンが……ミカトンが、おらん」

怪訝な顔を浮かべる俺は「脱走したんじゃないの？」と尋ねたが、クイルドは「そんな事はありません」とすぐに首を振った。

「あれは絶対に中からは開けられんようになってるんじゃない。開けるには鍵が必要じゃ」

クイルドは決して紛失などしていないというように、テーブルの

上に首に掛けたひも付きの鍵を置いた。

俺とクイルドとの問答の間も、冷静なプウは一人席を立つ。

少しの間を置いて戻ってきたプウは、静かに口を開いた。

「全ての剣 ユピテル も無くなっていました」

瞬間、クイルドの顔が青ざめていく。

小屋の中を不穏な空気が包んでいった。

第四章 猛き剣王 シールス

第四章 猛き剣王 シールス

1

メビウス軍の城塞と化したデルズモコの町を見上げるようにして布陣する一団が少しずつその数を増していく中で、ようやくにしてカクニマの双眸そうぼうに、一団の指揮官らしき男が映ったのは時刻も昼に至ろうかという頃合の事だった。それを見て「ほう」と唸うなったカクニマは、同時に戦争が間もなく始まるという事を理解している。

カクニマが見据えた先の男は、カクニマが唸うなるだけの事はある精悍かんな顔と威風堂々いふうどうどう（いふうどうどう）たる佇たたずまいの持ち主であった。一目見て練磨れんまを怠おぼる事のない筋肉質の体躯である事は見て取れたが、加えて相当な長身である。それをういて繰り出される剣撃たるやかなりのものである。

我がメビウス軍の精銳せいえいは四界の兵の中でも最強とカクニマは自負している。だが、人界テラの民が己の脆弱せじやくさを補う為に、生み出し進化させてきた「剣術」というものが侮あなごれないという事も知っている。それがゆえに主神ドヴァーズは倒されたのだと悔恨かいこんを噛みしめればこそ、カクニマに奢おごりはない。

しかし、それでもなお、カクニマは薄ら笑いを浮かべた。

元々、雷獣の二つ名を持ち、メビウス軍きつての戦闘狂と知られたカクニマである。やはり殺し合いが始まるという喜びと興奮を隠す事は出来なかった。

薄ら笑うカクニマがふと気づいた時、講堂の窓から覗くカクニマの顔に向けて、遠く離れた精悍な男が視線を投げかけていた。

その男、人界軍テラの総指揮官、猛き剣王シールスもまた、人の目

には届かぬそこに敵の総大将がいる事に気づいていた。それは戦士ゆえの気づき、つまりは気配を感じ取ったという事であろう。

それが尚更にカクニマには嬉しかった。

例えどう転んだとしてもメビウス軍の勝利は揺るぎないと信じていればこそ、戦うに値する戦士へとカクニマは薄ら笑いのままに呟いた。

「さあ、存分に殺しあおう、シールスよ」

2

「殿、なにか？」

後ろから兵に声を掛けられ、デルズモコの講堂の一室に目を留めていたシールスはゆっくりと振り返った。馬の尾のように後頭部にひとつに纏められた長い漆黒のような黒髪がふわりと舞った。

「いや、何でもない」

呟いた後で、シールスは続々と集結しつつある軍を眺める。

「兵の数は足りそうか？」とシールスが尋ねると、歩み出てきた初老の副官は満足そうに頷いた。

「全ての大陸アスベルから続々と集まっております。確かに時間はありませんでしたが、この事態を想定して五百の伝書コクリコアスベルを用意し大陸中に飛ばすという殿の計画が上手くいきましたな。大陸中から集まりつつある兵の中には、国務を無視してまでこの緊急事態に駆けつけてくれたザルツベルの国境守備隊などの名高き部隊も多数参加してくれています。このまま行けば、おそらく千を超える大軍にはなるうかと」

シールスは副官の言葉に頷く。そして「ありがたいことだ」と呟いた後で、各地から集結しつつある数多の兵たちに向けて、頭を下げた。

「何をおっしゃいますか、これも全て殿の人柄ゆえです」

副官はすぐにそう告げたが、彼の両の瞳は既に感激の涙で滲にじんでいた。

「おそらくあと一時間もすれば戦争が始まることだろう。だが、今日ここに集まった英雄達の武功で人界テラに本当の平和が訪れるのだ」
静かに副官に告げたシールウスのその言葉は、自らに言い聞かせるようであった。

軍はそのほとんどが屈強な兵ばかりではあったが、中にはまだ子供と呼べそうな年頃の少年達や女性の姿も少なからずあった。しかし、彼や彼女らも人界テラ存亡の危機にあつて、自ら決断しここへとやってきたのだ。国も性別の垣根かきねも越えて、集結してくれた人界テラの歴史上初の記念碑的な連合軍を前にして、兵の優劣など小さな事に過ぎない。だからこそ、シールウスは自らの口で告げたのだ。

ここにいる誰もが英雄なのだ　と。

シールウスの優秀な側近達は、この陣に限なく配置され集まってきた人の群れを的確に隊列へと組み込む。ただの巨大な人の塊は、着実に戦える形へと姿を変えていった。

もうすぐ、それは完全な形となる。

そして、もうすぐ、戦争が始まるのだ。

3

不気味なほど静かに、一時間が経過した。

各地からの兵が集結を終え隊列が整ったのは、正にシールウスが告げた通りの時間だった。

副官の予想を遥かに超え、兵は千五百もの大軍となった。

人界テラでは一般的な皮の胸当てという軽装に槍や剣、そして弓を携えた兵たちが見守る中で、シールウスは丘陵かきねの上に立つ。小高い場

所に立つと長身の彼は離れた兵からもその姿を確認できた。何よりもその体軀以上に威風堂々立つ彼から発せられるオーラとでも呼ぶべきそれは、人々を惹きつけた。その姿に気づいた者が次第に息を呑むようにして目を奪われていくと、千五百のざわめきはやがて静まり、静けさだけが残った。

「今日この時、皆よく集まってくれた」

何気もない一言ではあった。しかし良く通る彼の内から発せられたその声は、千五百の兵の隅々まで届くと、千五百の兵一人ひとりの胸の内に響き、そして芯を熱くする。

群集はただ自分達を導く一人の男、この混迷の中にあつて唯一「真の王」と呼ぶべきシウルスの言葉に耳を傾けていた。

「今日というこの日は我々にとって紛れもなく、忘れられない日となるだろう。それは人界^{テラ}と邪界^{メヒウス}の最終決戦、人界存亡の日としてではない。今日は国も人種も性別も、そして年齢をも越えて、我々人界^{テラ}の民がひとつとなった日。正に真の意味で人界^{テラ}という世界は今日始まるのだ。後世の人々は今日のこの日をして、人界^{テラ}建界記念の日と呼ぶ事だろう」

シウルスの言葉は聴衆の心を打った。自分の国という殻に閉じこもり、傍観^{ぼうかん}を決め込んだ数多の王たちや、その意向に逆らう事も自らの意思を持つともしない連中はここに集まった群衆を自殺志願の愚者と嘲^{あざわ}るかもしれない。だが、ここに集まった人々は、人界^{テラ}存亡の中にあつてはそれこそが正に愚かな行為だと知っていたし、知っていればこそ自分の意思で戦う事を決意したのだ。

しかし、いざ戦争が始まるという極限状態の中で、剣を手に隊列に並ぶ自分こそがやはり愚かなのでは、と迷いが生じる者がいたとしても誰も責める事は出来まい。

現にピリピリとした空気は千五百の大軍にあつて小さな、そして幾つもの小競り合いを生み出していた。だが、シウルスが言葉を発した瞬間、明らかに場の空気が変わった。

一瞬にして聴衆の心を掴んだ彼の演説は、一瞬にしてそんな迷いなど吹き飛ばした。彼は紛れもなく王だった。この世界がこれからも続いていくのならば、彼は世界の唯一無二の王となるだろう。そしてそんな絶対者と共に戦う人々は紛れもなく「正義の刃」であった。

(唯一正義たる自分達に何を迷う事があるだろうか?)

人々の不安はたちどころに消え去り、勇気だけが残る。それを吐き出すように歓声を上げる者の中の一人が「我らが英雄王、シールス」と叫ぶと、それは瞬く間に群集の合言葉となって辺りを包んだ。

だが、唯一人シールスその人だけが、それを良しとしなかった。開いた右手を突き出し群集の声を遮ると、シールスは告げた。

「ここに集まりし同志よ、貴方達こそが紛れもない英雄なのだ」
群集は言葉を失った。

あまつさえ泣き出す者さえあった。

そんな中でシールスは自らの剣を高々とかざした。

「人界の為に！」

彼に続くように人々もまた剣や槍、そして弓をかざした。

「人界の為に！」

「人界の為に！」

「人界の為に！」

何度も繰り返される彼らの歓声が最高潮に達した時だった。

シールスの眼前に立ち並び、剣をかざす三人の猛者の首が^は匆ね飛んだ。

あつという間の出来事だった。動じることなくかざしていた剣で一瞬後の一撃を防いだのは、さすが剣王と称されるシールスたればこそである。しかし、防ぎはしても完全に体勢を崩したシール

スに向けて、無慈悲なほどの正確さを伴い大鎌が振り下ろされた。

4

シールスが見たとき、逆光の中で黒い影が飛んだ。その姿は紛れもなく少年のシルエツトだった。肩膝をついたままでシールスは成す術もなく、目の前に振り下ろされる大鎌の刃を見つめていた。子供の姿に騙されたなど、言い訳にしかなるまい。暗殺者の侵入を容易く許してしまったのは、自分自身の失態に他ならない。

彼は今日ここに集まった人々をして、人種も性別もましてや年齢を越えてひとつになったと語った。だが、それがそのまま仇となつた。

シールスは今し方したばかりの自分の演説を思い出すと、最後の瞬間自嘲気味に笑った。

そして、振り下ろされる刃をぼんやりと見つめた。

激しい金属音が響いた。

一人覚悟を決めたシールスの最後の瞬間を否定するようにして響いた金属音の後、聞こえてきたのはあまりにもものんびりとした声だった。

「爪が甘いのは相変わらずか？そんなんだから、王朝の一つも築けやしねーんだぜ、ウルス家」

声の主が漆黒の髪色を見てシールスと判断したように、シールスもまた、一見して大鎌の刃を止めた剣と同じ赤色の髪と瞳の男の素性に気づいた。

「保持も出来ぬのに、ただ築けば良いという事もないだろう？」

…ミンツ家」

ただの二代で滅亡した王朝の子孫、アン・ミンツは「ニヒ」と笑った。

立ち上がったシールスはアン・ミンツと並び立つようにして剣を構えなおす。

シールスほどの筋肉を持ちえてはいなくとも、彼と遜色ない長身の持ち主であるアン・ミンツとシールス、両雄が並んで立つ姿は正に大陸アスベルの双剣と称されるほどに圧倒的であつた。

大鎌を携ひえた少年は少しだけ怯ひるむように、一歩だけ後ずさる。

アスベル大陸の双剣に圧倒されていたのは少年だけではなかつた。自分達が信じる王、シールスが命を落としかけるといふ絶望的な映像の後で、固まつたままの群集は少年が大鎌を構えなおすのを見て、ようやく我に返る。そして声を荒げ、ようやく剣先を少年へと向けた。群集の悲鳴とも怒声ともしれぬ声が場を支配していく中で、アン・ミンツは事も無げに呟く。

「こんなトコで話の腰を折つてる場合かよ。さつさと戦争の指揮をとんな」

ちらと横目でアン・ミンツの顔を見た後、シールスは「恩に着る」と呟く。

その後すぐ、この場をアン・ミンツに任せ軍を率いて前線へと駆け出そうとした矢先、後ろ手で肩を掴まれたシールスはそのまま引き戻された。

「そつちじゃねーよ」とアンが口にした瞬間、丘陵の堅い地盤じばんが粉々に砕けた。その先には、獣のような面を被つた女の姿があつた。女が両手の指を鍵盤けんばん楽器でも奏できるように動かすと爪の先がキラキラと輝く。

少年と仮面の女に挟まれながらも表情を崩さずにいるアン・ミンツに再び「恩に着る」と呟いた後で、今度こそシールスは駆け出した。

剣を振り上げ駆けるシールスの後を追うように、千五百の大軍が動き始める。

「んーじゃあ、始めますか」

地響きのようにこだまする千五百の足音を脇に置いて、アン・ミンツは誰にとも無しに呟いた。

5

今から七時間前、イタヤの森において全ての剣 ユピテル と共にミカトン・ケイル失踪しっそうという事態が発生した。

かつて邪神ドヴァーズを倒し、金色の英雄などと呼ばれているミカトン・ケイルである。

邪界軍襲来に呼応するようにして突然に姿を消したミカトン・ケイルについて、その場に居合わせたクイルド、アン・ミンツ、シャルナプ・ウーデルカの三人の頭にまず浮かんだのは「ミカトンは邪界の連中にさらわれたのではないか」という事だった。

自分達の主神を滅ぼしたミカトン・ケイルは、邪界の連中にとつては最も忌むべき相手であろうし、何より今回の人界侵攻テラに際して最大の障害と成り得る人間でもあるはずだった。それを考えれば邪界軍による誘拐説は一見、辻褄つじつまが合うようにも思えたが、それならばなぜ「さらう必要があったのか？」と問われれば、その答えは導き出せそうにもない。いくら積年の恨みがあるとはいえ、戦争が始まるという火急の事態にあつてわざわざ拷問でもしようと思わなかったというのはひどくナンセンスである。それに邪界の連中が今更、全ての剣 ユピテル を奪い去るというのも理解しがたい話であった。

悪い風にはかりも考えても始まらないと、三人はとりあえずミカトン・ケイルが自ら行方を晦くらました（つまりは、家出的なものとして）イタヤの森中、そしてミカトンが行きそうな場所をくまなく捜索したが、結局彼の足取りを見つけ出す事は出来なかった。

シールウスの軍と邪界軍の衝突の時が刻一刻と近づく中で、クイルドはアン・ミンツとシャルナアプ・ウーデルカに「お前達はどうすべきだと思う？」と尋ねた。

アン・ミンツとシャルナアプ・ウーデルカの中で答えは既に決まっていた。クイルドに尋ねられるまでもなかった。

「今は人界存亡が何よりも優先すべきだってーの」

アン・ミンツが答えるとシャルナアプ・ウーデルカも応じるように頷いた。

二人の意思を確認すると、クイルドも納得するように頷く。

「ならば、ワシはミカトン搜索を続けよう。人の生命エネルギーから作り出される必殺のギユガルド。それを応用すればミカトンの生命エネルギーを辿れるかもしれん」

そんな事が出来るとすればミカトンに奥義ギユガルドを伝授したクイルドくらいの者であろう。ならばそういつた探索方法を持ちえぬアン・ミンツとシャルナアプ・ウーデルカは邪魔とは言わないまでも、助けとなりそうにもない。落胆すべき事柄も、今はそれが逆に救いだった。

現実的な思考の元、クイルドにミカトン搜索を託すと、シャルナアプ・ウーデルカが剣帝ネイル・フリー・トウーンに導かれ得た、剣の理、青　セイ　転じて聖　セイ　ヒュドリポスニールと名づけた氷で出来た竜と馬の混成獣に跨り、二人は一路デルズモコを目標とする。

ヒュドリポスニールの六本の足は大地を力強く駆け、背に生えた四枚の翼は風を切って空を翔けた。

そして、赤の剣士と青の錬金術師は戦地へと降り立った。

シィウルの軍が突撃を開始したのを見て、講堂のベランダ部へと姿を現したメビウス軍の総大将たるカクニマも総攻撃の指示を下した。

メビウス軍随一の軍略家として名を馳せる彼が、およそ作戦とも呼べぬ指示を下したのは、烏合の衆を一瞬にして蹴散らしてやろうという思惑おもむくがあったからに他ならない。

彼はシィウルの陣の様子をずっと観察していた。この数時間で巨大なまでの人の塊と化した敵陣において、数時間前までのようにシィウルの顔を識別する事は不可能となっていたが、それでも良く通るシィウルの声を聞き漏らす事はなかった。

シィウルの演説が終わり熱気に満ちた集団が歓声に包まれて間もなく、集団は一転して沈黙に包まれた。一瞬前の熱気が嘘のように、一つになった巨大な生命体がただの氷の塊のようになってしまふ様は遠目にも見て取れた。

そして、間もなくしての、人界軍テラのこの特攻である。

(……プラクル・ムシカとその従者メア・リサ、ニユクスの二人組はどうやらシィウルの首を取ったらしい)

含み笑いを浮かべたカクニマがそう勘違いしても、おかしくはない光景ではあった。

だからこそ、指導者を失い愚かな特攻へと踏み切った愚かな自殺志願者達を、容赦なく踏み潰してしまおうと短期決戦の決断を下したわけである。

メビウス軍の屈強な兵士達は、メビウスの長く巨大な鼻と牙を携えた巨獣ディマガンテの行進に続くようにして剣を携え、吼えた。

しかし、自殺志願者達はその威嚇いかくにもまったく怯む様子もなかった。それどころか巨大な生命の波となつて、巨獣もメビウスの精鋭にも引けを取らぬほどの迫力で襲い掛かった。

集団の先頭に行く勇猛な男の姿を見た時、カクニマの両目が見開かれた。

「……バカな。……しくじりおつたな、ニユクスめ！」

苦々しい声を上げるカクニマが見ている前で、シールスは次々と、メビウス軍の兵士を血祭りに上げていく。

兵力の差はあっても、一人ひとりが一騎当千のはずのメビウス軍の兵は完全に混乱状態に陥り始める。実際に戦う兵たち、そしてカクニマでさえもそれを理解する事は出来なかった。

人界の兵が強すぎるのだ。

もちろんまともに戦えば、メビウスの兵が人間などに遅れを取る事などない。しかし、それも一対一で戦って何とか勝てるという程度の話である。となれば、完全に千対千五百という兵力差は目に見えて負担となり、メビウス軍に押し掛かっていた。

確実にシールスの軍はメビウス軍の本陣へと近づきつつあったが、混乱してはいても自軍が総崩れとなつたわけではない。陣を立て直すために、狼狽ろっばいしつつもカクニマは講堂のベランダで軍配をかざした。

その時である。

背に何本もの槍を突き刺され、半狂乱となつた二頭のデイマガンテが互いにぶつかるようにしながら、狂つたように走り始めた。二頭は人界軍テラの迎撃など意に介さず、シールス目指して駆けて行く。
(行け！ 行け！ 行け！ 行け！ 行け！ 行け！ 行け！ 行け！ 行け！ 行け！ 行け！ 行け！ 行け！ 行け！ 行け！)

カクニマは振り上げた軍配のことなど忘れて、デイマガンテの暴走を見守った。

二頭の巨体は完全にシールスの眼前でその前足をもたげた。迫り来る巨獣の暴威に気づいてはいても、メビウスの兵と交戦中のシールスは身動きとれずにいた。

しかし、デイマガンテの巨大な足がシールスを正に踏み潰そうとした瞬間、その声は離れたカクニマの元まで届けられた。

「『始』水 キュベレイ」

瞬間、突然現れた氷で作られた投擲槍シャベルンが二頭のデイマガンテを刺し貫き、東の空へと消えていった。

ぽっかりとした空洞から血飛沫ちしぶきを撒き散らした後で、二頭のデイマガンテはとうと倒れる。

一瞬の内に二頭のデイマガンテを倒してみせた男を、カクニマは見た。

青み掛かった銀髪の優男。そして、その右手に携えられたのはカクニマが遙か昔に見た事のある剣だった。

「……剣帝ネイル・フリー・トゥーンと、その継承者……『騎士』だと……？」

呆然とした表情を浮かべるカクニマの手から滑り落ちた軍配が床に転がった。

7

俺は剣皇ポーニロアを肩に乗せると、相手の出方を探るようにしてゆつくりと見回す。

ポーニロアの赤い刀身と、ハリガネズミのように尖らせた頭髪は、前後で隙を窺うシュールス襲撃犯の二人組へと無言の圧力を与えているはずだ。

あまり褒められた物ではないとはいえ、肩まではある赤髪をツユナと呼ばれる植物から出来た油でねじるようにして幾つも立たせたそれは、ミンツ家の正装であった。

この大舞台で、とりあえずは自身で納得のいく登場の仕方を決めた俺は、とって付けたように（見てるか、じいちゃん）と一人感慨

深げに内心で呟いてみたりした。

警戒はしつつも一人悦えつに入るそんな俺の事などお構い無しに、仮面の女が呟く。

「プラクル、私達の使命を忘れたの？　こんなのに構ひまっている暇ひまなどないわ」

「こんなの」呼ばわりされて俺は正直傷ついたが、それはそれ、苦しい旅の果てに手に入れた大人の余裕溢れる態度で決め台詞の一つも告げようと口を開いた。しかし、せつかくの俺の順番だというのに、プラクルと呼ばれた少年が水を差すように呟く。

「ミンツ家……。ならば、お前が先の大戦の英雄が一人『赤毛のアン』か……？」

なんだ、俺のことも少しは知れ渡っているじゃないか、と俺は「ニヒ」と口元を緩めたが、プラクルの顔は見る見る憤怒ふんぬの表情へと変わっていった。

「赤毛のアン………なんでだ！　なんでお前がそれを手にしている！」

少年のそれとは思えぬ呻うめくような声に、俺は一瞬プラクルが何の事を言っているのか分からなかった。

プラクルの言葉に素早く反応したのは、仮面の女だった。

「プラクル！　今は私情を挟んでいる時ではないわ。今なら、まだシィウルスに追いつき、討つことも可能なのよ！」

シィウルスを追う、という言葉に俺は反射的に剣を構える。しかし、大鎌を携えたプラクルが、女に促されてシィウルスを目指して駆け出すことはなかった。

プラクルはまばたきもせず、ただ睨むように俺を見つめていた。いや、プラクルが見つめていたのは正確には、俺ではなく剣皇ポーニロアだった。

プラクルの薄紅色の髪が揺れ、額に刻まれた半円状の紋が覗く。その紋はポーニロアの刀身と同じ鈍い赤色となって発光していた。

(ポーニロアに反応してるのか……って事は……)

「……お前ら、魔界人か」

俺が呟くと、プラクルは大鎌を構えた。

女は再び「プラクル！」と叫んだが、彼がそれで諫められる事はなかった。

「メア・リサ、ここでコイツを倒してポーニロアを取り戻せば、僕の一族は再び名誉を回復する！そして何より、僕は大人として本当の騎士としての力を得られるんだ！そうしたら、シールスなんて敵じゃないよ、苦もなく一瞬で殺してみせるさ」

少年の顔が狂気に吞まれる様にして引き攣つていくのを見て、俺はプラクルに向けてポーニロアの剣先を構える。そして、それは同時にメア・リサがプラクルの意見に同意し覚悟を決めた瞬間でもあった。

プラクルは地面を蹴って高く飛んだ。大きく構えた鎌を振り下ろそうとするのを見て、俺は素早く受けの構えをとる。だが、大鎌の刃は振り下ろされる事はなかった。

「無限舞踊刃！！」

プラクルが叫んだ瞬間、大鎌の刃は粉々に砕けると無数の刃の欠片となって、俺の眼前で降り注ぐ。咄嗟に額目掛けて飛んできた一枚を俺は砕いた。しかし、残りの刃が振ってくる気配はない。無数の刃は空中で静止したまま、キラキラと輝いている。

その輝きは刃から迸り、光を反射する無数の線となって伸びている。

それはやがて束ねられた弦となり、メア・リサの両手へと続いていた。

操り人形でも繰るように、その無数の弦をメア・リサはかき鳴らす。

「舞え！！」

メア・リサが叫んだ瞬間、空中で静止していた刃は、それぞれが意思を持ち生きているかのように不規則に飛ぶ。数百とも思えるそ

れは、まるで鋭利な羽を持つ蝶のようだった。

俺の頭上をその群れは、あっという間に覆い尽くす。

迫り来る恐怖の中にあつて、俺の理性は冷えきっていた。

まるで他人事のように、冷静な思考はその光景をスローモーション仕立てで俺に認識させる。その中で、ポーニロアを握る俺の右手は完全な脱力を形成していた。

夢から覚めるように、スローモーションの世界が解ける。そして、同時に俺の右手は跳ねた。

振り上げたポーニロアはまるで空中にゴムでもあるように跳ね返ると、弾かれた先でまた跳ね返った。

抜刀した際の最高速の剣撃は、その速度を維持したままで計五十七回繰り返された。ただの五十七回でしかないにも関わらず、その鋭利な羽を持つ蝶の悉くを切り伏せた後で俺は告げる。

「ミンツ流秘儀、千手螺旋」

砕かれた蝶が、塵ちりとなつて消え行く中で、プラクルが駆け出す。

大鎌の柄をカチリと回すと仕込んであつた短槍が姿を現した。

無限舞踊刃と仕込み短槍の連携は、正に完璧であつた。プラクルとメア・リサはここに至るまでに累々（るいり）たる屍を築き、間も呼吸も完璧な精度を持つ技へとそれを昇華させていたが、それですらアン・ミンツの技量には遠く及ばなかつた。無限舞踊刃の後の奇襲にも近い短槍の一撃も、アン・ミンツには想定内の事柄だった。

鬼の形相で迫るプラクルにたじろぐ事もなく、アン・ミンツは剣皇ポーニロアの剣の理、その死（始）たる名を告げた。

「『始』炎 リボルバー」

突如として現れた火球はプラクルの眼前で爆ぜた。

爆風で飛ばされるプラクルを追うようにして、アン・ミンツは飛んだ。そして、飛ばされた後、地面に尻餅をつくプラクルの首元5cm手前で剣皇ポーニロアの剣先をピタリと止めた。

アン・ミンツは最初からプラクルを殺すつもりなどなかった。

それは良く言えば剣の道を自らと同じく求める者への情け、悪く言えば自分には遥かに及ばぬ技量の持ち主に対する驕りおごりであった。

だからこそ、リボルバーの火球はプラクルに命中する前に爆発させた。爆風で飛ばされただけの大したダメージもないプラクルの首元に剣先を突きつけて、歴然たる力の差を見せ付けてやれば、プラクルも諦めるだろう。

プラクルの心を折るための見せ掛けの一撃は、アン・ミンツの目論見通りプラクルの首元5cm手前でピタリと止まった。

だが、ポーニロアの刀身には赤い血が伝い、雫となって滴り落ちる。

そこにはプラクルの危機に、身を呈して立ち塞がったメア・リサがいた。

アン・ミンツの眼前で、プラクルを庇かばうようにして両手を広げたメア・リサの腹部には深々と剣皇ポーニロアの刃が突き刺さっている。

剣を持つアン・ミンツはその感触に、メア・リサのそれが致命傷である事を瞬時に悟った。

ポーニロアの刃が引き抜かれた瞬間、力なくメア・リサは崩れ落ちる。

必死にプラクルが抱きとめた時、従者はその役目を終えたかのよう
にメア・リサの顔を覆った仮面が外れた。

「メア・リサ」「メア・リサ」と何度もプラクルが叫ぶのを聞きながら、メア・リサは愛おしむようにプラクルの顔を見つめる。その顔は仮面から覗いていた知的な瞳を持つ者とは別人のように幼い。

ニユクス
魔界に生きる者は自分の定めを受け入れたとき、儀式を受けて大人になるのだと聞いたことがあった。だから、アン・ミンツは理解した。

彼女はプラクルを守るという使命の為に、無理やりに大人になったのだ。

彼を守り導く、従者、友人、相談役、姉の代わり、そして……母親の代わりになったのだ。

成熟した大人の女性の身体をしたメア・リサは、最後に少女の笑顔で笑った。

「泣かないで、貴方は私の、立派な、騎士、なの……だ……か……ら」

その選択肢に恋人という言葉はなかったのだろうか？

アン・ミンツは、プラクルの胸の中で冷たくなっていくメア・リサの顔を見つめた。

メア・リサの身体を強く抱きしめたまま、プラクルの慟哭くいきが止む事はない。

……これが戦争であるならば、メア・リサの後を追わせてやる事も一つの救いなのかもしれない。ポーニロアを握る右手に力が込められたアン・ミンツだったが、その剣が振るわれる事はなかった。

ポーニロアを鞘さやへとしまつと、アン・ミンツはただ静かに告げた。「俺はこれから先も人界テリヤで剣士として在り続ける。プラクル、もしお前が彼女の敵を討ちたいと切望するならば、再び俺の元へ来い。

……俺はいつまでも、お前を待つ」

この時、再びプラクルが現れたならば敵かたきとして討たれてやるうと思っただかどうか、それは実を言えばアン・ミンツ自身も分からない。だが、そう告げたアン・ミンツは、プラクルを振り返ることもなく、シールスが兵を率いて進んだ先を目指して駆け出した。

（自分には今、成すべき事がある。その時、どうすべきかを考えるのはその時になってからだ……）

自らに言い聞かせるようにして走るアン・ミンツの視界、離れた空に氷で出来た投擲槍ジャベリンが青い一筋の光となって消えていくのが映った。

第五章 賢者 クイルド

第五章 賢者 クイルド

1

人界テラの大陸アスベルの中央に位置する地域は、高貴なる古種メナス・セレストと呼ばれる一族の集落が存在していた。

この人界テラにおいて最初の王朝を築いたとされるその一族は、彼らの祖先が作り上げた三角錐の形をした神殿の近くに暮らしている。王朝が滅び、現実を受け入れその地を後にする一族の者は少なくはなかったが、それでもなおその地に留まった者達は高貴なる古種としての誇りを失う事無く、今にも崩れ落ちそうな彼らの聖域を守り続けてきた。

そんな高貴なる古種の最後の一人を切り伏せた後で、ジンモザミは己が大刀にこびりついた血を拭いながら尋ねる。

「本当にここなのであるうな？」

デルズモコ近くの森を抜けて辿りついた先、高貴なる古種虐殺という汚れ仕事をジンモザミ一人に押し付け傍観ぼうかんしていたルーンは、仕事の完了を受けてその質問に答えた。

「私の考えが邪神ドヴァーズと同じであれば、間違いなくここなんですけどね」

事ここに来て間違いでした、では済まされない状況ではあるにも関わらずジンモザミは「ふむ、そうか」とだけ呟く。

彼が殺しの限りをつくした高貴なる古種の数は軽く三十を越えていたが、彼の考えによれば所詮は虫けらのような人界テラの民たちである。ここが間違いであれば、また別の地の人界テラの民を殺すだけの話だとジンモザミは思った。

しかし、その必要もないという事を間もなくしてクロ・ソナが伝えた。

「あつ！ 来ました」

彼女が指し示した先には、琥珀色こはくの瞳をした少し痩せ気味の白猫が映る。

猫というよりも犬が駆けるのに近いフォームを伴い、その白猫はクロ・ソナの元へと一直線に駆け寄った。

クロ・ソナは白猫の首に巻かれた布を解くと、中から現れた小さな石の塊をルーンに手渡す。含み笑いを浮かべつつ記された文字を解読するルーンが手にするそれは、石碑の一部だった。

「やはりここで間違い無さそうです。そして、やはりドヴァーズは持っていたようですね。……天上界ハルへの道標みちしるべを」

呟いたルーンが石碑を砕く。そして、中に隠された一本の糸を引き抜く。

それは、黄金色の毛髪だった。

「この地がかつて天上界ハルと人界テラを結ぶ地として選ばれた事は分かっています。しかし、創生神亡き後、その姿を隠した天上界ハルを探し出すことは不可能となってしまう……」

誰にともなく話し始めたルーン言葉にジンモザミは耳を傾ける。その傍らでは「ニヤア、ニヤア」と鳴く白猫とクロ・ソナは戯たわむれれている。

「……ですが、やはりドヴァーズは気づいていたのでしょうか。そして、それはまさしく私の至った結論と同じでした。……三神によって創生神が倒されたために、創生神の存在を感知出来なくなった天上界は姿を隠しただけで、今もこの地に留まり続けているのです。ルーンは手にした毛髪を軽くかざした。

彼が念でも送るように瞳を閉じた瞬間、毛髪は静電気に触れたようにピンと伸びる。それは堅い一本の針のように真っ直ぐに伸びたまま、決して揺らぐことはなかった。

「人界の騎士ヒエラルキ襲撃の際にあつても、これを持ち出したドヴァーズのしたたかさは見事と言つ他ありません。そして、これがあつたからこそ、ドヴァーズは天上界掌握などという暴挙にも乗り出したわけです。……これこそは創生神の毛髪。これに創生神より生み出された己が神としての力を込める事で、ドヴァーズは仮初の創生神の存在を作り出せると考えた。果たして、それは……」

ゆっくりとルーンは毛髪を掴んだ指を開いた。その時を待ち続けていたかのように毛髪は浮かぶと、三角錐の神殿目指して飛んでいく。

「……正しかったようです」

ルーンが締めくくると同じくして、飛び去った毛髪に導かれるように崩れかけた三角錐の神殿の頭頂部から黄金色の光が柱となって天へと伸びた。

ジンモザミが歓声を上げる中で、努めて冷静なルーンはクロ・ソナへと振り返る。

「クロ・ソナ。シロは何と言つていますか？」

一見、ただ白猫と戯れていただけのようなクロ・ソナは真剣な表情で口を開いた。

「メビウスから石碑を奪つたシロが人界へと辿りつく頃には、メビウス全域は完全に紅砂に呑みこまれたようです」

猫語を理解し喋るといふ一見すると不可解なクロ・ソナの所作を見守るルーンは静かに呟く。

「ニユクスに続いて、メビウスも紅砂に呑まれたか……」

ルーンの発言を受けて、ジンモザミは「つまりどういう事か？」と尋ねた。

表情を崩すこともなく、ルーンは答えた。

「つまり、戦争に勝者などないって事ですよ。……ニユクス、メビウスを呑みこんだ紅砂は勢いを増して人界をも呑み込むことでし

よう。自らの世界が既に滅びた事にすら気づかず戦争を続けるメビウス人も、人界テラの民もやがては紅砂コウサに吞まれるのは時間の問題でしょう。三界を呑みこんだ紅砂コウサが行き着く先は、わがネメシス……我々にも残された時間は少ないようです、急がねば」

焦燥ウツクシを感じるルーンは、そこで初めて厳しい表情を浮かべたが、その視線は黄金色の柱ではなく遙か先を見つめている。

ルーンが最初に気づいた気配に、ジンモザミもクロ・ソナも気がついた。

何者かが近づきつつある。

「ここは任せました」
ルーンが神殿へと踵かかひを返す。

ジンモザミは大刀を構え、クロ・ソナはその脇へと立った。

2

千五百と七十八歳という超高齢にも押しつぶされることもなく、クイルドの腰は曲がることもなかった。小柄ながら背筋の伸びた老人が物凄い速さで地を駆ける姿は正に圧巻である。

自らの生命エネルギーを球体として弾き飛ばす「ギユガルド」という奥義へと至る道程、自身の生命エネルギーを自在に操る技の一つに「浮身ふしん」というものがある。

生命エネルギーを、地を走る地脈（大地のエネルギー）と反発させるようにして自らの肉体を浮かばせるその技は、修練を重ねれば自身の推進力を持って高速での移動を可能とする事が出来た。

失踪したミカトン・ケイルの生命エネルギーを辿り搜索の途中であったクイルドは、遠くの空に黄金色の柱を認めると、「浮身」を

用いて一速飛びで高貴なる古種メナス・セレトの集落へと辿りついた。

腰も膝も悪くないというのに杖に両手を重ねたクイルドは、眼前に立ち既に戦闘態勢を整えた坊主頭の大男と、肩に白猫きゃを乗せた華奢しゃな褐色肌の女を確認すると「浮身」を解いた。

地面にゆつくりと降り立ちながら、二人組の素性を一見して看破したクイルドが口を開く。

「こんな所で何をしておる……冥界人よ」ネメシス

クイルドが厳しい視線を投げかけたその先で、若き冥界人ネメシスもまた、クイルドの素性に気づいていた。

「それは、貴方とて同じことでしょう。邪界人メヒウスでも人界テラの民でも無き者、賢者クイルド」

ふふん、と鼻で笑うように勝ち誇った表情を浮かべたクロ・ソナであったが、その後ですぐジンモザミの後方へと隠れる。

「あたしは戦闘要員じゃないんで、後はジンモさんお願いします」
自分の仕事は終わったとばかりに早々と引つ込んだクロ・ソナに代わり、ジンモザミは早くも臨戦態勢に入る。

「まあ、なんだ。貴様が我々の計画に気づいているかは別として、賢者クイルド、我が名を上げるには美味しい得物だ、手合わせ願うぞ。貴様を屠ほぶるは、冥界ネメシスの剣士、ジンモザミなり！」

高々と大刀を構えながら名乗りを上げたジンモザミは、言うが早いかクイルド目掛けて飛び掛った。それに応じるようにクイルドも仕込み杖から細身の刃を引き抜く。

風を切る轟音と共に繰り出されるジンモザミの大刀は、ジンモザミの頭上で一瞬だけ停止したかと思った瞬間、驚くべき速さを伴って真っ直ぐに振り下ろされると、体を変えクイルドのかわした地を切り裂く。

交わしざま、クイルドはジンモザミの胸を横に薙ないたが、そこに手ごたえは感じられなかった。確かにクイルドの剣はジンモザミを切った。しかし、切りつけた瞬間、何か堅い障害物に阻まれるようにして、クイルドの剣は弾かれた。

ジンモザミが不適な笑みを浮かべた時、百戦錬磨の賢者クイルドは、ジンモザミの不可解な技の正体を理解する。

(固さと比例するようにして、重さを操つとるのじゃな……)

「我が剛金術の前に散れ!!」

ジンモザミは吼えると、再び大刀を上段に構える。

剛金術と自らが呼んだ技で、大刀の刃に固さと乗算された重力を込めると、クイルドの頭上へと大刀を振り下ろした。

剣先を真つ直ぐに見据えたままで、クイルドは(攻撃と防御両面に使えるまづまづの技じゃな)と一人納得すると、剣を構えた右手ではなく、左の掌をジンモザミの鳩尾へと突き入れる。

その所作は驚くべき程に素早かった。

3

もともと巨大で四界一固いといわれる外甲を持つ戦闘体形へと至った邪神ドヴァーズを倒す為にクイルドが生み出した技が、自身の生命エネルギーを顕現させる「ギユガルド」である。

つまり、クイルドにとって相手の固さという概念は、それ程重要なことではなかった。

「光宿・掌」

大刀を振り下ろされるよりも早くジンモザミの鳩尾へと突き入れられた、掌へと集められた生命エネルギーは固い鎧と化したジンモザミの筋肉を貫通し、その体内で爆発する。

白目をむき、口から煙でも吐き出すように「かつ」「かつ」と喘いだ後、ジンモザミは倒れた。

ジンモザミが倒れた瞬間、彼の背後から突然に姿を現したクロ・ソナが奇襲の如く両手を広げた。

「ジンモさん!!」と声を上げる彼女のジャケットの両裾から、隠されていた六本の短い作りの矢が連続で打ち出される。発射され

た暗器に全く怯むこともなく、そのことごとくを撃ち落していたクイルドの傍らで、クロ・ソナの言葉に反応するようにジンモザミが最後の力を振り絞って立ち上がる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお」

ジンモザミが吼えながら、大刀に力を込めるその気配を感じながら、矢を撃ち落していたクイルドはクロ・ソナに向けて左の掌を広げた。

「ギユガルド」

クイルドの掌に金色の光が球体となって集まると、野球ボール程のそれは音もなく発射された。

真っ直ぐに飛んでくるそれを、泡を食ってクロ・ソナがかわした時、ジンモザミが大刀を振り上げる。背後に近づく「ごう」という風きり音を聞きながら、クイルドは舞うようにして体を入れ替えると、先と同じく剣を横に凧いだ。しかし、先と違うのはその剣に金色の光が灯っていた事だった。

「光宿・閃」

横一文字の斬撃の名残を残すように、ジンモザミの胸から血飛沫ちしほが舞う。

刀身の血を払うように、仕込み杖を振るうクイルドは完全にクロ・ソナに背を向けた。

相手にもされない事に憤るようにクロ・ソナは声を荒げ、両裾に仕込んだ仕込みボウガンの照準をクイルドに合わせた。

クイルドが初めてミカトンに極意ともいうべきギユガルドの伝授を行った際、彼はミカトンが有する生命エネルギーの膨大な量に驚愕した。ミカトンが本気で放ったギユガルドは山一つを軽く吹き飛ばすほどの威力であった。その生命エネルギーたるや、人の持つ領分を越え、もはや神クラスの物といっても支障はないだろう。なぜ、ただの人界テラの民の大王の子にそれ程の力があつたのか、結局クイルドは知りえる事はなつたが、クイルドはそこに自身の悲願でもあつ

た邪神討伐の可能性を若きミカトンに見出す事となり、そして、それは結果として彼の悲願を成就させることとなった。

クイルドのギュガルドにはミカトンほどの破壊力はない。だが、千年以上もの歳月を掛けて研磨けんまを重ねた彼のギュガルドの操作性と緻密さは他の追隨を許さない。

一度天高く消えた野球ボール程度の光弾は、落下するように戻ると両手を広げたクロ・ソナの背中で破裂した。

ジャケットを吹き飛ばし、背を露にしたクロ・ソナは吹き飛ばさずうつ伏せたまままで気絶した。

4

テラテラ人界メヒウスと邪界メヒウスの互いの運命を掛けた戦争は終結に向かい始めていた。プラクル・ムシカとその従者メア・リサ。二人を退けた後、アン・ミンツはシールウスとシャルナアップ・ウーデルカの元を目指して駆けた。

彼らがいると思しき戦線へと向かう途中、互いに陣の形成も崩れた軍同士は小隊による小競り合い程度の戦いが行われていたが、そのほとんどが人界軍優勢であった。

その中で劣勢を極める二隊を道すがら援護した上で、アン・ミンツがシールウスと肩を並べるように立つシャルナアップ・ウーデルカの元へと辿りついた時、戦線は邪界軍メヒウスの本営たるデルズモコのかつての市庁舎講堂の眼前にあった。

「邪界軍は籠城戦へと切り替えたようだ」

プウの説明を聞きながら、俺は講堂を見上げる。

「何にしても、連中が守りに入るなんてな。もはや余裕もないって事か」

プラクルとメア・リサとの一件があり、上の空で話す俺の声音に

は勝利目前とは思えぬほどに力がなかった。

それはどうやらプウにも分かったらしかつたが、長い付き合いのプウは敢えてそれを問わずにいてくれる。プウは黙々と作業をこなすように、戦争を終わらせる為の策を口にした。

「俺かお前の剣の理をもつてすれば、邪界軍メヒウスが固く閉ざした講堂の門を破壊するのは訳もないだろうが、そうなればおそらく連中は決死の覚悟で特攻してくるだろう。まずは応戦の準備を整えるのが先決だ。幸いにも草原での戦いは人界軍テラの大勝で終わりつつあり、続々と勝利を手にした兵はここに終結しつつある。今はそれを待つべきだろう」

俺は自分が駆けてきた草原を振り返った。

傷を負いながらもこの講堂目指して、人界軍テラが集結しつつあるのが映った。

草原には累々（るいり）たる屍の山が築かれてあつたが、そのほとんどは邪界軍メヒウスのものだった。総兵数に差こそあれ、ここまで戦力の差が出るとは邪界軍メヒウスは勿論、人界軍テラとして思つてはいなかつた事だろう。

確かに邪界兵一人に対して、人界テラの兵は三人で当たるといふのはこの戦争が始まる前に、シールスの副官達が口をすっぱくして言つていた事ではあつたが、これはその作戦が上手くいったという言葉では表せぬほどの戦果である。

少しだけ納得のいかない顔を浮かべたままで、俺は呟いた。

「まあ、待つのも仕事の内つて事か」

俺の顔を見つめたままで、シールスもプウも頷く。

邪界軍メヒウスの各隊を撃破した人界テラの軍が講堂前に集結を終えたのはそれから三十分と経たずしての事だった。

見渡した先で映る兵が、軽く見積もつても千は下らない事を見るに、先の戦いの大勝のあとが伺える。

「今まで皆よく戦つてくれた。そして、これが最後の戦いだ。先に

逝った友の思いに応えるためにも、我々は必ずや勝利を手に戴くのだ！……今こそ人界^{テラ}の為に！！

シィウルスが最後の激を飛ばし、講堂の前では再び「人界^{テラ}の為に！」の言葉が大きな渦となって響いた。

それを背中で聞いたままで、シィウルスは俺の顔に合図を送る。

小さく頷くと俺は剣皇ポーニロアを握る右手に力を込めた。

「楼^{ロウ} カノン」

俺の言葉と共に、俺の左肩に出現した六の火球は一つに集まると巨大な炎の塊を形成する。

ポーニロアの剣先を門へと向け「行け」と口にした瞬間、発射された炎の塊は鉄製の門を粉々に吹き飛ばした。

「突撃！！」

衝撃でバラバラに吹き飛んだ、溶けかけの鉄屑の破片が落ち着く間もなくシィウルスはその良く通る声で号令を發した。

それぞれが上げた声は巨大な音となり、そして人々は巨大なうねりとなってシィウルスの後に続くように駆け出す。

横目で人界軍^{テラ}が講堂内に突撃していく様を見ながら、俺は軽く首を回した。その後で、そろそろ俺も行くかと走り出そうとした時、プウの声が聞こえた。

俺は辺りを見回したが、講堂内へと突撃する群衆の中であってプウの姿を見つけることは出来ない。ましてやそんな中で、千以上の群集が上げる声に掻き消されもせず、プウの声がはつきりと聞こえることなど無理な事なのだから、これはプウの魔法だという事に俺は気づいた。

「アン、空を見る。セントラル・アスベルの方だ」

いつも冷静なプウにしては珍しく、上ずった声を上げている事に俺は少しだけ怪訝^{けげん}に思いながらもプウの示した方角を見た。

「なんだありや……？」

俺が見上げた空には、天へと至る金色の光の柱が伸びていた。

遠く離れた空で、人の視力でははつきりと捉える事の出来ない一筋の光の線。そのすぐ傍らを緑色の光を纏った一人の影が、天を指して飛んでいく姿が映る。

「アン、おそらくあれは神話に記された天上界と人界を繋ぐ柱だ。この戦争の背後で『何か』が起こり始めているぞ」

その『何か』は俺にも、そしておそらくプウにも計り知れぬ事だ。だが、プウの言わんとしている事はすぐに分かった。

その『何か』はこの戦争以上に世界の命運を握る事象だ。

群集の合間に、プウが自身の聖　セイ　ヒュドリポスニールを作り出す青き光を発するのを見つけた俺は、プウの元目指して駆けた。

5

一つ溜息をついた後で、クイルドは天上界へと至る光の柱を見上げた。

人間より遥かに優れた種である邪界人たるクイルドの視線には、仲間にルーンと呼ばれていた者が今や緑色の光を纏った存在へと姿を変え、光の柱を辿るように飛んでいくのも映ってはいたし、悠久の昔にその存在を垣間見たクイルドはその正体を知ってもいた。

それ故に、クイルドは躊躇した。

「浮身」を使えば、その後を追うことなど容易かったが、すぐさまそうしなかったのは「自分が、あれに勝つ事など出来るのか」という迷いに他ならない。

クイルド自身は今回の戦争の背後で冥界人が何を企んでいるのか知るところではなかったが、彼らが邪神ドヴァーズと同じく天上界の掌握を目的としているならば、唯一魂を生み出すことが出来る創生神なくしては天上界など、無用の長物であるという多々ある見解とクイルドは同じ考えだったので、天上界を戴こうとする邪神ドヴ

アーズを始めとする一部の存在によるところの執念というのは無駄な足掻きあがとしか感じえていなかった。

迷いと同時に湧いた自身の見解によるところの安堵あんどが、クイルドの重い腰を尚更に重くする。

そんなクイルドの背後で「ぐおんむむむう」という呻き声うめが聞こえたのは、一人悩むクイルドが二度目の溜息をついたときだった。

クイルドが振り返った先で見たのは、気絶するクロ・ソナの口の中へ白猫が入っていくという奇妙で不快な光景である。

顎あごが外れんばかりに口を広げた褐色肌の女は白目をむいたままで、白猫が口の中に姿を埋めるたびにびくんびくんと跳ねた。そして、その動作と共にクロ・ソナの身体に変化が生じる。

ショートヘアの髪の毛は跳ねる度に伸び、その度に色素が薄れるようにして白髪へと変わり、跳ねるたび幾分か成長も逆行していくかのように縮んだ。白猫がすっぽりと口の中に完全にしまわれると、髪の毛だけでなく眉も睫毛まつげも体毛という体毛が白髪の少女が完成した。

ゆっくりと伸びをするようにして上半身だけ起こした少女が瞳を開いた時、黒かった瞳は琥珀色に輝いている。

立ち上がるとスタスタになったジャケットがはがれ落ち、クロ・ソナに合わせたスーツのズボンは丈が合わないのか気に入らない様子で、両の手でズボンの端を持つと簡単に引き裂かれた。

大人にはなりきれない細く弱々しい身体と長い手足、小さな胸を隠す事もなく白色の下着一枚だけとなった姿で、少女は意地の悪い笑顔スヒウスを浮かべる。

「邪界ネメシスの騎士候補クイルドお。千五百年ぶりくらいかしらあ」
クイルドはその姿に驚愕した。冥界ネメシス広しといえど、その肌色と毛色を併せ持つのはただ一人だけである。

冥界ネメシスの騎士、シロ・クロ。

クイルドは苦々しい表情のまま口を開く。

「……………全盛期を維持するために、身体を二つに分けておったのか…」

6

かつて創生神より創り出された四人の神には、創生神のような魂を持つ者を作り出す術が無かった。

その為、彼らが自身の眷属けんぞくを創り出すには、自らの肉体の一部と魂の一部を用いなければならなかった。

人界神テラマギナこそ行わなかったものの、三神が同様にして創り出した最強の存在が後世、神具ハルモニアとして数えられる事となる、剣皇ポーニロア、神剣アテナイ、剣帝ネイル・フリー・トゥーンの三本の剣である。

そして、己が眷属の内、テラマギナにこそなかったが、神具ハルモニアを用いる事を許されし継承者と呼ばれる神の力の代理にして象徴を『騎士』と呼んだ。

魔界神アンブロシアには、剣皇ポーニロアの継承者、テュポン・ムシカ。

邪界神ドヴァーズには、神剣アテナイの継承者、クリムタ。

人界神テラマギナには、神具を持たないヒエラルキ。

そして、冥界神デプルートには剣帝ネイル・フリー・トゥーンの継承者、シロ・クロ。

四人のうち、魔界の騎士テュポン・ムシカは神話における三神の争いの際、人界の騎士ヒエラルキによって倒された。

テュポン・ムシカを倒したヒエラルキは神具ハルモニアの一振り、全ての剣ユピテルを奪い、消えた。その後の消息は定かではないが、彼の名が聞かれる事は二度となかった。

そして、邪界の騎士クリムタは邪神ドヴァーズへ反旗を翻ひるがえし、邪神との壮絶な戦いの果てに自身の剣の究極の奥義たる『想そう』神奏

シンソウ 次元断じげんだんの衝撃に吞まれ、次元の狭間に幽閉される事となった。

四界の騎士のうち、現在その存在が確認されているのはクイルドの眼前に立つ冥界の騎士シロ・クロだけという事になる。

とはいえ……。

未だ風の噂にその名を聞くことはあっても、彼女が千五百年前に剣帝ネイル・フー・トゥーンを同盟の証として邪界セヒウスに寄贈する為に訪れた時と全く同じ姿をしているなどとは、さすがにクイルドも予期してはいなかった。

全盛期というべき若きシロ・クロの姿を見て、クイルドの脳裏に浮かんだのは『騎士』と呼ばれる存在の圧倒的なまでの強さと、現実逃避的ともいえるべき非常識な、少しだけ甘く苦い思い出だった。

7

「クイルドは最後の最後に気を抜くのが悪い癖よね」

神話と呼ばれるほどの遙かなる昔、尻餅をついたままで見上げる若き騎士候補クイルドを見下ろしたままで、微笑みながら彼女は言った。

そこにある微笑は勝者が敗者に向ける勝ち誇った物ではなく、自らが打ち倒した者へのいたわりに満ちている。

木刀を用いての稽古けいこも早二時間、鋭い打ち込みの後で体勢を崩したクイルドへと美しいクリームタは手を差し伸べる。

彼女の美しく長い翡翠色ひすいの髪の毛が陽光を反射してキラキラと輝く。そして、その頬を伝い落ちた汗の雫もキラキラと輝いていた。

若きクイルドはその姿にほんの少し見とれた後で、差し出された右手にすぐることなく強情に自らの力で立ち上がる。

その後ですぐクリームタが苦笑いを浮かべるのを見て、また壁にか

けられたアテナイのヤツが自分には聞こえぬ声で「クイルドは弱くて話にならない」だのなんのと罵倒しているのだと気づいたクイルドは、尚更に意地を張って「ふん」と鼻を鳴らしてみせた。

戦う事は好きなくせに負ける事は嫌いなカクニマのヤツは、稽古という言葉を聞いただけでどこかに行ってしまった。

元々が騎士になるという事自体に興味が無いヤツだから、カクニマがどこで何をしようと気にもならないクイルドではあったが、カクニマがいなくなってくれた事でクリムタと二人きりで（口うるさい小姑も一緒ではあったが）いられる時間が出来るのは、感謝こそしないものの内心実は嬉しい事である。

表情こそ「まだ負けたわけじゃない」などと強がって見せてはいるが、思いを寄せるクリムタとの時間にクイルドの心は終始舞い上がりっぱなしであった。

そもそも奥手で口下手な彼は、好きな相手に対して意地を張ったり、強がってみせたりといういかにも子供っぽい表現しか出来なかったもので、高鳴る鼓動にぼんやりとしていると、打ち所でも悪かったのかとクリムタは余計に心配してみせた。

長い睫毛まつげの憂いある瞳でクイルドの顔をじつと見つめる。

彼女がふいに右の掌でクイルドの額ひたいをそつと触れると、クイルドは必要以上に慌てた。

「な、なんだよ」

振り払うように後ずさつたクイルドを見て、クリムタは心配そうな表情のまま口を開いた。

「だってクイルドったら、さっきから声を掛けてるのに返事しないんですもの」

耳まで赤らめたままで、クイルドはキョトンとしたままのクリムタに口を尖らせる。

「ちょよ、ちょつと考え事してただけだよ。……で、なんだよ、話つて」

同い年にも関わらず、クリムタは全てを包み込むような優しい表情を浮かべながらクイルドに尋ねた。

「ん……クイルドのね、クイルドの夢はなんですか？って、聞いたの」

悩む素振りもなく「そんなの騎士になる事に決まってるだろ」とクイルドは即答したが、実際彼は理解していた。

自分は騎士になれない、という事を。

クリムタの剣はまるで舞のようだ、と彼は思う。見とれてしまうほどに流麗なその剣術に一度としてクイルドが勝てた事は無かったし、ただの肩書きなどでなく騎士という存在に誇りを持つ彼女は過信もなく努力も怠ることはない。そんな彼女には。この先もおそらく適わないだろう。

しかし、諦めなどではなく、確信に満ちたそれはクイルドにとって、挫折というよりも希望であった。

クリムタが騎士となりメビウスの「剣」となるならば、自分は騎士を守る「盾」となる。いつか彼女が倒れる時が来るならば、彼女が倒れるその直前まで自分は生きられれば良い。

それがこの口下手な無骨者のささやかな願いであった。

「……それで、クリムタの夢はなんだ？」

答えた後で、自身の思いが悟られるのを隠すように、素っ気無いほどの早口でクイルドは尋ねる。

彼女は微笑んだ。だが、それはどこか憂いのある笑みだった。

「……私の夢。……私の夢は、争いのない世界で普通の暮らしが送れること。そして、その為に剣を振るえるということ」

まだ若かったクイルドは、クリムタが何を言わんとしているか良く理解する事が出来なかった。だから、ただ儂はかなげな彼女の顔を見つめる事しか出来なかった。

それから程なくして、クリムタは正式に騎士となった。

クリムタ、カクニマ、クイルドとメビウスは三人の騎士候補を要していたとはいえ、アテナイと対話する事が出来たのはクリムタだけだったから、当然と言えば当然の事であった。

そして、間もなくして神話の中で語られる争いが生じ、その後、ネメシスとの同盟が成った。

ようやく世界に平和が訪れると思っただのは何もメビウスの民だけではなかっただろう。そんな中で人界^{テラ}への侵攻を主神たるドヴァーズが宣言した時、今にして思えばクリムタが反旗を翻したのは当然といえる事だった。

だが、若きクイルドはそれを理解する事が出来なかった。

だから、ドヴァーズに戦いを挑み、失敗に終わった自らの技から生じた深き闇の如き次元の狭間に呑みこまれた時も、行動を起こすことも出来ずに呆然と見つめていただけだった。

理屈でなく、感情だけが正直だった。

自分でも気づかないうちにクイルドの両の瞳からは涙が止め処なく溢れていた。

闇に消える最後の瞬間、クリムタはクイルドへと微笑んだ。離れたクイルドには小さく唇を動かしたクリムタの声など聞こえる筈はなかった。

だが、確かに聞こえた。

「クイルド、自分を責めないで下さい」

クリムタの姿が消えてしまった後、ようやくにしてクイルドは絶望と混乱の中で吼えた。全てを劈^{つんぱ}く獣の咆哮を上げながら、クイルドの身体と心は地に沈んでいった。

なぜ、自分は主神ではなくクリムタの側に立っていなかったのか……。

他の誰でもない、ただ彼女だけを守る「盾」となろうと決めてい

たはずなのに……。

神も故郷も全てを捨て、クイルドはもがき続ける道を選んだ。

時間の概念のない次元の狭間にクリムタは今も幽閉されている。

全てを捨てた男は、ドヴァーズの打倒と、未だ見つからぬクリムタ開放の術の模索もくそくに、その人生を費やした。

ここに至るまでの千五百年は、彼の長きに亘りわた、今も終わる事のない贖罪ごくざいでしかないのだ。

8

クイルドの暗い表情の全てを理解したわけでもないが、シロ・ク口は嘲笑した。

「では、ここでもーんだーいーす 老いぼれたかつての騎士候補と、全盛期の現騎士。勝つのはどちらでしょうかあ？」

騎士としての自信に満ちたシロ・ク口の視線を覗いた時、クイルドは自分でも気づかぬ内に一步退いた。

その瞬間、それを見逃さなかったシロ・ク口が飛んだ。

腰まである長い白髪を揺らし、邪悪な笑みを浮かべたまま宙にふわりと舞うと左手を垂直に伸ばす。倒れ伏せたジンモザミの傍らに横たわる大刀は新たな主の求めに応じるように跳ぶと、ジンモザミが両手で握った大刀を左手だけで軽々とシロ・ク口は掴んだ。

そのまま振り下ろした大刀の一撃を防いだクイルドの仕込み杖に衝撃が走ったとき、間髪いれずに初撃と同じ一撃が衝撃となってクイルドを吹き飛ばした。

ダブル・パラディン
「騎聖双晶華」

吹き飛ばされたクイルドが見つめた先では、大刀を握るシロ・ク口の左とは別に右側にも綺羅と光を反射する水晶状の刃が浮かんで

いた。

「あたしの騎聖^{ダブル・パラディン}双晶華はあ、攻撃も二乗、防御も二乗、なおかつ攻撃と防御のリヤンメンもいけちゃうしい、まるで最強」

高らかに声を上げて笑ったシロ・クロの笑みを崩すべく、クイルドは左手をつき伸ばす。

「ギユガルド！」

放たれた光弾は先ほどのものより大きく、早さも桁^{けた}違いであったが、シロ・クロは難なくそれを右に浮かぶ水晶の刃で受け止めると弾き返した。

反射された光弾は元々クイルドの生命エネルギーで作り出されたものであり、クイルドには大したダメージはない。だが、爆風が止んだ時、すでにクイルドの眼前にはシロ・クロが迫っていた。

瞬間、クイルドは瞳を閉じる。

シロ・クロの剛剣はクイルドを真つ二つに切り裂いた。

9

いつからだろうか……？と、クイルドは自問した。

確かに、彼女は騎士としての最大の武器たる剣帝ネイル・フー・トウーンを持ちえてはいない。それは、かつて主たる冥界神デプルト^{メヒウス}が邪界との同盟に際して、冥界^{ネメシス}から邪界^{メヒウス}に寄贈された為だ。

しかし、それでもなお彼女は身体を分けるといふ秘術を用いて全盛期を維持し続けてきた。

彼女は若さを保ち、自分は老いた。

だが、ただ無駄に生きてきたわけではない。

新たな技を生み、研鑽^{けんさん}を重ねてきた。

彼女は強い。だが、全盛期を維持する事だけを望んだ彼女は、それから先を求めることが出来なくなっただのだ。

いつからだろうか……？

自分が騎士を超える存在へと至ったのは。

シロ・クロが切り裂いたクイルドは霧のようにして消えた。

「光宿・影」

シロ・クロの背後で声が聞こえる。

一瞬だけ戸惑ったシロ・クロが振り返った先で、クイルドは左掌を広げた。

「ギユガルド・レイ」

クイルドの左掌から光弾が雨のように降り注ぐ。

「こんなもの！！」

シロ・クロは先と同じく水晶で光弾を弾き返したが、それは雨のように降り注ぐ別の光弾に吞まれて消えた。やがて、反射の限界を超えたシロ・クロを光の雨が包んでいった。

勝敗は決した。

ギユガルドの雨が止んだ後、そこにシロ・クロは立っていた。だが、既に戦える状態にないことは一目瞭然であった。

身体のうちここに裂傷と火傷を負っていたが、体内へのダメージはそれ以上に深刻だろう。しかし、彼女は倒れなかった。そうしてしまえば楽であろうにそうしなかったのは、彼女の騎士としての誇り以外の何者でもなかった。

身体中の骨が悲鳴を上げる中、シロ・クロは大刀を引きずりながら、ただクイルドを目指して進んだ。

勝敗は決していた。だが、騎士としての誇りゆえ沈む事を自ら許さなかった冥界ネメシスの女騎士、彼女の姿にクイルドは、かつて自分が愛した強く美しい騎士クリムタを見た。

激しい戦いにクイルドの肉体も精神も限界ではあった。

だから、それはただの幻だったのかもしれない。

声が聞こえたような気がした。
優しいクリムタの声。

「クイルド、これ以上自分を責めないで下さい」

ヨロヨロと歩を進める女と、立ち尽くしたまま微動だに動けない老人。

二人の間の時間が止まった。

そして、自らの愛しい女の影が振るった刃を、クイルドは静かに受け入れた。

第六章 冥界神 テプルート

第六章 冥界神 テプルート

1

「別にテラマギナが人柱になる必要はないではないか」

千と五百年以上も昔、睨むようにして彼女はそう言った。

彼女が見つめる先で、これから天上界と人界を繋ぐ光の柱の頂き近くの小さな祠へと身を捧げる事となる人界神テラマギナは美しい金色の髪の毛を揺らし、微笑んだ。

「これは創生神が決めた事ですから、どのみち私達の内の誰かがその役目を果たさなければなりませんよ」

テラマギナが微笑んだ先で、彼女は口を尖らせて見せる。

「ならば、アンブロシアかドヴァーズがすればいい事であろう？彼ら、二人の兄達こそ天上界を戴きたいと願っていたのだらうが」

テラマギナは、むくれるような顔の彼女を困ったように見つめた。「今回の創生神の試験で、父たる創生神は人間をいたく気に入られた。だからこそ、父は天上界を人界に戴かせ、唯一の神界とすることにしたんです。一つの世界に二人の神は必要ないと彼が考えている以上、私は人柱となるしかないんですよ。二人の兄達は天上界を己が世界に戴きたいとは考えてはいても、自らが人柱となる事は望んでいないでしょう。なら、私がその役を負うのが一番争いのない方法だと思えますよ。……私がいなくとも二人の兄がいるのだから、これからも世界はなんら変わることなくやっていきますよ、デプルート」

銀髪の美しい女神はうんざりするような顔をする。

「彼らには自分の事しかないのだ。強欲なアンブロシアは全てを手

に入れたいと望んでいるし、狡猾なドヴァーズはただ自分の世界が在りさえすれば他の事になど興味も無い。あの二人と共に在ることに、私は別段意味も見出せないがな。……今回の試験とて、私はテラマギナ、お前とのゲームだと思えばこそ参加したのだ。私は、これから先も世界の事などどうでも良いから、お前とゲームの続きがしたいのだ」

神としての聡明さと尋常ならざる美しさを携えながらも、駄々をこねる子供のように語るデプルートを見てテラマギナはただ苦笑いを浮かべた。

「デプルート、貴女は神としてのしがらみに囚われず、刹那的な喜びや、他の神にとっては無価値でしかない芸術という名の愉しみ、そして何より遊び心を愛する人だ。確かに私にとっても、貴女と共に在った時間というのは、アンブロシアやドヴァーズとは得られない特別な物でした。私も貴女とのゲームは楽しかったですよ。……それでも、私は貴女とは違い、神のしがらみを捨てる事は出来ないのです」

テラマギナの話に、デプルートは納得する事もなく再び口を開こうとしたが、それを制するようにテラマギナは続けた。

「……貴女とのゲーム、申し訳ないですが、私の勝ち逃げですね」

そして、少しだけ寂しげな微笑だけを残し、彼は彼女の前から立ち去った。

2

陥落しつつあるメビウス軍の本営たるデルズモコの講堂の最上階の窓からカクニマは南の空にその姿を認めた。

人間のものとは比べ物にならない彼の視力は、その姿をはっきりと彼に伝えた。

長く美しい銀髪は細かく幾つもの光の糸となって空になびいていた。それは先端に進むに従い眩いエメラルドグリーン色へと変わり、最端には数多の銀の装飾が施されている。純白のドレスの背には孔雀のような形状の緑色に輝く幾枚もの羽が、彼女の全身を包むようにして舞っていた。

そして、眼前に広がる光の柱を目指して飛ぶ彼女の横顔は、一見してただの人ではないと理解できるほどの美しさであった。

光の柱に先導されるようにして、天へと昇っていく彼女の姿をカクニマは千と五百年前に見知っている。

呆然として見つめるカクニマは全てを悟った。

昨日やってきたネメシス人の一団、あの中に冥界神デブルトがいたのだ。

天上界掌握の為にネメシス人が動いている事をカクニマは理解していた。理解していればこそ、無駄足と高を括る彼は自分達の戦争には害のない彼らを放置していたわけである。だが、冥界神デブルト自らが動いているという事になれば、その意味も変わってくる。

デブルト程の存在が自ら動いているとなれば、ヤツは天上界を使用するの目的と、その目的を成就する術を得ていることになる。

「迂闊じゃった……」

カクニマは苦々しく呟いた。

この戦争において、彼は悉く、計算を違えていた事を思い知らされていた。

それは剣帝ネイル・フリー・トゥーンと剣皇ポーニロアの継承者、アン・ミンツとシャルナアプ・ウーデルカという二人の騎士が戦線

に参入してきたという想定外の事だったり、人界の民が自身の予想に反して強力であったという、彼の思い違いであったりした。

特に後者のそれは、彼にとって致命的なミスである。

人間達の強さをまざまざと見せ付けられるカクニマがようやくその理由に気づいたのは、戦線が崩壊を極めた頃ほうかいの事であった。

「……奴らが強いのではない。……我々が弱いのだ」

カクニマは戦争が始まる遙か以前から『その時』に備えて、各界の民の調査を余念なく進めてきた。勿論、人界の民たる人間とて例外ではない。

メビウス軍の現最高責任者たるカクニマは自身が満足できるまで、人間のデータは数限りなく取っていた。そして、幾度にもわたる計算式の結果、自分達メビウス人が人間など遅れを取ることは間違っても無いと知ると、その度にカクニマは薄ら笑ったものである。しかし、彼はそこに唯一の間違いを犯した。

自分達メビウス人のデータを取っていなかったのである。

それが全ての敗因だった。

「……主神ドヴァーズ亡き後、我らの力は急速に弱まりつつあったのだ」

気づいた時には全てが遅かった。

大口を叩いたくせに、戦争に参加したかも分からないうちに消えてしまったニユクス人。同胞の屍の山を築きながら、最早このメビウス軍本営の最上階へと近づきつつある人界テラの民。そして、この戦争お裏で自分達の計画を成就させようとするネメシス人。

三界の全ての民が、大敗を喫したカクニマを、そして自分達メビウス人をこけにしているような気がした。

そのどれに、復讐すべき最後の―撃を振るうべきか決断を下すのに、カクニマは些少な時間しか要しなかった。

彼は、主神より賜った小箱の封を解き、その蓋を開いた。

蓋の隙間からこぼれる様にして辺りを赤い光が包む。

完全に蓋が開かれると、中から現れたのは怪しい色を灯すルビーのような赤き鉱石。

それは、カクニマの手を離れると南の空を目指して一瞬の内に飛び去った。

3

「……束の間の安らぎを自ら得ようとはの、ワシも老いたものじゃ」
どうと大の字に倒れたままで、クイルドは呟いた。

クリムタの声を聞いた気がした。

その声に応じるようにして、シロ・クロの一太刀を避ける事もなく受けたクイルドだったが、一撃の元、彼が絶命する事はなかった。それはただ単に、剣を振るったシロ・クロの方も立っているのがやっとの状態で、全力で剣を振るえなかったという事ではなかったが、千五百年以上もの間贖罪を重ねてきたせいで、ある種の陶酔感に浸る老人は「クリムタがまだ許してくれないのだ」とひねくれた受け止め方をする。

だが、そのあとすぐで口うるさい小姑アテナイが「このDMの変態ジジイが」と呟いた気がして、小さく首を振った。

クリムタはとっくの昔に許している。いや、そもそも始めからクイルドを責めてなどいないと、彼は知っていた。だから、狂信的にクリムタの開放にその人生を捧げてきた彼を思えば、尚更にクリムタは自分を責めるかもしれない。

だが、そうと思っても尚、クイルドは自身の生き方を変える事は出来なかった。

「男とは馬鹿な生き物ゆえな……」

誰にといってもなしに、そう言っただけでクイルドは笑った。

一刀を振り下ろした後、ヨロヨロとふらついたシロ・クロはうなだれたまま、ブツブツと独り言を言っていたが、ようやく体勢を立て直すと再びクイルドの元へと歩き始める。

その光景を眺めていたクイルドだったが、内心では「どうせなら、さっきの一撃で終わらせてくれてた方が、散り様としては良かったわい」という余裕すら持ち合わせていた。

シロ・クロが先ほど放った一撃はクイルドを絶命させるほどのものではなかったが、致命傷には達しない。

「どつちにしろ、もう避ける力も残つたらんけどの」
呟きながら、やんわりとクイルドは覚悟を決めた。

シロ・クロが振り上げた大剣の刃をぼんやりとクイルドは眺めた。その時だった。

何者かが近づきつつある事にクイルドは気づいた。僅かの遅れの後、シロ・クロもその方角を見た。

金色の光を纏い、北の方角から現れた馴染みのある高速移動。

(…浮身……という事は)

「……ミカトン・ケイル……か？」

一瞬の内に、クイルドとシロ・クロの間に割って入った光輝く金色の髪をなびかせ、全ての剣 ユピテル を携えし青年。

その姿を見た瞬間、クイルドが口を開く。

「ミカ……」

同時にシロ・クロは力尽きかけた者とは思えぬ程の剛剣を凧いだ。だが、シロ・クロの剛剣が届くより遙かに速く、ミカトン・ケイルの神速の一太刀は一刀の元にシロ・クロを切り伏せた。

深々と刻まれた払い上げの傷口から血飛沫ちしぶきを上げながら崩れ落ちるシロ・クロの脇でクイルドはミカトン・ケイルを見上げたが、ミカトン・ケイルはクイルドを見るでもなく光の柱を目指して飛んだ。浮身を応用して、光の柱と並行するように天目指して飛んでいくミカトン・ケイルをクイルドはただ呆然と見つめていた。

(冥界人ネメシスとはいえ、女性を何の躊躇ためらいもなく切り殺せるなど……)
(まばた) きも出来ないままで、力なくクイルドは呟いた。

「……あれは、一体……誰なのじゃ……？」

4

冷たくなったメア・リサを抱き上げたままで、プラクル・ムシカは木漏れ日も次第に薄くなりつつある森を歩いていった。

そこは数時間前にネメシス人達が高貴なる古種メナス・セレットの集落を目指して進んだ道と同じであったが、プラクルに意図はない。

メア・リサを失った彼はほとんど放心状態で、ただ前へ、前へと歩んでいただけであった。

戦線からどんどんと離れつつある今の彼にとって、メア・リサの最後の言葉も安らぎにもならなかったし、アン・ミンツの最後の言葉、つまりは復讐かてを糧かてに生きていこうという気すら思い浮かばなかった。

メア・リサを失った彼に残ったのは、絶望、ただそれだけである。

彼にとって、騎士としての人生は完全に断たれたかに見えた。

メア・リサの亡骸なきがらと、自身が踏みしめる湿った腐葉土ふようど以外には見るべきものもない彼が、ふと顔を見上げたのは鬱蒼うつそうと茂る木々の隙間きまが開け、少しだけ傾きつつある陽光が覗いたからであった。

プラクルが見上げた時、南の空には一本の光の柱が伸びていた。

黄金色に輝き、天へと揺らぐ事なく真っ直ぐに伸びるその姿は、正に神の奇跡と呼ぶに相応しい。

ぼんやりとそれを眺めていた彼が、傍らに立つ人影に気づいたのはそれから程なくしての事だった。

黒というには少し薄い髪色の、背の高い、しかしそれに見合わな
い痩せた体躯の少年。旅を続ける者特有の薄汚れる機能性に優れた
衣類とリュックサックを背負った彼もまた、

南の空に映る光の柱を微動だにしないままで見つめていた。

今となつては何にも興味も見出せないプラクルではあったが、その少年が自分と同郷の者、つまりニユクス人である事は一見して分かった。

だからと言って、プラクルが彼に対して声を掛けるといような事もない。

少年から目を逸らすようにプラクルが再び南の空に映る光の柱を見上げた時、デルズモコの位置する北の方角から、燃え盛るマグマのような赤が一筋の流れ星となって光の柱を指すのが映った。

5

孔雀の如き羽を羽ばたかせた後、冥界神デプルートは降り立った。
天上界^{ハル}と人界^{テラ}とを結ぶ光の柱、その正に天上界^{ハル}へと至る直前の光の柱の最上部こそがデプルートの第一にして、真の目的地であった。
一本の歪み^{ゆが}一つ無い光の柱は、その部分だけが少しだけ膨れた形状をしており、その中は空洞になっていた。

重々しい造りの扉を、神たる者の力で容易く破壊するとデプルートはその中へと進んだ。

闇のような小さな空洞に、千五百年ぶりに光が注ぐ。

そこは天上界^{ハル}を人界^{テラ}が戴いたあの日、人界神テラマギナが人柱と

なつた祠ウツヒであつた。

今から千五百年もの昔、冥界神デプルートにとっては、己が兄たち魔界神アンブロシアや邪界神ドヴァーズのように、天上界をどうにかしようという野心はなかつた。

デプルートにとっては、そんな物はなんの価値も無い事である。神の眷属として誕生した兄弟たち、しかし、野心や欲に左右される兄達はおよそ神らしくない、と彼女は思っていた。

神ならば神らしく、ただ美しく、その為に非常識に、理不尽に、そして刹那的せつなにあるべきだ。それこそが、いくなれば彼女の神としての理念であつた。

だから、本来ならば二人の兄のように「父たる創生神を滅ぼし、その後誰が天上界ハルの所有者となるかを決めれば良い」という考え自体どうでも良い事ではあつた。

しかし、デプルートは結局二人の兄の企みに同調した。
テラマギナの開放、ただそれだけの理由で……。

快樂主義の極みともいふべき、デプルートにとってテラマギナは特別な存在ではあつたが、それは家族、兄弟、恋人に向けられる特別とは意味合いが少し違う。デプルートの嗜好ウツシを理解でき、唯一そのルールの下彼女の好敵手となりえたのは兄弟の中でもテラマギナ唯一人であつたから、その特別は「遊び相手」という意味での特別でしかなかったが、彼女にとってはそれが全てだった。

千五百年前は人界の騎士ヒエラルキの出現によって、失敗したが今ようやく彼女の悲願は成就する。あの時ヒエラルキによって全ての剣 ユピテル は持ち去られてしまつたが「何という事もない」と彼女は呟く。

天上界ハルの神殿の最奥に存在する創生神の神具ハルモニア、神の箱庭 パンドラ の使用こそが二人の兄の天上界ハル掌握の最大の目的ではあつたが、

それには全ての剣 ユピテル がどうしても必要であったが、自身の二つの目的に天上界^{ハル}をどうにかしようというものは含まれてはいない。

彼女は静かに冷笑を浮かべた。

益のある物にしか興味の無いアンブロシアや、利己主義なドヴァーズにとって「あの男」の存在など忘れられてしまった事だろう。しかし、自分やテラマギナは「あの男」の事を忘れてはいない。

世界を赤い砂で覆い滅ぼそうとする「あの男」は、おそらく天上^ハ界の神殿にいるはずだ。

テラマギナを開放し、「あの男」を倒す。その二つの目的を果たした時、世界が元通りになるといふ事はないだろうが、それでも世界は世界として残るだろう。

その世界で、永遠に終わることなく自分とテラマギナのゲームは続くのだ。

祠の中心に設置された台座の上には、胡坐^{あぐら}をかくようにして座る人影があった。

「テラマギナ、昼寝の時間は終わりぞ」

薄紫の布を被るその人影にデプルートは声を掛けた。その声は笛の音のように美しかったが、興奮を隠しきれない子供のように少しだけ上ずっていた。

だが、デプルートの期待に反して、テラマギナが返事をする事はなかった。

「テラマギナ、創生神は遙か昔に死んだ。もう人柱を続ける必要はないのだぞ」

デプルートは諭^{なぐさ}すように話し、そして薄紫の布を被るテラマギナの後ろへと近づく。そして、その右肩に手を置いた。

テラマギナは返事をする事も振り返ることもなかった。ただ、デ

プルートの触れた右肩が音もなく崩れ、砂と化して地面に降り注いだ。

「馬鹿な……」

デプルートは呻くように呟くと、薄紫の布を剥ぎ取った。

その瞬間、テラマギナの面影を残したミイラは、布を剥ぎ取られわずかの衝撃に耐えられなかったように一瞬の内に崩れ、千五百年ぶりの新鮮な空気と交じり合うようにしてその全身は砂と化した。

神たる存在。つまり、神たる魂を持った存在が例え食べ物も摂らなかつたとして、ただか千五百年という時間の中、命が絶え、その身体が風化して神としての名残も残さない事など断じて在りえない事であった。

啞然とするデプルートは今や砂の塊となったテラマギナを見つめた。

崩れ落ちる瞬間、確かにその姿はテラマギナであった。

(……ならば)

デプルートはようやく理解した。

小さな唇は震えるように動いたが、その声には驚きこそあれ絶望はない。

「魂を交換したのか……肉体は神たるテラマギナであっても、魂は別人のもの……ならば、おそらくは……これは……ヒエラルキ？ ……」

……という事は、あの時のヒエラルキこそが……テラマギナ」
俯くとデプルートは震えだす。

「ゲームはまた私の負けだな、テラマギナ」

震えはやがて全身を包むと、彼女は声を上げて、千五百年ぶりに心の底から笑った。

小さな祠の中に響いた笑い声は、それから程なくしてピタリと止んだ。

神たる彼女ですら、何が起きたのか一瞬の内に理解することは出来なかった。

弾かれるようにして浮いた後で、胸に穴を開けた彼女はゆっくりと崩れ落ちる。

彼女が地に落ちる寸前見つめた先で、彼女に死を刻んだ赤い鉱石が弾丸となり空へと消えて行くのが映った。

6

人界軍^{テラ}の千五百の兵と邪界軍^{メヒウス}の千の兵が激突したデルズモコの戦いは、ついに決着をみた。

固く閉ざされた邪界軍^{メヒウス}の本営たるデルズモコの講堂の門を突破した先陣を切るシールス率いる人界^{テラ}の精鋭部隊を邪界軍に止める術は無かった。

それはおそらく、邪界軍の総指揮官たるカクニマが籠城戦^{ウツロウ}を選択した瞬間に決まっていた事だったのかもしれない。

四界一、強靱^{ツヨク}な肉体を持つとされる邪界の民にとって、戦いとは命を燃やし苛烈に行うものである。そんな彼らが守りを優先とする戦いに慣れていなかったのは勿論だったが、それ以上にある種の「戦闘種族」としての誇りを傷つけられたことは取り返しのつかない打撃であった。

籠城戦という恥ずべき行為に意気消沈^{いきしょうちん}する邪界軍は、門を突破し続々と攻め入ってくる人界軍^{テラ}に対して、一応は反撃していたが大した成果を上げる事なくそのほとんどが討ち死にしていた。

シールスが講堂の二階へと至った時、邪界軍の兵はもはや数える程度になっていた。しかし、小隊というべき一団を率いて待ち構

えていた老兵は「降伏の意思はない」と言うように、怯むことなくシィウルスの顔を見据えた。

その老兵を見た瞬間、シィウルスはこの男が邪界軍の総指揮官である事を理解する。

老兵は老いて血色の悪い顔と、肥満気味の重そうな身体をしてはいたが、瞳の奥に映るそれは歴戦の勇士特有のものであった。

スラリと刀を鞘さやから抜くと老兵は名乗りを挙げた。

「メビウス軍、総指揮官のカクニマだ。せめて冥土の土産にお主の首、頂いてゆくぞ」

老兵の名乗りに応じるようにシィウルスもまた名乗りを挙げた。

「人界軍、総大将シィウルス。貴方の首をとり、この戦争を終わらせてもらう」

カクニマは「くくく」と笑う。そして、最後の戦いに望む自軍を鼓舞するように手にした剣を高々と掲げた。

「かかれっ!!」
カクニマの合図と共に、邪界軍は唸り声を上げて、人界軍へと襲い掛かった。

邪界軍の最後の反撃は、今までの戦いぶりが嘘のように苛烈を極めた。

人界軍はその気迫に圧され、数える程度の死に物狂いの兵が振るう刃に今回初めて、一方的に被害を出した。その被害は百を越える数になったが、邪界軍の奮闘もそこまでである。

最初からそれ程の戦力を見せられていれば、この戦いはどちらに転ぶか分からなかった。だが、時は既に遅かった。

苛烈な戦闘ぶりを見せつつも、結局は歴然たる数の差に邪界軍の兵は一人、また一人と倒されていった。

剣鬼と化したカクニマもまた人界軍の兵を十人以上切り伏せるといふ勇猛さを見せ付けたが、四方から剣を突きつけられた後、最後はシィウルス自らの手でその首を切り落とされた。

カクニマの死で戦争は終結した。

しかし、まだ、講堂の外では小さな戦いが行われているだろう。それを止める為に、戦争の終結を報せる為、シールスは自身も傷ついた身でありながら、講堂の屋上を目指した。

講堂の屋上へ出ると、心地よい風がシールスの身を包んだ。

その中で、シールスは剣を高々と掲げる。そして、良く通る声でデルズモコの地に告げた。

「戦争は終結した！我々、人界^{テラ}の勝利だ！！ 人界軍も邪界軍^{メヒウス}ももう無益な争いは止めるのだ！！」

瞬間、デルズモコに沈黙が訪れる。

そして、すぐに歓喜の音が響き始めた。

人々は剣を高く掲げ「シールス！」と何度も何度も叫んだ。その群衆の中で、残る邪界軍の兵達は膝を付くようにしてうな垂れていった。

場を包む「シールス！」の大歓声をシールスは聞いていた。

風が心地よかった。

だが、それ以上に人々が自分を英雄として称^{たた}えるのが気持ち良かった。

人々は自分の家族のように愛おしく、彼らの住むこの世界もまた愛しかった。

それに浸るように彼は空を見上げた。

空は青く美しい。

この空もまた、自分を称えてくれているような気がした。

「シールス！」の歓声に応える様に、彼は再び地上を見下ろした。

しかし、彼が見下ろした時、世界は既に彼の知る世界ではなくなっていた。

どこから現れたとも知れぬ紅き砂が次々と、人界ヒトノミヤの民も邪界の民も関係なく呑み込んでいく。

歓声はやがて悲鳴へと変わった。

自分を称える声が、自分に助けを求める声となっていくのを聞きながら、シールウスはただ呆然と見つめる事しか出来なかった。

あつという間にデルズモコの地を呑みこんだ紅砂コウサは、間もなく講堂をも呑みこみ、そしてシールウスをも呑みこんだ。

8

アシエロンは長い、長い旅を続けていた。

いつ終わるとも知れぬその旅の最終的な目的は、あるかないかも知れない「自身の探し物」を見つけること。

当初はそれが何であるか知っていたのかも知れないし、最初から知らなかったのかも知れない。長い年月の果てに忘れてしまったという事であるならば、本当は忘れても良いような大事ものではなかったのかもしれない。

それでも彼が旅を止める事はなかった。途中で投げ出してしまったことなど数え切れないが、暫く経つとこうしてはいられないという焦燥感ウツクシにいてもたってもいられなくなるのだ。

そんなわけで、彼はイタヤの森の小屋で少しの間、骨を休めると再び旅に出る事に決めた。

そうは言っても別段目的地のある旅でもない以上、こうしてまだイタヤの森からさほど離れてもいない森林を徘徊していたというわけである。

棒が転んだ先にも進もうか、そんな適当な理由で棒を拾っていた矢先、彼は木々の間から南の空に光の柱が伸びているのを見留めた。

それが何なのかを理解する事は出来なかったアシエロンだったが、それに対して並々ならぬ思い入れが自身にあるのは十分に理解できた。

彼は微動だにしないままに、それを見つめ続けていた。

それは、彼の同郷たるニユクス人、メア・リサの亡骸を抱えるプラクル・ムシカがそこに現れた時も変わる事はなかった。

彼らが見つめる先で、赤い流星が飛んで行った。

それは轟音をとどろかせ、光の柱を打ち抜いた後、遠い空へと消えていったかのように見えた。だが、それは宙でカーブを描くとアシエロンとプラクルが見上げる森目指して、落ちてきた。

紅蓮の光を灯しながら落ちてくるそれは、隕石そのものであった。掌大てのひらのそれは逃げる間も与えないほどの速度で、落ちるとプラクルの見ている前でアシエロンの額ひたいへと突き刺さった。

「ぐうああああわああああああああああああああああああああああああああああああ……」

苦しむようにアシエロンは地面を転がりまわる。

地獄で悶えるような形相のアシエロンを見ながら、プラクルはメア・リサの亡骸を強く握り締めた。それはメア・リサの亡骸を必死に守るという意味表示ではあったが、すでにべそをかきながらのプラクルのそれは、子供が宝物を取り上げられまいと必死になっっているような頼りない姿でしかない

時間にしてはほんのわずか。アシエロンの叫び声がピタリとやんだ。

死んでしまったのか、と恐る恐るプラクルが覗き見た先で、アシエロンはすでにアシエロンの姿ではなかった。

獅子のように全身を覆った体毛は紅蓮で、額と背中にはうねる様にして伸び先端が鋭利に尖った角が何本も突き出ていた。

鋼のような身体を持つその男は、精悍せいかんな容貌の元、静かに瞳を開

く。久しぶりに陽光を浴びたかのように「ぐ、う」と小さく唸った後で、大きな掌で瞳を覆った。

「ここは……一体何がどうなっているのだ……?」

慣れるようにようやく男が掌を瞳から離れた時、目の前には死んだ女を抱いた年端も行かぬ子供が傳かすっていた。

「おかえりなさいませ、我らが主神、アンブロシア様!」

子供は声を張り上げるようにして叫んだ。

神たるアンブロシアは一瞬の内に、この時代までの記憶を思い出した。

千五百年前、創生神を滅ぼしたまでは良かった。しかし、その後すぐに全ての剣を用いた人界テラの騎士ヒエラルキによって自分は二つに切り裂かれたのだ。

滅びることはなかった。だが、二つに分けられたせいで、本来の力も記憶も失っていたのだ。

自分がいない間もドヴァーズやデプルートはその力を存分に駆使し、神として君臨し続けていたであろう、そう思うとアンブロシアは隠すこともなく怒りをあらわにする。

「おのれ……」

呟いた後で、アンブロシアは眼前の子供を見つめた。

「お前がワシを復活させたのか? ……名はなんという?」

子供は滅相もないというように、大仰かぶりに頭を振った。

「……いえ、僕の方ではないんですが……あの、名前は、プラクル……」

……テュポン・ムシカの子、プラクル・ムシカです」

テュポンはかつてアンブロシアを守れず、騎士としての勤ことめを果たす事が出来なかった。

だから、その名を告げれば自分は殺されるかもしれない。しかし、ミア・リサを失い生きる目的も失った自分が、主神の手で殺される

のならばそれもまた良いだろうという思いの元、プラクルは戸惑いながらも、はっきりと伝えた。

その後すぐ、アンブロシアが「テュポンはどうした？」と尋ねたので、これもはっきりと「ヒエラルキによって殺されました」と伝える。

アンブロシアは少しだけ悩むような素振りを見せた後で、事も無げに口を開いた。

「そうか、ならば今はお前がワシの騎士だな。どういうわけかは知らんが、創生神亡き後も天上界への道は開いたままのようだ。ならば、今こそワシが手に入れてくれるわ。プラクル、ワシと共に天上界を攻め落とすぞ」

プラクルは正に天にも昇るような気持ちだった。

千五百年間、主神を守れなかった一族として蔑まれてきた自分が、主神自らに『騎士』の称号を与えられたのだ。

「はい!!!」

プラクルはアンブロシアの命令に応じるように声を張り上げたが、その後すぐでメア・リサの亡骸をせめて埋葬させなければと思いつくと、恐る恐る主神に意見した。

やはり、主神アンブロシアは「そんな事は後で良い」と言い放った。

そこを何とか、とプラクルが再度口を開きかけた時、それは起きた。

「アンブロシア様、後ろ!!!」

プラクルが叫んだ瞬間、アンブロシアは振り返った。

木々の葉と葉の間から溢れるようにして湧き出たそれは、最初紅色の虫の群れのように見えた。

すかさずアンブロシアの両手に光が灯ると紅蓮の火球が放たれたが、それは燃える事も焼ける事もなく紅蓮の火球自体を喰い尽くし

た。

再び、アンブロシアの両手には紅蓮の光が灯ったが、それが発せられる前に紅砂コウサはアンブロシアとプラクル・ムシカ、そしてメアリサの遺骸を呑みこんだ。

9

赤い弾丸に貫かれ、崩れ落ちた瞬間、デプルートは自身に何が起こったのかを理解した。

自分の身体を通過したその物体は、彼女の良く知る存在そのものであった。

「……ドヴァーズめ、あの混乱の中、創生神の毛髪だけでなく、切り裂かれたアンブロシアの半身まで手に入れていたとは……したたかなヤツめ……」

デプルートは、自身を貫いた赤い弾丸と化した鉱石が消えていった空を見つめながら呟いた。

光の柱の祠を貫き、突如として襲ったその一撃にデプルートは全くの無防備であった。

故に神の一撃は、神を絶命させるに値する一撃となった。

千五百年前、ヒエラルキに切り裂かれて後、二つの燃え盛る炎の塊となつて人界テラの西と東の空に消えたはずのアンブロシアの身体。

デプルートはそんな物に興味すら持ち得なかったが、ドヴァーズは違つたらしい。

ドヴァーズ自らの手で封印され、今日に至つたそれは、言わば邪ミ界軍ウスの切り札であった。

その封印を解いたのはカクニマであったが、カクニマにすれば恨みを晴らすべき相手は何も冥界人ネメシスには限らない。だが、カクニマはその一撃を見舞う相手を冥界の神デプルートに決めた。

それに理由があつたのか、なかつたのか。つまりは必然だつたのか、偶然だつたのか、今となつては分からない事ではあつたが「……どちらにせよ……」とデプルートは一人呟いた。

「……これで、世界は滅びた……」

デプルートの価値は他の神々とは別のところにある。

だから、別に死ぬという事にそれ程のこだわりも恐れも抱いてはいなかつた。

テラマギナと行ってきたゲームでは、勝つことも負ける事もあつたから、今回自身が死にいく事になつた今回の計画ですら、彼女にとってはゲームに負けたという程度の事に過ぎない。しかし、それですらも、過程にこだわる彼女にすれば勝敗もまた些細ささいという事になる。

美学というものに固執する彼女曰く、滅びもまた美学なのである。

だが。

「……あの男が勝者となるのは気に入らぬがな」

神としての生を終えようとするデプルートは、この祠の上にそびえる天上界ハルの神殿にいるであろう、四界滅亡の為に紅砂コウサを広げた「あの男」の事を思った。

そして、見えるはずもない天上界ハルの神殿のある側、祠の天井部へと視線を移す。

その時、デプルートが破壊した祠の入り口を通過し天上界ハルを目指す、金色の髪カミの青年と目があつた。

時間にすればほんの一瞬、金色の髪カミの青年の憂うれいを帯びた瞳をデプルートは見た。

青年の姿が消えた後、満面の笑みを浮かべたままで、デプルートは滅した。

剣帝ネイル・フリー・トゥーンを用いての聖　セイ　ヒュドリポス
ニールに跨り光の柱を目指すプウと俺のうち、最初にその姿に気づ
いたのは俺の方だった。

「ジジイ、大丈夫か！　何があつたんだ！！」

ヒュドリポスニールから飛び降りると、俺はクイルドの元へと駆
け寄る。

ヒュドリポスニールの顕現を解除したプウもすぐに駆けつけた。

クイルドは最初、言葉を選ぶように押し黙っていたが、ようやく
にして呻くように呟いた。

「……ミカトンが光の柱を昇っていった。お前たちもすぐに後を追
うのじゃ」

ミカトンの無事に安堵する反面、俺は内心で違和感を覚えていた。
(ジジイがこんな状態だったのに、なんでミカトンのやつ放ってい
きやがったんだ？)

俺と同じ違和感をプウも覚えたはずだ。だが、現実的な思考の持
ち主たるプウは自分が今すぐにすべき行動を起こした。

「クイルド、まず貴方の傷口を塞ぐのが先です。私の力では傷を癒
すことは出来ませんが、傷口に膜を張り一時的に出血を止めます」

プウはすぐにクイルドの傷口に右手を置いたが、クイルドはその
手を払った。

「ワシとて死に際くらいは分かるものじゃ。ワシはもう助からん。
そんなことで時間を浪費している暇はないんじゃ。何かが起こって
おる。ミカトンが向かうより先に冥界神デプルトも天上界を目指
して天に消えた。だが、きつとそれだけではない。何か得体の知れ
ぬ何かが起こり始めているんじゃ。何が起こっているにせよ、ミカ
トン一人では危険すぎる事くらいお前らにも分かるじゃろう。急げ、

急ぐんじゃ！」

クイルドは血を吐きながら、そう告げた。

「だけど……」

俺が呟くのを制するように、プウが頷く。

それを見て安堵するようにクイルドが微笑んだ。

プウが 聖 セイ ヒュドリポスニールを再び告げた。

氷で出来た獣に飛び乗ると「ジジイ、俺らが戻るまで死ぬんじゃねえぞ！」と俺は声を上げたが、クイルドは早く行けというように小さく手を振るだけだった。

ヒュドリポスニールは四枚の羽を広げ、六本の足で光の柱を蹴る。プウの後ろでヒュドリポスニールの背にしがみつくと俺は、ぐんぐんと地面から離れる感覚と風きり音を感じながら「ジジイ、大丈夫だよな？」と呟いた。

風きり音のせいで、俺の言葉が聞き取れなかったのだろう。プウは小さく後ろを振り返ったが、俺に聞き返すようなことはしなかった。ただ、プウの碧眼の瞳には見る間に絶望の色が浮かんでいた。最初、それをクイルドのことを表しているのかと思った俺は打ちひしがれた。

しかし、振り返ったままのプウは、未だ同じ瞳で下界を眺めていた。

プウが見ている光景を見る為、俺もまた下界へと振り返る。

「……なんだ……一体、これは何なんだ……」

人界^{テラ}は、俺とプウが旅の途中に世界の端で見た紅砂^{コウサ}で満ちていた。溢れるようにしてどこからともなく湧き出てきた紅砂^{コウサ}が人界^{テラ}全土を呑み込んでいく。

その絶望的な光景は、やがてクイルドがいる光の柱の麓^{ふもと}をも呑み

込んだ。

終章 金色の英雄 ミカトン・ケイル

終章 金色の英雄 ミカトン・ケイル

1

金色の髪をなびかせ、ミカトン・ケイルは天上界^{ハル}へと降り立つた。千五百年前と変わらぬ姿を保つ天上界^{ハル}は、白い大理石で出来た荘厳^{ごん}なる構えを持つ巨大な神殿とその周りを木々や湖、自然に満ち溢れている。

天上界^{ハル}という小さな球体はさながら、人界^{テラ}や邪界^{メヒウス}といった世界のミニチュア版ともいえるべき小さな星であった。

ひっそりと静まり返りながらも、邪悪な気配に支配されたその小さな星に辿りついたミカトン・ケイルは簡素な麻作りの衣類に白いマントを羽織っただけの姿で、散歩でもするような気軽さで天上界^{ハル}の大地を歩き始める。

彼の傍ら^{かたわ}で穏やかな風が流れ、湖の水面が揺れた。それはまるで、天上界^{ハル}が、神殿へと向かい歩き始めたミカトン・ケイルを優しく迎え入れるようだった。

神殿の姿がその双眸^{そうぼう}に映った時、ミカトン・ケイルは青々と生い茂るトネリコの木にもたれるようにして立つ男の姿に気づいた。

男は黒いターバンを被り、全身を黒い包帯で覆っていた。その上に羽織ったぼろきれのような黒いマントの下から短剣が覗く。

男は纏^{まと}った戦意を隠そうとはしなかったが、しかし、そこにミカトン・ケイルに向けての殺意はなかった。ただ、包帯の間から唯一見える両の瞳には冷笑だけが灯っていた。

「ヴェスタ様は神殿でお待ちです。どうぞ、先にお進みください」
男はミカトン・ケイルが一瞬立ち止まるのを見て、そう話すと先を促すように神殿へと右手で指し示した。

ミカトン・ケイルの右手は全ての剣 ユピテル の束を握っていたが、その手に込められた力を抜くと男から視線を移し、神殿へと向かって再び歩き始める。

ミカトン・ケイルの後ろ姿を見つめる男は、トネリコの木に背を預けたままで動く事もなかった。

ミカトン・ケイルが辿りついた時、神殿の門は開け放たれていた。どうやら、この主は自分を迎えてくれているらしい。神殿の主の思惑を理解したミカトン・ケイルは迷う事も立ち止まる事もなく、神殿の中へと歩を進める。

ミカトン・ケイルは間もなく神殿内の大広間へと辿りついた。

大広間には創生神だけが座る事を許された豪華な台座が設置されていたが、そこに座っていたのは千五百年前に死んだ創生神ではなく、一人の若い男だった。

黄金の装飾の施された黒いローブを纏い、不揃いに切られた濃い紫色の髪と深遠のような黒い瞳を持つ男はミカトン・ケイルよりも若干年長のようであった。

男は切れ長の瞳を細めると満足そうに笑う。そして、口を開いた。

「やあ、随分と久しぶりだね。でも、そろそろ神話の続きを終わりにしようじゃないか。ミカトン・ケイル……いや、人界神テラマギナよ」

テラマギナと呼ばれたミカトン・ケイルは全ての剣 ユピテル を鞘やひから抜くとゆっくりと構えた。

「やはり、お前の仕業だったか。忘れられし神、ヴェスタよ」

人界テラの全ての大地は、紅砂コウサによって覆われた。

まるで人の生命を吸い尽くすように群がる紅い羽虫のような紅砂コウサに世界が包まれると人々は一瞬で死に絶えると彼らの肉体も魂もまた、紅い羽虫の一部となつて人の生に焦がれるように、新たな仲間を増やす為に世界中に広がっていった。

全ての常識も理もその紅き砂の前には、全くの無意味で猛毒にも似たその凶悪な負の連鎖を止める術はなかった。

人界テラと天上界ハルを結ぶ光の柱の袂にいたクイルドにとつてもそれは例外ではなかったが、彼はまだ生きていた。

アン・ミンツとシャルナブ・ウーデルカを送り出した後、クイルドの周りに満ちた紅砂コウサは彼の身体を呑みこんだはずだった。

「……これは、どういう事じゃ」

呟くクイルドの周囲を保護するようにして出現した金色の空気の膜に紅砂コウサは波のようにぶつかると弾けて砕けると粒子となつて宙に舞う。粒子は溶け合い波の塊となつて押し寄せたが、空気の膜は二度、三度と防いでいった。

クイルドの身を守るそれは、結界だった。

呆然としたクイルドが振り返ると、すぐ後ろに女が立っていた。

黒く長い髪と、長く尖った耳を持つその女はこの世の物とは思えぬ美貌の持ち主だった。

「あなたは一体、何者じゃ」

クイルドが呻くように呟くと、女は小さな唇を動かし答える。

「名前など特に持たぬ。……ただ、人間達は、深遠セント・クレアの聖域ツィ・エルンに住む魔女エルンと呼んでいるようだ」

クイルドは息を飲んだ。

深遠セント・クレアの聖域の遺跡にはつい先日もプウと二人で出かけて来たばかりだった。しかし、もはや伝説上の存在である魔女ツィ・エルンの生き残りがいようとは……。

「そ、それでなんであなたは、ワシを助けてくれるのじゃ？」

魔女ツイ・エルンは冷酷なまでに美しい微笑を浮かべた。

「助ける？……もうこの世界の滅びを止める手段はない。ゆえに誰も助からぬ。私はただつまらない時間稼ぎをしているに過ぎない。四界、全ての民は今日滅びる運命なのだ。それはそなたとて同じ。だが、最後にそなたは知る権利がある。ミカトン・ケイルを育ててくれたそなたには」

魔女ツイ・エルンの瞳に悲しい色が浮かんだ。クイルドは悲しく微笑む美しい魔女ツイ・エルンの顔を静かに見つめた。

「……かつて、人界神テラマギナは土くれから人間を創った。しかし、テラマギナは人間を創りだす以前に邪神や冥界神たちがしたように、わずかではあるが己が肉体を分け自らの眷属けんそくを創り出した。それが私達、魔女と呼ばれる一族や錬金術師と呼ばれるウーデルカ一族、高貴なる古種メナス・セレストと呼ばれる一族。ウーデルカ一族や高貴なる古種メナス・セレストたちは、己が一族の繁栄の為に人間と交わり、神の眷属としての力は薄れたが、私達魔女ツイ・エルンはある目的の為に人間と交わることなく、この千五百年人の目を逃れて暮らしてきた。私はその最後の一人……」

……
魔女ツイ・エルンは少しだけ遠くの空を眺める。そして、千五百年という長い年月にほんの一瞬想いを巡らせた後、再び口を開いた。

「強欲な魔界神や狡猾な邪界神が創生神に反旗を翻ひるがえす事をテラマギナは気づいていた。だが、それ以上に彼らすら忘れてしまった存在の脅威きょういをテラマギナは恐れていた。神話には神の子の名前は魔界神アンブロシア、邪神ドヴァーズ、冥界神デプルト、人界神テラマギナの四神が刻まれている。だが、神の子はもう一人いたのだ。……創生神は唯一魂を生み出すことが出来る神だった。しかし、神の箱庭 パンドラ を用いてはいても魂を作り出すという作業は手間の掛かる事だったらしい。彼は肉体が滅びて後、魂を再利用する術を作り出した。天上界ハルの恒星として神の威光を示す為に四界を巡らせる太陽と対を成すようにして新たに月を作った。月こそは肉体が滅び、彷徨さまよう魂を回収する為の門なのだ。そして、その魂の門の管

理者として創りだされた存在こそが、神話に登場する事もなく今や誰からも忘れられた神、ヴェスタなのだ」

ツィ・エルン
魔女は結界の外で蠢く紅砂を指した。

「ヴェスタは月にある魂の門を閉じた。自らでは肉体を得ることなど出来ないにもかかわらず、回収されず彷徨う魂はやがて肉体を求めるといふ欲に支配され、人に群がるのだ。完全に人としての意識を失い、ただ欲望の赴くままに彷徨うかつての魂の成れの果て、ウロと呼ばれるその群れは、人の肉体という小さな器に押し寄せると、器の先住者ともいふべき魂を追い出そうと攻撃を開始する。その小さな器に入ろうと我先に何十、何百のウロが駆け込むのだ。小さな器は全てを受け入れることなど出来るはずもない。その行為は人の生命を吸い尽くし、肉体を崩壊させることにしかならないのだ。器から追い出された魂は、新たなウロとなり、滅びた肉体は欲に支配されその魂を運ぶ為だけのナガレとなる。それが、紅砂の正体だ」
ツィ・エルン
魔女の話の後では、紅砂の群れは自らの肉体を早く明け渡せと言っている様に映る。

クイルドは、かつては友のものだったのかも知れない魂の成れの果てを一人ぼんやりと見つめた。

3

天上界へとあつという間に駆け上がった後、飛び降りた俺とプウの後ろでプウの聖セイ、氷獣ヒュドリポスニールは氷片となり砕けると蒸気と化して消えていった。

大地に降り立った瞬間、俺は剣皇ポーニロアを鞘から抜き、プウもまた背に掛けていた大剣、剣帝ネイル・フリー・トゥーンを手にした。

小さな星の先には白く荘厳な造りの神殿が映る。
それを認めた後で、俺が顔を見るとプウが頷いた。

(ミカトンはあそこだ)

二人は共に同じ考えである事を察すると神殿目指して駆け出そうとする。しかし、突然に掛けられた声にその歩を進める事が出来なかった。

「確かに、お前らの尋ね人はあの神殿にいるがよ、お前らがあそこ
に辿りつく事は、まずないぜ。赤の剣士、赤毛のアンに青の錬金術
師、ウーデルカー族のシャルナアプ」

トネリコの木に寄りかかる包帯尽くめのその男はそう言って、く
つくつと笑った。

「何者だよ、てめーはよ」

明らかに自分達の邪魔をする為に現れた男に、俺は苛立つように
尋ねた。

「……俺の名はタスラム。我が主神ヴェスタ様に仕えし、騎士」

俺は手にした剣皇ポーニロアの刃を右肩に乗せながらプウの顔を
見る。

「ヴェスタだあ？ そんな神、聞いたことねえっての、なあ？」

俺の問いかけにすぐ頷いたプウを見て、どうやら俺の無知のせい
ではないらしい事を確認した後で俺は自信たっぷりタスラムの顔
を見据えた。

「お前たちの下らない神話に記されていないせいで、我が神の心は
痛んでんだぜ。だけどよ、我が神が神たる力で作り出せしこの『魔
剣ハーデス』で、お前たち人界のゴミを殺せば少しは気も晴れるだ
ろうさ」

俺とプウはタスラムが左手に持つ、黒塗りの小太刀程度の剣を見
た。

その瞬間、呼応するように剣皇ポーニロアと剣帝ネイル・フリー
トウーンが輝き出す。

それは、その黒塗りの剣がポーニロアやネイル・フリー・トウーン
と同じく、^{ハルモニア}神具級であることを意味している。それはつまりは、タ
スラムの神が、神としての力を持つ存在である事をも意味していた。

「ほう」と俺はわざとらしく唸^{うな}ってみせたが、俺が余裕ぶ^つつて見せているところへ珍しくプウが前に出た。

「だから、それがどうした」

言い終えないうちに、ネイル・フリー・トゥーンを構える。

普段こういった場合、真っ先に戦闘をおっぱじめるのは俺の担当なわけで、計算高いプウは俺の後方でフォローに勤^{つと}めるのがいつものパターンなのだが、この日だけは違った。

タスラムのグダグダとした演説を聴くのを遮^{さへ}るようにして剣帝ネイル・フリー・トゥーンを中段に構えると、いつでも切りかかれる体勢を整えてしまう。

それを見て、タスラムはくつくつと再び笑った。

「おそらく、それが正解だぜ、シャルナアプ。さつさと尋ね人に加勢したいんなら、こんなトコで時間を売^うてる場合じゃねえ。……だが、それでパーフェクトってわけじゃあねえなあ」

タスラムは黒いぼろきれのようなマントを破り捨てた。その下には小さな作りの様々な動物の置物が並んでいた。

白色の人型に、背に蠅の羽が生えた黒色の豚。赤色のライオンに、青色の蛇。緑色のサソリに黄色の熊。そして、水銀色の狐。

「なあ、錬金術師。所詮、お前の錬金術など子供の遊びのようなものだぜ。俺が本物の錬金術^つってヤツを見せてやるよ。この魔造師タスラム様がなあ」

七体の動物の置物からタスラムが吸い銀色の狐を選んだ瞬間、プウは既に地を蹴^つっていた。

誇り高きウーデルカ一族の事を馬鹿にされたプウは、表情こそ出さなかったものの怒り心頭^{こころ}だったらしい。最初の一撃の時点で既に、自らの最終奥義たる想^{おも}くソウを告げていた。

「竜双 リュウソウ エリュシオン」

プウの左右の肩の宙に蒼色の竜の頭が浮かぶ。衛星のように左右の肩を舞う二つのそれは、竜の顔をした籠手こてであった。

一瞬の内に左右の籠手は大気中の水分を氷の槍として作り出すと、プウ自身が持つ剣帝ネイル・フリー・トゥーンと共に三本の刃をタスラムへと振るった。

三連撃の一撃のみは手にした魔剣ハーデスで凌しのいだタスラムだったが、あとの二つは完全に致命傷となりえる傷だった。しかし、左の胸と首の右半分がぱっくりと裂けた状態にも関わらず、タスラムはくつくつと笑う。

「まったく、これじゃあ技を出す前に死んじゃうだろがよ、このせつかちさんが。……奪い去れ、強欲マモン！」

タスラムが告げた瞬間、水銀色の狐に生命が宿る。そして、狐が瞳を開いた瞬間、タスラムの背中からは銀色の九本の触手が生えた。「こいつらは俺が七つの神具ハルモニアを模して作り出した複製フラテネリ。そして、こいつは我が魔剣ハーデスを模して作り上げた強欲マモン。そして、これが力の底上げ……融合ハルニレ！」

タスラムの全身が銀色の輝きに包まれると、胸から上だけを残して触手は全身に絡みつく。

「そして、更にお見せしよう。これが我が魔装 マソウ ユグドラシルだ！」

タスラムがハーデスを地面に突き刺すと地面からせりあがる様にして生えた樹木と、タスラムの全身に絡みついた触手は交じり合い、天を見上げるほどの巨木となった。

巨木の中央に張り付くようにして胸から上だけの姿のままタスラムが見下ろす。その時には既に首の傷は消えていた。

巨木から突き出す幾千、幾万の枝はざわざわと揺れるとプウ目掛けて襲い掛かった。それは枝であり、同時に銀色狐の触手だった。

襲い来る触手に動じもせず、大気中の水分から剣を作り出したプウの衛星は襲い来る触手を次々と切り倒していった。刃こぼれするそばから放り捨てる新たな剣を大気中から際限なく作り出すその様は、弾倉だんそうの尽きない銃のようでもあった。

剣帝ネイル・フリー・トゥーンを再び中段に構えたプウは己が錬金術の技を告げた。

「魔法剣 ハーティローツカ」

1mにも及ぶネイル・フリー・トゥーンの刀身が蒸気のように消えると、プウの手元にはネイル・フリー・トゥーンの柄だけが残る。

キラキラと巨木の周囲で輝く冷気はプウが柄を振るうと、刃を構築しその枝を切り裂いていく。

ネイル・フリー・トゥーンの刃を大気中の水分へと分解し、それが覆う空間においては好きな時に好きのところまで再び刃へと再練成してみせるその手際など、正に錬金術師としての面目躍如めんもくやくじょではあったが巨木と化したタスラムはプウが切りつけたそばから瞬く間に回復していく。

次第にプウにも焦りの色が浮かび始めるのを見て、少し離れた場所せんでいで剪定に追われていた俺もプウのもと目指して駆け出すその最中、プウが叫ぶ。

「始水 シスイ キュベレイ」

流れを取り戻すべく氷性の投擲槍ジャベリン放った瞬間だった。

タスラムの触手は何本も絡みながら伸びると先端の五本が花卉のように開く。それはまるで巨大な掌てのひらのような姿だった。

投擲槍ジャベリンを巨大な掌が呑み込んでいく様を見ながら、タスラムが笑う。

「そういえば、コイツの、強欲マゼンの、特殊能力について話してなかったっけな。こいつは、相手の能力を属性ごと吸収しちまうのさ。まるで、土が水を吸収するようになる。……これで、氷の力は俺の支配下に置かれた」

投擲槍ジャベリンを呑みこんだ掌が再び数千の触手へと形態を変えた時、そ

れは数千の氷の刃と化してプウを襲った。

俺は駆けた。そして、プウの元まであと少しというところで叫んだ。

「楼　ロウ　カノン！！」

右肩に現れた六つの火球は集合し、一つの轟々と燃え盛る炎の塊と変わる。

俺はポーニロアの剣先で照準をタスラムに合わせるようにして、炎弾を射出した。

4

「天上界^{ハル}で始まった最後の戦いの激しさも、紅砂^{コウサ}に覆われる下界に届く事はなかった。

クイルドはただぼんやりと救われる事のない魂の名残を見つめたままで、魔女^{ツイ・エルン}の話聞いていた。

「仮に今、魂の門を開放したとしても、再構築できる魂はほんの一握りにしかならぬであろうな。……ヴェスタの目的は四界を滅ぼし、あの小さな天上界^{ハル}で神を気取るつもりなのだ。それは四界の全てを支配しようとした魔界神や、邪界のみの繁栄を求めた邪神よりも酷い企み。ただ魂の管理者としての役目を与えられ、神としての認知も優越も受ける事のないヴェスタが復讐に走るのは必然だったのかもしれない。しかし、神話からも忘れられたヴェスタの存在を覚えていたのは、テラマギナそしておそらくは冥界神デプルトの二人のみ。だからこそ来るべき日^{きた}に備え、テラマギナは人柱となる寸前、自らの騎士ヒエラルキとその魂を交換し、人界へと姿を消したのだ

……」

クイルドは啞然^{あぜん}とした表情を浮かべる。その話が本当ならば、人々が神話として信じている話は間違いとなる。千五百年前、天上界^{ハル}から全ての剣　ユピテル　を奪ったのはヒエラルキではなくテラマ

ギナという事になるのだ。

「……ヒエラルキの肉体に魂を移したテラマギナは全ての剣を携え、深遠の聖域セント・クレアに身を隠した。わずかばかりの平穩の合間、テラマギナの子を身ごもった私はかけがない幸せを手に入れることが出来た。とても可愛い男の子、名はシオン。私とテラ、そしてシオン、三人だけの時間は特別な物。……幸せだった。この幸せが続く事をどれほど願っただろうか……」

感情らしきもない氷のような美女の顔に、初めて優しい色が差すのをクイルドは見た。

「……だが、永遠など存在しない事を私達は知っていた。だからこそ、辛い別れも心のどこかでは理解していたのかもしれない。邪神ドヴァーズが天上界ハル掌握の為に動き出した事を察知したテラマギナは、魂をシオンの心に封印すると人界テラの人間へと託したのだ。せめてもの救いは託したケイル夫妻が優しい人たちだった事。それが遠くの空から見守る私にとって、どれほどの救いだった事か」

クイルドは呻くように呟いた。

「……ケイル……。まさか、ミカトン・ケイルが……神の一族、それもテラマギナの……子」

沈黙が二人の間を重苦しい空気となって包み込んでいった。

だが、しばしの後、我に戻ったクイルドの瞳には今までとは違う色が浮かんでいる。それは神々の掌の上にある事を知らされ、呆然とするだけの老人でしかなかった今までとは違い、神ですらも批難する審判者の如き怒りに満ちていた。

「ならばお前達の一はしていることは、ドヴァーズやそのヴェスタと同じではないか。つまりは最後の神族の子として、お前達の子を天上界の継承者、唯一の神としようとしているのだ。それを傲慢ごうまんと言わずして何と言うのだ！」

クイルドがぴしやりと告げた瞬間、感情らしきもほとんど見せなかつた魔女が狼狽する。その瞳には怯えの色が見て取れた。

ツィ・エルン
魔女はそれを隠す事も出来ずに、戦慄くように唇を振るわせた。

「違う！ それは違う！ ……それが出来たなら、どれほど良かったか。神族の子として育てられたならば、私はどれほど良かったか。…だが、人の子として育てられたあの子はもう人間なのだ。それは、神の宿命に囚われぬ存在……もう、私の子ではないのだ」

ツィ・エルン
魔女の両の瞳からはらはらと涙が溢れ出た。長い長い年月、押し殺してきたものが瓦解すると、堰を切って流れるそれを止める事も出来ずにただ彼女は嗚咽する。

あか
紅き砂が侵食を始めた金色の空気の膜の中心で、立ち尽くす彼女を見つめるクイルドは、それ以上何も言葉を紡ぐ事が出来なかった。

5

人界神テラマギナたるミカトン・ケイルは対峙するヴェスタを軽く睨みつけた後、全ての剣<ユピテル>を携え、飛んだ。

ミカトン・ケイルはこの世界に残された時間が少ないことを知っていた。知っていればこそ、これ以上ヴェスタと無駄な問答を続けるつもりもなかった。

一瞬の内に間を詰めるとテラマギナはヴェスタへと切りかかるが、ヴェスタは難なくかわす。全身を黒紫の外皮が覆い、漆黒の羽をはためかせてふわりと宙に舞ったその姿は宛ら巨大な黒揚羽だった。

りんぷん
燐粉を振りまきながら、眼下のテラマギナを見下ろす黒揚羽の顔に嘲笑が浮かぶ。残り少ない時間に焦るテラマギナの事をヴェスタは十分に理解していた。

コウサ
「紅砂に吞まれたとしても、完全なウロとなるには時間が掛かる。ならば、まだ救える魂もあるだろう。我々では魂を作り出すことは出来なくても、魂を保管する事は出来るかも知れない。神の箱庭パンドラ を用いれば。……大方、お前の考えはそんな所だろうか？

テラマギナよ」

ヴェスタの言葉に核心をつかれたテラマギナの顔に一瞬、狼狽ろっばいの表情が浮かんだ。

それを十分に愉たのしむように見つめた後、ヴェスタは続けた。

「紅砂コウサはすでに人に限らず、自然界に生ける動植物の全てを喰らい始めた事だろう。黙っていても世界はじき終焉を迎えるだろうが、まあ、安心するが良いさ。我は時間切れを狙って逃げ回る気などない。最後の神の眷属、テラマギナよ。お前は新世界の神となる我が手で直々に葬くわつてくれよう」

ヴェスタが振りまく燐粉に誘われ群がるようにして、下界から紅き砂が続々と押し寄せる。

空を覆った紅砂コウサを背にして、ヴェスタが告げた。

「永久とわのさようならだ、兄弟」

紅砂コウサの群れはテラマギナの全身を一瞬の内に呑みこんだ。

6

轟々と燃え盛る俺の「楼ロウ」たる炎弾カノン。しかし、それがタスラムに命中する事はなかった。

明後日の方向へと飛んでいくそれを見つめた後、ポーニロアを握る俺の右手を掴み、まんまと照準をずらしたプウへと俺が口を開くより先に、説教を並べ立てたのはプウの方だった。

「馬鹿者！ 今を見てなかったのかアン！ 俺の水の理と同じように、ヤツの能力でお前の炎の理も吸収されてしまうぞ！」

せっかく助けようとしたのに、と口を尖らせる俺の気などお構いなしにプウが話し続けていた時、それは起こった。

「それより一旦退くぞ、アン。俺に考えが……」

俺とプウの間を引き離すようにして、その傍らにタスラムのあの触手のような枝が顔を出していた。

「……しまった」

プウが呆然とした声を上げた時、枝の先が爆ぜた。

バラバラと種子が飛礫ついでのようにあたり中に撒き散らされる。

俺とプウはすかさず飛び退すたったが、そのあとすぐにプウの悲痛な叫び声がこだました。

「アン！ アン！ 切ってくれ！ 早く！！」

俺が見たとき、回避しきれずにプウの左腕へと撃ち込まれた種子は猛烈な速さで成長していた。

あっという間にプウの左手が苗床となり植物へと変容していく様を視界に捉えると、「くそっ」と小さく呟くのと同時に、俺はプウの左手を躊躇ためらうことなく切り捨てた。

左手首から噴出した血を応急処置とばかりに自身の氷結魔法で止血しながら、プウは「とにかく一旦退くぞ」と告げる。そして、駆けながら右手に携えた剣帝ネイル・フリー・トゥーンを高く掲げた。

「鞘 ショウ！」

死、老、青を経て至る小即ち鞘シヨウとは、剣の奥義たる創シヨウ（想 ソウ）。つまり、俺なら水の如き炎。プウなら炎の如き水のイメージを完成させる為の剣との対話の最終段階。剣の完全具現化である。

プウが高く掲げた剣帝ネイル・フリー・トゥーンの刀身が青く揺らめき、蒼のローブを纏い長い髭を生やした高潔なる老武者が姿を現す。その姿は正に武神と呼ぶに相応しき神々しさであった。

それを見て、俺も応じるように「鞘 ショウ」を告げた。

緩やかな赤毛を揺らして、長身の美しき青年が姿を現す。

「長くは持たぬぞ」

言葉を発するや否や、大刀を携えたネイル・フリー・トゥーンと二振りの曲刀を携えたポーニロアはタスラムの触手を次々と切り伏せていった。

巨木と化したタスラムの影に身を隠すように駆けながら、プウが口を開く。

「ヤツの巨大な体躯に中途半端な傷を与えても意味は無い。一撃で決めるしかないなら、それはアン、お前の想ソウしかないだろう」

鞞シヨウの最中は他の理を使用することは出来ない。プウと同じく逃げの一手に徹しながらの俺も、駆けながらプウの話に続ける。

「だけど、ヤツは自身の想ソウたる自己修復と回復の能力に守られてんぜ？」

俺の懸念けねんにプウはただ一言「そっちは俺が何とかする」と答えた。「……そっか。じゃ、任せた」

何とかするという相棒の一言をいつものように信じた俺は駆けるのを止めると、駆けるプウを見送るでもなくタスラムの数多の触手のような枝を踏み台にして、巨木を駆け上がる。

巨木の上部まで辿りついた時、切っても切っても湧いてくる触手に覆われて身動きの取れなくなっているネイル・フリー・トゥーンとポーニロアを見留めて、俺は「鞞 シヨウ」を解除した。

美青年の姿をしたポーニロアが霧のように姿を消すと、程なくしてネイル・フリー・トゥーンもその姿を消した。

触手の枝に立つ俺と、巨木の中央から上半身だけを覗かせるタスラムの視線が重なる。

「森林伐採ってガラじゃないんだけどよ、そろそろ終わりにさせてもらっぜ、タスラム」

右肩にポーニロアを乗せたままで、俺は薄ら笑うタスラムの顔に向けて「ニヒ」と笑う。

そして、飛んだ。

槍のように突き伸ばされた十本以上の触手を、脱力からの連激ですかさず切り刻んだ後、俺は剣皇ポーニロアの束を両手で握り締める。上段からの一撃に俺は全身全霊を込めた。

「華粧 カソウ ヒナゲシ！」

ポーニロアの一撃はタスラムの巨木の肉体に深々と傷を刻んだ。

一撃を刻み付けた後地面目指して降下を始めた俺を、薄ら笑ったままでタスラムは見下ろした。大したダメージを負う事もなく、重きに逆らう事も出来ずただ降下していくだけの俺を見てタスラムは勝利を確信したのだろう。

上空からタスラムの触手が迫り来る。

だが、俺は剣を構えなおす事はおろか、空を仰ぎ見る事もしない。

「何とかする」とプウが言っていた。ならば、俺が「何か」する事はもう無いだろう。

瞬間、上空から迫るタスラムの触手がピタリと止まる。

そして、タスラムの巨木の全身が炎に包まれた。

華粧 カソウ ヒナゲシの炎は血液だろうが、樹液だろうが一つの固体を巡る水分を液体燃料へと化して燃え広がる地獄の業火にして、浄化の炎。

逃げ延びる術の無い非情なる一撃はたちどころにしてタスラムの全身を包んだ

「こんなものが何だというのだ！ こんなものがああああ！！」

苦悶の表情を浮かべるタスラムが、完全に狼狽ろっばいしたのは全身を包む炎を消す事も、炭と化していく全身の修復が出来ない事に気づいた時だった。

俺が地面に降り立つのを待っていたかのように、巨木の陰からプウが姿を現す。

「自身の支配下に置いたといっても、攻撃される訳でなければやはり気づかなかったようだな」

プウがそう告げた時、タスラムはようやくにして気がついた。

巨木と化した自身の根と、自身が根を張っていたはずの大地にはわずかの隙間が出来ていた。

地下の水分を凍らせて作り上げた霜と呼ぶには巨大で広大に広がるそれが、タスラムから完全に大地を奪っていた。

「返せえ！ 俺の大地をお……返せええええ！！」

もはや、燃えカスと化していく身体でさしたる抵抗も出来ずに悶えるタスラムの呻きを聞きながら、プウがきつぱりと告げた。

「うるさい、黙って死ね」

タスラムという巨木を中心に、この数分間に急成長し辺りを支配していた樹々は一瞬の内に炎に包まれた後、灰となって空に舞った。

そして、小さな森は死に絶えた。

7

眼前で渦を巻いた紅き砂が、やがて人一人完全に包み込んだ球体となるのを目に留めてヴェスタは口元を緩めた。

それは最後の創生神の眷属を打ち滅ぼし、唯一の神となる権利を持ち得るのが自身だけとなった事に満足するような、満面の笑みだった。しかし、一人悦に浸りながらの勝利宣言を告げる前に聞こえてきた声は、ヴェスタの三日月のように開きかけた唇を一瞬の内に歪ませた。

「……紅砂^{コウサ}。これを封じる方法は、私には分からなかったよ、ヴェスタ。……だが、その方法こそはお前が紅砂^{コウサ}の餌程度にしか考えていなかったであろう『人』が教えてくれたよ」

テラマギナを完全に呑みこんだはずの紅砂^{コウサ}は球体の形を成したまままで急速に回転していた。その球体はヴェスタの眼前で赤き竜巻となって吸い上げられると、喰らい尽くされたはずのテラマギナが掲げた全ての剣 ユピテル の剣先を中心として逆巻き始める。

自身の生命エネルギーを形成するギュガルド、その応用と呼ぶべき光球が全ての剣 ユピテル に灯っていた。

尽きることなく生み出される生命エネルギーの結晶たる光球目指して、下界から押し寄せる紅砂^{コウサ}の様は空を埋め尽くし、轟々と燃え盛る世界の終わりの炎のようだった。

テラマギナは静かに告げた。

そして、燃え盛る紅き砂を従えたままでヴェスタ目掛けて飛んだ。ヴェスタは迫り来るテラマギナに向けて両手を差し伸べる。

瞬間、ヴェスタの背後から湧き出た紅砂^{コウサ}はテラマギナ目掛けて襲い掛かったが、避雷針に吸い寄せられるように光球へと進路を変えた紅砂^{コウサ}はその他の多くの紅き砂に吸収されるだけだった。

ヴェスタの瞳に絶望の色が浮かぶ、と同時に上段からの一撃にヴェスタの身体は真二つに裂かれる。

指揮者を失った楽団の如く、速度も、旋律も、進行方向すら見失い、紅き砂は空へと霧散していった。

8

離れた空に紅き砂が押し寄せせるのを目に留めた俺とプウは、その中心目指して駆けた。

走り出してすぐ、つい今しがたまで青々と茂っていた緑が、焼けただれたようにタスラムと共に死に絶えた灰と黒でしかなかった景色が、その生命を吸い取られたような赤茶色に変わった頃、解き放たれるように紅き砂は空へと舞い上がった。

赤茶色の世界を行く俺とプウの視界に、しゃがみ込む良く見知った金髪の青年の姿が映る。

金髪の青年の傍らには、羽虫の形状をした羽を断ち切られ、地に墮ちたような人の姿があった。

倒れふすその男の、紫色の髪をした頭部に触れていた金髪の青年は、プウがその存在を確認したように「……忘れられし神」と呟く

のに気づいたように面を上げる。おもて

「それで、世界は救われたのか？ ミカトン」

忘神ヴェスタを撃破したミカトン・ケイルの顔を見ながら、悪夢の終わりを確かめたい俺は尋ねた。

……とは言っても、最初から俺は知っている。行き当たりばつたりの計画性しか持たないミカトン・ケイルにそんな事質問した所で何にもならないという事を。だから、世界には最早滅びの道しか残っていないのだとして、ただ、俺はいつものミカトンとの何気ないやり取りにほんの少しの気晴らしを求めたのかもしれない。

ミカトン・ケイルの唇が開く。

「ヴェスタの意識に介入して月の門、魂を浄化させる為の装置は起動させました。…ですが、救える魂は紅砂コウサに吞まれて間もなくの者だけ。……おそらく多くはないでしょう」

ミカトンの答えを聞き終えて、俺は弾かれたように剣皇ポニー二口アを構えた。

「お前：お前、何者だ！！」

俺が叫ぶのに呼応するように、プウもまた隻腕で剣帝ネイル・フー・トゥーンを構える。

ゆっくりと立ち上がったミカトン・ケイルは全ての剣 ユピテルを構える事もなかった。

彼は静かに微笑むだけだった。しかし、それはどこか悲しげな憂いある微笑だった。

「私は人界神テラマガナ、今は訳あってミカトン・ケイルの身体を使わせて貰っています。彼は無事です。彼、ミカトン・ケイルの魂は今もこの胸の中に存在しています」

この状況下で、それが冗談でないことくらい俺にも分かった。確かにミカトン・ケイルから発せられる気配は常人にはない静けさと神々しさに包まれている。だが、冗談でなかったとしてそれが何を

意味するのか俺には理解できない。

さすがのプウの理解力も追いつかないらしく、言葉を選ぶようにして質問を口にする。

「貴方が例え…神話上では死んだはずの人界神だとして……なぜミカトンの中に？ ……そして何をするつもりなのですか？」

テラマギナは小さく頷く。

「永きに渡りヴェスタは自らの宿願を果たす為に、準備をしてきたのです。…つまり、世界が再生を果たせない魂の群れで溢れるまで月の門を閉じて待ち続けた。……その企みに最初に気づいたのは私でした。その後、冥界神デプルートもヴェスタの企みに気づく事となるわけですが、私やデプルートのような神と呼ばれる存在ですら、ヴェスタの支配する紅砂コウサに対抗する術はなかったのです……」

俺とプウは固唾かたすを飲む様にして、テラマギナの話に耳を傾けていた。

テラマギナは少しだけ間を置いた後で、再び口を開く。

「ヴェスタ打倒という点では、私もデプルートも同じ意志だったはずですが、しかし、デプルートはヴェスタさえ倒して世界が残りさえすれば後はどうでも良かった事でしょう。紅砂コウサさえ処理してしまえば、彼女の性格上、世界に魂が残らなかつたとしても、彼女にとつてそれは些細な事ではないのです。……しかし、私はこの世界の魂たちをどうしても救いたかつた。救う為の方法は一つしかなかつたとしても……」

テラマギナはゆっくりと踵を返した。

「付いて来て下さい……」と呟いた後、歩き始めたテラマギナは静かに続けた。

「『人』を……救います」

テラマギナの後に続くように、俺とプウは汚れ一つない白く小さな神殿の中へと足を踏み入れた。

かつては創生神の住居だった神殿はその絢爛けんらんさとは相反するように、不気味なほどに静かだった。主無きその神殿は、宛らさながら巨大な墓標のようでもあった。

創生神亡き後、おそらくヴェスタが座していたであろう玉座を通り過ぎ、最奥に存在する小さな部屋へと入る。

テラマギナが「揺りかご、そして、神の右席と左石」と呼んだ小さな台座が三つ設置されているその部屋では、中心で人一人くらいはある巨大な水晶が次々と色を変えながら輝いていた。

巨大な水晶に少しの間目を奪われていた俺は、中央の台座へと近づくとプウの姿に気づく。

台座の後ろの壁は所々が出っ張り、物を安置できるようになっていたが、そこに置かれていたのは、掌で握れるほどの大きさの漆黒の宝石だけだった。

それに触れようとしたプウをテラマギナが制する。

「使用者の求めに応じなければ真の効力を発揮できないとはいえ、長らくは目にしない方が良いでしょう。それは滅びの石、黒滅瞳石 エキドナ …… まあ、使用者の寿命を削るといわれるそれを用いず、紅砂コウサという自らの力をヴェスタが過信してくれたおかげで私達はそれを目にする事が出来た、というのも複雑な話ですけどね」

黒滅瞳石 エキドナ の力は、例えば神であろうと一瞬で滅ぼすほどのものであると伝えられていた。そういう意味ではテラマギナとヴェスタと対峙したのは賭けに近い選択といえた事だろう。

視線を逸らしたプウの見える前で、テラマギナが軽く右手を挙げた。

彼の求めに応じるように、彼らのいる小さな部屋を目指して虹が伸びた。残像を残すようにして部屋の中でふわりと浮かぶその七色の球体は、タスラムが作り上げたあの七つの像だった。後れるよう

にして魔剣ハーデスも出現する。

「^{ハルモニア}神具の複製と魔剣。こんな危険な物を外の世界に放置しておく訳にはいけませんからね」

七つの像と魔剣ハーデスは台座奥の壁へと安置された。

向きを変えたテラマギナは水晶を見つめながら、口を開く。その口調は今まで以上に重かった。

「私のように神と呼ばれる存在ですら魂を作り出すことが出来ないのは貴方達も知っていますね。…世界は今や、紅砂コウサに人だけでなく、自然界に生ける全ての物が喰らい尽くされてしまいました。私が例え肉体を作り、その中に浄化した魂を容れて新たな生命を作った所で、その生命はこの荒涼とした世界で生き抜くことなど出来ないでしょう。……だから、世界の再生は世界自身に託し、魂は世界が新たな生命体を創りだすまでの間、保管することにしようと思えます」

「保管……？」と小さく呟いたプウに頷くと、テラマギナは続けた。

「魂を効率よく創り出す為の装置たる神の箱庭 パンドラ それを用いて魂を創り出すことは先ほども言ったように神たる私にも出来はしません。……しかし、それを用いて魂を保管するだけなら、私にも、貴方達にも可能なのです。……そして、この幾千、幾万の施された水晶封印の奥にこそ神の箱庭 ユピテル は隠されているのです」

「幾万もの封印!? そんなの解ける訳……」

言葉の途中で、俺は気づいた。そして、俺の答えが正解であるというようにテラマギナは頷いた。

「全ての剣 ユピテル、か！」

俺が小さく叫ぶと、テラマギナは全ての剣 ユピテル を掲げた。

「全ての属性を支配するとされる全ての剣 ユピテル ……その正体は神の箱庭 パンドラ の封印を解く為にして、起動させる為の『鍵』なのです」

テラマギナはゆっくりと全ての剣を水晶の中へと差し入れた。

時間にすれば、ほんの一瞬。

幾万もの封印はあっけない程に解かれると、中から金色に輝く小さなオルゴール状の小箱が出現する。

宙に浮かぶ小箱を見つめたまま微動だに出来ない俺とプウに、テラマギナは話しかける。

「ミカトン・ケイルは私と魔女ツイ・エルツと貴方達が呼ぶ存在の間に来た子供です。しかし、私達がその子を手放したのは『人』の子として成長して欲しかったから、純粹で強い魂を持つ者になって欲しかったからでした。…魂達は神の箱庭 パンドラ 使用者の夢の世界へと保管されます。純粹で強い魂を持つ者の夢の世界なら、世界が再生するまでの間、魂も成長し進化する事が出来ると考えたから……。それはつまり、文明や肉体しか進化する事の出来なかつた『人間』という愚かな種を創り出してしまった私の独りよがりの贖罪じやくざいではないのかもしれませんが。邪界人メヒウスも冥界人ネメシスも魔界人ニユクスも、そして人間も種族や文化の垣根を越えて肉体的、精神的に交わり『人』としての進化を果たさない限り、それは根本的に何も変わらない事と同じなのだから……」

力なく話すテラマギナの顔を俺とプウは静かに見つめていた。

「……ですが、先ほども言ったように、神の箱庭 パンドラ を使用出来るのは私だけではありません。純粹で強い魂を持つのは貴方達も同じです。当然、その権利は貴方達にもあるのですよ。ウーデルカ一族の皇子、そしてミンツ家の皇子。貴方たちのどちらかが夢の世界の主となる、それもまた良いかも知れません。それならばミカトン・ケイルは神の右席に座り、夢の世界の主を守る守護騎士となり、その時まで眠り続けましょう」

テラマギナの問いかけに俺とプウは互いの顔を見合わせた。そして、同時に噴出した。

「ああ、ダメダメ。ミカトンのバカは俺がついててやらないと、て

んでダメだからさあ」

俺は話しながら、剣皇ポーニロアを壁の出っ張りへと置いた。

「まあ、ミカトンよりは俺の方が格段に良い夢の世界とやらを創れるのは確かですけど、逆にあのバカが俺のサポートをするのかと思うとゾツとしますね」

プウも剣帝ネイル・フリー・トゥーンを台座の後ろに安置した。

「二人とも、ありがとう」呟きながら宙に浮かぶ金色の小箱を両手でそつと掴んだテラマギナを脇に、俺は早々と神の右席に腰掛けながら、軽口を叩く。

「どうせなら、ミカトンのヤツ。俺の安眠を防止しないようせつせと世界の平和を守り抜いて貰いたいもんだぜ。世界が再生を果たすまで…俺の……出番が…やって来ない……ようにさ……」

背の深い台座に腰掛けてすぐ、俺は強烈な睡魔に襲われた。台座の周りをおそらく古代の物と思わしき解読不能な文字が幾つもの帯となって包んでいる。その帯の間からおぼろげに見える小さな部屋の風景がぼんやりと霞がかかっていく最中、プウの声が聞こえた。

「テラマギナ、貴方はどうなるのです？」

薄れ行く意識が白い闇に侵食されていく中、テラマギナの声だけが響いた。

「私の役目は終わりです。これからの世界に神話の神はもう必要ありません。私もただの一個の魂となって夢の世界に保管されるだけです」

10

白色だけの世界で、オルゴールの金属板が弾かれる音だけが聞こえていた。

俺は離れた場所にミカトン・ケイルの姿を見つけて駆け出した。

だが、少し駆けした後、違和感を覚えた俺は足を止めた。

遠近法など無視するようにしてそびえ立つミカトン・ケイルの姿は巨大だった。

白い世界を背景に巨大なミカトン・ケイルを目指すように幾つもの流れ星が飛んだ。

金色の星達は次々とミカトン・ケイルの胸の中に吸い込まれていった。

ぼんやりとその光景を眺めていた俺がちらと隣を見ると、小さく肩を竦めるすくプウがいた。

二人目を見合わせた後、俺とプウは静かに、おそらく最後になるであろう神の御技を見届ける為に再び顔を見上げた。

まだ神と人が共にあった時代。

俺はこの当たり前の世界で、当たり前の仲間達と過ごす毎日がずっと続いていくものだと思っていた。

だが、世界は驚くほどにあっけなく滅び、そして新たな世界はまだ、始まってすらいない。

ふいに存在に気がついたように首を傾けたミカトン・ケイルと俺の瞳が合った。

そこに在ったのは、テラマガナと名乗っていた時にはなかった穏

やかで屈託の無い、いつものミカトン・ケイルの顔だった。

俺は微笑みながら、ようやく目覚めたらしい友へと呟いた。

「おはよう、ミカトン」

わずかの間の後、俺の意識は再びまどろみ始めた。

意識が完全に遮断される最後の瞬間。

ミカトン・ケイルが笑った。

「おやすみ、プウ」

最早、瞳には何も映らなかった。ただ、ミカトンの声だけが聞こえた。

「おやすみ、アン」

第二部 在りし日のラグナロク

終

第三部 神と人のアレゴリカル・ワールド 第一章 騎士礼典

長い長い夢を見た。

人と星と神の織り成す長い夢。

人生に終わりがあるように、見果てぬ夢ですらいつか終わりが来るのだろう。

その時、人々は、そして神は何を想うのだろうか？

そして、その時、僕は何を想うのだろうか。

誰が為のイクスルプ

第三部 神と人のアレゴリカル・ワールド

> i 1 1 0 0 1 — 1 2 9 9 <

第一章 騎士礼典

1

西暦1978年。

この星や大陸の先の先がどういったものなのか学んだ知識があったとしても、僕はこの世界しか知らない。

かつて栄華を築き上げ、千年王国と呼ばれたアウレリア帝国も衰退し、人伝ひとつてに聞いた話が真実ならば半年程前に完全に滅んだという事らしい。

人に聞いたたり、本で学んだりする限り、世界は大なり小なり変わっているようだ。

けれども僕は何も知らない。

僕の目に映るのはいつもと変わらぬ風景。厚く、高い壁に囲まれた人口千五百人ほどのこの町が、僕の世界の全てだからだ。

賢き選択をする者と呼ばれたアウレリア帝国七代目の王、青の皇アズローセ帝レフラントことカリグラス・アウレリアにちなんで、パラス・アズロ（青の宮殿）と名付けられた移動型城塞都市の一番高い時計塔から見下ろす先、パラス・アズロから見渡す限りの一面にはいつもと同じく、黄砂コウサと呼ばれる砂漠が広がっている。アウレリア帝国の衰退の原因と呼ばれるこの砂漠は今や、大陸のほとんども飲み込んでしまったらしい。

もちろん、これも人伝に聞いた事なただけ……。

僕の名前はロムルス・パルミエリ、14歳。東方守護騎士団所属の見習い騎士だ。

両親を幼いうちに亡くしてしまっただけ、ある人のおかげで今は身体の弱い双子の弟レムルスとこの時計塔で暮らしている。

見習い騎士の仕事は、大変だし、給料もそれ程って感じだけど兄弟二人暮らしていくには不自由でもないし、何よりやりがいを感じているから、好きだ。

騎士団長……と呼ばないまでも、立派な騎士になるっていう夢もあるしね。

時計塔が朝八時の鐘を鳴らした。

大きくのびをして「さて」と「とわざとらしく呟いた後で、僕は時計塔の中へと続く階段を降りる。

古いレンガ造りの部屋で、モゾモゾとベットの中から顔を半分出した弟のレムルスが「おはよう」とあくび交じりに話す。

「ずいぶん早いね……あれ？ 今日だっけ、騎士礼典きしれいでん」

（まったく……）

僕は呆れ顔を繕つくろって見せた。

「言つてたる、今日は一年で一度の大事な日だから、早く出かけるつてさ。ご飯はテーブルの上に用意しといたからね。レムもさっさと起きなよ。…じゃ、ね」

さっさと出かける僕の後ろで、まだ布団に入ったままのレムルスが再びあくび交じりに「行ってらっしゃーい」と右手を振った。

2

まだ人通りのまばらな広場から、正面に威風堂々と建つアウレリア伝統のバルディック造りの宮殿を見つめる。

今から五十年も昔、アウレリアの名家の出たるパオロ・ウーデルカが財を尽くして造り上げた宮殿と、その宮殿を臨む荘厳な彫刻に彩られた噴水を中心に据えた広場は、それぞれドムス・パオロ（パオロ宮）と、パオロ広場と呼ばれている。

その贅沢過ぎる程の外観とは違い、数ヶ月前まではただの市役所にすぎなかったドムス・パオロでこれから年に一度の恒例行事たる騎士礼典が行われるのだ。

騎士礼典はこの都市を守護する騎士を称えると共に、騎士となった者を祝う儀式である。

五十年前から年に一度必ず行われ続けるのも変わりなく、黄砂のせいで騎士が馬に乗る事がなくなっても騎士が騎士と呼ばれるのも変わらない。

これから先も行われいくであろう礼典の、そのいつの日にか自分

もあの宮殿で騎士となるのだ。

自身の夢を再度確認するように春の陽光を受け堂々と建つドムスパオ口をもう一度見つめた時、僕は不意にかけられた声に振り返った。

「あれ？ ロムがこんな早くに仕事に来てるなんて珍しいわね」

僕が振り返った先には、そう言った後で少しだけ意地悪そうに笑う女性が立っていた。

僕より頭半分くらい背の高いその女性は、すらりとした身体に礼装用の、つまりは実用的ではない金色の装飾が施された遠目にもよく映える軽装の鎧の上に、染み一つない真っ白なマントを羽織っている。

「いつもは遅刻魔なのにね」

少女の面影を残した顔の、大きな瞳を細めながら小さな唇がリズム良く言葉を発する。

南方守護騎士団長、カギル・パンナイン。

この世界を創世したとされる神「テラ」。その神は二つの側面を持つていると記されていた。それは創生と太陽としての神「テラ・ラクス」と、破壊と夜としての神「テラ・ピリオド」である。

パラス・アズロの南方にはテラ・ラクスを祭る白の神殿が置かれている事もあり、南方守護騎士団長は別名、白の騎士と呼ばれていた。

3

礼装用の物々しい衣装に少しだけ見とれた後で僕は彼女の発した「遅刻魔」という単語を思い返して反論する。

「僕は今まで遅刻した事なんてないですよ」

それは本当だ。

見習いや準騎士の中では誰よりも早く仕事に行っている。ただ、雑用が主な仕事の見習いであって、人より少し仕事が遅い自分、いつも集合の激がかかった時に間に合わない、という事も本当の事だった。

「……ところで、カギル団長はどうされたんですか？ 大事な式典の前じゃないですか」

本来なら各騎士団長は礼典の予行練習に追われているはずだった。僕が尋ねると、オレンジ色のショートヘアに朝日を受けてキラキラと輝いてみせた姿には似つかわしくないように、彼女はさめざめと溜め息をつく。

「ちよつと見てよ、ロム。あたしもう二十一歳だよ。さすがにこの格好はないわよね。…それ考えてたらなんかウンザリしちゃってさ、気晴らしに抜け出しちゃった。まあ、リ八なんて毎年同じ事だからわざわざ覚える必要ないしさ」

（こんな格好などと言っているくせに、広場にひよっこりと姿を現れて見せるのは、自信の表れじゃあないのだろうか？）

純白をした短いスカートの裾を摘み上げながら一息に喋りたてる彼女に、「はあ」と僕は曖昧な相槌あいづちをうった。

その僕の顔をまじまじと見つめた後で、彼女は思い出したように口を開く。

「あ、そうか、騎士礼典の会場の準備と警護って、準騎士と見習いの仕事だもんね。それでロム、こんな早くから来てるんだ」

僕が「はい、そうです」と返事をするのも待てないように彼女は続けた。

「すっかり忘れてた。そういうえば、あたしも昔やったなあ…って言うても、あたしって十五歳にはもう騎士になってたし、十八歳でも団長だからね。ロムはあたしみたいに天才じゃないから、いつ騎士になれるかも分かったものじゃないよね」

真剣な眼差しで話す彼女にはおそらく悪気はない。しかし、僕は

カチンときた。

表状こそ変えずに話しかける。

「そう言えばカギル団長、それなら大丈夫そうですね」

質問の意図を理解できないように彼女は大きな瞳をぱちくりとしばたかせた。

「ほら、日頃から気にしてたじゃないですか。自分は起伏の乏しい身体だけが残念でしょうがないって。今日はその胸あてのおかげで、『ある』ように見えなくてもいいですよ」

金の装飾の施された鎧の胸あてにカギルは両手を添える。

「うわぁー。そっか、なるほどねー」

ニコニコと笑いながら、彼女が腰に下げた愛用の神剣アテナイを鞘から抜くのを見て、僕は一目散に逃げ出した。

4

十時から始まった騎士礼典は、今年は新たに一人前の騎士となった者が各隊で一名ずつという少なさの為、叙じょにんしき？式も早々に済ませ、拝剣はいけんの儀へと移った。

四つの騎士団それぞれの象徴たる四本の神具。

いつもは各団長が携さえてる「神剣アテナイ」「魔剣ハーデス」

「剣皇ポーニコア」「剣帝ネイル・フリー・トゥーン」の四本の剣は、今日だけはその持ち主を一時離れ、主神テラへと奉納される。その後、テラ・ラクスに仕える白の神官とテラ・ピリオドに仕える黒の神官に清められると、このドムス・パオロの「王」から再び各団長へと託されるのだ。

パオロ広場に集まった沢山の人間が静かに見守る中、ドムス・パオロの二階に位置する広いテラスへと全身黒の甲冑とマント、そしてローブを羽織った一見しては重装騎士と間違っような「黒の神官」と、白のローブを幾重にも全身に巻いたような姿の美しい顔立ちをした女性「白の神官」を引き連れるようにして、騎士総長のガンド・

マギアスが姿を現した。

初代青の騎士団長を務めたと言う歴戦の勇士もよる年なみには勝てず、見栄えの良い黄金の鎧で着飾ってはいてもその中の身体はひなびて、禿げあがった頭髪の代わりのように伸ばした髭が風に物悲しく揺れている。

長い眉毛のせいで表状は読みとれず、時々イスに腰掛けたままピクリともしないと死んでいるのか、眠っているのか良く分からないが、生涯現役を信条とする彼の長い眉毛から時おり覗かせる瞳は未だ輝きを失っておらず、癩癩^{かんしゃく}持ちで厳しい彼の事を、見習い達は影で「鬼のガンじい」と呼んでいた。

ガンド・マギアスと二人の神官がエントランスの中央に置かれた主神テラへと深々と礼を捧げた後で踵を返す。

彼らが厳肅に見守る中、一人の男が姿を現す。

彼に付き従うようにして、四本の神具を携えた白の神官に仕える巫女二人と黒の神官に仕える占星術士二人も後に続いた。

その中には僕も見知った白の巫女、ユカリ・マルキアンティと黒の占星術士ベアトリス・カラーチェの姿も見える。

四人の女性を引き連れた男は主神テラに向かって礼を捧げるとその後で、エントランスに視線を釘付けにする彼の国の民に向かっても軽く礼をした。

その瞬間、場内に歓喜の声が湧いた。

5

アウレリア帝国の九十九ある属都市の一つでしかなかったパラス・アズロは、次々と黄沙に呑み込まれて消えていくその属都市の中で唯一、手付かずのままに残った都市である。

元々、大陸で唯一アウレリア帝国に対し最後の敵対関係にあった

大陸南部の砂漠の民、蛮族とアウレリアの民が呼び忌み嫌ったガリア族の討伐の為に移動型城塞都市として造られたパラス・アズロは、王都アウレリアから送られてくる帝国騎士団の中継基地であると共に、アウレリア国土増大の為に前線基地であった。

移動型城塞都市と言っても、都市の四角に付けられた太く長い足を交互に繰り返し出して歩く訳だから、その速度も一日に歩ける距離もたかが知れている。しかし、この南の砂漠より広がり始めた黄砂が今や大陸のほとんどもを呑み込むに至り、ついにガリア族との五十年戦争と呼ばれたこの戦いの決着は付かずじまいとなつたが、それでもアウレリアの属都市の中で唯一パラス・アズロだけが残つたのは、その一時的に下界との隔離を可能にした鈍重な脚部と、ガリア族や砂漠に生息する凶悪な形態の生物の侵入を防ぐ為に周囲を厚く覆つた防護壁、そして長い戦争を見越し、都市内での生産が可能な環境を予め整備していたからであつた。つまりは、パラス・アズロは移動型城塞都市というその特性ゆえに、黄砂の脅威にもさしたる被害を出す事もなく存在しているのだ。

半年前、黄砂との厳しい戦いの中にあつた帝都アウレリアにおいて第六十七代アウレリア帝と彼の子息達が、帝位継承権を持たない皇帝の妾の子、ル・シウスに皆殺しにされた事で、長きにわたり権勢をほこつたアウレリア帝国は滅亡した。

その後、「剣王^{ケンオウ}」を名乗つたル・シウスに共鳴するように、ガリア族の王ガリアラツハは自らを「拳王^{ケンオウ}」と称するようになる。そして、半年前までは属都市の一市長でしかなかった男、パオロ・ウーデルカの子孫にして先代市長、シャルドネ・ウーデルカの子は「賢王^{ケンオウ}」を名乗る事となり、世は雅に「三ケン時代」へと突入したわけである。

パラス・アズロのまだ若き賢王、その名をシャルナアプ・ウーデルカといつた。

先代市長シャルドネがパラス・アズロを帝都アウレリアに戻し、帝国の再建に尽力すべしと唱えたのは広がりゆく砂漠が帝都アウレリアに近づきつつあった今から十年も前の事である。

偉大なるシャルドネの国を想う発言に対し、唯一異を唱えたのはその時まだ十八歳になったばかりのシャルナアプだった。

パラス・アズロは現在生活する千五百の民が暮らしていく事で精一杯である。都市に残る王族を助けるならば、おそらくパラス・アズロの千五百の民は犠牲にならねばならない。

国を想うシャルドネと民を想うシャルナアプ、双方の意見の一致の見ぬままにこの議論の結末は先代市長シャルドネの急死で幕を下ろした。

結果として五百の民を救う事となったこの選択は十年の後「賢き選択」と呼ばれるようになる。

テラスに立つ、白い礼装に沢山の勲章を胸に付けた、まだ二十八歳の若き男は五百の民の圧倒的支持の元、王を名乗った。

彼に向けられる歓声は五百の民を救った英雄に対する賛辞と、この先が見えない時代にあつて自分達が^{すが}継るべき希望の旗印に向けての鼓舞にも似ている。

かつては騎士団にも所属し、友の危機に身を呈した際に失ったという左手、今や賢王の象徴となった左の義手を期待に応えるべく軽く持ち上げて見せると、群衆の歓声を傍らに置いたままで王は騎士の到着を静かに待つ。

一度静まりかけた歓声は、エントランスに四人の騎士が姿を現すと再び爆発した。

我らがパラス・アズロの四人の守護神は各団のモチーフカラーの鎧とマントを身に着けている。

正にその姿は神々しく、群衆も、そして僕も、羨望の眼差しで四

人を見上げた。

シャルナアプが巫女の一人から、一振りの剣を受け取るとその眼前に歩み寄った白い鎧を身に付けた騎士が膝をつき、彼を見上げた。その一連の動作にはどこか、ぎこちなさを感じさせる。

毎年同じ事の繰り返しなど余裕ぶっていたはずなのに……。

(カギル団長、めちやくちゃ緊張してるし)

僕は内心でそう呟くと、吹き出しそうになった。

「パラス・アズロの南の地に平穏と安寧を」

カギル団長の肩に剣の刃を乗せて賢王シャルナアプがそう告げると、「はい」とカギル団長は答えたが、緊張で口の中が渴いていたのか声音はどこかしらおかしかった。

物々しい空気の中、僕は完全に吹き出してしまふ。

その厳粛な場において、吹き出したのは僕と「赤の騎士団長」の二人だけだった。

賢王シャルナアプから神剣アテナイを受け取って後、下がったカギル団長が赤の騎士団長を肘で小突くのが見える。

白の騎士に続き、赤の騎士、黒の騎士も拝見の儀を済ませた後、

四人目の騎士が王の前へと歩み出た。

その顔は、ニヤニヤしっぱなしの赤の騎士に今にも噛み付きそうな白の騎士、我関せずとばかりにそっぽを向いている黒の騎士を後ろに置いて「やれやれ」と言っているようにも見えた。

僕とレムルスの命の恩人にして、僕の所属する東方守護騎士団の？1。東方守護騎士団長、青の騎士リンド・ハイワースだ。

7

180cmを越える身長に、漆黒の髪の毛が緩いクセのせいで不揃いにあちらこちらを向いているその下で、真っすぐに前だけ見つめるダークブルーの瞳にはいつもと変わらない優しい色が浮かんで

いた。

青い鎧で着飾ったリンド団長は、拝見の儀をそつなくこなした。彼は天才、と呼ばれている。それは、十代のうちに東方守護騎士団長にまでのぼりつめた剣に愛されし者。とは言え、他の三人もほぼ同年代の内に団長までのぼりつめている訳で、そういう意味では彼らも天才には違いない。けれども……。

…… 品格も人格も間違いないのはうちの団長だけだね。

何かに付けて、僕はそう思う。

何も命の恩人だから、点数を甘くしてらって訳じゃないよ。

リンド・ヘイワース。彼程に騎士らしい人間を僕は知らないから。それは、小さい頃読んだ絵本の中の騎士道を重んじる騎士そのままに、僕の前に現れた実在する本物の英雄。

僕が見つめる先、民衆が見つめる先のテラスで拝見の儀を済ませた四人の騎士が小さく手を振る。

民衆の歓喜の声はやがて、巨大なうなりとなって広場中を包んだ。

第二章 四方騎士

第二章 四方騎士

1

騒乱の過ぎ去った広場で、僕達見習い騎士は片付けをしている。

騒ぐだけ騒いだ後、クモの子を散らすように帰っていった民衆にほんの少しだけ怒りを覚えつつも、彼らの熱狂の燃えカスとも言わべき散乱するゴミの片付けもまた、パラス・アズロの風紀を守るという意味では、一応騎士の立派な仕事と呼べなくもない。

さぼりながらでいっこうに捗^{はかど}らない同僚のマルチエロをからかいながら、自分の持ち場の片付けを終えた僕はドムス・パオ口内の片付けの手伝いへと向かった。

騎士礼典が本日の主たる業務の国王を初め役人達は、陽も高いうちにドムス・パオ口を後にしている。登庁を済ませた僕が見たドムス・パオ口の宮殿内はあの騒乱が嘘のようにひっそりと静まり返っていた。

ドムス・パオ口内の片付けは準騎士の仕事ではあるが、広場の片付けに比べればその規模はどつと言ふ事もない。僕達見習いが広場の片付けを終えるところの昔に、ドムス・パオ口内の片付けは終わっていた。

(よけいなお世話だったか……。)

しんと静まりかえる宮殿内でそう思った僕は、次の瞬間には別の事を考えていた。

(でも、それなら、それで都合が良いや)

二階のテラスへと続く階段を昇り始める。

せつかくだから、選ばれし騎士だけが立つテラスからの眺めを見てみよう、そう思ったのだ。

階段を昇りテラスへと続く大広間を抜ける。

ほんの少しの緊張と興奮を覚えながら進む僕の目に、テラスを囲む細やかな造りの外柵とそこから広がる青い空が映る。

ごくぐり、と唾を飲んだ後で、テラスへ足を踏み入れた僕は、その外柵に背を預けるようにして座る人影に目を留めた。

2

砂漠には、もはや因縁の相手とも言うべきガリア族の他にも難敵が潜んでいる。それが、砂漠という環境に適応するために、分厚い外皮と毛で全身を覆った甲獣と、その甲獣以上の外殻と巨体を備えた甲虫である。

甲虫の筋繊維を細かく割き、それを織っていく事で伸縮性と通気性、そして強靭さを伴った繊維を作り出す事が可能だった。

その繊維で編み、ピタリと全身に張り付くように仕上げたスカツリヤと呼ばれるその薄手の帷子かたびらは騎士の基本装備である。

鎧を脱ぎ、礼典用に仕上げた新品の、真白いスカツリヤを着たり、ンド・ヘイワースがそこに居た。テラスの大理石造りの床に座り、傍らの剣帝ネイル・フリー・トゥーンを見つめる瞳は優しい。

「対話」と呼ばれるその最中であるかと僕は当たりを付けると、遠慮がちに、でもやっぱり話し掛けた。

「お疲れ様です、リンド団長」

彼は僕を視界に認めると「ロムもお疲れ」そう言っただけで屈託なく口元を綻ばせる。

その一連の所作に僕は遠慮という言葉は何処かに放り捨てた。

「あの、今日のリンド団長の堂々とした立ち振る舞い。その、なんて言うか、上手く言えないんですけど、すごく素敵でした。」

気の利いた言葉も紡げなくせに、僕は早口で一気に喋る。そして、その後で自分の言葉の拙つたなさに恥かしくなった。

少しだけ、頬を紅らめた僕の顔を見て、彼は苦笑を浮かべる。

「全然、堂々としてなんかいないさ。騎士礼典は毎年緊張の連続だよ」

僕は、そんな事ない、と当の本人を前にしてちよつとむきになる。「団長は立派でしたよ。緊張っていうのはカギル団長みたいな事を言うんですよ」

苦笑を浮かべていた彼は声を上げて笑った。

「あれは例外つてヤツだよ。カギルのあれは、恒例の行事みたいなものさ。俺はもう慣れたつて言うか、半ば呆れてるけど、毎年、ガチガチになるカギルも、それをからかうユアンも、ついでに言うならその後の『これ』も毎年恒例、さ」

僕の顔を見上げながら話す彼が、僕から視線を外しそう話終えた時、テラス中に「リンドー！」と言う大声が響き渡った。

3

僕がその声の方へと振り返るとそこには、白の騎士カギル・パンナインが立っていた。

礼装用の鎧を脱ぎ、ワンピースタイプの白いスカツリヤだけを身にまとうその姿（特に胸）には先刻までの威厳はない。

「あ！ロムも居たの、丁度良いわ。今日こそコイツの根性を叩き直すから！手伝つて！！」

見るとカギル団長の後ろには引きずられる様にして一人の男が立っていた。

「大事な礼典で爆笑するなんてたるんでる証拠よ！リンドも何か言つてやつて！！」

カギル団長は猫の様に大きな瞳を吊り上げて、そうリンド団長に迫る。すると、間髪入れずに彼女の後に控える黒のスカツリヤを身にまとう赤い毛髪の男も声を上げた。

「そもそも、毎年、毎年ありえないくらい緊張するカギルが悪いん

だろ！？なあ、リンド」

リンド団長は「やれやれ」と呟くと、苦笑を浮かべて同意を求める男を見上げた。

西方守護騎士団長。赤の騎士、ユアン・マクティカナル。

リンド団長、カギル団長そしてこのユアン団長は幼馴染であり、（リンド団長いわく、腐れ縁）そして彼もまた十代の内に騎士団長へと昇りつめた天才の一人である。

スラリとした体躯に、サラサラの赤色の髪。そして少しだけ切れ長の瞳は、黙っていれば知的な印象をうけそうなものだが、彼とカギル団長のやりとりはやがて子供のケンカじみた悪口の応酬となり、その見る影はあつと言う間に吹き飛んでしまう。現に、礼典の際などの涼しげな顔立ち振るまいから、四方守護騎士一、黄色い声援が飛ぶ彼ではあつたが、実際に会って話した女性が苦笑いを浮かべて次々と立ち去る事から、影では四方騎士一の残念団長などと呼ばれたりしていた。

残念団長の大して実もない口先三寸にカギル団長が、押され始めた頃、リンド団長は再び「やれやれ」と一人呟いた後で口を開いた。

4

「ところで、サリー先輩は？」

カギル団長に向けて矢継ぎ早に屁理屈を並べたてていたユアン団長は、そのままのトーンでリンド団長の質問に答える。

「サリーくんなら、ベアトリスさんと一緒にとっくに帰ったよ」

北方守護騎士団長。黒の騎士、サリー・サレス。

常にポーカーフェイスで無口。何を考えているか分からない佇まいから一転して苛烈さを極めるその戦いぶりをして部下からも恐れられている彼を実は一番怖がっているのは、彼の一つ年少のユアン団長ではあったが、そのくせ軽々しくサリーくんなどと呼んでいるのもまたユアン団長唯一人であった。

いつもは、トレードマークのキャップの奥から鋭い眼光を覗かせるサリー団長のキャップの下の素顔、少しだけブロンドがかった黒髪のベリーショートの端正な顔立ちを、僕は今日の礼典で初めて見た事を思い出す。

彼は今日の礼典が終わるとすぐ、小柄な彼とは対象的に背が高く腰まで届く長い黒髪が印象的な彼の恋人、黒の神殿に仕える黒の占星術師、ベアトリス・カラーチェと共にさっさと帰ってしまったとの事らしい。

別段珍しくもないその答えにリンド団長は「ふうん」と小さく相槌をうつ。

それ事態は最初から何となく分かっていた事だったのだろう。リンド団長にすれば、それはただユアン団長にやりこめられそうになっているカギル団長に対しての助け舟に過ぎなかった。しかし、話題を変えようとしたとっさの機転のせいで自身にその矛先が向けられようとはリンド団長自身気付いてはいなかった。

「ん？そーいえば、この後どーすんの、リンド？」

ついでのように尋ねるユアン団長に、リンド団長は言葉を詰まらせる。

「……さては、お前、この後ユカリちゃんとデートか？！」

続けざまに浴びせられるユアン団長の質問に「どうだっていいだろ」と返してはみたものの、リンド団長はその後の言葉を続けられずにいる。

白の神殿に仕える白の巫女ユカリ・マルキアンティもまたこの三人の騎士団長の幼馴染だった。

彼女と青の騎士リンド・ハイワースが恋人同士である事は騎士団

の人間なら誰でも知っている。つまりは公然の仲というヤツだ。

僕は彼女とちゃんと話した事なんてほとんどないけど、いつも微笑を絶やさないう素敵な人だって事くらいは知っている。強く優しい彼と、穏やかな春のように微笑む彼女。騎士団の人間ならそんなお似合いの二人を誰しもが微笑ましく思っている筈だ。……ただの二人を除いては……。

仕事中に決して見る事のない困り顔のリンド団長に、少しだけ戸惑いつつも、僕はほんの少しだけ、特別な空気の中にいるような満足を感じたりしていた。

5

「リンドお前ばっかりずるいぞ！」とユアン団長が叫ぶのと同じ時に「ユカリのおっぱいはあたしも狙ってるんだからね！」とカギル団長が訳の分からない事を喚いた。

一瞬間を置いた後で、ユアン団長も「じゃ、俺も狙う！」と便乗した。

「いいかい、ロムくん。親友と書いて、カツコ、おっぱいちゃん、カツコ閉じと読むのだよ」

いつか、無駄に大人ぶった余裕で、僕に力説してみせたカギル団長の言葉がこれである。

自分にはない宝物を揉みしだいていけば、いつの日か自分にも神の御加護があるはずだ。そう言うては、カギル団長は豊満な胸を持つ親友の白の巫女を追い回していた。

獣と化した二人に詰め寄られて、たじろぐリンド団長は制するように口を開いた。

「この後非番なのはお前らだって一緒だろうが。……ユ、ユアンは

何するんだよ？」

質問に、先程までの熱を一気に冷ました様にユアン団長は言葉を絞り出す。

「予定なんて何もねーよ。一人酒だ、一人酒」

どんよりとした空気が包み込む前に、リンド団長は矛先を変えた。

「そうだ、じゃあ、カギルは？」

「えっ！？あたし」

急に話を振られた事にドキリとした表状を隠す事も出来ず顔に出した後で、カギル団長の視線は空を泳ぐ。

「えっと、だから、あたしは、その、パーティー。……そう！あたしを祝うパーティーを家族や、親戚一同が開く事になってるわ！！」

言い放つ間もずっと泳ぎっぱなしの視線を見てリンド団長やユアン団長だけでなく、僕も即座に理解した。

（嘘だ。……予定ないんだ、カギル団長）

「そ、そっかあ！良かったなあ、カギル！」

完全に気まずい空気が場を支配する前に叫んだのはユアン団長だった。

「そうかなあ、えへへ」と笑顔を振りまくカギル団長に、込み上げてきた寂しさを表に出さない様にしてリンド団長が口を開く。

「じゃ……じゃあ、そろそろ帰らないとな。そうだ、ロムも途中まで一緒に……」

その時だった。リンド団長の言葉を制するようにドムス・パオ口中に警報が響き渡った。

6

「警報！！警報！！甲虫出現！！甲虫出現！！」

劈くようにして響き渡ったサイレンの後で、館内放送がそう喚きたてた。

三人の騎士団長は真剣な顔で聞き耳を立てる。

「場所は西方！！西門を展開します！！」

続けざまに二度繰り返し返した放送を聞いてリンド団長とカギル団長は小さくガツポーズを決める。と、同時にユアン団長が「嘘だろー」と呻いた。

「せっかくの非番が」とブツブツ言いながら肩を落とすユアン団長に、真剣な眼差しで見つめ直したカギル団長が静かに話しかける。「どうせ一人で過ごすつもりだったんだし、虫と一緒になら寂しくないわよ、きつと」

わざわざ真面目な顔をして伝えたセリフがそれでは、ユアン団長も報われない。

「カギル、お前なー！！」

そう声を荒げたユアン団長の目前で、とびっきりの笑顔を作ったカギル団長がいたずらっぽく続ける。

「ほら、ロムも手を振って。我らが赤の騎士に幸運をー」

文句の一つや二つ並べてようと口を開きかけたユアン団長はそれを無理やり飲み込むと、ただ小さく「くそっ」と呟いて踵を返す。

その光景を眺めていたリンド団長は「やれやれ」と呟いた後で「それじゃ、行くか、カギル」とカギル団長に話しかけた。

「そうだね」と笑顔で返事をしたカギル団長だったが、リンド団長が歩き始めた方を見て怪訝けげんな顔をする。

戦地へおもむくユアン団長はテラスからホールを突っ切って、更に奥にある騎士の待機部屋に戦闘用の鎧を取りに行かなければならない。しかし、正門から帰るだけの僕らはテラス脇の小部屋を抜けて階段を下りれば良いだけである。だが、リンド団長はユアン団長の後を追うようにしてホールへと歩みを進めている。

「ちよつと、リンド。どこ行くの？」

カギル団長が尋ねると「西門」と即答が帰って来た。

「はあ！？何の為に！？」

小走りで追いかけるカギル団長に、リンド団長はキツパリと答える。

「記念すべき騎士礼典の日に、成りたての若い騎士の死傷者を出す訳にはいかないだろ？」

「西方守護騎士団の仕事なのに」とブツブツ文句を言いながら歩くカギル団長。

ホールの奥から「助かる！ 借りとくなー、リンド！」と大声を上げるユアン団長。

「ーコも返してもらった事ないけどなー」と返すリンド団長。

半ば取り残されたようにポツンと立つ僕へと、歩きながら少しだけ振り返ったリンド団長が声を上げた。

「何してる！ バックアップ頼むぞ、ロム！」

僕は「はい！！」と大声で返事をする、息を弾ませて駆け出した。

7

今やパラス・アズロ内の移動でしか使われる事のない馬に乗り、僕達は街の中を駆け抜けた。見ると西門脇の詰め所には続々と西方守護騎士団のメンバーが集結しつつある。

彼らは地を鳴らす馬蹄音に振り返ると、瞬きするのも忘れて立ち尽くした。それもそのはず、彼らの視線の先には青・白・赤の鎧に身を包んだこのパラス・アズロ最強の称号を持つ四方守護騎士団長のうちの三人が立ち並んでいるのだ。

三人がほぼ同時に馬から降りると、三色のマントがふわりと翻つた。その光景にほんの少しだけ目を奪われた後で、慌てて僕も馬から降りる。

「虫は！」

ユアン団長が声を張り上げると、歩み出した顎鬚あごひげの逞たくましい副官も負けじと声を張り上げた。

「先程から門に体当たりを繰り返しております！...」
小さく頷くとユアン団長は周囲を見渡しながら命令を下す。

「俺とリンドとカギルで出る！ お前らはバックアップに徹してくれ。パラス・アズロの中には決して入れるな！！」

騎士団の「「応！！！！」」という声が辺りに響く中、リンド団長は僕に耳うちした。

「ロムは上から状況報告とフォローアップ、任せたぞ」

「任せた」という言葉に反射するように僕は「はい！！」と発して駆ける。門の脇にそびえる塔の頂上目指して階段を駆け昇る最中、抑えきれない興奮で胸の奥がドカドカと高鳴った。

普通、塔からの敵状報告とフォローアップは準騎士の仕事であり、本来なら見習いの仕事などケガ人の手当てくらいのものだが、今日は違う。

今はまだ身に着ける事の許されない鎧を「俺の練習用のヤツで悪いけど」そう言って借してくれたのリンド団長だった。

人生で初めての鎧。

人から見ればそれは、簡素な作りのただの胸当てに過ぎないかもしれない。でも、僕は今、鎧に身を包み、リンド団長直々の命令を受けたのだ。

何階部まで駆け昇ったのかも興奮で分からなくなった僕の耳に、塔の窓越しにユアン団長の声が聞こえる。

「虫の種類と数は！！」

続いて塔の頂上から見張る準騎士の声が聞こえた。

「アレデントード（砂噛み）が二匹です！！」

巨大なミミズの化け物のようなアレデントードは、どんなに成長したとしてもこの塔の半分程度の大きさが関の山、団長三人の敵ではない。

そうと分かった途端、僕は安堵感に緩みかけた緊張を小さく首を振って締め直すと、全長80mにも及ぶ塔を駆け昇った。

息を切らせながら辿り着いた僕が頂上から見下ろした時、興奮で紅潮する僕の顔は一気に青冷めた。

門扉に体当たりしては転がる二匹のアレデントードを、中心点と

して描かれた規則的な円状の砂の窪み。

巨大な西門が開く音にかき消されないように、僕は大声で叫んだ。
「リンド団長！！ デグルティード（呑み込む者）です！！」

8

開き始めた巨大な西門が一人通れる隙間を作るより、僕の上げた声にリンド団長が反応する方が一瞬早かった。

門が開き次第特攻をかけようとしていたユアン団長がリンド団長にマントの裾を掴まれて尻餅を付くのと同時に、砂面に底なしのようにならびた巨大な穴に二匹のアレントードは呑み込まれる。

一息で二匹のアレントードを呑み込んだ巨大な顎を閉じた後、砂面に叩きつけるようにして這い出てきたデグルティードの全長は、僕の立つ塔を一呑み出来る程に巨大で、その姿に圧倒された僕は見張り塔の頂上で壁に背をもたれ、なんとか立っているのが精一杯だった。

デグルティード（呑みこむ者）は砂漠に生息する甲虫の中でも最大だったが、今日のそれは今までに見た事がない程の巨大さだった。

普段時計塔から僕が双眼鏡で砂漠を眺める時、遠くの空にそれを見つける事は稀にあった。しかし、せいぜいアレントードをでかくしたという程度の認識である。

巨大な顎に無数に並ぶ歯、厚く硬い甲に覆われた全身に植物の蔭^{つた}を思わせる毛が絡まる様にして生えているその姿は、朽ち掛けた巨大な丸太を連想させたが、全身からは悪い冗談のように体軀を無視した作りの手だか足だか分からない深緑の突起物がところかまわず突き生えていた。砂中の生活環境への適性が、それとまた退化しただけなのか、頭部に確認できる沢山の小さな目に光が見える事はない。ひたすら地中を掘り進み、十年に一度とか二十年に一度、地中から顔を出しては手当たり次第にある物全てを呑み込んで地中

に帰る姿からデグルティード（飲み込む者）と呼ばれるそれと出くわす事など、天文学的確率というものだ。

「最悪だな……くそっ」

砂を払いながら立ち上がり呟くユアン団長の声が塔の頂に聞こえるまでに、先程までの騎士団の熱気は消え去っていた。

9

全身を砂中から出した後で、ピクリとも動かなくなったデグルティードは本当に巨大な丸太になってしまったようだった。

「咀嚼そしやくが終わつたら、また食い散らかし始めるな……」

戦意を失い無言のまま立ち尽くす集団の中で、リンド・ハイワースは呟いた。

「食いちらかす？アイツが通つた後は何一つ残らないって」

ユアン・マクティカナルは、呆れるように答える。

「まあ、何にせよ、三人で来て正解だったわね」

げんなりとした表状でカギル・パンナインも呟いた。続けて「星<セイ>」とカギルが唱えると三人の回りを暖かな風が包み込む。

カギルの星<セイ>、風と炎の加護のサークルス天輪によつて、一時的に身体能力を引き上げた後で三人は門を抜けて歩き出す。

「とりあえず、俺とユアンで一氣に叩く……」ウズマシ「始<シン>」

リンドの剣帝ネイル・フー・トゥーンが、断ち切る刃の青い刀身を灯した。

「ま、一氣に、ともいかなそーだけどね……」ハ醒<セイ>

ユアンの剣皇ポーニロアが、炎と土の加護を受けたハオネット炎熱剣の赤い刀身を灯す。

咀嚼を済ませたようにデグルティードが少し身体を傾けた瞬間、駆けた二人はその巨体の腹部へと切りつけた。

巨大な丸太はその腹にははつきりとした×印を残した後で、顎の奥から「ゴオオ……」という呻き声を発する。

地を揺るがすその響の中で「浅いか」と呟いたリンドは続けて「来るぞ！！」と声を上げた。

巨大な丸太はただその全身を前方に倒した。それは攻撃と呼ぶにはあまりに雑な巨大さに任せてのボディプレス。しかし、その巨大ゆえに、逃げの一手しか術はない。

転がるようにして逃げた三人が振り返ると、丸太の端に押し潰されるようにして巨大な西門の一部がひしゃげていた。

手探りのようにもぞもぞと地を這い、リンド達の方へと向き直すデグルティードを見つめながら、リンドは「やっかいなのは、これからだな」と呟く。

不意に聞こえ始めたザワザワという羽音が、やがて辺りを埋め尽くした。

10

砂漠に住む生物の中でも砂羽蟻サンド・アントの生態は特殊である。

砂羽蟻はデグルティードの身体と外甲の隙間に生息しデグルティードの皮脂腺、汗線より出る排泄物を主要な食料としていた。

連中にとつてデグルティードは共生生物ではなく、巣<コミュニテイ>なのである。

彼らは今、コミュニテイの危機に際して立ち上がった。

デグルティードの外甲の隙間から次々と手の平大の蟻が飛び立つ。

先発隊ともいうべき蟻の一団がリンド達目掛けて急降下し始めた時、カギルの『狼 口ウ』、風と水の加護を受けた、敵討つ風の矢が續々とそれを射ち落としていく。

カギルに助成すべくユアンが六連装の始<シ>、炎弾リボルバーへと切り替えるのを見て、リンドが「待て」をかけた。

既に撃ち込む気でいたユアンは、宙を舞う六つの火球越しにリンドへと振り返る。

きりが無いように、際限なく出では舞う無数の蟻達をスピカの矢でカギルが射ち落とし続けている中で、リンドはユアンへと話し掛けた。

「蟻退治を続けたって意味はない。蟻は自分達のコミュニティを守る為に戦ってるんだ。コミュニティ自体、つまりデグルティードを潰せばあいつらは霧散するはずだ。……カギル!!!」

少し離れた位置で蟻退治におわれていたカギルは矢を射つ手を休める事なく、リンドとユアンの元へと駆けた。

自分達が倒すべき外敵が一点に集まった事を理解した蟻が総攻撃をかけるべく突撃してきた瞬間、リンドは「早くロウ>!!!」と叫んだ。水と風の加護を受けた絶対防盾、氷壁はリンドの目前を覆うようにして展開すると、次々と蟻はそれにぶつかっては落ちた。

空中で急停止する蟻と、地に落ちた後再び飛び立ち始めた蟻を確認した後でリンドが「砕ける!!!」と叫ぶ。

粉々に砕けた氷壁の乱反射に蟻は完全に方向を見失った。リンドが「カギル!」と叫ぶ同時にカギルは目前にスピカの矢を放つ。

矢は辺りを覆う乱反射の空間に、蟻の死骸と氷壁の欠片を更に砕いた粉塵をつくりながら道を成した。

その道へとユアンは一気に駆けた。トンネルを抜けた先でユアンが見たものは二度目のボディプレスの為に再び巨体を持ち上げたデグルティードの姿だった。

「させつかよ……」楼　ロウ　「!!!」

ユアンの右肩の宙を舞う六つの火球は一つに集まり圧縮されると、轟々と燃える赤い完全な球となって右手にもつポーニリアの剣先に灯った。

巨体を今まさに倒そうとするデグルティードの腹部、先程、リンドと付けた×印の重なる点目掛けてユアンはポーニリアの剣先を突き刺した。

「弾ける!!!」

その瞬間、デグルティードの体内で、炎と風を加護を受けた、凝縮されし紅は轟音を上げながら爆ぜた。

腹部に巨大な穴を空けた後、フラフラと全身をわななかせながらデグルティードが仰け反るように後方に倒れると、おびただしい量の砂塵が舞う。

少しの沈黙の後、デグルティードの外甲の隙間から一際大きな蟻が顔を出した。おそらく女王蟻であろうそれが飛び立つと、蟻達は付き従うようにして東の空へと消えていく。

塔の頂上から一心不乱に「デグルティードを倒した！」と何度も叫ぶロムルスの声が聞こえる。

西方騎士団の面々からも歓喜の声が響き渡る。

その歓声の中、爆風で飛ばされ砂に埋もれるユアンに、リンドは手を差し伸べた。

第三章 残念なお知らせとエリスティンの死

第三章 残念なお知らせとエリスティンの死

1

パラス・アズロの空を厚い雲が覆っていた。

騎士礼典の日の青空が嘘のように埋め尽くす曇天の空は、時としてバケツをひっくりかえしたような雨を降らしている。

騎士礼典の、巨大なデグルデイドの襲撃の日から三日が経とうとしていた。

あの後、現場の事後処理を西方騎士団に任せて僕達は帰途へとついていたが、馬をドムス・パオロに戻しに行ったり、鎧を片付けたりしていたら、結局家に帰って来られたのは夜も大分更けた頃だった。「早く帰って来ると思ったのにさ。ご飯、もう冷めちゃったよ」時計塔の三階にある部屋に入ると、先に食事を済ませて早々にベッドに潜り込んだ弟のレムルスが毛布から顔を半分出して言った。騎士礼典の日は早く帰れる。僕はそう話していたから、一緒にご飯を食べようと準備していてくれたらしい。レムの顔は少しだけむくれているように見えた。

「ゴメン、ゴメン」と僕は謝りながらベッドの端に腰掛ける。そして、今日見てきたばかりの騎士団長の活躍を話して聞かせた。身体の弱いレムは、自分では体験できないその冒険譚を、目を輝かせながら聞いている。

自分の事のように興奮ぎみに話していた僕は、やがてすやすやと寝息をたてて幸せそうに眠るレムに気付いた。

その顔に「おやすみ、レム」と小声で呟くと、冷めてしまった食事へとありつく。

パンとスープ、それにチキンのステーキ。冷めてしまってもそれ

はレムが腕をふるって作ってくれただけに、とても美味しかった。スープを口に運びながら、僕は眠ってしまったレムに話せなかった冒険譚のその後を思い出す。

ドムス・パオロからの帰り道、くたびれた顔のカギル団長が愚痴っていた。

「ユアンのせいでせつかくの非番が台無しよ……」

口を尖らせたカギル団長は、弁解するユアン団長の言葉に耳を傾ける事なく続けた。

「……今日は早く帰って、花騎士はなきしの新刊読もうと思ってたのに」

最近、引き籠もり傾向が酷くなったカギルは、理想の恋人を書籍（主にマンガ）に求め始めたらしい。とは、リンド団長の言葉であり、中でも現在十三巻まで発行されている「花咲ける騎士団」は特にお気に入りとの事だった。

……とは言え、「これから自分を祝ってくれるパーティーだ」などどわざわざ見栄をはって嘘までついたのに……。

微妙な空気の中にいる三人を尻目に、当の本人は全く気付いていない。

その微妙な空気に耐えられないように、驚く程素直に「ゴメン」とユアン団長が謝るのを僕は始めて見た。

僕はそれを思い出して、レムが目覚めないように、小さく笑った。

2

僕が時計塔の三階にある自分達の部屋の窓から、今にも泣き出しそうな明け空を見上げているとベッドの中で毛布に包まるレムが口を開いた。

「この星も僕と同じで病気なんだね」

レムは時々、独自の言い回しで話す事があって、僕はその度ドキリとさせられる。

その度に作るいつもの表状、不敵な笑みを繕った後で、僕はレム

へと振り返った。

「ほう。レム先生、それはどういう意味ですか？」

僕からの問いかけに、レムはさして考える風でもなく答える。

「だってさ、ロム。こうして天候はなんの問題もなしに変わっていくんだよ。時々こうして雨は降るし、冬になれば雪だって降る。それなのに、日々世界の砂漠化は止まる事なく進んでるなんてさ。そんなのって、病気以外に考えられないよ」

レムの話聞いて僕はただ「うーん」と唸るのが精一杯だった。

確かにパラス・アズロの貯水庫が干上がる事もなく、雨はこうして時々降ってはいたが、砂漠には水たまりも植物も存在してはいない。大陸の果てには「海」と呼ばれるものが存在するらしいので、砂漠に降った雨は砂の中を通してそこに流れ出しているのかも、なんて思った事はあつたけど、僕はそもそも海を見た事がないから偉そうに説明する事も出来ない。

世界は一見して何の機能も失つてはいないように見えるのに、日々進行する砂漠化。その説明としてレムの「病気」という表現は間違っていないようにも思える。

「じゃあ、どうすれば治るのかな？」

僕が質問するとレムは笑みを浮かべた。

「そんなの僕が分かる訳ないよ。そもそもだよ、ロム。僕が世界の治療法を知ってるくらいの人間なら、世界より何より、まず僕自身の病気を治してるよ」

レムは努めて明るくそう言った。

けれども僕は知っている。

レムの体調が日々変化している事や、天候に左右される事を。この重苦しい空と空気はレムの身体を僕が思っている以上に苦しめているのだろう。それでもそれをおくびにも出さないでいる以上、僕もそれに気付かないようにしなければならぬ。

「それも、そうだね」

僕はそれだけ言つて、レム以上に笑つてみせた。

時計塔の入り口から見た曇天の空は、それでもまだ泣き出さずにいてくれている。

「午前中いつぱい降らないでくれると良いんだけどなあ」

不意に呟いた声が聞こえ、僕が振り向くとそこには時計塔の一階に住むペノツテおじいさんが立っていた。

かつては時計塔の整備をその高齢にも関わらず一人でやっていたおじいさんが、僕へと微笑む。

半ばおじいさんが趣味で描く油絵のアトリエと化していた大時計以外に何もなかった広だけの室内は、放置しておくのも勿体無いだけだし、何より大時計の整備を僕がするのはとても助かる。そう言つて僕達が時計塔で暮らすことを快諾してくれたおじいさんは、それ以来何かと僕達の面倒を見てくれる。

その代わりと言つたら何だけど、暇を見つけて僕はおじいさんのギムリス（アウレリア式将棋）の相手をする。

（ちよつと前までは全然だったけど、今じゃ三回に一回くらいは勝てるようになったんだ）

おじいさんが「行つてらっしゃい」と言つのを聞いて、僕は「行つて来ます」と元気良く挨拶をして歩き始めた。

パラス・アズロの西部にはこの移動城塞都市のメイン機関ともいふべき動力炉があり、東部には生活の要ともいふべきパラス・アズロの貯水庫たるダムが設置されている。

今日は週に一度、東方守護騎士団長たるリンド・ハイワースがダムの視察を行う日だった。

視察には勉強の意味を含めて騎士見習いが一人同行する。今日の騎士見習いはまさに僕だった。

憧れの団長と半日という長い時間、一対一で話せる機会などそう

そうなく、僕の胸の内はいやがおうにも高鳴った。

僕が運んだ薬を飲んだ後、僕に苦しい表状を見せない様に毛布に潜り込んだレム思い出しては申し訳ないような気持ちを感じつつも、僕は抑えきれない高揚を抱えたままで歩を進める。

パラス・アズロの町中には「バー」呼ばれるカフェがいくつも点在している。夜間はアルコールも提供する小さな造りのそのバーの中でも、時計塔から程近いヴェッタ通りの角の、気の良いアロルド夫妻がその息子が切り盛りする二階屋の小さなバーは、騎士団馴染みの店として町でも有名だった。

木造りのスイングドアを開けると、丁度夜から日中への店の切り替え時だったらしく、夫妻の長男で深夜営業から解放されたマルコと、朝の仕込みに追われるアロルド夫妻が迎えてくれた。

「なんだ？　ロム、ずいぶん早いな？」

あくびまじりに、無精ひげを生やしたマルコが僕に尋ねると僕が答えるより早く、店主たるエンツォ・アロルドが口を開いた。

「ロムは今日、視察でダムに行くんだ。ほら頼まれてたサンドイッチ。リンド団長のと二人分な」

時刻は朝の七時半、慌ただしくなり始めた店内で、立ち飲みの客達にコーヒーを注ぎながら話す彼の立ち振る舞いは手馴れたものだ。リンド団長との待ち合わせ場所に約束より三十分も早くついた僕は、たまにはゆっくりと座ってコーヒーでも飲みながら待っていたよつかと店内を見回したが、すぐに見てはいけない物を見つけてしまった事に気付くと視線を逃がした。

だが、時既に遅く、その所作は後の祭りだった。

4

「ロム！」「ロム！」と店内に響く声。そして、手招きされる方へと僕は渋々歩いていった。

その道すがら、マルコが僕の耳元で「今日はガラの悪い客が二人

いるから気いつけるよ」と囁く。

声の主の前へと歩みを進めると、わざとらしい程の大声で僕は挨拶する。

「おはようございます！ ユアン団長！」

団長と言つ言葉に、立ち飲み客がちらちらと振り返るのが背中越しにも僕は分かった。

西方守護騎士団長ユアン・マクティカナルは上半身をテーブルにつぶしたままの姿勢で「えっ？もう朝らの？」と呟く。

完全にろれつの回っていない赤の騎士に促されて、僕は椅子に腰掛けた。

「ロムも何か飲むか」とアルコールくさい声で話しかけるユアン団長に僕はかぶりをふる。

正直コーヒーを飲む気も失せてしまった僕は小声で尋ねた。

「ユアン団長、今日仕事じゃないんですか？」

「仕事らよ」と答えたユアン団長の目は完全に座っていた。聞けば三軒ハシゴして、このホールには朝の三時から居座っているらしい。

「いいんら、ロム。俺は勤務に実直に勤しんでいるのだから、サリーくんと違って」

訳の分からない屁理屈を並べるユアン団長に苦笑を浮かべる事しか出来ない僕は、次の瞬間凍りついた。

「ユアン。俺はお前と違って非番なんだよ」

ざわつき始めた店内でもよく通るハスキーボイスの方へと振り返ると、店の角のテーブルに北方守護騎士団長サリー・サレスと彼の恋人、黒の占星術師ベアトリス・カラーチエが座っていた。

いつもと同じポーカーフェイスながら、ほんの少しだけ面倒くささを滲ませるサリー団長と、ユアン団長の戯言など初めから興味もないように紫煙を燻らせるベアトリスさんから逃げるように逸らした視線で僕はユアン団長へと目で訴える。

(頼むから、酔いに任せて、これ以上絡まないで下さい)

しかし、そんな僕の思いなど感じ取ってくれる事もなく、酔っ払いは酔っ払いとして、酔っ払いらしい口上を並びたてた。

「ロム！ あの人らちはあれら、きつと夕べはオサレなレストランとかれ、食事して、ワインろか飲んれ。酔い覚ましのコーヒーなんれすすつた後は、二人してしけこむ気らぞ。そしれ、あんら事やこんら事を……」

満を持してのユアン団長の暴言の最中ではあったが、紫煙を燻らすベアトリスさんは一言だけきっぱりと言いつつ放った。

「おおむね、その通りだけど」

暴言を吐くのをピタリと止めた後で、頭をテーブルに打ち突けるようにして倒れこむとピクリともしないユアン団長を見て、僕は泣いているのではないかと思った。

5

一連のやりとり遠目に見ていた立ち飲み客が、いたたまれないように続々と店を後にするに至り、エンツォ・アロルドの妻ナツエ・アロルドは「とんだ営業妨害だね」としみじみ呟いた。

ユアン団長には悪いけど、これで開放されると内心でほっと溜め息をついた僕が、死んだように動かないユアン団長を刺激しないよう椅子から立ち上がるうとした時、夜の営業時だけ使用されるバルの二階側から女性の声が響いた。

「違うよ！ それはトイレじゃないよ！！」

間髪入れずに階段を数段転げ落ちた女性の服の端を、連れの女性が必死で掴んでいる。

階段にうつ伏せている女性の顔は、涙と鼻水でぐしゃぐしゃだった。しかし、その涙はどうやら階段を転げ落ちたせいではないらしい。

態勢を直しながら、その女性は連れの女性へと切々と訴えた。

「最早あたしを癒せるのはユカリのダブル・マシユマロしかないん

だよ。ユカリのダブル・マシユマロをあたしに下さいー!!」

這いつくばったままで、連れのユカリ・マルキアンティへと両手を高く差し出すぐしゃぐしゃの顔の女性に僕はドン引きした。

(……カギル団長だ……)

困惑と怯えの表状のユカリさんは、僕に気が付くと逃げるようにして階段を駆け下りる。

少しだけウエーブがかった栗毛色の髪がふわりと宙に舞った。

僕の前まで駆けて来ると僕よりちよつとだけ背の高い彼女は「おはよう、ロムくん」と言つて微笑む。

得体の知れない生き物のように、四つ這いのままで階段を下りたカギル団長も彼女を追つてやってきた。

そんなカギル団長の事などおかまいなしに、ユカリさんの焦げ茶色の大きな瞳に僕が見とれているとカギル団長は嗚咽おえう交じりに呻いた。

「ロムう、ロムう、聞いてよ、エリスティンが、エリスティンが……死んじゃったよう」

子供のように泣きじゃくる彼女に僕は焦る。

(死んだ？ エリスティン？ 誰だ?! 聞いた事ないぞ……)

「カギル団長、ひよつとして南方守護騎士団の方が……」

泣きじゃくり、会話にならない彼女の代わりにユカリさんが僕に説明してくれた。

「違つたよ、ロムくん。『花騎士』のエリスティンが死んだのよ。姫を助ける為に爆弾を抱えてドカーン、て」

僕は啞然とした。カギル団長に。そして、花騎士に(騎士なのに爆弾抱えてドカーン、なんて……)

言葉もない僕の脇を抜けるとカギル団長はテーブルにつつぷせるユアン団長の肩を激しくゆする。

現実の世界へとゆり戻されたユアン団長は……やっぱり泣いていた。

「ユアンー!!! エリスティンが!!! エリスティンがー!!!」

「カギルー！！　なんでだ！？　なんで俺はもてないんだー！！」
全く会話が噛み合ってもいないのに、肩を抱き寄せて号泣する二人を僕がただ呆然と見つめていたまさにその時、スイングドアの開く音がした。

「おはよう、ロム。そろそろ行こう……か……?!」

尋常じゃない事態を察したリンド・ハイワースが、入って来たドアへと踵を返したのは、訳の分からない事を喚きながら泣きついてきた二人にとりつかれた後だった。

6

「やれやれだな」

リンド・ハイワースがそれを口にするのは、ダム施設の視察に訪れて早四度目だった。

それが彼の口癖だとしても、彼が一日の内にそれを四度も口にする事も、無意識のうちに溜め息を二度吐くのも僕は初めて見た気がする。

普段は部下に決してそんな表状見せる事のない人だけに、僕は心配する反面、得したような気もしていた。

あの後、泣き疲れたようにスヤスヤと眠り始めたカギル団長を「少し休んだら私を送っていくから」と言ってくれたユカリさんに託し、連絡し駆け付けて来た西方守護騎士団の面々に引きずられる様にしてバールを後にしたユアン団長の無事を見送り（その間、彼はずっと喚きちらしてはいたが）僕とリンド団長はようやくにして悪夢から解放された。

「馬鹿馬鹿しい……」

僕達より一足先にベアトリスさんを伴ってバールを出たサリー団長の去り際の呟きに、なぜか僕もリンド団長も身内の失態を見られたような気恥ずかしさを感じている。

そんな訳で、視察の開始時間は遅れに遅れ、本来なら午前中いっぱいでは終わるはずの予定が、終了したのはもはや昼下がりと呼ばれる頃合だった。

「リンド団長、お疲れ様でした」

僕が告げると、我に帰ったように団長は僕に何度も謝罪の言葉をかけてくれた。

あれは僕にとってもリンド団長にとっても想定外の出来事だった。追い立てられる様にして視察して回る最中、僕達はほとんど会話らしい会話の一つもしていない。

団長の謝罪に何度も僕は「団長のせいじゃないです。気にしないで下さい」と伝えたが、聞けばリンド団長は僕に伝えようと思っていた事がいろいろあったらしい。さすがに僕も「気にしないで下さい」と口では言いつつもその時ばかりは、あの酷い酔っ払い二人組を恨んだ。

ダム施設の出入口まで歩みを進めていた僕とリンド団長は、これから東方守護騎士団の本営たる東門近くの詰所まで帰る。しかし、ダム施設の出口まで来た所でリンド団長は立ち止まると、空を見上げた後で、思い出した様に「そう言えば……」と口を開いた。

それは、僕の「気にしないで下さい」の弱々しい声色に気付いた彼の優しさだったのかもしれない。

「ロムにサンドイツチ買ってもらったつてのに、昼ごはんもまだだつたな。天気もこんな調子だし、少しゆっくりしてから帰ろう」

昼前まで持ち応えてくれた天候も、今やどしゃぶりの極みである。どんよりと薄暗い空と降りしきる雨、その中で僕だけが晴れ間を覗かせる様な表状で大きく頷いた。

昼休憩の終わったダム施設の休憩室は繁雑さが目立ったが、僕も

リンド団長も気にする事なくテーブルを挟んで腰掛けた。

リンド団長は青色のマントを外し、椅子に掛ける。

軍服の色の強い、詰襟のある黒い制服の彼の胸元で東方守護騎士団の紋章たる龍をモチーフにした銀作りの勲章が揺れた。

僕は休憩室にあるコーヒーメーカーから少し煮詰まり気味のコーヒーをカップに注ぎ、バールで買っておいたサンドイッチを広げる。アロルド氏手作りのサンドイッチは美味しいと評判ではあったが、味など忘れるくらいに僕は団長の話を一言一句もらさないよう身を乗り出しては聞き、そして時に他愛もない話に二人声を上げて笑った。

楽しい時間はあっという間に流れる。話に夢中で、いつの間にかたいらげてしまったサンドイッチのパンくずだけが落ちているテーブルの上に僕が視線を落とした時だった。

「ロムは夢つてあるか？」

休憩室に流れたリンド団長の声は驚く程に静かで優しい。

僕は視線を上げてリンド団長の顔を見つめた。

……騎士になる、という夢を持ってはいても、それは漠然としたものだ。上手く言葉を続けられず、ただ悩むだけの僕にリンド団長が微笑む。

「悩める時は沢山悩んだ方が良い。一つずつ答えを見つけていく過程こそが成長なんだから……ロムはもちろん『対話』を知ってるな？」

剣との『対話』。

騎士団の人間なら誰でも知っているであろう騎士の基本。

それは、剣との対話を繰り返すことによって得られる剣の道であり、「死（始）」から始まり「創」へと至る剣の奥義。

僕は小さく頷く。

「騎士の持つ剣には魂がやどっている事も知ってるな？」

リンド団長の問いかけに僕は再び頷いた。

正騎士と呼ばれる各団、二十人の騎士が持つ二十本の剣にはそれ

その団長の持つ神具ハルモニアの魂の一部がやどっている。「創くソウ>>」へ至る事は出来なくても、対話次第では彼らも「老くロウ>>」や「青くセイ>>」へ至る事が出来た。

無論、それも騎士団の人間なら誰しもが知っている事だ。

魂の一部しか持たない剣で直「創」へと至る事が出来た選ばれし者。それが騎士団長なのだから……。

「魂を持たない剣でも対話は出来る。言ってしまうえば、それはつまるところ自分との対話だ。沢山悩んで自分にしか出来ない夢を持ってそして騎士となったら、その夢を叶える為に剣との対話をするんだ。夢を叶える為の力、それは時として凄く危うい物かも知れない。でも、それを受け止めてこそ本当の騎士になれる。……そして、ロムならきつとそうなれるって、俺は信じてるよ」

あまりに真つすぐなリンド団長の瞳と言葉に、僕は呼吸するのも忘れそうになる。真つ白になりそうな頭の中で、僕は考える事もほとんど出来ずにただ尋ねた。

「……リンド団長の夢は、何ですか？」

僕の質問に「ロムくん、夢なんてものは容易く人に話すものじゃあないよ」そう言って彼は少しいじわるそうに笑う。

そもそも団長が聞いてきた事なのに……。ひよつとしたらからかわれただけなのか、そう思って僕も笑おうとした時、彼は少しだけ遠くを見つめるようにして口を開いた。

「……でも、しいて言うなら、運命の時に力の限り足掻あがけるって事かな」

運命を「切り開く」じゃないのかな？ 僕の心の中で小さく浮かんだ疑問は彼の話の続きを聞く中で静かに消えていった。

「……最近、よく同じ夢を見るんだ。ユアンとカギル、サリー先輩……そして、少女と旅をする夢」

その面子なら最後の一人はユカリさんのはずだ。けれどもそれがユカリさんなら、リンド団長が言葉を濁す必要も無い筈だ。

その疑問を僕が口にするより早く、彼は立ち上がると掛けていた

マントを羽織る。
「そろそろ帰るとするか」

椅子に掛ける僕を見下ろすリンド団長は、いつもの優しい表状を浮かべるだけだった。

8

夢を見た。

昔話のように懐かしく、昨日の事のように鮮明な夢。

得体の知れない影は敵なのか味方なのか分からない。だが、その影に向かってリンドは力の限り吼えていた。

その隣で剣を手に身構えるユアンとカギル、そして少女。

美しく長い金髪をなびかせるその少女がゆっくりと振り返る。

その少女の顔をあとわずかで見る事が出来る、その瞬間、視界をどこからともなく広がった白い光が包んだ。

画面全体を白が覆った所で、サリー・サレスは目を覚ます。

(また、同じ夢か……)

まだ、おぼろげな視界の中、内心で呟いた。

シチュエーションも風景もいつもまばらだったが、夢の中で彼はいつも旅をしていた。

リンドとユアンとカギル、そして名も知らぬ少女。夢の中で旅をする面子がいつも同じなら、少女の顔を見られずにして夢から覚めるのも、いつもと同じだった。

おぼろげな視界が晴れ、現実世界へと戻った彼が横になるベッドの隣には、温もりだけが残っている。

彼は横になった姿勢のまま首だけ傾けた。

昼から夜へと時が変わりゆく途中、あたりは薄暗くなりつつあったが、電灯を灯すには少し気がひけるような時間帯の沈みかけた陽

の残灯の中で、ベアトリス・カラーチエは佇んでいた。

下着姿で化粧を直し終えたベアトリスは、鏡越しにサリーの目覚めに気付く。

「ごめん、起こしちゃった？」

サリーへと近づく彼女の言葉のトーンに感情の色は見られなかったが、切れ長のはつきりとした二重の瞼は微妙に動揺している。

上半身だけ起こしたサリーは、彼女が悪い訳ではないという様にそつと差し出した右手で彼女の頭を撫でた。

はたから見ればベアトリス・カラーチエの喜怒哀楽を読み取るのは困難だったが、サリー・サレスだけは彼女の感情の機微をさも当然のごとくに読み取る。

サリー・サレスの右手に自身の左手を添えたベアトリスの目頭がピクリと震えた。

彼女の満面の笑みだった。

当然、それを理解しているサリーも微笑む。

「もう、行くのか？」

サリーが尋ねる。

パラス・アズロの平和を祈願する白の神巫と違い、パラス・アズロに降りかかる災厄を占う星視ほしみをその定めとされる黒の占星術師が、その務めを行うのは夜と決まっていた。

「今日は神託しんたくの日だから」

いつもより入殿には早い時間を気にして尋ねたサリーの問いに、ベアトリスはそう答えた。

月に一度、満月の夜にはより明確な星視を行えると言われている。それが神託と呼ばれるものであり、その日はドムス・パオロで星視を行うのが慣なわしであった。

サリーはベアトリスの返事に「そうか」とも、「気をつけて」ともましてや「寂しい」などと言う事もない。代わりにこれから出か

ける彼女の唇に自分の唇を軽く重ねた。

ベアトリスは黒の占星術師の礼装たる薄い紫色と黒のローブを身に纏うと部屋を出る。だが、出がけに少しだけ振り返り、サリーの顔を見つめた後、目頭をピクリと震わせて見せた。

9

ドムス・パオロにはそうそうたる面子が既に集まっていた。

賢王シャルナアプ・ウーデルカ。

四方守護騎士団総長ガンド・マギアス。

幾重にも重ねたローブから美しい顔だけを覗かせた女性。白の神官、アラベル・フラン。

重騎士のような甲冑のせいで容姿はおろか、性別すら不詳の黒の神官、キーラ・バレンシア。

ドムス・パオロの最奥にある祭壇へと通じる小さな部屋で、持徒の占星術師達に聖水と称する冷水で身を清められた後で、神託用の正装へと着替えさせられたベアトリス・カラーチエはシャルナアプをはじめ、総々しい面子が待ちかまえる祭壇へと入った。

黒の神官キーラが促すようにして広げた右手の先には既に星視用の占星板と少しだけ大きな作りの水晶玉、そして球状にカットイングを施された、きらきらと輝く色とりどりの宝石が用意されていた。ベアトリスがそこへと辿り付くと同時に、持徒の占星術師達がベアトリスの前を阻むがっしりとした造りのかんぬきを外し窓の木戸を開いた。

小さな造りのテラスへと歩み出たベアトリスは空を仰ぐ。

持徒の占星術師が広げた基盤の目のように穴の点在する占星板の中心に水晶玉、月の位置にムーンストーンの球石をはめ込む。

空にはこの時、連日の天候が嘘のように雲一つなかった。

都合の良い程に晴れた夜の空を見渡しながら、ベアトリスは次々と宝石をはめ込んでいく。その時、どの星が重要であるか。星の輝

きの見極めこそが正に占星術師の星視の難しさであり腕の見せ所である。つまりは、一見して同じ輝きに見える二つの星のどちらを切り捨て、どちらを重要ととるか。また、そのどちらもが重要である事も、そのどちらもが重要でない場合とてあるのだ。

そこに至るのは何十年と研鑽けんさんを重ねたベテランでも困難といわれる星視の世界で、若干二十二才のベアトリス・カラーチエは実に迷い無く、次々と宝石をはめ込んでいった。

周囲を見守るようにして並ぶ、待徒の占星術師の一人から不謹慎にも感嘆の溜め息が漏れる。

一度も躊躇ためらう事無く、次々と宝石をはめ込むベアトリスが最後の宝石をはめ込もうとした瞬間、北西の空から一筋の流星が駆け落ちた。

最後の宝石をはめ込んだベアトリスの指が少しだけ震えた。

滞り無く星視を終えたベアトリスがテラスから祭壇へと戻ると、窓のかんぬきをはめ込む間も無く 「で、神託はなんと？」とシャルナアプが尋ねる。

ベアトリスは小さく頷くと口を開いた。

「パラス・アズロを取り巻く環境は、四方守護騎士団がある限り万全でしょう」

満足気な表状でシャルナアプが頷く。

しかし「ただ…」と続けたベアトリスの話にシャルナアプの表状は一気に曇った。

「間もなく、北西より厄災が訪れます」

右の眉を吊り上げて、片眼だけ射るような眼光のガンド・マキアスが「北西だと？」といぶかしむ。

「……剣王ル・シウスか……？」

呻くように呟いたシャルナアプに、ぎよつとした顔のガンドが口を挟んだ。

「しかし、ル・シウスが帝都を奪取したとはいえ、周囲を砂漠に覆われている以上、閉じ込められているも同じ、進軍など行えるはず

も…………まさか…………」

ガントは自身の提言の途中で、頭に浮かんだ懸念に言葉を詰まらせる。そして、それはシャルナアプが抱いていた懸念と同じであった。

「…………まさか、完成させたというのか！ ガンダルノヴァを！！…………」

飛空船艦「ガンダルノヴァ」の製作に、今は亡きアウレリア帝国が取りかかったのは今から七十年前の話である。

元々ガリア族討伐の前線へと送られるはずのそれは、時同じくして開発の進められていた移動型城塞都市パラス・アズロの完成に伴い、完全に打ち切られた筈の計画だった。

老騎士の身体は年相応のものではない震えに包まれる。

「前皇帝が砂漠の驚異から逃れる為に計画の再開を命じた可能性は十分にある。パラス・アズロと同じ移動型城塞都市を造るのは、資源を砂漠に呑み込まれた今となつては無理だろう。だが、パラス・アズロに遅れはとつていてもガンダルノヴァも六割方完成していると聞いている」

使い物にならない老騎士に変わり、冷静さを取り戻した賢王はよく働く頭で整理をしながら話を続けた。

「ル・シウスの反乱が成功したとはいえ、おそらく帝都の食料はもう尽きかけているはず…………」

そして、締めくくった。

「…………剣王は、死にもの狂いで来るぞ」

第四章 開戦前夜

第四章 開戦前夜

1

傍らに流れる雲の縫目に、稲光が走るのに気が付くと男は目を覚ました。

飛空船艦ガンダルノヴァは、月光に照らされながら夜の空を駆けている。

せわしなく船の航行の作業に追われる乗組員達を見下ろすようにして作られたガラス張りの部屋の、彼だけが座する事の出来る特注の玉座で彼はゆっくりと両眼を開く。

誰もが見上げる程に他に類を見ない背の高さと、その長身をしてもアンバランスに感じられる手足の長さ。それ程の体軀を持っていながら、ひよろりとして見える程に身体は細く、顔ものっぺりとして人の目に留まるという容貌ではなかったが、そう見られるのを嫌がったかの様に彼の両の耳にはピアスへと加工された色とりどりの宝石が併せて十個、無駄すぎるまでの輝きを放っていた。それは、彼の十本の指で色様々な輝きを放つ巨大な指輪同様、王族達を殺して奪った物であった。

男の名は剣王ル・シウス。第六十七代アウレリア皇帝の妾の子であった彼は、半年前に皇帝とその子息、王族に連なる者のほとんどを殺すと、初代シウス王国の王へと即位した。

類まれなる武力を持って帝都を奪い取った剣王だったが、その帝都にはもはや幾許いくばくの価値もないと気付かされたのは、クーデター成功をしての事である。

完全なる勝利と、自分と母へ苦汁を飲ませ続けてきた王族達への

復讐、その酔いから覚めて後、思い知らされたのは、自分がどうにかする、しないに関わらず、栄華を誇っていたアウレリア帝国は既に虫の息だったという事実だった。

帝国は既に破れていたのだ。自分にではなく、砂漠との戦いに。

かりそめの栄華など所詮ハリボテで、実際には食べる物にも困窮する実情に、長い時間を掛けて練り上げてきたクーデターはその計画自体失敗であり、自分の人生すら無駄だったという絶望の淵に陥った彼は、アウレリア帝国最後の皇帝として、帝国の滅亡に立ち会おうという気にすらなっていた。

その彼に、間もなく訪れた報せはまさに朗報だった。

亡き先帝が秘密裏に造らせていた完成間近の飛空船艦ガンダルノヴァが、王宮脇の施設より発見されたのである。

もし、クーデターの時期がずれていれば、完成したガンダルノヴァで王族達は都を捨て、逃げ伸びていた事だろう。

その報せに改めてクーデターの成功を確信したル・シウスは、間髪入れずにガンダルノヴァの完成を命じた。

それから半年、食料も既に尽きかけた。……だが、それがどうした？ 何の事はない。これから始めれば良いのだ。

その手始めにまずやらなければならない事、新生シウス帝国の遷都。その場所は既に決まっていた。

「あと、どれくらいで着く」

剣王ル・シウスの低くしゃがれた声が室内に響いた。

「今しばらくの辛抱です我が王よ。パラス・アズロ到着まで十六時間間を切りました」

ル・シウスの後ろに控えるいかつい体格に、いかつい顔をしたボウズ頭の男が答える。

のっぺりとした顔立ちの感情の読み取れぬ男の胸の内が静かに、しかし、力強く鼓動を刻んだ。

パラス・アズロは夜の訪れと共に慌ただしくなり始めた。

騎士団には緊急招集がかけられ、決して夜の移動などする事のなかった移動型城塞都市は、重く太いその四定を交互に震わせながらゆっくりとした移動を開始した。それは何かを迎え撃つ為の態勢を整えるようにも感じられる。

騎士団の召集は夜の内に始まったが、それも騎士に限った事であつた。準騎士や見習いに関しては夜が明けてからドムス・パオロへと集まるようにとのお達しである為、何が起こり始めているのか、僕にもまだ分からない。

ちよつと前までは騎士団長の面々と容易く肩を並べて歩いていた身としては、自分の差というものを改めて思い知らされた訳だが、それでも少しだけつま弾きにされたような気がして、僕はむくれながら時計塔の窓から街を眺めていた。

グオーン、グオーンという排気音と共に移動するパラス・アズロの街並みは揺れたが、幼少の頃よりそれに慣れているこの国の民が酔うまれという事は稀である。

揺れる街並みをぼんやりと眺めていた僕の視線の先、パラス・アズロ移動時の外出禁止令の為に人一人いないはずのひっそりとした街路に三人の白装束の影が映った。

先頭の少し背の高いその人が、白の神官アラベル・フランである
と気付いたのは間もなくの事である。それなら、と神官の後ろに付き従つ従者を、目を凝らして見たが背格好からして二人の徒者の内どちらかがユカリさんだという事はないようだ。それを確認した後で、僕は小さく呟く。

「……………黄砂病ウヤクサヤミが出たのか」

白の神官の後ろを歩く徒者の一人が抱える白い布から、赤子特有の小さく可愛らしい手が伸びていた。

黄砂の広がりと共にパラス・アズロに一つの奇病が出現するようになったと言われている。

通称、黄砂病と言われるそれがどういう症状なのか僕は知らない。ただ非常に強い感染性と致死率の高さから、乳幼児の内に発見され次第その子供達は特別な施設に送られる事になっている、らしい。けれども、聞いた話によると、治療の甲斐もなくその子供達が十歳を迎えるまでに生きていた例はないという事だった。

小さくなりつつある白い影を眺めながら僕は、あの子は父母から引き離され施設に入れられるのだ、とぼんやり考える。

やるせない気持ちの中、僕は窓の外から室内へと視線を移した。ベッドでは、既に寝息を立てているレムルスが毛布にくるまったままで寝返りをうつ。それを見て、僕は今見た光景を払拭するように小さく首をふった。

僕達には父も母もない。

五年前のある日、理不尽な事件のせいで両親は二人共殺された。それでも僕達が生きているのは、一人の騎士に命を救われたからだ。命を救われたとはいえ、その前から今までも、そして、おそらくこれから先も、病気がちなレムルスは苦しい人生を歩む事になるだろう。だが、白の神官に連れて行かれたあの子供がこれから数年先に死んでしまう事を考えれば、こうして生きているのだ。

「僕達は生きてる。そしてこれからも、二人で生きていくんだ」
僕は呟く。

二人でこうして生きていられる事を奇跡と呼ぶなら、その奇跡が起きたのは紛れもなく五年前のあの日。

その時、僕達の前に現れた騎士、リンド・ハイワースの事を、僕は静かに思い出す。

「シクロはどうしてる？」

ル・シウスのくぐもった声が室内に消えていった。

「シクロなら、ロウマの身体を切り刻んで遊んでますよ」

少年が答えると、大柄なボウズ頭のいかつい男は溜め息をついた。

少年は小柄で短パンにブーツという元気の良い姿とは正反対に、

伸ばし気味の髪の間からギョロリとした瞳を片方だけ出し、喋る声も陰気だった。

「プライ・マリイ、なんで黙っていた？」

「……だって、僕興味ないし、ジンモさん」

いかついジンモ・ウコンの質問に全く興味を示さないように、自分の背丈程もある大鎌と戯れる^{たわむ}プライ・マリイは上の空で答える。

ジンモが再び溜め息をつくとき、彼の肩にちよこんと乗った砂兎が面倒くさそうにあくびをした。

サッカーボールでも相手にするように膝、肩、そして額で大鎌の柄を受け止めては、宙でくるくると回す遊びに夢中になっているプライ・マリイを無視するようにジンモは剣王ル・シウスを睨むように見据える。

「大体、若も若ですぞ、あれを生かして残すなど！ あれはアウレリアの血統最後の者。良からぬ考えを起す者としているやも知れませぬ。遊びにしては度が過ぎますぞ！」

いかついボウズ頭の男が顔をぐいとルシウスへと近づけると、彼の顔の右半分を覆うゴーグルの奥で青い光が揺らめいた。そこには強面の中に不気味さが漂う。

しばらくの間ル・シウスを見据えてみせたそれは、若き王の相談役、ひいては指導役としての戒めであり、ジンモはその役は自分には出来ないという自負の元、少しだけ悦に入っている。

アウレリア帝国三十九代目の皇帝にして、武帝と呼ばれたヴェスタ・アウレリアを崇拜する彼は、今は亡き六十七代アウレリア帝国

にとつて、時代遅れの無用の者でしかなかった。

とはいえ、古くから軍のエリートを輩出してきたウコン家の人間をぞんざいに扱っ訳にもいかなかった当時の王家が彼に与えた仕事、妾の子といえども王の血を引くバラガン・ル・シウスの指導と護衛であつた。

当時、若く美しい母を亡くし（諸説流れたが、王族の人間による嫌がらせの心労がたたつたというのが、どうやら本当の事らしい）子一人となつたバラガン・ル・シウスを狙う者など誰もいないだろうに、という世間の嘲笑になど元来鈍感なジンモは気付く事なく、王と成り得る者の指導、相談に力の限り取り組んだ。

そして、その少年に確かに王の資質を見たジンモは、脳の奥で打ち震えた。

この少年は武帝ヴェスタの生まれ変わりに違いない、と。

ル・シウス少年を指導するジンモの熱はやがて一人の少年を育てるものから、一人の王を育てる為の異常とも呼べるまでの武術指南と帝王学へと至り、成長した彼の愚かな企み、つまりはクーデターにも尽力し、それは成功を迎えた。

……王を育て、王が王となる為の功労者はまさに自分である。そんな自分だからこそ、我が王をこうして諫められるのだ。

我が王の遊びを、今まで自分は容認してきたつもりだ。「おもしろいものを見つけた」そう言つてル・シウスが貧民街から、プライマリイという陰気な少年を拾ってきた時も、シクロ・ソナウという頭の壊れた少女を拾ってきた時も。

……だが、今回だけはいけない。ロウマ・アウレリアはアウレリア直系の一族、唯一の生き残りなのだから。

見据えたジンモが口を開くより先に、ルシウスは少し馬鹿にするようにヒヤッヒヤッと笑つた。

「遊びが過ぎてんのは俺じゃなくてシクロだろう？ さすがに俺でも身体を切り刻んで楽しむ事は出来ぬさ。それに、だ。誰かが、ロウマを立ててアウレリアの再興を画策しようにも、ロウマが俺に逆

「……ジンモ俺には、どうしても『四人』必要なんだよ……」

ジンモには、王の発言の真意が読みとれなかった。

「四人」とは？　だが、ジンモが悩むより先にルシウスが答えた。

「パラス・アズロには四人の騎士がいるだろう？　だったら俺にも必要だろうが、ロウマにプライにシクロにお前の、四騎士がよ」

4

ドムス・パオロの内殿を正面へと向かい青・赤・白そして少し遅れて黒の騎士が歩いていった。

「まいったね、急いで呼ばれて何事かと思えば戦争の準備とはね」

苦々しく話すユアンはまだアルコールが抜け切れていないせいか顔色が悪い。

対照的に朝の号泣が嘘のようにケロリとしたカギルと、リンドが続けた。

「とりあえず召集をかけて各屯所に全騎士は集合してる筈だけど、ガリア族との些細な争いはあったけど、みんな対人相手の本格的な戦闘っていうのは初めてよね。……心配だな……」

「各騎士団は東・西・南・北の各屯所で待機、飛空船が現れ次第応戦、他の団もその方面に駆けつける。大丈夫だよカギル、一人で戦う訳じゃないんだ。皆一緒に一丸となればいつも通りの力を発揮できるぞ」

部下の騎士が、という立ち位置で心配して見せたのはカギルの精一杯の強がりだった。本当のところはカギルとて恐いのだ。それを十分にリンドは察している。察していればこそ、同じ騎士団長という物の言い方でカギルを力づけた。

カギルには、そんなリンドの優しさありがたい。

「そだね」と言っただけ微笑む。

しかし、そのやりとりの真意を読み取れていない赤の騎士団の残

念団長が話をややこしくする。

「あ、でも敵って飛空船で来るんだよな。だったらカギルが戦えばいいんじゃないか？」『空』ならお前の専門だろーし」

「だったらユアンはあたしの後ろに隠れて、いつもの無能ぶりを披露してればいいじゃない!!」

一瞬目を輝かせかけたユアンは、鼻息荒く一気にまくしたてるヒステリー気味のカギルを見て、ようやく「戦争が始まる」という事に、皆が皆、緊張状態である事を悟る。

こういう時、彼はいつも同じ言い訳をする。つまりは「アルコールが俺の反射神経をコンマ一秒遅らせたのだ」……と。しかし、さすがにヒステリーを起している今のカギルにそれを言う訳にもいかず、彼はとっさに話題を変えた。

「しかし、あれだな……って事は、最悪パラス・アズロ内での戦闘も十分あり得るって事だよな？」

リンドが頷く。

「ああ、正騎士団がパラス外で剣王軍を撃退する事。今回の戦いの重要性はまさにそこだけど、パラス内の防衛とフォローは、準騎士を率いてガンじい自らが指揮を執るらしいからな」

「あのじい、大丈夫かよ」そう呟いた後で、ユアンが続ける。

「……パラスの中に外敵を侵入させるなんて事になれば……五年前のあの時以来になるな……」

リンドは、今回は頷かなかった。ただ、五年前のあの日、ロムルスとレムルスに初めて出合った時の事をぼんやりと思い出していた。言葉を紡げずにいるリンドの代わりに、ユアンが口を開く。

「あれから五年、あつという間だな。でも、ロムはたくましくなつたよ。そいつは間違いなく、お前がそう導いてやったからさ。お前はもっと誇っていいはずだよ、リンド。あれは良い騎士になるな」

今度はカギルもユアンに同意した。

微笑むカギルの視線の先で少し照れたように、だが、晴れやかにリンドが「ああ」と頷いた。

ドムス・パオ口の正面を抜け、パオ口広場へと差しかかった所でカギルとユアンが顔を見合わせる。そして、二人は鞘から剣を抜いた。

少し戸惑った後で、二人の思惑を理解したリンドも剣を抜く。

我関せずとばかりに遅れてきたサリーが、そしらぬ顔で三人を通り過ぎようとした所で「サリーくんもツスよ」とユアンが声を掛けた。

渋々というより、面倒くさそうにサリーも剣を抜く。

向かい合う四人が剣先を交えた。

ユアンが目配せをした後で、リンドが口を開いた。

「パラス・アズロに平穏と安寧を！！」

四人はその後で、剣先を額にかざす。

「では、戦場で」

リンドが踵を返すと、三人共それに倣った。

四人はそれぞれの守るべき場所へと向かって歩き出した。

5

砂漠で発生する自然現象の中で特にやっかいなものは竜巻である。突如として砂漠の砂を巻き上げながら発生するそれに鉄壁を誇るパラス・アズロの外壁が揺らぐ事はなかったが、二次被害ともいうべき、竜巻に巻き込まれた物が外壁を越えて、パラス内に降り注ぐという事も少なくはなかった。

それは大体が、枯れ果てた巨木の残骸であったり、死んだ後、風化の影響で残ったアレデントード（砂噛み）の甲殻であったりするのだが、五年前のあの日は違った。

砂漠には甲虫以外にも様々な生物が生息している。その圧倒的な巨体と硬さを持ち、尋常ならざる破壊力を生み出す大型の甲虫以上に「厄介」な生物も生息しているのだ。

その一つとして上げられるものに「砂蜥蜴」アリエジェラトと呼ばれる生物がいる。

人間の大人と同じ程度の体格で二足歩行する事から「人もどき」という二つ名を関するそれは、その特質性においては甲虫以上に悪質な生き物であった。その特質とは周囲の環境と同化する非常に珍しい肌質と、強靱な顎あごと刃のごとき牙を有する事によって成り立つ暴食とも言うべき雑食性にある。

パラス・アズロのダム施設より更に東部にある、パラス内でも比較的貧しい者達が暮らす集落。その地に五年前のあの日、竜巻で打ち上げられたのは、正にその砂蜥蜴であった。

その日、西部にある動力炉近くの工場へと僕とレムの父親は働きに出ていた。その帰りを待つ事の出来なかった今よりずっと子供の僕が、眠りから覚めたのは深夜と呼べる時間帯だった。

隣のベッドで眠る病弱なレムがスヤスヤと寝息を立てているのを見て、僕は静かにベッドから起き出す。集落には小さな石造りの家がいくつも建ち並んでいたが、その家から次々と声が上がるのが聞こえたからだった。

それらは訳の分からない喚き声にも悲鳴にも聞こえた。

そっとカーテン越しに窓の外を眺めると、深夜だというのに集落の家中に明かりが灯っているのが見える。

その後で僕は、ふと隣の部屋へと通じるドアを見た。

建て付けの悪さから、ドアとドア枠の隙間から明かりが漏れている。

（お父さんは帰って来たかな？ それともまだ寝ないでお母さんはお父さんの帰りを待っているのかな？）

僕はそろそろとその引き戸を開ける。

そして半分程開けた所で僕は声を上げた。

それは悲鳴であり絶叫だった。

その声で目を覚ましたレムもゆっくりと開いていくドアの先の光

景を見た。

そこには鈍い緑色をした醜い生き物が立っていた。

ぱっと見は全身を緑色に塗りたくった人間に見える。だが、その頭部には離れて左右に付いた顔の三分の一程もある丸い巨大な目玉が、焦点が合わないようにグルグルと回っていたし、突き出た顎と裂けた口には矢じりのような鋭い牙が並んでいた。

そして、瞳に色のないお父さんの頭だけがその上下の顎に挟まれるようにして、そこにあった。

緑色の身体を血の赤色で滴らせるトカゲの化け物の、その足元にはズタボロの布をかるうじて身にまとったお母さんが倒れていたが、その姿は引き千切られたように胸から下が無かった。ちらりと見たお母さんの顔は、真ん中にぼっかりと穴が開いたように存在していなかった。ただ空洞の様なその闇の中に、何か白く柔らかいものが見えた気がした。

静とした室内でレムの呼吸が速く、荒くなっていくのだけが聞こえる。

発作が始まった、と僕は思った。

レムはパニックに陥ると呼吸が荒くなる。それは呼吸困難にも繋がりがかねない危険なものだ。

僕がほんの少しの冷静さを取り戻したのは、皮肉な事にそれを思い出したからだ。

（レムだけは助けるんだ）

心の内で僕がそう何度も繰り返すのを、見透かし嘲るように緑色の化け物は、ぐるぐると焦点の合わない目玉を上下の瞼で閉じる。左右の巨大な緑色の丸の丁度中央に、それぞれ一筋の線が入った瞬間、お父さんの顔がリングゴでも握り潰した様に弾けた。

その刹那、大声を上げながら僕はレムの元へと駆け出す。

（窓から外にレムを投げ出すんだ！！）

僕の心は決まっていた。しかし、僕がレムを抱き上げたその時には、一足飛びで僕の背後に化け物は追いついていた。

血で真っ赤に染まった顎が、上下にパツクリと開いた。

6

色とりどりの花びらが敷き詰められた小さな部屋で、少女は声を上げて笑っていた。

遠目で見れば花畑を連想させる部屋の花びらは、赤に、青に、黄色に白、全てが原色のもので、近くで見ると、どこか毒々しさを感じさせる。

壁には子供の落書きのような絵心で、パパとママがいくつも描かれていたが、そのどれも特徴が一致するものはなく、またそのどれもが首を裂かれて血飛沫を上げていた。

ロムルスと年端も変わらぬように見えるプライ・マリイよりも、更に幼く見えるほほ白髪に近い金髪に、褐色の肌色をした少女は、眼前に立つ薄い下着一枚だけを身に付けた長い黒髪に端整な顔立ちをした若い男の、身体中に刻まれたいくつもの傷口から血が滴るのをうつとりとした表状で見つめながら、時おり無邪気に笑った。

砂漠には砂クラゲ（アリエネプタ）と呼ばれる、ゼラチン質の生物が存在する。普段、砂中のずっと奥底で生活しているそれは、思い出した様に砂の上に這い出て来ては、陽光に水分を奪われ、干からびて死滅する。

その死骸こそが砂漠が広がる理由の一端とする学者もいるが、本当の所は分かっていない。

普段、人間に対しては全く害を持たない水くらげではあったが、実は変わった習性を持っている事が「砂漠とクラゲの関連説」を唱える学者の詳細な調査で判明した。

それは自分から砂中を這い出て来たくせに、体表に熱が籠らないように少しでも暗く温度の低い所へと避難しようとするという事である。それは、例えば、岩影であったり、捨てられた空き缶の中で

あつたり、生物の体内であつたりする。

現に砂漠では、クラゲが体内に侵入された事が原因と思われるガリア人の死体が見つかったりしていた。その死体を解剖した者によると、死体の脳はクラゲと同化してほとんどが溶け出し、解剖する以前から脳とクラゲの溶解したそれは「水脳症」の末期症状に擬似していたと報告された。

その症状が発現すると思惟能力が次第に退化し、簡単な命令しか脳が受け付けなくなる。やがて死に至るまでに要する期間が三ヶ月。

書物を読んでその事を理解していたシクロ・ソナウではあつたが、どうやってクラゲが体内へと侵入するのかにはとても興味があつた。あのクーデターが成功した日、次々と捕らえられて処刑されていく王族達の中、一人の男を「殺すには惜しいな」と呟き、一瞥したル・シウスを見た時、シクロの脳裏にその水クラゲの事が思い出されたのは、まさに必然の事だつた。

「自分に任せて」
朗らかにそう告げた後で、少女は自分のまがましいコレクシヨンの一つ、小さなハートがいくつも描かれた小さなビンを持つてきた。

かつては帝国一の剣士と呼ばれた第六十七代アウレリア皇帝の三番目の子息、ロウマ・アウレリアが「殺せ！」と自らの処刑に臆する事なく叫ぶ眼前で、少女は自らの好奇心を満足させる為だけに温めた小ビンの蓋ふたを開けた。

ビンの中で動く事もなく、見るからに鈍重そうなクラゲが、驚く程の素早さでロウマの鼻の中に入っていくのを見て、少女は興奮し、歓声を上げる。

「あへ、びき、ぼびゆら、がぎぎぷらり、ペろ、ぼびやま、らりるらら」

冗談の様に口走つた後、瞳孔も開きつぱなしでピクリともしなくなつたロウマの姿を見た時、少女は高揚の果てに、身体の芯が熱く

なるのを感じていた。

その時の事を思い出し、再び興奮し始めたシクロが手に持った短刀でロウマの身体に新たな傷を刻もうとしたその時、不意に部屋のドアが開いた。

「またジンモに怒られるぞ。それにそれ以上やったら必要な時に使
い物にならねーだろうが」

ル・シウスが立っていた。

少女はその顔を見て、小さなイタズラを見つけられたかのように舌をペロリと出すと、無邪気に笑った。

7

僕、レム、そしてトカゲの化け物。

そこにいる全ての息づかいが聞こえる程に世界は狭く、小さなモノに感じられた。

世界はどんどん小さなモノへと形を変え、やがて僕を包み込む。

それが「死」というものである事を理解した僕ではあったが、打ちひしがれ、倒れこむ訳にはいかなかった。

(世界が終わるならば、希望だけでも残すんだ)

僕にはもう迷いはない。踵を返して駆け出すと、同じ双子の弟だというのに、小さく軽いレムルスの身体を両手で抱いた。

レムを放り投げる姿勢を整えて窓を見上げた時には、既にトカゲの顎は僕のすぐ後ろへと迫っていた。でも、そんな事は百も承知だった。僕は躊躇わず、そして吼えた。

窓ガラスが粉々に砕け、僕の顔をその破片が切りつける。

僕はそのまま動けなくなった。

啞然としたまま息を飲む。

僕はレムを放り投げてはいなかった。しかし、トカゲも僕の首へと牙を立ててもいない。

再びレムをぎゅっと両腕で抱きしめると、恐る恐る僕は後ろを振

り返る。

もんどりを打つようにして倒れるトカゲの化け物を、ガラスを突き破って現れた一人の青年が見下ろしていた。

青年は柔らかな優しい瞳をしていた。その横顔にはまだ少年のあどけなさを残してはいたが、その瞳には確実に怒りの色が灯っている。

剣先を青年が直すと、身にまとった青色のマントがひるがえ翻った。

「……青の騎士」

僕は呟いた。

青の騎士が構えた眼前で、トカゲの化け物は立ち上がったが初撃で、あの恐ろしく鋭利な牙はそのほとんどを折られていた。

威嚇する様にトカゲは甲高い悲鳴の様な声で吼えたが、青の騎士は全く動じる事はなかった。

青の騎士の射る様な視線に一瞬トカゲは後ずさったが、その後ですぐ地を蹴って飛び上がる。それに呼応するように青の騎士の剣を持つ手が素早く動く、断末魔の叫び声を短く上げた時にはトカゲは上半身と下半身とで真二つに割かれ、既に地面に転がっていた。

割かれたトカゲの上半身の切り口から、引き潰された様な人の腕が転がり落ちる。

「見るな！」

声を発した後、青の騎士は僕達の元へと駆け寄った。

剣を鞘に収めながら、「彼が大丈夫か？」と尋ねるのを聞いて、僕は完全に緊張の糸が切れる。

「弟が病気……発作……死んじゃう……助けて……」

僕は頭の中に浮かんだ言葉をただ、口にしていた。

青の騎士は僕が両腕に抱く、レムルスを見て「……これは……」と呟くと、意を決したようにまとっていたマントを脱いだ。そして、身体を冷やさないようにとでもする様に、レムの身体をそれで包むと、立ち上がる。

「彼は危険な状態だ。一刻の猶予もない、ここを連れ出さず。良い

か、決して下を見ず、振り返もせず俺に付いて来い」

彼は静かに、しかし厳しく僕に告げた。

僕は小さく頷くと、力の入らない両足で立ち上がる。

僕は泣き出しそうだった。

僕が歩き始めたその傍らには、父と母の死体が倒れている。

それでも僕は彼に言われた通り、決して下を見ず、振り返る事もせず、歩みを進めた。

眼前にある唯一人、頼れる騎士の大きな背中から目を逸らす事なく……。

8

ドムス・パオロの二階にある講堂。今や、作戦本部と化したそこで、四方騎士団総長、ガンド・マキアスはぼんやりと窓の外を見つめた。

作戦本部では現在、トトラ・ド・プライズモアが砂漠における戦略的配置と迎撃の手順について、再度説明されていた。

普段、砂漠の構成、及び環境について大学で教鞭を揮う彼に相談が持ちかけられたのは、ベアトリス・カラーチェによる星視が行われてすぐの事だった。

ガリア族との小競り合いや、砂漠に住む甲虫達の迎撃こそ限りなく経験してきたパラス・アズロも、本格的な戦争については初めての事である。様々な学者達が招集された内の一人であった彼は、すぐさま敵が首都アウレリア方面から向かってくるのであれば、南門を持って向かえうつ事。敵が砂漠環境に慣れていないのであれば、それを最大限活かす必要がある事の二点を献策した。

これを賢王シャルナプ・ウーデルカは承諾し、かつてはムーナル湖という美しい湖が存在していた、ただ広い平地のある北西に向けて南門を展開すべくパラス・アズロの移動を開始した。

ガンド・マギアスの視線の先には、彼が子供の頃には美しく、尽きる事など考えもしなかった湖の成れの果ての姿が覗かれる。

もうすぐ、パラス・アズロの移動は終わり、剣王軍迎撃の準備が本格化するだろう。

「……夜が明けるか……」

砂漠の地平線の先が白んでくるのを見て、ガントは何気なく呟く。しかし、不意に「そうですね」と合いの手を入れられてギョツとした。

見ると、トトラ・ド・プライズモアが彼特有の人なつこい笑顔を覗かせながら、ガントの脇に立っていた。

トトラの説明はいつの間にか終わっていた。全く話を聞いていなかったガンドが釈明しようとするのをトトラは遮った。

「いや、ガンド殿、説明は昨夕のうちに行っていたものと同じです。でお気を使わずに」

トトラがニコニコとしているのを見て、ガンドはそれ以上続けなかった。

「……しかし、本当に始まるのですね……戦争が……」

トトラが少しだけ寂しげな表状で呟き、ガンドは小さく頷く。

「いや、私なんてたかが学者風情ですからね。もう戦争などと聞いただけで震えてしまう始末。私みたいな者は部屋にこもって砂クラゲの死骸と砂漠化についての関連を調べているのがお似合いですからね」

トトラが溜め息を付いた時、講堂の両開きのドアが大きく開きシヤルナアプ・ウーデルカが入ってきた。その傍らには彼の親衛隊長たるヒリユー・ド・プライズモアが控える。

兄へと向かい小さくトトラは会釈して見せたが、ヒリユーは無反応だった。

先代東方守護騎士団長ヒリユー・ド・プライズモアは事故で右腕を失った後、その座をリンド・ハイワースへと譲ったが、剣の技量だけなら片腕だけでも現在のリンドと渡り合える程の持ち主である。

それ程の人間であるから、賢王シャルナアプは直々に自らの親衛隊長へと迎え入れた。

厚みはあるが引き締まった体躯に、長髪の精悍な顔が不敵に笑う様はさながら獅子のようであった。

講堂に並ぶパラス・アズロの要職の面々の正面へとシャルナアプは歩み出ると、一呼吸を置いて皆を見た。

「我々の望む、望まないに関わらず争いの火種は生まれてしまう。だが、この戦も後年のち、我々の子らは賢き選択と呼ぶであろう。なぜならば、我々には勝利が約束されているのだから！」

シャルナアプの演説は、一瞬でその場にいる全員の心を掴んだ。

「パラス・アズロに安寧と平和を！！」

誰かが叫んだそれはあつと言う間に講堂中へと広がっていく。だが、その中で唯一人、ガンド・マギアスは厳しい表情のままだった。

9

被害状況の把握と被害者のケアを最優先に当たるように騎士達に指示すると、マントにくるまれたレムを抱え、僕をその後ろにしがみ付かせたままで、青の騎士は愛馬の手綱を握った。

白毛色の駿馬は風を切って、一目散にパラス・アズロの中心地を目指して駆ける。

間もなくして辿り着いたのは、歴史を感じさせるバルディック調の大きな豪邸であった。

正門に備えられた呼び鈴を鳴らし、青の騎士が大声を上げてその館の主を呼んでくれるよう頼んだ。するとそれから一分も経たないうちに館から一人の男が姿を現す。

部屋着と呼ぶには上等な生地の下上に、黒い薄手のコートを羽おったその小柄な男は、睨み付ける様にして青の騎士を見上げた。

手短に事情を説明した青の騎士から視線を外すと、その男、黒の騎士サリー・サレスはまるで興味もないような無表状で、苦しそう

に荒い呼吸を続けるレムを見た。

パオロ・ウーデルカと共にパラス・アズロにその生き甲斐を捧げたアウレリアの名門一族の出たる曾祖父を持つサレス家は、名実ともにパラス・アズロにおいて有力な名家であった。

サレス本家のこの立派すぎる程の豪邸以外にも、パラス内によくつもの土地や建物を所有している。

青の騎士の頼みを聞いた後、小さく溜め息をついたサリー・サレスではあったが、声を掛ける必要もなく、館の使用人が馬を引いて来たのを見るに、どういう頼みであれ、最初から助力してくれるつもり

だったらしい。

黒色の馬に乗ったサリー・サレスが「お前はこつちだ」と、僕に自分の跨る馬の後ろに乗るよう命令した。僕が後ろにまたがるや否や「しつかりつかまってな」そう言い終える間も与えず、馬は駆け出す。青の騎士の跨る白馬も後に続いた。

走り出して五分と経たないうちに二頭の馬は目的地へと辿り着く。それはパラス・アズロの中心

地パオロ広場から程近くにそびえ立つ巨大な時計塔だった

馬から降りたサリー・サレスが激しくドアを叩くと、少しの間を置いて、綺麗に整えられた口ひげが印象的な白髪頭の老人が顔を出す。

恐る恐る出した顔の二つの眼を瞬かせた後で、その老人は驚いた様な声を上げた。

「……坊ちゃん、こんな時間に何事ですか？」

「坊ちゃんはやめろ」

小声で呟いた後でサリー・サレスが話す。

「ペノツテ、急患だ。見てくれ」

ペノツテと呼ばれたおじいさんは、マントにくるまれて荒い呼吸を続けるレムを見て、あきらかに狼狽した。しかし、次の瞬間には

その双眸めくろに力強い光が灯る。

「三階へ運んで下さい」

そう告げると、おじいさんはそのまま三階へと通じる階段を驚く程の速さで駆け上がった。いった。

薄暗い時計塔の中へと歩み入って、ペノツテおじいさんが駆け上がった階段を昇り、僕達が三階へと辿り付いた時には、既におじいさんは作業に追われていた。

「ペノツテは元々サレス家の主治医でな。妻に先立たれたのと、高齢を理由に引退した後は、うちで所有してるこの時計塔の整備をしながらここで暮らしている。引退したとはいえ腕は確かだから心配するな」

サリーさんが話し終える頃には、少し甘い匂いのするどろりとした薬液の調合をペノツテおじいさんは終えていた。それをゆっくりとレムの口へと流し込むと、荒い呼吸はやがて治まり、頬にもうっすらと赤みが差し込む。

安堵の溜め息を一つ吐いた後で、ペノツテおじいさんはレムを抱き抱えベッドに運んだ。

「もう大丈夫です。どれ、私達も一息つきますか」

につこりと微笑んだペノツテおじいさんは、ゆったりとした足どりで隣の部屋へと消えていく。

レムが横になるベッドのあるその部屋は、パラス・アズロと共に歴史を刻んだ時計塔の内部とは思えぬ程に手入れが行き届いていた。それを僕が尋ねると、一階で暮らすペノツテおじいさんが使われる事もない二階や三階も毎日きれいに掃除しているとの事だった。

ペノツテおじいさんが隣の部屋からお茶の入った四人分のティーカップ持ってきた時、青の騎士が申し訳なさそうに口を開く。

「サリーさん。申し訳ないんですが……」

青の騎士の発言を無視するように、サリーさんはペノツテおじいさんへと話しかけた。

「そう言えば、ペノツツテ。お前も年だし、そろそろ住み込みの助

手が必要じゃないか？」

ペノツテおじいさんは僕の顔を見て、再びニッコリと微笑む。

「坊ちゃん、そいつは良い考えですな」

「坊ちゃんはやめると……」

サリーがブツブツ言うのを尻目に、青の騎士は優しげな眼差しで僕へと右手を差し出した。

「俺はリンド。リンド・ヘイワースだ。君は良くがんばったな。…

…もう泣いても大丈夫だぞ」

僕は彼の差し出した右手をすぎるように両手で握ると、止め処なく溢れ出した涙を隠す事もできずに泣きじゃくった。

あれから、五年。

夜が明け始めた空を窓越しに見つめる視線を、ベッドの上ですやすやと寝息を立てるレムへと移す。

「僕達は生きてる。そしてこれからも、二人で生きていくんだ」

僕は小さく呟いた。

何かが起こり始めている事くらい僕にも分かっていた。今回の召集はひよつとしたら生死に関わる事なのかも知れない。

それでも僕は……。

「……それでも僕は、決して死なない。生きてレムの元へ帰ってくるんだ」

寝返りを打つレムの横顔を、僕は一人静かに見つめた。

10

夜が明けたと思ったすぐ後には、東の空から現れた太陽はぐんぐんと上昇を始めた。

陽光をその黒い船体に反射させながら、飛空船艦ガンダルノヴァは一路、パラス・アズロを目指し、南下を進める。

船の操舵室へとやってきた剣王ル・シウスは、船員に勧められる

がまま設置された望遠鏡を覗いた後で、感嘆の声を上げた。

「あれが、俺の新たななる王都か」

望遠鏡のレンズ越しに小さく映る移動型城塞都市は、造られてから現在に至るまでの長い歴史を感じさせるように紺碧色の外装は所々が剥げ、色褪せて見えたが、その堂々たる姿は堅ろうそのものだった。

後ろに控えるシクロ・ソナウヤ、プライ・マリイに「お前も見ってみるよ」と声を弾ませるル・シウスにジンモの諫めるような苦言が呈される。

「王よ、くれぐれも油断は禁物ですぞ。もう少し気を引き締めて頂かなければ、兵の士気も下がります」

忠臣ジンモ・ウコンの言葉を煙たがる様に、ル・シウスは口を開いた。

「これは油断じゃなくて、王たる者の余裕ってヤツだ」

望遠鏡の側ではしゃぐシクロとプライ・マリイの声に時々掻き消されながらもル・シウスは続ける。

「大体油断も何も、奇襲をかけるならこの悪天候の時期を置いて他にはないと言ったのはどこのどいつだ？ お前の空を読む目を信じて船を走らせては来たものの、いざ蓋を開けて見ればこの天候だぞ。油断しようもないわ」

昨日までのどんよりと厚い雲が嘘のように、ガンダルノヴァが前進する度にわずかに残る雲も空へと霧散していくようだった。

痛い所を指摘されて「む、ぐう」と言っただけ、隣に立つ虚ろな瞳のロウマ・アウレリアと共にジンモはだんまりを決め込む。

口ではそう言いつつも、対砂漠での戦闘用に造られたパラス・アズロの人間にしてみれば、突然現れた敵に上空から襲われるという事は想像もしていない事だろうから、それだけでも十分に奇襲と呼べる事を、ル・シウスは理解している。だが、苦々しい表状を浮かべるジンモがおかしかったので、敢えてそれは言わない事にした。

ル・シウスが吹き出すのを我慢しているその時、船員の一人が「

目的地までの到着、1時を切りました」と告げた。それは艦内放送を通じて艦内の隅々まで届けられる。

途端に艦内が開戦準備に向けて騒がしくなり始めた。

ル・シウスはそれを肌で感じながら、ゆっくりと振り返る。その視線はロウマ、ジンモ、プライ・マリイ、シクロを順に捉えた。

そして、屈託の無い笑顔で、さも愉快そうに口を開いた。

「一族郎党、殺して、殺して、殺しつくそう。さあ、楽しい、楽しい戦争のはじまりだ」

第五章 ムーナル戦役

第五章 ムーナル戦役

1

「砂漠という環境が互いを遠く引き離してはしまったが、我らの心はいつもアウレリア帝国と供にあった」

パラス・アズロを守る四人の騎士を集めた講堂で、昨夜の賢王シヤルナアプはそう口火をきった。

「今は亡き皇帝を倒し、帝国を滅ぼせし、逆賊ル・シウスを討代し、我らが故郷の無念を果たさなければならぬ。とは言え、我が軍もル・シウスの軍も元はアウレリアの民、諸君らにもためらいはあるだろう。しかし、奴らは国を滅ぼすだけに止まらず、極悪非道の限りを尽くした様な連中だ。迷ってはいけない。躊躇してはいけない。奴らは人ではなく悪魔なのだ。そして、我々は常に正義と供にあるのだから……」

南門を守護する白の騎士カギル・パンナインは「後年の歴史家達をして、今回の戦いはパラス・アズロの勝利に彩られたムーナル戦役と呼ばれるだろう」と閉めくくったシャルナアプ・ウーデルカの言葉を思い出していた。

物は言いようで、アウレリアと袂を別ちつつも、アウレリアの敵にも味方にもなっていないなかった自分達だが、正面切ってアウレリア帝政を滅してみせた剣王ル・シウスに比べればその曖昧な立ち位置も正論化できなくもないだろうし、そういう事であれば確かに正義は自分達の側にあるような気もした。しかし、生まれてこの方パラス・アズロの事しか知らないカギルにとって皇帝もアウレリア帝国も絵本の登場人物にしか過ぎない。正直言って、それにどれ程の正

義があるのか、そもそも正しい戦争などあるのかカギルには分からなかった。

しかし、そんな事はどうでも良かったのかも知れない。

ふと見ると、いつの間にか自身の身体が小刻みに震えていた。それを部下達に気取られないよう、小さく呼吸する。

震えはピタリと止まった。

(……あたしが守るんだ。部下もこの国の民も)

空を見上げると黒い巨大な塊がどんどん大きくなって近づいてくるのが見える。それに監視していた部下の一人が気付いたのは十分程前の事だった。

パラス・アズロの四方の門の脇、監視塔に設置された望遠鏡は砂漠という大地を見る為に作られたものであり、空を見上げるのはそれも人も不慣れではあったが、いち早くその存在に気づけたのは昨日までの曇天が嘘のような晴天だったからに他ならない。

飛空船艦ガンダルノヴァ出現の報を聞いて(やっぱりトラの言うてた通り、ここか)と内心で怖じ気つつも、至急、東、西、北門へと報告の馬を走らせるように指示したカギルだったが、もうぶれる事はないだろう。

各門から他の騎士団の援軍がかけつけるのは十五分もあれば十分であり、ガンダルノヴァ発見からパラス・アズロに至るまで当初は三十分を見越していた。だが、その黒光りする巨体は重力の後押しもあってかぐんぐんと近づいてきた。それを裸眼で確認しその距離を十分に捉えた上でカギルは声を発した。

「はしご上げてっ！ 同時に南門を開放！！」

かつて、パラス・アズロがガリア族討伐の為の前線基地だった時代、門扉を閉じた状態でもパラス・アズロの外の救助が可能のように、南門にだけは門の左右の塔に巨大なクレーン式のハシゴが設置されていた。カギルの掛け声と共に動き出したそのハシゴの先には人が乗れる箱型のスペースと巨大なボウガンが左右に二台ずつ取り付けられてあったが、そこには昨日急ごしらえで作られた鋸のりが備え

付けられていた。

「第一射、射て!!」

カギルの声に反応するようにして発射された四本の銃は、ガンダルノヴァの腹部へと突き刺さる。

銃に巻かれた軽く丈夫な鎖がピンと張るのを見て、カギルが再び声を上げた。

「第二射、準備……射て!!」

南門から飛び出した騎士達はすぐさま隊列を組むと、ガンダルノヴァの浮かぶ空目掛けて矢を次々と射った。

鎖に引かれるようにしてパラス・アズロとの距離もかなり近まったガンダルノヴァの前面に矢が突き刺さる。

さしたるダメージを与えたともないその巨体だったが、怒り出すような重低音を突如として響かせると、ガンダルノヴァの前面、その下の部分が左右に開き巨大な筒が顔を出した。

「嘘」とカギルが呟くより早くそれは光った。

一瞬の内に、呆然とした表状を浮かべるカギルの目前を指して伸びてきたその青い光だったが、屈折するように不自然に曲がるとパラス・アズロの上空をかすめるようにして東の空へと消えていく。次の瞬間、カギルの頭の上に細かく砕け散った氷片が舞った。

カギルの振り返った先にはリンドがいた。

リンドの「牢ロウ」、氷壁の余韻のように氷片が空気と溶け合い完全に消える中で、声が響く。

「なんだあ？ カギル。早くもびびってたのか？」

カギルの隣を駆け抜けるようにして、ユアンが飛んだ。

再び唸りを上げて光を射出しようとしたガンダルノヴァより早く、ユアンが「始」炎、六連装填の火球リボルバーを撃ちこむ。

筒の中へと六つの火球が飛び込むと、筒は轟音を撒き散らして爆ぜた。

ガンダルノヴァは黒煙を上げながら、斜めに降下を始めた。

ガンダルノヴァの誇る、光粒子砲が二射目を放つ事もなく粉碎され、降下しつつある艦内でル・シウスは苦々しい声を上げた。

「ジンモ、これはどういう事だ!？」

奇襲をかけているはずの自軍がここまでいいようにやられては、どちらが奇襲されているのか分かったものではない。

パラス・アズロの軍はガンダルノヴァの姿に臆する事もなく、むしろ飛空船艦の空からの攻撃を想定していたかのような手際の良さだった。

「むう」と唸った後で、ジンモは自らの知識の深さをひけらかすように堂々と語った。

「パラス・アズロには占星術師と呼ばれる星視の技を持つ者がいると聞いた事があります。我々の動きはその星を視る目によって読まれていたのやもしれませぬ」

傾いた艦内で、「他に質問は?」とでも言うように誇らしげに立つジンモを、ル・シウスは冷やかな目で見つめる。

(向こうには千里眼の如き星を視る目を持つ者がいると言つのに、天候すら読めぬこいつは何だ?……この役立たずめ)

ル・シウスが罵言の一つも吐き出しそうと口を開きかけた矢先、ガンダルノヴァは急降下を始めた。

「王よ、安心下され。ガンダルノヴァの船体はグシノスギ材を使用しておりますゆえ頑丈に、そして、光粒子砲の発生装置も飛行術の動力もアウレリアの科学技術の結晶たる『魔石』機関を使用しておりますゆえ、墜落して爆発する事などありません」

自信満々に語るジンモに「だまれ、バカが!」とル・シウスが上げた怒声を掻き消すよう、にガンダルノヴァは轟音を上げながら、砂漠へと突き刺さった。

人形のようにつつぶしたまま動かないロウマは別に、大鎌を壁に突き刺すと、長い柄を軸に鉄棒でも回るようにして一回転した後で、降り立ったプライ・マリイと、しりもちを付いたシクロが見つめる先で、自分よりはるかに体重のあるジンモを、罵言を撒き散らしながら引き剥がしたル・シウスが立ち上がる。

のそりと立ち上がったジンモが、何か献策でもしようかと咳払いして見せるのを横目で睨み付けて制すと、ル・シウスは「あいつら、皆殺しにしてやる」と呟いた。

ル・シウスは怒りに震えたが、その一瞬たぎらせた怒りがそのまま判断ミスへと繋がった。

奇襲作戦の元に行動しているル・シウス軍は、光粒子砲で城塞都市を守る大門を吹き飛ばした後、着陸した先遣隊二十名をくり出す予定にしていた。虚をつかれたパラス・アズロに追い討ちをかけるようにしてくり出した先遣隊が更なる混乱を演出している最中、ル・シウス率いる本隊が堂々と進軍を開始するのだ。だが、奇襲の成功していない現状では、それは失策以外の何物でもない。

先遣隊の出撃命令を中止しようとル・シウスが伝声管へと駆け寄ると同時に、艦内放送が響き渡った。

「先遣隊壊滅！ 先遣隊壊滅！！ パラス・アズロ兵、ガンダルノヴァに侵入！ ガンダルノヴァに侵入！！」

苦虫を噛み殺すように唸った後で、ル・シウスは踵を返した。

「艦内で迎撃する！ お前らも出て、皆殺しにしてこい！！」

3

轟音を撒き散らしながら飛空戦艦が砂漠に突き刺さると同時に「よしっ！」と小さくガッツポーズを決めたユアンのそばを一陣の黒い風が通り過ぎた。

南門より一番離れた北門を守護するサリー・サレス率いる黒の騎

士団は、東西を守る青と赤の騎士団より一足遅れて戦地に到着したが、他の騎士を見向きもせずガンダルノヴァ目指して駆ける。その数、総勢二十名。

「ちよ、ちよっと、サリー君」

出し抜かれた様にユアンが声を上げた時、ガンダルノヴァの左右の開閉口が降り、艦内から軽装の鎧を身に着けた男達が声を上げながら走り出てきた。

「ふん」と鼻を鳴らした後、しのばせた八本のナイフを両手の指間で握ったサリーは前面の砂地へと投げた。

ナイフの刺さった砂地から、八体の砂で作られた人形が這い出てきた。

黒の騎士の「始」土。ブドゥー・チャイルド砂人形

それを見て、後ろに従う十九名の騎士達もそれぞれ持つ剣を砂面に突き刺す。騎士達の持つ十九の剣をもつ砂人形と、サリーのナイフを手に持つ八体の砂人形。合わせて二十七体の砂人形は、二十のル・シウス軍の先遣隊目指して駆けた。

砂人形は先遣隊の振るう剣の前にことごとく粉碎されていたが、勝利の手応えもなく粉々になって砂塵と化して消えていく砂人形の影から、それぞれの得物を手にした騎士達が姿を現す度、「あつ」と言う驚きの声を上げてすぐ、一刀の元に先遣隊は切り捨てられていく。

兵団士の初戦は、開戦して一分と経たぬうちにパラス・アズロ軍の完全勝利という形で幕を閉じた。

そのまま艦内に突入しかねない勢いのサリー率いる黒の騎士団に負けていられるか、と剣皇ポーニロアを天高くかざした剣の先では、リボルバー一発分の火球が灯っている。

アウレリアからもたらされた力を特定の石に封ずる事の出来る魔石技術により、騎士達の持つ剣には各団の団長が所有する神具の数ハルモニア十分の一の力が封じられた魔石が埋め込まれてあった。

それらは言わば、神具の複製レプリカである。

駆けたユアンに続くようにして赤の騎士団が、剣先にレプリカの火球を灯しながら黒の騎士団に追いつくと、赤と黒の混じり合った一団はガンダルノヴァの開きっぱなしになっている入り口の目前へと迫った。と、まさにその時、空に出現した青く巨大な龍がガンダルノヴァの横腹に体当たりする。

頑丈なガンダルノヴァはピクリとも動かず、龍はそのまま弾かれると同時に大量の雫となって赤と黒の騎士団の頭上へと降り注いだ。リンドの「凄セイ」龍顎アキトの雨に打たれた後、ユアンが振り返った先で、ゆつくりと歩いてくるリンドが溜め息混じりに呟く。

「まったく、お前は。サリー先輩に乗せられてんじゃないよ、ユアン。サリー先輩もサリー先輩ですよ、これは競走じゃないんだから」レプリカの灯火ともしびの消えた剣先から、薄い煙を立ち昇らせる一団の先頭に立つユアンが「はあ」と答え、サリーは「ふん」と鼻を鳴らす。

集合した四つの団の先陣を切るように、四人の団長は肩を並べて艦内へと歩みを進めた。

剣王軍の先遣隊が飛び出してきた開放式の入り口を抜けてすぐの部屋は造りが広かった。それは、先遣隊が待機する為の部屋だったからであろう。そこから上階へと続く階段を昇つてすぐ、ユアンが舌打ちをした。辿り着いたのは部屋と呼ぶにはあまりにも広い空間だった。おそらく全ての乗組員が食事をとれると思わしきその空間は、墜落の衝撃で机やイスが散乱している。その広大な空間の四隅には、おあつらえ向きな事に更に上階へと通じる階段が四つ設置されていた。

それぞれの団を従えるようにして先頭に行く各団長は、リンド、サリー、ユアン、カギルの順に進むべき階段を決定すると、再び進撃を開始した。

南門の方が慌ただしくなるのを聞いて、僕はついに戦争が始まったのだと理解した。

ドムス・パオロへと集められた僕を含めた各団の準騎士や見習い達は五名程度を一つの班として編制すると、騎士総長ガンド・マギアス指揮の下、パオロ広場に待機している。

僕は東方守護騎士管轄の三班に配属された。主な使命は敵がパラス内に侵入した際の撃退と被害者の救護である。

南門の慌ただしさに反応するように、僕と同じく三班に配属された同期で騎士見習いのマルチェロ・ビスタニアが口を開く。

「な……なあ。ロムはもう実戦の模擬訓練とか受けてたっけ？ お、俺はさあ、まだなんだよ」

どンドン青ざめる同期の質問に僕が答えようとしたその時だった。南門から強烈な閃光が走るとパラス・アズロの上空をかすめるようにして東の空へと消えていく。

……いや。と僕は思った。

確実にかすめたはずだ、この町一番高い建物。時計塔を……。

瞬間、僕の中で一気に血の気が引いた。食い入るような、そして泣き出しそうな顔で僕はガンド・マギアスを見た。

騎士総長が僕の家族環境や住居の事を知っていたかは定かではない。だが、僕の張り裂けるような「総長！！」の一言で、彼は反射的に指示を下した。

「第三班は至急、時計塔付近の状況把握と被害者の救護に……」

僕は総長の指示を聞き終えるより早く走り出した。

僕の後を大分遅れながら、マルチェロ達三班のメンバーも走り出す。

ぐんぐんと街路を抜けるように駆ける僕の耳に、風が人の声を届

けた。しかし、それはあまりに遠く聞き取る事が出来ない。

パラス・アズロ内の住民は皆、建物の中にこもっているはずだったが、その声は建物の外から発せられているように聞こえる。

スピードを緩める事なく駆ける僕は、その声が「ロムっ！　ロムっ！」と叫んでいる事に気づいた。

それは、紛れもなくレムルスの声だった。

（レムっ！　レムっ！　レムっ！　レムっ！）

僕は頭の中で繰り返す。そして夢中で駆けた。

時計塔まであと二つ分の建物の路地に差し掛かった時、不意にペノッテおじいさんの声が聞こえた。

「ダメだ、レム！　すぐに時計塔に引き返すんだ！！」

一瞬の沈黙の後、絶叫にも似た女性の悲鳴が聞こえた。

5

四人の団長がそれぞれの階段を中程まで昇りかけた時、大広間の四隅にぽっかりと隠し扉が開いた。

畏だ、と思った時には旧アウレリアの誇る重装歩兵が続々と姿を現す。

騎士団は自分達の団長を守るように階段を中心に円陣を組んだが、剣王軍の重装歩兵は更にそれを取り囲んだ。

先程の先遣隊の壊滅を受けて剣王軍の総数兵は約百人程度、八十の騎士団との差はほとんどない。そして、その百の全兵を剣王軍はこの大広間へと投入していた。

階段を下り自らも円陣に加わろうとしたリンドに、騎士の一人が

声をかける。

「ここは我らに任せて、団長は行って下さい！ ル・シウスを倒して下さい！」

一瞬ためらいつつも「任せた」と叫ぶや、踵を返してリンドは階段を駆け昇った。

背後で騎士団の気合を入れるような声が次々と上がる。階段を昇り終える寸前、ちらりと見た左奥の階段をユアンが駆け上がって行くのが見えた。おそらく、白と黒の騎士団も同じ決断を下したであろう。

小さく呼吸を整えた後で、階段を昇り終わると同時にリンドは剣を構えた。そこには先程の大広間を八分割にしたほどの部屋だった。内装もこれといって見るものないその部屋に、一人の男が佇んでいた。

男は絵本で見た事のあるような、金色の鎧をまとい、アウレリア王家の紋が施された鞘に入れられた剣をぶらさげている。整った顔立ちをしていたが、腰まである長い黒髪から覗く瞳は虚ろで呆けているようにも見えた。

立ったままで意識を失っているのではないか、と思えるような男に向かつて、剣を構えたままでリンドは声を掛けた、が反応はない。慎重に少しづつ間を縮めながら、同じ作業を繰り返す。

一步。反応はない。

二歩。反応はない。

三歩。反応はない。

しかし、リンドがきつちり四歩目を踏み入れた瞬間、男は抜刀した。

リンドの予想以上に伸びる太刀筋から、のけぞるようにして一步リンドが後方へ飛んだ時には、男の剣は鞘にしまわれている。

男が剣を鞘にしまうカチリと言う音と同時に、パラス・アズローの硬度を誇るリマル石を加工して作られた青く美しいリンドの鎧の

右の肩当てが吹き飛んだ。

アウレリアーの剣士にのみ帯刀をゆるされたアウレリア王家に伝わる金王石備えの名剣フランダールと、いかなる物も切り裂く王家秘伝の抜刀術。それは剣の道を志す者なら知らぬ者はいない。しかし、ならば……。

……ならば、これがかのアウレリアーの剣士、ロウマ・アウレリアだと言うのか……。

リンドは体勢を立て直すと、込み上げてきた怒りを噛み殺す。己が極めた剣技を振るう為だけのあやつり人形。それが今のロウマの姿だった。誇りある剣士として、これ程の恥辱はあるまい。

リンドは剣帝ネイル・フリー・トゥーンを両手で握ると、ロウマの虚ろな顔を見据えた。そして、小さく吼えたと真っ直ぐに駆けた。

自分の攻撃範囲の中に敵が入ったのを感知するとロウマは再び剣を走らせる。しかし、水の理を剣の道として培うリンドの真骨頂はその「流れ」を読む事にあった。ロウマの太刀筋は初見ですで見切っていた。両手持ちにしたネイル・フリー・トゥーンでロウマの横薙ぎの斬撃をしっかりと受け止める。しかし、それでも尚凄まじい衝撃が走った。受け止めた剣ですら切り裂くと言われる金王石の剣ではあったが、リンドの持つ剣も世界に一本しかない神具ハルモニアの一振りである。衝撃を踏みとどめたネイル・フリー・トゥーンにはひび一本入らなかった。

少しずつ失われていく衝撃を逸らすように、ロウマの剣を払うとリンドはそのまま渾身こんしんの一太刀を振り上げた。

ロウマの首筋から血飛沫ちしぶきが上がる。

一瞬の後、崩れ落ちたロウマの瞳には正気が戻っていた。

リンドには最後の瞬間、ロウマは穏やかな表情のまま小さく頷いて見せたような気がした。

サリー・サレスが階段を昇ると、彼を迎えてくれたのは大柄で、右目をゴーグルで覆ったスキンヘッドのいかつい男だった。

サリーが、小太刀程度の長さしかもたない彼愛刀の魔剣ハーデスを抜くと、大男は肩にちょこんと乗った砂兎を太い指で撫でながら冷めざめと呟く。

「剣王軍一の武人たる私の相手がこのようなチビっ子とは……。女や子供をいたぶる趣味は持ち合わせていない、が、これも戦争、仕方なし。我は武人の仲の武人、ジンモ・ウコン。さあ、貴様も名乗れ」

「チビっ子」という単語に、ほんの少しだけカチンとしつつもサリーは至って冷静を装っている。

「名乗る程の者じゃねーよ。俺はただ、お前を葬る者だ」
 言うや、すかさずサリーは駆け出す。

「愚か者め！」叫ぶと同時にジンモは背負った大刀を抜いた。
 巨漢のジンモが持つ大刀は小柄なサリーの身長程もある。それを軽々と構えるとサリーへと振り下ろした。

だが、その超重兵器を事もなげにサリーは捌く。唸るような掛け声を発しながら、二太刀、三太刀と振るわれたジンモ渾身の大刀は、それに比べて十分の一程の刀身しかない小太刀に易々と、そして悉く叩き落とされた。

「地」属性の魔剣ハーデスは砂や土、そして鉱物を支配している。その魔剣ハーデスにかかれれば、相手の得物が鉄だろうとダイヤモンドだろうと、軽かろうが重かろうが、それは何の意味も持たなかった。

四太刀目をあっさりと弾かれた後、顔面に蹴りをもらって尻餅を

付いたジンモは、相性の悪さにも気付かず「武人」として相手を称賛して見せる。

「お主、なかなかやるな。我が武人の血も滾たぎつておるぞ。どうやら久しぶりに本気を出せる相手を見つけたようだ。礼を言うぞ」

フツフツと不敵な笑みを浮かべながら立ち上がったジンモは、突然「うおおおつ」と吼えた。

何だ、変身でもするのか、と眺めていたサリーの眼前で、ジンモは肩に乗った砂兎の背を叩いた。弾かれたように目を白黒させる砂兎は口から多量の黄色い砂を撒き散らす。

視界を失った黄色い世界でジンモは豪放な笑い声を響かせた。

離れた場所から「お前、」武人って言葉の意味、知ってんのか？」と言うサリーの投げやりな言葉が聞こえる。

それを鼻で笑うと、ジンモは右目を覆うゴーグルの先に付けられた蓋を外した。青目石と呼ばれる特殊な鉱石で加工されたレンズ越しに、小柄な男の輪郭が青色に映る。その男の前面に人形の影が形成されるや二体の人影は黄色に覆われた部屋を真っ直ぐに駆けてきた。

ブドゥー・チャイルド
……砂人形か。もちろん調べてきているぞ。

自称、剣王軍一の武人にして軍師たるジンモである。四方騎士団の技くらい調査済みであった。

……一体目が囷、二体目が本物だ。

二人目を守るようにその前を駆ける人形をあっさりと破壊し、ジンモはその影を駆けてきた二体目に太刀を突き立てる。だが、二体目も一体目同様、手応えはなかった。

「あれ？」と間の抜けた声を上げたジンモの脇に、サリーが立っていた。

「お前、バカだろ」

サリーが呟く。砂人形を作り出せる程に「砂」を支配している魔剣ハーデスを使いこなすサリーにとって、砂との同化などたやすい事だった。

黄色い砂に覆われた小さな部屋でジンモの悲鳴だけが響き渡った。

7

自分の存在に気付かず一人遊びを続ける彼を見て、ユアンはそのまま通り過ぎようかと少し悩む。

彼はまだ子供だった。年端もいかぬ少年は、一人嬉々として一人遊びに没頭していたが、彼が大道芸人のジャグリングよろしく放り回して遊んでいたのは、彼の身長程もある大鎌だった。

その凶々しい容貌を持つ巨大な鎌と、無邪気にそれと戯れる少年の組み合わせという異様な光景に（どうやら、自分はハズレを引き当てたらしい）とユアンが内心でグチっていると、少年はようやくユアンの姿に気付いた。

嬉々としていた顔は、一転して招かざる客でも見るような無愛想なものへと変わっていく。

「なんだ……来ちゃったんだ。僕はプライ・マリイ、彼女はメアリ。お兄さんが悪いんだよ、僕達の所に来ちゃった、お兄さんがさ。……だから、さつさと死んでよ」

少年は自身がメアリとよんだ大鎌をユアン目掛けて放り投げる。そのあまりの躊躇わなさに戸惑いつつも、きっちり首を切断しようと飛んで来た大鎌の刃をユアンは剣皇ポーニロアで防いだ。

弾かれた後、自分の左後方へと転がっていく大鎌を目で追う事もせず、ユアンはプライ・マリイ目指して駆ける。

（「さつさと」だと？ それはこっちのセリフだ。さつさと終わらせてやる）

自身の得物を失い、手ぶらになった少年を気絶させて終わりにさせようと駆けたユアンを目の前にして、プライ・マリイは隠し持った短刀を抜いた。

（そんな物が何の役に立つ）

勝利を確信したユアンの前でプライ・マリイは自分の右の掌うでぐらを切りつける。と、右掌から噴き出した血飛沫は一筋の刃となってユアンを襲った。

それを弾いた拍子に体勢を崩したユアンを置き去りにして、伸びた血の筋は先程投げた大鎌を掴む。その瞬間、伸ばしたゴムを放したように大鎌がぐんとプライ・マリイの手元へと戻った。

体勢を直すや、うろたえたユアンは大鎌の刃が引き戻される動作を寸での所でかわした。

「真赤丸による血技『ブラッディ・メアリ』……まったく、これまで使わせるなんてさ。どうせ死ぬって事しか選択肢はないのに……」
ブツブツ言うプライ・マリイの胸元で、ルビーに似た赤い宝石が妖しく輝く。

それを認めた後で、「醒セイ」と口にしたユアンの持つポーニロアに、ベオネット炎熱剣の赤い刀身が灯った瞬間、プライ・マリイは自身の血で伸縮自在の鎖鎌のようになった大鎌を振り回した。

伸びる、振り下ろす、振り下げる、回転する。様々に攻撃のパターンを変える変則的な大鎌から、ユアンは逃げ回る。

炎熱剣でプライ・マリイと大鎌の連結部分たる血で出来た鎖を切り裂くと、ジユツと焼け焦げた臭いと共に一時的に鎖は分断されたが、あつと言う間に修復されて元の形状に戻った。

「血が切れる訳ないじゃん。往生際悪いね、お兄さん」

プライ・マリイは嘲笑したが、それでもユアンは無様に逃げ回り、血の鎖を何度も切り裂く。

ユアンの諦めの悪さに業を煮やしたように「いいかげんにしてよ！！」と叫んだプライ・マリイは、左掌で包むように短刀の刃を握った。プライ・マリイの左掌から噴き出た血は赤く長い外観に無数の細い枝を刻んでいる。それはまさに荊いばしの鞭むちであった。右手の鎖鎌、左手の茨の鞭をプライ・マリイは夢中で振り回す。その度に、それ程大きくもない部屋の壁や天井に鋭利な傷が刻まれた。

相変わらず逃げ回り、血の部分への斬撃を繰り返していたユアンも

さすがにその波状攻撃に、退路を経たれる様に部屋の隅へと追い詰められる。

勝利を確信したプライ・マリイが「死ね!!」と叫んだ時だった。大鎌は振り下ろされる事も、茨のムチは叩き下ろされる事もなく、プライ・マリイは膝を付いた。

啞然とするプライ・マリイに、ユアンが静かに告げる。

「俺が蒸発させた分だけ、お前は体内の血を補充してんだろ、それも二刀分も。血を出しすぎたお前の負けだよ」

肩膝を付いたままで震えるプライ・マリイが「僕がお前なんかに負ける訳ない」と叫んだ瞬間、大鎌が振り下ろされた。しかし、それが突き刺さったのはプライ・マリイの胸だった。鎌の刃の抜けた背中から血が噴き出すと、空中で向きを変え無数の刃となってユアを襲う。

「馬鹿野郎……」

呟いたユアンの左肩に出現した六連の火球が襲ってくる刃を全て蒸発させた後、残ったのは深々と自身の大鎌に貫かれ絶命したプライ・マリイの死体だけだった。

8

カギルが辿り付いた部屋には白髪の長い髪を左右で二つに結った褐色肌の少女がいた。

自分より一回り近く幼い白いワンピース姿の少女を最初見た時、捕虜だと思ったカギルが微笑みを浮かべ優しい言葉を掛けようとすると、少女は全く正反対の表情を浮かべた。

「なんだ、女かよ。嫌いなものね、女なんて。悲鳴を上げさせる事くらいしか、楽しみ方ないし」

舌打ち交じりに話す少女の黒目がちな瞳には、ゴミでも見る様な侮蔑が漂う。が、次の瞬間、良い事を思い付いた様に無邪気に笑った。

「……そっか、女だからダメなんだよ。女でも男でもないバケモノに改造しちゃえば良いんじゃない。うわっ、あたしって天才かも」
少女の瞳の奥には凶々しい色を覗いてたじろいだカギルに向かつて、少女は跳ねる。

一瞬で間を詰めた少女が、白いワンピースには不釣り合いな両腰にぶら下がった鞘から右手で剣を抜いて切りかかって来た。神剣アテナイでその一撃を捌いたカギルが、反撃の姿勢を整えるより早く、振り下ろした剣が地面に届くすれすれで少女は切っ先を変えるところのまま振り上げる。

二撃目を凌いだカギルを見て、少女は攻撃の手を止めると笑いながら少し間を離れた。

「そう言えばー。自己紹介がまだでしたー。あたしの名前はシクロ・ソナウそして、この右の黒刀が黒水晶のはめ込まれた黒飴チャン。そして、左の白刀が白水晶のはめ込まれた白飴チャンです。ちなみに両刃共に刃びきしてます。それは、切り殺すのではなく、叩き、削り、潰し、鬨る。相手の身悶える様を見るのが、あたしは好きだからなのでーす」

いよいよもって、この少女の異常性にカギルは息を飲んだ。

少女は先程カギルに切り付けた黒刀とは別に新たに右の腰から抜いた白刀を左手に持ち、左右でそれぞれを振り回しながら話を続ける。

「ちなみにこの両刀、黒飴チャンに切り付けられたところは切り付けられた分だけ重く、白飴チャンでは軽くなります」

シクロの説明が終わったと同時に、カギルは未だ味わった事のない神剣アテナイの重量に両手で柄を握った。

今まで軽々と片手で持っていた愛刀にかけられた魔法が、カギルには信じられない。ハルモニア本来なら、神具たるアテナイに魔法をかける術などないはずだった。

不安を振り払う様に放った、敵討つ風の矢は数m先で重力に負けようように地面に突き刺さる。それを見て、カギルはいよいよ混乱し

た。大した策もなく駆け出すと重い剣を振り上げる。シクロはさりりとそれをかわした。

早い。思った瞬間、カギルは泣きそうになる。

重さを増した愛刀というハンデはあるにしろ、シクロのスピードは風と炎の加護、天輪サークルスで身体能力を向上しているカギルを凌駕りょうがしていた。

そんな心境をかき消す様に声を上げると、カギルは愛刀を横向きに薙ないだ。

（白刀が軽くする能力なら、受け止める事は出来ないはず！！）
白飴を受けの姿勢に持ち、横薙ぎのアテナイの剣先を待つシクロに嘲りの表情が浮かぶ。カギルの一撃が届くより速く、シクロは右に持つ黒飴でカギルの胸当てに一撃入れた後、左の白飴を振るった。胸当てへの鈍い一撃ですっばい物が込み上げてきたカギルは、その後の二撃目ですぐ後方へ吹き飛ばされた。

壁に激しく背中をぶつけた後、カギルはヨロヨロと立ち上がる。胸当てに鈍い一撃と共に重力が加えられていた。立ち上がるのに少し手間取ったカギルだったが、その目には冷静さが取り戻されている。

「……ふう。こんなんじゃ、またアテナイにしかられちゃうな」

小さく呼吸すると、重くなった胸当て、そしてそれ以外の全ての防具を脱いだ。やがて、パツと見にも頼りない薄手のスーツたる白い帷子スカツリヤ一枚だけを身に纏ったカギルはシクロを見据える。

身体の線が露わとなったその姿を見て、シクロが口を尖らせた。

「あたし、そーいう趣味はないんですけどお」

カギルは見据えたまま何も答えない。呼吸を整える事、その一点に集中し、呼吸を整え終えるや否や地を蹴った。

無駄と言わんばかりに嘲笑を浮かべたままでシクロは両の剣を構える。

右で持つ黒飴を振るった瞬間、シクロはカギルの姿を見失った。

「あんたは最初からアテナイを重くする事なんて出来なかった。あ

んたは対象物の触れる『空気』を重くしたり、軽くしてただけだ。
……魔法はもう解けた」

その声はシク口の背後から発せられる。

サークルス
天輪の二倍がけ。全身が悲鳴を上げたが、カギルは構わなかった。
優先すべきは勝利する事。自分の敗北は即ち、南方騎士団の敗北である。

金切り声の様な怒声を上げながらシク口が振り返った瞬間、白いワンプイスが血に染まった。

「あれ？ ……気持ちいいかも」

呟いた後で、シク口は糸の切れた人形のように崩れ落ちた。

9

僕が広い通りへと出た時、時計塔の前でブランケットを被ったレムと一人の老婦人が倒れていた。

レムを抱き起こそうとするペノツテおじいさんへと僕は駆け寄る。
「おじいさん、おじいさん、何があつたんですか！？レムは、レムは大丈夫なんですか！？」

びくりと背筋を震わせ僕の顔を見上げたゼペットおじいさんは、明らかに動揺していた。弁解する様に「違うんだ、ロム」と何度も繰り返した後で、言葉を整理する様にぼつりぼつりとペノツテおじいさんが話始めようとした矢先、僕の後を駆けて来た三班の残り四名が遅れて通りへと姿を現す。

その瞬間、ペノツテおじいさんの顔が青冷めた。狼狽する様に口を震わせながら、すぐる様に僕の顔を見つめる。そして、戸惑いの声を僕が上げるより早く、ペノツテおじいさんは早口でまくし立てた。それはまるで怒っている様だった。

「レムは気を失っているだけだ。早くわしの部屋に連れて行きなさい」

ただ頷くしか出来ない僕を残し、おじいさんは老婦人の方へと小

走り駆ける。僕はレムを抱き上げると時計塔の中へと向かった。目を閉じたまま小さく規則正しく呼吸するレムは、気を失っているというより、眠っている様だった。

時計塔に入つてすぐ右の、ペノツテおじいさんの部屋のベッドの上にそつとレムを寝かせる。

桶に汲んである水にタオルを浸し、固く絞ると僕はそれでレムの額に浮かぶ汗を拭った。

レムの呼吸は相変わらず寢息をたてている様に規則正しく、安心した僕が再びタオルを絞ろうとレムのそばを離れようとした時、顔を上気させたペノツテおじいさんが時計塔の中へとやって来た。

よほど急いでいたのかおじいさんは息を切らしていたが、説明を始めた。その顔にはいつもの柔和な笑顔を覗かせていた。

「あのご婦人もすぐに意識を取り戻したよ。レムもこの分なら問題ないよ。少し休めば目を覚ますだろう」

それは分かつてはいた。しかし、先刻のおじいさんの取り乱しように僕は不安を拭えずにいる。

おじいさんはそれを察する様に、わざとらしい程の笑顔を浮かべた。

「あの閃光はロムも見ただろう？ あれは時計塔の先端をわずかにだが、かすめたんだよ。家から出るなど言われておつたが、ワシは心配でな。塔の裏側を見に行ったんだ。幸いに被害はほとんどなくて、安堵していた時、階段を転がり落ちる音が聞こえたんだ。ワシが驚いて塔の正面に向かうと、丁度レムが時計塔から出て来るころだった。余程、混乱しとつたのだろう。ロムの名前を何度も何度も呼んどつたよ。その後、ワシが駆け付けるのと同時にレムは気を失ってしまったんだ……」

ペノツテおじいさんはすやすやと眠るレムの顔を少しだけ見つめた。

「倒れたレムが、ショックによる一過性の気絶だとワシはすぐに分かったから、それ程に慌てはせんかつたんだが、そこに運悪くワシ

と同じ様に被害現場を見に来た裏街のニコラばあさんが通りかかってな。倒れたレムを見たばあさんはレムが死んでるのだと思って、そのまま気を失ってしまっただよ。でも、ちゃんとワシから説明しておいたから大丈夫だよ。ばあさんの見た子はちゃんと生きてる、ってな」

わざわざウインクして見せたおじいさんに僕は吹き出しそうになる。

掛かりつけのお医者さんに問題ないと言われ安心してレムを見つめた後で「後はわしが見ておくよ」と言うおじいさんの言葉に甘えて、僕は再び救護班の待機するパオ口広場へと向かった。

10

飛空船艦ガンダルノヴァの最上階へと至る階段を駆け昇り、ドアを開いたその先で、ひよろりとして背の高い、陰鬱な表情の男がリンド・ハイワースを出迎えた。

「その扉から来たって事はロウマを倒したか？ …… まあ砂クラゲに神経を支配されて本来の六割の力も出せない今のアイツじゃ、時間稼ぎにもならないか」

散乱とした操舵室のテーブルの上にあぐらをかいて話すその男は、立たせた黒髪と両耳に飾り付けた色とりどりのピアスを合わせても地味な印象を払拭できそうにもない。

オーラの片鱗も感じさせないその男だったが、ゆっくりと立ち上がり彼の背程もある漆黒の長刀を抜いた時、明らかにその場の空気が変わった。

ピリピリと突き刺さる様な剣気を受け止めるように、リンドも剣帝ネイル・フリー・トゥーンを構える。

……間違いない。そうリンドが確信を持つのと同じくして男は名乗った。

「我は剣王ル・シウス。お前の名は？」

リンドはル・シウスの問い掛けに応じる様に名乗りを上げる。

「東方守護騎士団長、リンド・ハイワース、参る」
名乗り終えるやリンドは地を蹴った。

駆けて来たリンドを、ル・シウスは歪な笑みを浮かべたままで迎え撃つ。

木の枝でも振る様に軽々と漆黒の長刀を振るうル・シウスと剣帝ネイル・フリー・トゥーンを携えるリンドは瞬く間に交錯する。斬撃音と火花を散らした後、二人は距離を置く様に離れたが、どちらも手傷は負っていない。

息を整えながらル・シウスの長刀を見据えるリンドの愛剣には青白い光が灯っていた。それは「始^シ」水、断ち切る刃^{ウスラヒ}の青き光。生半可な作りなら、剣でも鎧ですらも断ち切るウスラヒの刃で刃こぼれ一つしてないル・シウスの銀色の宝石のはめ込まれた漆黒の長刀にリンドの警戒心が強まる。

おそらくアウレリアの宝具たる剣であろう、それを断ち切る事が無理なのは何となく解かっていた。だが、それ以上に長刀にはめ込まれた妖しく光る銀色の宝石にこそ、ル・シウスの剣技の真骨頂がある事にリンドは気付いている。あれがロウマの剣にはめ込まれた宝石と同じ類の物であれば、何か秘められた力を隠しているはずだ。一人警戒心を強めるリンドの眼前で、ル・シウスは変わらず歪な笑みを浮かべていた。戦争においてこそは、王として完全な勝利の為に策を労する事もいとわない彼であったが、元来はシンプルな思考の持ち主である。一対一の真剣勝負と言ふ事ならば、尚の事、下手な策を労するつもりなど毛頭ない。それは名乗りを上げ、向かって来た者ならば切り伏せて先に進む、それこそが王の道だという彼の美学ゆえである。だからこそ、ル・シウスは構えた。

軽々と片手で振るった長刀を両手でしっかりと握る。ル・シウスの秘めた力をあれこれと推理するように一人心理戦とも言ふべき警戒心の中にいたリンドの眼前で、ル・シウスはその秘めた力を明かして見せた。

両手持ちの長刀を力いっぱい薙ぎ払う。長い両上肢を活かしての長刀の一振りにはリンドの思いの他に伸びた。距離を置いて離れていたリンドだったが、ル・シウスの横薙ぎに反応する様に更に後方へと飛んだ。完璧にかわしたと思った次の瞬間、リンドの青色の胸当てに深々と傷が刻まれる。

のけぞり、膝を付きそうになるリンドは何とか踏み止まった。斬撃は鎧を砕きはしたものの、リンドの身体にまでは至っていないかった。リンドが真っ直ぐに見据えた先で、ニヤニヤと笑うル・シウスの持つ漆黒の長刀は剣帝ネイル・フリー・トゥーンのウスラヒの如く、ぼんやりとした黒い影をその刀身に宿らせていた。ル・シウスが長刀を振るう度に、その影は伸びたり縮んだりしていた。

「銀王石備えの長刀グランドットより放たれるアウレリアの影技、グラディウスの前に散るが良い。パラス・アズロの騎士よ」

宣告した後で、ル・シウスがグラディウスの構えに再び移行しようとした瞬間、操舵室のリンドが入室したのと別の扉が開く、同時に四本のナイフが投射される。

それをあっさりと弾いて見せたル・シウスに、飛ぶように駆けて来たサリーが魔剣ハーデスの一突きを放った。

1
1

ル・シウスに弾かれた四本のナイフは刀身に砂をまとっていた。

空中で人の手を形作った砂は、ナイフの束を握るとル・シウス目掛けて投射する。

宙で向きを変えた後、跳弾ちやうだんの様に再び襲い来る四本のナイフを弾いたル・シウスだったが、そのせいでサリーに対しての迎撃体勢をとるル・シウスの初動が明らかに遅れた。

その隙を見逃す事も、躊躇する事もなく、魔剣ハーデスを突き伸ばしたサリーの一撃は確実にル・シウスの額を捉えていた。だが、それがル・シウスへと届く事はなかった。

寸でのところで追いついたル・シウスの長刀が、魔剣ハーデスごとサリーを弾き飛ばす。小太刀程の魔剣ハーデスの刀身がもう少し長ければ、あるいは勝負は決していたかもしれない。

弾かれた後、方膝をついたサリーだったが、動じる素振りも見せないままにサリーが次の行動へと切り替えたその判断は早かった。不意打ちに失敗すると、少しでも早く体勢を整える為に柱の影へと身を隠す。だが、それこそがサリーの失敗だった。

「王たる者に不意打ちが通じると思ったか？ 愚か者め！！」

一喝する様に叫ぶと、ル・シウスはサリーが身を隠す柱へと長刀を突き刺す。その瞬間、柱の影から伸び出た黒い影の刃がサリーの右膝に突き刺さった。

サリーは悲鳴を上げる事もなくその場にうずくまる。

柱から長刀の刀身を抜いたル・シウスは、戦闘不能となったサリーに止めを刺す事はせずに、踵を返した。

サリーに止めを刺す為にル・シウスが動き出したら、ル・シウス目指し駆け出すつもりだったリンドは小さく溜め息を付くと、少しだけ刀身を下げた。

それを見て、ル・シウスはゆっくりと首をふった。

「お前達がどう足掻こうが結果は変らん。こうなつてしまった以上、我一人でお前達を皆殺しにしなければならぬ」という面倒が増えただけだ」

冷め冷めと話した後で、ル・シウスはガラス張りの操舵室から空を見上げた。それにつられる様に、リンドもまた、ル・シウスの視線の先を見上げる。そして、その瞬間に言葉をなくした。穏やかな午後の陽がゆっくりと傾き始めていた。

「これは王たる者の戦争だ。故に、寝込みを襲う様なマネをするつもりはない。だが、我が影技の真髄は夜にこそあるのだ」

影を操るル・シウスの技に限りがないならば、無限の間とも言つべき影を生み出す夜を迎えさせる訳にはいかない。途端に「我一人皆殺し」と告げたル・シウスの言葉に現実味がおびると、恐怖を

払う様にリンドは吼え、駆け出していった。

そのリンドに対し、哀れむ様な表情のル・シウスが長刀を振るった。

槍以上の長さを持つて伸びた影を防いだリンドの身体がふらつく。圧倒的な力の差を見せ付けられたようにヨロヨロとリンドは後ずさる。そんな自分に気付くと、渴を入れるようにリンドは再び吼えた。そして、愛剣を右上段に構えると万策尽きた者がやけを起こしたように、叫びながらル・シウス目指して駆ける。

駆け出して三歩目、足先に力が入らぬ様にリンドはつまずくと、大きく体勢を崩した。

ル・シウスがそれを見過ごす訳がなかった。王たる者として、慈悲の言葉を告げると、首を切断する為に全力を持って長刀を振るう。「さらばだ、哀れなる騎士よ」

風を切つて、今までで最大、最長の影がリンドの首を落とす為に伸びた。

リンドはまだ、叫んでいた。しかし、それは断末魔の叫びではなかった。感情とは裏腹に、おそろしく理性は冷徹だった。敢えてふらつき、体勢を崩すや否や、すかさず対シヨックの体勢を整える。全てを刈り取らんばかりの、ル・シウス最大の一撃を受け止める為だけに両腕に込めた全力を開放した時、ネイル・フリー・トゥーンの刀身を削る様にして伸びた影の剣先が操舵室の壁を切り裂いた。

リンドは駆ける。伸びきった後で縮み、戻る影に追い抜かれるよりも速く、最後の一撃の為の余力、それ以外は全て使い切るつもりでリンドは、全力で駆ける。

一転して苦い表状を浮かべたル・シウスは、影が戻るのを待ちきれずに再び、長刀を薙いだ。それに合わせる様にリンドが飛ぶと、長刀の剣先がブーツのつま先を切り裂く。それでもリンドの精神は微動だにせず、揺らぐ事はない。

最後に残った力をネイル・フリー・トゥーンに乗せると、右上段から一気に振り下ろす。

左の肩口から袈裟切りに切りつけられて後、ル・シウスは、言葉を発する間もなく、その場にどつと倒れた。

第六章 喜びと悲しみと

第六章 喜びと悲しみと

1

わずかに数時間という短さをもって、ムーナル戦役は決した。

剣王ル・シウスが倒れると、四方騎士団と混戦の中にいた剣王軍のほとんどは降伏の意思を示した。騎士団を包囲し圧倒的優位にあった剣王軍の誇る重装歩兵部隊と、劣勢を余儀なくされつつも善戦を続けていた騎士団ではあったが、意外にも被害は剣王軍の方が多かった事もあり、その士気の下がりつつあった剣王軍にとって、剣王ル・シウスの死はまさに止めを打たれた形となった。

雪崩をうつ様に次々と自軍の兵の倒れる床へと剣を投げ捨てた剣王軍の残兵は五十を切っていたが、パラス・アズロの騎士に死者は出ていない。それでも重傷を負った者は十名以上、その中の数名はおそらく二度と剣を振るう事は出来ないだろう。

降伏した剣王軍の兵は、犯罪というものが今や存在しないパラス・アズロにおいて、現在その当初の趣旨を忘れるようにして残る、収容所へと送られた。

ドムス・パオロの別棟の更に奥にある廃墟のような関係者以外立入禁止のその施設は、今は黄砂病の患者の収容を主としてしているとパラス・アズロの人々は噂している。それ故、剣王軍の残党に黄砂病が感染し、羅患者が増えるのでは、と人々は心配したが、元よりパラス・アズロを侵略しようとしていた外敵の健康について心配する者や同情する者は皆無であった。

それでも、敵として相対した者であろうと一度剣を交えし者には最大の敬意をはらう事を信条とする我らが騎士団は、かつては広大なる水源として名を残すムーナル湖の面影もない荒涼たる砂漠に剣

王軍の七十余の亡骸を埋葬すると、簡略的ながらも死者を弔った。墓標無き黄砂の下にはその兵たちと供に、プライ・マリイ、シクロ・ソナウ、ジンモ・ウコン。そしてロウマ・アウレリアとバラガン・ル・シウスが眠る。

ここに完全にアウレリア帝国の血を継ぐ者は死に絶えた。ムーナル戦役の終結は、かつて緑と水に覆われた豊かな大陸のほとんどを手中にしていたアウレリア帝国の残り火を消し去る形となった。もはや誰の者でもない大陸に広がるのは黄砂だけ。そして、かつてアウレリア帝国の一所領だったパラス・アズロは今、ただのパラス・アズロとなった。

新たな始まりは旅立ちに似ている。大海原へと帆を張る一隻の船のようなものに。しかし、広大で決して終わりの見えないこの砂漠において、パラス・アズロはいつ呑まれるかも分からない小船にしか他ならない……。

二日経ち、出発の整った街に移動型城塞特有の唸る様な排気音が響く。

パラス・アズロはその代名詞とも言うべき四本の太い脚部を震わせ、激戦の地を後にした。

2

パラス・アズロの移動は丸二日以上続いていた。

唸り声を上げながら、緩やかな波に揺れる様なパラス・アズロにすれば、別段変わりばえのない日常のその日、非番の僕が買い物から帰った時、思いがけない客人が来ていた。

本来なら、パラス・アズロ移動中に際しては、家から出ない事を義務づけられてはいたが、厳戒体制でも敷かれていない以上は、その義務とてそれ程厳しいものではない。万が一、職質をかけられた

としても、そんな時こそ僕の「騎士見習い」という肩書きが活かせるので、問題はないのであった。

(…そんな時くらいしか活かせないのも問題と言えば問題だけど) そんな訳で、ペノツテおじいさんに頼まれた面白い物を済ませた僕が時計塔に帰ってくると、ふいに二階からレムの楽しげな笑い声が聞こえてきた。

レムが僕以外の誰かとそんなにまで楽しそうに笑う事自体が珍しい事だったので、僕は買ひ物袋もそのままに二階へと駆け上がる。

押し開いたドアの先で、涙を浮かべながらケラケラと笑うブランケットにくるまるレムルスに向かい合って座っていた彼は、ゆっくりと振り返ると微笑んだ。

「やあ、おかえり、ロム」

僕は慌てる様に駆け寄る。

「どうしたんですか、リンド団長。今日ってお仕事じゃ……」

目を白黒させる僕を見て、リンド団長は快活に笑った。

「ああ、仕事だよ。この近くに訪問する予定があるんだ。せっかくだし、随分レムの顔も見てなかったから寄らせてもらったよ」

ケラケラと笑うレムは「聞いてよ、ロム」と言っ、リンド団長が話してくれたという話を聞かせてくれた。その内のいくつかは既に僕がレムに話していた内容のものだったが、話し手が違うところも変わるものなのかと変に感心してしまう。

「そうだ、知ってるかい、レム」

そう言っ、リンド団長が話し始めたのは、今度は僕の失敗談だったけど、レムがあまりにも笑うものだから、それはそれで失敗じゃなかったのかもしれないな、などと感心ついでに勝手に解釈させてもらったりもした。

楽しい時間はあっと言う間に過ぎる。「さて、と」そう言っ立ち上がったリンド団長がお別れの言葉を告げると、レムが名残惜しそうに顔をした。おそらく、僕も同じ顔をしていた事だろう。

「今度は何か美味しい物でも持ってくるよ」

微笑みながら話すリンド団長は不意に僕の顔を見た。そして、ひとしきり悩んだ表情を浮かべた後で口を開く。

「……一応、これも騎士の仕事だからなあ……ロムも付き合うか？」僕が即答するその隣で、レムが不満を口にする。

「すぐ帰るからさ」そう言って手を振る僕に、レムがあかんべえをした。

「本当はパラス・アズロの移動が終わってから出向くつもりだったんだけどね」

話すリンド団長に連れられて行ったのは、時計塔から少し歩いた先の裏通りと呼ばれる路地の一軒屋だった。

「ロムはここで待ってて」と言った後、リンド団長がドアをノックすると一人のおばあさんが顔を出した。

東方守護騎士の象徴たる胸に刻まれた青い龍のエンブレムを見せながら自己紹介するリンド団長の話を聞いていたおばあさんは、僕の顔を見て一瞬だけぎょつとした。

僕がそのおばあさんの事に気付いたのは、リンド団長に促されて家の中に消える後ろ姿を見た時だった。

(この間倒れてた…ニコラおばあさん……?)

家の中で交わされるリンド団長とおばあさんの会話はほとんど聞き取れなかった。ただ、たまたま聞こえたリンド団長の言葉を僕は理解出来なかった。

「……あなたの見たのは子供が置き忘れたただの人形です……それをあなたは駆けて来たあの子と混同したのです……現にあの子は、ああして元気だったじゃないですか……」

3

湿気高く薄暗いその建物に陽の光が射し込む事など一日中なかつ

た。

収容所という名目の、不用に並ぶがらんどうの檻を横目にガンド・マギアスはその長い廊下を歩く。そこには人一人として温もりも、ましてや小さな生き物の気配も感じられない。ただのオブジェにしか過ぎない百近い数の牢屋を抜けた先で、ようやく辿り付いた行き止まりの壁。そこにあつらえた簡素な作りのドアを押し開く。

部屋の中では、皿をナイフが擦るカチャカチャという音と、肉を咀嚼するクチャクチャという音だけが聞こえた。

小さなテーブルの前に座するシャルナアプ・ウーデルカは、切り終えたステーキの肉片を口に放りながら、入室したガンド・マギアスに向かつて小さく左の義手を持ち上げた。

「失礼。こつも執務に追われては、なかなか食事の時間も作れないものでね」

ガンド・マギアスは小さく溜め息を付いた。

「で、終わりましたかな」

シャルナアプは咀嚼するクチャクチャという音を交えながら「概ね」と答えた。

シャルナアプの眼前では、白と黒の仮面を付けた者達が黙々と作業をこなしている。

多量の砂クラゲを溶かしたドロドロとした小さなプールに沈む屈強なまだ若い男を、仮面の者達は四人がかりで引き上げると脇に設けられた小さな砂場へと降ろした。その後で、男の身体の両面に万遍なく黄砂をまぶすそれは、フライを作る工程に似ていた。

一通り作業を終えると、仮面の者達は再び四人がかりで男の身体を持ち上げると、スプーンの用に少しだけ丸みをおび、窪んだ床へと移動させた。無言のまま作業を見守っていた黒の神官キーラ・バレンシアが、不意に壁に突き出たレバーを引くと、スプーン床はパツクリと真ん中から割れ、男の身体は放り捨てられるように遙か下方の砂漠へと消えていった。

「これにて、剣王ル・シウス配下の全戦犯への判決及び、刑罰の執

行を終了する」

シャルナアプは高らかに告げると、激務からの開放感に浸るよう
に座ったままで両手を広げ、伸びをする。

その瞬間、シャルナアプの右手が空気のように気配なく傍らに立つ
女の顔に当たった。黒い仮面は外れ、床で船の様に揺れたが、その
女、ベアトリス・カラーチエは目で追う事もせず、ただ虚ろな瞳の
まま立っているだけだった。

ベアトリスに向かい「失礼」と謝罪の言葉を口にするシャルナア
プの所作はあくまで優雅に、そして大袈裟までに紳士的である。

「四十八名の刑の執行だよ？ ガンド。賢き選択も楽ではないな」
少しだけ疲れた表状で笑うシャルナアプを、ガンド・マギアスが
無言で見つめた時、小さな裁判所とも言うべき部屋のドアが開いた。
部屋の中へと入ってきた白の神官アラベル・フランの抱えるそれ
を見て、シャルナアプは小さく舌打ちをする。

「そう言えば、まだそれが残ってたな。……それで？ 黄砂病の患
者は何人目になった？」

侮蔑の表状で見るシャルナアプの前で、アラベルの抱きかかえる
幼児が泣き声を上げた。

ル・シウス軍執行前夜に、隣人からの情報で連れて来られた幼児
は母親を求め、焦がれる様にただ泣き続ける。

「その子で七十八人目です」
そう告げたアラベルの声は、非現実的なまでに美しかった。

「さつさと救ってやれ」

シャルナアプが吐き捨てるのと同時に、アラベルは懐から抜いた
短刀を幼児の喉下に突き刺した。

4

リンド団長と並んで、裏通りを歩く僕の頭の中では、団長の残し
た言葉がぐるぐると廻り続けていたが、僕はその疑問をなかなか口

に出来ずにいた。ちらちらとリンド団長の顔色を伺う僕の気持ちを
知ってか知らずか、不意に団長が口を開いた。

「戦時の仕事はどうだった？ ロム」

ムーナル戦役における僕の活躍などたかが知れている。救護班と
いう仕事を与えられ、心臓は不安と興奮に高鳴ってはいたが、自身
の決意が虚しく思える程に、戦争の決着はあっけなく着いた。僕は
そのほとんどをパオロ広場で待機していたに過ぎない。

「仕事、と呼べるものかどうか。僕はほとんど何もしてないですし
……ただ」

僕は続けた。

「ただ……やっぱり恐かったです。僕の目には映らなかつたけど、
このパラス・アズロで戦争が起こっているという事。そして、たく
さんの血が流れたという事。その事実が、本当に、恐かったです」
僕は本心をありのままに告げた。

リンド団長は静かに頷いた後で、少し遠くの空を見つめる。

「なあ、ロム。ロムはどうしても守りたいものってあるか？」

僕の脳裏にすぐに浮かんだのはレムの顔だった。

「俺も戦争は恐かったよ、逃げ出したい程にね……。でも、どんな
事があっても、自分の大切な人を守る為と決めたから、逃げ出さず
に戦う事が出来た」

青い空を眩しそうに見つめながら話すリンド団長の口から「恐い」
とか「逃げ出したい」という言葉が飛び出すのを聞いて、僕は一瞬
戸惑ったが、「逃げずに戦えた」と告げた理由はすぐに合点がいつ
た。それは紛れもなく戦の前に誓った僕の決意と同じだったからだ。
以前、リンド団長は「運命の時、大切なものを守る為に戦える力
が持てる事」を自身の夢だと語っていた。その大切なものの答えは、
さすがの僕にも分かっている。

ユカリさんだ。

リンド団長は見上げる視線を移すにつこりと微笑んだ。

「だから、必ず戦場から生きて戻るから、その時は、結婚してほし

「いって、ユカリにプロポーズしたんだ」

リンド団長の瞳をまじまじと見つめる僕の瞳は丸々と見開かれたままで、喉下にひっかかった言葉を出せずに少しの間、口をパクパクと動かす姿は餌を待つ魚のようだったろう。

「ユカリも、いいよって、言ってくれてさ……」

少しだけ顔を赤らめるリンド団長の、初めて見る表状を目の当りにしながら、落ち着かせる様に大きく息を吸い込むと場所も人の目もはばかりに僕は声を上げた。

「おめでとございます!!!」

リンド団長が照れるように笑った。

5

ムーナル戦役が決し、パラス・アズロの移動も終えて数日後、街には平穏という言葉が良く似合っていた。

以前なら、時折の小競り合いを見せていたガリア族も、一族の長を拳王ガリアラツハが名乗るようになった頃から全く動きを見せていなかったし、この数日は甲虫の襲来に見舞われることも無かった。さしたる騒ぎもない街で今一番の話題と言えば、間近と噂される東方守護騎士団長、青の騎士リンド・ヘイワースと、白の神殿勤めの巫女ユカリ・マルキアンティの結婚についてだった。

元々が人口千五百人程の小さな街で、青の騎士と白の巫女といえは結構な有名人である。街中の人間がざわめき立つのも不思議ではなかった。

パラス・アズロの四方の内、東方を守る大門とドムス・パオロのちょうど中間にある古く歴史を感じさせる木造りの四階建てのアパート。その二階の角部屋を男が訪ねたのは、柔らかな陽が降り注ぐ穏やかな午後の事だった。

祝いの品と呼ぶにはそれ程値もはらない果実酒を片手に、木製の

ドアを叩き鳴らす。間もなく現れた部屋の主、リンド・ハイワースは、男の顔を見つめてはのんびりとした声を上げた。

「こんな時間にお前が尋ねてくるなんて珍しいな、ユアン」

リンドに声を掛けられると、赤の騎士ことユアン・マクティカナルは部屋の主が入室を認めるより早く上がりこむ。

「で、式の準備は進んでんのかよ？」

ぶっきらぼうに言い終えて、果実酒のビンをテーブルに乱雑に置くとユアンは部屋を見渡した。まだ自分とリンドが若き騎士であった頃から特に変った様子も見られない内装に、昔をちよつとだけ懐かしんでは見たものの、少しだけ厳しい表状を崩す事なくユアンはリンドを見つめた。

何事か良くは分からないものの、その表状に「これから飲むぞ」という意思を汲んだリンドは、内心やれやれと思いつつもグラスを用意する。テーブルの上には空のものと、口も付けられてはいないコーヒー入りの二つのカップが置いてあったが、グラスを用意するついでにそれを片付けた。

リンドはリラックスできる部屋着という姿ではあったものの、最近では陽も出ている内からアルコールを摂取するといふ事は稀まれだった。それでもおそらく、親友のグチの一つも聞かされるのだろうと当りを付けていたので「まあ、式の準備は順調に進んでるよ」と話しながら、何の気もなしに席に着く。しかし、果実酒のフタを抜いて、グラスへ赤い液体を注ぎながら話すユアンの問いは意外なものだった。

「で……本当に結婚すんのか？ ユカリちゃんと」

頭の中で疑問符を浮かべたリンドだったが、それもおそらくは彼女のいない彼の嫉妬のような類のものだろうと気にも留めなかった。（幼なじみの自分を差し置いて、結婚なぞおこがましい。ユカリを幸せにしなかつたら許さんぞ…きつと、そんな才子でもつくのだから）

にっこりと微笑むとリンドは「同じ質問をついさつきも言われて

さ」と告白する。

ユアンが意外な顔をするのを見て、リンドは吹き出した。

「ヒリユーさんだよ。お前が来るちよつと前までいたんだ。ヒリユーさんは『結婚して騎士を辞めるなんて軟弱なセリフを吐く気じゃないだろうな！』ってさ。……まあ、それはまだ先の話です、って答えといたけどさ」

微笑むリンドだったが、その謎解きはユアンの気にいるものではなかったらしい。ぐいとグラスに注がれた果実酒を飲み干すと、ユアンは少し悩んだ後で口を開いた。

「……俺は、お前とユカリちゃんは……なんて言うか、その……兄妹みたいな関係だっと思ってた。……それは……実際、お前もそう思ってるんじゃないのか？」

少しの間の後、「大丈夫だよ」と口を開いたリンドだったが、その瞳はユアンを見ていなかった。

「それでも、大切な存在に变りはないさ」

誰に言い聞かせるでもなく、言葉は静寂に消えていく。

リンドはグラスの中で揺れる赤い液体をじつと見つめたままだった。

6

僕は少しだけ眠い目を擦りながら、その日の勤務に従事する。今日は先輩の騎士の巡回に同行するのだ。

いつ急な要請があるかも分からない騎士は夜といえども詰め所に数人の騎士を配置している。夜勤と呼ばれるもので、夜勤者の一人には必ず準騎士や見習いが当るのが常で、昨夜の見習いの当番は僕だった。

普通なら、夜勤明けの朝でその日の仕事は終わりだけど、本当なら朝から巡回に同行するはずの僕と同じ見習いのマルチエロが急病で休んだので、夜勤明けの僕が急遽キョウジュ巡回の同行もする事になった訳

である。夜勤とはいえ、何も起こらない夜は仮眠も割に取れるので、すごくという訳ではなかったけど、やっぱり眠い事には変わらない。あくびが出そうになる僕を、時々先輩が睨み付ける。

午前の早いうちに街中の巡回を終えた僕達が東部一、いやパラス・アズローのスラム地区へと足を伸ばしたのは昼前の事だった。

予定ではこの地域の巡回を終えた後が昼休憩という事で、大分お腹も空く頃合だったけど、一瞬にして空腹も眠気も失せた僕の理由は別の所にあった。

東部スラム地区。ここは僕とレムの生まれ育った場所だ。

この地域を訪れる度、僕の脳裏に浮かぶのは亡き父と母の顔。…そして、トカゲの化け物とあの惨劇。

事件の後、心に刻まれた恐怖からしばらくの間は巡回に際しても地域内に足を踏み入れる事の出来なかった僕も、数年経ち今ではやっと訪れる事が出来るようになった。それでもやっぱり、この地域に来る度に背中に走る寒気は消える事はない。

(いつかは乗り越えなくちゃいけないんだ)

意を決するように心の内で呟いた僕は、不意に聞こえた子供の笑い声に振り返った。

古びれた小さな家屋と家屋の間の細い通り。スラム出身と一目で分かる擦り切れた衣服を着た子供達が熱中していた遊びは、ピッコロと呼ばれる古くから伝わる紐飛びひもの一種だった。

その子供達に交じって、子供達の笑顔に負けなくらいとびきりの笑顔の女性を僕は見つける。

「ユカリさんだ」

薄汚れたスラムで彼女の周りだけがキラキラと輝いて見えた。その輝きの中で、子供達は無邪気に、そして心から楽しそうに笑っている。

ユカリさんが、休みの日などにスラムの子供達に勉強を教えたり、一緒になって遊んだりしているという話を、僕もリンド団長に聞い

て知ってはいた。

子供達と戯れるユカリさんを見ながら、ユカリさんとリンド団長ならきつと素敵な家庭を築けるんだろうな、と僕がぼんやりと思っていた時、ユカリさんが僕に気付いた。

「ロムくん！ ロムくん！」

笑顔のまま手を振るユカリさんが素敵すぎて、僕は少しの間見とれてしまった。

7

その日、空は恋人達の新たな門出を祝うかのように晴天に恵まれた。

小さな教会の小さなテラス。あまり大仰ではない立食パーティーはユカリさんの提案だという。新婦の招待で、精一杯のオシャレをしてきたスラムの子供達がテーブルいっばいに並べられたごちそうに早くもありついている。

内々での小さな式という事もあり、出席者は少なかったが、この後友人代表の挨拶を行う予定のカギル団長とユアン団長、そしてサリー団長にベアトリスさん、すでに居眠りを始めたガンド・マギアス総長らと共に、僕も式へと招待された。

家を出るまで、身体が弱く留守番のレムが、「ロムだけ、ずるい」とブーブー文句を言いながらも、宥める僕に「ちゃんと僕からもお祝いの言葉言っておいてよ」と少々不満の残る顔で送り出してくれた。

テラ教の旧い慣わしに則った今回の式は、神父を前に二人だけで永遠の愛の誓いを立てるとというのが通礼である。

僕は、これから教会から出てくるリンド団長とユカリさんをテラスで待った。

創生神テラに身も心も仕えるユカリさんは、今日の日をもってその勤めを終える事になる。それでもユカリさんにはやりたい事がた

くさんあるらしい。おそらく、スラムの子供達の面倒を見る事もその一つだろう。そして、リンド団長は……。

リンド団長からユカリさんとの結婚を伝えられた後、リンド団長は更に僕に話を続けた。

「実を言えば、ユカリだけじゃなくて俺にもやりたい事があるんだ。だけど今の東方騎士団を残して、私情を優先させるつもりはないよ。でも、いつか後を託せる者が出て来た時は……。ロム、君もその候補の一人だつて事を覚えておいてほしい」

僕はリンド団長の話を聞いて、とても光栄だと思った。でも、心のどこかでは少し寂しい気もしていた。

辺りは子供達が駆け回る騒々しさと、笑い声の響く賑やしさに包まれていたが、ゆつくりと教会のドアが開いていくのと同時にそれも静まった。そして、その後で子供達の「お姉ちゃん、きれい」という溜め息にも似た声が広がる。

教会から出て来たリンド団長は白いタキシードを、そしてユカリさんは純白のウエディングドレスを身に纏まとっている。

二人供に少しだけ照れる様にして見つめ合ったその時、すでに出上がっていたカギル団長が「ユカリ」と叫びを上げながら抱きつこうとする。涙と鼻水から純白のドレスを守るようにして、珍しくアルコールを控えていたユアン団長が羽交い絞めにする姿は、式が終わるまでに後三回見られる事になる。

はにかむ二人が素敵すぎて、笑いに満ちた式が楽しすぎて、時間はあっと言う間に流れていった。

だから、僕は予想もしていなかった。

僕が笑っていたその時、そんな恐ろしい事が起こっていたなんて。予想もしていなかったんだ……。

式が終わり、リンド団長とユカリさんはパラス・アズ口の南西部にある古城へと一日だけのハネムーンに出掛ける。

教会の中へと入っていく二人を見届けた後、余韻の残る式場を僕は後にした。

サリー団長とベアトリスさん、そして酔い潰れるカギル団長を紹介しながら歩くユアン団長と一緒に教会のテラスから外に出た時、通りの向こうからヨロヨロと歩いて来たのはペノツテおじいさんだった。左目の周りに青アザの出来たおじいさんは、子供のように泣いていた。

驚いて駆け寄った僕に、おじいさんはわななくように呟いた。

「ロム…ロム……。レムが連れて行かれた。連れて行かれたんだ」

僕は何の事が見当もつかない。

何を問うべきかも分からない。

僕より先にサリー団長が質問した。

「ペノツテ、レムルスは誰に、どこに連れて行かれたんだ？」

ペノツテおじいさんはさすがのようにサリー団長を見た。

「白の神官アラベルが、仮面の連中を連れて来たんです。ワシは、

ワシはその子は違うって、何度も、何度も……」

おじいさんはその場に泣き崩れる。

僕は意味も分からず、その場に立ち尽くすだけだった。しかし、

サリー団長は傍らのベアトリスさんに小さく目配せすると、何もかも理解したように頷いたベアトリスさんは、ユアン団長へと寄り掛かり立っているのもやっとのカギル団長を抱き寄せた。

「ロム、ユアン、行くぞ」

信頼する者への行動を確認するでもなく、サリー団長は駆け出す。後を追って走り始めた僕とユアン団長が質問するより早く、サリー団長は行き先を告げた。

「レムルスが連れて行かれたのは、収容所だ」

僕達が収容所にたどり着いたのは、収容所の入り口の鉄格子の扉が閉じるのとほぼ同時だった。

扉の前に立つ門番のような二人の男が振り上げようとすする長い棒の先を、サリー団長とユアン団長ががっしりと掴む。その間に駆け抜けた僕は、鉄格子の柵を両手で強く揺らした。

「待って！ 待って下さい！ レムを返して！ レムを連れて行かないで！！」

鉄格子の先には、白い布を被せた担架を四人がかりで持つ仮面の者達と、白の神官アラベル・フランが立っていた。

「レムは病気なんです！ 僕と一緒にじゃないとダメなんです！」

僕の必死さを正面から受け止めつつも、アラベルの表情は全く変わらない。ただ、抑制された声で話すだけだった。

「ロムルス・パルミエリ。あなたの言う通り、この子は病気です。だからこそ、ちゃんとした治療を受けさせなければなりません」

その声は想像上の小鳥のさえずりのように美しい。朝の訪れを思わせるその響きと、よく知る僕の声、レムが目覚めたのは必然だったのかも知れない。

「……ロム？」

眩くのが聞こえるのと同じくして、担架の上に被せられた布が舞い落ちた。その瞬間、サリー団長は小さく舌打ちし、ユアン団長の目が見開かれる。

レムルスが病弱だというのは皆知ってはいたが、今やその姿を実際に見た事があるのは僕意外ではペノツテおじいさん、サリー団長、リンド団長の三人だけだった。

ユアン団長は初めてその姿を見た。右腕と右脚、そして右半分が陥没したように無い、僕の弟レムルスを。

再び声がした。小鳥の美しいさえずり声。

「身体の欠損は、黄砂病患者の特徴的な症状です。専門的治療と感染防止の為に、外界と隔離しなければなりません」

そんな……。

そんな……。

そんな……。

そんな……。

上手く紡ぐ事もできないくせに、混乱する僕はただ言葉を並べた。
てた。

「だって、嘘だ！ そんなのは嘘だ！！ 黄砂病になったら……十歳まで生きられないはずだ！！レムは、レムは十四歳だ。十四歳なんだよ！ 黄砂病のわけないよ！！ それに、それに、今までだって普通に暮らしてきたんだ、感染なんて……」

「例外とてあるでしょう」

アラベルはぴしゃりと告げた。

「今まで大丈夫だったから、これからも大丈夫などという保証はありません」

踵を返すとアラベルは歩き出し、四人の仮面も後に続く。

僕は「レム！！」と何度か叫び、鉄格子を激しく何度も何度も揺らした。しかし、アラベルが立ち止まる事はなかった。

10

どれくらい時間がたったのだろう。それすらも分からず、どうやって時計塔まで戻って来たのかも覚えてはいない。

サリー団長とユアン団長がしばらくの間ついていてくれたような気もするけど、それもそんな気がするというだけの事だ。

暗い部屋の片隅で膝を抱える僕にはもう何も無かった。

少しの理性が残っていれば、これが絶望という事なのだと理解する事も出来たかもしれない。だけど、僕はもう何を考えるのも嫌だった。

今の僕に出来るのは、膝を抱え、闇の先をぼんやりと見つめる事だけだった。

永遠とも感じられる闇の中に光が射し込んだのは、僕がその闇に根を下ろしてから、しばらくしての事だった。

隣室に通じるドアが開き、隣の部屋からこぼれた明かりの中に、リンド団長とユカリさんが立っていた。

ユカリさんは泣いていた。そして「ごめんなさい」と呟く。

今日づけで白の神殿勤めではなくなったユカリさんには、もうアラベルに働きかける術はない。その「ごめんなさい」はつまりそういう事なのだろうと、僕は何となく思った。

慟哭なげなげの止まぬユカリさんをユアン団長が隣の部屋へと連れて行くと、残ったリンド団長が僕の隣へと腰をおろした。

話しかけるリンド団長の声は、いつもと変わらず優しい。

「いつかこうなる事が来るのを、ずっと恐れていた。サリー先輩と二人で、レムをアラベルの目から隠してきた。でも、ロムには本当の事を話しておくべきだった。本当にすまない。俺の力が足りなかったせいだ」

僕は何も言えなかった。

元よりレムが黄砂病と分かった上で匿ってくれて、僕とレムに普通の生活を送らせてくれたリンド団長とサリー団長をとにかく言う権利など僕にはない。

本当に悪いのは、レムが黄砂病などと疑いもせず、現状に甘え続けてきた自分自身にあるのだ。

「なあ、ロム」とリンド団長は続ける。

「俺もユカリも、ユアンもカギルも、そしてサリー先輩も、皆、君

の事が大好きだ。だから、俺も彼らもレムがまたここで君と暮らせるように手を尽くすだろう。……でも、それだけじゃダメなんだ」

僕はすぐ隣に座るリンド団長の顔を見た。

彼は小さく、だが力強く頷いた。

「君自身が強くならなきゃダメだ。誰の目にも留まるくらいに。そして、アラベルや賢王シャルナアプに自分の立場と意思を主張できるくらいに」

語り終えた後、僕の目を見つめ再び頷くと、彼は静かに立ち上がる。

やがて、彼がいなくなり一人残された闇の中で、僕は自分の非力さがただ悔しくて、声を上げて泣いた。

第七章 広がりゆく黄色と赤色の剣士

第七章 広がりゆく黄色と赤色の剣士

1

砂漠の空に突然現れた人影はそのまま落下すると、砂塵を辺り中に巻き上げた。

うつぶせのまま、子供が駄々をこねるように四肢をしばらくの間ばたつかせた後で、むくりと上半身を起き上がらせると口の中に入った砂を吐き出す。

「まさか、一旦記号化された後で、再構築されんのがこんなに痛えーなんて。あんにやる、先に言っとけつての！」

腰までのびた赤毛の長髪をかきわけるようにして覗かせた瞳で、空を少し睨みつける。その後で、気を引かれたように、あぐらをかいたままの姿勢で黄色い砂を一掴みするとそれを地面に振り撒いた。無風の中、はらはらと撒かれた砂は地面に落ちて広大な砂漠の一部と同化する前に、様々な数字の羅列や暗号めいた文字、そして、二つの景色を描き出す。それは港町から広がる美しい海と、ビルディングがそびえ立つ都会の風景だった。

「なーるほどねえ」と男は満足したように呟く。

「廃棄されたデータやメモリを処理しきれなくなってるのか。紅砂コウサとは違うって訳ね」

ふん、ふんと一人納得した後で、立ち上がると男は伸びをする。そして「さて」と呟いた後で、黄砂の広がる砂漠を一人歩き出した。

砂漠といっても天候は至って穏やかで、散歩気分で歩き始めた男だったが、砂に足をとられる為、余計に疲れる気がする。その感覚を一度意識してしまうと、喉の渇きも抑えきれなくなった。

疲労や喉が渇くといった概念は無視して良いとは言われていたが、生身だった頃の間をリセットしろと言うのがどだい無理な話である。歩き出して二時間、もともと我慢強くない性格の男は根を上げ始めた。それでも、彼の目に廃村らしきものが映ったのは、余計に疲れるだけである。に呪いの言葉をブツブツと呟き始めた彼が、根を上げる直前だったので幸いと言えば幸いである。

彼が廃村へと訪れた時、一人の少年が村の中ほどで黙々とスコップで穴を掘っていた。

彼が何をしているのか、と尋ねると首から水筒をぶらさげて義手の右手を持つその少年は「お墓を作っている」と答えた。彼が辺りを見渡すと、辺りの地面には幾つもの剣や棒が突き刺さり、それに厚手の紐が結わえてあるのが映った。

おそらく、それがこの村や部族に伝わる所の葬儀の仕方なのだろう。見渡した後で、彼は再び問うた。

「それは、お前の墓なのか？」

彼は、少年の掘る穴を指差す。

彼が見る限り、村には少年以外に人の姿はなかった。

作業を一時中断すると、少年は彼の顔へと視線を移す。少年の頬は流した涙が乾き、白い跡をつくっていた。

「……皆…皆、次々と死んでいった。僕はこの村の人間じゃなかったのに、お義父さんもお義母さんも、お姉ちゃんもすごく優しくしてくれた。最後に残った水を僕に残して、お義父さんとお義母さんに続くようにお姉ちゃんも死んでしまった。それからずっと、僕は皆のお墓を作ってきたんだ。……最後に僕のお墓を作って最後だよ」少年の話を聞き終えて「ふうん」と唸った後で、彼は「一口だけ」と水をせびった。

水筒にはまだ結構な水が残っていたが、少年はどうせあの世には持っていけないから、と惜し気もなく彼に手渡す。

約束通り一口だけ水を飲むと、彼は少年に水筒を返す。その後で、

おそらく自分の幕用にであろう、少年の薄汚れた半ズボンのポケットからぶらさがる紐を見せてくれるよう頼んだ。

少年は何の気もなしにそれを手渡したが、彼はその紐で腰まで伸びたうざったいほどの長髪を結った。その様を見ていた少年が抗議するより先に彼は口を開く。

「お前が最後に残されたって事は、そりゃ運命ってこった。だから、お前は俺と一緒に来るべきだ。……で、お前、名前は？」

呆氣にとられる少年が、ただ「……キリ」と呟く。

「そうか、キリか。ヨロシクな」

彼はその名を呟きながら、屈託なく笑った。そして、自身の名を告げた。

「俺はアン。アン・ミンツだ」

2

パオロ広場に集まった沢山の人間が静かに見守る中、ドムス・パオロの二階に位置する広いテラスへと重装騎士と見間違うような黒の神官キーラ・バレンシアと、美しい顔立ちをした白の神官、アラベル・フラン、そして騎士総長のガンド・マギアスが姿を現す。

三人がテラスへと現れると間もなくして、白の巫女と黒の巫女を引き連れるようにして、賢王シャルナアプ・ウーデルカが姿を現した。

王が現れた瞬間、それを見つめる人々の歓声が爆発する。

シャルナアプは薄く笑みを携えたままで、軽く左の義手を小さく振りながら、歓声へと応えた。その後で、テラスの中央へと歩みを進めると、歓声が小さく、やがて静寂へと変わっていくのを聞きながら、実に美しい立ち姿のまま、その時を待つ。

一度静まりかけた歓声は、テラスに四人の騎士が姿を現すと再び

爆発した。

パラス・アズロの四人の守護神は各団のモチーフカラーの鎧とマントを身に着けている。

群衆は、羨望の眼差しで四人を見上げていた。

シャルナアップが巫女の一人から、一振りの剣を受け取るとその眼前に歩み寄った白い鎧を身に付けた騎士が膝をつき、彼を見上げた。その一連の動作にはどこか、ぎこちなさを感じさせる。

(カギル団長、めちやくちゃ緊張してるし)

僕は内心でそう呟くと、吹き出しそうになった。

「パラス・アズロの南の地に平穏と安寧を」

カギル団長の肩に剣の刃を乗せて賢王シャルナアップがそう告げると、「はい」とカギル団長は答えたが、緊張で口の中が渴いていたのか声音はどこかしらおかしかった。

物々しい空気の中、僕は完全に吹き出してしまふ。

その厳粛な場において、吹き出したのは僕と「赤の騎士団長」の二人だけだった。

賢王シャルナアップから神剣アテナイを受け取った後、下がったカギル団長が赤の騎士団長を肘で小突く。

白の騎士に続き、赤の騎士、黒の騎士も拝剣の儀を済ませた後最後に残る四人目の騎士の番がまわってきた。

「パラス・アズロの東の地に平穏と安寧を」

賢王シャルナアップがそう告げた。

そして、僕は「はい」と答えると、剣帝ネイル・フリー・トゥーンを受け取った。

レムが収容所に連れて行かれてから、五年が経っていた。

あれから、僕は修練を重ね正騎士へとなった。

そんな僕がリンド団長から正式に東方守護騎士団長を託されたのはつい半年前の事である。しかし、それには当然反対の言葉が上がった。正直な所、それは僕も同じだった。なぜなら僕はまだ「創ソウ」

へは至っていないからだ。だが、それも「今いる騎士の中で『青』^{セイ}に至っているのがロム以外にいるか？」と、周囲をリンド団長が説得してくれた事や、「ここまで来れば『創』に至るのも問題ないさ。焦らずにやれば良いよ」と僕を励ましてくれたリンド団長に半ば押し切られた形で、団内で大きな問題へと発展する事は無かった。それでも僕は悩んだが、最後の最後にリンド団長が掛けてくれた言葉で、ようやく決心もついた。

「東方守護騎士団長にロムが就くという事。それは何よりレムの為だろう」

僕にとってはそれが全てだった。その為なら、どんな犠牲も厭わ^{いと}ないとの日決めたのだ。

僕はリンド団長の申し出を正式に受けた。そして、僕は正式に東方守護騎士団長として任命された。

騎士団長として最後の日、僕へと剣帝ネイル・フリー・トゥーンを託すリンド団長は、「でも、ロムがあまりにも不甲斐無かったら返してもうらうかもしれないな」と、珍しく少し意地悪な事を言った。すぐに試されているのだと覚った僕は迷い無く言い切る。

「いえ、その時は団長を斬り捨てるかもしれませんが。手加減できないかもしれないので先に謝っておきますね」

それを聞いて「言うようになったなあ」と、リンド団長は声を上げて笑った。

それから一カ月、東方守護騎士団はリンド団長を慕っていた数名の除隊者が出た為、急速すぎる程に若手主体の団へと変っていた。それをまとめるだけでも一苦労だけど、今の僕に迷いはない。

いつか、再びレムと供に暮らすその日を信じて。

アン・ミンツとキリが砂漠を南西に向けて歩き出して三時間後、水筒も空になった頃に見えたのは、砂漠にただ広く設置されたテントだった。あまりの巨大さにこれからサーカスでも始まんのか、とアンは一人「ニヒ」と空笑を浮かべる。

入り口らしき所に立つ、顔を布で覆い、砂漠の骨を加工した鎧を身につけた男が「ここはガリア族が本営ぞ！ 何奴！！」と芝居がかったように叫ぶのを見て、アンは面倒くさそうに答えた。

「アン・ミンツが来たよ、王に伝えてくれ」

門番役の男が傍らに控える布で顔を覆った伝令役らしき女に目配せすると、女はテントの奥へと消えたが、それ程待つ事もなく再び現れた。

「王がお会いになるそうです。どうぞこちらへ」

女に案内されるままに二人は後に続いた。途中、これぞ砂漠の民族というべき風体の男達や女達、そして、砂漠に生息する獣や虫を加工して作られた、いかにもな装飾品をアンは感心しながら歩いた。

女は、一際大きく豪華な飾り付けがされた扉の前で立ち止ると「王はこの部屋です」と二人を促す。

「あ、そ」と別段かしこまるでもなく、アンは中へと進んだ。

薄暗がりの部屋の中央の玉座に座る者が、入室したアンとキリへと視線を移す。

砂漠に生息する虎のような獣のしゃれこうべを、顔を覆うようにしてすっぽりと被り、黒い毛皮をまとうそれが、見据えた時、キリはアンの後ろに怯えるように隠れ、アンの服の裾をギュツと握ったが、対照的にアンは爆笑した。

「我こそはガリア族が王！ ガリアラツ八なるぞ！」

そう堂々と言い放ったそれを見て、アンは再び爆笑する。

その声は女の声だった。

「なあ、やつぱそれってやんなきゃいけねーもんなの？」
涙まで流しながら、そう尋ねたアンを見て、ガリアラツハは「ふん」と言いながらカブトを脱いだ。
「急を要する事だろうに、あのバカの悪ふざけがすぎるのじゃ」
元々きつい瞳をつり上げて、苦々しく話す女の褐色肌の顔には、民族特有の墨が彫られていた。伸ばした緑色の髪は編み込まれ、幾重にも束ねられている。

落ち着きを取り戻したアンは、目尻に残る涙を擦りながら尋ねた。「で、今はなんて呼べばいい？　今まで通りにジジイか？　それともパツと見は同年代っぽいしファーストネームでクイルドか？」
「好きなように呼べ」となげやりに言うと、ガリアラツハ役のクイルドはすねるように頬杖をついた。

4

騎士礼典の終わったテラスで、僕は一人剣帝ネイル・フリー・トゥーンとの対話に集中していた。

リンド団長から託されて、初めてネイル・フリー・トゥーンの声を聞いた時、僕はすいぶんと高慢で年よりくさい喋り方をするのだな、と思った。

「年よりくさいとは何事か！　我を何と心得るか！！」
一喝されて、神具級ハルモニアとなると、わざわざ対話の環境を整えなくても常に繋がり、心の声だけで対話できる事を知った。それ以来、ネイル・フリー・トゥーンは何かにつけてガミガミと口うるさくて、気の休まる時はないけど、それは彼なりに僕を心配しての事なのだろう。「ネイルっていいヤツだよな」僕がそう話すと彼はつつけんなどと「くだらん」と言い捨てたが、その響きにはどこか照れがあるように感じられた。

僕は彼と、剣の道とは何か、という固い話題から、他愛のない世間話までひとしきり話を続ける。しかし、つきない話題を制するうちに、テラス中に「ロムー！」という声が響き渡った。

僕が振り返ると、白いスカッリヤを身にまとうカギル団長が、ユアン団長を引きずるようにして立っていた。

僕は彼女が何か言うより早く、これが毎年恒例の騎士礼典の締めである事を理解する。

礼典で爆笑した事について、ユアン団長を非難するカギル団長は今日まで何かと僕を気にかけてくれていた。そんなカギル団長も今年で二十六歳だが、ユアン団長によれば「この数年でカギルの引きこもり具合は更に酷くなった」との事である。

緊張したカギル団長こそ悪いのだ、と言って僕に同意を求めるユアン団長は、まだ若き騎士団長である僕が少しでも仕事しやすいように、と後見人になってくれた。

そんな二人に「ロムはどう思う!？」と詰め寄られて僕は後ずさる。煮え切らない僕を見てユアン団長が自分の値をつりあげた。

「もちろん、ロムは俺の証言に賛成だよな。なんたって俺、後見人だし」

あまりにも大人気ないやりくちにカギル団長もひけなくなる。

「な、なによ！ それなら、あたしで、ロムは女を知ったのよ!！」
高らかに言い放ったカギル団長にユアン団長が啞然となった。

「ちょ、ちょっと誤解のある言い方しないで下さい」
僕は大あわてで説明する。

「ロムは女心が分かってないね」と話す彼女は何かにつけて「女というものは」という講義を僕にしてくれたが、彼女の話す女性像について、僕は正直言ってそれが当てはまる女性をカギル団長以外で見た事がなかった。

説明を聞き終えて、「そんな事だろうと思ったよ」と、カギル団長と視線を合わせた呆れ顔のユアン団長だったが、二人顔を合わせた後、思い出したように僕へと向き直った。

「で、結局……」

その時だった。運が良いのか悪いのか、甲虫出現を報せる警報が鳴り響く。

固唾を飲んで聞き耳を立てる三人に、いよいよ場所が発表された。「……場所は東方！ 東門を展開します！」

ユアン団長とカギル団長が小さくガツポーズをつき、僕は溜め息を付く。その後ですぐ手をひらひらと振る二人は、手伝ってくれる気は全くないらしい。

（それでも、この二人から開放されるなら良しとするか）
踵を返した僕の後ろで、ユアン団長が声を上げた。

「あ、そうだ。カギル、お前この後非番だろ？ たまには我らが口ムくんの仕事ぶりでも見に行くか？」

「それ、いいかもー」とすぐに賛成したカギル団長とユアン団長は、その後すぐにスカツリヤの上に羽織るポンチョ風のマントを取りに行くと言つてどこかに行つてしまった。

早足に駆ける二人の後ろ姿はまるでピクニック気分である。

（……なんて人達だ）

僕は怒りを通りこして呆れてしまった。そして、この二人に振り回されっぱなしだったリンド団長の苦労を今更ながら思い知らされた。

「やれやれ」

リンド団長風に呟いた後で、僕は自分の鎧を取りに早足に歩き始めた。

鎧の置かれた武具庫へと至る途中の廊下で、一人の男性と僕はすれ違う。

パラス・アズ口内において、現役だったリンド団長から未熟者の僕が団長職を継いだ事に対して不満を抱く者は少なからずいる。彼、賢王直属の親衛隊長、ヒリユー・ド・プライズモアもその一人だった。とは言え、東方守護騎士前々団長の彼に敬意を表さない訳にもいかない。

僕は立ち止まり、深々と一礼したが、彼は無視するように通り過ぎる。

相手にすらされなかった僕だが、それでも気にはならなかった。いつか彼らにも認めてもらえるよう精進するしかない。それは、つまり自分の問題なのだ、卑屈になっていたって仕方がない。

僕は背筋をピンと伸ばすと、胸を張って再び歩き始めた。

5

「……それで、クイルド、準備の方はどうなってる？」

アン・ミンツは運ばれてきた蒸留酒を飲み干すと、尋ねた。

蒸留酒は何の味もしなかったが、水と同様、喉の渴きを潤してくれるような気がした。

隣ではキリが数日ぶりのご馳走を一心不乱に食べている。

「ああ、神の気まぐれのおかげだな」

酒にも食べ物にも口をつけようとしないうクイルドは、玉座の肘掛けに乗った大きめの鈴を鳴らした。

アンとキリが入って来た扉が開き、六人の男女が姿を現す。

彼らは他の砂漠の民とは違い、キリと同じ白色の肌をしていた。

そして、彼らもキリと同じく身体の一部を人工物で補っていた。

スラリと伸びた肢体とサラサラの髪の毛の男は胸の部分に、背の高いショートヘアの女は両脚に、髪を逆立てヒョロリと背の高い男は左腕に、少しずんぐりとした体型の童顔の男は額に、銀色の細いフレームをかけたロングヘアの女は右目に、がっちりとした体格に無精ひげを生やした男は背中に、それぞれ、義手や義足などの人工

物が取り付けられている。

サラサラの髪の毛は微笑むとキリを見つめた。

「久しぶりだね、キリ」

その瞬間に、キリの枯れ果てたはずの涙が止め処なく流れる。

ズラリと並んだ六人を傍らに置いて、クイルドは静かに口を開いた。

「『ミカエル』のシロガネ。『ガブリエル』のアオ。『ウリエル』のアカネ。『メタトロン』のヤツキ。『サンダルフォン』のミドリコ。『サリエル』のギオン。……そして『ラファエル』のキリ。今、全ての準備が整った」

キリの中で失われていた記憶が覚醒する。

はたとキリが見上げた先で、アンが微笑んでいた。

「だから、運命だつたつたる？」

立ち上がり、ゆっくりと振り返ったキリを、長い旅を終えて帰郷した者のように六人は暖かく迎え入れる。

六人とキリに笑顔が浮かんだ。

「最後の一人、八人目は体調がかんばしくなくてな、今は身体を休めるところじゃ」

クイルドはキリも加えて七人となった彼らを見つめながら話を続ける。

「それでも、じゃ。いつでも始められる事には変わりないぞ。何にせよ、シャルナアのヤツが事ここに至るまでにデータやメモリを処理しとらんかったのは、ありがたい事じゃったのう」

それは、黄砂という形でこの世界を埋め尽くし始めた旧時代の記憶の残骸を示している。

身体の一部を欠損して生まれてくる彼らにとって、かつての時代のゼンマイ仕掛けの人形の一部ともいえるべきその技術がどれ程の助けになった事だろうか。

「処理してなかったんじゃなくてよ。処理出来なかったんだろ、プウのヤツはよ」

神の箱庭と呼ばれし、世界を創り、コントロールする力。たかだか錬金術師でしかないシャルナアプには荷が重たかったのだろう、とアンはもつともな指摘をしたが、クイルドには不満だったらしい。「それは、それじゃ。問題はな、ワシが今までコツコツと表出たんようにガリア族をまとめあげ、黄砂のデータから『ミカエル』ら天便型補強装置を作り、影で対シャルナアプの準備を進めてきたのが、お前の派手な登場でブチ壊しって事じゃ。あんな派手に身体再構築なんぞしおつて、シャルナアプのヤツとて気付いたに決まつとる！」

束ねた緑色の髪の毛をふりみだし、すごむクイルドにアンは一瞬ひるむ。

「じゃ、じゃあ、やめますか？」とアンが恐る恐る尋ねると、クイルドは余計に怒鳴った。

「アホウが！ シャルナアプじゃ長い間、次元の狭間に閉じ込められとったクリムタの魂の復活は無理じゃとわかつとるから、わしやこうしてあのバカに協力しとるんじゃ！ それがなかつたら、とつとくに新しい人生満喫しとるわ！！」

ガリア族八十八の部落の長の一人娘として生を受けた見目麗しい少女は、周囲の期待をよそに力で男達を従わせ、旧時代の記憶の残骸から天使型補強装置（アンゲルス・レインフォーセメント・マシナーリー）、通称アルマナを作り出すほどの聡明な知識を持っていた。それらはすべて、この世に生れ落ちるに当たって「世界」の真の継承者たる「あのバカ」から、以前の記憶と協力要請を得ていたからだ。

約一年程前、前ガリア族の王、先代ガリアラツハをボコボコにして、新たにガリア族の王となった二十八歳のクイルドの姿は、どこかかつての時代で彼が愛した女の姿に似ていた。

クイルドの怒鳴り声を聞き終えて、アンは「ニヒ」と笑う。
「だったら問題ないって。あれくらいの登場の方が、プウのヤツも
びびるっしょ」

6

小型の砂噛み（アレデントード）の征伐は、呆気ない程の早さで
決着が付いた。

いつもなら指揮系統をまとめるのだけでも一苦労するものだが、
幸か不幸か、その日は、礼典の残り物のジャガイモのフライと、ド
リンク片手に物見遊山ものみゆざん気取りで来ていた赤の騎士と白の騎士の姿が、
我が東方守護騎士団のメンバーに発破をかけたらしい。

アレデントードが悲鳴を上げながら、その東門に届きそうな程の
巨体を倒した瞬間、東方騎士団の面々は歓声を上げ、二人の団長は
あからさまにつまらなさそうな顔をした。おそらく、僕が手こずり、
泣きつきでもしたら貸しの一つも作るくらいのつもりで助勢しよう
と思っていたのだらう。

アレデントードが動かなくなったのを確認した後で、パラス・ア
ズロの方へと踵を返した僕を迎えるユアン団長はそれを隠すでもな
く口にする。

「あーっ。くそう、つまんねーな。あとは団の連中に任せてさっさと
支度しろ、ロム。飲みに行くぞ。しょーがないから、今日は割り
勘だ」

（あわよくば助勢して、僕に飲み代払わせるつもりだったのか…
…）

呆れかえる僕の口からは溜め息しか出てこない。後見人だなんだ
とは言ってるけど、これじゃただのチンピラと変わらないな、とい
う思いのよぎった僕だったが、一転して先輩の誘いを断る口実に気
が付いた。

「いやあ、ユアン団長。僕まだ未成年なもので、飲み、行けないです」

それは本当の事だ。その時、僕はまだギリギリ十九歳だった。

「つきあうだけでも良いだろー」と未練がましいユアン団長を制するように僕は続ける。

「せっかくだから、たまにはカギル団長と二人で飲んで来て下さいよ」

「はあ!？」と、頓狂な声を上げたカギル団長がむくれた。

「なんで今更ユアンなんかと二人して、お酒を酌み交わさなきゃならないのよ」

僕は軽く笑う。

「だって、花騎士も終わって、カギル団長、家に帰ってもする事ないでしょ」

カギル団長の顔に痛い所をつかれたような表状が浮かぶ。

エリスティンの死から早五年。七年越しの大作、花咲ける騎士団も黎明編をもって先日堂々の完結を果たしたばかりだった。

カギル団長が全四十七巻を最初から読み直すなどと言い出さないうちに、僕は二人に促した。

「たまには良いじゃないですか。ほら、つもる話もあるでしょ？

二人とも」

僕に追いたてられて、渋々といった表状を浮かべながらも二人は連れだつてその場を後にした。

二人の姿を見送った後で、僕は団の皆とアレデントードの死体を片付ける。死体をそのままにしておけば、それを狙ってまた別の甲虫などが寄って来る可能性があるからだ。あまりに巨体なサイズの物であればパラス・アズロ自体の移動を要請する所だが、この程度の物であればそこまでする必要はないと僕は判断した。

アレデントードの身体に銚もりをうちこみ、繋いだ鎖を僕も含めて十人がかりで引いていく。

1 km程離れた砂漠まで引き、鎖を外すその工程が終了したのは、既に夕暮れ近くの事だった。

パラス・アズロに引き返し、夜勤の団員に東方守護の務めを引き継いで、東方守護騎士団は解散した。

帰る方角が一緒の騎士、同期のマルチエロと途中まで歩き、別れた後で僕は一人薄暗くなり始めた路地を歩く。

見慣れた時計塔を少し見上げた後で、ドアをくぐると五年前より少しだけやつれたペノツテおじいさんが「おかえり」と微笑む。

「ただいま」と微笑み返した後、僕は階段を昇り自分の部屋へ入る。

そして、今はもう自分だけの、誰もいない部屋の、誰もいないベッドを見つめて、僕はいつも通りに「ただいま、レム」と呟いた。

7

「行くのね、ギオン」と義眼と呼ぶにはあまりにいかめしい機械を右目にはめ込んだ、銀縁の細いフレームのメガネをかけた女が言った。

砂漠に一人腰掛ける男は、首を傾けるとすぐ後ろに立つ女の顔を見た。

男はボサボサの頭に無精ひげという不健康そうな容貌をしていたが、鍛え上げた身体は引き締まっている。モスグリーン色のタンクトップからのぞかせた両腕は太くはなかったが、無駄な脂肪などなく、筋肉が凝縮されているようだった。

男は女の顔を見た後、そのまま砂漠に大の字に寝転がる。

「明朝、決行する事になったよ。ミドリコ」

男は答えながら雲ひとつない満天の星空を見上げた。そして、笑顔を浮かべる。

「んーっ、まあ、心配すんな。俺がしくじったら、お前らの出番が

なくなつちまうからな。絶対、成功させつからよ。ま、俺とサリエルに負かせとけ」

しかし、笑顔のギオンとは対照的にミドリコの表情は暗い。

「ギオン。……あなたは…あなたは、こわくないの？」

ミドリコの質問にギオンは笑った。声を上げて笑った。

ギオンがかつて荒紫名^{アナシナ} 祇園^{ギオン}と呼ばれていた世界で、彼は一度完全にその存在を消滅しかけた。

しかし、その間に彼の眼前に現れた風になびく稲穂のように美しい金髪の男は、自分の魂の一部を分けあたえてくれると言った。

そして、念願の魂を得て、この世界で存在の再生を果たした彼だったが、生れ落ちてすぐ「オギャー、オギャー」と泣き叫びながら母親を求める肉体とは裏腹に、冷静に動く頭がまず思ったのは（なんだ、これは？）だった。

あれ程魂に執着していた彼が、いざ魂を手に入れて見るとその違いに気付かなかった。いや、正確にはそれに違いなど最初からなかったのだ。それに気付いた時、彼は表面状では泣きわめきながら、心の中では笑い転げる。

ギオンは理解した。

問題は魂のある、なしではなかった。

真に必要なのは、自分という存在が、何を思い、何を考え、何を成すかだ。

おそらく他の六人もそれに気付いた事だろう。

その後のギオンは、数々の偶然と言う名の必然が積み重なった結果、ここにいたが、それでも自分がこれから行う行動は、自らが思い、考え、導き出した結論だった。それは自らの命をかけるに値する、ギオンという人間の存在を証明するに値する行動である。

それを理解しているからこそギオンは恐くなどなかった。

それは、おそらくミドリコと同じだろう。だが、頭で、心で、理解はしていても不安なのだ。ギオンにもそれは十分に分かった。

だからこそ、ギオンはミドリコに微笑んだ。

「これは終わりの為の行動じゃないよ、ミドリコ。死に行くんじゃない俺は俺らしく生き抜くために行くんだよ。それは、お前だつて同じだろ？ だから、そんな顔しないでさ、笑ってくれよ。……

なあ、ミドリコ。俺達、生まれてきて良かったなあ」

ミドリコはギオンの微笑みと言葉を受け止める。

そして、心の内を包み隠すのをやめるように、愛しい者へ向けて満面の笑みを浮かべた。

第八章 暴かれた青色の世界

第八章 暴かれた青色の世界

1

その日、僕は騎士団の詰め所へと向かう前に収容施設へと立ち寄った。

時刻はまだ朝の七時半、丁度その時間からが面会の開始時間となる。

収容施設においても朝食前の時間帯に面会人が来るのは稀らしいが、レムが夕方よりも朝の方が調子の良い事を知っている僕は、結構な頻度でその時間に訪れている。少なくとも二日に一回、僕はレムの面会に行っていた。

面会室と名前の付いた個室へ通された僕は小さな椅子に腰掛ける。間もなくして、レムが入ってきた、ようだった。というのも、患者と面会者は、患者のプライバシー保護と面会者のショックの緩和と称されるスモーク張りのガラス越しに面会しなければならないので、その姿を視認する事が出来ないからだ。

「僕だよ。おはよう、レム。今日はいつもより調子は良い？」

僕が尋ねるとガラスが「ドン」という音と共に震える。

伝声管越しに面会が行われるが、患者の鼻や口には医療用の管が挿入されている為、患者は話を聞く事は出来ても答える事は出来ない、と初めての面会の日、施設の職員は説明してくれた。だから、質問は簡潔にしなければならぬ。そして、患者からの返答はYESならガラスを1回、NOなら2回叩くというものだった。

僕は何も見えないガラスに向かって声をかけ、その度にガラスが1回、2回と叩かれる。

その光景に、僕はいつまでたっても慣れる事は出来ず、話しながらいつも泣きそうになる。でも、レムの方がもつと苦しいのだ、という思いを噛み締めると僕は努めて明るく振る舞った。

三十分と決められた面会時間も終わりに差し掛かると、僕は最近いつも必ず同じ言葉を口にした。

「少しずつだけど、皆、僕の事を騎士として認めてくれるようになったよ。もうすぐだよ、もうすぐそこから出られるように周りを説得してみせるからね」

しかし、ガラスが叩かれる事は今までも、そして今日もなかった。静寂が包む個室に面会時間の終了を伝える施設職員が入ってくる、僕は「またね、レム」と告げて面会室を後にした。

2

時刻は午前九時に少し前、夜勤明けのユアン・マクティカナルは東部地区の住宅街にある小さな一軒家を訪ねた。

呼び鈴を鳴らしても反応は無く、裏庭へと回るとそこで男が安楽椅子に揺られながら本を読んでいた。

「お前ね、客が来てんだから出るよ」

ユアンの非難めいた言葉で、ようやく来客に気付いた男は「どうした？ ユアン。珍しいな」と口を開いた。

寝癖の付いた頭に、少しくまの出来た瞳の下は昨夜寝ていない事を容易に連想させる。活力の無い顔色と不精ヒゲを生やしてはいたが、その男はまぎれもなくリンド・ハイワースだった。

夜勤明けのユアンよりひどい顔をしたリンドに皮肉の一つも言っ
てやろうと口を開きかけたユアンは、辺りを見回した後で尋ねる。

「そーいえば、ユカリちゃんは？」

「青空学校。スラムに行ってるよ」

そう答えたリンドは「どれ、コーヒーでもいれてやろう」とおぼつかない足取りで立ち上がる。

遠慮もなしに屋内に上がりこんだユアンは、お湯を沸かすリンドの背中越しに「暇をもてあましてんなら、子供でもつくりやいいのに」と声をかけた。

「お前なあ」とリンドが振り返った先のユアンの瞳が「何か問題でもあんのか？」と語っている。それを見て、リンドはさめざめと溜め息を吐いた。

「お前は、自分の事をさしおいて、まだ俺とユカリの関係は夫婦のそれじゃないと変な勘ぐりをしてんのか？」

「いや、まあ、それ以外にも問題あるかもしれねーし」と視線を泳がせるユアンは「お前の男の部分とか」と小声で呟く。

「バカヤロ」

呆れ果てた顔で、戯言を言いに来ただけならさっさと帰れとコーヒーの準備をやめようとするリンドを見て、とりなすようにユアンは話を変えた。

「ま、まあ、なんだ、その、ユカリちゃんにだけ働かせて、お前一人日がな一日ぼんやりしてるってのは、どーかと思うぞ。働け、今すぐお前も、働け」

久しぶりに会ったというのに、いつもと変らぬ親友を見てリンドは苦笑を浮かべる。

「あのおな、騎士団の退職金が二十年は遊んで暮らせるくらいのもんだって事はユアン、お前も知ってるだろ？　今まで、騎士団に尽くしてきたんだから、一ヶ月や二ヶ月、自分がこれから何をすべきか悩んだってバチは当らんだろうが。そもそも、お前は俺をバカにしたら来たのか、励ましに来たのか、どっちなんだ？」

出来たてのコーヒーをカップに注ぎながらリンドが口を尖らせると、ユアンは少しだけ俯うつむいて「どっちでもない」と答えた。

「……お前が騎士団長をやめて、家にこもって調べ物ばかりしてるのは何か別の問題があるからじゃないのか？」

珍しく神妙な表状のユアンに、リンドはどきりとする。

「……そして、それはおそらく『夢』の事だろ？」

ユアンの言葉に明らかにリンドの顔つきが変わった。

リンドの顔を見据えたままでユアンは淡々と話した。

「この間な。珍しくユカリと二人で飲んだんだよ。そしたら、よく見る夢の話題になったんだ。それはこの最近でどんどん鮮明になってる夢だ。俺とカギル、お前にサリーくん。そして顔の知らない金髪の少女と旅をする夢。その最後はいつも同じだ。突然現れた顔のぼやけた男が選択を要求する。傍らで立つ金髪の少女が不安な表情で見上げた時……。いつも夢はそこで終わる。全く同じ夢をカギルも見ていた。って事はお前も、そして、おそらくサリーくんも見てるはずだよな？ その話をした後、俺とカギルは当然の疑問にぶち当たったよ。じゃあ、その選択に決断を下したの誰かってな。自分の事なら別としてサリーくんはそういうタイプじゃない。そして、俺とカギルなら迷わずお前に託すだろうな。……お前、自分が下した決断を思い出したんじゃないのか？ それで、悩んで、苦しんでるんじゃないのか？ だったら……だったら、俺達も一緒に悩ませてくれよ。一人で抱え込まないで、俺達も巻き込んでくれよ」

ユアンは懇願するようにリンドを見た。しかし、それはリンドにとって何の救いにもならなかった。

食い入るように見るユアンの瞳をぼんやりと見つめてはいたが、リンドがそれを語る事は結局なかった。

3

夜勤詰めの騎士からの引き継ぎを済ませると、僕は今日の仕事へと取り掛かる。

今日の僕の仕事は見習いの騎士を同行させての巡回だ。まだ子供と言ってもさしつかえのない見習いは、まるで少し前までの自分を見るようで、僕の方が逆に気が引き締まるようだ。

騎士団長になり僕の影響も変った。今までは一番最後に訪れていたスラム地区から順に回る事にしたのだ。それは、未来に対して、希望と共に不安があるであろう若き後進に、騎士団長となった自分の原点を伝えておきたいという事であり、何よりも忘れようと努めてきた想いを、決して忘れず向き合っていこうと決めた自分の為でもあった。

緊張にぎこちない見習いに、自分の幼少の頃の凄惨な思い出と、救ってくれた青の騎士への憧憬を話して聞かせ、見習いのぎこちなさにもわずかの余裕が見えた時、僕はスラム地区の公園とはとても呼べない原っぱで彼女の姿を見つけた。

真剣な表情で思い思いに自分の描きたいものをスケッチしている子供達のそばで見守る彼女も、僕に気が付くと「ロムくん」と以前と変らぬ笑顔で僕に手を振る。

「お久しぶりです、ユカリさん」
僕もつられるように笑顔になると彼女のそばへと歩いた。

僕がユカリさんに見習いを紹介すると「いやあ、ロムくん、立派になったわね」などとユカリさんは言うものだから、僕は照れてしまっ。

「ユカリさんこそ、もうすっかり先生が板についてきましたね」
僕が伝えると「ありがと」と言って彼女は微笑む。

「そう言えば、リンド団長はお元気ですか？」
僕が騎士団長になっても変わらず「リンド団長」と呼ぶのが、彼女にはおかしいらしい。

「元気な事は元気よ。あんまり無理しないでって言ってるんだけどね。なんだか今は調べ物に夢中みたい。リンドが言うには臨床心理士目指すか、大学に通い直して考古学を専攻しようか迷ってるみた

い

僕が騎士団長になってからというものの、その忙しさもあってリンド団長には会えずにいた。それにしても、リンド団長がそんな事を考えていたなんて、随分近いつきあいをさせてもらっていたつもりだったけど僕はリンド団長の事を何も知らなかったのだな、などと感慨深くなる。

そんな僕へとユカリさんが再び微笑んだ。

「リンドもロムくんの事気にしてるみたいだからさ。今度遊びにおいでよ」

僕は先日、ユアン団長の言っていた事を思いだした。

「あのバカ、この間街で見かけたら、似合いもしない不精ひげなんて生やして、まるで病人みたいだったぞ」

近々、様子を見に行ってくる、とユアン団長は言っていたが、実は僕も気になってはいた。

「ぜひ、そうさせていただけます」

こくりと頷いた後で、僕が別れ際の挨拶をしようとした時だった。

パラス・アズロの西部地区で何かが爆ぜるような轟音があがり、黒煙が空へと立ち昇る。

市街の方から次々と上がる悲鳴は、次第に近づいてくるようだ。

それを先導するようにして、駆けて来るフードを目深く被った男の姿が僕の目に映った。

4

「これは一体どういう事だ!!」

賢王シャルナアップ・ウーデルカはうるたえるように呟いた。

まだ公務が始まる前の時間帯だというのに、収容施設奥の小部屋には騎士総長ガンド・マギアス、黒の神官キーラ・バレンシア、黒の占星術師ベアトリス・カラーチェが立ち並ぶ。

彼らの見ている前で、白の神官アラベル・フランの抱えるそれを見て同じ台詞を再び呟いた後、人目もはばからずシャルナアプは綺麗に流した青みがかかる銀髪をかきむしった。

アラベルの胸元では首を短剣で刺し貫かれた赤子が絶命し、ぐったりとしている。

内蔵の一部が生まれつき欠如した、黄砂病つきと呼ばれるその亡骸を呆然と見つめていたシャルナアプはその視線をアラベルへと向けた。

「どうなっているかを聞いてるんだ！ アラベル！！ それとも一人ずつ尋ねた方がいいのか！！ 貴様ら何様のつもりで何をした！！」激昂するシャルナアプは、アラベルが深く被る厚手のローブを荒々しく剥ぎ取った。

シャルナアプの中では、この時を迎える為のシナリオはすでに出ていた。

それは自らが神になるためには避けて通れない戦いで絶対的な勝利を得る為に、長い時間を費やしてきたものである。

かつての世界で金色の英雄ミカトン・ケイルのデータを手中にしていた彼は、ミカトン・ケイルがすぐには降臨できないようこの世界に結界を張った。それ自体はかつての世界でミカトン・ケイル自身が使用していたシステムだったが、彼はそれを逆手にとったのだ。

網の目のように張られた結界のせいで自身のみで降臨できなくなったミカトン・ケイルは、網の目を縫うようにして百に分けた自らの魂を持つ、分身ともいうべき彼らを送りこんだ。しかし、その魂のデータを手中にしていたシャルナアプはこの世界へと送りこまれる彼らに対し、自動的に目印を付けられるようにしていた。身体の一部が欠除した状態で顕現する事。つまりは、彼が黄砂病と名付けたその子らを殺しに殺して、ついに先程アラベルが短剣を突き刺し、絶命した子供こそが九十九人目であればこそ、ミカトン・ケイルは今この瞬間に降臨する事となる。

百人目の目星は既に付けてある。だからこそシャルナアプは百人目を自身の目の届く所に置いた。

彼のシナリオによれば、九十九の魂を統合してミカトン・ケイルが降臨すれば、その場にいるほとんどが気付くはずである。三日前のアン・ミンツの降臨に気付けたように……。

かつての世界に顕現する事のなかったアン・ミンツのデータはとれていない。なればこそ、簡単にアン・ミンツはこの世界に降臨する事が出来たわけだが、裏を返せば切り札ともいうべきアン・ミンツをこのタイミングで送りこんできたという事は、ミカトン・ケイル自身この世界のこの時代で決着をつけるという意味の表れである。

アン・ミンツの降臨を機にシャルナアプは焦り始めていた。しかし、睨みつけるシャルナアプを嘲るあざけようにアラベルは嘲笑を浮かべる。

ローブを剥ぎ取られ露になったアラベルの女の身体には、両腕から両の乳房までを侵食するようにして左右に肉塊がへばりついていた。その肉塊の右腕の肩口にあたる部位には長髪の若い男の顔が、そして、左腕の肩口には老人の顔がへばりついている。

「ワシはやめると言っただんじゃぞ。なのにデプルトのヤツが聞かなかったんじゃ。ドヴァーズまで賛成したんじゃからワシは言う事聞くしかないじゃろ」

言い訳がましくゴニョゴニョと口を開いたのは老人だった。その後で長髪の男の顔が豪放に笑う。

「おお！！ スリーな、アンブロシア。正直、俺はどっちでも良かったんだけどな。まあ、デプルトの言う事も分かるしよ」

二人の発言を受けて、デプルトと呼ばれたアラベルの口はようやく開く。

「シャルナアプ、神たる我らに子殺しをさせるなど貴様こそ何様のつもりだ？」

デブルートの口から発せられる言葉は鳥の鳴き声のように美しく、しかし、相手を平伏せさせるかの様に威厳に満ちていた。

「何人のガキを生かした!?」と吼えるシャルナアブにデブルートが「さあね、十人だったか五十人だったか、よもや忘れたわ」と答えた時、シャルナアブの怒りは最高頂に達し、震える顔は見る間に紅潮していく。

「落ち着け、シャルナアブ。砂漠に放りざらしにされて、ほとんどの幼子も生き残つとりやあせんじゃろおて。数える程じゃよ、きつと」

しわがれた左肩の肉塊たるアンブロシアが取り成すように告げた時だった。パラス・アズロの西部に位置する移動型城塞都市のメイン動力機関ともいべき動力炉施設から、爆音が上がった。

5

子供達の元へ駆け寄るユカリさんを見て、僕は若き見習い騎士に彼女達を守るように短く声を発した。そして、携える剣帝ネイル・フリー・トゥーンを中段に構えた。

駆けて来るフードの男もそれに気付くと軽く持ち上げた両手を握る。

その瞬間、男の両肩からいくつもの筋で形成された棒が突き出た。先端に付けられた刃を男の少し前へと垂らす姿はカマキリの鎌に似ている。しかし、僕の前方まで駆けた所で男が回転すると、それは形状を変えた。遠心力を伴って振り回されたそれは鎌ではなくムチの様だった。

ネイル・フリー・トゥーンの刃の腹でそれを受け止めたが、しなり伸びるそれは僕の左頬を裂く。

受けた後、一歩退いた僕の行動を予期していたかのように、遅れてやってきたもう一本のムチはその進路を上下に移すと再び形状を変える。カマキリの鎌へと姿を戻したそれが一気に振り下ろされる

と、僕は転がるようにして離脱し、距離を置いた。

息を小さく吸っては深く吐く。そして、僕は情報を整理するように男をじっと見た。

男のフードから覗く顔の下半分は白色肌である。その為当初、ガリア族の襲撃かと考えていた僕は戸惑った。

男が一体何者なのかは分からなかったが、男が背中から生やした特殊な武器でパラス・アズロの城壁を越えた事は理解出来る。現在、パラス・アズロはその長い四本の脚部を収納している状態である。そして、おそらく先程の動力炉がある西部での爆破工作はこの男の仕事のはずだ。

僕は戦慄を覚える。高さという有利性を失ったパラス・アズロは今、まさに敵の侵略を容易く許せる状況にあるのだ。

一瞬だが、僕の心は折れかける。しかし、踏み止まる事が出来たのは彼女の姿が視界の隅に映ったからに他ならない。

その頼りない華奢な身体で、必死に子供達を守ろうとするユカリさんの姿。

(僕はバカか。僕が守らずにどうする)

僕は吼えた。男を見据え、そして駆け出す。

男は先と同じく、回転した。

中段に構えたネイル・フリー・トゥーンで僕は薙ぎ払う。

断ち切る刃の青い光をまとった刃は、その瞬間に二振りの鎌を切り裂いた。

自身の武器を破壊されてなお、男は動じなかった。腰に携えた短刀を引き抜く。しかし、鎌を破壊した後も迷いなく、刃先を振り上げた僕の方が速かった。

僕の一太刀は男の胸元から顔を覆うフードまでを切り裂く。パツクリと開いたフードの奥に男の精悍な顔が映る。

その時、男は僕の顔を初めてしっかりと見た。

瞳を見開き「レム……？」そう呟いた後で、男は崩れ落ちた。

「ギオンが散ったね」

女性としては長身の、ショートヘアの良く似合う彼女は青い空の下、一人暗い表情のミドリコへと声をかけた。

ミカトン・ケイルの魂の一部を共有している彼女達にとって、同じく魂を共有しているギオンの死は手に取るように分かった。

「次は私達の番だね。でも、今度は逃げずに：最後までやるう」

言葉を選ぶように話す彼女を見て、ミドリコは力強く言った。

「大丈夫だよ、アオ。私はもう現実から目を逸らさない。一緒にがんばろう」

親友の決意を見守るようにアオは微笑む。そこに新しい義手を付けたキリがやってくる、彼はミドリコにギュッと抱きついた。その後で彼もまた、決意した者のように話した。

「行こう、ミドリコ姉ちゃん、アオ姉ちゃん」

二人は少年に向かって頷く。そして、三人は巨大なテントの中へと入っていった。

拳王、ガリアラツハことクイルドの部屋にはすでに皆が集まっていた。

クイルドとアン・ミンツが並び座る円卓の、シロガネとアカネ、ヤツキの隣にミドリコ、アオ、キリの順に座ると円卓には空席が一つ出来た。

八人の視線は円卓の中心に置かれた一枚の紙へと注がれる。

蟲と心を通わせ、その視界に映る世界を共有する蟲使いミドリコの右の義眼『サンダルフォン』。

名も付けられていない小さな羽虫を、サンダルフォンを通して覗き見たパラス・アズロ内の全容が記された地図がそこにあった。

当初の計画通り、パラス・アズロを完全なる城塞へと形成させる

脚部の動力炉の破壊は成功した。そして、与えられていたもう一つの使命もギオンならば、必ず成功させてくれているはずだ。言葉には出さずとも魂を共有する彼らは同じ気持ちである。

それを察しているクイルドは厳しい表状のまま、この日、この時の為の言葉を告げた。

「決戦の開始時刻は今夜九時丁度。その時、全てが終わる。……いや、我々の手で終わらせようぞ」

それは、ガリア族とパラス・アズロの最後の決戦。そして、ミカトン・ケイルとシャルナアプ・ウーデルカの最後の決戦を意味している。

一同が無言のまま頷く中で、アン・ミンツだけは瞳を閉じ、一人想いを巡らせていた。

7

男の正体は分からずじまいだったが、動力炉の破壊の後、敵が攻め込んでくる事はなく、警戒態勢はとられつつもとりあえずの安堵感にパラス・アズロ内は包まれていた。

あの後すぐ全ての騎士に結集が掛けられ、四門は警備が強化された。

騎士の配備が終了した後で、一旦四方の守護騎士団長はドムス・パオロへと集合した。

ユアン団長は自分の責任だと言って頭を下げたが、夜勤明けで動力炉施設に近い詰め所にいなかった彼を責められる者などいるはずもない。

現段階での情報を把握した後、一時解散となった僕達はドムス・パオロを後にする。

暗い表情を浮かべるユアン団長に僕は声を掛けられずにいた。せめて、男を生きたまま捕らえる事が出来たら、何かもつと情報を得られたかもしれない。しかし、男は手加減して僕が勝てる相手では

なかった。自分の力量の足りなさを呪う僕は、ユアン団長にかける言葉を持ち合わせてはいない。

そんな僕の事など知ってか知らずか、カギル団長はユアン団長のそばに自然に立つと、彼の右手を両手で包み、自分の胸の前で握った。

「ユアン、あんたのせいじゃないって」

そう微笑んだカギル団長は、不謹慎だけど、驚く程に美しかった。でも、その後で「どうせ慰めてくれんなら、身体で……」と言ったユアン団長を、いつもの憤然とした表情で殴りつけていた。

緘口令かんこうれいが敷かれた何も知らぬ街には、いつも通りの喧騒が戻り始めている。

動力炉が破壊され、防衛面が著しく低下したという危機的な事実を知っているのは、一部の権力者と騎士だけ。それを分かっていたればこそ、僕と同じく東門を守る騎士団には一層の緊張が走った。だが、僕はその反面で、どうしても頭の中にこびりついた疑問が離れずにいた。

（あの男は死の間際、僕を見て、レムと口走った。双子の僕とレムを見間違ったのは分かる。でも、なぜその存在をひた隠しにされてきたレムを知っている？ レムの事を知っているのはリンド団長やサリー団長のような、一握りの人間だけ。しかも、それも5年前の話だ……。今の僕を見てレムと勘違いするって事は、今のレムを知っている人物。…収容施設の関係者？ それがテロ行為を……。いや、そもそもパラス・アズロの人間なら、現青の騎士たる僕の存在を知っているはずだ。それに、僕はほとんど毎日面会に行ってるじゃないか。だったら少なくとも面識があるはずだ。…しかし、あの男の顔は今日始めて見た。……だったら？ ……ならば？ ……つまり？）

頭の中で回り続ける疑問符の数々のせいで、こんな緊急事態だと

いづのに身の入らない僕の元に、賢王シャルナアプからの急な呼び出しを告げる使者がやってきたのは、夜のとばりが下り始めた頃だった。

8

僕がドムス・パオロに着くと、三階にある彼専用の部屋に一人待つ賢王シャルナアプは、不気味な程の笑顔で迎えてくれた。

「シャルナアプ様、急な用とは一体、何かあったのですか？」

僕が尋ねると、彼は「うむ」と言って頷く。

「ロムルス君、君に急ぎ伝えたい事が二つあるのだ」
仰々しく言った後で、彼は続けた。

「ひとつは、君も知っての通り、パラス・アズロの現状は深刻だ。もちろん君は良くやってくれている。だが、動力炉修復までの間、いつガリア族が襲ってくるとも分からん今であればこそ、一度は引退した身である英雄、リンド・ヘイワースに再び騎士として戦ってもらえるよう私は要請した」

「リンド団長…」と僕が呟くと、彼は「不満かね？」と尋ねる。
僕は即座に首を振った。ムーナル戦役の後、再び訪れたパラス・アズロの絶対的危機、不安要素だらけの僕にとって、経験豊かなリンド団長の復帰は素直にうれしい。

僕がそれをありのままに伝えると、彼は満足そうに頷いた。

「指揮系統が崩れないようこのまま君が騎士団長、リンド・ヘイワースはあくまで君の補佐という事で納得している。実は君が来る前に彼との会談は終わっていてね。隣の部屋で待機している。私との話が終わったら会っていくといい」

僕は隣の部屋へと通じるドアをちらりと見る。リンド団長に会えるというだけで僕の胸は踊った。

「そして、もうひとつは君の弟、レムルスの事だ……」

もうひとつの案件へと話を変えた賢王シャルナアプの言葉で、高

鳴っていた鼓動はヒヤリとしたものへと変った。

(まさかレムルスの身に何か……?)

僕が食い入るように見つめた先で、しかし、彼は微笑んでいた。

「実は彼の血液から、黄砂病の侵攻を食い止める成分が見つかったんだ。これでワクチンが作れる。治るんだよ、黄砂病は！　これで、全ての患者を救う事ができるんだよ！！」

子供のように目を輝かせて話す彼を見ながら、最初、僕は何の事か分からなかった。しかし、その後で押しよせてくる感情の波を抑えきれずに、僕の瞳からポロポロと涙がこぼれ落ちた。

助かるんだ。

レムは助かるんだ。

またレムと一緒に暮らせるんだ。

僕は涙声で上手く話せなかったけど、何度も、何度も「ありがとうございます」と繰り返す。

「ワクチンの生成には少し時間がかかるが、長くともあと1ヶ月の辛抱だよ」

優しく語り終えた後、彼は僕が泣き止むまで待っていてくれた。

「この危機を共に乗り越えよう」と僕の肩を叩く彼に応じるように、僕は頷く。そして、彼との会談は終了した。

9

涙の跡を隠す事もせず、僕は隣の部屋へと入っていく。

ドアを開けた先で、「やあ、ロム」と椅子に腰掛けるリンド団長がいつものように微笑む。ひげを綺麗に剃り落とし、精悍な中にも柔らかな印象を与える彼の容貌には、話に聞いていた病人くさは微

塵もなかった。

僕が何か言葉を紡ぐより先に、彼は「おめでとう」と告げた。どうやらすでに賢王から、レムルスのことを聞いていたらしい。

それを皮切りに、僕の口からは洪水の様に言葉が溢れ出た。自分でも驚く程に溢れ出る言葉を彼は時に真剣に、そして時に笑顔で受け止めてくれる。まるで昔に戻ったみたいだ。僕は嬉しくて、嬉しくて仕方なかった。

楽しい会話の後「そろそろ行くか」と立ち上がったリンド団長の瞳に、ほんの少しだけ暗い色が浮かんだ。

立ち上がった後、少しの間を置いて僕へと振り返りリンド団長が口を開く。

「ネイルを見せてくれないか」

僕は求められるままに、リンド団長に青い装飾の施された剣を手渡す。

彼は鞘から剣帝ネイル・フリー・トゥーンを抜くと、その刀身をぼんやりと見つめた。

「……なあ、ロム。あの質問を覚えてるか……ネイルを返してもらうと俺が言ったらどうする？ っていう質問を……」

僕はリンド団長から剣帝ネイル・フリー・トゥーンを託される時に交わした、あの冗談を思い出す。

「ああ、それなら……」

僕がその答えを口にするより早く、彼の右手が動いた。

一瞬、間の後、僕が視線を落とすと、彼が持つ剣帝ネイル・フリー・トゥーンの刃が僕の身体を貫いていた。

不思議と痛みはない。しかし、貫いたネイル・フリー・トゥーンが引き抜かれるのと同時に、僕の全身から力が抜けた。

人形のように崩れ落ちた僕を見下ろし「すまない」と呟いた彼の顔には悲愴感が満ちていた。

そんな悲しい顔しないで下さい。また貴方と一緒に戦えるんです。

ガリア族なんて貴方さえいてくれればものの敵じゃないですよ。それにレム。レムも帰ってくるんです。

僕は嬉しくて、嬉しくて……。

また、あの楽しかった頃に帰れるんですよ……。

だから……

だから……

……そんな悲しい顔、しないで ……くだ……さ……

僕の視界に闇が広がり、全てを包み込んだ。

部屋から出て行く彼を追いかけるように、僕の左目からすべり落ちた義眼がコロコロと転がった。

最終章 誰が為の 存在証明（イクステンス・プルーフ）

最終章 誰が為の イクステンス・プルーフ 存在証明

1

パラス・アズロの北門方面に向けてガリア族の大軍団が進軍を開始したとの報が知らされたのは、午後九時に少し前の事だった。

西門を守る赤の騎士ユアン・マクティカナルは、西門を守る兵の半数を率いて北門へと向かう。

同じく南門を守る白の騎士、カギル・パンナイン率いる南方守護騎士団の兵半数と合流したのは、パオロ広場に近い大通りであった。

総勢二十二名となった部隊が一路北門を目指して進み始めようとした矢先、一人の騎士が血相を変えて駆けて来た。

男は東方守護騎士団の人間で、名をマルチエロ・ビスタニアと言った。

マルチエロによれば、賢王シャルナアプに呼ばれてドムス・パオロへと向かったロムルスが帰って来ないという。騎士団長の不在で完全に指揮系統が瓦解し、混乱する現場を見るに見かねて、ロムルスを呼び戻しにドムス・パオロを訪ねた彼は、門前払いされたのだそうだった。

このまま東門を守るべきか、北門に援軍を送るべきか、どうするべきか、と泣きつく彼を黙らせるようにユアンは、東方守護騎士団は引き続き東門の守備にあたるよう命令した。

その後で、カギルにドムス・パオロの様子を見に行ってくれよう伝える。

（白の騎士の訪問を無碍むげには断らないだろうが、それにしても賢王

は一体何を考えているのだ……)

内心で不安を覚えつつも、ドムス・パオロへと向かったカギルの後ろ姿を見送った後で、北方と西方の混成騎士部隊を率いてユアンが歩き始めてすぐ、再びその進軍を止めたのはユアン指揮下の西門を守る騎士だった。

西門から駆けて来た騎士は息を切らせながらユアンに伝える。

「……西門 …… 虫が…アレントード(砂噛み)が……」
ユアンは溜め息を付いた。

「こんな非常時にアレントードの一匹や二匹、放っておけばいいだろうが」

吐き捨てるように言ったユアンに、息を整えた騎士がはっきりと言った。

「五匹です」

「は!?!」と呟いたユアンに、騎士は再びはっきりと言った。

「五匹のアレントードが迫っています!…」

さすがのユアンも混乱する。

(虫が徒党を組むなんて聞いた事ないぞ……)

どうしましょうか? と食い入るように見つめる騎士に対して、どうするべきか? と与えるべき命令に頭を悩ませるユアンが解答を導き出す前に、少し離れた空で今朝聞いたのと同じ、あのいまいましい爆音が響いた。

2

ミドリコの操るアレントードの背に乗り、アン・ミンツとクイルド、そしてミカトン・ケイルの魂を分け与えられし者達は西門へと集結しつつあった。

五匹の中でも、一際大きなアレントードの背に乗った、少しずんぐりとした体型のヤツキは額に埋め込まれた機械を触ると「頼む

ぞ」と呟く。

今朝方、パラス・アズロへと乗り込んだギオンには、動力炉の破壊と共にもうひとつ別の目的があった

それが、砂クラゲの体表より抽出された特殊な成分を外側に練りこませ、設置後、周囲の環境と同化し見えなくなる、秘密の爆弾シークレット・ボムをパラス・アズロの主要な機関に設置するというものである。

子機ともいうべきその爆弾に爆破命令を下す、親機とも言つべき機械が、ヤツキの額に埋め込まれた『メタトロン』であった。

ヤツキが念をこめた瞬間、西門の巨大な蝶番ちょうつがいに仕掛けられた爆弾が三個同時に爆発する。

パラス・アズロを五十年以上もの長きに渡り、鉄壁の城塞としてきた守備の要、四門の一つは実にあっけない程に倒壊した。

その出来たばかりの穴へと向かい、五匹のアデレントはその巨体をねじ込む。

声も忘れて見上げる西方守護騎士団の前に、最前のアデレントー
ドの頭部からふわりと舞い降りたアン・ミンツは一瞬にして三人の騎士を薙ぎ倒した。

「よしっ」と呟くアン・ミンツは久しぶりに振るう剣の感触に満足する。

キリの出会った村で、墓標として地面に刺さる数ある剣のうちから選んだ物は片刃の物であった。

打ち据えられて、倒れ伏す三人の騎士を足元にアン・ミンツは町並みから覗くドムス・パオロを見上げる。

「プウ！ 赤毛のアンが会いに来てやったぞ！！」

吼えた後「ニヒ」と笑うと、駆け出したアン・ミンツを止められる者はいなかった。

彼が切り開く道を確認するように、アデレントードの頭部から次々と影が舞い降りた。

北門に援軍は送れないとの使者を出し、西門へと引き返すユアン率いる混成部隊の目に西門の隙間に巨体をねじ込んだ後身体が抜けなくなったかのように、激しくその身を壁や地に打ち付ける五匹の巨大ミミズの姿が映る。

倒れる騎士達を捉え、俄然氣勢を上げる総勢二十余だったが、その中で唯一人、ユアンだけがそれに気付いた。

ただならぬ気配にユアンが、顔を向けた先。混成部隊のいる大通りとは一本離れた路地の建物と建物の間を、長く伸ばした赤毛の男が駆け抜けた。

小さく舌打ちをした後で、部隊にアデレントードの征伐を短く命じると、ユアンは赤毛の男の後を追うように駆け出した。

3

援軍は送れないとユアンの使者からの報告を受けて尚、北門を守るサリー・サレスの顔に動揺の色はなかった。

先刻、見張り塔から見下ろした時、すでに北門前へと集結するガリア族は陣を組み終えていた。その数は裕に三百は下らないだろう。三百対二十余、おまけに援軍は来ない……。

それでも、サリーは動じなかった。

「来るべき時が来たって事だけの話だ」

苦もなくサリーは、そう呟いては微笑む。

その後で、サリーは開門の支持を出した。しかし、門を開ける作業を行う騎士がその手を止め少し驚いた表状を浮かべるのを合図に、波紋のように広がるざわめきが辺りを包んだ。

サリーもそれに気付いた時、騎士の一人が声を発した。

「……ベアトリスさん？ どうしてここに……？」

そこにふらふらと気でもふれたように歩くベアトリス・カラーチエがいた。

歩く度に占星術師の正装である薄い黒のローブははだけ、その美しい肢体が露になる。

やがて、生まれたままの姿となったベアトリスはサリーの前へと辿りついた。しかし、開いた口から発せられた言葉はサリーにはなく、虚ろな瞳もサリーを見てはいない。

「……緊急非常事態につき、ナルコレプシーシステムを起動しマス……」

抑制された声で機械的に話すそれは、言葉ではなくただのスイッチにすぎない。

「……創造主たるシャルナアップ・ウーデルカ様二逆ラウ者は全て、抹消しマス……」

スイッチが入った瞬間、綺麗に揃えられた爪は伸び、硬質で鋭利な物へと変化する。そして、背中には黒い羽根が生えた。

サリーは変わり果てたベアトリスの姿をただ見つめていた。
分かってはいた事だった。

毎日のように見る夢が鮮明になるにつれ、ベアトリスの存在理由も薄々は気付いていた。

ベアトリスは人形だ。

しかし、それが、たとえ自分の為に作られた人形であったとしても、サリーはベアトリスを愛していた。だからこそ許せなかった。ベアトリスをこんな姿に変えた者を……。

しかし、今この瞬間サリーの中にあるのはその男への憎しみ以上に、それでもなおベアトリスを愛しく思う純粹な感情だけである。

サリーはゆっくりとベアトリスへと近寄るとその身体を抱いた。
きつく抱きしめるとベアトリスの全身から力が抜ける。

最後の瞬間、「ありがとう」と呟いたベアトリスは、目頭をピク

リと震わせた後で静かにその瞳を閉じた。

その身体をサリーはそつと地面に横たえたと、ベアトリスの下腹部へと刺した魔剣ハーデスを引き抜く。

ベアトリスの両の瞳に滲む涙をぬぐってやった時、サリーの後ろで、騎士達が次々と悲鳴を上げた。

以前アラベルに率いられていた仮面の集団がぞろぞろと姿を現す。伸びた鋭利な爪から騎士達の血をしたたらせる黒い羽根の集団は、全員が仮面で顔を覆ってはいたが、それ以外は何も身につけてはいない。

仮面のせいで顔を覆ってはいても、あられもなく全身を露出する女性達のその身体は、そのどれもが、サリーが見て、触れてきた……いつも傍にいてくれた、愛しい女性のものだった。

あつげにとられる騎士達を次々と手にかけて仮面の黒い天使達は、新しい獲物にありつくべく続々と飛び立っていく。

その中でサリーは「開門しろ」と告げた。

生き残り、ガタガタとふるえる騎士の一人をサリーは見る。

「俺が全てを終わらせてやるよ」

ガリア族を皆殺しにする為に飛び立ったのだらう。……だが、これ以上ベアトリスを汚させる訳にはいかない。その覚悟で発せられた言葉は驚く程に穏やかだった。

騎士から震えが止まり、北門はゆっくりと開いていく。

砂漠へと踏み出すサリーの視線の先で、砂漠の民と黒い天使達との殺し合いが始まっていた。

サリーは魔剣ハーデスを地面に突き刺すと、小さく呟く。

「魔^マ雲^{ウン} センヤ イチャヤ」

魔剣ハーデスを基点として、砂は吸い上げられるようにせり上がっていく。

巨大なそれは城塞のようであり、同時に四つ這いの砂の巨人のようでもあった。

その背に立つサリーがゆっくりと右手を上げると、城塞のような巨人の全身から荊いばらに似た砂の棘とげが突き出る。

先端に行くにつれ長く細くなり、やがて棘というよりヤリの形状へと近くなるそれは、ガリア族を次々となぎ払い、空を舞う黒い天使達を次々と撃ち落としていった。

4

多少、強引ではあったとしても背に腹はかえられない。

カギルは門兵を払い除け、ドムス・パオ口の中へと入っていった。

二人の門兵は「今は誰も入れると言われているので」と言って、泣きそうな顔のまますがるようにカギルの後をついて来たが、一階のホールまで進んだところで泣き出すどころか悲鳴を上げて逃げ出してしまった。

ホールの中程に立つ人物は、白の騎士たるカギルにとっては馴染みのある相手である。

しかし、白の騎士の主護する白の神官の今の姿は、カギルの想像を遙かに超えていた。

「……アラベル様、その姿は……？」

震える様に呟いたカギルの視線の先で、白の神官アラベル・フロンは小さく首を振ると微笑む。

「正確には私の名はデプルート。こっちがドヴァーズで、こっちがアンブロシア。三人合わせてアラベル・フランって事かしら」

紹介された右肩の若い男の顔をした肉片はお辞儀をするような素振りを見せ、左肩の年寄りの顔をした肉片はゴニョゴニョと呟いた。

「おい、デプルート。また勝手な事をするやシャルナアプに怒られるぞ」

「アンブロシア、さっきの爆発を聞いただろ？ アン・ミンツが来たって事は、もうこの馬鹿な茶番も終わりだよ」

左肩のドヴァーズが間髪入れず説いて聞かせると、一転してアンブロシアの顔が明るくなる。

「なるほど、じゃあ、最後まで楽しんでまんと」

呟いた後、下卑た笑顔を浮かべるアンブロシアに反応するようにカギルは神剣アテナイを構えた。

「カギル、お前に恨みがある訳ではない。神の戯れに付き合せるのは誰でも良かったのだ。ミカトン側の人間であれ、シャルナアプ側のお前であれ、な」

美しい声でデプルートが無慈悲に言葉を発する。

カギルには何の事かまったく分からなかった。しかし、カギルの回答など最初から期待してなかったかのように、アンブロシアは口から赤黒い光球を発した。

カギルが回避した先で、破裂したその光球は消える事無く頑丈なバルディック造りの壁を溶かしている。

体勢を立て直すと、すかさずカギルは敵討つ風の矢スビカを放った。しかし、それはドヴァーズの一息で見当違いの方向に飛んでいく。

「知らないなら教えておくけど、君のその神剣アテナイを作ったのは俺だ。アテナイの基本スペックだけじゃ俺に傷を付けるのは無理だよ」

ドヴァーズの言葉を受けてなお、カギルは神剣アテナイを振り上げる。

「鞘 ショウ ー!!」

カギルの隣に白い胸当て付きのドレスに身を包んだ少女が出現したが、少女はカギルの顔を碧眼の瞳で見つめたまま、力なく首を振った。

肩まである白金色の髪が揺れるその様を見せられながらも、カギルは後戻り出来ないように声を荒げる。

「神袈しんか連携！ 渦巻く風の刃カエラム!!」

カギルが持つアテナイの刀身と、具象化したアテナイの持つフランベルジュを重ねた瞬間、二振りの刀身に吸い寄せられた風は巨大な竜巻を作り出す。

しかし、アテナイを具象した上での二人がかりの連携技、渦巻く風の刃ですが、ドヴァーズのただの一息で露散してしまった。

自身最強の一撃をあつさり砕かれ、茫然自失となりかけるカギルに、アテナイは彼女だけに聞こえる心の声ではっきりと告げた。ドヴァースの言ってる事が本当である事を。そして同時に、唯一倒せる手段はカギル独自の剣の極みたる創 ソウ だけである事も。

鞘 ショウ が解かれると、少女は空気に溶けるように消えていく。しかし、消え行くその最後の瞳には信頼すべき戦友を見守る力強さが満ちていた。

ちらと右手に握るアテナイに向けてカギルは頷く。そして、小さく息を吐いた後、意を決したように口を開いた。

「シンソウ神槍 カザハヤ!!」

その瞬間、カギルの身を守る、白い鎧は砕けると、新たに分解から再構築を経るようにして、全身にピタリと張り付く白金色の鎧へと姿を変えた。

先程の物より、一見して軽装の物と分かる程の頼りなさを覗かせつつも、ティアラ状の兜の頭頂部と両の肩部には刃と見紛う装飾が施されている。

両手でしっかりとアテナイを持つと、カギルは胸の前に真っ直ぐかざした。そして身体を少し前に倒した後で、地面を蹴る。

頼りない外装に薄ら笑いを浮かべたまま、光球を射出しようとアンブロシアが口を開いた時、対照的に恐れを抱いたドヴァーズは「よせ!!」と叫んだ。

しかし、次の瞬間には薄ら笑いを浮かべたままの、アンブロシアのその口から下に当たるアラベル・フランの左腕全てが消し飛んで

いた。

三位一体のアラベルの遙か後方で、カギルが体勢を直す音だけが聞こえる。

カギルへと振り返るアンブロシアは憤怒の表情を浮かべたが、彼にもはや攻撃の術はなかった。その彼の事など気にも止めずデプルトとドヴァーズが口を開ける。それぞれの口から剣程もある氷柱の束と、触手の様にうなる風の刃が吐き出された。

再び剣を胸の前にかざしたカギルが剣をかざした瞬間、ドヴァーズは唸りを上げる風の触手を伸ばした。その後で消えたカギルは、アラベルのすぐ隣を通過し宮殿の壁に穴を開けた。

超音速とも言うべき移動を可能にするカギルの神槍 カザハヤであったが、それは直進しか出来ないという脆さを抱えていた。とは言え、初見でそれを看破して見せたのは、ただドヴァーズを見事としか言いようのない事であった。

風の触手は悉くカギルの神槍カザハヤを絡めとり、その進路はズラされる。

傷一つ付けられず、精神的に疲労し、肉体的にも極度の荷重に耐えられないように、諦めかけたカギルが膝を付きそうになったまさにその時、声が聞こえた。

6

「華葬 ヤエベニトラノオ!!!」

カギルの視界の外から現れたユアンの鎧が弾けると、彼の右肩から剣皇ポーニロアを持つ右手まで覆う紅蓮の籠手^{こて}が出現する。

本人のものより一回り大きな獣の腕の如きその籠手の肩には、四本の杭が打たれ、その杭の中心では炎がメラメラと燃えていた。

「一式、ゴウオウ!」

ユアンが叫んだ瞬間、炎は種火のように小さくなる。その後で、振るった剣皇ポニーロアの刀身が爆炎を上げた。

間一髪、風の盾で身を防いだアラベルがよろけた瞬間、ユアンは「カギル!!」と叫んだ。

膝を付きかけたカギルの疲労はその一言で消える。

しっかりと自分の足を踏みしめて立つカギルを見て、ユアンは剣皇ポニーロアを真つ直ぐに突き伸ばした。

「二式、シシオウ!」

四本の杭は宙へと発射された後、狙いを定めるようにアラベル目掛けて飛んで行く。

超高熱を帯びた四本の杭がまとわりつくのを嫌がるように、かわすアラベルの動きが一瞬止まるのをカギルは見逃さなかった。

カギルが神剣アテナイを胸にかざした時、三つの顔の表情が固まる。

そして次の瞬間、アラベルの胸から下が消し飛んだ。

その後で、今度こそ膝を付きそうになるカギルを駆け寄ったユアンが抱きしめる。

「大丈夫か?」とユアンが訪ねると、カギルは小さく「うん」と頷いた。

カギルの肩を抱きかかえたユアンが歩き出すのを、地面に転がるアラベルはその姿が見えなくなるまで見つめていた。

話す事の出来ないアンブロシアなど眼中にないように、デプルトはドヴァーズに話しかける。

「これはどうやら、世界が終わるまで私達はこのままですね」

ドヴァーズは、ふふんと鼻を鳴らした。

「まあ、これで役立たずの俺達にシャルナアプも用はないだろう」
取り合えずの目的は果たせたとデプルトが頷いた時、ホールの隣の部屋のドアが開いた。

「……そんな状態でも多少の役には立つじやろう。せめて、プラネ

テリを起動させる事くらいにはのう」

押し開かれたドアの先にはガンド・マギアスと黒の神官キーラ・バレンシアが立っている。

ガンドがキーラの黒い甲冑を剥がすと、そこにはかつての時代で「バク」と呼ばれた怪物の成れの果ての姿があった。

身体に貼り付けられた七つのプラネテリと呼ばれた兵器のせいか、その身体はほとんど人の形を保っていなかった。

身体をひきずるようにして、アラベルの元へと辿り着いた腐りかけのような外見をしたピンク色の肉塊は、その眼前で巨大な口を開けた。

5

真つ暗な闇の中で、僕の名前を呼ぶその声はとても懐かしくとても暖かった。

「……ロム……起きてよ、ロム……」

僕がわずかに開いた瞳の、ぼんやりとしたその景色の中にレムルスが立っていた。

「……レム、良かった。治ったんだね ……会いたかった。……すごく会いたかった」

夢だと思った。そして、僕は夢でも良いと思った。

僕は死んだのか、それともこれから死に行くのか、それは分からない。

でも、最後の瞬間にレムの顔を見たのだ。

僕は安心するように再び瞳を閉じた。世界が再び闇に覆われていく。

しかし、レムはそれを許さなかった。

僕の頬を、左、右とリズム良く張る。

「勝手に死ぬな、バカロム」

言われて僕は目をしばたかせる。

そこにはまるで鏡に映したかの様に今の僕と瓜二つのレムルスが立っていたが、生まれた時にはすでになかった右腕と右脚には金色の機械仕掛けの義手と義足が、そして顔の右半分には同じく金色に光る面がはめ込まれていた。

「良かった、レム治ったんだ！ 治ったんだね！ シャルナアブ様の言った通りだ！！」

僕は身を起こして歓喜の声を上げたが、レムは呆れたように溜め息を付いて「違うよ」と呟いた。

「僕は神官達に連れて行かれて、すぐ次に日にはシャルナアブの命令で殺される事になったんだ。でも、なぜかは分からないけどアラベル・フランは、僕を殺さずに砂漠に放り捨てるとそのまま置きざりにしたんだ。それでも立ち上がったパラス・アズロから落つことされて、生きてられたのはまさに『神の奇跡』ってヤツだったけどね。……その後で、ガリア族に保護された僕は、真の仲間と真の運命に気付いたんだ。でも、急がないといけないんだ、ロム。自身の運命に気付いたのは僕達だけじゃない……おそらく、リンドさんも」

その時、僕は思い出した。だからこそ、僕は微笑んだ。

「何が起こってるのか分からないけど、リンド団長なら大丈夫。僕達の味方だよ。なんでこんな一芝居だったのか分からないけど、僕は団長に刺されたんだ。でも、ぜんぜん痛くないんだよ。きつと団長なりの考えがあつて、僕を殺すふりをしたつて事こそが、何より僕を守るうとしたつて事だろ。だから、きつと……」

「それも違うよ」僕の言葉を断ち切るように、レムはきっぱりと言った。

「彼は彼の選んだ道の為にロムを殺さなくちゃいけないんだよ。ロムが今、生きてるのは、単純に今死んでいった仲間達の魂を受け継いで、生命力が上がったからっていうだけの話さ。……さあ、立つてロム、時間がないんだ。ここで話をしているより、感じてもらっ

た方が早いから。……僕達はまたひとつになるんだ」

僕は他にも聞きたい事や話したい事がたくさんあった。でも、レムの言葉には逆らえなかった。言われた通り立ち上がると、レムが差し出した左の掌の上に自分の掌を乗せる。その瞬間に、僕達は光に包まれた。

光が治まった時、レムの姿はなかった。

レムは僕の中にいた。

語りかけるより、口を開くより先に、僕は全てを理解した。

「……そうだね、レム。急がなくちゃ……彼女の為にも」

僕の中で、レムが頷いたその時だった。

「お前、ロムルスか……？」

振り返った先に、賢王親衛隊の隊長たるヒリユー・ド・プライズモアが立っていた。

彼の顔には焦りの色が浮かんでいた。

この非常事態に本来なら親衛隊は、ドムス・パオロへ集結し、王を守らなければならない。しかし、西門方面の爆発に彼が気を取られている間に彼が率いるべき親衛隊も、守るべき王も消えてしまった。

彼はそれからずっとドムス・パオロ内を搜索してまわっていたが、この王専用の部屋を覗いた所で、隣の小部屋から人の気配がする事に気付いた。

彼に見れば、まだ少年と呼べる年齢のロムルスの事は当然知ってはいたが、自信を持って声をかけられなかったのは、その佇まいが以前とは全くの別物だったからである。

振り返った少年の顔を見た時、それは確信へと変った。

確かに顔はロムルスだった。しかし、その顔には幼さは微塵も無く、全身に纏う気も恐ろしく研ぎ澄まされている。

「お前…何者だ……」

尋ねながらヒリユーの左の隻腕は、無意識のうちに腰に携えた愛刀の柄を握っていた。

ロムルスが空の右手を見つめると魔法のように剣が現れた。

その所作を見て、居合い抜きのようにヒリユーは抜刀した。

ロムの中のリムが「それは、戦具アルマ」だと教えてくれた。

ロムの胸を払った後、ヒリユーは愛刀を鞘へとしまう。しかし、チンと言う刀のおさまる音と共に胸から血が噴き出したのは自分の方だった。

バカな！？ 俺が…俺が全然見えなかった……だと！？

ヒリユーが倒れざま振り返った先で、ロムルスが刀身に滴る血を
はらった。

7

風のように駆け、ドムス・パオロへと向かったアン・ミンツとレムルスの後を追うように駆けるクイルドと五人だったが、途中思わぬ邪魔が入った。

賢王親衛隊を名乗る精鋭十名は、賢王の直命を受けドムス・パオロへと通ずる街路で待ち構えていた。

「これ以上先には通さぬ！」と吼えるその屈強な男達を前に、クイルドは舌打ちをする。

こんな所で時間を食う訳にはいかないというのに……。

皆の思いは一緒だった。それに応じるように長身のアカネと、ずんぐりとした体型のヤツキが前に出る。

「ここは任せて、先に行け」

アカネの左腕に仕込まれていた『ウリエル』が作動すると、義手は巨大な爪を装備したものと変形した。

「頼む」

そう告げるとクイルドは剣を携えて駆け出す。その後にシロガネとアオ、そしてキリが続いた。

これで、西門で虫を操り騎士達の気をひく為に残ったミドリコに加え、アカネ、ヤツキの三人が時間稼ぎの為に行動を共にする事が出来なくなった。

駆ける四人にとって最早目前へと迫るドムス・パオロまで、距離が何と長く感じられた事だろうか。そして、ようやくにしてドムス・パオロへの入り口へ辿り着いた時、シロガネの足が止まった。アオとキリもそれに倣うように動きを止める。

「……逝ったか……？」

尋ねるクイルドにシロガネは無言で頷いた。

ギオンに続き、ミドリコも……。アカネも……。ヤツキも……。皆、逝ってしまった。

だが、三人はきつと精一杯生き抜いたのだと思う。

先に見送り、残された三人の瞳に揺らぎはない。

それは、クイルドにも分かっていた。分かっていたから何も言わなかった。

クイルドは先陣を切ってドムス・パオロへと突入した。

長い廊下を抜けると途端に広いホールへと出る。

そこにそれは存在あった。

巨大なピンクの肉塊は、自分でもどろろという形になれば良いのか考えあぐねているように膨張と収縮を繰り返している。

巨大な粘土細工のようなそれはやがて膨張に膨張を重ねた。伸びる度、色は薄れ、ピンク色は白色に近い物へと変色していった。

四本足の下半身に人の上半身、何本も生えた尾は甲殻類の硬さと爬虫類の軟体性を併せもっている。太い腕は毛むくじやらで短い、鋭い爪を生やし、顔は獰猛な獣であったが顔の半分を巨大な両の複眼が占めていた。

腹部に取り込まれるようにして意識を失うかつての時代三神のデスマスクのような顔を貼り付けたそれは、獅子であり、熊であり、人であり、蠅であり、蠍であり、狐であり、蛇だった。

「今や神ですらが使い捨ての最低の時代と世界を作ったか、シャルナアプ!!!」

かつての主の成れの果てを見据えるクイルドが苦々しく呟くのを合図に、シロガネの胸からレーザー兵器を照射する『ミカエル』が、アオの両足の踵から飛び出した鋭利なサーベル状の刃『ガブリエル』が、キリの右手からプラズマ火球を発生させる『ラファエル』が起動し、攻撃態勢を整える。

クイルドは口火を切るように、右の掌を粘土細工の怪物へと向けながら、吼えた。

「ギユガルド!!!」

8

アン・ミンツはドムス・パオ口まで辿り着くと、レムルスを抱えたまままで三階まで跳躍するという離れ業をやったのけた。

これもひとえに外の世界からやってきた者、この世界の常識に囚われていないアン・ミンツなればこそである。

三階の小部屋に用があるというレムルスとはそこで別れた。

すぐ隣の賢王シャルナアプ専用だという部屋には、彼が探す男の姿も、目的の品も存在しなかった。

風潰ししやみつきに探すしかないと判断したアン・ミンツは、残り香を追うようにして三階の全ての部屋と屋上を見て回った後、二階へと駆け下りた。

アン・ミンツが二階のテラスへと至った時、そこに隠れていたらしい綺麗になでつけた銀髪を掻きむしり台無しにしてしまった賢王シャルナアプが、疲れきった顔のまままで剣を手に襲い掛かって来た。

「終わらせん！ 俺の時代は終わらんぞ！！ アン！！」

アン・ミンツは事もなげにそれを払うと、興味もないようにその脇を通り過ぎる。しかし、その一瞬に振るった彼の一太刀は恐ろしいまでに速かった。

首筋から血しぶきを上げながら、倒れた賢王シャルナアプをその場に残し、エントランス付近の搜索を済ませると、「こりゃ、ここには無いな」と呟くアン・ミンツは再びシャルナアプの脇を目もくれずに引き返した。

ドムス・パオ口内の探索を打ち切り一階へ下りようと階段へと向かう途中、剣帝ネイル・フリー・トゥーンを携えた長身の男が映る。

アン・ミンツは一瞬構えたが、男が自分に対しての敵意を持っていないのを判断すると構えを解いた。

（なんだ、ちゃんとわかってんじゃねえの）

ちょうど三階から、まだ金髪に変っていなかったが、自分をここへと送りこんだ「あのバカ」の姿が見えた。

（あとは任せたぞ、ミカトン・ケイル）

胸の内で呟くとアン・ミンツは再び駆け出したが、一階へと通じる階段まで辿り着いた時、女性の騎士を抱えたままで立つ若き騎士とばったり出くわした。

「見つけたぞ！ 赤毛！！」

言うが早いか、騎士はそのままの姿勢で右手に持つ剣皇ポーン二口アを突き出す。

それに応じるように四本の杭はアン・ミンツ目掛けて発射された。

「おおっ」と少し驚いた素振りを見せた後で、アン・ミンツが放った炎弾リボルバーの火球はそれを残さず打ち返す。

呆気にとられる若い騎士のもとまで、アン・ミンツは一気に駆け寄ると「弾数の尽きないリボルバーってことか、良い技だ」と褒めちぎった。

その後で、騎士の頭髪をくしゃくしゃと触る。

「お前がポーニロアの新しい主って訳だ。つまり、俺のかわいい後輩って事だな。ヨロシクな」

早口でまくしたてると呆気にとられたままのユアンとカギルを残して、アン・ミンツは再び駆け出す。

アンが階段を駆け下りると人型程度までに破壊された肉塊と、倒れるアオとキリの姿が映った。

アン・ミンツがホールへと辿り着くのと同時にシロガネも崩れ落ちる。

ボロボロになったクイルドと目が合うと恨み節の一つも聞かされるかと思っただが、彼女は鼻を鳴らしただけだった。

アン・ミンツがホールを駆け抜けた時、最後の力を振り絞り放たれたギユガルドの金色の閃光で肉塊は欠片一つ残さず消滅した。

アン・ミンツがドムス・パオ口の外へと出ると、このわずか十分たらずの間に景色は一変していた。

西門の隙間から入り始めた黄砂は、街を呑み込むようにして侵食を開始している。

「プウのヤツ。終わりを早める気か？」

呟いた後、ドムス・パオ口の別館のようにそびえ立つ收容所をアン・ミンツは見据えた。

三階から二階へ至る階段の最後の一段を下りた時、ロムルスの色頭の髪は風に揺れる稲穂の様な完全な金色へと変った。

そして、まさにその刹那、リンドは剣帝ネイル・フリー・トゥーンを鞘から抜き、切りかかった。

しかし、全てを断ち切る刃の青い光の灯る刀身を、ロムルスは戦具アルマで受け止めると微動だにしなかった。

短い膠着状態の後、両者は切り結んだが、互いに傷一つ負っていない。

飛びすさび小さく呼吸を整えた後、リンドが右上段にネイル・フリー・トゥーンを構えた時、研ぎ澄まされた剣気と剣気の交わる二人の空間を赤い正方形の部屋が覆った。

「どうしたよ、ロム。髪の毛なんか染めちまって、反抗期か？ …… ならば、見過ごす訳にはいかんよなあ、後見人としては、よ」

剣皇ポーニロアを携え、のんびりと歩いて来たユアンがリンドの隣に立つ。

リンドがちらと見た先で、壁に背を預けたまま座るカギルが心配そうな顔でこちらを見ていた。満身創痍まんしんそういといったその姿は実に痛々しい。

その後でリンドはユアンの横顔を見つめる。

「これは、お前の『想　ソウ　』……か？」

ユアンはリンドの顔を見るでもなく答えた。

「華葬カソウヤエビトラノオ、終の太刀、死式　キョウオウ」

四本の杭が分離し八本となったそれが、八ヶ所の点に位置する正六面体の部屋の天井から、ユアンがその名を告げると共に赤い花びらが散るようにして、ふわりと舞う。

散りゆく桜のように一枚、二枚と増えながら舞い散る花びらが重なった瞬間、それは爆発した。

炎属性に耐性のあるユアンですら爆風によるダメージを負いかね

ない連鎖爆発を可能とした小さな赤い結界空間の中で、ユアンは自分の思いを素直に口にする。

「それがたとえロムであったとしても、お前は戦わなきゃいけないんだろ？ だったらその咎とがを俺も一緒にしよってやる。友達だろうが！ 今度くらいは俺も巻き込めよ。……連携で一気にケリつけんぞ」

リンドはユアンの気持ちから嬉しかった。

(……だが、友達だからこそ……)

リンドはユアンに微笑む。それは、ユアンにとってリンドの最後の笑顔だった。

「……友達だからこそ、最後まで見届けてくれ」

リンドの言葉に迷いはなかった。なればこそ、ユアンは剣を収めるしかなかった。

「……なんでだよ……バカヤロ……」

ユアンが力なく俯き眩くと、桜の花びらの舞う赤い空間は消えていく。

脱力するように剣をぶら下げたリンド・ハイワースとロムルス・パルミエリは、互いの顔から目を離さずにその時が来るのを待つようにただ立っていた。

自分の無力さを嘆くように力なく歩くユアンは、彼が戻るのを静かに待っていたカギルの元へと辿り着く。

彼女に做うように隣の床に腰を下ろすと、寄り添うようにカギルが上半身を預けた。

そして、友との約束を守る為、彼の決着を見届ける為、ユアンはその両の瞳で彼らを見つめた。

その瞬間、弾かれたようにリンドとロムルスの互いに持つ剣と剣がぶつかった。

ぼんやりとした心の奥の更に底から、彼女は事の経過を見守り続けてきた。

今とは違う時代、リンド・ハイワースが氷ヶ森 燐人と呼ばれていた時代で、彼が最後の選択をするに際して、神と等しき力を手に入れた彼女が、彼に告げなければいけなかった事を躊躇してしまっただばかりに告げられなかったのは、正に彼女の女としての性がそれを許さなかったからである。

それは、ひよつとしたら彼の選択を正す結果にはどの道至らなかつたかもしれない。だが、やはりだからこそ、いかに残酷な運命であつたとしてもそれは自分の口から伝えたい。

彼に初めて出合った時に感じた予感がやがて確信に変わり、そして幾年月。

世界を、時代を、そしてリンドを、見守り続けてきた長い長い旅路の後、彼女はそう望んだ。

ロムルスとレムルス。そしてミカトン・ケイルが彼女の望みを受けいれるように頷く。

壮絶な剣技の応酬の後、距離を置いたリンドが剣帝ネイル・フリー・トウーンを掲げ、自らの「想 ソウ」を開放した時、戦具アルマを携えたロムルスの身体はそれに反応するかのように金色に包まれた。

「竜爪
ウツクハユビ」
レイ

リンドのからだに鱗状の銀青色の欠片が張り付き始める、それはあつと言つ間に全身を覆った。

パイプオルガンのパイプのような形状の羽根を背中から生やし、銀青色の全身を覆う鎧に顔をすっかり隠す先尖状の獰猛な竜の顔を模した兜。竜人と呼ぶべき姿になったリンドが翼を広げると、パイ

ブの先からキラキラと銀色に光る冷気のガスを吹き出す。

辺り一面を凍らせていく銀色の世界は、すでにドムス・パオ口の窓まで迫り来る黄砂の侵入を阻むようだった。

荒々しい竜人の姿へと変貌を済ませたリンドが、鋭利な爪を生やした右手で剣帝ネイル・フリー・トゥーンを握り直した時、光へと包まれたロムルスもまた、その輝きから解き放たれた。

そこには、すでにロムルスの姿はなく、長く美しい金髪をなびかせたセーラー服姿の少女が戦具アルマを手に立っていた。

その姿に竜は呻き、悶えるように後ずさる。

恐ろしい姿で立ち尽くす竜をその少女、水鏡 遠野は真つ直ぐに見つめた。

遠野の顔には悲愴な覚悟を決めた者の厳しさが浮かんでいる。

「……リンド。私はどうしてもあなたに伝えなければならぬ。それは前の世界ではあなたに伝える事が出来なかった事。……でも、多分、それは、私が……私が貴方に伝えなければいけないの」

遠野がその小さい唇を動かした時、竜は咆哮した。

弾かれるようにネイル・フリー・トゥーンを振り上げる姿は、それ以上先を聞きたくないと言っているようだった。

遠野は、その魂の籠らない一撃をあつさりを受け止める。

「まだ、神と人が共にあつた時代のある世界に、双子が生まれたの。……だけど、双子は共に生きる事は出来なかった。それは、双子が一つの魂を共有していたから。兄の魂が強くなればなる程、もう一人の自分とも言うべき弟の魂は弱くなっていった。……それは、まるでロムとレムのように」

竜は遠野の吐き出す言葉を止めるように何度も何度も剣を振り、遠野は何度も何度もそれを受け止めた。

「その世界が赤い砂に覆われて滅んでしまった時、ミカトン・ケイ ルは神の箱庭 パンドラ にすべての魂を保管した。そして、世界

が再生するまでの間、魂達はミカトン・ケイルの夢の世界で生き続けていったの。その中にはその双子もいた。でも仮初めの世界であっても双子を双子として転生させる訳にはいかなかった。だから、魂を二つに分けられた後、二人は引き離されざるをえなかったの。兄弟のように常に共にある環境だけは避けなくてはいけない。二つに分けられた魂が一つに戻ろうとすれば一人は死んでしまう。だから、ミカトン・ケイルは夢の世界でその二人を引き離さざるを得なかった。でも、魂の成長を促すためのE・Dとアンノウンによるシテムで転生を繰り返す数百年の間に、決して交わる事のない遠い地でスタートしたはずの双子の人生は意識の外でやがてお互いを探し求めるようにその距離を近づけていった。そして、数十回に及ぶ魂の転生の後、かつての時代で双子はついに幼なじみという距離にまで近づいて転生したの。……リンド。ゆかりちゃんは、本当はもう一人のあなたなの」

竜は告げられた真実を認めようとしないように剣を振り回した。そこにはあの流麗な剣技の片鱗は微塵もない。

その姿はちっぼけな世界を壊そうとしているようにも、守ろうとしているようにも見えた。

「ひどいよね、私……」

遠野は泣き出しそんな顔で剣を受け止める。

「残酷だよね、私……」

竜の力任せの一撃に戦具アルマが軋む。

「……だけどそれは他の誰でもない私が伝えなければいけないだつて自分で決めた事だから……しょうがないよね……それでも……」

……」

それが、この瞬間には決して口にはいけない言葉だと分かってはいても、残酷な宿命と引き換えにして尚、告げると誓った彼女の最初で最後の我がまま。

「私は、あなたが好きです」

11

「まだ、逃げる気か？」

収容所内の鉄格子の牢が並ぶ廊下の人影、その背中に向かってアン・ミンツは声を掛けた。

行き止まりの小さな部屋の扉のノブを握った手を離すと、振り返ったガンド・マギアスはニヤリと笑った。

「久しぶりよの、赤の剣士」

年老いた騎士総長の威厳に満ちたその話しぶりを聞いて、アン・ミンツは「ニヒ」と笑う。

「クイルドといい、お前といい、そういう設定上そんな話し方をしなきゃならないって訳かい？ 青の錬金術師どのよ…ってか、義手はどうしたよ？ お前の左手は前の世界で失われたはずだろ？」

アン・ミンツの質問にガンド・マギアスは声を上げて笑った。しかし、その声色には今までの年寄りじみたものはない。

「ここは俺の世界だぞ、そんなものどうとでもなるさ。………まったく、お前の勘の良さには呆れるよ、アン。わざわざ替え玉まで用意してやったのに、振り回されるところか、時間稼ぎにもならないとはね」

アン・ミンツは一刀のもとに切り伏せた賢王シャルナアの事を思い出す。

「どうせ、タスラムあたりの魂だろ、ありゃ。あのな、プウ、時間稼ぎがしたいなら、偽りの記憶だけじゃなく、技の一つも覚えさせ

とけ、な」

「ガンド・マギアスという存在を演じ続けてきたシャルナアプ・ウ
デルカはさめざめと溜め息を付いた。

「自分が王たる者というだけで、暴走しかけるバカな操り人形に、
力まで与えるというのは愚かな話だろ？」

「いつも上から目線で理屈っぽく話す、そこにはいつものアン・ミ
ンツの良く知る友がいた。だが、その姿は年老い、かつての聡明な
美青年の面影はほとんど残ってはいない。

「……それで？ そんな姿になるまでお前は、何回世界を創っては
壊したんだ？」

「アン・ミンツの睨むような視線から逃げるでもなく、シャルナア
プは答えた。

「そんな事、とつくに忘れてしまったさ。……だが、これで最後だ」
自嘲ぎみなセリフはやがて、自身に満ちたものへと変っていく。

「アン・ミンツはそれを見据えて口を開いた。

「何百回か、何千回か、世界を創っては失敗を重ねたお前は、もう
人としての限界を迎えた。…寿命ってヤツだな。転生すれば済む話
だろが、新たな生命として誕生すれば、無力な赤子からミカトンが
神の箱庭 パンドラ を容易く奪い返すのは必然。そう考えればこ
そ、この世界で決着をつける気になつたんだろ？ だが、残念だっ
たな。お前自身も気付いてなかつたんだろ？ 数限りない創生を繰
り返す度、劣化していったお前の切り札たる四本の神具ハルモニアを持つ騎士
達の偽りの記憶は、ミカトンにつけこむ隙を作つちまつたつて訳だ。
四本の神具ハルモニアとその使い手がお前に付いていれば、この戦はどう転ん
でいたか分からなかつた…。だが、その計画が破綻してしまった以
上、お前の負けだよ、プウ」

「アン・ミンツの視線にもシャルナアプは動じる事はなかつた。

「俺の負けだと言うのなら、なんでアン、お前がこの世界に送られ
て来たんだ？ 焦っているのは俺じゃなくてミカトンの方だろ？」

「ヤツに取られるくらいなら俺は箱庭 パンドラ を破壊するか、隠

すと思ったからこそミカトンはお前を送りこんだんだろう？ 神の箱庭 パンドラ 回収の為に。あいつは神の力を得たと言っても魂を創り出す事は出来ないからな。アン、俺はまだ終わっちゃいないぞ。確かに四人の騎士は俺の思惑通りにはならなかったが、己が犯した罪の真実を教えてやった青の騎士だけは最後の最後まで足掻くだろうさ。……それに、切り札というなら、これが本当の切り札だ」シャルナアプは腰に携えた鞘から剣を引き抜いた。黄金色に輝くその剣に、アン・ミンツの顔色が変わる。

「全ての剣 ユピテル か……」

神の箱庭 パンドラ に施された七千七百七十七の封印を解く為の鍵として、この世に宿る全ての属性をその刀身に刻むと言われる^{ハルモニア}神具を手し、シャルナアプは不敵に笑った。

「今までの俺と訳が違うぞ、アン。……睡眠装置が解除され、なぜ俺だけが目を覚ましたのか、その本当のところは俺にも分からない。だが、つまりはそれが世界の意思なのだろう。ならばこそ、この世界で俺は神となる。……ところでお前、そんなボロボロの剣で勝負になるつもりだったか？ ^{リュウソウ}竜双 エリユシオン！！」

シャルナアプが自らの想 ソウ を告げると、大気中の水分から水の武具を無限に作り出す事の出来る竜の顔を模した双つのガントレットが衛星のように彼の両脇に出現したが、それはアンが共に戦ったかつての世界で見たものとは比べようもない程に巨大だった。

アン・ミンツはちらりと手にした名も無き剣を見る。それはシャルナアプの指摘した通り刃こぼれがひどく、壊れかけの剣だった。おそらく、全力での攻撃など、あと一振りが限界だろう。だが、それはアン・ミンツが選び、共に戦ってきた今や身体の一部ともいえるべきアン・ミンツの剣である。

「信頼こそが、人と剣の真の力つて基本まで忘れたかよ、シャルナアプ」

呟くと、臆する事無くアン・ミンツは駆け出した。

大気中に出現した巨大な弓を竜の顎が引き、放つと巨大な矢は空

中で無数の矢へと分解し、雨のように降り注ぐ。

それをかわしシャルナアプの眼前へと迫った時、竜の顎が啜える巨大な双剣が振り下ろされた。

迫り来る双剣の中へと飛び込んだアン・ミンツがシャルナアプと交わる。

シャルナアプの遙か後方でその足を止めたアン・ミンツがその名を告げると、赤い光を灯した刀身は粉々に砕け散った。

「華粧^{カソウ} ヒナゲシ」

その瞬間、シャルナアプの体中の血液は火の着いた液体燃料が巡るようにして、全身から発火する。

焼け焦げたシャルナアプが崩れさるのを振り返りもせずにアン・ミンツは「バカヤロウ」と呟いた。

12

「ユアン、あれ、トーノちゃんだ。なんでだろ、あたし。なんでトーノちゃんの事忘れてしまったんだろ」

ユアンの華葬^{カソウ}やエビトラノオ、三式ホウオウの三角錐の結界の中でユアンに寄り添うカギルの瞳からははらと涙が零れ落ちた。

「ああ……俺もだ、カギル。俺も今、全部思い出した」

しかし、それは遅かった。ユアンの言葉には苦々しさが満ちている。

金色の光に包まれたロムがトーノへと姿を変えて後、全てを理解できたとして、ユアンもカギルも、今やリンドに対しても、トーノに対しても何の助力も出来ないばかりか、リンドの「想」でドムス・パオ口を氷の城へと変えていく冷気に蝕まれつつあるホウオウの境界から出る事も出来ない。

ユアンは自身の無力さに、ただ打ちのめされていた。

「せつかくまた会えたのに、どうしてリンドとトーノちゃんが戦わなきゃいけないの……」

涙声のままカギルが呟く。

離れた場所で見守るユアンとカギルには二人の会話の内容を知る術はない。自分の表情を隠すように竜の鎧の内に閉じこもるリンドと、悲しげな表情のトーノが剣を交える姿だけが映る。

「悲しい事だよな、カギル。……でも、俺には二人が長い時間を埋めるように、剣と剣で会話を交わしてるようにも見えるよ」

ユアンは呟き、最後まで見届けると改めて一人誓った。

リンドの振るう、ただ力任せの一撃を受け止めた今にも泣き出しそうな表情のトーノが、それでも真っ直ぐにリンドを見据える。そのわずかばかりの沈黙の後、最初にそれに気付いたのはカギルだった。

「……嘘。どうして、ここに……ユカリ」

カギルの言葉にユアンも視線を移す。

ドムス・パオロの一階へと通じる階段の前に立つユカリ・マルキアンティがそこにいた。

黄砂から逃れるようにしてリンドの元へ駆けて来たのであろう彼女の服は、砂まみれで汚れがひどい。

息を切らせ立つ彼女の皮膚を冷気が張り付くようにして凍っていくその姿に気付いた竜は、自らが射出する冷気のガスを止めた。

彼女はただ立ち尽くす竜を見ていた。

そして、いつものように微笑む。

愛らしく優しいその笑顔には、リンドに対するいたわり、愛情、そして赦しが表れていた。

リンドも、ユアンも、カギルも彼女の視線に目を奪われる。しかし、次の瞬間、彼女の全身は階段をせり上がって来た黄砂の波に吞まれて消えた。

竜は吼えた。

世界を、そして自分自身を、全てを憎むように吼えるそれは、竜の慟哭だった。

竜の絶望の叫びだけがこだます中、その場にいる誰もが消えたユカリの残影から目を逸らせずにいる中で、トーノだけが、振り向く事なく、非情なまでに冷徹な剣を竜の胸元へと突き刺した。

竜の咆哮が終わりを告げると同時に、ドムス・パオ口を覆う氷の世界が徐々に崩れ始める。

戦具アルマに貫かれた竜の鎧に亀裂が入りゆくのを、その剣を持つ手に感じながら、トーノの頬を堪えきれずに涙が伝った。

「……ごめんね……」

彼女は小さく謝ったが、それが彼女の精一杯だった。

自分を殺して、彼女はこの残酷な使命を全うする。全てを失うのは分かっていた。彼に自分の想いを伝えたい。その気持ちだけで今この時だけの為に存在している彼女が、それと引き換えに彼に残酷な真実を知らせなければならぬとして、最終的にその役目を望んだのもまた彼女自身に他ならない。……だから、これは仕方ない事だった。彼女はこれで、また一人ぼっちになってしまった。

鎧に広がる亀裂は、やがて獐猛な竜の顔にまで至ると兎は粉々に砕け散った。そこには、シャルナアプが世界を壊し、創る度に送り込まれたミカトン・ケイルの分身たち、その魂の傍らに寄り添い、トーノが長い年月見守り続けてきたリンドの顔があった。

竜の外装が砕け、露になったリンドの顔。しかし、その瞳は絶望に染まり薄暗い。

だが、リンドは最後の力を振り絞って口を開いた。

リンドの記憶はすでに数日前には戻っていた。だから、心の内ではこうなる事が分かっていたのかも知れない……。

だからこそ、準備は出来ていた。

トーノに伝えなければいけない最後の言葉の準備も。

「……俺こそ、結局最後はトーノに全部背負わせちゃった。ごめんな……本当にごめんな……」

顔をぐしゃぐしゃにして謝った後、リンドの全身の力が抜けた。

崩れゆく身体をトーノはきつく抱きしめたまま、子供の様に声を上げて泣いた。

氷の世界が崩壊すると、黄砂は音を立てて広がっていく。

ホウオウの結界を解き、リンドを抱きしめたまま泣きじゃくるトーノを見つめるユアンは、カギルの肩を強く、強く抱き寄せる。

カギルは無言のまま、ユアンに身を任せた。

広がりゆく黄砂はやがて世界を包んだ。

第三部 神と人のアレゴリカル・ワールド

終

エピソード

エピソード

膨張を続ける黄砂が容量を限界まで満たし、砂漠だけとなった世界の一角から、ニヨキと腕が伸びると掻き分けるようにしてアン・ミンツは這い出た。

あぐらをかいて座り、口の中に入った砂を吐き出しながら顔を見上げると、金色の光を纏い、満面の笑みを浮かべるミカトン・ケイルが立っていた。

自分の這い出てきた砂に手を突っ込むと「ほらよ」と言って、小さなオルゴール状の小箱と金色に輝く剣を放り投げる。

「ごくろろさん」と言った後で、ミカトン・ケイルは続けた。

「これで神の箱庭 パンドラ と全ての剣 ユピタル。剣帝に剣皇、神剣に魔剣。前の世界で回収した黒滅瞳石 エキドナ と併せて七つの神具 ハルモニア と七個の複製 プラテネリ。その全ての回収が終わったよ、アン」

「こんなのは二度とゴメンだ」と呟きながら立ち上がるアン・ミンツは、上の空で話を聞きながら膝の砂を拭う。

「で、今度はどんな夢を見るんだ？」

何の気もなしに尋ねたアン・ミンツを、珍しく神妙な面持ちでミカトン・ケイルは見つめた。

「なあ、アン。俺はちゃんとした神じゃないから魂を創る事は出来ないだろ。でもさ、今回の事で俺は思ったんだ。ひよっとして、そんなのは大した問題じゃないのかも知れないってさ。魂のあるなしに関わらず、それは生まれ落ちてから、その人それぞれが創り育んでいくものなのかも知れないってさ」

ミカトン・ケイルの話聞きながら「ふーん」と唸って見せた後で、アン・ミンツは続けた。

「俺はそう言う難しい話は良く分かんねーけどさ、こう考えてみたらどうだ？ お前が最初に創った世界はいまいちだった。だから、こうして新たに創り直せるチャンスを得た。せっかくだから、シヤカリキに良い夢を見るこつた、な」

ミカトン・ケイルが苦笑いを浮かべる。

「んな、無茶な」

ミカトン・ケイルが口を尖らせるのを見て、アン・ミンツは小さく首を振るとミカトン・ケイルの双眸を見据えた。

「無茶でも何でもねーよ。少なくとも、『この世界』の神はお前なんだろうが、だったらせめてこの世界に生きる者達ぐらいは、幸せにしてやれよ」

アン・ミンツの視線と言葉を受けたミカトン・ケイルの顔から緩い笑みが消えると、アン・ミンツが初めて見るような真剣な表情でミカトン・ケイルは頷いた。

「……ああ、そうだな。こつから先は俺が頑張らないとな」
珍しく奮い立つ友の頼れる姿に、なぜか自身が照れるような気がしてアン・ミンツは踵を返す。

「俺は世界の再生が終わるまで、こんこんと眠らせてもらっつからよ。そんで、俺の出番がもう無いって事を、ミカトン、お前がちゃんと神様の勤めってヤツを果たしてくれる事を、祈ってるよ」

皮肉混じりにそう言って歩き始めたアン・ミンツだったが、立ち止まるとミカトン・ケイルの方へ振り返るでもなく尋ねる。

「……ところで、プウのヤツはどうするんだ？」

ミカトン・ケイルは特に考える素振りもなく答えた。

「あんなバカでも友達だろ。ほっとけないさ」

アン・ミンツは薄く笑うと再び歩き出す。

「バカにバカって言われて、プウも可哀想なヤツだな」

アン・ミンツの一人事にミカトン・ケイルが「何？」と尋ねた。

「べつつに」

アン・ミンシはぶっきらほじと言った後で、空を見上げて」「ニヒ」と笑った。

世界は終わり

そして始まる

ドアを押し開くと眩いばかりの春の陽光がふりそそぐ。

一瞬、その眩しさに目を細めた後で、氷ヶ守^{ひがもり} 隣人^{りんど}は大きく伸び

をした。

真っ黒な学生服の上下を少しでも愛らしく見せようとでもしているような、ピンクの刺繍糸でステッチの施されたジャケットの右のポケットから取り出したフリスクを口の中に放り込むと、見慣れた世界へと足を踏み出す。

暖かで穏やかな風を受けながら、学び舎を目指す隣人の高校生活は二週間目を向かえたばかりだったが、嘘の様に周囲の環境に振り回されっぱなしのこの数日の間に、希望に満ちていた高校生活というものはどこかに奪い去られてしまったらしい。

どこか憂鬱気な表情を漂わせつつ、隣人は歩き始めた。

「よ！ 今日元氣そうで何より」

「おっはよー」

後ろから同時に聞こえて来た二つの声に、止まりかけた歩みはそのままにして、足早に隣人の隣へとやってきた中二の頃からの悪友へと冷ややかな視線を向ける。

180cm近い身長で隣人が顔を傾けると、彼の短めながらワックスで立たせたたくせの強い前髪がゆれた。

隣人の見下ろした先で、プラスチックフレームの眼鏡越しに覗く少しだけツリ上がった瞳が、嘘くさいまでにニツコリと微笑みかけている。

「元氣そーで何より、じゃねーよ。ユアン」

ぶつくさと文句を言う隣人を見上げる様にして、ゆずはらしおじ 柚子原庵はキョトンとして見せた。

それ程身長の高くない彼は、ベージュ色のカーディガンを羽織っている。多くの新一年生が黒の学生服を着ている中で、高校生活二週目にして早くも彼は学校指定云々を守る気はないらしい。

「かぎる、何かリンド怒ってんだけど……？」

未だにキョトンとしたままの表状で、柚子原庵が遅れてやってきた少女に声を掛ける。

リンドを挟む様にして右側に柚子原、左側を歩く少女は燐人の影から顔を出す様にして笑った。

「またユアンのせいで、はからずも番長への階段上がちゃったんでしょ」

栗毛色をした不揃いで伸ばしかけのショートボブヘアの、風早かざはやがぎるが声を出して笑った。

大きな瞳に小さな作りの唇が猫を思わせる様な顔立ちをした彼女も、スカートこそ学校指定の黒い生地、ピンクのステッチの入ったものであったが、上に羽織ったライムオレンジ色のジャージを見る限り、柚子原と同じく学校指定云々を守る気はないらしい。

機嫌を直せ、とあれこれ言葉を並べる柚子原を無視する様に燐人は再びフリスクを口に放り込む。

柚子原の一人喋りが続いている中、颯爽とペダルを踏む音が聞こえ、それに気付いたかぎるが大きく手を振った。

「おつはよー、ゆかり」

「かぎるちゃん、おはよー」と言ったままブレーキをかけると自転車は止まり、見ている側がハラハラする様な不慣れな動きで少女は地に降り立った。

「はい、リンド、お弁当」

燐人が少女から受け取った弁当は、別に少女手作りの弁当という訳ではない。

良い年をして愛息子のために、朝も早くから仲良く氷ヶ守家の父と母が一緒になって作る弁当を彼はいつも忘れて家を出る。親への反抗などというような硬いものではない、ただ単に照れくさくて仕方がないのだ。

決まり事のように忘れる弁当を、決まり事のように燐人に届けるのが彼の双子の妹、氷ヶ守ゆかりの日課である。

「ゆかりちゃん、今日も清南の制服似合ってるねー」

端正な顔立ちに似つかわしくない様な柚子原のオヤジ的発言に、自転車を押しながら「えへへー」とゆかりが照れ笑いを浮かべるの

と同時に「この制服フェチ」と、かぎるが悪態をついた。

ちらりと呆れた顔をするかぎるを見た後で、柚子原が口を開くのを皮切りに毎朝恒例の口喧嘩が始まる。

「それに比べてゲッコーの制服、そこで、ゲッコーの女ときたらねえ……」

「ちよつとユアン！ ゲッコー、ゲッコーって工業科のあんたと普通科のあたしとリンドを一緒にしないでよ」

「同じゲッコーには変わらないだろうよ。何にしても元々改善の余地ありの制服だつてのに、中学から代わり映えのない、かぎるのその崩しつてありえなくね？」

「中学の時と一緒にしないでくれる？ このジャージだつてモデルのクロエちゃんが雑誌で着てたブランド物よ。がんばって買ったの、中学の時の古着とは訳が違うの。それが分かんないなんて、ユアンこそ見る目ないね。そんなんじゃ近頃の女子の話題についてけないよ」

「へえ〜？ 近頃の女子つてのが、カラオケで歌う歌が『川本真琴で1/2』つてのはどんなもんだろね？ ってーか今時知らねーよ、そんなの……」

セミロングのストレートヘアをふわりとなびかせながら、くりくりとした大きな瞳でユアンとかぎるのやりとりを楽しそうに見つめながら、ゆかりが声を上げて笑った。

中学時代の悪名、つまりは元、伏姫中狂悪コンビヒメチューの片われ 狂王

ユアンの相棒 悪来 リンドとして本人の知らぬ間に、ゲッコー新世代のルーキーの一人に数えられ、工業科、普通科の垣根を越えて入学してから今日まで隣人に対する挑戦者は後を経たない。ついには先日退けた何とかというヤツのセンパイにあたる二年生を昨日ふつとばすに至り、同じ普通科の生徒の中で今や隣人に話かけてくるのは、かぎるくらいのもものになってしまったという現状では（もう少し勉強して、ゆかりと同じ清南に行けば良かったな……）とい

う後悔の念に、燐人は苛まれ始めていた。

「……しっかし、ホント似てないよなあ、リンドとゆかりちゃん。リンドと、あ、かぎるでも良いけど交換学生しちゃったら良いのにな」

ぼんやりとしていたリンドが、ふいの柚子原の一言に我に返ったように口を尖らせる。

「そもそも、お前が一緒に如月行こうつつつたんだろが」

ゆかりが小首を傾げて微笑む。

「二卵性ですからー」

満を持してかぎるが声を荒げる。

「あんたこそ、どっか南米の方とかの学校と交換学生して、国際交流して、そのままもう帰ってくるな！……っていうよりこの時期に交換学生とかありえないし！ バカじゃないの！」

かぎるの怒声を受けながらも、柚子原は一人悩むような素振りです。「そうなんだよなあ」と呟く。

「この時期に新入生ってのは有りでも、やっぱり交換学生はなあ……」

「あんた何言ってるの？」とかぎるが尋ね、燐人が神妙な顔をしているのに気付いた柚子原が口を開く。

「ああ、言ってなかったっけ？ ウチ、ってキサラギだけど、新入生来るんだよ。なんでもオーカの子らしいぞ」

「なにバカ言ってるのよ。どうして一駅はなれた鳳華の生徒が……」かぎるの反論を遮って、柚子原は続ける。

「オウカはオウカでもオウカ違い。その子は市外の央華中の卒業って事だよ。なんでも家庭の事情ってヤツでようやく今日、発登校らしい」

「なんで、お前そんな事知ってるんだよ」

燐人の問いに柚子原は鼻を鳴らす。

「バカだなあ、リンド。制服の似合うカワイコちゃんを押さえておくってのはよ、男のたしなみみたいなものだろうが。受験の時も、

合格発表の時もいたはずのセーラー服の似合うカワイコちゃんがいっつになつても学校来ないから、おかしいとは思つてたんだよ。だから、直接職員室に行つて聞いてきたんだよ。なのに教師連中ときたら、プライベートがどうのとかつて中々……」

情報をなかなか開示しない教師達への罵詈雑言が続く中で、燐人は「この制服フェチ」とかぎるに罵られる柚子原の無節操さに、改めて感心させられたりしていた。

「あつ、マズい。遅刻しちゃう」

腕時計をのぞいた後で、今まで微笑を浮かべながら輪の中にいたゆかりが自転車に跨った。軽く手を振った後で、一区画離れた学び舎を目指して走り始める。

ぎこちないながらも、颯爽とペダルをこぐゆかりの後ろ姿を燐人は感慨深く見つめた。

今ではその姿が信じられない程に、ゆかりは小さな頃から病気がちだった。高校生となる年頃まで生きていられるかも分からないと母親から知らされた中学二年の春、それ以降何の解決にもならないというのに燐人が荒れた時代もあった。しかし、当の本人は周囲の心配をよそにその時期から健康を取り戻していった。医師はただ一言、それを奇跡と呼んだ。そこには両親の献身的な看病もあつたろうし、燐人とてゆかりの為に出来る事は頑張ってきたつもりだ。だが、当のゆかりにとつてそれが全てだったろうか？ それは違う、という事を燐人は知っている。自分や家族だけの力ではない。少なくともゆかりがゆかりとしての当たり前の日常を過ごしているのは、この一見傍迷惑な二人の友人、病人だろうとお構いなしの無節操な柚子原と、無駄に感情のふり幅の大きいかぎるが傍にいてくれた事が大きかったという事を、燐人は知っている。

荒れてみた燐人が赤面するほどに、学校も休みがちだったゆかりはそれからというもの無遅刻、無欠席で中学に通い、四人は無事に母校たる伏姫中学校を卒業するに至った。

近づきつつある如月高校の校内を視界に留めながら、小さくなつていくゆかりの背中を見送る燐人の視線に、ゆかりとすれ違ふ様にして二人の影が姿を現した。それを見て、燐人は喉に物でも詰まらせた様な顔をしたまま立ち止まった。

柚子原も歩みを止め、二人でペコリとお辞儀をする。

「サリーくん、ちわす」

連れのゴシッククロリータ調で原型をひとつも留めていない程に崩されている如月の制服を着たモデル並みのプロポーションの女生徒とは対比的に、全身黒のニットキャップにパーカー、それにシルバ―のアクセサリーをジャラジャラと飾り付けた小柄な男子生徒が近づいて来た。

「二年の終野やったってな、リンド。……それで次は一気に三年のヒリユーさんのとこまで行くのか？ ……それとも俺とやりあうか？」

見下ろす程に小柄な男の射る様な瞳から、逸らす様にして地面を見つめるリンドが呟く。

「めっそもないス。サリーさんとやりあう気なんてないですよ」

「ふん」と鼻を鳴らし燐人の顔を一瞥すると、サリーと呼ばれた小柄な男は連れの女生徒と校内へと消えて行った。

「……やっぱりサリーくんって、先輩の中でも別格って感じな。おつかねー」

気の抜けた様な調子で話す柚子原へと、燐人が「そうだな」と答える。そして特に気にするでもなく燐人は歩き始めたが、柚子原は「あれ？」と間の抜けた声を上げた。

「かぎる、なんかリンド変だぞ。いつもなら『俺とサリー先輩がやりあう事になったら、ユアンお前のせいだ』とかなんとか、愚痴の一つも言いそうなものなのに、なんか機嫌良いぞ？ なんか良い事でもあったっけ……」

尋ねられたかぎるが答えるより先に、柚子原は「あー！」と声を

上げる。それに触発された訳でもないだろうに、かぎるも如月高校の校門前で上下紺色のジャージを着たショートヘアの女生徒に気付いて「うわ!」と声を上げた。

「さてはリンド! オーカちゃんを狙う気か!? お前、オーカちゃん俺が、つかオーカちゃんのセーラー服は俺が狙ってたぞ!」

最早、訳の分からないことを口走りながら必死の形相で迫る柚子原に追われて、燐人が駆け出す。

「お前、何言ってるんだよ!」

逃げる燐人、追う柚子原、そして一瞬置いてけぼりを食った形をかぎるも走り出す。

「ちよ、ちよっと! 置いてかないでよ! 蒼姉あおねえに見つかっちゃうでしょ!」

駆ける三人の先頭に行く燐人が、真新しい如月高校の制服を着た美しく長い黒髪の女生徒の脇を通り過ぎる。

通り過ぎ様、女生徒は燐人たちの賑やしさを羨むように微笑んだ。瞳と瞳が合った瞬間、燐人も気付かぬうちに瞳を緩ませていた。

また今日も一日が始まる。

新しい出会いを重ねて、新しい世界は続いていく。

エピローグ（後書き）

長い長い拙文ではありますが、最後まで読んでくださった方には感謝の言葉しかありません。もともと失踪した友人S・ひろつぴに宛てて書き始めたものでしたので、途中夜方的にも気に入らない点は多々多し（90年代アニメの部分とかは完全に、作中の複線というより失踪人搜索の為の彼への暗号でした）なので、本当はその部分もだし、指摘事項もまだ途中なので、本当は全部直して完結したいところでしたが、とりあえずこれにて一旦終了としたいと思います（指摘は後々直していきます）

思えばシヨツカー誕生編にしか過ぎない第一部にえらく時間を駆け過ぎ、説明文みたいになってしまった第二部に辟易しつつも、第三部はそれなりに楽しめて書けたと思います。とはいえ、ひたすら長い拙文……

指摘を下さった皆様、そして、読んで下さった皆様には感謝の言葉しかありません。どうもお付き合いありがとうございました！

十 誰が為のイクスルプ 十

（そもそも）原案、S・ひろつぴ

スペシャルサンクス、まとしくん（…ってかまとしくんってナニ？）

作、夜方光仔 でお送りしました。

それでは皆様、またあう日まで

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8663k/>

誰が為のイクスルプ

2011年8月7日03時18分発行